

目が覚めたら巨人のいる世界

フリードg

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

——死んだ筈なのに、目が覚めて、その上、何かが、大きな何かが、ひとを襲ってる？

死んでしまつて、目を覚ましたら 広大な草原にいた。
当てもなく彷徨っている……、奇妙な光景があつた。

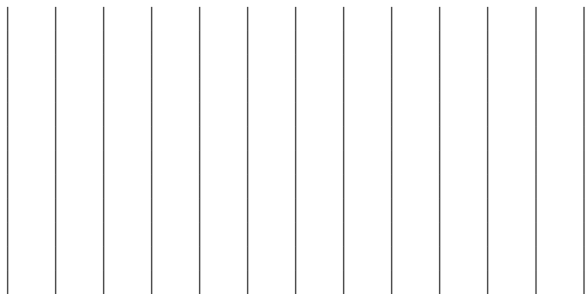
巨大な何かが……………。

目次

1 2 話	1 1 話	1 0 話	9 話	8 話	7 話	6 話	5 話	4 話	3 話	2 話	1 話
133	121	109	92	80	65	56	47	37	28	18	2

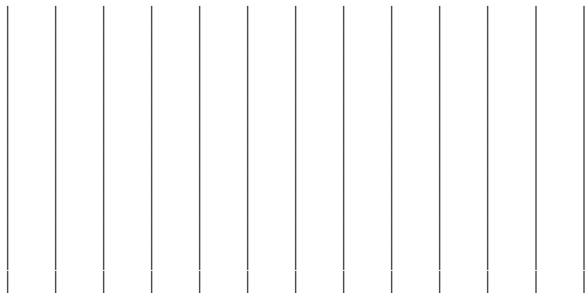
2 5 話	2 4 話	2 3 話	2 2 話	2 1 話	2 0 話	1 9 話	1 8 話	1 7 話	1 6 話	1 5 話	1 4 話	1 3 話
313	293	279	265	257	241	222	206	193	183	171	157	145

3 3 3 3 3 3 3 3 3 2 2 2 2
8 7 6 5 4 3 2 1 0 9 8 7 6
話 話 話 話 話 話 話 話 話 話 話 話 話



497 485 473 461 449 433 420 404 388 371 358 343 326

5 5 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 3
1 0 9 8 7 6 5 4 3 2 1 0 9
話 話 話 話 話 話 話 話 話 話 話 話 話



687 668 655 640 625 609 596 585 571 557 542 520 509

6 4 話	6 3 話	6 2 話	6 1 話	6 0 話	5 9 話	5 8 話	5 7 話	5 6 話	5 5 話	5 4 話	5 3 話	5 2 話

860 849 836 824 812 796 784 771 759 745 729 714 699

7 2 話	7 1 話	7 0 話	6 9 話	6 8 話	6 7 話	6 6 話	6 5 話
あの日の真実	ありがとう	ロッド・レイス	英雄か、民か	デカイ祭り	喰う豚の最後(計画)		

969 953 937 916 904 893 884 872

1話

——死んだ、いや、もうすぐに死ぬだろう。まあ、それでも良いか。

子供、女の子を事故から庇った。その子の飼い猫も一緒に。だから、こういう結果だ。

本当にどうしようもない人生だったから。

ただ、生きてるだけ、死んでいないだけの無意味な生だった。親は早々に死別した。親にかけられていた保険があつたから、当面の生活に問題は無かつた。

そして、その後は ありきたりと言えばそうだ。……その金を食い荒らす様に 親戚ウジ共が群がってきた。

そんな最悪な環境下だったから、グレるのも半ば必然だった。何度も何度も警察にも世話になった。この世界は残酷。手を差し伸べる者など……いる筈もない。あるとす
まったりとるなら、美談として、政まったりとに利用される為だけ。それが証拠に少なからず、偽善が周囲にちらほらいた。

ただ——それだけだった。

だから、この世の全てを諦めた。だからこの世の何にも興味は無い。……何も、興味はない。

そう——その筈だった。

薄れゆく意識の中で、目の中に飛び込んできたのは、初老の男。

——ああ……またアンタか。……いつも、いつも暇なんだな。でも、なんで……？
薄れゆく意識の中だったがその顔には覚えがある。……何度も何度も世話になったからだ。騒ぎを起こせば必ず飛んできた。

そう、確か警察の——柏崎。

——なんで泣いてる……？　なんのために泣いてる……？

涙を流していたのだ。

いつも鬼のような形相で、怒鳴り、時には手を上げてきた男の筈……だったのに。

「よく、頑張ったな。……お前が、子供を……女の子を庇って、なんてなあ……？」

涙を流しながら——手を握りしめていた。その声はもう届いていないだろう、と言う事は、もう頭では判っていたが、続けて語り続ける。

病院のベッドで横たわり、身体の至る所に管を取り付けられている彼。顔も包帯で巻かれ、殆ど表情は見る事が出来ない状態だった。

「でも、何でかなあ……？ 今日 オレは、お前をもつともつと褒めるつもりだったのに、言葉が……出てこん……。何でもつともつと、お前と……」

その握りしめられた手。留めなく、流れ続ける涙。握りしめた手に伝って、涙が流れってくる。それは確かに……暖かかった。

——ああ……そうか。そうだったのか。……こんなオレにも……涙を流してくれるひとが、いたんだな。知らなかった。……知らなかった。

涙を流してくれている。それを理解したと同時に、目の前が真っ白になっていった。水面に波紋が広がっていくかの様に眼前の顔も歪み、薄れだした。

——もうちよつと早くに気付いていたら……こんなオレでも 何か……できることがあったかもしれないんだ……。オレの中の世界も広がっていたかもしれないんだな。

もつと……人を好きになれていたかもしれないんだな。

走馬燈は、見る事は無かった。

それはそうだ。強い思い入れなどある訳もない。

本当に空っぽの空虚な人生だったから。

悲しい程までに 何も無い 何も生まない人生だったから。

——つぎ、つぎがあるなら……。おれは………。

次

まさか次が訪れるなどと誰が予想できただろうか。身体の芯に温もりを抱いてこのまま死にゆく。意識も全て無くなり、全て……忘れて浄化される。そう思っていた筈だった。

なのに何故だか判らないが意識があったのだ。

そう、まだ自分自身にははつきりと意識が——あった。

更に目を開く事が出来た。

そして啞然とした。……色んな意味で。

「は……？　……何処だ？」

く目を開いた場所は……とても不思議な場所でした

と何処かの映画のキャッチフレーズのようなセリフが素で出てくる事になるとは夢にも思わなかった。けど仕方ないと思う。

目を開いて見てみれば、見渡す限りの大草原が広がっているのだから。

「……大神おおがみ 晃あきら。だよな？　オレ。……で、ここ　何処？」

誰に聞くわけでもなく、自分自身の名前を独り言の様に聞いて、そして　暫くの間、立ち上がる事さえできず、ただただ、この大草原……、自然豊かな緑を堪能した。

吹き付ける風は心地良い。

目を瞑ればきつと気持ち良いだろう。……勿論、こんな状況じゃなかったらではあるだろうが。

「まあ……こうしていても何も始まらんし。……ちよつと歩いてみるか。どうせオレは死んだ身だ。これ以上何があつても良いだろ。うん　そう考えたら多分、此処はあの世なんだろ。間違いない」

樂觀的になりながらも、歩みを始めた。

何も無い人生だったけれど、最後にこんな驚き、サプライズを残してくれるとは、有り難い、とまで思っていた。

あの時　思考が完全に停止する前に、強く思ったあの気持ちを――、持って此処にいられたのは、ある意味では嬉しい。

「次……か。意味のある生？　を送りたいものだ。あの世でそんな事言うのもなんかおかしい気がするけど。……今度は、間違えない様に。……あのお節介が教えてくれた事、……思い出しながら」

ゆつくりと、ゆつくりと、歩を進めていく。

地平線に伸びる草原。ところどころにちよつとした森林であろう場所が見える程度だった。

そして、更に時間が経過して、それでも景色は変わらない。
永遠に続いているのか？　と思える程に。

「……ちよつと不味い気がする。これ、いつたいどこまで続いてるんだ？　ひよつとし
てここは、地獄か？　……無間地獄？　つてヤツか」

永遠に続いているとさえ思ってしまう大草原。

それは果てが無い、無限の空間にも思えてきた。

だからもしかすれば永遠に歩き続ける、と言う場所の地獄なのかもしれない、と頭の
片隅で思い始めていた。

生前の所業を考えたら地獄に行ったとしても不思議じゃない。

おかしくも無く妥当だとも思える。でも……。

「……つて、こんな綺麗な地獄があつてたまるかよ。ぼかぼかで気持ちも良いし。……
でも、オレが天国に行けるとも思えないしなあ。たつた1度、良い事したくらいで行け
る程簡単な場所じゃないだろうに」

太陽の光が草原全体を照らし、暖かで心地よい風も吹いてくる。

このまま何処までも歩き続けて最終的には餓死の道を辿る……ともなれば、確かに綺
麗でも地獄だと言えるだろう。

だけど、所々に河があり、まだ試してないけど食べれそうな果物つぽいモノも生えて

いるのも見つけた。最悪飲み物さえ確保できれば、何とでもなりそうだが。

田舎育ちでそれなりに育まれたスキルがこんな所で役に立つとは思ってもいなかった事だが。

そして 更に数時間歩き続けて……。

「……流石に疲れた。と言うか、歩くのが面倒になつてきた」

その2つ 殆ど同じ意味だろ？ と自分自身でツツコミを入れかけたが、とりあえず止めて、丘の上まで登った所で腰を掛けた。とりあえず、用心も兼ねて、後ろから何かがあつても、良い様に、大きめの岩を背に。

「いい加減 此処が何処なのかくらい知りたいな。地獄つて、とりあえず思つてるけど、来たからには、正確な名称くらいは」

天国に行ける身分じゃない。と言う事で つまりここは地獄だと勝手に判断していた。

例えこの場所が地獄に見えなくても《地獄》。

1つ頭の中で決定した所で くああ、と欠伸を1つした。

欠伸をしながら 今更だが思い返す事があつた。

「オレ、ちゃんと着てる？ 服……」

最後の瞬間は、さすがに覚えてないが、結構な衝撃だった筈だ。アレが実際に意識があったのか、或いはもう既に幽霊？ の様な感じで、見ていたのかはわからないが、病院のベッドの上に寝かされていたのは、身に覚えがある。……だけど、ちゃんと着衣を着けられているのかどうかは、判らないから。

「んー着てるな。簡素な服、それに短パンか。……ん？ なんだこれ？」

いつの間にか着せられていた？ 見覚えのない服の内ポケットの中に、何か感触があった。取り出してみると、どうやら、紙の様だ。

「所持品くらい最初に確認しておくべきだった。……手がかりか何か、か？ つ……!？」

四つ折りに畳まれた紙を広げた時、紙が、突然光りだした。突然の眩い輝きは視界を奪うのには十分すぎる光源で、瞬く間に真っ白な世界に叩きだされてしまった。

『ヒトは——と、どうなる——？』

そして、続けざまに 起こるのは小さく、それでいて、頭の奥にまで響く声。

『力を——、どうなる——？』

だんだん、その声の主が近づいてくる。
そんな感覚がした。

『——暇潰しだ。面白い。その世界で、お前を見せてみる』

耳元で聞こえるはつきりとした言葉。
それを聞いたと同時に、視界が晴れた。

「つつ……?!」

周囲を見渡すが、やはり何もない。広がる丘の上、そして 見える木々……それだけだ。

「つつ、耳がいてえ……、一体何が……?」

頭を軽く振っていたその時、また……起こった。

『どうして私たちを食べる!?! 何も食わなくても死なないお前たちが!! ……なぜだ!?!』

聞こえたのは、突然の怒声。

怒りの感情がそのまま声にトレースされたかの様な声。……だが、その反面で酷く震

えている。恐怖と怒り、その二つが等しく入り乱れているのが読めた。

「……今度は、幻聴じゃないな。あそこか」

周囲を見渡してみると、木影に何かが見えた。

有り得ない程の大きい物体。……そして、その物体の前に立つ人影。

『お前らは無意味で無価値な肉塊だろ!! この世から、消え失せろ!!』

随分な暴言だった。

ここまでの暴言を吐かれた事も、吐いた事も無い程のものだった。

だが、それよりも目を奪われたのは、相対しているモノにだ。それが何なのか……、理解するのに時間が少々かかってしまったが。

「……アレ、でかくないか? ……巨人?」

そう、人影の前にいる物体は、同じく人の形をしている。

違うのは、外だというのに裸である事。……そして、何よりも、あの暴言を言っている者よりもはるかに巨大である事。……ゆうに3〜4倍はあるだろうか。

それに、暴言を吐いている者も、やはりおかしく感じる。逆鱗に触れようものなら、あの体躯の差だったら、文字通り、……いや、見た通り紙屑の様に潰されてしまうだろう。

「……逃げるのが、正解か。幾ら手掛かりに出会ったとはいえ、呑気に挨拶にはいけないな。正直無茶を通り越して無ぼ……つつ!!」

踵を返そうとした時、再び頭の中に、声が聞こえてきた。

『お前には、力があるぞ? ああ程度どうとでも出来る程のモノ。紙屑の様に、ぶっ飛ばせる』

至近距離からの囁き。だが、周囲には誰もいない。

『次は。なんだろ? お前にとつて、今が次だ。……見せてみるよ』

「はあ? ふぎけんな。体格に差があり過ぎだ。無駄死にするだけだろ」

意味が判らない相手だったが、咄嗟に言い返していた。

だが、それでも頭の何処かは、冷静だった。

だから、話を続ける事が出来た。

「……成る程。つまり、此処は地獄なのは正解だったわけ。それで、アレが、地獄の鬼つてわけだ? それで、襲われてるのは、オレと同じ?」

『そう思ってくれて良い。鬼と言うのはな。この世の人間にとつては強ち間違いではない』

「ははあ。あつそう。……んで次。ぶっ飛ばせるそうだけど、あんなのに、向かつて行って勝てる気なんて微塵もわかないが? 結構喧嘩してきたけど、あんな化け物相手にし

た事ないし。……当たり前だけど」

あんなのに、向かって言つて勝てる気なんて微塵もわかないが？ 結構喧嘩してきた

けど、あんな化け物相手にした事ないし。……当たり前だけど」

『無論。今までのお前だったら。……だが、今は違う』

「……何がどう違うんだ？」

『こんな異常な事態であつても、お前は冷静に話を交わせる事もそうだ』

「……驚きの連続だったからだよ。ただ、感覚が麻痺してるだけだ」

『まあ、それもあるだろうな。……だが事実。お前は力を握っている。間違ひなくな

それに——』

少し、間を置いたと殆ど同時だ。あの人影が走り出し、そして 化け物も追いかけて
した。距離は離れているが、追いつかれるのも時間の問題だろう。

『襲われているあの女は、もうじき死ぬ。アレに食われてな。どうせ、死んだ身なんだろ
う？ 何かあつても良いんだろ？ なら、やってみろよ』

「……………ああ！ もう。んだよ。判つたよ！ もし、死んだら、化けて出てやるからな
！」

それ以上対応をする事なく、駆け出した。

生前——、確かに 色々と悪さはしたし、罪人だ、犯罪者だ、と同じ分類にされるだ

ろう。

だけど、ろくでもない生活だったけど、そんな中でも絶対のルールが女子供には、そんな事はしない、と言うものだった。

理由は定かではない。記憶もない。だけど、自然とそのルールが出来ていた。

だから、だったのだろうか。あの時 助けたあの時の様に、身体が動いてしまったのは。

—— 私は、決して屈しない。……巨人と遭遇しても、最後の最後まで、戦い続ける。

巨人、そして巨大な恐怖と懸命に戦おうとしていた女の名はイルゼ・ラングナー。とある部隊に所属しており、その作戦行動中に……、今まさに襲ってきている巨人とは別の種に、仲間を殺され、自分自身の足でもある馬も失ってしまった。

人間の足では、到底巨人から逃げ切る事は不可能である事も判っていたが、それでも最後まで抗い続けた。

そして、最後の時が訪れた。

大きな巨体が、それに見合う大きな手を広げて追いかけている。アレに掴まれたら、それだけで死ぬだろう。握りつぶされ、下手したら跡形もなくなる。

その大きな手が、片方の足を捕らえた。

「あぐっ……！……あああああ!!!」

続いて腕を取った。

明らかに、頭から食う姿勢だった。腕の骨が碎ける音が周囲に響く。

そして、巨人が大口を開け、私を頭から食い尽そうとしたその時だ。

何かが——目の前を通り過ぎた。

「きゃあああっつ!!」

それと同時に、私は吹き飛ばされてしまった。

何が起こったのか、理解できない。何かが、一瞬だけ見えた何かが通り過ぎた。と思つたと同時に、吹き飛ばされてしまったのだ。……巨人の身体と一緒に。

「……っあ、近くで見ると、ほんとでけえ……。つてか、よくオレ蹴つ飛ばせたな。あの

巨体」

呆けたイルゼの頭の中に、人間のものであろう声が聞こえてきた。

2話

目の前で起こった出来事。

イルゼには、それを直ぐに理解するなんて到底無理だった。折れた自分自身の片手、片足の痛みさえ忘れさせられる程の光景だったのだから。

あの巨体が……、巨人が吹き飛ばされた。それも人間の手で……。そんな光景……、見た事ない。

あの巨体が倒れた姿は何度か見た事がある。だが、それは斬り刻まれ、最後には急所を抉られて、力なく絶命して倒れる。後は、足等の四肢を斬られ、倒される事はある。

だが、それは全て培った技術や武器、そして 剣術とも言える業があつてこそだ。

だけど……、今のは明らかに違う。そして、矛盾しているかもしれないが、それでも頭の何処かでは理解する事が出来ていた。

単純な事だ。……シンプルな事。巨人をも上回る圧倒的なパワーで吹き飛ばした。

「ほあ……、マジだ。目の錯覚かと思ってたけど、近づいてみたら、マジで でかい……。」

3 m? 4 m? いや、6 mくらいはあるか? ……絶対、これ人間、じゃないよな。……そっか、鬼だったな。確か」

ぐるんぐるん、と腕を回しながらそう言っている男。

遠目から見てただけだったが、改めて近くで見たと所——人間だった。人間の姿をしていた。その力の大きさは明らかに異常だが。

吹き飛ばされた巨人だったが、その程度では止められない。

「うううう……ぐううううう」

唸り声を上げて、ゆっくりと立ち上がる巨人。

吹き飛ばされたとはいえ、巨人としての急所を扶らなければ、絶命はあり得ない。頭を、側頭部を扶つた異常なパワーであったとしても。当然だが、その事実を彼は知らなかった。だからこそ、驚いてしまうのも無理ない。

「……って、うわっ! アレで立つてくるのかよ。あれだけ頭ガツンツ! とやったら普通死ぬんじゃない? ……? それに、頭、何だか変形もしてるし……。相手も普通じゃない

いか、相手も（まあ……、オレの力自体も、それ以上に驚いたけど）」
大きな大きな相手を眼前にしたというのに、初めて化物を目の前にしているというのに、不思議な事に落ち着けている。それどころか、何でだかワクワクしている自分が何処かにいた。

軀て、巨人との戦いが再開しても、同じく落ち着けている。……興奮している。

——なぜ……？

びゅおっ！ と凄まじい風圧と共に、自分の身体よりも大きな手が迫ってきているというのに。一度、捕まれば待っているのは《死》と思わせるのに十分な威力だということに。

何度か、相対している内に、その身に襲っていた物に気付いた。

——ああ、そうか。そうだった。オレ、何処か退屈もしてたんだったな……人生にちじようつてヤツに。だから、かな。感覚が麻痺してただけじゃなかったんだった。

人生を諦めた、と言つてよかつた生前^{あの時}。

荒れに荒れていたあの時。確かに諦めていたが……それ以上に、退屈していた。

世界には何も無い、と勝手に諦めて、荒れて……、最後の最後で漸く自分の事を心配してしてくれた人、涙を流してくれた人がいた事を知った。1人じゃない、と知れた。

だけど、終わつてしまった。……本当に何も無い人生で終わつてしまったから。

こんな異常な世界に突然連れてこられて（厳密には、判らない……）、驚きの連続で感覚が麻痺してただけじゃない。恐怖よりも、ワクワクしてしまつていた。異常な力を持つている事も、それに拍車をかけていた。

以前より、喧嘩は何度も何度もしてきているから、喧嘩慣れはしている事も、それなりのアドバンテージになつてゐる。……流石に人を殺したりは彼はした事ないが、相手は化け物。殺らなければ、殺られる相手だから、躊躇う事もなかつた。

だから、勢いよく 攻撃をする事が出来たのだ。

「オラあ！」

一撃。

「どりゃあ!!」

更に一撃。

「ずりやあつ!!」

更に更に一撃。

「そりゃあああ!!」

更に更に……etc

「死にさらせええ!!」

そして、暫く無双して……。感想を一言。

「……………あああ! もうっ うざい!!!!」

いい加減、面倒くさくなってきた様子だ。

殴つても、蹴つ飛ばしても、ぶつ飛ばしても……、所々、肉片が飛び散る、と言うR—18Gなグロイシーンにはなるものの、数十秒でキレイに、新品になって戻ってくる。普通 動物とかでも 痛みとかで学習すれば 二度目はなく、逃げたりすると思うのだが……、ただ只管噛みつこうとしたり、手で鷲掴みしてこようとしたり、と全く変わらない。

もう、何度目になるのか判らないが、大きな身体が、転がった所で一息。

「ううむ。アイツはあれか。不死身つてヤツか。再生するまでに、大体2,30秒はあるみたいだけど、これ以上応戦するのも面倒くさくなってきた。……それに、万が一にでも掴まれたら嫌だし」

自分自身が常人では考えられない様な身体能力を保有していると言う事は、大体理解する事が出来た。身体が羽の様に軽く、その内から湧き上がってくる力も感じられる。でも……、それでも疲労感はやっぱある。あまり続けるのは得策ではないとも思えた様だ。

「うーん、とりあえず コイツよりも大きな木は沢山あるし、さっきの人、担いで木の上にも避難するか」

「あの一……」

「あー、でも コイツより大きなヤツがいなくても限らないし。……大きさに上限つてあるのか……?」

「すみません……」

「いや、でも流星に100mとかは無いだろうな。……流星に、そりや無理だ。この力でも」

「……………」

「ん?」

漸く、大きな独り言の合間合間に入ってくる声に気付いた。

元々、独り言なんか いうような性格じゃなかったと思うんだけど……、まあ これも色々異常だから、と言う事だろう。それは兎も角、先ほど襲われていた女性が、足を引きずりながら、無事な左腕を伸ばして服を掴み、引っ張ったから気付く事が出来た。「ああ、そうだったそうだった。大丈夫か? ……見た所、大丈夫には見えないけど」「いえ、この程度なら、問題ありません。……喰われなかっただけでも、信じられないくらいで……」

つい今しがた、喰われそうになったのだ。当然恐怖が残っているのだろう。身体は震え、目には涙が溜まり、冷や汗が流れ出ていた。

「『もう大丈夫だ』……って格好つけて言えないな。まだ アイツ、生きてるみたいだから。とりあえず、少しでも動けるなら、隠れてな。アイツは何とかしてみるから」

ぐるんぐるん、と腕を振り 答えた。

彼女と話しをして、あの町では粗大ごみにも等しかった自分の腕に、人ひとりの命がかかっている事を改めて感じる事が出来た。その事が、彼に力を齎した様だ。

あの日——、幼い女の子を助けた時の様な……力を。

「面倒くさい、なんて言ってられないか」

ずおお、と 周囲にまるで地震でも起こさせているかのような振動と共に、あの巨人がまた 起き上がってきた。蹴りまくって、削いだアキレス腱も綺麗サツパリな様子だ。

「あのっ」

「隠れてろ、って言っただろ？ 次掴まれたら死ぬかもしれないぞ」

なるべく、彼女の身体を後ろへとおいやりつつ、巨人を見据えている時、……願っていた情報を彼女から得る事が出来る。

「巨人には、弱点があります……」

「……え？」

くるり、と巨人から視線を外して、彼女の目を見た。

何処か怯えている表情は、巨人に対するものなのか、自分自身に対するものなのかは

わからないが、とりあえず今はどうだっいいい。

「それは本当か？ アレ、死なない訳じゃないんだな？」

「は、はい。後頭部の下……うなじ辺りの肉を削げば……っっ!!!」

巨人の弱点を説明している間に、完全に復活してきた巨人がその大きな手を2人めがけて伸ばしてきた。視線を外してしまっただから、まともに、攻撃を受けてしまう！と思いい、反射的に目を瞑ってしまったその時。

「邪魔すんな」

聞こえたのは一言。そして、衝撃音。

巨人の大きな手を迎え撃つ様に、目の前の彼の回し蹴りがぶち当たり、また 吹き飛ばしてしまった。

「教えてくれてありがとなー」

にっ、と歯を見せながら笑っている。

それは、イルゼにとつて 色んな恐怖心が芽生えていた彼女にとつても、何処か——、安心する事が出来る笑みだった。

その笑みを向けた後、直ぐにあの巨人に向き合っていた。

「さて、と。弱点が判ってしまえばこっちのもんだ」

拳を鳴らしながら、狂った様に向かってくる巨人を迎え撃った。

そして、その後は早かった。

彼はあつという間に、巨人の急所を抉ったのだから。

3話

——私の名は、イルゼ・ラングナー。第34回壁外調査に参加。第二旅団最左翼を担当。帰還時に巨人に遭遇。所属班の仲間と馬も失い、故障した立体機動装置は放棄した。……北を目指して走る。

——そう、走っていて——巨人に遭遇してしまった。

馬の走力が無ければ……、人間の足では到底巨人から逃れる事は出来ない。だから、死を覚悟した。最後まで、決して屈しない。それだけを胸に。……起きている事の全てを紙に書き記すだけだった。

——そして、予想外の事が、驚くべき事が、何度か起きた。人間を食う事しか頭に無いとされていた巨人が、言葉を発したのだ。そればかりか、表情を変え、姿勢も変えた。……意思を通わず事が出来る可能性もあった。……巨人は私、イルゼに敬意を示したのだ。

——だが、それも長くは続かなかつた。私自身の罵声に苛立つたのか、或いは『ユミル』と言葉を発した事から、私自身が『ユミル』ではない、と気付いたのかはわからない。突如、豹変し襲い掛かってきたのだ。うめき声をあげ、自らの手で目元の肉を引き千切り、まるで血の涙を流しているかの様にさせながら……襲い掛かってきた。

——人間の足では、到底巨人には敵わない。……逃げる事も、敵わない。直ぐに私は捕まり、片足、片腕を握られた。……そのまま、大きな口を開く。私は、悲鳴を上げながらも、懸命に抗おうとしたが、巨人の力にはまるで無力だった。大きな口が、私の頭を……。

——私は、死んだのだろうか。だが、死んだのであれば、何故 今を紙に記す事が出来るのだろうか。何故、戦いを続けられているのだろうか。私は、今本当に混乱しているのがよく判る。自分自身が正気ではないのではないかと 自問自答を繰り返してしまふ程だった。

——そう、だ。もう1つあつた。本当に予想外の出来事。今回の作戦で、最重要な出来事。……目の前で、眠っている男だ。この男は突如現れた。……何処から現れたの

か、判らなかつた。それに身形をみても明らかにおかしい。この壁の外で そんな服装で、……兵装で、人間が生きられる訳がないからだ。

——だが、驚くべき所は、武器も兵装も無く……、立体機動装置も無く、壁の外側で生き残っている、と言う点ではない。そう、私が今 生きている理由に直結する。

——死を待っただけだった私に時間が……出来た。折れた腕でこうやってペンを走らせ、記せている理由は……目の前の男のおかげなのだから。男は、私と大差ない体軀だというのに、その小さな人間の拳で、あの大きな巨人の身体を吹き飛ばした。一度だけではない。二度、三度、四度……と、何度も何度も。

——男の戦いぶりは、人類の怒りを、虐げられ、殺され続けた人類の怒りをそのまま体現してくれている様にも私の目には映った。……でも、何度も倒している理由は単純な事だった。倒しても、倒しても、巨人は起き上がってくるから、攻撃をし続けなければならなかつたんだ。途中で、叫んでいた事もあり、間違いないだろう。……巨人は、急所を抉らなければ、何度でも傷を再生して、襲ってくるのだから。

——だから、私は巨人の弱点を教えた。絶命させる事が出来る部位を、男に教えた。すると——、どうだろうか。男は笑みを浮かべていたのだ。私に対して、『ありがとな』と言ったのだ。命を救われたのは私の方だというのに、男は私に対して、礼を言っていたのだ。

——それからは、本当にあつという間だった。男は巨人をうつ伏せに倒して、弱点であるうなじ部分を、削いだ。全て拳と脚。生身の身体で、行った。

——紛れもなく、人類史上でも類を見ない力の持ち主だという事は判った。……人類最強の兵士リヴァイ兵士長よりも——。だが、楽観的に考えてはいけない。様々な可能性を考え尽さなければならぬ。……何故なら、判らない事が多すぎるから。

——この目の前の男が……、もしも、《人間の振りをした巨人》だとしたら……？ 巨人には判らない事が多すぎる。でも、さっきの6 m級の巨人とは確かに言葉を交わす事が出来た。奴らには未知の力が隠されているに違いない。巨人の力を身に窺したまま、人間の姿になる事も……出来ないとは言えない。

——ならば、私は人類の為に、どうするのが良いのか。目の前の男が、本当の脅威かもしれない可能性を捨てきれない事実にも目を瞑ったままで良いのだろうか。……この男と、共にいても良いのだろうか。或いは……今、ここで……。

それは、イルゼのペンが動きを止めたのと、殆ど同時だった。

「ん……ん……」

先程までは、小さな軀、そして吐息だけが聞こえてきていただけだったのだが、目元を擦って、ゆっくりと起き上がったのだ。

「あれ……？ 寝てないのか。大丈夫か？ 結構疲れてると思ってたんだが」

目をはつきりと開けた彼は起きているイルゼを見て、書き記し続けている彼女を見て、そう言っていた。その言葉の意味は、イルゼははつきりと分かる。彼の正体は判らずとも……、彼は自分の身を案じてくれている、と言う事が。

「い、いえ……。目が冴えてしまつて……眠れそうに無いんです」

「……………ああ。成る程な。確かにそれもそうか」

ひよいつ、と身体を完全に起こすと、首をぐるり、と回してコキコキつ、と鳴らせながら、聞く。

「オレ、どれくらい寝てた？」

「あ……、その、詳しくは……。多分、1時間くらい……だと」

「あー、悪い。こんなところで時間なんか判らないか。……よし、とりあえず 身体は何ともないな。……あれだけ動いたんだから、滅茶な筋肉痛ぐらい覚悟してたんだが」

身体を動かして、何処も異常がない事を確認した。その後イルゼの方を見た。

「見様見真似た応急措置だが、大丈夫か？ 腕と脚は」

「あ、は、はい。大丈夫です」

「無理はするなよ。診断は出来ないが、……折れてるだろ？ それは」

イルゼの、青紫色になった腕と脚を見て、そう言う。

「はい。……確かに折れてると思いますが、大丈夫です。その、訓練で……これくらいの傷は何度もあった事、なので……」

「そうか。だが、無理はするなよ？ それに、色々と聞きたい事が山の様にあるんだ。休める内に休んでおいた方が良い。……あ、そーだった」

何かを思い出した様で、男は指をさしながら、聞いた。

「さっきの様なでつかい奴の話は、早めにしときたい……。この木の高さ程あるヤツもいるのか？ 異常な高さの木が並んでるけど。……30mくらい？」

少し表情を引きつらせながらそう聞いた。

如何に彼であつても、それ程の大きさの巨人は相手には出来ない、と言つてゐる様にも聞こえた。

「いえ、大丈夫……だと、思います。巨人は、大きい者で15m程までしか確認されてないので。……木の下を通る時、物音を立てなければ、安心かと……」

「あー、そつかそつか。ありがとな。ちよつと疲れたからつて、肝心な所を訊かずに寝たのはやばかつたな。……寝込み襲われたら終わりだな」

苦笑いをしている。そして、つづけた。

「オレは、曰く抜けてるトコも多いみたいなんだ。悪いが、変なトコがあつたら指摘してくれ」

「え、えつ? えつと……変なトコ……と、言われても……」

「あー、でも 容姿とか、服装とかは無しな。ぜんぜん自信ないから」

「よ、ようつ!!? そ、そんな事は言いませんよ!!?」

「そつか? ならオレ、結構イケてる?」

「え……、い、いや、その…… わ、わたしは……」

「……そんなに真剣に考えなくても。軽いジョークだ」

「あ……、そ、そうなんですか……。あ、あはは……」

少しだけ、笑みを見せたイルゼを見て、また軽く笑つた。

「よし。笑ったな」

「……………え？」

「ずっと緊張してるのか、表情が硬い様に見えたからな。……………状況が状況だから、仕方ないかもしれないけど。少しでも落ち着いたら、と思つて。その方が話もし易いだろう？
まあ、苦笑いでも、硬くしてるよりは良いと思うし」

両手を上げて、そういう。

敵意は無い。……………敵ではない。そういつている様にも見えた。そもそも、敵であるのなら、命を助ける理由なんか、無い筈だから。

「……………その、まだ……………ちゃんと、言つてませんでしたね」

イルゼは、手帳の最後の一行部分を、何度も何度も擦つて消した。

「本当に、ありがとうございました。命を……………、命を救つてくれて……………」

「良いよ。君は、本当に運が良かった」

運が良い。

それは、間違いない事だ。元々、彼ははじめは逃げるつもりだった。……………あの巨人に戦いを挑むなどと。……………ハダカも同然な身形で、戦いを挑むなどと、バカげている。ゲームで言えば、装備無し、道具もなし、レベル上げもなしで、ボスに挑む様なものだから。

本当にたまたま、どういう訳か、自分自身に異常な力が備わっていたからこそ。……今はなぜか聞こえない変な声の主が発破をかけてくれたからこそその行動だった。それらの奇跡が備わって初めて、救えたんだから。

「……あなたは、本当に優しい方、ですね」

「優しい、か。……」

上記の件があつたからこそ、目の前の女性を救う事が出来た。行動が出来た。もしもなければ間違いなく逃げていた。……何故か力を持つていたから助けたんだ。持つてなかつたら、助けにすらいかなかつたと思う。……これが、本当に優しさなのだろうか。「あ。私の名は、イルゼ・ラングナーです」

でも、笑顔に戻つた彼女を見て、今はそれ以上考えるのは止めた。

以前の世界の様に……助ける事が出来て。次でも助ける事が出来た事を、喜ぼうと思つたのだ。

ろくでなしが……、人を救つた。救う事が出来た。と言う事を喜ぼう、と。

「オレは大神 晃だ」

そうして、互いに自己紹介を終えた少し後に、イルゼはスイッチが切れたかのように、眠りに入つたのだつた。

4話

朝日と共に、目を覚ます。

今日も、明日も……そのまた明日も。

朝日を迎える事が出来るなんて、彼女、イルゼには数日前まで考えもしない事だった。眩く、温かい光が全身を包み込む。まるで母親の腕の中にいるかの様な、安心をイルゼは覚えていた。

目を覚ますと、……今日も彼、アキラも既に起きていた。朝の挨拶もそこそこに、彼は何処かから水を持ってきてくれていた。武器や立体機動装置は放棄したが非常食等の確保は出来ていて、その中には殆ど空だった水筒もあった。近くに、小川が流れていたとの事で、そこまで行つて……、水を汲んできてくれたのだ。今日までで、3度目……だ。

飢えは、まだ何とか出来る。だけど……渴きはどうしようもない。水が無ければ、人間は生きる事が出来ない。巨人に食われるまでも無く、息絶えてしまう。イルゼは、目の前のアキラのおかげで、今日も一日生き延びる事が出来そうだと言う事を理解し、涙

を流していた。

その度に、『何でも無い事』と、ただ笑っていた。安心できる笑顔。……日の温もり、全身を包む温かい光よりも、安心できるのはアキラがそばにいてくれているから。イルゼがそう思いなおすのに、時間はかからなかった。

「…………成る程、なあ。……随分と大変な所に来てしまったみたいだ」

そして、イルゼは自分自身の事、そして 何より《この世界》についてを、アキラに詳しく説明した。

——この世界の人間は今から107年前に……一部の人間を残して、皆巨人に喰い尽されてしまった、と言う事。

——そして、その後先祖たちは、巨人の越えられない強固な《壁》を築くことによつて、巨人の存在しない安全な領域を確保する事に成功したという事。

——そして……彼女 イルゼは調査兵団、と言う部隊に所属して、壁の外へ。無限に広がる世界へ。……死が待っている世界へと飛び出してきた、と言う事。

「…………どうやら、オレのいた場所とは、大きく異なる様だな」

アキラの言葉に、イルゼは強く反応した。《大きく異なる》《アキラのいた場所》それらの言葉に。

「……………？ アキラは、何処から来たの……………？」

「……………ん。でもな。聞いても信じられない、と思う」

「言つて。……………私は アキラの事なら信じられるから」

純粋な瞳を向けられたアキラは、軽く頭を掻きながら、イルゼに向きなおした。

「お前たちの住む場所に比べたら……………、本当に平和。なんだろうな……………。格段に」

アキラから語られる世界は、イルゼにとっては、まさに別の世界の話だった。

何処までも続くかの様な人の世界。外を歩けば、人に出会わない事は無い。その世界中、何処でも。

人が暮らす為の……………安全地帯、大きな壁なんて、存在しない。何より……………。

「巨人が……………、いない。世界？」

「……………ああ。そうだ」

イルゼが驚愕しているのはよく判る。

それはそうだ。……………数日前に巨人との一戦。そして 何より 何度か木の下に降りて、周囲を見て回った時にも、何度か遭遇した。

つまり、アキラにとつて、現実とは思えないこの世界が、もう既に現実である。自身自身の現実である、と言う事を認める事が出来ているのだ。以前の平和な世界はもうどこにもないのだという事も。

だが、イルゼはどうだろうか？……彼女は アキラの世界を見た訳じゃない。ただ、アキラから聞いただけの話だった。だから アキラの口から出たでまかせだ、とも判断できるだろう。でも、アキラがそんなウソを言う必要性など、何処にあるのだろうか。

少し前までは、落ち着かせようと、色々と話しをしてくれたが、今はもうそんな事は 必要ないのだから。

アキラは、信じられないだろうな、と思いつつ イルゼの言葉を待った。

だが、次のイルゼの言葉は、アキラにとって想像してなかった。

「そ、そんな……、アキラが、どうして……、こんな、世界に……？」

それは、心底心配する。心配してくれている顔だった。憐れむ様な表情も、何処か あっただろう。でも、不快な気は全くしなかった。

「どうして……？」

「だ、だって…… そんな、平和な、平和な世界で いたのに……。何で、こんなに優しいアキラが……、こんな……っ」

その眼には、一筋の涙が流れていた。

その涙を見て、アキラはゆっくりと手を伸ばした。そして、流れる涙を指先で拭う。

「……ありがとな。イルゼ。だが、そんなに心配してくれなくても良いんだ」

「で、でも。此処は、この世界はアキラにとって、関係の無い世界で……。そんな残酷な世界に……。」「いいんだ」っ

次に、アキラは頭を撫でた。

「オレは、前の世界では、もう死んだんだ。……だから、良いんだ」

「え……。？ し、死んだ……。??」

此処から先の話は、アキラは本当はするつもりは無かった。

『別の世界から来た』

それだけでも、信じがたい事実だというのに、その上死んだ、等と更に混乱されかねない事など誰が好んで言うだろうか。

だが、イルゼの心底心配する表情や言葉を訊いて、言わずにはいられなかった。それに、《優しい》と言う面についても、一言添えたかった。

「イルゼ。前の世界でのオレはな。……ぜんぜん、優しくなんかなかったんだ。イルゼ達にとつては、ほんと、贅沢な悩みになるんだろうけど。……死が隣り合わせ、なんて殆ど考えられない世界だったから」

次にアキラは、身の上話を始めた。

以前……。つまり、前世、と言う事になるのだろう。その時の記憶の話。

肉親と死に別れ、相続争いに巻き込まれ、孤独を苛まれ……。そして 荒れていつ

たという事実。

だけど、それはこの世界でもきつとそこまでは珍しい事ではないだろう。色々と壁の中の世界についてを訊いたが、壁の中の世界だけを見てみれば、平和そのものだ、と聞いたから。……でも、外の世界ではこの死ぬ危険度が遥かに高い。完全武装をしても、一度の遠征で100人中2〜30人は、巨人の餌食になってしまう。と言う修羅の世界では。

「だから、この世界に来た事に、そこまで思ってくれなくて良いんだ。でも やっぱ嬉しいな。オレ、そう言うの あまり経験ないからな」

「……………」

ニコリと笑うアキラ。

孤独だったからこそ、今のイルゼの様に思ってくれる人がいなかった。だから、嬉しいんだ。アキラの言葉からそう読み取るイルゼ。……でも、やはり 判らない事があった。

「何で……、そんなに平気でいられるの……？」

そう。

理不尽にも連れられてしまった世界。たとえ死んだとはいえ、仕方なかったとはいえ、こんな世界に送られてくる事なんか、無い筈だ。

その事に嘆く事もなく、アキラは行動した。……助けてくれた。何で、そこまで強くいられるのか。……イルゼは、ついそれを聞いてしまったのだ。聞いてよかったのかどうか、判断がつかないままに。

「人間つてさ。……驚きの連続。異常事態の連続が起きてしまうと、もう どうにでもなれ、つて自暴自棄気味になったりするみたいなんだよ。オレが良い例だ」

「あ……」

それは、イルゼにもよく判る。

巨人と遭遇したりして……異常事態にも何度か遭遇して、自暴自棄になってしまった人間を何人も見てきたから。そして、死んでいく者も……何度も見たから。

「本当に色んな事が同時に起きた。オレ、死んだから。だから 地獄にでも来たのか？ つて思ってたなら スゲエ草原の中。大自然の中だったから、地獄とは思えなくて、色々を見て回ってたなら、あのでかいのがいて。……何だか知らないけど、こんな異常な力も、オレが持つてて……。ここまできると、正直、訳がわからなくなってくるんだわ」

アキラは、手に持った石を、思いっきり投げた。

投擲された石は……、凡そ、人間の力とは思えない勢いと速度で飛んでいき、聽て見えなくなつてしまった。

「だから。イルゼは運が良い。そういつたんだ。……オレに力が無かったら、きつと助

ける事なんか、出来なかった。そもそも助けにだって行かなかったと思う。あんなでかいのに、勝てるなんて思えないからな」

「……でも」

イルゼは、ゆっくりとアキラの手を握った。

「アキラは、私を助けてくれました。そして、今のアキラは、とても優しい。……私には、それだけで十分です。……十分過ぎます」

笑顔を見せ。

「私の見識。知識だけじゃ、アキラの事……いえ、アキラに起きた出来事を全部理解するのは、正直無理です。信じる事は出来ても、本当の意味で理解するのは。……でも、私には、優しいアキラ。とても強くて、命の恩人のアキラ。それだけで良いです。……ごめんなさい。無理に、聞いてしまって」

最後には謝罪をしていた。アキラの事を知りたかったのは事実だが、そこまで混沌としていたとは思いましなかったから。

単純に——壁の外。この修羅の世界で、不思議な力で生き延びてきた種族。その程度しか、考えてなかったから。

アキラは、イルゼの頭をもう一度撫でると。

「いや。聞いてくれただけでも嬉しいよ。……ほんと、イルゼ達に比べたら、生ぬるい

世界の事だと思うけど。こんな話、なかなかできないだろう？　まあ、こんな状況にもなかなかならない、なれないと思うけど」

「……はい。そうですね。私でよければ、幾らでもお話、聞きます。アキラさえ良ければ」

「ん。頼りにしてるよ。……でもまあ、まずは」

アキラは、ひよいつ　と後ろから何かを取り出してきた。

「まずは腹ごしらえ。だな。てきとーにそれっぽいもの取ってきたんだけど……、生憎、オレの知識じゃ判らないものばかりだから。食べれるかどうか、判ったら教えてくれないか？」

「あ……、はいっ！　任せてくださいっ！」

笑顔になるイルゼ。

取り出したのは、アキラが下に降りた時に取ってきた木の実や果物の様なもの。

外での活動を主とするイルゼにとつて、サバイバル知識は持ち合わせている。……一般的には、馬や立体機動装置を失えば、生還する事は出来ない、と言われているが、それでも、万が一、生き延びれた時の為に、と知識を蓄えていた。

それを活かす事が出来る機会に恵まれたのも、アキラのおかげだと言えるだろう。

その日……、下には人を喰らう悪魔。巨人たちが何度も何度も横行していた修羅場だ
というのに、笑みが絶える事はなかったのだった。

5話

あれから、一体どれだけ時間が、日が経っただろうか。

木の枝に印を刻み続けて……350日目。

正直な所、『よくぞ生き続けられた。褒めて遣わす!』と自分達を褒めてあげられる。いや、あげたい! と割と本気で、アキラもイルゼも思っていた。それにイルゼ自身が怪我をしている事もふまえて考えると……、

『本当によくぞ無事で生き続けられた!』とマジで思える。

そして、アキラは、この広大な世界に送り込まれ、妙な声が話しかけてきて、巨人と遭遇し、イルゼを助けて、木の上でサバイバル生活が始まった。

本当に、とんとん拍子で展開が進んでいたのだが、この約1年と言う間は、それ程目立った展開はなく、毎日をただ生きる。生き抜くだけだった。

「ん……、大丈夫、かな」

イルゼは、自分の骨折していた手足を確認していた。

彼女の怪我は、そこまで重症、と言う訳ではなかったのが良かった。巨人に握られてその程度で済んだのは、まさに幸運だ。

イルゼ自身もしつかりと、経過処置は施せた様で 暫く固定したまま安静にし続ける事で、完治へと順調に向かっていた。

忘れてはならないのが、やっぱり巨人の存在だ。

巨人たちは時折やってきたりしていた。気付かずに通り過ぎりたりする奴もいたが、その内の数匹は上にイルゼやアキラの存在に気付いた様で、上ろうとしてきたりもしていた。

でも、そこはアキラの出番である。

上ってきたとしても軽く一蹴出来た。

周囲に巨人の残骸が出来上がるだけで、とりあえず問題なかった。

ただ、現れた巨人は、5〜6m級のみだった。イルゼの話によれば、現在確認されているだけで15m以上の巨人も存在するらしい。……流石に倍以上の体格との巨人を、倒せるか？ と聞かれれば、アキラは簡単に首を縦に振る事は出来なかった。まだ、遭遇していないし、判らない。と言うのが心情でもある。……と言うより、あまり相手にしたくない、と思ったりもした。あの巨人は色々と気持ち悪いから、と言う理由も

あつたりする。

「イルゼの怪我也大分良くなつたみたいだな。今後の事、そろそろ考えておこうか。壁の町に戻る事とか。確か、色々と情報を得たんだろ？ 今回の件で」

「えつと。うん」

「まー、その情報だけど……オレもあるよなあ。……間違いなく。異常と言えぱそうだし。多分……いや、間違いなく一番だろうなあ、オレ」

「えつつ!? いや、いや その……、一番、つて言うのは……、ある意味間違つてないけど、その、その……ゴニヨゴニヨ」

「ん？ どうしたんだ？」

「や、何でもないよつ？ なーんでも……。別に……」

2人きりの約1年もの長期間サバイバル生活……、と言つても アキラに頼つてばかりだったイルゼ。正直に言えば、アキラに対して申し訳ない気分と……、心に芽生えて、花を確実に咲かせた淡い気持ちが5分5分に心を占めていた。

これ程長く異性と2人きりで生活など、今の今まで経験が無かつた。訓練時には異性はいいたものの、複数参加が基本だったから。

「(う……、い、今の私を両親が見たら——な、なんて言うかな……、こ、こんな時のことなんて、教わつてないから……つつ)」

こればかりは仕様がなない。異常空間に2人つきり——おまけに、相手は命の恩人ときている。容姿に關してもアレだ。『……自信がない』とアキラは言っているが……、はつきりいって全然悪くない。悪くない、どころではない。幼さはあるものの、それでも整った顔立ちだと思う。いや、間違いなく。

つまり……、ドストレートに言えば、イルゼがアキラに惚れない訳がなかった。

強い男に惹かれるのは、数多の動物たちの共通とも呼べるものだ。或いは吊り橋効果、も少なからずあるかもしれない。

だが、生憎な所、人間は動物ではない。……少々複雑だ。そんな単純な気持ちではなかった。

だけでも、イルゼには恋愛経験が全くの0である。つまり、どうすれば良いのか、全く判らないし、アキラも1年近く生活を共にしてきたが、それっぽい雰囲気は見られないから、更にどうすれば良いのが判らない。でも、それでも 色っぽい(?) なシーンも何度かあったけれど、活かす事も出来る筈がなく……。

色々と今まで迷惑ばかりかけてきた両親にもそうだけど、それ以上に今はアキラにも迷惑をかけてしまっていたから。だからこそ、これからは……。

「……え、えっと、今日、今日からは私も働けるからねっ!! 脚も腕も、痛みもすっかりなくなってきたよ!」

「ん? ああ。助かるよ。って言うか、イルゼは、ずっとオレが採ってきたヤツを調理してくれてるだけでも十分働いてくれると思うけどな? それに、果物とか最初の方で飽きてきてただろ? だからすげー助かったって。それに木の上で、火を使うなんて、無茶な、って思ってたからイルゼが火を使った時は、マジ驚いたよなあ。不燃材木を上手く使うなんて、大したもんだと思っただし!」

イルゼがしてくれた事を色々と考えつつ、アキラは更につづけた。

「色々とメシのバリエーションが増えたのは、ほんと感謝だったな。飽きないし。イルゼの料理、上手いし栄養バランスもばっちりだったみたいで、偏ったりしなかったしな」
木の上だ。つまり可燃物である。周囲、全てが。

だから、火を使った調理は色々と無理がある。大火事になっても不思議じゃない。でも、その辺りは流石は調査団と言う部隊に所属しているイゼル。以前逃げる時に、必要なもの以外は捨てて逃げたそうだ、捨てた物の中にはいろいろと非常時に使える物があるらしいから、それを回収してきた。武器の刃を包丁の変わりにしたり、便利アイテム・七つ道具なるものを取り出したりして、その後はばっちり豪勢な料理になったりした。

火を使える為、小川で採ってきた魚を生で食べる事も無かった。……生で食べる習性

はこの世界ではあまり無いらしい、と正直どうでも良い情報も得た（因みにアキラは刺身等は、好きでも嫌いでも無い）。

つまり今まで色々あって、アキラは イルゼが何もしていない、など思っている訳無い。寧ろ、食に関しては助けにしかなくてないと言える。衣食住は生活の基本だから。

後、幸運だったのが、今いる森の木々の強度だ。非常に大きな木だから、その枝一本一本も非常に大きい。寝返りを2度3度した程度じゃ落ちない程の幅があるし、非常に太いから、比較的過ごし易かった、と言えるだろう。

「ま、まあ、それくらいいしかできないし。それに、ほら。巨人が襲ってきた時は、アキラにしか頼れなかったし。その上 周囲の探索だつてそう。……全部、アキラにばかり負担、かけてるから、次、下の探索、私も手伝「それは駄目だ」つ……」

イルゼが森の中を、周囲の探索を、それらだけはアキラは許容しなかった。

何度かアキラ自身は、この木の下へと降りて行つたけれど、イルゼの言っていた『馬や立体機動装置が無ければ、生きて戻れない』と言う言葉が正しい、と言う事はよく判つた。《立体機動装置》と言うのは、アキラは使つた事も無ければ、見た事も無い為、何とも言えないが 馬の事ならよく判るし、あの巨人たちは その大きさ故に歩幅が人間とは比べ物にならない程大きい。だからこそ、人間の走力ではあつという間に追いつかれてしまうのだ。

この下へと何度も降りたが、やはり巨人との遭遇率は異常に高かった。それどころか複数遭遇した事もある。幾らなんでも面倒過ぎる、と判断したアキラは、回れ右をして回避する方向へと決めたのだが、そうはいかない、と言わんばかりに追いかけてきたのだ。……やっぱり 脚は早かった（早く感じた）。1体を倒せば、軒並み倒れていったから、相手にする分には問題なかったが、それでも群で来られれば、非常につらいものがある。

アキラは、ここ数日の間に色々と自分の力について 試してみたり、聞いてみたりして、確認したが……、どうやら 異常な力とはいえ、決して無敵と言う訳ではなかったのだ。

その点についてはまた何れ語る事にしよう。

話を戻そう。

イルゼが襲われていたのは1体の巨人だ。……たった1体だと言える。

助ける事が出来たのは、アキラが最初に言っていた通り、やはり運が良かった、と言わざるを得ない。複数で向かってこられたら、どうしても危険度が遥かに増してしまうから。だからこそ、イルゼに下へと降りる事は、最低限度。流石に女性であるから、ずっと木の上では、と思って、何日かに一度は小川に連れていった程度だ。アキラには、イルゼを束縛する様な、そんな気持ちは全くない、でも……命を落としてしまえば、そこ

までだから。

「イルゼが力になりたい、って言う気持ちはスゲエ判るよ。もー、付き合っても長くなってきたしな。でも、それは、この後にしないか？ その、壁の中？ ……じゃなく、その町についたら、オレは所謂余所者だ。だから、イルゼがテキトウに紹介して貰ってくれないと、追々面倒になりそうだろう？ ……なんでも、町の住人が壁の外を歩くと、結構な罪らしいじゃん。それに、町の外の間人は絶滅しててらしいし。……仕様が、ないとは言え、こればかりはなあ」

アキラは、苦笑いをしながらそう言った。

「あ……。うん。それは 勿論。だって、私……。アキラには その……。たくさん、たくさんもらってるんだから。……。それくらいは、させて」

「ん。期待してる」

互いに笑い合って、今日も一日が始まるんだろう……。何処か甘酸っぱい想いも胸に秘めて、イルゼは 今日も頑張ろう。美味しい料理を作って、下へと向かうアキラの事を待っていてよう。と心に決めた。

こんな過酷な世界。残酷な世界だというのに、幸せを感じられる事が出来る事に今日も感謝して、1日を――、と思っていたんだけど、唐突にそれも終了となるのである。

『これ、34回目の腕章。一年前、壁の外に出た調査兵団の部隊だね』

『ああ。だが不自然だな。目立つ様に掛けてある……。一年も壁の外で、とは考えにくい
いが、無事の可能性が高い』

木の下から、声が聞こえてきたのだ。

「おっ……？ 人間……か？ イルゼ。知った顔か？ 呼んでも大丈夫か？」

下を見下ろして、イルゼに聞くアキラ。

イルゼは、何処か複雑な気持ちがあつたが、流石にそれは胸の奥へと押し込めた。下
にいる2人は、知った顔……。どころではないのだから。

イルゼが所属している調査兵団の兵士長リヴァイと分隊長ハンジだったから。

6話

——とりあえず、色々と整理してみようか。

◇ オレ、つまり アキラは一度女の子庇って死ぬ。(あ、ついでにペットも)

←

◇ 死んだと思ったら、よく判らない所に立っていた。とりあえず、歩いてみた。

←

◇ 妙な声が頭に響いてきて、更にもっともっと妙な、奇妙な巨人と出会った。

←

◇ 巨人だけじゃなく、女の人もいて、襲われてたので、何の因果か 生涯(厳密には二度目?)で2度目の人助けをした。

←

◇ 女の人、事 イルゼを助ける事が出来て、とりあえず安全地帯っぽい木の上で共同サバイバル生活開始。(約1年にも及んだ)

←

◇ 約1年後に初めて巨人ではない来訪者が2名現れた。

とりあえず、大雑把に纏めると、……こうなるだろうか。

イルゼも見知った相手、だという事はアキラも判ったから一先ず安心出来たの言うまでもない。1年は長かったのか短かったのか、よく判らないけど、とりあえず無事でいられた事を喜ぶとしよう。

——……つて、考えていたんだけど。

「……ほんと、なんだろうなー？ この状況」

今、アキラがいる場所は……、地下独房である。

無情にも、ついつい先日までは 凶悪な巨人たちが蔓延った場所とはいえ、緑あふれる自然の中だった。……だというのに、人工的な鉄格子が目の前にある。壁の中の方が……、何だか地獄を感じてしまったのは言うまでもない。

あくまで比喩だけ。

それに、見張りもいないから、出ようと思えば出られると思うんだが……、何が正解なのかよく判らないし、イルゼも

『大丈夫』

『ごめんなさい』

『少しだけ、本当に少しだけ』

と頻りに何度も言っていたから。涙まで流しながら。

当然アキラはそこまで気にしてる訳でもなかったから、落ち着かせて……、とりあえずイルゼの為に、大人しくしてる事にしていた。

とはいえ流れが……展開が遅かったのに、突然また早くなった気もする。

「やあ、ごめんごめん。一応、規則だからね。兵団としても示しとかないといけないんだ。君の事はイルゼから色々聞いたよ。アキラ君」

手をぶんぶんと、振りながら、何処か嬉しそうに近づいてくるのは眼鏡かけた中性的な人。男？ 女？ って、訊く……様な事はしなかった。

名前は……、そう ハンジ、と言う名だった。

「あー、だな。壁の中に入ってから、イルゼとは一応裏合わせ的な事、考えてたんだけど、もの見事にアンタたちと出会ったからなあ……、壁の外で。なら、口裏合わせも何もないってもんだ。オレ、イルゼと同じ部隊？ じゃないし」

「ははは、そりやそうだね。君が調査兵团じゃないってというのは誰の目から見ても一目瞭然だし」

笑うハンジを見た後、はああ、とため息を吐きながら、アキラは独房に備え付けられたベッドに座り込んだ。

そんなアキラを見て、ハンジは改めて思った。

「でも、結構君余裕があるよね？ こんな風に、閉じ込められたりしたらもつと暴れたりしても良いって思うんだけど。聞く限りじゃ 君はイルゼを救ってくれた彼女の恩人だし。こんな罪人扱いされたら、さ？」

「んー。まあ……罪人ってのは、別に間違ってるないし。それに後こっちは、いきなりな展開には、正直慣れがあつて、っていうのが一番だ。——それに、イルゼに色々聞いたんだろ？ 今更、これくらいで驚けるかよ。……って、言ってみただけど、まあ ちよつとは驚くわ。巨人あのかいのより、人間の方が性質が悪いって、思ったし」

「あはは。否定できないね。君からしたらやつぱりさ。……それに、うん。君の事はイルゼから訊いてる」

ハンジは、取り出したメモ帳をぱらぱらと捲り目を通した。

そこに書かれているのは、イルゼの証言。そしてイルゼが記し続けた彼女自身の戦果だ。

「正直、眉唾ものばかりだよ。彼女の報告。……ってか絵空事って感じだ。イルゼって、妄想癖あつた？」

「そりやそーだろーよ。……だつてオレ自身でも、十分戸惑つてたもん。昨日今日で理解したくなんて思えないし。つもりもない。後、イルゼに関しては、別に妄想癖のよーなのは……。あー、たまに勝手に一人で盛り上がった事が何度かあつたくらいだ。結構一緒にいたけど、それだけはよく判らん」

「あはは。後半部分は温かい目で見守つてあげてよ」

ハンジは笑いながらそういうけれど、正直な所 心底笑えない。

『巨人を人間が素手で圧倒した！』

そんな事が有り得るといふのだろうか。

この世界では、巨人が人類を襲い、そして食らい尽した。

そんな中でも生き残つた人類は大きな壁を築いて、その中で栄えた。

そして、今日までの歴史の中でも、幾ら文献を漁つても……そんな事実は、知る限り存在しない。王族や、それに近い博士等であれば、知るかもしれないが、恐らくそんなの知る訳がない、と断言したい。

……人類史上初の快拳を成せる男が、別の世界から現れた。

「夢物語だね」

「まあ、この世界の人間たちにとってみればそうかもしれないな。この世の成り立ち。聞ける範囲で、だけどある程度は聞いたよオレも」

独房の壁に背を預けながら、ゆっくりとアキラは続けた。

「外に出るだけで、何十人も巨人に殺される。……100人が出て、その2〜3割は巨人の腹の中への片道切符、か」

アキラはもう、片手間で何人の巨人を片付けたかわからなかった。

でも、その一体だけでも、普通は脅威なんだ。そして、その一体が何人の人間を喰らったのか、判らない。

「……ここにきて約1年。ずっと森ん中で過ごしてきたけどな。……正直、まだ夢を見てるんじゃないか、って思った時があるよ。比較的、多く」

「……ふーん」

自分がいた世界が如何に平和だったか。何でも無いありふれた毎日。退屈だけど、平穏な世界。……それが如何に幸運なのか、よく判るといふものだ。

もしも、この世界で自分自身に力が無かったとしたら……。そう考えたら 全く笑えないから。ちよつと違った方向性の自暴自棄になりそうだと、と思えるから。

そして、ハンジはそんなアキラをじつと見た。

「(嘘をついてる……様な感じじゃないな)」

そもそも、こんな突拍子もない嘘を、子供レベルか？　と思われる様な嘘をつく理由が何処にあるだろうか。

『巨人をやつつける！　パンチで！』

なんて、如何にも子供だ。色々と夢想する子供。

……だが、目を瞑っているアキラをよくよく見てみると、……幼さが残る容姿だから、子供……？とも思ってしまうけれど、とりあえず　それはそれ、である。

「それで、何時までおしゃべりを続けるつもりだ？　ハンジ。コイツを作戦に組み込むのか？　いい加減決めろ」

そんな時、この独房にもう一人来訪者が現れた。

「はあ、アンタがそろそろ来る頃だと思ってたよ。……つてか、作戦つて何？」

目を開けたアキラの視界に入ってきたのは、小柄な男。

鋭い眼光は、今にも噛みつきそうな野犬を思わせる。……けれど、佇まいが凄まじく、犬と言うよりは、狼だ。

ハンジと一緒に、アキラとイルゼを見つけたもう一人の男。リヴァイである。

「イルゼ・ラングナーの戦果。……巨人との意思疎通の実験だ。その為には何匹か捕獲しないといけないだろ。そこで、お前の力を借りたい」

「力借りたい。つて相手を独房にぶち込むつて。良い性格してるな？　アンタも。しか

も、相手の目の前で」

「褒め言葉と受け取っとく。だが、オレの意向じゃない。ここの眼鏡だ」

「いやあ、でも 一応体裁は保つてないといけないじゃん？ 外出たら罰つて法律もあ
るんだし。……一応」

「まあ、今までそんな奇抜なヤツはいなかったからな」

軽い談笑を進める3人。色々皮肉めいた事を言うアキラだが、彼なりのジョークなの
だろう。イルゼ曰く、冗談の類を結構好み、場を和ませたり、と考えたりしている、ら
しい。

随分と出来た人だ。ほんとに。

「でも、裁判、とかしないで良いっぼいのは有り難いな。マンツーマンで言うんならまだ
良いけど、傍聴人やら裁判官やらに囲まれた中で、色々と言うのは……流石になあ」

「あー、その気持ちは判らなくもないよ。こーんな話を公衆の面前で、なんて 抵抗ある
よね」

「嘘は言つてないつてのが、辛いとこだなあー。別にてきとうに誤魔化すのも有りだと
思うけど、オレ、やっぱ知識不足だから。この世界の。いつどこで檻樓が出るか……」

やれやれ、と首を振った。

それと同時にゆっくりと立ち上がると。

「色々と言いたい事はやっぱあるけど。アンタたちの事はイルゼはスゲエ信頼してるっぼい。後、この世界で一番信じてるの、オレン中ではイルゼなんだわ。だから、アンタたちの事は信じられる……、って単純な事じゃないけど」

「違うのかよ」

「ははは……、リヴァイがツツコミ入れるとはね」

そして、アキラはにやりと笑いながら言った。

「オレ、一応罪人だけど、手伝う為の条件。つけていいか？」

7 話

50mはあるであろう巨大な壁。町を囲う様に続いている壁。

その上から見える景色は絶景と言葉が似合う。見渡す限りの大草原だった。

西の方向を見れば森が広がり、東の方向を見ればそのまま平原が広がっていた。

それだけだったら、本当に良い景色。大自然ののだが周囲の所々に存在する巨大なモノがそれを台無しにしている。

その巨人たちは、人以外にはまるで興味が無いらしい。他の動物たちには襲い掛かる様子は全くない。襲うのは、……喰うのは人間だけだ。そして、この壁は人々が平和に暮らす為の壁。この世界にとってなくてはならない壁。

そんな壁の天辺にアキラは座っていた。

「……………」

その日アキラは痛感していたのだ。

少し……いや大分この世界の事判ってなかったと痛感していた。

壁の外での作戦行動は大成功だったとの事、リヴァイとハンジに紹介されたエルヴィンと言う2人の上司に当たる調査兵団の団長がそう言っていた。

「……ただど——もうその時はアキラの耳にはその言葉は殆ど入ってこなかった。」

そして暫くして、この壁の上に新たな来訪者が現れた。

「……もお、こんな所にいたの？ ハンジ分隊長にアキラがいそうな場所、聞いてなかったら絶対見つけられなかったよ」

立体機動装置を利用して昇ってきたのはイルゼだった。

彼女は作戦終了して帰還した後から、アキラの姿が見えないから探していた様だ。

「……アキラは普通に登れるのかもしれないけど、ここに昇るの結構きついんだからね。判ってる？」

アキラの隣に腰掛けて同じ方向を見た。壁の上から見える広がる大自然。だがそこは降り立ったら死が待っているこの世の地獄。そう考えれば、広がる自然は死に逝く者への餞別の様にも思えてしまう。

調査兵団に入って、この外の光景は決して珍しいものじゃないのだが、それでもアキラと一緒にいたら何だか全てが新鮮に思えてくるからイルゼにとって更に不思議だった。何より、心が軽くなり踊る様な気持ちになれるから。

「……ただど。」

「アキラ……？」

アキラは、全く反応しなかった。自分がこの場に來た事も判っていないのではないか

?　とも思えた。

いつものアキラじゃなく不自然に感じたイルゼが、そつとその顔を覗き込んだ。

一言で言うならアキラのその表情は『無』だった。感情の全てが失われてしまっている様にも思える素顔。……初めて見る顔だった。

暫く沈黙した後アキラの視線が僅かに揺らいだ。

「……イルゼ。オレは何も判つてなかつたみたいだったよ」

「え?」

アキラの言葉の意味。それはこの壁の上に上るのが大変な事が?　と思つたイルゼだったが、それが間違いである事には勿論直ぐに気付く事が出来た。

「巨人が人を食う世界……か。それに人の死。全部安易に考えすぎだったんだな。……オレは」

そのアキラの言葉を訊いたから。

イルゼとアキラがあゝの森の木の上で過ごした期間は1年にも及んだ。その間に何度か巨人と接触をしたが、問題なく切り抜ける事が出来た。

全部全部アキラのおかげだ。いくら感謝しても足りない程に。

でも、この広大な世界を探索する調査兵団の全員がイルゼの様に、壁の外でも無事でいられるか?　と言われれば、首を横に振る。

当然だが巨人の一步は人間の一步とは比べ物にならない。

懸命に走った所で、その歩幅の違い。速度の違い。大きさの違いであつという間に追いつかれてしまう。そして人間の身体と殆ど変わらない大きさの手に捕まれば……終わりだ。

如何に最新式の装備を携え、馬に跨り、細心の注意を払いながら調査をしたとしても……それは無理だ。だからこそイルゼ以外の仲間達は全滅してしまったのだから。

確かにアキラはイルゼの時は救う事が出来た。だがそれは本当にアキラ自身が言う様に運が良かったただけだ。死なない、なんて事は絶対に有り得ないから。

「……そう、だったね。アキラ……この世界とは違う所から来たんだった」
全部悟ったイルゼは、表情を同じく沈めた。

そう——この作戦時にアキラは初めて、本当に『人が喰われる』所を見てしまったのだ。
だ。

その歪な顔で無慈悲に人間を喰う巨人。次の瞬間には一瞬にして四肢が食いちぎられていた。そして気付かなかつたのだろうか、或いは狙ったのか 判らないが足元にいる人間も虫けらの様に踏みつぶされた。……本当に無残な死に方だった。

アキラは人の死に慣れてる訳ない。見て、訊く事と 実際に体感する事とは訳が違った。少ししか付き合いが無かったとはいえ、ついさつき話した男が死んだのだ。その後は男も女も関係なく……、巨人たちは食い殺していったのだ。

「はあ……。恰好付けて条件とか言ったりしてたのに、なんだか恰好悪いわオレ。もうここで過ごして、結構長くなつたとも思つてたんだけどな」

イルゼが来た事で、多少は気が紛れた様子だがそれでも気分がはれるものではなかつた様だ。

ごろり、と寝転んで空を見るアキラ。澄み切つた晴天の空の色は自分がかつて見ていたものと同ら変わらない。気が滅入りそうなくらいの、痛いくらいの……蒼色の空だった。

「——そんな事ないよ」

そんなアキラの顔を覗き込み、そつとアキラの胸に手を置いてそう言うのはイルゼ。「アキラは、私の事を助けてくれた。……とても、格好良かった」

イルゼは、初めて出会つた一年前の時の事を思い返しながら伝える。

「容姿に自信ない、とか言つてたけど アキラ格好いいって思うよ！ あ……、でも服はちよつとアレだつたけどなあ……」

イルゼはアキラの当時の姿を思い返しながらさういう。

短パン半袖。凡そ外で活動する様な服装じゃない。家の中で寛ぐ時の、就寝時の時の恰好？　と言えば一番しつくりとくるから。

それを訊いたアキラは、思わず笑っていた。

「……ははっ、それだけは勘弁してくれよイルゼ。……ありやオレが選んだんじゃない。あの恰好でここに放り出されたんだからな」

目元を手で覆い、そして口元だけが見える。ゆつくりと手を放して見せた目は僅かに潤んでいたが、それでも笑っていた。

「良かった。……笑ってくれた」

「え？」

イルゼは初めてアキラと会って、警戒心が強く出ていた自分自身を落ち着かせてくれた時の事を思い出していた。気持ちが悪んだ時はこうやって笑顔になれる方が良いという事を、身をもって教えてくれたんだ。

それはアキラ自身も感じ取ったのだろう。自分がイルゼに対してしてあげられた事を、思い出していた

「あー……ははは。ありがとなイルゼ」

「……ふふ。笑顔の大切さ、アキラに教わったんだから。こんな世界でも。こんな残酷な世界でも、笑顔があれば　笑顔でいられば　前に進めるって。……生きられ

るって。最後の瞬間まで、きつと生きられるって」

イルゼの姿をじつと見た後——、アキラは1段階増した笑顔を見せたのだった。

そして一頻り笑った後はアキラはゆっくりと立ち上がった。

「よし、もうウジウジとするのは、もう止める事にするか。かれこれ、終わってからずつとだったし。それに……あの2人が条件をのんでくれたんだしな。いつまでも消えてたんじゃ流石に悪い」

「う……、ほんとは私がソレを約束してた筈なのに……ごめん」

「いやいや、仕様がなあって。先に2人に見つかつたんだから。イルゼと2人で戻ってくれてたら、いけたかもだけどな」

そう、条件を付けたのは『手伝う代わりに身分を作つて』と言うものだ。

——自分が何故この世界に落とされたのか？　そして　その理由次第では戻れるのか？

考えなかつたと言えはウソになる。だが戻れるのか？　と言う疑問だけは自分の中で結論は出ていた。以前の世界では……死んだのだ。

『死んだ世界に戻る』

そんな事になれば、この世界以上に面倒な事になりかねない。色々生前ではあったのだが、これと言った悔いは無かった。面倒を見てくれていた警察の柏崎には少々あるのだがそれ以上のもはなかった。だから、戻る必要は無いとアキラは思っている。そもそも自分で今後を決められるのかどうかは甚だ疑問だ。超常的な現象だから。

「んー違和感は多少はあると思うけど……出身とか身分とかテキトウに繕ってくれるのはやっぱり有り難い。色々こき使われそうだが……、まあそれは生前の行いの悪さ、つて事にしとく」

「……アキラの事は信じてるし、信頼してるけど、やっぱり納得できない。アキラは優しいし、と、とても良い人だよー」

「あー……んーと、それも仕方ないのかなあ。意識してる訳じゃないんだけど。良い人ってヤツ。それにまあ、何だか知らんが前の記憶がそのまま持つてるのに、客観的に前の自分自身を視れるんだよなあ。どんなヤツなのかって。……どー繕っても良い奴には見えん」

暴力沙汰、盗みや窃盗。

数なんか数えられない程警察には世話になっている。未成年だったからまだ多少は

良かったのかもしれない。それでも以前の世界で生きていれば一生 刑務所と付き合っていく事になるのは目に見えていた。

頭をぽりぽりと搔いていたその時、イルゼはアキラの両頬を手で挟み込んだ。

「じゃ、じゃあ！ 今のアキラは新生アキラ！ 前の事全部チャラだつて事にしようつ！ 今のアキラと前のアキラは別人つ！ よつて私は今のアキラしか知らないから。良いアキラしか知らないから。それで！」

二つのアキラ？ を纏めて見て受け入れる……と言うのが一番の理想だとイルゼは思っていたんだが、以前のアキラの事はどうしても知りようがない。この世界の記録など残っている訳ないし、憲兵（この世界で言う警察？）達に世話になった。捕まった。と言う記録も当然ない。

以前の出来事は全てアキラの口頭だけだから信憑性も薄い（嘘を言っている様には見えないが）。

だから今 目の前のアキラしか見ない事に決めたのだ。

「んっ……」

アキラは、イルゼの手を右手でそつと撫でた。

「っ……っ……」

その仕草に また、ドキッ！ として離そうとしかけたイルゼだったが何とか堪え

た。

「……だな。身分も貰うんだし。そうしようか。新生ね。よくよく考えたら死んだ時結構痛かったかもしれないから。罰と言うならそれで十分か」

アキラはそのまま、イルゼの方を向いた。

「ありがとな」

「こちらこそだよ。アキラは命の恩人なんだから。笑顔に戻ってくれて嬉しい」

「そっか。よし 詫びと言っちゃなんだが、速攻で下に戻してやるよ。昇ってくるの結構しんどい、って言ってたし」

「……へ？」

それ以上はアキラは何も言わず イルゼの身体をお姫様だっこ。

その事事態には、顔が紅潮してしまう思いだったがすぐに顔が真っ青になってしまったりする。

あろう事かアキラさんは、この50m程はあろう巨大な壁からダイブしたのだ。

『いいいいいやあああああ!!!』

と響き渡るイルゼの絶叫が町の空に響いていた。それだけでも大騒ぎをしそうだった

たのだが……、何処となくギヤグつぽい叫びだったからなのだろうか。町は平穩。騒ぎにはならなかった。

アキラは時折壁に手を付けて落下速度を減速させては離し、速度が増したらまた手を付けて、を繰り返して無事下へ到着。

立体機動装置も確かに速い。アンカーの初速も鉄砲の弾丸か？　と思える程早く収縮速度も速いから空を飛んでるんじゃないか？　と思えるのだが　やっぱり操作してアンカーを出して、とそれらの間でタイムラグが発生するからアキラの取った方法が　やっぱり一番早かった。

早く下に戻れたのは確かだが、勿論イルゼは暫く足が震えまくり　動けず真つ青。アキラが『気持ちよかったろ？』と笑顔をみせたら、今度は笑顔を返さずに、その顔面にパンチをくらわすのだった。

そんな2人を影から見ている者がいた。ずつと、壁の上にいる時からずつと見ていたのだ。……いや 監視をしていたというのが正しい。

「——アイツを、どう見る?」

「一言で言えば 化け物だ」

アキラの取った行動もそうだし、巨人を捕獲する作戦に対してもそうだった。

捕獲と駆除とでは難易度が違う。捕らえた後に運び出す作業も加わるから更にだ。

そして、その間 他の巨人が黙ってみている事もない。

捕獲対象の巨人が1〜2体くらいで その周辺には殆どおらず、更に立体機動装置が使える雑木林などが一番理想だが、そんなに都合の良い事などなかなか起こりえないだろう。

だが、今回の作戦で本当に上手くいったのは、紛れもなくあの男がいたからだ。

「リヴァイ。お前がアイツの世話をしてくれたおかげもあるがな」

「……あれは、骨が折れる作業だった。誰かを抱えて飛ぶ事は別に珍しくも無いが、長時

間になるとな。……巨人を殺る方が余程楽だ」

アキラはリヴァイに運ばれる形となった。

馬に乗った事も無ければ立体機動装置も使った事がない。異常なまでの身体能力に任せて今の今まで暮らしてきただけだったから。馬よりも早く走ったりは出来ないと言っていたから。

「だが、対巨人においては、化け物で無敵だ。巨人を素手でバラすんざ、初めて見た戦いで楽出来る何てことも初めてだったな」

リヴァイは人類最強と呼ばれている兵士だ。その駆除した巨人の数は最早正確に判らない程。リヴァイ自身は大してそこまで自画自賛をしている訳ではないが、自分の力量は、自分自身の強さには信頼していた。歴然たる結果と共に。だが、それ以上を本人が見た気がした。

だからこそ、話をしたのだ。……もう1人絶大な信頼を寄せる男。団長エルヴィンに。

「今作戦での死者は……10人に満たない。部隊総数20、総勢100を超える規模で初の試みであるにも関わらずだ。奇跡 調査兵团始まって以来の前代未聞の成果だ。……勿論 運もあつただろう。遭遇率が低かつた事もある。だが、アイツが切り開いた。……アキラの力は異常だが人類にとっては最早宝だ。一見すれば誰でもそう思う」

「そりゃオレらは、だろうが。あんな力持ったヤツを目の当たりにすりゃ 大抵の民衆はビビる。畏れ恐怖して 最悪吊るし上げられる、何てことにもなりかねえだろ」

「……それも判っている。だが……もしも 巨人どもが壁を突破する様な日が。そんな悪夢が来たとするなら、彼の力を頼らざるを得ないだろう。それはリヴァイ。お前も同じだが」

エルヴィンは、リヴァイの肩を叩く。

「人類の双壁はお前たちだ。……より自覚しろ」

「命令ならな」

リヴァイは、アキラの方を見た。

まだ イルゼに叩かれている。

「……オレはアイツみたいにはなれそうにないがな」

「ならなくて良い。……リヴァイには持つてない物をアキラは持つている。それだけだ。逆にアキラの持たない物をリヴァイ、お前は持つている。補っていけば敵無しだ」

エルヴィンは、当然アキラの心境の変化は見逃さなかった。

嘘か誠か、アキラの事の真偽に対して調査する時間もなく、ハンジとリヴァイの進言で参加をさせ、そして結果を残した。

あれが全て本当なのであれば、アキラの心情は理解できる。人の死に初めて対面すれ

ば、それも巨人に喰い殺される所を見てしまえば、心が壊れてもおかしくないから。それも平和な世界から、ここへと来たのであれば尚更だ。

「……1年後に会えた事が僥倖だったのかもしれんな」

イルゼと共に過ごした期間が1年。もつと早かったのなら……、もつと早くに見ていたとすれば、もつともつと時間がかかっていた可能性が高い。1年と言う期間で多少なりとも順応をする事が出来たのだろう。巨人を何体も見たという事も。

「アキラの条件だが、願ったりかなったりだ。……調査兵団に抱き込む。異論はないな？」

「オレとハンジがアイツの条件を呑んだんだ。ある訳ない」

そして、2人がこの場から移動をしたと殆ど同時に、リヴァイとエルヴィンも姿を消していたのだった。

8話

あれから、どれだけ時間がたったのだろうか。

イルゼと出会いリヴァイやハンジと出会って壁の中の町へ向かった。

町では地下へ幽閉されてしまったが、当時の事を考えれば仕方がなかった事だし直ぐに出してくれたから別に問題は無かった。

その後イルゼの情報の『巨人と会話をした』と言う事実を確認する為に、捕獲作戦を計画した。

その作戦に参加する事になって団長のエルヴィンを紹介され、100もの人数を従え、部隊として共に再び壁外へと身を乗り出した。

その結果、8人の犠牲があつたが2体の巨人の捕獲に成功した。

エルヴィンの話によれば、犠牲者の数が過去類を見ない程少ないもので、奇跡と言えるらしい。だけど 幾ら奇跡的な数であつても……誰かが死んだ事には変わらない。大小ではない。目の前で喰われてしまったから。

人の死に慣れていなかったからか、身体ではなく精神に傷を負ってしまった。

だけどイルゼのおかげで 立ち直る事ができて、今 この世界で生きている。

アキラ・オーガミと言う名で。

どうにも、漢字と言う文字は使わないらしく、オオガミよりもオーガミの方が発音もしやすいとの事でこうなった。僅かでも名前が変わった事で、イルゼが言っていた『新生』と言う言葉が更に身に染みたと言うものだ。

調査兵団のリヴアイ班に所属する事になった。

イルゼはハンジ分隊長が指揮する部隊へと変わった。色々と揉めていた様だがその辺りはよく判らないから省くとする。

そして、数か月が経過した。

——カン カン カン カンツ!!

空に響くのは盛大な鐘の音である。

「あー……、何度聞いても 耳に響くな。この音」

「いい加減慣れる。何度目だ？ そのセリフ」

アキラは 両耳を塞いでいる為、声は聞こえていないのだが リヴァイの口の動きで大体内容を把握した。

「ヤなことだ。喧しいもんは喧しいし 耳に響く」

「……じゃあ、どうやって中の連中に帰還報告をするつもりだ？ 毎度毎度お前が壁をよじ登るのか？ 造作もねえ事だろうし オレは別にそれでも構わねえ。合図を送る手間も省ける」

「………流石にそれはヤだ。何だかんだで結構しんどい。判った我慢する」

「最初からそう言え」

と言う事で今回も無事に帰還する事が出来た。

今回の目的は巨人達の調査、そして今まで帰還できなかった仲間達の亡骸の確認とその遺品の回収。完璧に上手くいけた……とは言えないだろう。探索範囲を広げて回収する事は何点か出来たのだが、巨人の正体に繋がる情報は全く皆無だった。

長距離の遠征がまだまだ出来ない段階だから、少しずつ調査範囲を拡大して絞っていき、と言うスタイルだから一度の成果自体はそこまで大きくないのが通常らしい。

そして——扉が開き、潜って町に帰るとその都度大騒ぎだ。

『英雄の凱旋だ——！ 行くぞミカサー！』

『……うん』

巨人たちが蔓延る死の世界へと赴くだけでも十分過ぎる程凄惨というのに、調査を終えて帰ってくるのだから、上にある様に英雄視ものも少なくない。子供達からは羨望の眼差しで見られ、大人たちも声援を送っている。

……子の親とすれば 英雄視したりするのは構わないが、『調査兵団に入りたい！』と言いださないか 違う意味でハラハラしてしまったりするらしい。

『うおお!! エルヴィン団長! お帰りなさい!!』

『今回もまた、巨人どもを蹴散らしてくれたのですか!?!』

『一体何体倒してきたんですか!?!』

矢継ぎ早の声援の嵐である。

もみくちゃやされないだけ良いのだが……こちらもやはり中々慣れないものだ。

「うーん……」

そつとフードで顔を覆い隠した。見られない様に。

「こつちもまだ慣れないみたいだね?」

「全くガキだな。いつまでも」

「……いつまでもって何だ! まだ 数回目だろ!?! ……オレはこんな経験自体無いん

だから仕方ないだろ」

と言う声も凄く小さく、リヴァイはため息を吐いて ハンジは軽く笑っていた。

そして目的の一つである兵士達の遺品の奪取。その遺品を家族達に返す事も今する。調査兵団の凱旋に、兵士達の家族も当然いて 皆その眼には涙を浮かべていた。

「……ブラウンの母親に、彼の所持品を」

エルヴィン団長の指示で、荷馬車に乗せていた遺品を取り出した。

上着に刺繍されている名前、そして腕章の数字で振り分けられている為 直ぐに持つてきた。

「……彼の所持品の中にあなたへの手紙が」

それを手渡した。

涙を浮かべてその胸に抱いて嗚咽を漏らす母親。

その後は何度も何度も礼を言っていたのだった。

「……………」

無事に対面する事が何よりの成果だ、とアキラは思っている。部隊を率いる様な身分ではないから、勝手な事は言ったりはしないけれど。でも こう言う場面をもう何度も

見ているから、改めて心に秘める事にしたのだ。

——目の届く範囲で 仲間を失いたくない。……誰も死なせたたくない、と。

異常な力を自分自身の力を過信する訳ではない

途切れる事のない人達の街道。

調査兵団である事を含めて エルヴィンの絶大な信頼と指揮力、そして 人類最強と呼ばれているリヴァアイの存在もあつて非常に人気だった。

そして、その上……。

『エルヴィン団長の懐刀つて噂の人は何処だった?!』

『リヴァアイ兵長の片腕、つて話も聞いたわよっ?!』 どんな人っつ?!』

『今日こそ教えてくれーっ!』 人類最強の双壁をーっ!!』

いつの間にかアキラの事も広まってしまっていた。

そこまで騒がれるのは本当に得意ではない。だから 民衆の前ではまだ姿を披露した事が無いのである。

今も必死に顔を隠している。……兵士達に紛れているから 見つけられなかった。

「いやあ、リヴァアイの声援よりも大きくなりそうだねえ〜」

ニヤニヤと楽しそうに横で笑っているのはハンジだ。

全く嬉しそうにしないアキラは、ジト目で睨む。

「そんなんいらん。……つてか オレの事どういう風に言っただよ。おかしくないか？ こんな早く広まるなんてよ！」

「それだけ君には期待してるんだよ。団長もそうだけど、私もリヴァイもね」

「雇われ兵士な上、異常な力を持つてんだ。自分の意思や希望よりも優先される事があ
る。受け入れろ」

リヴァイは別にどうとでも思つてない様子で飄々としている。まだまだリヴァイの
方が声援が大きいものにも関わらずだ。

「はっ、オレの事 異常な力異常な力つて何度も言つてくれるが、リヴァイだつて大概だ
ろうが。むちやくちや動き回る癖に。あの装置、めちや難しいのによ」

「それはお前は立体機動装置を使ったのが数度だけで ただ経験が足りねえだけだろ。
そもそも 素手で戦えるから緊急離脱以外で殆ど使う必要ないだろ。無意味な事すん
なつて事で練習も無しで実践投入だったんだ。当然だ」

「それを踏まえても、リヴァイの動きは異常なの。お前こそその辺認めとけ！」

2人の言い争いを傍から見ているハンジ、そしてリヴァイ班の面々は、ただただため
息を吐いていた。

「……それで、班の皆はどう思う?」

「いやあ、正直どつちもどつちかと……」

「アキラもスゲエって思ったよ。巨人をぶつ飛ばせるヤツなんざ、マジでいるとは思わないしな。それを踏まえても、まだリヴァイ兵長が上だとオレは思うな。立体機動装置を自在に使いだしたら、判らねえ」

リヴァイ班のメンバーは皆、リヴァイの事を最大級に信頼している。性格にはいろいろとギャップがあつたのだが、それを曇らせる程の力量が彼にはあるからだ。

そんな中で、突然飛び級でもしたのか? と思える様に1人入隊してきた。当初はリヴァイだけじゃなく、エルヴィン団長、ハンジ分隊長も決めた事もあり、了解をしていたのだが、心情的にはなかなか納得しかねた。

リヴァイ班は、リヴァイ自身が指名して結成されたメンバーである。

この場にいるメンバー

ペトラ・ラル

オルオ・ボザド

エルド・ジン

グンタ・シユルツ

4人に兵長のリヴァイとアキラを含めて現在6名。4人は地獄とも呼べる壁の外で

の戦いで何度も生き延び成果を残してきた。生き方をも学んできた。それ程のメンバーが集ったエリート集団だと呼ぶ者も決して少なくない。だからこそ、自尊心が少なからず高かったりする（主にオルオ）。

「リヴァイ兵長も勿論だけど。……アキラの力もやつぱり凄いや。本当に凄い。……それに 私はイルゼを助けたっていう成果が一番大きいって思う。最後に頼れるのは自分達の力を信じて振りぬく事だつて。時には切り捨てないといけない事だつてあるのに。アキラは それを覆した。戦えなくなったイルゼを守ったんだから」

まだ 色々と言いつているリヴァイとアキラを見て微笑むのはペトラだ。彼女とイルゼは馴染みであり、色々と話しを訊いたのだった。（色々と羨ましがられたりもしている）

「……確かにな。……壁の外で1年も生活なんて、考えられねえよ」

「1人だけでなく、イルゼも含めてだからな。2人揃って生還するなんて やつぱ異常だよ」

結論は最初から出ている。

リヴァイもアキラも異常な強さだという事である。

そして何よりも類は友を呼ぶとも言うのだろうか、リヴァイとアキラは馬が合うとも言うのだろうか、アキラが来てからと言うもの神経質で粗暴で…… 初めてリヴァイ

イと接すれば 感じるであろうそんな姿は少なからず息を潜めている。よく話している。

いつもよりも——表情が柔らかく見える。

「……騒がれたくねえ割には随分しやべって注目集めてるぞ、間抜け」

「あつ……。謀ったなりヴァイ」

「ただの自滅だ。アホ」

周囲にもそれは影響を及ぼしている。

人類最強の双壁は、周りにも安らぎをも与えてくれるというのだろうか、過酷な世界から生還した兵士達は安堵感と笑顔を齎してくれていた。

「ふふ……イルゼが嫉妬する理由も 好きになる理由も、判るなあ……」

ペトラはそんな2人を見て 改めてそう思うのだった。

色々とあつて とりあえずさっさと戻りたい気持ちで全面に出ていたアキラは それ以上の交戦はせずに リヴァイから距離を取るのだった。

「全く。ほんと飽きないね？ 2人は」

「あのアホが突つかかってくるだけだ」

「リヴァイにも原因はあると思うんだけどなあ？」

「黙って進め。クソメガネ」

今回の成果を中央に伝える為に 調査兵団たちは進む。
巨人からこの世界を取り戻す為に……戦い続ける。

「でも、やっぱり信じられないなあ。アキラが20歳だつていうの」

「あ、それ オレも思った。どーみても10代前半だろ？ その顔は」

「あー確かに。これじゃ ウチの息子の方が年上にも見える」

だが着実に近づいている。

それは 今は知らない知る由もない未来の話。

「うっせーっ、ウソなんかつくか！ っていうか 実際の歳なんか判らんつったろー
が！」

「お前の方が煩い」

「ぶっ！ コラありヴァイ！ 舌噛むトコだったぞ！」

訪れる更なる修羅の世界。平和が崩れる足音。

「はあ、ほんと小便くせえガキだな」

「いつも舌嚙んで無様になるオルオよりはよっぽど格好いいけどね」

破滅の足音は 着実に近づいている。その事に この場の誰も気づく事は無かったのだった。

9話

破滅は突如起こった。

——ウォール・マリアの壁が……壊された？

1000年平和が続いた壁の街。

その凶報は誰もが考えていなかった事だと言えるだろう。

だが何処か、頭の片隅では恐れていた事でもあった。近年の技術的發展、戦術的發展もあつて犠牲者が少なくなつていったとはいへ、何度も何度も巨人たちに殺され時には重傷を負つた調査兵団たちを見てきている。

確かに民衆は平和ボケをしていたかもしれないし、何よりも街を覆う壁そのものよりも巨大な巨人が現れるなどと誰が予想出来るものだろうか。

「……おい、リヴァイ」

街への帰還途中 調査兵団はその事実を知った。

門を中心に高い壁全体に異常な蒸気の様なもの立ち上っている、様子がおかしいのは一目瞭然。何よりも自分達が潜る壁門が無残にも破壊されているのだから。

「ちっ……、アレを壊せる巨人ヤツがいるとは誤算だった」

流石のリヴァイも予想もしてなかった出来事が突如起こった事に、歯ぎしりをしていった。

この時 疑問が浮かぶ。あの門を破壊するだけの強力な巨人がいるのであれば、間違いないく壁外調査の時に遭遇していてもおかしくない。比較的広範囲に展開して調査を進めてきていた。犠牲者を少数出しながらも、着実に進めていった。

なのにも関わらず、巨人はまるで調査兵団を素通りしたかの様に 街へと近づいて門を破壊してのけたのだ。

「一体どうやって？ だが、今は考えている暇はない。街中はパニックになってる筈。巨人相手に白兵戦は分が悪すぎる。……陣形を保ったまま街中に入るのは無理だ。時間は惜しいけど一度作戦を組み直さないと下手したら私達まで全滅する危険がある」
大小様々な大きさを持つ巨人たち。

そして 街中は死角が多い。建物を上回る大きさの巨人であれば十分すぎる程目立っているからわかりやすいが、3〜4 m級の巨人であれば見逃す可能性が非常に高い。死角から襲われたら？ 一撃でも受ければ人間は致命傷になる。そうなれば、死は

免れない。

ハンジはこれからの事を。作戦を必死に頭の中で描いていたその時だ。

「……先に行くぞ！」

馬を降り、駆け出す者がいた。

「つつ!!? ま、待て! アキラつつ!!」

ハンジの言葉を振り切る様に アキラは駆け出した。

短い距離であれば、アキラの脚は馬の脚力をも上回る。それは 異常な力を脚に集中させることで、爆発的な脚力を生み出している為だ。一度大地を蹴ると地面が抉れ 砂埃が立ち上がる。

その走法をアキラが編み出したのは イルゼとの1年間の生活の中であった。

短い時間とは言え、負傷しているイルゼを残して下に降りたのだから、なるべくすぐに戻る必要があった。……だからこそ編み出せた走法。異常な力を全て脚に集中させてただ走る、それだけだ。

だが、それは調査兵団達と行動を共にする間には使用を禁じていた。アキラ自身だけでなく、リヴァイやエルヴィン団長も同じだった。大地が抉れば 馬が走る時に支障が出る。砂埃が舞えば視界不良となり 事故につながる。更に言えば爆音が巨人を呼び寄せる事だつてある。だからこそ 緊急時以外使用しない、と制限をしたのだ。

そして 今がまさに——緊急時だ。

「あ、アキラつつ!？」

アキラを追おうとしたイルゼを止めるのはリヴァイ。

「止める。今アイツを追うのは無理だ。……判つてるだろ。こう言う時のアイツは周りが見えてる様で見えてねえ。オレらの事は目に入らねえよ。……何も捨てられねえヤツだから 全部を守ろうとしちまうバカだからな」

リヴァイの冷静な判断が イルゼの孤立。そして同じくイルゼと共に思わず飛び出そうとしてしまつていたペトラの行動も止める事が出来た。

まだまだ短い付き合いではあるが、こう言う時彼がどういふ行動をとるのか、はつきりと判りきつていた。

それはハンジであっても、エルヴィン団長であっても、……直属の上司でもあるリヴァイであっても御しきれものではない。初期行動は特に物理的にも止めるのは不可能だ。

『気付いたら消えてる。震天動地を起こしながら』

比喩ぬきでそうだから。

「リヴァイ。一度集まれ。体勢を整えてからアキラに続く。闇雲に突っ込んでは無駄な犠牲を出す」

「……………ああ。無駄死にや犬死は嫌いだ。するの、させるの、もな。……………勿論　アキラあのカにもな」

全員の話を聞いても　まだアキラを心配するイルゼ。

「……………大丈夫。アキラだから。下手につつこんだら　私達が足手まといになる。その結果……………アキラに危害が及ぶかもしれない。だから　万全の体勢で助けに行こう」

「……………うん」

イルゼはペトラに説得された。

「……………不安は尽きない。」

アキラの強さは誰よりも知っている。ハンジ分隊長やエルヴィン団長、そしてリヴァイ兵長よりも一番イルゼが知っている。

初めてこの世界に降り立って最初に出会ったのがイルゼ。そして　そこから1年もの時を共にしてきた。だからこそ　知っているのだ。

——圧倒的な力を持つ彼の……………弱点も。

アキラは走り続ける。

無残にも破壊された門へ巨人どもが次々と向かっている。全員を相手にしてられる訳は無かった。

——目の前に映る人は 助けて見せる。

それだけを考えていた。

何よりあの街には世話になった人達が多い。色々根回しをしてくれて受け入れて貰えた。沢山の人が暮らしている街だ。

多くの繋がりが出来た始まりの街でもあったから。

そして、それは遡る数秒前。……アキラが駆け出す数秒前の事。

街には激震が走っていた。

突如 蒸気と共にウォール・マリアの巨大な壁をも上回る大きさの超大型の巨人が現れたのだ。

その巨人は街を大きな目で一瞥すると ゆっくりと、ゆっくりとした動作で右足を持ち上げ——そのまま蹴り抜いた。たった一撃で壁の門は粉々になり街中にその門の残

骸である大きな壁の破片が吹き飛び 人々が暮らす街に降り注いだ。

まるで天より降り注ぐ天災の様に。

「か……壁に…… 穴を空けられた……!?」

誰かがそう呟いたと同時に、悲鳴が沸き起こった。

「今まで守っていた壁が今は無くなり人食いの巨人が群になって街に押し寄せてくる事が安易に連想出来たからだ。」

「わああああああ!!」

「きゃああああ!!」

我さきにと駆け出す住人達。

もう、あの超大型の巨人を見る者は誰もいなかった。

誰もが街の中心へ内地へと逃げる為に駆け出していた。

その中でただ1人逆方向へと走る子供がいた。

「エレン!?!」

エレンと呼ばれる子供は 人波に逆らいながら走り続ける。それには理由があった。

「壁の……壁の破片が飛んでった先に家が!! 母さんが!!」

「!!」

エレンが走る理由が判ったもう1人の子供も同じく走り出した。

残されたのは更にもう1人の子供。その名はアルミン。

「ミカサっ……!! う、うう……」

アルミンは エレンやミカサの様に走る事は出来なかった。

ただただ震える手を必死に抑える事しかできなかった。

「もう……駄目なんだ……、この街は……もう…… 無数の巨人に占領される!!」

エレンとミカサの2人は走り続けた。

大きな破片が 人々の身体を押しつぶしている場面。家を破壊している所。ついさつきまで平和だった筈の街が一瞬にして地獄に変わった所を見て 不安に掻き立てられていた。

だが、それでも絶対に諦めなかった。

——家に当たってる訳がない……っ!

——とつくに、逃げたに決まってる……!!

——ほ、ほら、あの角を曲がれば……っ もうちよつと行けば……!!

——いつもの、いつもの……いつもの家が……!!

息が切れても、足が痛くても、巨人が怖くても走り続けた。

家が 母親が無事であると信じて。

だが 現実…… この世界は残酷だった。

いつもの角を、見慣れた街角を曲がればいつもの家がそこに在る筈だと思っていたのに。いつもの家は……無残にも破壊されていたのだ。巨大な破片が家そのものを押し潰していた。

「母さん!!!」

そして 再び時は元に戻る。

——最短で最速。走り続ける。

地獄と化した街中には既に巨人が入り込んでいた。1体や2体ではない。無数と言える数の巨人が侵入していたのだ。それは偶然にしては出来過ぎている。まるで壁を壊すのが判っていて、その合図と共に一斉に街に侵入したかの様な印象だった。

「(普段は壁の外、壁の周辺に何体かうろうろしているだけなのに……何でこんなにつ!?)」

走り抜けざまに 4 m級の巨人の脚を蹴り抜いた。移動の速度 その勢いのままに放った蹴りは巨人の踝当たりを完全に抉り取り転倒させる。俯せに倒れた巨人の上に飛び乗って うなじを踏み抜いて 終わりだ。

これがアキラの最短の巨人の殺し方。

だけど当然だが巨人のサイズが大きければ大きい程時間が掛かるのだ。うなじが見えなければトドメを刺す事が出来ない。トドメをさす事が出来なければ、連中は延々と再生を繰り返すだけだ。

「全滅させるのは、無理だ……!」

まだ巨人が多く存在する。とてもじゃないが全てを直ぐに殺すのは無理だった。

だからこそ……。

「(助けられるヤツを、助ける! それだけを集中しろ……!)」

目を思いつきり見開いた。悲鳴が広がるこの街中で、様々な声が入り乱れる街中で

懸命に耳を澄ませた。必要な情報を得る為に。

『どうしていつも母さんの言う事を聞かないの！ 最後までいい言う事聞いてよ!!』

その声のアキラの耳に届いた。

『私は もう瓦礫に脚を潰されて、走れないの…… ミカサ！ エレンを連れて逃げなさい!! お願いっつ!!』

『ヤダ……っ イヤダ……っつ!』

距離がまだ多少あるからか 微かにではあるが はつきりと聞こえた。

訊いただけで その姿を見た訳ではない。子供を守る為に 子供の命だけでも救う為に叫んでいる母親のものだという事は その声だけで分かった。

「っ……っ!!」

力を再び脚に集中させる。

爆発的な脚力を生む為に。

その声の方向へと向かって。

声の主は エレンの母親 カルラ。

瓦礫が家に直撃し 崩壊。そして脚が挟まれて身動きが取れない状態だった。そのままの状態では間違いなく巨人に喰われてしまうだろう。

だけど、それをどうしてもさせたくないのが2人の子供。エレンとミカサだった。

子供では決して持ち上がる事のない柱を懸命に持ち上げようとする。びくともしなくても 最後まであきらめなかった。

そして……残酷な現実が迫ってきた。

崩落した家に目を付けたのか、エレンやミカサ、カルラの声に反応したのかはわからない。わからないが 1体の巨人が目を付けたのだ。

ズシン、ズシン、と地鳴りを鳴らしながら着実に近づいてくる死の足音。

「2人とも！ 逃げて!!」

喉が潰れて口から血がでてでも 叫び続けるカルラだが。

「ミカサ！ 逃げ!! 急いで持ち上げろ!!」

「うんっ……!!」

エレンとミカサには聞こえてなかった。

聞き入れなかった。……カルラを 母親を助ける事しか 頭に無かったから。

——このままじゃ 3人とも……!!

絶望を見た。

自分自身が死ぬだけなら まだ良い。でも 目の前で子供を 自分の家族を食い殺されてしまうのだけは 耐えられる事が出来なかった。母親であれば 当然だ。

その時だった。

もう全員が逃げたと思っていたのに 引き返してくる人がいたのだ。それは見知った男——。

「!! ハンネスさん!!」

駐屯兵団に所属しているハンネスだ。

エレンの家族には 大恩があるから 助けに戻ってきたのだ。だから すぐさま剣を構えた。

3人を助ける為に。

だが——。

「待って! 戦っては駄目!! お願い、子供達を連れて逃げて!!」

「…………!?!」

生まれて初めて見る巨人。人非ざる者、化物。

あの巨人に人間が勝てる訳がない。このまま戦えば 4人とも全員が死んでしまう。ハンネス諸共。

カルラは そう思えたのだ。

それだけを連想させるには十分すぎる程眼前に迫る巨人は悪夢だった。

だが、エレン達のように ハンネスも首を縦には振らない。

「見くびってもらっちゃ困るぜ！ カルラ！ 調査兵団の奴らの様にまではいかなくとも、コイツ一匹くらいは ぶっ殺してみせる！ オレは、全員を 3人とも助ける！

きつちりとな！ 恩人の家族を守ってようやく恩返しを——「ハンネスさん!!!」っ……!!」

ハンネスに最後まで言わせない。巨人と戦つてはいけない。

子供達を、助けて。全て子供達を優先させて。

全ての想いを込めて—— カルラは再び叫んだ。

「お願い!!」

その思いが ハンネスの脳裏に突き刺さる。

だが、それでもカルラだけを見捨てる様な事は選べなかった。

——確実に、確実に 助けられる2人を取るか……、巨人と戦って全員助ける賭けに出るか……。

——カルラの願いに応えるか……、オレの恩返しを通すか……!!

自分自身の思いは決まっている。返しても返しきれない程の恩があるからだ。だからこそ全員を助ける道を選ぶ。巨人を殺し 全員を助ける可能性に賭ける。

それがハンネスの強い決意だった。

だが—— その決意は アレを目にした途端に霧散し 吹き飛んでしまった。

剥き出しの歯 まるで笑っているかの様に 嘲笑っているかの様に 笑う顔。

一体どれだけの大きさか判らない程の巨体。左右に揺れながら不気味に近づくと、100年も前から 人を喰い尽してきた悪魔。

——オレは………。

ハンネスは 剣を納めたと同時に、エレンとミカサを抱えて駆け出した。

「……ありがとう」

安堵するカルラの声は聞こえるが、もう振り返る事は無かった。ハンネスは見てしまったから。

……絶対的な死を見てしまったから。

「ハンネスさんっ!? ま、待てよ! まだ母さんが!! 戻れっっ!! 何やってんだよっっ!!」

エレンはまだ諦めず暴れるが、ハンネスの力には敵わない。……ハンネスが巨人には力では敵わないのと同じ事だった。

「エレン、ミカサ……! 生き延びるのよ……!!」

——これで良い。

カルラは親としての責務を果たす事が出来た。

愛すべき子供達を死なせる訳にはいかなかった。だから、ハンネスには恩しかない。……ハンネス自身の恩も返してもらえたと思っっている。

だけど、その安堵感も……背後に迫る絶望に、陰りが生まれてしまう。

カルラは……必死に手を伸ばす。

それは、何に対して手を伸ばしているのだろうか。あの平和だった日に戻りたかったからなのだろうか。

或いは 戻ってきて貰いたい……、と思つてしまつて居るのだろうか。
「い、い——」

——いかないで。

最後の言葉は、懸命にカルラは飲み込んだ。
恐怖を押し殺す事が出来た。だがそれでも死は近付いている。

ミシリツ…… と鈍い音が響く。

あれだけ エレンやミカサが頑張つて持ち上げようとした瓦礫がいとも容易く持ち上がつたのだ。

死が すぐそばにまで迫ってきた。

10話

それは 抗えない絶対的な死。

カルラは エレンとミカサの2人の子供を自分から離す事はハンネスのおかげで出来た。

子供達をハンネスに託して もう死を覚悟した筈なのに、身体中が震える。身動きが取れないのに身体の中から震える。最早痛み以外の感覚がない潰れた足も、痛みを忘れて震えてしまっているかの様だった。

自分自身を押し潰していた瓦礫は 意図も容易く持ち上げられ、その身体は外気に晒された。

「やめろおおおおおおお!!!」

エレンの悲痛な叫びが街中に木霊する。

だが、その腕はカルラを捕らえた。潰れた足を握り絞め持ち上げられてしまう姿を、エレンとミカサは はつきりと見てしまっていた。

そして 大きな口を開けカルラを飲み込もうとしたその時だった。

ドゴオオオ！ と凄まじい轟音が起こったと同時にエレンの家の向かい側の建物が一気に崩落した。その凄まじい砂埃はあの巨人を、……自分達の母親の姿を覆い隠してしまった。

「母さああああん!!!」

何が起きたのかはわからない。

ただ、判るのは砂埃に交じって血飛沫が縦に昇った事だ。

それが、エレンやミカサには 母親の血である事を連想させるのには十分すぎるものだった。

その時にエレンとミカサを担ぎ走り続けるハンネスは一度だけ振り向いた。エレンやミカサ同様にはつきりと見る事は出来なかつたが……、ハンネス自身も2人と同じ結論だった。それ以上は何も視ずにただただ只管に走り続けた。

カルラに託された子供達を守る為に。カルラを犠牲にして子供達を助ける道を選んだ。

だがハンネス自身も、自分自身が巨人に挑む事が出来なかつた、と言う理由も勿論あつた。あの目で表情で見つめられただけで、戦意を根こそぎ奪われてしまったのだ。だから 戦つて3人を助ける可能性のある道を選ばず事が出来なかつた。

だから……カルラは死ぬ。

ハンネスは、流れ出そうになる涙を懸命に堪えてカルラに託された子供達を守る為に走り続けたのだった。

そう——この時　カルラは死ぬ筈だった。

助かる筈もない。巨人の手の中から　武器も持たない状態で、手の中に収まった状態で、助かる等有り得ない。確率で言うならほぼ100%だと言つていい。

だが——奇跡は起きた。

それはカルラが握られる数秒前の事。

その光景を建物の上から見ていた者がいたのだ。

いや、見ていた——ではなく、見つけたのだ。

そう、アキラである。

この広い街の中、修羅場と化した街中で出会うのは殆ど物言わなくなった亡骸だけ

だった。飛来してきた門の瓦礫に押し潰された者や巨人に踏み潰された者、……喰われて肉片を残すのみになった者。

初めて、この世の本当の地獄と言うものを見た気がしていた。

かつてない程の大量の死を目の当たりにして 気が狂いそうになり 絶望さえ覚えた。だけど そんな中でも確かに聞こえた声を探し走り続けた、時には慣れない立体機動装置を使い、見つけたのだ。

「うおらああアアアア!!」

風を斬り割く様に動く。

アンカーを建物に突き刺し、収縮する力と自らの脚力を合わせた。あまりの速度に身体がバラバラになりそうな感覚に見舞われたが、構う事なくその勢いのまま建物にぶち当たり、そのまま突き破った。『ドゴオオ!』と言う凄まじい轟音はこの時に発生したのだ。

その衝撃により目は充血し視界が赤に染まる。当然建物にぶち当たった為 身体のところ々が悲鳴を上げ 自らの血で服を彩った。

だがまだ止まっていられない。真つ赤な視界が捕らえるのは、今まさに女性を喰らお

うとしている巨人の姿。漸く見つけた生存者だ。

アキラは、建物を突き破った勢いのままに 巨人の腰部に突撃してその巨体に風穴を開けた。あまりの勢い、威力により風穴は大きく破れ、その身体を真っ二つに割り 傷跡から血が噴き出したのだ。

そう、エレン達はその血を目撃したのだ。

見たのはカルラの血ではなく 襲ってきた巨人のものだった。

カルラの身体もその衝撃の強さから、思わず離してしまったのか まるで木の葉の様に宙を舞っていた。……人間であれば間違いなく即死するであろう高さまで。

「っ!! うがあああっ!!」

巨人に渾身の一撃を入れたアキラだったが 目的は巨人ではなく人を助ける事。

筋肉繊維がぶちぶち、と嫌な音を奏で悲鳴を上げているのは判るが構う事なく、無理矢理力の方向を変えて、再び飛んだ。

跳躍してカルラの身体を抱きかかえると、そのまま比較的大きめの建物の上に着地。失った下半身もすぐに再生できる巨人だが 間違いなく時間は稼ぐ事は出来た。

「だ、だいじょうぶか……っ」

アキラは カルラの顔を覗き込む。

轟音と衝撃、巨人に喰われかけた事実とその恐怖。あらゆる状況がカルラの身に降り

かかり 意識が殆ど無になっていたが辛うじて保つ事が出来た意識の隙間で見たのは 太陽の光を身に纏っている様な姿。後光——それを感じ取った気がした。

『かみ……………さま……………?』

カルラは、そう呟いた。いや呟けたかどうか分からないが、その言葉を最後にそのま ま意識を手放した。

「お、おい！ しっかりしろ！」

まるで眠る様に目を閉じたカルラを見て慌てて声をかけるが、はつきりと脈を確認する事が出来た。ただ 気を失っているだけだという事も判り一先ず安心する事は出来た……………が。

「どうする……………、どうすれば……………」

街の皆を助ける。

そんな事はもう無理だという事くらいアキラは判っている。どれだけ異常な力と言われても、自分自身は基本的に人間だ。不死身だという訳ではない。

度重なる無茶のおかげで身体中はズタボロだった。巨人は道中に4体は仕留めたが、今街中にいるのは 視界の範囲内でもその10倍以上はいる。

どうすれば良い……………? と考えに考え抜いていたその時だ。

「い、この——!!」

声が聞こえてきた。

聞こえてきたかと思つた次の瞬間。

「バカアああああ!!」

絶叫と衝撃が身体を襲う。

何かが背中に飛びついてきたのは直ぐに判つた。そして その声から誰が来たのかも。

「一人でまた、無茶ばかりして!! 何で、何で皆を頼つてくれないのよっ!」

背中越しに思いつきり締め付けてくる。それがイルゼだという事はアキラはすぐに分かつた。付き合いが一番長く、今までも同じ様なやり取りは何度かあつたから。

確かにアキラ自身肝に銘じる所ではあつた。熱くなつてしまつたら周りが見えなくなつてしまう事も今まで何度かあつたから。

だけど……、それを踏まえてでも。

「悪かつたイルゼ……。だ、だけど……。そこ、傷……。」

思いつきり捕まれている場所は 先程建物を突き破つた時に出来た傷跡である。軽いいお仕置き、とは思えなかつた。激痛が走つちやつてるから。

「あつ……!! ぐ、ぐめんっ!!」

イルゼは咄嗟に離れたが、アキラは暫く痛みで悶絶をするのだった。

「さて ちよつとは頭冷えたかな? アキラ」

「ああ……、十分すぎる程な」

イルゼの後に遅れてやってきたのはハンジ。

2人のやり取りを見て、少し苦笑いをしたが直ぐにアキラの頭を冷やす事を優先させた。悶絶している所に、文字通り水をぶっつけたのだ。

「随分酷い事してくれるじゃないか。……2人して」

「ごめん……。でも、アキラも悪いから。……絶対悪いから」

「リヴァイの指示でもあるね。『会ったら頭冷やさせてやれ』ってさ。勿論『手段は問わず』だって」

ぐうの音も出ない とはこの事だろうか。それ以上は何も言わず手を軽く左右に振った。

今の状況を考えればゆっくりもしてられないから。

「一先ずこの人を安全な所へ、だな。この辺り唯一の生存者だ。……皆のガスはまだ大丈夫なのか?」

「とりあえず今はまだね。……でも戦況は悪過ぎる。空けられた穴から何体も出てきて

る。……今まで無かった巨人の団体だ。だからこれ以上被害を少なく最小限に留めるには——ウオール・マリアを放棄するのが最善策だ」

ハンジの言う策が最善である事は、アキラもこの場にいるほかのメンバー達も判っていた。如何に巨人たちと戦い慣れているとはいえ、巨人相手に物量戦では分が悪すぎる。全員がアキラの様な肉弾戦が可能だったら殲滅は可能かもしれないが、そんな美味い話はない。アキラ自身の力の秘密を探ろうと色々調べてみたが……健康な男子である、と言う結果しか出なかったから。

アキラ自身もその身に宿す力の根源は、この世界では解析出来ないとは判っていた。あの奇妙な声も自分自身にしか聞こえてこないのだから、尚更だろう。

つまり、無いもの強請りをしてしまっても始まらない。今出来る最善をするしかない。

「アキラも無理ばかりしないで！……もう、後少ししか動けない筈でしょ！」

「……………あ」

「……………まさか、忘れてた？ 考えてなかったの？」

「……………」

沈黙は肯定と取る。

だが、そこを、すかさず肘撃ちをしたのはイルゼの隣にいたペトラ。イルゼはカラを介抱していたから少し遅れてしまった様子。

「少しは回りを見て！ 私達の事も信じてよ！」

「いや、信じてない訳じゃ無いんだ。熱くなったら、こうなって……。オレ 元々こんな性格じゃなかったと思うんだがなあ……」

いつの間にか熱血漢になってしまっている自分に今戸惑いがある。環境が人を変える、と言う言葉は聞いた事があるが、ここまで極端に変わるものなのだろうか？ とアキラは思えた。

「なら、次は行動する前に一呼吸置く！ 後先考えないの厳禁！ 勿論、本当に緊急事態。動かなきゃ死ぬ様な時以外はだよ！」

「はい。ペトラせんせえ……。でもまあ……。とりあえずだ」

一呼吸置いた後、直ぐ横から大きな影が飛び出してきた。

「これは緊急事態、って事で良いよな？」

飛びかかってきたのは3m級。

比較的小さい部類ではあるが人間にとつては巨大。人の頭は軽く丸呑みしてしまう程の口を広げて飛びかかってきたが……。そこにカウンター一閃。

ドゴンツ！ と爆発音の様な凄まじい轟音が響く。

アキラの拳が巨人の前歯に直撃。歯をぶち折るだけでなく、そのまま鼻先を拳で抉り吹き飛ばした。

「……今のは良し！」

「とりあえず、此処でゆっくりしてられない。移動しながら話そう。アキラも後は回避とフォロワーに回って。……極力温存する事」

「判ってる。ほんと。そろそろヤバそうだ……。エルヴィンやリヴァイの小言を訊くのも嫌だし」

「駄目、怒ってもらうから覚悟しといて」

「……はいよ」

冷や汗ものだと言えそうだが、珍しい事ではない。でも自分の残りの体力を把握し切れてないのはやはり危ないから、気を引き締め直す事にしたアキラ。

そして、ハンジやイルゼもそうだが、個々の力の差が圧倒的にあるとはいえ、アキラの力に頼り過ぎていた事は非常に頂けない。今後の事も今まで以上に考え直す必要がある、と頭の中でそれぞれが考えていたが、今は兎も角行動をする事を優先させた。

全員が周囲を警戒し、立体機動装置を使って移動を開始したのだった。

その後は……ハンジの言った通りになった。いや、そうせざるを得なかった。

元々の危機意識の低さもあって、迅速な避難も出来なかつた事も致命的だった。調査兵団の奮闘もあって、想定されていたよりも被害が抑えられた、と言うのは、事が終わった後のエルヴィン団長の言葉。だが、それでも調査兵団以上の数の巨人が押し寄せて来たら、如何に戦い慣れていても無理だった。

強力な戦力であるリヴァイやアキラの奮闘も一時凌ぎにしかならなかつたのだ。

この日——人類は巨人の進撃を防ぎきる事は出来ずウォール・マリアを放棄。第2の壁 ウォール・ローゼ内部まで後退した。

そして、人類は思い出した。

巨人に支配されていた恐怖と壁の中と言う鳥籠の中に囚われていた屈辱を。

そして、新たに芽生えるものもあつた。

—— 駆逐してやる……！ この世から、一匹残らず……！

11話

調査兵団の本部として利用している古城を改装させた施設。

作戦会議は勿論の事、休養にも利用されていて設備もそれなりには整っている。

ウォール・マリアが巨人によつて突破されてから約1カ月間。本部で療養と深い眠りに入っていたアキラの耳に入ったのは、とんでもない知らせだった。

「——なんだって？ ……悪い。よく聞こえなかったみたいだ。もう1回言ってくれ」

自分自身の耳が悪くなった？ と疑いたくなるのも無理は無い程の知らせである。

ペトラは神妙な顔つきのまま続けた。

「……ウォール・マリア奪還作戦を打つて出たの。調査兵団だけじゃなく、駐屯兵団、憲兵団。全部隊から兵士達を募つて」

「あー、そこは良い。奪われたつてのは間違いないんだからな。……肝心なのはその次だ。そつから先がオレ、耳が悪くなったみたいで聞き取れなかったから」

アキラは こめかみに人差し指を当てて唸った。

「集めた兵士達の総数は——60万人。一斉攻撃に出たの」

「……………聞き間違いないや無いつて事かよ」

60万人が討つてでたとの事。

あろう事か巨人相手に物量戦を挑んだという事だ。アキラの覚えている範囲では倒した巨人は20程に昇る。リヴァイも含めたらその倍以上。更には他の調査兵団の皆の力を合わせたら、まだ増える。

だが、それでも減った様には感じなかった。寧ろどんどん増えていつている程だ。1体倒したら、2体。2体倒したら4体。……あの時の巨人の湧き出方はアキラ自身の力と同等。つまり異常だった。調査兵団の遠征で遭遇する巨人の数よりもはるかに上回っているのだから。

そんな団体さんが待ち構えている場所に60万もの人間を送り込んだ。——聞き間違いないらしい。

「……………憲兵団？ 駐屯兵団は百歩譲って良いと思う。訓練は一応受けてるって確か聞いてるし、あの日。……犠牲は多かつたけど奮戦はしていたって思うからな。……だが憲兵団？ 人間相手にしか戦ってこなかつた面子じゃなかつたっけ？ オレここに来てまだ日も浅いし、間違つてないよな？」

「……………」

今度はペトラの無言だった。

アキラは その無言は肯定と取る。

「……皆は？ 調査兵団 リヴァイの班やハンジ達は？」

「それは大丈夫。結果は……その、……だった、けど。軽症者は何人かいるけど、死者無しだった。全体的に調査兵団の犠牲者は1%以下だったから」

壁外で巨人と何度もやり合ってきている経験値が当然生きてきているのだからだろう。安堵感に包まれるが、直ぐにまた聞く。

「何度も悪いな。最後にもう1つだけ聞く。『それだけの数を投入して領土を奪還出来たのか？』とは聞かないよ。……60万と言ったな。その生還者は？ 何人、帰ってこれたんだ？」

アキラの言葉に、ペトラは表情を落とした。

その核心めいた質問は ペトラから言葉を発する器官を奪ってしまったかの様だ。つまり、その殆どが――。

「……エルヴィンやリヴァイ、ハンジも了解を得ていたのか？ その作戦」

「限られたメンバーにしか……上層部にしか命令は下ってなくて……。兵長もどこまで知っていたか不明なの」

無駄死にするのもさせるのも嫌いだというリヴァイ。粗暴で神経質で潔癖症で……

上げたら色々口から出てしまうのだが、はつきりと言える事はある。

……あの男は仲間想いだという事。

死にかけた兵士を看取る時 息を引き取る最後まで声をかけ続けていた。巨人を殺す時は無情に斬り捨てる。鬼を彷彿させる物があるがその時だけは息を潜めていた程だ。

単純な強さだけじゃない。そういう所があるからこそ、近寄りが見たい雰囲気を通していても、彼を慕いついていく者がいるんだという事はアキラ自身も判っていた。

そんな男が 無駄死にさせる様な場所へ行かせるとはどうしても思えなかった。

エルヴィンに関しては、少し違う。何よりも優先させるものを判っていて、切り捨てる時は 迷わない。人間性を捨てても決断する決断力を持つ男。だからこそ、団長に相応しい男なのだろう。リヴァイやハンジと言った、各長達も信頼をしている所からも判る。

そして その作戦を訊いてもう一つ疑問も生まれた。

「……………なら その作戦の時 何でオレを起こしてくれなかった？ オレも加わるべきだろ。街中はあの装置を使うのは絶好の場だが、建物の高さが心許ないから安全地帯が少なすぎる。白兵戦にでもなったら餌食になるのは目に見えてるだろ」

そう、アキラ自身の配置についてだった。

どういふ風に上に伝わっているのかはわからないが、民衆の声を聴く限りじゃ色々尾鱗がつきつつ広まっているのは判る。そんな力を持つ男を何故 ほつたらかしにしたのだろうか？ と言う事。大規模作戦であれば尚更だ。

そんなアキラの質問に無表情で答えるペトラ。

「……兵長や団長の指示。休ませておけつて」

「何言つてんだ馬鹿。オレが行けば犠牲者だつて減らせたかもしれないのに、指示だつ つつても時と場合を——」

そこまで言つた所で、ペトラはアキラの胸倉をつかみ上げた。

「馬鹿はどつちよ！ 時と場合!? どの口が言うのよ！ アキラに言つたら 自分の事 ぜんっぜん考えないままに また突つ込むからでしょう!? そんな怪我してるのに、 ずっと昏睡状態だつたのに！ ほんといい加減にしてっ！」

「つ……」

大きくアキラの身体を揺さぶつた。

「自分が犠牲になつて助けたら良い。命削つて助けたら良い。自分はどんなつても良い。そんな、なんでもできるカミサマのつもりだつていうのっ!? アキラだつて人間なんだよっ!? 起こさなかつたのは 無理ばかりし過ぎるからに決まつてるじゃない

！」

その言葉は何度も言われている。ペトラだけじゃない、イルゼにも似たような事を何度か言われた事でもあった。ここまで激昂されたのは初めてだが。

「悪かった。心配ばかりかけちまってたな……」

「……………」

「……悪かったよ」

アキラの顔を見て、激昂しているペトラの表情が少しずつ和らいでいく。

そしてゆつくりとアキラを離れた。

「ほんとに、判ってるの……？ 何度目の反省？」

「ああ。判らない訳は無いんだ。オレだって反省くらいする。オレでも……………」

自分自身がよく判らない事は何度かある。今までの言葉は無意識下での発言ではなく自分自身の意思である事も理解している。だけど、ペトラの言葉の意味もはつきりと判る。1人で格好をつけるな、と言われればそれまでの話だが、これは一歩間違えたら命に関わる事だ。

なのに、躊躇わない。言われるまで止まらない。その根幹が判らなかつた。

——自己犠牲精神に目覚めたのか？

——何故、こんな風に行動する？ 何で身体が動く？

アキラ自身でも本当に判ってない事だつた。

「アキラも反省してるみたいだしき。その辺にしといてあげて。ペトラ」
「つつ……！ ハンジ、分隊長……」

いつの間にか入ってきていたのはハンジだった。

そして、その後ろにはリヴァイもいた。

「おはようアキラ。寝起きはずいぶんと絶不調みたいだね」

「……ペトラには何度も怒られてるからな。今も怒られた。……怒られたり叱られたりして喜ぶ様な趣味はオレにはないからな」

軽口を訊けるだけの口は まだ動く様だが やはりまだ自分の中では自問自答を繰り返していた。

もう霞んで薄れつつある前世。此処とは違う場所。

嘗て自分が生きていた世界ででの事を可能な限り思い返していた。

何にも自分には無かった。早々に家族を失い 身内に絶望し 世の中に絶望し 荒れた。

最後の最後で、唯一良い事をした。何でかもう思い出せないが、それでも身体が動いて命と引き換えに少女を助けた。

断片的ではあるが 以前の人生はそれだけだった筈だ。

今回の行動も似ているとは思う。……何故そんな行動をとる？

繰り返し繰り返し脳内会議が開かれていたのだが、それは間もなく閉幕した。ハンジと話しをする為に。

「ペトラの言葉だけど、アキラを呼ばなかった理由は大体それであつてるよ。アキラはほんと無理しすぎる。まだ半年程度の付き合いだけど アキラの事よく判つた。……でもま、何でそこまでするのはわからないけどね」

「脳内お花畑なんだろ。なまじ力を持つてるから実行できてるだけだ。……ただのガキって事だ」

「へいへい。目覚めに一発いい励ましをくれてありがとうさん」

リヴァイの話は半分に、ハンジの話に少しだけ集中する。……たまにハンジ自身にもいろいろとあるから、この割合ですつと行くとは思えないけど。

ハンジは、手を伸ばして備え付けられていた椅子を引つ張り出し、腰を掛けた。

「あのねアキラを呼ばなかった一番の理由……。君はほんと人類にとつて宝なんだよ。そんな君を無理ばつかりさせて 失う訳にはいかない。……来たばかりで迷惑だつて思ふかもだけど。調査兵団は エルヴィン団長はそう思つてる。初めてここにきて、色々知つて 何としても抱き込めつて何度も言つてたからね。だから 言わなかつ

た。……今回の作戦。ほんと作戦って呼べないものだったしね」
ハンジの言いたい事は判る。

この残酷で過酷な世界の事を考えれば尚更だった。

そして 今回の作戦についても、その真意を理解できたかもしれない。ハンジの言葉を訊いて。

「そうか。数を——減らしたかったのか。人間の」

「聡明だね。落ち着いてる時に限りだけど。そう、その通り。……ウオール・マリアを失って、人類の領土数割を失って大量の失業者で溢れるのは目に見えていたから。だから政府の上層部は 見事な速度で下したよ。今回の1件をね」

ハンジの言葉に簡単に納得する事は出来なかったが、その後に関かされるこの世界の未来。それを訊けば、嫌でも納得せざるを得ない。

もしも あの広大な領土を奪われ、人間の数はそのままなのに、領土が狭くなったらどうなるか。

数少ない食料を 資源を 土地を奪い合い……最後は殺し合いになるだろう。最後は巨人に殺されるのではない。人間同士が殺し合う結末なのだ。

「……だからか。 リヴァイも何も言わないのは」

「ふん。……オレは寝過ぎてるバカをいい加減叩き起こしに来ただけだ。仕事はまだ

残ってんだぜ」

リヴァイはそう毒づくだけで、それ以上は何も言わなかった。

エルヴィンも間違いなく同じだろう。いや 冷徹 冷酷 無情な結論を選べる決断力を持つエルヴィンであれば、率先して行動をしている可能性だってある。

「とりあえず、今回の事は胸に秘めといて。……皆口にしないとは思うけどアキラもね。……これは人類全員の罪にもなるんだ。失った人達がいるから 生きていけるんだから。……簡単に納得できないとは思うけどね」

ハンジはそこまで言った所で、椅子に深く腰掛けて 大きいため息を吐いた。

「はあ…… ほんと 何だかアキラには色々とごめんね。勝手に人類の宝にしちやった事もそうだけどさ」

「……いや もう オレには帰る所も行く宛ても無いんだ。此処がもうオレの居場所だ。だからオレにだつて益はある。……それに 他にもあるだろ？ このよく判らん腕つぶし。居場所をくれた対価がそれなら十分感謝だ」

「そう、その答えも何度か聞いてる。よくよく考えたらアキラは欲が無かった所が不思議だと思ふんだよね。そこまで力を持つてるなら、やりようによつちや何処までも上がれる可能性がある。巨人が圧倒的な脅威であるこの世において、それがある意味上回つてる力を持つてるからね。……勿論 むちゃくちゃな力だから ちよつと間違つたら

恐怖されて 魔女狩り宜しく的な場面になる事もあったかもだけど」

それは考えなかった、と言えば嘘だ。

力を持てば、人は集まる。崇める事だつてある。そして……畏怖する事だつてあり得るのだから。

「……なんだ？ ハンジは心理カウンセラーの真似事をしてくれるつてのか？ オレの」

「まあ そうかもね？」

「……オレは とつ捕まえた巨人たちにご執心してて もうオレは眼中になしだと思っただがな」

「冗談。確かにビーンやソニーの事は否定しないけど、アキラだつて十分魅力過ぎだよ」

「……その笑顔がオレには毒だし、怖いぞ。解剖は勘弁してくれよ」

「ははは、そんな事しないしない」

そして リヴァイがハンジの隣に音を立てながら椅子に座る。

「いい加減話を進めろ。話の本筋は人事異動の話だろ。ズレ過ぎだ。とつと戻せ」

「は？ ……じんじ？ いどう？」

よくリヴァイの言ってる意味がいまいちわからなかったアキラだが、直ぐに説明されて理解する事になる。

とりあえず、面倒な事になりそうなのは説明される前からびんびんに感じていたのだった。

12話

とりあえず、色々あった。

ほんと、色々あったとしみじみ言える。

そして、何より今アキラは非常に疲れてます。凄く疲れてます。

ハンジとリヴアイに指令？ を言われてから、まだ1カ月程度しか経ってない。だがアキラは壁外調査以上に疲れているのだ。

……壁外で1年暮らしたあの時以上に疲れてしまっているかもしれない。だが、

そして その原因が――。

「すいませんっ！ アキラさんっ！ これ、どースかね!？」

「オレも！ オレも教えてください！ アキラさんっ!!」

「オレの型は!? 攻撃の角度とかどうでしょうか!? 巨人にも通じますか？ んーで

も」

これである。

今アキラの周りには絶賛 人集りができて、ほんと大変で揉みくちや状態である。途切れる事の無い列を成して、何かの宗教？ とも思えてしまうくらい。見方を変えれば自分の事を崇めてる様にも思えてしまうのだ。

あまりにも回りに人がいるから 何だか空気も薄くなってきたと感じてしまうアキラは。

「だああー！ 毎度毎度群がんなお前ら離れろ!! そもそも、今日の修練は終わったんか!?! 時間はまだたつぷりあるんだぞ！ それにオレに教えを乞いたきや、あのハゲ教官に『怒鳴る前に 頭の髪い生やして出直して来いや!』くらい言ってからオレんとこに来い!」

凄むと蜘蛛の子を散らした様にいったんは下がるんだが さつさと群がってくる。餌見つけたピラニアか何かかこいつら？ と思ってしまうても無理はない。

案の定 飽きもせず直ぐにまた群がってきた。

「いやいや！ そんな事言えるのアキラさんくらいっす！ あの教官の拳骨マジ痛いん

すから！ でも流石は人類最強ですねぇっ！」

「オレ、もう1人の最強、リヴァイ兵長との話を聞かせてもらいたいです！」

「アキラさんは歳はどれくらいなんですか!? 凄く若く見えますが?！」

次々とやってくるリクエスト。自分の事を敬ってるのか それとも馬鹿にしてるのか、……紙一重だ。

(それに 後半部分は 非常にむかつ腹がたったアキラだったが、なんとなく無邪気な顔だったから とりあえず見逃した。と言うより疲れるからやめた、と言うのが正しい)

今の状況は 後悔後に立たずと言えばそうだが

『もうちよつと厳格な人格を形成してから やればよかった』

と今更ながら思ってしまった。

イルゼの時同様にアキラは最初は接したのだ。厳しい訓練になるから 最初は肩の力を抜かせて励む事を目的とした親交をしていたのだが……、いつの間にかこうなってしまうのだ。

「もう良いから次は馬術だ。さっさとやれ。そんなもってそれ終わったら 基礎体力アップ訓練の耐久マラソン24時間だ。ほら 死ぬ気でやれ。いや 寧ろ1回死んでみる。そしたら 強くなるぞ(証拠はオレ)」

「ひでー!」

「うわっ、巨人より最悪だ!! 鬼教官だ!!」

もう判っているとは思うが 一応説明をしておこう。

今 アキラがいるのは訓練兵の強化合宿に使われてる施設。その臨時講師を請け負っている。……と言うより押し付けられたらしい。

それは さかのぼる事1カ月前。

『じんじいどう……って、人事異動の事か? ……あーオレ、調査兵団クビか。成る程。自分勝手に動きすぎてだな。判らなくもないが それにしても 持ち上げとて 思いつきり突き落とすとは また 斬新なやり方だな今まで無かった。……性格の悪さがよく伺えるな? リヴァイ。……元から凶悪な面だが』

『童顔に比べりゃ まだ全然オレはマシだってもんだがな』

『うっせ！ 根暗顔！』

子供の様な口喧嘩が勃発したアキラとリヴァイ。

それを早々に止めようとするのはハンジだ。

『リヴァイは人事異動って言うけど、そんな大袈裟なもんじゃないよ。……どつちかつて言うのと強制的な休養って事。後は、これからの若い世代の育成にもアキラの力を

貸してほしいって事さ。気分転換になつて良いと思うよ？』

『若い世代って、……ハンジだつて人の顔の事色々言つてたくせに、そこに行きつくのか？ オレだつて十分若い世代だぞ。まだ20だ』

『……………』

妙な間が生まれたが、長くは続かない。

『コリア！ 『全然見えねえよ』って言う顔止めろリヴァイ！』

『ふ、ふっ……………』

3人のやり取りを見て、思わず笑つてしまったのはペトラだ。

ついさつきまで怒つていたんだが、すっかりと霧散した。ハンジとリヴァイの言っている事は、まだ聞いてなかつた事であり戦場から離れるのであれば、間違いなくアキラの休養にはなるだろう。

それは歓迎すべき点だから、怒りも収まった様だ。

『良いじゃない。ずっと 凶悪な巨人とぼつかり付き合ってたんだから、たまには人間と付き合うのも』

『……オレは、凶悪な調査兵団おまえらともつるんでたぞ。巨人だけじゃない。……妙な事言い出す点をいれたら、ある意味巨人奴らより性質が悪いぞ……』

『あら？ とつて喰いやしないんだから優しいもんでしょ？ 優しく介抱もしてあげれるけど？』

『……介抱ねえ……。オレ 最近、ペトラとイルゼの笑い顔、怖くなってきたんだが気のせいかな？』

気のせい気のせい、と頷くハンジと 興味無さそうに視線を外すリヴァイ。ペトラはやっぱり笑っている。

『あ、アキラ自身の監視役としてペトラとかイルゼも合間に派遣するからサボったら駄目だよ？』

『……はあ』

『ビシビシ行くから 覚悟しといてね。性根叩きなおすから』

『何でオレを鍛えるみたいな感じになってんだ。違うだろ、絶対』

と言う事があつて 今現在に至る。

ここ一カ月くらいは色々な意味で疲れているのだが、訓練兵たちを見ると感じる所もある。あの未曾有の事件からまだ数カ月。そして 口減らしをさせられて何十万人もの人間が巨人の餌食になった形ばかり、名ばかりの奪還作戦。

それだけの事件があつたというのに、この訓練兵達は腐る事なく日々を生き抜いてきている。生きる術を学び 巨人たちに喰われる事を頭に思い浮かべながらも、地獄の特訓についてきているのだ。

人の強さと言うものが、よく判るといふモノだった。……アキラ自身も自分自身が異常な力を持つてゐる為 『人非ざる者』として認識している為か 強くそう思えてしまつたりする。訓練兵達の尻をひっぱたいた後は、漸く次の訓練に向かつた訓練兵達を静かに、じつと見守つていた。

「大変だつたけど ……沢山の人が命を失つてしまつたけど、それでも生きる希望を、壁の中にも未来を感じる事が出来るから、皆前向きになれてるんだと思うよ」

「……そうなのか？ 普通 心が折れると思うんだがなあ。オレだつて折れ掛けてたし。あんなお調子者らでも……、強えんだな」

隣にきてそう言うのはイルゼ。そして 初めて人を喰われる所を見た時の事、壁の上で黄昏ていたを思い浮かべるアキラだった。

「つて、それより いつの間に来たんだよ。何時代わったんだ? ……でも マジで交代代してるんだなお前ら。つてか、こんな事してて 調査兵団^本の方は良いのか?」

いつの間にか来ているイルゼを見て ため息をするアキラ。神出鬼没な2人はまるで忍者……? いや 女だから くのいち?

「んー? 大丈夫。アキラの監視も任務。つまり 本業だから。ペトラとは……うん。こつちも半分こしあつて ……うん、満足してる…… (………多分)」

「はあ 随分とまあ楽しんでる様で何よりだな。良い任務で何より。……こつちは色々と疲れるつーのに」

アキラはため息ばかり吐いている様子。

そんな姿を見て イルゼは 訓練兵達が見ている希望を、未来を思い描いていた。絶望しない訳はない。何十万人もの人間が巨人の餌食になったんだから。

だけど、それでも未来を、希望を見る事が出来るのは 人類の自由の翼 調査兵団の存在。人類最強と名高いリヴァイ兵長や優秀なエルヴィン団長 そして——人類の希望の星 超新星^{アキラ}の存在。

士気が低下している人類を鼓舞をする目的もあつて、エルヴィン団長や司令官が、根

回しをして アキラの存在はそれとなく広まっていた。

何より調査兵団のここ最近の近況と発展（それも色々脚色満載らしいけど）、その生存率の高さ。元々調査兵団は英雄視をされた事もあったから あつという間に広まって、賑やかな状態になってしまっている。

勿論、ミーハーだという訳ではなく、基礎体力が高いものが多く、訓練のメリハリはしっかりと付けている。怪我人も多く続出する訓練でこんなに笑い声が出ているのは アキラの存在があつてしかりだ。

「リヴァイ兵長と同等に英雄視されてるし、団長の『懐刀』とか、『最強の双壁』とか色々と言われてるから、アキラの事もリヴァイ兵長みたいに完璧、完全無欠な英雄をイメージしてたつて思うんだけど……、蓋を開けてみたら、『アキラ』だから仕方ないかなー」

と、イルゼがうんうん頷いていて 一人で納得していた。
自分自身が体験して 体感してきたから尚更だ。

「さ、私達も見に行かないと。監督不行き届きだよ?」

「……それ オレだけに適用されそうだな。イルゼはオレを見てりやいい訳だし?」

「そつ、そのとーり! ほーら、早くいくわよ!」

ひよいつ 腕を取るイルゼ。

ひよんな事から結構な急接近をしているイルゼ。……色々と蔑ろ？ にされていた様な気がしているのでしょうか？（苦笑）

それはとりあえず置いといて。

「わとと、わーったわーった、そんな強く引つ張るな。……つて、馬に乗って追いかけるんだろ？ くつついてちや乗れないぞ」

「んー？ じゃ アキラが私 背負つて走つたら？ らくしよーでしょ？ 寧ろ馬より早いでしょ？」

「はあ？ なんで んな事せにやならん？ 使うなつて言われてんのに？」

「んー ほら、あの壁の上の時みたいにー。ずいぶんとアクロバティックな事させてくれたじゃん」

50mもある壁の上からのダイビング。

それも立体機動装置使わずのダイビング。

そんなの一生に一度の体験だと言つていいだろう。忘れられる訳ない。

そう、恐怖から 思いつきりアキラに抱き着いて、飛び降りた下でも暫く地に足がつかなくて結構な時間抱き着いてた事。……パンチを何発か入れたけど それは置いといて。

……イルゼにとつて 色んな意味で忘れられない体験だった。

「あ、走るなら抱え方をしつかりして欲しいかなー? ……なーんて」

「へえ、どんな抱え方してほしいのかな?」

「えー、勿論お姫さ……………ま……………」

とんとん、イルゼの肩を叩いていて後ろに立っていたのは。

「なななな!　なんでペトラがいるの!?!」

『『なななな!』　じゃないでしょ!　なーにが『オルオが呼んでる』よ!　嘘ばかり

言ってる、人の任務とってるんじゃないわよ!」

「何言ってるの!　今は私が監視任務時間なの!　前に代わって貰った分を返しても

らってるだけ!」

「なーにが!　代わって貰った、よ!　調査報告書をまとめるの遅れた自分の責任じゃ

ない!」

いつの間にか始まった。

戦争勃発だ。

「……………これ、付き合ってたら長いし、巻き込まれて疲れる。……………どつちもどつちで　疲れ
るんなら　とつとつ　前の連中のトコに行くか。オレ一応講師だし……………」

乙女の戦争を横目に　さっさと馬に乗って駆け出してくアキラ。

その後は勿論 イルゼとペトラは アキラを見失ってしまって、アキラも訓練兵達を見失ってた時間が長くて、色々と不行き届き と言う訳でハゲ教官にしごかれてしまったのは言うまでもない事だった。

13話

□□ 847年 □□

「貴様は何者だ!？」

「はっ!! カラネス区出身 レイバート・レハドです!!」

「訊いた事もねえ名だな!? 野垂れ死にする寸前だったのか!? 馬鹿みてえな名をしてるからだ! それでその馬鹿が何しにここにきたんだ!？」

「人類の勝利を信じてるからです!! 私もその一員になるべく馳せ参りました!」
「成る程な! それは素晴らしい。死ぬ前に良い事をする腹積もりか!? 巨人の餌になつて囀役をさせてやろう! 5列後ろへいけ!」盛大に罵倒をするのは、アキラが《ハゲ教官》と呼んでいる男。
名をシャーデイス。シャーデイス教官だ。

今日もその盛大な声量が周囲に木霊し続けていた。ああも使い続けられれば 直ぐに声

帯が駄目になりそうだが。

「……相も変わらさず 声がでかいな。ここ外だつて言うのにめっちゃ響くし」

「私は懐かしいな……。アレは通過儀礼だから 昔私も体験したよ。訓練兵の時の初日にね」

イルゼの話を訊いて、アキラは苦笑いをしながら言う。

「成る程、イルゼの口の悪さと言うか、劣勢時の勢いと言うか……。それはきつと、あのハゲの影響があつたんだな……。あん時の巨人への啖呵は見事だつたし」

「つつ!? あんなの しよ、仕様がないうじゃない! あんなに接近されたの初めてだし、巨人には憎しみしかないんだし」

「判つてゐるって。だけどまあ……。マジでよく無事だつたよなあ。今は更にそう思つてゐる」

イルゼは、アキラの言っている話の意味を直ぐに理解した。

初めて出会つた時に巨人に向かつて放つた言葉の事だという事を。あの後も何度かアキラに色々と言われていたから（命を大事にく や 大した啖呵だく 等）。

「ま、今のイルゼがあるのは この訓練があつたからつー事だな。重要だつて事もよく判る」

「……アキラみたいなお気楽な教官がいたから、前の訓練兵達けつこーだらけちゃう部

分が出たでしょ？ 以前までは考えられなかったけど、今ならよく判る。……やっぱり、ああ言う怖い教官は必要なんだよ。アキラだって 判るでしょ？ 今までのアキラに接する訓練兵達を見て、シャーデイス教官とのやり取りも見て」

「やかましいな。オレだって あいつらがあんな感じになっちまうまで読めてた訳じゃねえよ！ ……ただ」

アキラは、空を見上げた。

「あんだけきつい訓練なんだ。おまけに 訓練を超えた先は高い確率で巨人ツアーの地獄。……そんな世界だが たまには、笑える場所があったって良いだろ、って思っただけだ。何より、外と変わらない場所に 此処もなつたんだから」

ウォール・マリアが突破されてから早2年。

一応調査兵団に在籍しているアキラは今も訓練生たちの指導官、教官補佐。……ちよつとしたムードメーカー？ 的なポジションにいる。

巨人を相手にし続けるのと人間を相手にし続けるのはいったいどつちが消耗する？

と言う 凡そ誰もが正解出来る様な疑問。その答えが現在のアキラの立ち位置だ。

ただ、喧しい連中に囲まれた事もあつて 色んな意味で休息をとれない場面も遭遇しているが、それでも何処か楽しそうだから、ハンジ、エルヴィンの采配は完璧だっただ

ろう。

「……そうだね。でも、今回の訓練兵の数人は 求めてないかもしれないよ」

「判ってる。面構えから違うからな。……多分、いや 間違いなく2年前のアレを体験している奴らだろうな」

イルゼとアキラの見る視線の先。

大勢の訓練兵達の中でも身に纏う雰囲気、そしてアキラの言う様にその表情、それらが他の大勢の訓練兵とは次元が違っていた。

「ハゲ教官も判ってるだろう？ あの大声が止まってる。……あれだけ近くで見りや判るか」

シャーデイス教官も数秒見ただけで 何も言う事なく次の訓練兵の所へと行っている。つまり、通過儀礼は必要ないと判断したのだろう。

「……それでもって、少数だと思うけど、ああ言うアキラみたいなバカもいるんだよね」
アキラの直ぐ後ろに戻ってきたのは ペトラ。

訓練用の器具の数々を運び、セットし終えた所で戻ってきた様だ。

「お疲れさん。——って言いたかったが、一言多いわ！ 誰がバカだ！」

「褒め言葉だよ？」

「罵り言葉だろ！ ったく……で、一体なんの……」

アキラが視線を向けた先には、少々笑える光景が広がっていた。

1人の訓練兵が敬礼の仕方を間違えているのだ。

拳を左胸に置く姿勢は、『公に心臓を捧げる』決意を示すものらしく、当然心臓のある左胸に拳を添える。だが、ボーズ頭の子は右胸に拳を添えているのだ。

当然、ハゲ教官の逆鱗に触れる事になる。

『逆だ……！ コニー・スプリングガー！』

巨人が人間の頭を挟み潰さんとするが如く、頭を手で挟み込み コニーと言う名の訓練兵を持ち上げていた。

そして、更に愉快なのがその直ぐ後ろの女の子。罵声が飛んでる場ではあるが一応今は通過儀式と言う名目があつて ちゃんとした訓練の1つである。

そんな中だというのにも関わらず、神妙な顔持ちをしつつも 手に持っている場違いな物、恐らく芋であろう食べ物頬張っているのだ。

「……………同系列にしてくれるな。オレはあんな異ファンタステック 常じやない」

「いいや、種類が違つただけで、アキラの取つてきた行動だつて十分おかしいつて。
ファンタステック
異 常だつて」

「ふふつ 確かに…………」

ペトラの言葉を読んで、イルゼも笑う。

「はあ…… 色々と肝に銘じるつもりだが、メシを盗んだ挙句公の場で、公衆の面前で喰う様なのと一緒なのは、ヤダ。それに、何だか堂々としてるし。……開き直ってるし」

シャーデイス教官も だんだん呆れている様な様子だった。

怒鳴り声がしなくなっていたからだ。

——手に持っている物は何か？ と訊けば。

『蒸かした芋です！ 調理場に丁度頃合いの物があつたので つい！』

——なぜ盗んだのか？ なぜ今 芋を食べたのか？ と訊けば。

『冷めてしまつては元も子もないので……、今食べるべきだと判断しました！』

——いや、判らない。なぜ今芋を食べた？ と訊けば。

『……？ それは 「何故人は芋を食べるのか？」 と言う話でしょうか？』

つまり、全然会話が成立していないのだ。

無作法と言えそうだが、まず何よりも盗んだ時点でアウトだけど 悪気がないというか 話の根幹が判つてないと言うか……。

「あー、うん。間違いなく 特殊な環境で育ってきたんじゃないかね？ 壁の中でも色んな集

落があつて、貧富に差だつてあるんだろ? ……あの子は 食料が何よりも大事なんじゃないか。……うん。人間の本質だ」

「……頼むから アキラは、あの子、サシャつて子と訓練一緒にする時に 今回事肯定しないですよ? 色々と教育だつて必要なんだから」

「アホ。オレはまあ 一応教える側だぞ? 生きる為に大切だつて言つたつて 犯しちゃならんラインはあるだろ」

盛大なため息がよく響いて聞こえてくる。

よく響くのには理由があつて、シャーデイス教官の間とサシャの返答が繰り返されていく内に、周囲が凍り付いてしまつていたからだ。

冷たく吹きこむ風の音、離れた場所で作業をしている作業員たちの声やその音がよく聞こえる程に。

「……おつ? あの子 ハゲ教官に芋渡したぞ? 半分。……多分 今舌打ちしたな。絶対。なかなか愉快だ」

「あー……アキラ以外にシャーデイス教官に 馬鹿な事言う人いないもんね。一応 ここでは地位はとりあえず別として、年功序列つてもんがあつたのに、例外が生まれちゃつたし」

「いやいや、見合う働きをするつつたらOKが出たんだぞ? ……青筋立ててたけど」

「見てたけど、ほんと私も肝冷やしちゃったよ。……アキラはどこ行っても、色々が無茶ばっかりなんだから」

アキラの頬をつんつ、とつつくペトラ。

「むっ……………」

そんな彼女を見て キツと睨むイルゼ。

雰囲気と言うものは読み取れるものだ。訓練兵達の空気を 地獄を体験してきたであろう身に纏っていた空気を読み取れたのと同じ様に アキラも2人の空気を読み取って。

「さて、あのサシヤつて子、走らされるみたいだし、なら 監視しとかないとなあー。サボらないかどーか。面倒だけどこれも今の仕事だ」

威嚇し合ってる(じゃれ合ってる?) 2人をほっといいて、アキラは 離れていくのだった。

そして、その光景は結構恒例になりつつあって、他の作業員や同じく教育担当係になってる兵士達はと言うと。

「やっぱ、アキラの奴は普通の人間とはちよーつとばかり違うから 気が付かないのかなあ？　なんで　あの2人がいつもまあ　飽きずに言い合ってるのかとか」

「……ほんとな。でも　やっぱ　むちやくちや人間らしいと思うんだけどねえ。ああいう子って平時は何処にでもいたムードメーカーだろ？　ほれ、施設とかの中だったらリーダーとはまた違った役割で　それでいて中心になるゝ的な」

「相手の心の中の機微を読んでる様な仕草をする癖に、女心ってヤツは読めねえんだよなあ」

「つまりあれだろ？　超鈍感。鈍い男と書いて鈍男。^{アキラ}それがアイツの正体だ」

「「「や、納得」」」

　　さんざんな言われようだったけれど、アキラはさっさと離れて行ってしまったから、訊く事は無かった。

　　その後は。

「ほれほーれ。パンはここだぞー」

「きーっつ!!」

「おおつ、惜しい。もうちよつとだ」

「うきやーっつ!」

かれこれ3, 4時間は走り続けてるサシヤ。罰として死ぬ寸前まで走れ、との事だった。自分に妥協をすればすぐに終わりそうな気がするのだが 所がどっこい。サシヤには強い芯があるらしく、走りを止めたりはしなかった。

でも、アキラの晩飯まで確保しようとするのは頂けなかった。

匂いで察した様で、巨人宜しく大口を空けて飛びかかってきたのだ。

それを見て、アキラはまだまだ大丈夫だと悟った様子。

「人間、やる気んなりやなんでもできんだよな。サシヤ」

「パァンっ! ぱあああんっ!!」

「おお、まだ元気ばつちりだな。よーし、もうちよつとだ頑張つたらやるぞー」

「ははあつ! カミサマですかっ!」

「あー……でも、教官ハゲは 飯抜きにしろつて言つてたしなあ…… 一応今の上官的な人

だしー、どーするかなあー」

「ひいひい！ カミサマああ！」

コロコロと表情が変わる姿には本当に笑ってしまった。

走り続けるというのは極めてハードな訓練だ。それも死ぬ寸前までともなれば尚更。

だが、このサシヤは『飯抜き』と言われた時の方がもつと悲壮な顔をしていたから、やはり食に關しては意地と言うものがあると見た。

今までの挙動でも十分判る事だが。

「アキラ。私達兵長に呼ばれてるから行くね」

「あまりイジメない様に」

「おう。根暗に宜しくな」

ペトラとイルゼを見送り、その見送っていた隙について パンを奪おうと飛びかかるサシヤ。

……あつさりと躲されてしまった。

「……凄いな」

「うん。芋女も相当 走らされて凄いな。……色んな意味で凄いつて思うけど、あの飢えた獣の様な動きを ああもあつさり躲すなんて。……オレじゃ無理だ。絶対奪われてる」

「つてか、オレら事喰われそうな勢いだぞ。……狙って飛びかかるスピードはまったく落ちてねえし。なのに子供扱いだ」

「いや、まだガキだろ。あの教官に比べたら」

遠くの宿舎にて、サシヤ達を見守っている訓練兵。

もう 日も落ちかけていて 黄金色が空を覆っている時間帯。

「明日から、あの凄いな人の訓練を受けるのか………。絶対に………」

あの日——巨人を駆逐すると誓った少年が そのスタートラインに立った。

此処で全てを身に付け 巨人を一匹残らず駆逐する。その変わらない思いを、覚悟を胸に持ちながら、教えを乞う相手の姿と動きをただただ追い続けるのだった。

14話

「なあ、シャーデイス教官。ちょっと聞きたい事があるんだが」

「……珍しいな。お前が私の事を普通に呼ぶのは」

それは 訓練開始2日目の夜の事。

教官は訓練兵とはまた別の部屋を当然ながら用意されている。其々個室も用意されていて、それなりに優遇されているのだ。

その日は アキラ達教える立場の者達も一か所に集まって 色々とミーティングをしていた。1人1人と部屋へと戻っていき今いるのはアキラとシャーデイスの2人だった。

最後まで残ったのは、シャーデイスに話があったからだ。少し、気にある事があったから。

「今日の適正確認の訓練、と言うか試験と言うか、あの宙釣りのバランスとりだが……、アンタ 何かしたのか？」

「……言ってる意味が判らん。何の事だ？」

身体半分、背けていたアキラだったが、ゆっくりとシャーデイスに向き直った。

「適正の試験であろうと、訓練であろうと、それらに関しちや当然だが公平にしてた。オレも多少は 見るヤツに違いはあったが基本的にはな。勿論、アンタだつてそうだろう？ いや 完璧だ。此処にきてそれなりに経つが 一度も無かつた。肩入れとかそんな類なのはなかつた。……訓練が終えた先に待つてるのは 大多数が地獄。特別な感情を持たず 任務に集中するのが正しい姿なんだろう？」

「……………」

「それで今日の適正検査。言ってる意味 もう判つてると思うけど……、あんなの有り得ないだろ？ あの少年 腰まで浮いてんに あんな風に盛大に頭から激突するな。んざ。そして それを指摘しないアンタもな」

頭に手を添え 肘を机に立てて、アキラは続けた。

「ああ……別に話したくないならこれ以上詮索するつもりはないさ。アンタにはアンタの考えがあつての事だつてくらいは判る。無意味な事はしないつて事もな。……ただ、自分でも判らんのだが、妙に気になつてんだよ。……だから、詮索する気はないつて言つといてなんだが、次のだけ。次のだけを最後の質問にさせてくれ。別に答えたくなかつたらそれで良い。……あの少年、エレン・イエーガーには何かあるのか？」

「……………」

シャーデイスは、口を閉ざしたまま話の最中に閉じた目をゆっくりと開いた。

「私の……………、私の知り合いの忘れ形見だ。ただ、それだけだ……………」

シャーデイスは、今はそれ以上は語る気は無い、と言わんばかりだった。

つまり、友人は死んでいるという事だと言う事を理解出来た。

「そうか。……………2年前の。悪かったな 詮索して」

「いや。私も少しは 話さんとな。……………気が紛れるというものだ」

シャーデイスは、まだ残っている酒を最後まで飲み干した。

その瞳は、何処か遠い所を見ている気がした。

「そっか。……………色々あるんだ。人には……………。人の数だけ それは沢山ある。……………当たり

前の事、なんだよなあ。ここに来てもう何年になるか……………。でも、オレはこう言うの

ばかりだ」

「……………」

シャーデイスは、アキラも同じ様に酒を口の中に注ぐ姿を見る。

その姿は年相応とは言えず ギャップがあつて 少なからず笑えた光景でもあるの

だろうが、それ以上に胸に思う事があつた。

「アキラ—— お前がもつと早くに 調査兵団になつていれば……………私も……………」

シャーデイスもアキラが調査兵団からこの訓練教育の場に配属をされた事は知っていた。アキラの功績やその力に関してには知らないが、それでも入って初日目に最強と名高いリヴァイ班に配属された事。調査兵団に所属しているのにも関わらず、この場に休養を理由に配置された事。

同じく、リヴァイ班所属の兵士達ベトラとイルゼも彼を慕っているのも一目瞭然だった事。

それらの色々な思いが頭の中を廻る。

だが、それらの思いも臆て消え失せてしまった。

「……私はただの傍観者。私には何も変える事は出来ない。変える事が出来るのは有能な兵士達だけだ。……エルヴィン。お前と早々に交代して正解だった」

これが運命だと言うのなら、その流れに導かれるままに——アキラが此処に来たのだろう。

「(私が出来るのは——)」

「あー そろそろ戻って寝るわ。明日も結構ハードそうだし」

くあ…… と欠伸を一つするアキラ。それを見てシャーデイスも小さく頷いた。

「そうだな もう良い時間の様だ。私も寝る事にする。アキラ一つ言っておきたいが、あまりサシャ・ブラウスを甘やかすなよ。お前も訓練自体は問題なく公平だが、接し方、

扱いの方もな」

「あー……。そりや確かに耳が痛い事だ。面白いヤツだったからついちよつと……」
アキラはその後部屋を後にし、シャーデイスも同じく戻っていくのだった。

□ □ 翌日 □ □

少年エレン・イエーガーとシャーデイス教官が向き合っていた。

今日結論が出る事になる。この少年の行く末が。

「どうなると思う？ アキラ」

「ん……。あの少年か？ オレは 乗り越えると思うがな。……あの少年の気迫と、その目を見たらそう思えた。やってくれそーな気がするわ」

「だがな、今期は確かに出来る者が確かに多いが、誰しも素質と言うものがあるだろう？ アキラ。人並み以上に出来る事があれば 人並以上に出来ない事だつてある。……一夜にしてそれが覆るとはオレは思わんぞ」

「まあ、それが普通なんだろうなあ。……だが生憎、オレ 普通はとか、それが当たり前前とか あんまり信じないみたいなんだよ」

「あー……。まあ お前はどっからどーみても 普通じゃねえしな……。調査兵团現役所属の身でここにいるんだから。ああ、イルゼやペトラも似たようなもんだが、監視役とか言つてたし」

「色々あつたんだよ。オレにも」

黙つていても 結論はもうすぐ後に出るだろう。だけど 何故だか判らないけれど、あの少年 エレンの事が何処か気になつてしまった様だった。

緊張している顔つきだが、その眼の中の色は同じだった。初めて見た時から変わらな
い、強い決意の表れを見た。

「よし。始めろ」

シャーデイス教官の一言で 始まった。

キリキリ……と音を立ててゆっくりと浮き上がるエレンの身体。

今までは、つま先が地から離れて2〜3秒後にはバランスを崩して反転をしていた。

「1、2、3……」

頭の中で秒読みをする。

不安定で震えているものの、その身体は状態を起こしたままをキープする事が出来て
いた。

その姿に歓声が僅かだが上がっている。

——出来た！

恐らく 見守っていた者の殆どが思った事だろう。

だが、その次の瞬間。ガキンツ！ と言う金属音と共に エレンの身体が反転し

面に後頭部を打ち付けていた。

「ああっ!!」

「!」

失敗してしまった事実を認めたくないのか、まだ諦めたくないのか、エレンは身体をバタつかせていた。

「ま、まだオレは! オレは出来ます……!!」

「いや、おろせ」

無情な教官の一言は、彼の表情を奈落へと突き落とした。

青ざめる表情は、絶望感さえ漂わせていた。

「ほらな。……そう上手く行きっこないんだよ。出来ねえもんは出来ねえ」

「いや、まだ終わってないみたいだぞ? ファムル 見てみる」

「ん?」

アキラが指さした先。

それは、エレンを下へと下ろした兵士 ワグナーの装着している装備とベルトをエレンに渡していた様だ。

「あん? 装備代えたからってどうにかなるもんじゃ……」

と、普通なら彼のようにそう思う事だろう。

そう——普通なら。

装備を交換した後、あつさりとエレンは 出来る様になつていたので。不安定だつたが反転する事なく、身体をキープする事が出来ている。

その光景には周りは勿論 本人も驚いている様だつた。

「……なんだつてんだ？ 一体」

「装備を代えたら出来た。……なら、一つしかないだろう？」

「あー、成る程。装備に欠陥でもあつた、つて事か」

納得した様で、手をぼんつ と合わせていた。

「運が良いんだか悪いんだか判らねえな。あの訓練兵は」

「運だつて実力の内だろ。……オレはそれを知つてる」

「調査兵団サマは 言う事がやつば違うねえ。今回もピタリと当てて見せまし、何より

ここ数年の飛躍だつてそうだしな。じゃ オレ戻るわ」

「おう」

手をひらひらと振つて離れていくファミル。

そして、アキラも。

「おおい。アキラ。立体機動装置の訓練を始めるから来てくれ」

「ん。判った」

呼ばれたから、その場を離れていった。

エレンの事は少々気にかかっているのは事実だが、自分の役割を放り出してまで見る程の執着は無いから。

これより始まるのは、立体機動装置の訓練。

数多くある訓練の中でも最も過酷な部類だと呼ばれているものの一つだ。

居並ぶ訓練兵達の前に 先程呼びに来た男と共に並んだ

「これより、立体機動装置の訓練に移行する！ 知っての通り、これが出来なきゃ巨人の相手は出来ない。つまり このままでは死ぬしかない。ここで体力、耐G能力、そして空間把握能力を鍛えてもらう」

「つつー訳だ。……氣い引き締め直せよ？ まだ入り口に立ったばかりだがな。こっから始まっていく訓練はマジで死ぬかもしれないねえ事が多いからな。冗談抜きで。初日は多分大丈夫だと思うが……、まあ あくまで多分だ」

訓練の説明をしようとする男と、まだ始めても無いのに脅かすアキラ。

その話を聞き、少々ざわつくのだが、アキラの事を見て 聞いて、接した者が多いから、そこまでの緊張感は無かった様だった。

「やれやれ……。こりゃ不味い」

「アキラの責任だ。実演しろ。全項目」

「判った判った。……こればかりはしつかりとしねえとマジで死人が出る」

アキラは首を振り、腕を回し、皆の前に並んでいる訓練器具の前に立った。

確かに笑う事が出来る場は必要だ。それは上官を含めて全員が判っている。

だけど、訓練の最中でもそれは適用されるか？　と言われれば絶対に首を縦には振ら

ない。メリハリやON/OFFは当然必要だ。緊張感をもつてやらなければ怪我じゃすまないから。

それを教える為にもアキラは、前に出たのだ。色々とやらかしてる？　本人が実演して見せた方が効力があるという事を判っているから。

身体に命綱を着けて、高所より飛び降りる訓練（俗に言うバンジージャンプ）、器械体操、命綱を使用したクライミング。

そして　何よりも訓練兵達を恐怖させたのは、命綱を故意に切つてのけた所だ。《闇討ち》と呼ばれている訓練で、想定外の出来事が起きた後の対応を見る訓練だ。

当然自分を支える命綱が切れた事で、支えの1つを失った。思わず悲鳴も起こるがそれでもアキラは慌てず全くブレず、少し体勢を崩しかけていたが、あろう事か崖を素手で殴って拳大の穴を空けて、がっちりとは掴んで落下を阻止していた。

数多く揃えられた訓練器具とその内容を一通り全て終えた所で戻ってきた。

「えー判ると思うが、これからやるのは安全とは程遠い。死ぬ事だってあるって事だ。だが、外の事を考えりや、こんなトコで死ぬのならまだマシだ、って声もあるみたいだな。……それに巨人どもと戦うつもりなら、こんなトコで死ぬようじゃ話にもならんからそのつもりで」

アキラはそう言った後に、頭を掻きながら言った。

「判つてると思うが、この訓練、今を見よう見まねでやってみようとか、安易な考えをもったりすんなよ？ オレもここまでになるまで大変だったんだからな。どつかのバ力眼鏡と、根暗男にむちやなやり方で教え込まれたから出来るだけなんだ。しっかりとした手順で、毎日の訓練・練習をすれば身につく。……出来る様になる為の近道なんざねえからな。日々精進する事だけだ」

それだけを伝えるとまた、元の位置に戻っていった。

「それでは、基礎訓練からだ！ 各自、指示に従って開始！」

その合図と共に、過酷な訓練が始まった。

訓練兵達の誰もが、先程の様な気の緩みはなく、訓練に打ち込んでいた。

そして、その訓練を見つめる傍らで。

「相変わらず見事だな」

「だからさつきも言ったろ？ オレの職場の上司がヤバいだけだ。色んな意味で。……」

あのハゲ教官が可愛く見えるかもしれん。……いや 可愛くは見えん」

褒め言葉に苦笑いをするアキラ。

自分自身の力に加えて、壁の外での1年の生活も確実に糧になっていた筈だが、それでも 立体機動装置の訓練もそうだが 立体機動装置自体の扱いも非常に難しいと言わずにはいらなかった。

アキラは、元々リヴァイと言う超級の兵士の下で訓練をしていたから、ハードルが高すぎたせいだ、と言う声も少なからず上がったのだが、ハードルは高ければ高い程良い、と言う結論が出たので（ハンジとリヴァイ談）そのままだった。

つまり初心者コースなど彼には無く上級者コースをいきなりだった。それでもしっかりと超えているから、周りはその力に改めて驚くのだ。

謙遜してる所も評価に値するらしいが、色々と口の利き方が、とあるから そこまで上がってない。代わりに規律にうるさい事を言う者達も黙認してたりする。

「兎も角、これからが始まりだな。長くなるつてもんだ」

訓練兵達をもう一回り視線だけを向けるアキラ。

少々気にかけていたエレンの姿、サシヤの姿、全員を満遍なく見続ける。

誰も死ななければ良い。と言うのは甘い理想論に過ぎないだろう。実際にウォール・マリアの一件では数えきれない程の人間が死んだのだから。だけど、それでも甘い理想

論だとしても……それを止める事はないだろう。

「さて……と、つていうか オレはいつまで此処に配属なんだ……？ 休息っつーなら十分なんだが」

ううん、と考えていた所で 本日もペトラが合流。

アキラの独り言を訊いていた様だ。

「まだ先だつて。調査兵団の方も 小規模な作戦とかはあるけど、人数も足りてるし。被害も出てないから」

「成る程。でかい事があれば 現場でこき使われるつてわけか。ま、別に構わんけど。……それに そろそろ、あのデカイ連中をまた殴りたくなつてきた所だ」

「そろそろ剣の使い方も覚えたら……？」

ゴキツ と音を立てながら拳を握りしめるアキラを見て ペトラは頼もしくもありそれでいて心配でもあり、とため息を吐いていたのだった。

また——、巨人と戦う日も近い。

15話

さてさて、今は一体何が起こっているのでしょうか？

目の前には巨人たちがいて、まるで餌を目の前に涎でも垂らしているかの様な、大好きな御馳走を前に笑っている様な、そんな見方によればクソ面白れえ表情で向かってきている。

場所は巨大樹に囲まれてる森林。

結構道も狭く、木々が入り組んでるから、足を取られたりして、精々1〜2匹ずつにはなるが、兎に角目の前の御馳走……ならぬアキラ目掛けて飛びかかってくるのです。

はつきり言って、間近で見る巨人は本当に気持ち悪いです。ええ、いつ見ても。

確かに、アキラは『そろそろ殴りたい』と言っていたけれど、それでも限度があると

いうものだと思える。

「オラあ!!」

だけど、だからと言って黙ってみてる訳にもいかない。

ちよつとでも あの手に乗まったらシャレにならないので、目の前に群がってくる連中を殴り飛ばした。

一応自分自身の力は 超級である事は自覚している。ウォール・マリアの壁、門を破壊したと言う50mを超えるこれまた超級の巨人に通用する……とはなかなか思えなけれど、そこそこの相手なら問題なしの様だ。15m級までしか経験が無い様だが。

「どりゃあ!!」

そう、問題なし……。

「そりゃあつっ!!」

全く相手にならない…… 歯牙にもかけない程……。

「——つて、ごらあああ!!!」

何だか、似たような事 前にもあったな。向かってくる巨人を何度も何度も殴り飛ばした事があったな、と思い出し始めた頃 アキラは何処かへと怒鳴っていた。怒っている様だ。

「いい加減にせえや!! 一体なんのいじめだ! 新人のしごきか!? 新人いびりか!? このクソ上司ども!! パワハラで訴えるぞ!」

現れては殴り、吹き飛んではまた現れ 途絶える事のない巨人の群が目の前にいる中で、ぼつんと残されているアキラが 巨大樹の上に向かって思いっきり怒鳴っていた。

その木の上には……2つの影があった。

ハンジとリヴァイの2人組が枝の上に立っていた。

「え? 新人つて、もうアキラは調査兵団の新人じゃないじゃん? ウチの規定では1回の壁外調査から生還出来た時点で、もう一人前なんだから」

「んなこと言ってるじゃねえー! そんな どーでもええわ! 一体いつまで巨人とデスマッチさせるんじゃないって事だ! 全然減らねえ、こいつら! どっから湧き出てん

だよ！」

通常 壁外調査に少人数で向かう様な事は 当然ながら殆どしない。

巨人と言うのは人類にとって最大の脅威であり、天敵であり、厄災も同じ。

アキラだから 簡単にぶっ飛ばせていて ギャグの様に見えるけれど、その一匹でも 街中に入ってきたらもう大変だ。

そんな無数の巨人が支配する壁の外で 少数で出ていく事は無いと言える。今回は 例外中の例外だ。だが 少数精鋭だからこそ、下手な被害を出さずに外に出られると言う事もある。特にリヴァイ班のメンバーは巨人狩りのプロだと言える程の腕があるし 今後にとっても重要な確認事項だという事もあって、エルヴィンからの許可も降りた。

「お前の力に関して正確に判つてない所が多い。どれだけその力が継続されるのか、力が出なくなったら、身体能力はどうなるのか、……そもそもその力の根源は何なのか、とかな。判らねえ事が多いし、調べる限界もあるが、調べられる部分は調べる。その為の実験だそうだ。変な時にミスって死ぬよりマシだろ？ テメエの力くらいしっかり把握しとけて事だ。……ああ、発案者はハンジ。オレたちはただの付き添いだ」

涼しい顔をしながらそう言っているリヴァイ。ちゃんと装備は整えていて緊急時にはしっかりと動ける体勢は取れている。

「アキラの力の事が少しでも判れば、色々と対処もし易いし、判つたその分私達が頑張れ

ば、アキラ自身の負担も減るかもしれないからね？ アキラ本人もそうだけど イルゼにも色々聞いて判ったんだけど……実は正確に判ってなかったよね？ 自分自身の力。だから今後の為だつて。頑張つて！」

ハンジの言葉は確かに判る。

自分自身の事を、正確に知つておかないと今後痛い目を見る可能性が高い。現に以前の時はガス欠寸前で下手したら死ぬかもしれないなかつたから。

あの壁が破壊された事件の時も、結構危なかつたのは事実だ。

だけど、1つだけ言いたい事がアキラにはあつた。

「いやあ！ 今まさにだ。めっちゃ負担になつてんぞ!? 奇行種つてヤツも結構いるし！ こいつら更に目の毒だ！ 動きそのものが他のよりも更に気色悪い!!」

「の割には悠長に会話出来てるよなあ。ほら、サボつてんじやねえぞ。踏ん張れアキラ！」

「おおっ!? 今の状況で一体どーやつたらサボれるつてんだよ！ 教えてくれ逆に！ サボりたくても、サボらしてくれねえよ！ このでかい連中が休ませてくれねえんだよ!! マジで、マジでオレ死ぬかもしれんぞ！」

わらわらと出てくる巨人さん達。

数だけを考えたら ひよつとしたら ウォール・マリア襲撃の時よりも多いかもしれ

ない。何でこんなにいるのか疑問に思えるのだが……その疑問は直ぐに解消する。

木々の間から、アンカーの射出音が聞こえてきたかと思えば、リヴァイやハンジのいる枝に着地した人影が何人か見えたから。

「おお…… やつてるな。やつぱ壮観だわ。あれだけ憎かった巨人どもがぶっ倒れてるのを見るのは」

「必死に頑張つて 漸く1体倒せるかどうか、そんな時間でここまでやつてしまうとは……。やつぱり人類にここまで希望が持てたのは……随分と久しぶりに感じるよ」

「多大な犠牲を払って進めているマリア奪還作戦も、光明が見える……か。まだまだ先の話のだが」

いつものリヴァイ班の皆だ。

その最後尾にいるペトラはと言うと。

「……アキラにばかり負担をかける訳にはいかないからね！ 私達も今回のこの任務、アキラの事しつかりとバックアップする！ だから私達も集中する！ もしもの事があつたらすぐに動けるように！」

何処か陽気な男どもの尻を蹴つ飛ばす勢いで前に出てそう言っていた。

因みにペトラは 今回の1件を訊かされて、リヴァイ班の中で当然ながら一番反対だった。アキラの力を目の当たりにして、疑っている訳ではないが、それでも危険

すぎるし、万が一にでも死んでしまったら……？ と不安だったから。

ペトラに対する答えが 全員がカバールをする事と緊急脱出の手段があると言う事だ。

反対意見を言ったとはいえ、ペトラにとつても任務だから本当に拒否する事も出来ないから、最後には納得するしかなく、それでいて与えられた任務に集中していたのだ。

そんなやり取りを一通りみて、アキラが感じたのは 唯一心配をしてくれているのはペトラだけだという事と他の男たち、オルオは兎も角、エルオやグンタまで 何処かお気楽な様子だ。そう、まるでテレビや漫画の中の登場人物でも見てるかの様な感じだ。(この世界には テレビは無かったけど)

だが それもペトラの言葉を訊いたからなのか、或いは元からしっかりと最初から思っていたのかはわからないが(後者だと願う)、陽気な表情は直ぐに消え失せる。

「判つてるよペトラ。アキラのヤツがへばつたらしっかりと回収する。その為に立体機動装置を色々と改造したんだろ？」

「そろそろオレ達の付き合ひも長い。……アイツの事を信じてるのはお前だけじゃないぞ。ペトラ」

「身体に急激なGが掛かって、常人ならきつい回収方法ではある……が、アキラは 持ち前の身体能力を利用しているのか、殆ど無傷だ。……惚れた男が心配なのは判るがしっかりと我々で最後の一線は超えさせない様に守る」

「ほ、惚れっ／＼／＼!!」 なな、何言つてっつ……!」

色々と話しをしてる所、少々だが耳に入ったアキラ。全部は聞き取れなかったが大体内容は理解出来た様だ。

……ペトラ。どんまい。

「あーそうだな。随分と良い班に恵まれたよなあオレは。……だがな、幾らなんでもーちよつと段取りつてもんがあると思うのは 気のせいじゃないし間違つてねえよな? 体力測定なら 訓練施設でも出来んだろ? なのにいきなり外で? 実践投入すんの? オレ、協力するつもりはあるけど、兵器になつたつもりは無いよ??」

6m級を吹き飛ばした所で、盛大な皮肉を口にするアキラ。

「絶対そのメガネだろ!!」 どんな実験でもある程度の段取り、段階があると思うのに、それを思いっきりぶつ飛ばしてこれにしたの! オレ、3日前までは新人教官(結構無理矢理)だったんだぞ!! それが突然外に出て、森の中、巨人の巢の中。そんな中でハンジ分隊長さんは、まるで 巨人を使った実験ん時みたいな目でオレの事見てるし! 目えキラキラ輝いてるし! あー、そろそろ解剖でもされんじゃねーか、つて不安になるわ全く!」

と言つてる間に、比較的小型サイズの3m級が3体程一気に接近してきた。

唸る様な、うめき声の様な……そんな奇声を発してくる。大きな大きな顔を近付かせ

て来る。

「だあ！ うつとうしいわあ!! 変顔で近寄ってくんな!!」

左側の相手を眉間に左拳を一撃。

右側からの相手を左脚で側頭部に蹴りを一撃。

正面に至つては、無理矢理身体を捻つて、ぐるぐると回転させながら踵落としを撃ちかました。

攻撃の1つ1つが入る度に、どごん！ ×3 と落雷でも落ちたのか？ と思える様な轟音が周囲に木霊し、その度に驚いてしまう面々。慣れたとはいえ、やはり人外の手を目の当たりにする場面は、壁外だけで数少ないから、突然だったら驚いてしまう様だ。

「……………はあ、はあ。疲れた…………… ……ったく。で、どれくらいだった？」

気が付くと、アキラは木の上に昇ってきていた。何だかんだ口では不満や文句を言いつているものの、時間を気にしてる所をみると、根は真面目？ と思ってしまうのは気のせいだろうか？

因みに、アキラのその動きを追えたのはリヴァイのみだった様で、他のメンバーは若干だが、戻ってきていた事に驚きを見せていた。

「……………なんだ？ もうへばったのか。さっきよりタイムが落ちてるぞ」

「無茶言うな！ 休憩挟んでるとはいえ 連続なんだぞ！ その上サイズがでけえのが結構集まってきたし。その辺を考慮してくれた上での査定の言葉をくれたらうれしいんだけどなあ。リヴァイせんせー？」

「オレなら後10匹は殺れる」

「なら 素手でやってみ？ 世界観がガラっ と変わるぜ」

「……そんなバカみたいな真似が出来るのはお前だけだ」

「装備整えたお前も似たようなもんだろ。そのバカみてえにはええ動きはな」

恒例の互いに面白い程 温度差のある口喧嘩をしあつてうちに、ハンジが落ち着いた様子で時間を計測していた。

「うん、最初が40分くらいかな連続での戦闘は。その後インターバルを挟んで37、35分……30分。今が20分弱、かな。確かに連続ですればするほど落ちるみたいだね。後は 使う力が強ければ強い程、持続時間が減っていくのかな？ まだ判らない所は多いけど、現時点で纏めると、長距離の遠征の場合は 休憩を挟めば何とかって思ってたんだけど……、ちょっと難しいみたいだね。巨人が現れるタイミングなんて 決まってる訳ないし」

「……やっぱさ、人の事兵器みたいに見てね？ 前に言ってたヤツだが。人類の希望じゃなく、人類の兵器かオレは」

「ははっ、こーんな面白い兵器がある訳ないじゃん？ アキラはどっからどー見ても人間だよ。いや、びっくり人間」

「いや、扱いの事言ったんだよ！」

緊急脱出用に立体機動装置を改造して備えていたんだが、結局アキラは自力で戻ってきたから意味無かったんじゃないか？ とツツコミを入れたかった他のメンバー。

「だけど、そんな空気もまるつきり無視して 速攻で近づくのはペトラ。」

「大丈夫だった？ はい。タオル」

「はあー、さんきゅ。オレの事 労ってくれんの、ほんとペトラだけだわ。ほんと、きつつい職場の中の唯一の癒しだこりゃ。ありがたい、ありがたい。ありがたやー、ありがたやー」

「も、もー 何言ってるのよー／＼／＼ そんな事言ったって何も出ないんだからね!？」

えー……あー、でも 帰ったら御馳走くらいはしてあげるよ？」

「……………ん？ あれ？ あー、まあ 良いか。楽しみにしてる」

南無南無くと手を合わせて言っていたアキラは、実際はからかう様に言ったつもりだった。そんなアキラだったのだが予想以上に喜んでるペトラを見て狙い外した？

と目をぱちくりさせていて、そんなアキラを呆れた様子で見るのはオル才達。

「ほんと、結婚すりや良いんじゃないか？ この2人」

「……そりや イルゼのヤツが黙ってねえだろ。それに必要な手順を踏んでねえ時点で血の雨が降りそうだ」

「ふむふむ。一夫多妻と言うのが一番争いが無かったりして」

妙な事を言ってる3人組に、ペトラは道中で拾っていたのか、石ころを投げつけた所で本日のイジメと言う名の実験は終了したのだった。

16話

「えーっと 次の企画だけど、アキラの身体の耐久度の確認をしてみたいと思うんだ。まずは大きな丸太にぶつかってみる？ 巨人用のトラップを幾つか用意できるよ。後はそうだね、爆弾とか……うん。段取りは大切だよな。まず検証するなら剣で刺してみるとかかな？」

「……おい。そろそろ、ガチでキレて良い？ なあ リヴァイ。このクソメガネ。外でうろついてる巨人と一緒に夜空の☆にしていい?？」

「……後にしろ」

会議の様なものを宿舎でしているけれど、その中身はただの『アキラをどうやってイジメよう?』と言う作戦会議だった。それも本人を前に言っているので更に性質が悪い。頭からバクツ！ と一口で食い殺してくれる巨人の方がマシだと本気で思いかねないだろう。

そんなハンジの提案に これまた笑顔で接するアキラ。いつも沢山怒鳴ってるのに

今は笑顔で対応しつつ、ハンジの様な物騒な提案をしている。

アキラのその笑みが何処となく怖く感じたりもするんだけど……、やっぱりギャグに見えるし、何よりハンジの試練？ イジメ？ もあつさりどこなしてしまっただから、これまた面白い絵面しか思い浮かばないのである。

「やってるな。お前達」

「……エルヴィンか」

そこに入ってきたのは、調査兵団 団長のエルヴィンだ。

ハンジやリヴァイよりも階級が上な男だから、リヴァイよりもこっちに聞く方が良いだろう、とアキラは思つて。

「エルヴィンだんちよーさーん。コイツ酷いんだあ。オレの事 実験動物扱いどころか、拷問までするんだよ？ このクソメガネ。お空の彼方に吹き飛ばして良い？ 多分、コイツ殺す気だよー、オレの事。黙って殺されるのはヤダしいく」

「……ハンジ。そろそろからかつて遊ぶのは止めてやれ。アキラの事を宝だと言つたのは私だが、お前もそうだ。失うのは人類にとつての痛手だ。それも身内に怒られてその拳句死ぬなんて 末代までの恥になるぞ」

「ははは。ヤダなあ。冗談に決まつてるじゃない。ここで アキラにキレられちゃつたら、私なんかじゃ歯が立たないし。リヴァイに守ってもらわないといけないし」

「……コイツと戦るのは面倒くせえよ」

「オレだつて、お前と一戦やるなんて、何よりも一番めんどくせえよ」

笑っているハンジだが、目の奥では真剣味を帯びているから、どこか怖い。

リヴァイとアキラもいつもブレてない。

エルヴィンは そんな3人を見てただただ苦笑いをするだけだった。

「それよりも現状を話せ。……エルヴィンも来た事だ。色々あるだろ？ 判つてる所からで良い」

「そうだな。アキラも聞いてくれ。色々とうんざり気味かもしれないが、次からはまじめな話だ」

「いーよいーよ。真面目な話なら幾らでも。最近じゃそっちの方が珍しいし」

と言う訳で、現状のウォール・マリアの奪還作戦についてと 今後の壁外調査についての件一式諸共の説明を受けた。

以前と比べて犠牲者の数はやはり増えているものの、調査そのものは 少しずつではあるが進んでいるという事。比較的 近い集落や村の類は 調査兵団による一時的な巨人の掃討により、その財産の回収や物資の調達も出来ているという事。そこまでの

ルートを模索し予め持ち込んだ補給物資を設置し更なる順路を作成し……etc

作戦は進んでいるが、ゴールは全く見えないのが現状。何よりも巨人を相当駆除している筈だが数が一行に減らないのが厄介だった。

つまり、ウォール・マリアの全てを奪還するまでは相当難しいと言う事だ。

更に以前まで行っていた壁外調査を再開するなど、今は夢物語になつてしまいかねなかった。

「壁外調査と言つても、ウォール・マリアの壁の内側だがな」

「その壁に穴が開いたんだ。戸を叩く必要も無く、連中は入つてくるんだ。もうそこだつて十分壁外だろ」

「………違うない」

続けられる説明。そして今後の方針。

「まずは、現時点での最前線はトロスト区。次いでカラネス区とクロルバ区の3点が最も重要拠点になっている。……超大型の巨人が南側に現れた事もそうだが、これまでの調査で、巨人は主に南側に集中していると思われるからな」

「………連中は頭が弱えからな。だが、考える頭があるのもいる。扉を破壊した超大型と鎧の様に硬質な身体を持つ巨人の2匹だ。それ以外は一番近い壁によって集るんだろ」

そう、かつての襲撃で扉をピンポイントで破壊した超大型の巨人と逃げ惑う人間は一切触れずに、ただ一直線に扉を破壊し、巨人たちを先導した鎧の巨人。

この2匹が現状最も厄介な巨人とされていて、最も排除しなければならぬ相手だ。だが、調査時にも全く遭遇はしていない。最優先で精鋭達を用いて

「アキラの活動可能時間に制限がある以上、その力を組み込んだ作戦や無理な進軍は制限する。そして、いつ超大型が現れないとの判らない状況だ。なるべく犠牲者を最小限に留めつつ、迅速に現状の更なる把握をしなければならぬ。……1ヶ月後には再び出発予定だ」

「成る程。つまり1ヶ月間は休みがもらえる訳か？ 英気を養わせてくれよ。そろそろ」

「勿論だ。アキラは休め。他の雑務業務は他の分隊長達に一任させている。……休息の仕方は任せるが、以前みたいな無茶は止めてくれ」

「えー、良いじゃん。マリアの内側の方が川とか多いし、新鮮な魚とかも釣れた。食は大事なんだぜ？ エルヴィン。……奴らの様に無駄に喰っては吐く連中を見て来たら薄れるかもしれないがな」

エルヴィンが言う以前の様に……とは、アキラの休暇で壁外へと向かった事があった。

巨人により、人口と領土が減った人類の活動拠点。その資源も減ってしまった故に食料問題もそこまで大きくはなっていないがそれでも影響は出ているのだ。

と言う訳で、以前の1年間壁外で暮らしたスキルを最大限に活かして、これまた呑気に釣りに出かけたのがアキラ。

周囲の仲間達に盛大な駄目だしを喰らい、何度バカと呼ばれたか判らないが、それでもアキラの言う新鮮な魚やはたまた、人間がいなくなり野生に還った牛や羊を連れ帰って貴重な肉の確保など、物凄く貢献してしまっているから、あまり強く言えなかつた事もある。

……が、それでも万が一何かがあつたらどうするんだ？　と言うお叱りもきつちり受けてしまった為、現状のアキラの休暇は必ず誰かが一緒について監視をする程になつてしまつていたので。

「あの肉は美味かつた。今度は上手い事やつて全部 調査兵団に回せ。アキラ」

「おつ？　流石リヴァイは判つてるな。まあ 火事場泥棒みたいな真似は出来んからあんまし期待はすんなよ。あいつら捕まえられたの結構偶然だし。流石に 牛やら羊を担いで壁の上に昇るのは無理だから 扉を開けてもらわないといかんからな。巨人がいない時にしないと開けてくれんし」

「ははは……。アキラは型破りな事をしてくれるから全然退屈しなくて良いんだけど、

ペトラやイルゼに思いつき怒られても良いなら、どんどんやってみてよ。私達が潤うのは事実だしね」

「あー……。それは確かにヤダな」

当然ながら、アキラの身を誰よりも心配してるのはその調査兵団の紅点である乙女達。

これまでも何度も言われていて、涙まで見せていて、心配かける事がここまで相手を傷つける事だという事も、アキラはそろそろ学んでいた。(遅すぎるし、忘れっぽい)

絶対に自分は死なないと思っけていても判らない。何故ならこの世に絶対と言うものが無いというのは、世界と世界を渡ったアキラが誰よりも理解しているから。

だから 以前……。

「そうだったな。何人か一緒に行動しないといけない、だったな。外に出るのは罪だったし、それに幾らなんでも、もう牢には入りたくないし」

1人で外に行くと言うのは厳禁となった。

と言うより昔から壁外に出る事だけでも罪になっていて、ウォールマリアの内側とはいえそこはもう壁外になつてから、適用されてしまう。……法的にはまだ改定は済ませてないみたいだけだ。

「お前を恐れてる壁の中の豚共しか喜ばねえ様な真似はするか」

「あー……、そう言えばそんな事もあったなあ。結構懐かしい。保身に走ってる。全力疾走してる様な連中との件だったか？ これ以上 思い出したくないけど」

アキラの存在を中央が知り、その正体についての問答が極秘ではあるが行われた事がある。エルヴィンの計らいもあって、公には その力はリヴァイの様な強い兵士程度にしか認識されていない。

……だが、誰が巨人を殴り倒す様な真似が出来ると信じるだろうか。

リヴァイの言う豚共と言うのは巨人を見た事も無い連中で、妙に強い権力や支持率があつて困った連中は、巨人が人間に化けてるんじゃない？ とまで言い出したりして 脅威を自分達を脅かす者を排除しようとする事しか頭に無かつた。

だが、壁外活動を主とする旨を伝えたら、大人しくなつた。……壁の外で死ぬならO K 程度にしか考えてない様だつた。

「皆がアキラやリヴァイの様に強くない。……人間とは脆く 弱い生き物だ。より狭い場所に閉じ込められれば、最終的には殺し合う。根本にはそういう残酷性がある」

「ああ。知ってるつもりだ。……が 調査兵団にはそんな臭いはしないがな。好奇心旺盛なバカばかりだつて認識しかないよ。つまり、お前ら人ん事バカバカ言ってるが、同類項だつて事忘れんなよ？ 特にハンジ！」

「勿論。自覚はあるさ。そうでなきゃ調査兵団なんて務まらないしね」

「……その中でもお前がダントツで突き抜けてるって事実も忘れるなよ。バカが」
「うっせー！」

実に頼もしい限りの面々。

人類は……再び巨人に支配される事はない。

この籠の外へと解き放つてくれる。

エルヴィンは、そう強く思えたのだった。

「アキラ。もう一つあるんだが」

「ん？」

「以前の訓練兵の教育係の件だ」

「ああ。そっちはクビにでもするか？ オレが上手く教えたとは思ってねえし」

「いや 逆だ。お前に憧れて 訓練に精を出す者が増えていく。士気を高める効果もあるそうさ。……上手く力を抑えて本当の力を隠しているとはいえ、それでも実演を完璧に繰り返した事が功を成したのだろうな」

「ふーん、……憧れ、ねえ」

胡散臭そうな目をしているアキラ。

だが、これは紛れもない事実だった。教え方の上手さなどではなく、ただ純粹に強い。それだけで、人は着いてくるといふモノなのだ。……リヴァイの様にぶつきらぼう

で、性格に難があつたとしても 憧れや羨望の眼差しを向けられ続けているのだから。

「調査兵団としての任務に次いで、特別教官として定期的に見てやつてもらいたい。それも息抜きの1つとも思つてくれ」

「へーい了解。ま 実験体にされるよりは幾らかマシ、かな。息抜きつつーのは 微妙な面もあるが 今の104期、だっけ？ その訓練生たちは マシな部類だし」

それに面白い奴らもいる。と言うのが一番の理由でアキラは了承したのだった。

そして——時は流れた。

17話

□□ 849 □□

場所は訓練施設。

あれからもう2年が経過していた。

この場所で汗を流し 訓練に訓練を重ね 兵士達は当初に比べ見違える程に成長を果たしていた。身体だけでなく……心までも。

「いや……、心つつつたらちよい微妙だがなあ……。サボってるヤツはサボるし」
調査兵団の任務の傍らで、訓練兵達の特別講師も受け続けて2年。……それなりに上下関係、信頼関係は気付けたと思うアキラ。……いや そう思ってるのは訓練兵達だけだろうか。

教官と言うよりは、仲間の様に接し、接されている。アキラ自身も堅苦しいのは嫌いだからそれを望んでいたから上下関係は公の場以外では見せない様にとしていた。

そして、今日は午前から格闘術の訓練の真っ只中。

2人1組になって 刃物で襲ってくる相手を対処する為の格闘術の訓練を受けている。

その訓練兵達をしつかりと見ているのはアキラだけでなくペトラもいた。

「でもこれ 巨人相手に役に立つとは思えないぞ。巨人がナイフ持って襲い掛かってくるとかも有り得なさそうだし」

「ん？ でも アキラにとつては凄く役に立ってるんじゃないかな。見よう見真似であつと言う間に巨人にしてたじゃん？ その力押しが基本だったのにさ？」

「あー……、まあ 試した事なかったし。前は喧嘩ばかりで当て感だけは結構自信があつてそれだけで対処してたからな。でもなあ。まあ……人間の中にも色々いるし。覚えておいて損は無いやなあ」

「それ、絶対ハンジ分隊長の事言ってるでしょ」

「さあてね。ああ、1人じゃないと思うがなー」

「つて事はリヴァイ兵長もつて事？ あの2人をどーにかしよーとするなんて、アキラくらいしか考えないよ」

ペトラの口からとんでもない名前が出てきたのだが、幸いな事に訓練兵達は今の訓練の真つ最中だったから、訊いてなかった様子。

決して少ないという訳じゃない調査兵团だが、そんな事を口にするのはアキラくらい

だろう、とペトラは苦笑をしていたその時、アキラは。

「お……？ アニのヤツ。何だかやる気になってんじゃん。何かあったのか？」

数多くいる訓練兵達の中の1人を見つけ、見ていた。

その兵士の名前は《アニ・レオンハート》

数多くいる訓練兵達の中でも極めて能力が高く、殆どの訓練で点数を取っている。

だが、格闘術においてはあまり重点に考えていないからか、成績に付ける点数は立
体機動術に比べたら果てしなく低い。だからこそ、今までは隠れてバレない様に
くサボっているばかりだった様だが……。

「へえ…… アニの相手はアイツか。エレン。一体どういう心境なんだかな。やる気出
してんじゃん」

2人を眺めてるアキラに 肘撃ちを入れるペトラ。

「いてっ！ な、なんだ？」

「……アキラ そんなに、あの子の事。気になるの？」

「ん?? 気になるっつーか、結構珍しいだろ？ ペトラも思わないか？ アイツが格闘

術でやる気だしてんの」

「そ、それはそーだけど……、この間なんか 手取り足取りって……」

いいいじと、両方の人差し指を合わせるペトラ。

以前、バレない様にサボってたつもりだった様だけど、もの見事にアキラには見つかった事があった。鬼教官がいるからアキラ自身はそこまでとやかくは言わなかったけれど、一度 アニと格闘術の訓練をマンツーマンで受けた事があったのだ。

アニにとってみれば、真面目にする所を見せて口止めのつもりだったのかもしれない。……内地志願者にとって 点数の減少は死活問題なのだから。

足技を主体としたアニの格闘術。その威力もそうだが 何よりも正確に素早く、最も効果的な部分に蹴りを入れる。それは滅多にみられる物じゃないんだが……。

「いやいや手取り足取りって、そんな楽しそうなものじゃなかっただろ。あん時は サシャにした時の要領で、アニの攻撃を躲して躲して 何度かからかって……、めっちゃキレられたじゃん。普段から怒り顔が1段階増して、まるで鬼でも出たんかと思っ たんよ」

「あー……。でも 女の子からかって遊ぶなんて、アキラ趣味が良いって思わないよ?」
「ま、そりやそうだが。でも 本気のアイツってのを見てみたくてな。アニともう1人のヤツはほんと逸材だってオレの目から見ても思うし」

アニの蹴りは正確無比で素早い。

だが、それはあくまで人間業の範囲内だ。アキラの上司にはとてつもなく早い男もいるし、数いる中でも動きが俊敏な巨人も何度か相手にした事もあったからか、アニの動

きに慣れるのも早かった。

1と2度目は蹴りを脚で防御。

そこから先は上手く回避を続ける。首と脚を取ろうと手を伸ばしてきても、一寸の距離で外され、逆にふわりとゆっくりと投げられる。……でも地面に倒す事はせず、そのまま1回転させてこれまた上手く着地させてあげたりしていた。

『例え訓練だろうと、女の子をぶつ倒したりはしないよ〜♪』

とでも言ってる様に見えるまさかの紳士っぷりな扱い。

それを見て アニの表情が更に変わった。笑ってるのか怒ってるのか判らない。……般若の様な顔に。

「……そのアキラの態度があの子に火を着けちゃったんじゃない。だから アキラは趣味悪いって言ったの。サボる所は確かに見たけど、あの子 あの格闘術を披露する時は、何だか一味違う表情だったんだしき」

「まあな。活き活きしてる感じだった。でも サボって良いってわけじゃないんだし、それがサボった罰だっと思えばいいんじゃないか？ オレをぶつ倒してやる！ って顔してたし。気合は入ったみたいだったから結果オーライだ」

「はあー」

ペトラが深くため息を吐いている間に アニの方も終わった様だ。

見事にエレンがひっくり返っていたから。……そんなもつて次にやり合っていたのは《ライナー・ブラウン》と言う名の体格の良い訓練兵。

何故だか、彼もアニの餌食になっていた。

「よし オレまた行ってくるわ」

「はあ…… つて え？ アキラ？」

ペトラを置いて、さっさと移動するアキラ。

何だか気になる女の子を見つけた男の子の様な感じがして、少々嫉妬心が出てしまっていたペトラだったが……、一先ずアキラにそう言った感情が無いのは判ったから。

「もー。あんまり からかってあげないでよ」

「わーってるって。ただ、オレも身体を動かしたいだけだつて」

盛大にアニにぶつ倒されたエレンとライナー。

ライナーに至っては、ひっくり返ったまま まだ立ち上がれないでいた。……アニの

体格の倍はありそうな体つきだというのに。

そして、エレンはア二に、ア二の使用する技術について訊いていた。

ア二は自身の父親から教わったとの事だった。だが、それ以上は話す事は無かった。

「こんな事やったって意味なんかないよ」

「……………この訓練の事か？ 意味がないってのは…………」

ア二は、顎をくいっ と動かして 他の訓練兵達に向けて続ける。

『『対人格闘術』なんか点数にならない。私を含め熱心な内地志願者はああやって流すも
んさ…………。過酷な訓練の骨休めに使ってる。それ以外はあんたらの様なバカ正直な奴
らか、或いは本当のバカか。その3種類しかない』

ア二の説明を聞いて、納得をせざるを得ない光景を見た。

眠たそうに、ただただ取っ組み合いの振りだけをしていて、教官がいる時だけ表情を
変える者。

必死に汗を流し目には強い力が宿ってるかの様な表情をさせながら訓練に取り組ん
でいる者。

…………自分で独自に生み出したのか判らないが、奇怪な動きを取り入れて遊んでる者。

確かに3種類しかエレンの目にも見えなかった。

その時だ。

「ほっほー、ならその場合、この間のアニはどの部類に入るんだろうなあ」

「っ……………」

「あっ……………」

突然の背後からの声に意表を突かれたアニは思わず飛びのく。エレンはその声の主の方へと視線を向けた。

「よっ、いつもいつも精が出るな。エレンは」

「あ、アキラ教官」

「……………」

アニはアキラが来るなり、完全に戦闘態勢に入った様で、視線が更に吊り上がっていた。た。

「やれやれ、随分とまあ 睨んでくれるな？ 一応 オレは教官なんだぜ？ アニ」

「……………いいえ、睨んでません。これが私の素の表情です。なのでそんな事言われても困ります」

「はは。そうかいそうかい。まあ オレがいる事で、気合が入るんなら良い事だ。

さつきも言ったがオレも教官だし、訓練兵達には気合を入れてもらった方が良いと思うてるんだ。これでも」

両手を広げてそういうアキラ。

以前の借りを返そう。隙だらけに見えるし！　と思いかねなかったが、それでもアニは決して踏み込む事が出来なかった。

隙だらけに見えて、まるで隙など無かったから。矛盾しているかもしれないが　アニには感じ取る事が出来たから。絶対的な間合いの深さを。

「ほれ。エレンとライナーもいい加減起きろ。サボつてるとみなすぞ？」

「うっ……。す、すみません！」

「し、失礼しました！」

ライナーとエレンは起き上がって、敬礼をした。……が、堅苦しいのは好きではないからすぐに辞めさせる。

「そーいやあ　アニは言つてたよな？　『対人格闘術』は点数が低いって」

「……違いますか？」

「いんや。間違っちゃいねえよ。何せオレらの目に見える敵、相手は巨人だからな。巨人相手に格闘術で攻めるのは……まあ　バカくらいだろうし」

「い、いえ……アキラ教官。巨人に格闘術でって、それじゃ自殺志願者じゃないですか？

そうなたら止めないと」

「……ははっ、そうとも言うかもな」

自虐的に笑うアキラとその笑みと話の真意が判らない他の3名。

「それで何が言いたいのでしょう?」

「うん? ああ、そうだったそうだった」

アキラは、地面に落ちてる木剣をひよいと拾い上げた。

「ここで特別ボーナスだつて思いついてよ。……格闘術で、オレからこの木剣を一本取れたら、立体機動術と同じ点数をつけさせてやるよ」

「……へ?」

「そ、そんな事出来るんですか!? 規定じゃ点数の割合つて決まってる……」

「オレがゴネたら通るもんなんだよ。ハゲも黙ってくれる」

「あ……、確かにそんなトコ、今までありましたが……」

呆気にとられて変な声を出すエレンと驚いてるライナー。話に喰いつくのは、2人だけで アニはただ黙っていた。

「貴方から木剣を取れるとは思えません。盛大な時間の無駄かと」

以前の記憶が苦い思い出となって浮かび上がってきているのか、気合を入れさせる為に言ったアキラの言葉が空回りしてしまって、早々に辞退する流れになってしまった。

だが。

「まーそりゃそうだな。以前もそうだったし。わざと負けてやったら更に怖い顔しそう

だし。……ん、そーだ。ならこれならどうだ？」

アキラは ライナーとエレンの2人の襟首をひよいと持ち上げてア二側にさせた。

つまり、1対3の構図。

「街で暴漢が暴れててさあ大変。でも 兵士達は出回ってて、今丁度手が空いてるのはア二訓練兵、ライナー訓練兵、エレン訓練兵の3名だけ。……さあ、暴漢を無事制して街の平和は守れるかな？ どーだ？ お前ら」

「……つまり、3対1でと言う事でしょうか？」

「おう。エレンとライナーも一緒に良いぞ。……オレを相手にした方が良い訓練になるとは思わんか？ たまにはオレも身体あ動かしてえし。1人でも取れりやもれなく全員に点を付けてやるよ」

2つあった木剣をジャグリングの様に ひよいひよいと頭上で投げ回し、最後は片方を腰に差し、もう片方の柄の部分を手で掴んで切っ先を3人に向けた。

「んー、3対1でも怖くて出来ませーん、つてか？ アニは内地志願かもしれんが、お前らは違うんだろ？ 外をうろついでる巨人。その怖さはこの比じゃないんだぜ。それにア二。内地に行くには点数が絶対に必要だ。お前さんの力なら多分行けるとは思うんだが、それでも稼げるチャンスがある時は、それに掛けてみるもんだぜ。別にペナルティなんざ用意してねえし。たとえオレから木剣取れなくても減点！^{ペナルティ} なんて言わ

ねえよ。一応破格の条件のつもりだしな」

「……………」

アニのプライドに触ったのか、エレンとライナーの2人を両手で左右に広げて陣形を取った。

「木剣を私達の誰かが取ればその時点で勝利。そして高得点も取得。……条件はこれで間違っていないですか？ ……ほかには？」

「ほかには何にもないぞ。その通り」

そして 気合が入ったのはアニだけでない。エレンやライナーも同じだった

「……………教官の強さは判ってるけど3人なら。……それに、ひと泡吹かせたい気持ちもある。……オレらの事をすげえ舐めてるのが判ったからな」

「そりゃそうだ。まさに今の状況だ。……力を持つ相手を前に、逃げる訳にはいかねえだろ。……さっきも言ったがそれが兵士の責任だとオレは思ってるんだからな。それに……外の化け物。巨人たちはフェアプレーなんてしてくれねえんだ」

じりっ、と構える2人。

アニを中心に、左右の死角に回るエレンとライナー。

「丁度良かった。……私の蹴りは全部避けられてたから、しつかりと威力も感じてもらって、評価してもらいたかったんだ」

「おう。アニをしつかりきつちりと感じてやるよ。ただ——当てればだがな？」
アキラのセリフの後、妙な視線を感じたが、一先ず置いとくとする。

そして、他の訓練兵達も今の状況が何となくわかった様で、手を止めて4人の方を見ていた。

「よし。ハゲ教官に見つかつても別に気にすんな。オレが相手してやってるのがわかりや、頭突きも減点もされねえよ。つてな訳で、…さ、来い」

「っ……!!」

「行くぞエレン!!」

「おうっ!!」

3人は一斉に飛びかかって行ったのだった。

18話

「いつもの2〜3倍増しで怖くなってるぞ。その顔」

「……………」

「確かに気持ちは判らんでもないが…………、アキラ教官は人類最強って呼ばれてる人だつて事、忘れてないよな？　そもそも何でそんな人が今教官してるのか判らないが、それでも事実だ。ならおいそれとオレ達の様な訓練生が勝てる様な相手じゃないって事だろ」

今は絶賛反省会の真つ最中…………ではなく、訓練を終えたその日の晩飯時である。

ずつとただ無言で食事を口に運び続けるのはアニ。いつも自分から話したり、誰かと話をしている様な場面をみたりは無い。連帯性に難があり、と言うのが彼女の評価だ。……………だけど　会話である通りいつもの2〜3倍は《近付くなオーラ》が出ており　その表情は般若そのものだった。

そんなアニに話しかけてるのはライナーである。

日中の格闘技の訓練を受けた。訓練と言うよりは 3対1ではあるが実戦。真剣勝負だった。……そして 1人の男に3人は完膚なきまでに負けてしまったのは言うまでも無く 木剣を取る事も出来なかつたから高得点はお預けになってしまった。

「……アンタは あそこまで完敗して悔しく無いんだね。図体デカイクセして、それでも男？」

「それは随分と辛辣なコメントだな。……別に悔しく無い訳ない。だが……今のオレでは勝てない。ただそれだけの事だ。事実を認めて そして次の糧にするだけだ。オレ達は兵士なんだから」

「あつそ。……御立派だよ。アンタは」

アニはそれ以上は何も言わず ただただ黙って食事を続け、ライナーも新たな決意を胸に秘めるのだった。

そして別のテーブル席では。

「エレン。昼の訓練の時の事だけど、ケガは無い？ 大丈夫だった？」

「……ケガなんか無えよ。そう言うの 一発も貰ってないんだからな」

「うん。……確かに そうだったね。傍から見ててよく判らなかつたし」

あの4人の格闘訓練を横で見ていたミカサとアルミン。

過剰なまでにエレンの身を心配するミカサだが、あの訓練時においては何処か安心してみている事が出来た。

その訓練を受けて、その人間性に触れて、アキラと言う教官は ミカサにとっても他の教官とは違ったものがあると感じたから。

「くあー! たつたの1発の入らなかつた!! くっそ……。こんなんじやまるで駄目だ。……明日からはもつともつと頑張つて訓練を続けて、あの技術も盗んでやる」

エレンもアニやライナー同様に、完膚なきまでに敗北をしてしまった事が悔しい様だ。……アニの様な怒の感情はあまり無い様だが相手の事を心底尊敬をしている様子も伺えた。

「技術もそうだし、アキラ教官のあの強靱な肉体も必要なんだつて思うかな。何事もやっぱり身体が資本なんだつて改めて思い知らされたよ。……僕もしつかり頑張らないといけないんだよなあ。体力には全然自信ないから」

「それに、あの人は相手との呼吸の合わせ方も上手く感じた。位置取りの正確さや力の緩急も。力だけじゃなく技術も必要。そうも言つてる様に見えた。……エレンとライナーは空回りし過ぎ。いいように遊ばれたつて印象も拭えない」

「うぐつ。はつきり言ってくれるな！ 判ってんよ！ それくらい！」

普段は一部少々騒がしいのがあるが全体的に言えば比較的物静かに過ごしている訓練兵達だが、今日は随分と賑やかだ。その原因は大体が格闘術の訓練の際の話題ばかりである。

「……くそつ、あいつらが教官に鼻屑目で見られるなんて事になったら」

その話題をあまり面白く無さそうにして聞いていたのは《ジャン・キルシユタイン》と
言う名の訓練兵。

彼は素質は極めて優れていると言えるが、抜き身過ぎる性格が軋轢を生みやすいとも言える。

常日頃から、安全な内地で職務する特権階級である憲兵団に志願する事を堂々と公言している為訓練では上位の成績を目指していた。

昼間の格闘訓練はアニの言う通り点数は低く設定されているから骨休めに使ったのだが……、突然それが覆された。結果的には誰も高得点を貰う事は無かったのだが、それでも一歩リードされてしまった感が拭えないでいた様だ。

だが。

「でも、一番点数が高いのは立体機動術だしなあ。それにアキラ教官のアレを取るなん

て、現状では殆ど不可能だし、まずは目の前の確実に取れそうな得点を狙うしかないかな」

「そ、そりやそうだな！ それしかないぜ！」

ふと、直ぐ隣で話しているのを訊いて、気を取り直すジャン。立体機動術を得意としているジャンにとって、それが一番最適だという事を改めて認識した様だ。

「でもよお、ジャン。立体機動だけど オレ直ぐにガスが無くなっちゃまって 届かない事が多いんだ。……どうすりゃいいかな？」

「そんな時は、一瞬だけ強めに吹かせばいいんだ。そうやって進もうとする慣性を利用した方が消費が少なく済むんだ。……でもまあ 誰にでもできるってわけじゃねえんだろうがな！」

すっかりといつもの調子に戻ったジャン。

そんな姿を ジロリと見続けるのはエレンだ。

アキラ教官との一戦は、確かに自分の力となった。点数には結ばなかったかもしれないが、決して無駄ではない。普段の数倍 濃密な訓練をする事が出来たのだから。

だが それでもア二が言っていた言葉が頭の中を霞め続けるのだ。

——巨人から離れる為に、巨人殺しの技術を高め続けている。

ジャンの姿を見て、最も巨人に有効な立体機動術の技術を高く持った者が 巨人から離れて内地へと行く。そんな光景は茶番にしか見えない。

「うーん。立体機動術って 本当の所は調査兵団にしか必要とされてなかったから、それだと立体機動術の技術は衰退しちゃう。……だから内地に行けるっていう付加価値をつけて技術の衰退を防ぐしかなかった、とされてるんだけど……それが壁の崩壊後の現在も続いているっていう原因は、権限を持つ内地の憲兵団の……」

アルミンはこの現状、自分なりの分析をエレンに話をしているんだけど、まるで聞いてない様子だ。ただ一点。ジャンだけを見続けていた。

完全に調子を取り戻してしまってるジャンは意気揚々と自慢話にも聞こえる様な話を続けていた。

「でも あんまりオレが立体機動上手いからって、言いふらすんじゃないぞ。競争相手が増えちまうからな」

「オイ……ジャン」

もう訊いてられなくなったエレンは ジャンに向かって声をかける。

「なんだエレン？」

「お前 おかしいと思わねえのか？ 巨人から遠ざかりたいがために、巨人殺しの技術

を磨くって仕組みをよ……」

「……まあ そうかもしれんがな。けどそれが現実なんだから甘んじて受けるほかねえな。昼間のあんな例外は除けといたとしてもだ。何より オレのためにもこの愚策は維持されるべきなんだよ」

2人の相性は……頗る悪い。別に今が初めてと言う訳でもない。

今日はただいつもと違う展開だったから 暫くは平穩だったと言えるがいつもいつも顔を合わす度にケンカをしだす様な犬猿の仲なのだ。

だから、こんな言い合いが始まってしまえば……。

「このクズ野郎が!!」

「才能がねえからってひがむんじゃねえよ! テメエは精々不可能な事に挑み続けてろや! 今日の日間みてえによ!」

と、ケンカになってしまう。

本当にいつも飽きずにやっているのだ。己の方向性が全く真逆だからこそ。

「また始まったな……」

「またかよ。あいつら」

「ほんと、よくやるよなあ」

周りも最初のころは止めていたのだが……次第に止める事は無くなって 見世物の

様に眺めていた。

「だから!! その愚策が続いてりや、どうやって巨人に勝つっていうんだよ! できる奴らが内側に引きこもりやがって!」

「だから、巨人に勝つのが不可能だつてんだよ! まだお前1人がアキラ教官に勝つ方が難易度低いってもんだ!」

「なんだと!? あの人は人類最強って言われてる内の1人なんだぞ! そんな人が巨人より弱い訳ないだろうが!」

「お前は、馬鹿か!? 巨人に勝つつーのは 全滅させるって意味だろうが。どう考えたってよ! 一匹や二匹殺せる事じゃねえ。いったいこの世界に何百匹巨人がいるかも判ってねえのに、夢ばつかみてんじゃねえ! ……………つ」

ジャンがこの時——ふと、視線を向けた相手はエレンではなく、ミカサ。

ミカサはこの事態を幾度となく見続けていた。最初はエレンの身を案じて止めていたのだが、最近はただただ呆れるばかりで、ため息を吐くだけに留めていたのだ。

そんな姿を見たジャンは……。

「ふざけんなよ!! てめええ!!」

「ハア?!」

いまにも掴みかかりそうな勢いはエレンにあったのだが、ジャンが先にエレンの胸倉

を掴み上げた。

エレンとジャンの間柄。その軋轢に拍車をかけていると思われる最大の理由が……ミカサにあつたりする事は、この中では誰も知らない事実である。

「この野郎……！ そんなに強く引つ張つたら服が破けちゃうだろうが!!」

「服なんかどうでもいいだろうが!! テメエ……、うらやましい!!」

「はあ……？ 何言つてんだ？ お前、いい加減にしねえと……」

ぐぐぐ、つと拳を上げたエレン。

だが、それを振るう前に見たのは、アニ。そしてライナーの姿だった。

その姿を見てエレンは、自分が今は何者であるのかを、見直す事が出来た。

そして、今のジャンの姿もはつきりと見る事が出来た。

「(そうだ……こいつはただ感情を発散しているだけの、……今までのオレ自身だ。だが、オレはもう違う。……オレは兵士なんだ!)」

感情に任せてただ暴れるのではなく、辛く苦しい訓練を続けて会得する事が出来た格闘術を使う。それも、今の相手は木剣を、……武器を持っていない。

エレンは胸倉を掴み上げ続けるジャンの腕を取り、そのまま引つ張つて首を取った。その勢いと合わせて脚を引っかけ、ジャンの身体を地に叩きつけた。

だん! と言う大きな音が響く。それは身体が反転し背中から叩きつけられた為だ。

ジャンは何が起きたのか一瞬判らなかったが、それでも背中に走る痛みは判った。「いつてえな！ てめえ！ 何しやがった!!」

再び立ち上がってエレンに詰め寄るジャン。エレンはただ冷やかにジャンをただ見ていった。

「今の技はな。お前がちんたらやつてる間に痛い目に遭いながら学んだ格闘術だ。……楽しんで感情任せに生きるのが現実だつて？ お前……それでも兵士かよ」

エレンの言葉に——場の皆の表情が変わった。

いつものエレンではなかったから。ジャンも同じだが、それでもどちらかと言えば感情に任せて暴れてるのはエレンの方だったから。

そんなエレンの言葉だったからこそ、強く響いたのだろう。

だが、響いたのは言葉だけではないのがこの場の全員にとっての不運である。

それを直ぐに思い知る事になる。

「兵士が何だつて……？ つつ!!!」

まず初めに気付いたのはジャンだった。

扉がゆっくりと開いたのだ。……それに、少しずつ開いていく扉の向こうで、目が見え、光っているのを見た気がした。

半分程開いた所で誰が来たのかが判った。

大きな身体、睨んでいる訳ではないのに疎んでしまう様な丸く不気味な目。そして何より……見事なハゲ頭。

「……今しがた、大きな音が聞こえたが……。誰か説明して貰おうか……」

そう、シャーデイス教官である。

普段のアキラの言い方から、忘れてしまいそうになるが、この教官は訓練兵にとって悪夢の鬼教官なのだ。怒らせてしまえば大変であり、更に言えばかなり成績に響いてしまう。その辺りは甘めであるアキラとは対極の存在なのだ。

暴れていた張本人であったエレンとジャンは、まさに光の速さで元の席に戻って静かに俯いていた。死刑宣告を受ける間際にまで追い詰められた囚人の様な表情をしてる2人。

そんな中で、ゆっくりと手を上げるのはミカサ。

「サシヤが放屁した音です」

「ええっ!？」

まさかの言葉。

サシヤにとって、飯抜きにされかけた悪夢の教官に売られてしまった。

「……また 貴様か」

「!!!」

恐怖で表情が引き攣ってしまつてるサシヤ。悪夢が呼び起こされる気分だった。数秒間睨まれた後。

「……少しは慎みを覚えろ」

シャーデイス教官は、今回だけは小言だけで済ましてくれた。それはそれで奇跡だと言えるかもしれない。まるで死神の様なオーラを纏っていたシャーデイスはそのまま部屋を一周すると、部屋から出て行つた。

「ちよ……!! み、ミカサ……っつ!!」

「……ああするしか、助かる術が無かつた。サシヤだからあの程度で済んだ」

盛大にそれでいて静かに抗議するサシヤ。ミカサはただただ冷静にそう答えるだけだった。サシヤ以外だつたらもつと長くなつていた、と言ひ聞かせてるのだが、納得できそうにないサシヤ。

「危なかつたなジャン。つまんねえ喧嘩で、せつかくの憲兵団を逃す所だつた」

「……しかし、困つたな。このままじゃ収まりがつかねえぞ」

「だろなあ。そうだろうそうだろう。ああまで言われちゃあな。目の前の点数よりも自分の男見せねえと流石に磨るか」

「当たり前………は？」

「え？」

本当にいつの間にもだろわか。

エレンとジャンの席は木のテーブル挟んだ向かい合わせ。その間に……いつの間にか誰かが来ていたのだ。シャーデイス教官が登場して、お通夜状態と言える程にまで静寂になっていて、誰もが動けなかつた時に、いつの間にか……。

「ほんと、お前らはいつも騒がしいなあ？　今までの訓練兵達も似たトコあるけど、また別格だ。お前ら」

「あ、アキラきよつっ！」

「なんで、いつの間につっ!!」

そつと手を伸ばして、2人の口を塞ぐ。

そう、この場にやってきていたのはアキラ。シャーデイスと一緒にここに着たのか……？　或いは隠れてたのか？　いつ来たのかは判らないが判るのは今間違いないと言う事。

「まーた騒いでハゲがやってきたら嫌だろ？　夜は結構機嫌が悪くなりやすいそうなんだ。後　ミカサ。今のはファインプレイだけ。サシャの名を出すのは効果的だよ」

「はい。そう思っていましたから」

「ちよつ　ふ、2人で私を……っ!!」

サシャは抗議しようと大きな声を出しかけたのだが……、アキラが口許に人差し指を

当て静かにする様に促す。普段 あまりいう事を訊かないサシャではあるが、アキラの言う事は結構訊くので 直ぐに口を閉じた。

「解決方法ならあるじゃねえか。とっておきのヤツが。取っ組み合いを認めてる時間があるんだし、そこで決着^{けり}を付けたらどうだ？ まー、今のジャンだったらボロ負けも良いだろうけど」

「んなつ！ 誰が負けるっていうんだ！」

「お前さん。真面目に受けてなかったろ？ 立体機動でエレンが勝てねえ理屈と同じだ」

ぐりつ とエレンの頭を撫でた。

「コイツは強くなってる。お前さんがひと泡吹かせんのは結構ムズイだろうなあ」

「ぬぐぐ……」

「オレはお前の調子が整うまでまっても良いぜ。ジャン」

「く、くそ……」

今の自分では格闘術の面においては圧倒的に力不足だという認識はジャンにもあった様だ。

だから 今は耐えるしかなかった。何よりこの施設内でこれ以上の騒ぎを起こしたくないから。

「ジャンも今日みたいなヤツ、やるか？ 点ならやるぜ」

「……アンタにや 勝てる気がしねえよ。それに 目の前の野郎に勝てねえ様なままじゃ気が収まらねえ！」

「そつか。まあ 頑張れ！」

ひよいつと立ち上がるアキラ。

全員の方を見ると。

「多分、明日の訓練 普段より2〜3割増しのモンになると思うから、今日は早めに寝とく事を薦めるぞー」

まさかの宣言だった。

皆、『ええ!! なぜ?!?』の様な表情をしている。それを感じ取った様で。

「今回の騒ぎ。なんもお咎めなしにハゲがするとは思えんよ。訓練内容に関してはオレは口出しせんし。今回ののは所謂連帯責任ってヤツだ。怒るんなら、2人に宜しく」

殆ど全員の視線がエレンとジャンの2人に突き刺さり、針の筵になってしまってる。

大声を上げたがっている様だが、またシャーデイス教官がやってきてしまえば、本末転倒なので、視線だけの抗議をエレンとジャンに向けるに留まっていた。

それを尻目に、アキラはと言うとまた移動。

「もー、機嫌直しなつて。アニ。眉間に皺が出来るかもだぜ？ 何度もいらんでたら」

「……別に、睨んでないですが。それにこれが普通だと何度も言ってますよ」

「オレには そうは、見えんのですが……。ま 良いか。いつでも 再戦の受付はしてるからな？」 後 訓練も頑張れよ」

ゆつくりと立ち上がって戻ろうとしたアキラだったが、何かを思い出した様にアニに向き直した。

「ああそうだったな。お前のキック。めっちゃ痛かったぜ。大したもんだ」

そう言うのと アニの頭をぼんつと軽く叩いた。

そしてその後。

「それじゃあな皆。おやすみ〜」

アキラは 部屋から出て行った。

殆ど躲した上に3対1でも負けた相手にそう言われても嫌味にしか聞こえてこない。教官だから、と言えば聞こえはいいかもしれないが、普段のアキラは教官っぽくないから 中々そう思うのが難しいのだ。

「……………」

だが、ムカつくけれど、……それでも褒められる事自体は、そこまで悪い気はしなかったアニだった。

19話

□□ 850 □□

「1000年の平和の代償は惨劇によって支払われた。突然の《超大型巨人》の出現。想定外の事態に対応できるはずも無かった。……いや、それだけではない。我々の技術は、戦術は巨人に勝るものだと、何処か驕りがあつたのかもしれない。それも調査兵団の壁外調査の日々の生存率の向上。そしてその成果が実り始めた時期でもあつた。……それを人類全体の向上だと勘違いをしまつていたのだ。精鋭達の血の滲む鍛錬を、命を懸けたの全てを。……その結果が先端の壁。《ウォール・マリア》を放棄。人類の活動領域は現在我々のいる《ウォール・ローゼ》まで後退した」

これは所謂卒業式、訓練兵の解散式である。

厳しい訓練を終えた訓練生達全員がこの場を集つていた。

「今この瞬間にもあの《超大型巨人》が壁を破壊しに来たとしても不思議ではない。その

時こそ諸君らはその職務として《生産者》に代わり、自らの命を捧げて巨人と言う脅威に立ち向かつてゆくのだ！ 心臓を捧げよ！」

『ハッ!!』

全員が敬礼をした。

あの時の様に——間違つた敬礼をする者も何かを食べながら敬礼する様な者もない。い。

全員が心臓に拳を当てて、完璧な敬礼だった。

「あいつらもこれで卒業——か。何だか長かつた様な短かつた様な……、何処か感慨深い」

「そうだね。アキラは あの子達と一緒にいた時間が今までに比べて最も長かつたから、そう思えたのかもしれないよ？ 巢立つてく子たちを見て……やっぱり心配？ 親の苦勞子知らずって言うけど、多分 あの子達……特にエレンって子は絶対無茶ばかりするわよ？ ……そう考えたら アキラと一緒にだね」

「親の苦勞つて、オレあまだ20代なんだぜ？ でもまあ そう言われたら何だか嬉しい気もするな！ ……人の歳の事ほとんど信じねえ奴らばつかつたし、たまにはなあ。うんうん」

「あ……、アキラまだ気にしてたんだ？ だいじよーぶだよ。とつても格好良いよ？」

「……………うっせー」

訓練生たちの卒業を見守っているのは、アキラ。そして その付き添いでペトラがいる。

もう、訓練生たちの一同の姿を見る機会はそうは無いだろうと思えるから。だから今目に焼き付けている。

あの訓練は 長く。そしてきついものだった筈だ。

だが脱落者は誰一人いなかった。失格となり生産系に回された者も誰もいなかった。

そして 成績優秀な上位100人の名が発表される。

主席 ミカサ・アツカーマン

2番 ライナー・ブラウン

3番 ベルトルト・フーバー

4番 アニ・レオンハート

5番 エレン・イエーガー

6番 ジャン・キルシュタイン

まさに妥当な所だと言えるだろう。

ミカサの秀でた身体能力、難解な科目の全てを完璧に実現する実現力を持っている。ライナーもミカサに及ばないまでもその精神力とそれを支える屈強な体格を持ち、何より難しいとされている1つである信頼関係。競争心が高い訓練において、仲間達から強い信頼を得ているのだ。

続いてベルトルトもあらゆる技術をそつなく熟す。潜在能力の高さも十分に見える。ただやや消極的な場面もあつて、自分に強い芯を持ってない性格だからか、その辺りがライナー、そしてミカサに劣る面でもある。

「まー、アニもそうだな。最後まで睨むの止めてくれなかつたよなあー」

「……そんなに、残念だったの？ アニと仲良くなれなかつた事」

「んん？ そりゃ 結構付き合ってたって短く無いしな、いつまでも ああも邪見されたら流石になあ……つて事だ。ところで、ペトラは何で頬をつねるんだ？」

「……別にー。そういうアキラは何で抓られながら、普通に話せてるの？」

「ん これ腹話術の応用だな。ペトラやイルゼに何度もやられて、自然と身についた」

「……………もう」

色々鋭い面も持ち合わせている癖に、自分事の好意の機微を読む事に關しては、全くと言っていい程してくれない。そこに強い不満があるからこそ、ペトラだけでなく

イルゼも何度でも抓ったり、捻ったりしてるのである。

そんな事はとりあえず置いて………続いて発表される。

7番 マルコ・ボット

8番 コニー・スプリングー

9番 サシャ・ブラウス

10番 クリスタ・レンズ

この中で………とある名前を次々に訊いてしまった為、思わずアキラは嘖いてしまった。………誰の名前を訊いて嘖いてしまったのかは、言うまでも無い。

「………サシャとコニーが上位10以内? トップ10?? マジで??!」

「マジだから呼ばれたんじゃない? でも良かったね。色々と見てあげてたし。評価されてるよ!」

「………いやいや、意外性が結構強いよ正直。確かに身体能力は引けを取らないし、立体機動においても優秀だと思う………けど、何だかなあ……。個性が強すぎるせいかな? ハゲに賄賂でも送ったか?」

「そんな事出来る子達だと思おう?」

「思わない。……コニーはそこまで頭回らんと思おうし、サシヤに至っては飯盗みの常習犯だ。盗んでも送つたりはしないな」

はあくため息を吐きながらそう呟くアキラ。色々と目立つ2人だったから 何かと目をかけてた訓練生たちだった事はペトラも知っていた。感慨深さもあるのでは?

と思つたが本当に意外そうな顔をして 軽く苦笑いをしていた。

「クリスタか。あの10人の中に限つたら一番絡みが少なかった子だな、確か……」。

あの子は成績も優秀だったし、色々と世話をやいてた。本当に優しい良い子だとも思つてるけど 色々と無理してる気もするんだよなあ」

「そう言えば、サシヤにパンを分けてあげてたつて話だったよね? アキラがあの子を見捨てた後」

「人聞きの悪い事を言うなつて。ありやサシヤが悪い。何度も注意しても聞かんかったし、盗んだのまたハゲ教官にバレたんだ。庇うのはお門違い。アイツが鳥頭だったせいだつて事で反省をして貰つてたんだよ」

「あはは。……それで アキラがパンをあげに行く前に先を越されたつてわけかな?

そのまま放置するつもりなんて、無かつたでしょ?」

「……ま、そんな感じだな」

面白い具合に餌付けしていたアキラ、流石に今回はお灸をすえる、と言う事で 甘やかさない方向を考えていた様だが……それでも、最後まで放っておくつもりは最初から無かった様子。

罰を受けてたサシヤにまたパンを——と言う所でクリスタがサシヤに自身の夜食であろうパンを分け与えていたのだ。分け与えた……と言うより パンを見るや否や匂いで気付くや否や、巨人顔負けの捕食をサシヤが見せた。あ、ツというまにパンを掻つ攫つてしまっていて、思わず笑つてしまっていた。

そこで見たのはクリスタだけではなかったが、それ以上は特に何もするつもりはなく（サシヤも大丈夫そうだから）アキラは立ち去っていた。

そして10人の発表が終わった後は3つの選択肢、即ち 《駐屯兵団》《調査兵団》《憲兵団》のいずれかに所属する事になる説明を受けて、それでこの卒業式の全てが終了した。

「おつ、漸くだな。かたつくるしいのも終わった様だ」

「もう。大事な式なんだよ？ アキラも一応は教官なんだからさ。その辺りをしっかりと示しがつかないかもだよ？」

「ははは。悪い悪い。やっぱ苦手なんだよなあ。こういうの」

ペトラのごもつともな意見だが、今更アキラがしっかりとばつちりと振る舞ったつ

て、今更感が拭えないのも事実だろう。

「それで、アキラは皆の所に顔出すの？　もう暫く会えなくなるんだし」

「まあな。一言『頑張れよ！』くらいは言ってから戻るつもりだ。ペトラはもう戻らんだろ？　もうちよいで出発だし」

「うん。他にも色々と準備とかが残ってるからね。……アキラも集合時間に遅れないでよ？」

「りよーかいりよーかい。リヴァイの小うるさい説教なんか聞きたくないから、その辺は氣いつけるよ。んじゃ　後で」

ペトラと別れた後、アキラは訓練兵達と会えばちよくちよく労いの言葉を贈った。

『胡散臭いなあ』、と随分な酷評を受けていたが、皆が悪くない表情をしていたと言う事と　今日で卒業と言う事もあって　とりあえずアキラは良しとした。

と言う訳で、激励と労いを含めた訪問。

卒業したものの、今日はまだ訓練兵だ。その訓練兵としての最後の晩餐会に顔を出すべく訪問してみると……。

やっぱり変わっていない光景が広がっていた。

『うおおお！ ジャンとエレンだ！ また始まったぞ！』
『やれやれ〜〜！』

卒業してもやっぱりいつも通り。

エレンとジャンを中心に一際賑やかだった。賑やかな——殴り合いだ。

以前 エレンに圧倒されていたジャンだったが、今では決して引けの取らない程体術が向上している。だが エレンとて負けてる訳ではない。人一倍目的意識が強いエレンは愚直なまでに訓練に訓練を重ねてきたのだから。

『オラア！ どうしたエレン!!! 人間に手間取ってるようじゃ、巨人の相手なんざ務まんねえぞ！』

『あたりめーだ!!』

ジャンの攻撃を次第に読み始めたエレンは、拳を掻い潜り、カウンターでがら空きのボディに一撃を入れた。ドボツ！ と良い具合に入った拳は、観戦している周囲をも表情をゆがませる程のものだ。

『おえつ……、吐いちまいそうだ……』

『ありや、ゲロる。オレだったら……』

『おーいその辺にしとけよ！ ジャン。忘れたのか？ エレンの対人格闘成績は 今期

のトップなんだぜ？」

まだ格闘術においては、ジャンを圧倒しているエレンだ。ジャンの攻撃は当たらずエレンの攻撃は届き……勝負は着くかと思われたのだが、これ以上騒ぎたてる様な事をすれば、またまた面倒な教官たちが目を付けてくるのは判り切っている。

何度目か判らない恒例だったから。

「つたく、お前ら」

と言う訳で、2人が間合いを取って、全力右ストレートを溜めて放つ直前を狙って割り込む。バチィッ!! と言う乾いた音が周囲に響いた。

2人の拳を間で受け止めた様だ。

「卒業した後くらい、互いにお疲れさん。くらい言えないのか？　ほんつと　いつもいつも元気が有り余ってんな」

「つっ!!」

「あ、アキ……っ!」

間に誰が入ったのか判った所で、身体の力が抜けているのを感じられた。だが、いつもに増して頭に血が上ってるのも判る。

「とりあえず、ミカサ。エレン抱えてちよつと離れてろ。頭冷やした方が良いみたいだからな。……ハゲが来たら面倒だろ？」

「はい。了解です」

ミカサは、多分言われるまでもなかったのだろう。

言われたから行動をしたのではなく、言われる前から行動をしていたから、即座にエレンを抱え上げていたのだ。

「ああ、そうだったそうだった。ミカサに次いで、だな」

「ミカサには絶対に勝てねえって。ありや獣だし」

「……獣と言うより、猛獣」

エレン事になれば、勢いと強さが更に比例して増していく様なミカサの強さ。エレンに抗う術も無くそのまま運ばれて行ってしまっていた。

抱えられる姿は何処か滑稽に見えるから周囲はただただ笑うだけだ。勿論、エレンにとっては笑える事ではない。恥辱を味わっているも同然だろう。……つまり、それが今回の罰とも言える。

「アキラ教官！ これは、出し物だ!! 止めなくて良いんだよ!」

「いやいや。ただ癩癩起こしたガキの喧嘩にしが見えなかったつて。お前らはどっちもどっちだと思うけど、ハゲが来たらその理屈通用しねえぞ？ オレにも通じなかったんだし確実だ」

そこでもう2人が前に出てきた。

「そうだよ。教官が来たら大変だったから、アキラさんには感謝すべきだって。それに出し物なら堪能したよ」

「人間同士で争うの、もう止めようよ……」

苦笑いをしながらやってきたのは、フランツ。そして涙目で止めに入ってるのはハナ。2人はよく一緒にいるから特別な仲なのだ。……と他人事だったらアキラもそれくらいは判る様子。

「お前らも相変わらず仲が良いな。でもフランツ。オレだって教官だぜ？ 実質来てるって事じゃん」

アキラの言葉にやや2人は顔を赤らめるがあまり意識しないようにふるまう。

「あ、あははは、そうですね、アキラさんなら大丈夫でしょ？ ほら、教官って呼ばれる事事態あまり好んでなかったから」

「……そう言われりやそうだな。教官って今だに呼ぶのって、ジャンとかエレン。オレと結構絡んだ連中だけだしな」

「自分の事過小評価しすぎだよ！ アキラ教官は！ 圧倒的な上の存在感だから仕様がねえだろ！ それよか……！」

ジャンはキツ！ とエレンの方をにらみつけた。

エレンはミカサに抱えられたまま、外へと連れていかれる様だ。

「良かったなあ！ エレン！ またミカサに守られたぞ！ そうやって見た通りおんぶに抱っこだ。ミカサも調査兵团に巻き込むつもりだろうが！」

「まあ、ミカサの事がジャン」

「っ。るっせーよ！」

「ミカサは……無理だ。エレンと離れるのは」

「なんでそんな事言えるんだよ！」

アキラとて教官だ。訓練兵達の経歴書もそれなりに見た事がある。

エレンとミカサの関係も細かくは把握してないが、それなりには知っている。

「あの2人は家族だ。……もう、失いたくないんだろうよ」

「……ちっ」

ジャンはそれを訊くと……身体から力を完全に抜いた。

それを確認した後アキラは。

「遅れちまったけど、お前ら。卒業おめでとうな。まだまだ本当の意味ではこれからがスタートラインだ。大変だろうけど、まあ、頑張れよ」

目的であつた労いの言葉をかけた。

この104期の訓練生達とこれからは教官として接する事はもうない。感慨深さがある者もそれなりにいるのか、少し表情を落とす者も多数いた。

「身近に悪い例も良い例もいたんだ。お前らは結構ついてる。良い境遇だったんだぜ？この先もなんとかなるだろうさ」

にやりと笑って言い聞かせるアキラを見て、沸々と笑顔が戻ってくる。

そして、ジャンをも含めたその場の全員がアキラに向かって敬礼をしていた。

それを見たアキラは 苦笑いをし、手をひらひらと振った。

「ははっ、オレは心臓なんぞ、要らんからな。本当の意味で 大切な時にとつとけよ。お前らの心臓は」

公に心臓を捧げるという意味を持つ敬礼。それを否定しているようにいつも見えるアキラはやっぱり異端だと言えるだろう。だけど、その自由奔放さに惹かれる者も決して少なくなかった。

だから、アキラが出ていくまで誰も敬礼を直す事はなかったのだった。

そして、その外では エレン、ミカサ、アルミンの3人が話をしていた。

「よ。お前らもほんと仲が良いな」

「アキラ教官。……今まで本当にお世話になりました」

「いいよいいよ。しんみりするの嫌いだし。笑ってろって」

敬礼ではなく、深く頭を下げるアルミン。そしてその後ろのエレンとミカサも同じだった。

「それで、お前らはアレか。調査兵団に入るのか？ エレンは言うまでも無いけど

レンが行くならミカサは間違いないし、……アルミンも、だろ？」

「！」

アルミンは、アキラの言葉を訊いて驚いている表情をみせていた。自分の希望をまだこの2人にしか言っていないのに、アキラは判っていたから。

「アキラさんも言ってるよ。アルミンのヤツは座学がずば抜けてトツプなんだ。長所を捨てて非効率な選択をするなんて勇敢じゃねえ、無謀だつて」

エレンの言葉も最もだ。

技術部に入れば、或いは作戦指揮、兵法を学んで更にその才覚を伸ばせば 更なる向上と貢献が出来るだろう。アルミンはそれだけの才覚を持っていると 教官側でも十分認識されているから。

「いや 自分の希望を他人に言われたからって、おいそれと変える程 軟な決意じゃねえんだろ？ アルミンは」

「……はい」

「だよな？ エレン、知ってるか？ アルミンはお前に負けない程 目を輝かせてる時があつたんだぜ？ 壁くわの中の外の話をする時なんか特にな」

エレンの夢。それは巨人を一匹残らず駆逐する事もそうだが、それ以上にその先を見据えている。……この狭い世界から飛び出して、探検する事だった。

そして 教官もしているが、本当は調査兵团に所属しているアキラ。壁の外の話をすると エレンだけじゃなくアルミンも目を輝かせていた。

「一応、お前らをしっかりと見とけつつーのも仕事に含まれてるからな。よーく、判ったんだ」

「は、はい……」

全部お見通しだった事に少々気恥ずかしそうにするアルミン。そして その強い気持ちを理解できたエレン。

だからか、それ以上は反対の言葉を出す事は無かった。

「まあ、これからが大変だろうけど、お前ら。頑張れよ？」

「「はー」」

腰を下ろしていたアキラはゆっくりと立ち上がり、3人に背を向けた。

「オレらは、先に行つてる。外の世界を見たいんなら……死ぬなよ。お前ら」

その言葉をどう受け止めたのだろう。エレンとミカサ、アルミンはどう感じ取つたの
だろうか。手を上げてこの場を離れていつてる為、表情を見てないからはつきりとは判
らない。

だけど、悪い顔はしていない、と言う事だけは理解出来た。

『オレ達も、きつとそこへ……!!』

エレンの力強い言葉が聞こえたから。

「さあて…… いよいよ外か。……久しぶりの大規模遠征だ」

エレン達に見送られて、アキラは調査兵団の宿舎へと向かう。

今までの小規模なものではない。ルートの再確認と物資の移動と言ったものではなく、それ以上の先へと向かう。今まで以上の広範囲の索敵と探索。そして 放置されている物資の回収。出来る事ならば ウォール・マリアの壁にまで到達する事。

それは何より——死が常に付きまとう作戦だった。

安全をただ考慮しているだけでは先へと進む事が出来ないと言う事は、誰もが理解できている。時には危険を冒さなければならぬという事も。

「……誰も死ななけりやいい。死なせたくない。……つてのはオレの驕り。オレのエゴだ。自分が妙な力を持つてるからって、調子に乗つてるもんだ」

そして、時には過剰な守りも、他の兵士達への過剰な気遣いも、命を懸けて戦つてる兵士達の尊厳を傷つける結果になってしまう事も理解できている。

「これは戦争なんだ。誰も死なないなんて無い。そんならいは判つてる。……だが」

アキラは力強く拳を握りこんだ。

「……今までの仲間達の分も、これからの分も、全部込めて 巨人をぶつ飛ばしてやる」

力が過剰に入った拳は　ごきつ、ごきつ　と音を鳴らせていたのだった。

20話

巨人の恐怖——。

それは、今から1000年以上前から続いていた。

人類は突如現れた天敵・巨人の出現により、絶滅の危機を迎えた。人間を見つけ喰らい続け——腹が膨れて喰えなくなれば中のモノを吐き出す。そこには巨人の生きる為の意思などない。……喰う事に意味などはない。

巨人は喰わずとも死なないからだ。……ただ、殺す為に人間を喰らい続けた。

時に笑みを浮かべながら、時に苦痛に表情を歪めながら、……時に嬉々とさせながら。それでも何とか生き残った人類は3重の巨大な《壁》を築き、そこで1000年の平和を実現させていた。

だが今から5年前——その平和も終わりを告げた。

超大型の巨人の出現により開閉扉は完全に破壊され、1000年もの間隔絶してきた巨人が解き放たれた。そしてその巨人により再び人類は蹂躪されたのだ。

人類は一番外側の壁を放棄、2割の人口と3分の1の領土を失い、活動領域は2重の壁にまで後退した。

だが——それにより人類は目を覚ます事になる。それは 外の世界へ挑戦をし続けてきた極一部の人間達しか持ち得てなかったが、痛い代償を支払う事で人類の多くが覚醒したのだ。

以前より、成果を上げ続けてきた《調査兵団》。

元々巨人を恐れず、壁外の進出を試み続けていた事もあって、希望が更に生まれ続けていたのだ。それにより以前よりも遥かに多くの人材と資金が集中した。

調査兵団が、領土を奪い返そうと外へと向かう。

その度に人々の希望と期待に満ちた歓声が街を揺らす。

『来たぞ!! 調査兵団の主力部隊だ!』

『おおつ、エルヴィン団長! 巨人どもを蹴散らしてください!』

『お願いします!!』

『リヴァイ兵長っ!! アキラさんっ!! 頼みますっっ!』

街の住人達の歓声、そして期待に満ち、集まってくる視線。

此処だけじゃない。間違いなく人類の期待がその背に、調査兵団に集っているという事がよく判る。アキラは皆の想いを痛い程感じた。歓声の中には間違いなく巨人に對しての怒り。……そして 大切な人を失った悲しみが同居している事が判るから。

「責任重大だよな。調査兵団っていうのは。皆を見たと改めてそう感じるよ」

「……今更だよアキラ。此処から先は、私達の肩にかかっているって言うても大袈裟じゃないから。……ここから先は 私達が。私達がやるんだから」

「……判ってる。それくらいならオレでも判ってるつもりだ。……さて、人間の強さつてヤツを見せてやろうじゃねえか。……巨人共あいつらに」

アキラの眩きにペトラが答え、アキラも頷いた。

そこにはいつもの陽気なアキラの姿はそこには無く、何時も以上に集中しているのが隣にいたペトラにはよく判った。

理由は明白。今回はいつもとは違いより危険が伴う大規模な壁外調査だからだろう。そして その雰囲気周囲に伝わっているのか、歓声がより大きく街中に響いていた。

エルヴィン、リヴァイ、そしてアキラが並びその周囲の声援が大きくなっていく。

アキラは 今最も注目されている調査兵団の1人である。

リヴァイと並び人類最強と称されているからと言う理由もあるが、それなりに長く務めた訓練兵の教官も然り、そのアキラの人柄も何気に伝わって絶大なる人気も兼ね備えていたのだ。

アキラ自身は調査兵団に所属してまだ他のメンバーと比べたら日も浅い。だが それでも期待が向けられるのは、情報操作をしたのはエルヴィン団長を初め、ハンジ分隊長が周囲を煽った為 と言う理由があり そして リヴァイ自身も否定する事なく認めている事も拍車をかけた(命令だったから渋々ではあるが……)。

だが、勿論それだけではない。アキラ自身が壁外調査で成果を残し続けているという事にもあった。一般的には、壁の外へ出て生きて帰ってくる事が一人前の証であると言える。壁外調査に出発し帰ってこなかった者など数多くいる。

そんな世界で、殆ど実績がなく、ただ団長や兵長にいきなり紹介されただけの新人が何度も何度も死地より生還を果たしているのだから、最早信じるしかないと言えるだろう。

希望を託すに相応しい男だという事も。

そして その力は公には伏せられている。……アキラの本当の力を知るのは調査兵団の主力部隊と中央の人間達の一部に過ぎなかったりもするが、それはまた別の話。

「さあ！ 開門するぞ！ この先は巨人の領域だ。5年前に奪われた街を奪還するぞ！！」

エルヴィン団長の激と共に、ウォール・ローゼの扉が開かれた。

人類と巨人を分かっ扉。その先はただの人間にとっては死の世界。……巨人が蔓延る世界。そんな世界に調査兵団達は飛び出していった。

□□ ウォール・マリアの内地 □□

馬で駆け抜け、時折現れる巨人は蹴散らし、進み続ける。

だが、ここで忘れてはならないのが、生存率は向上したもののまだ、被害は出続けているという事。如何に戦術や兵法が優れていたとしても、人間と巨人との間には 体躯の差同様に、力の差も存在している。

市街地での巨人との戦い。

その死角の多さ故に、不意打ちを受けてしまうという事も多く、一度でも攻撃を受けてしまえば致命傷になってしまうのだ。

その大きな口で噛みつかれてしまえば……ただの人間には抗う術がない。

「……今に、今に見てろよ……」

10 m級の巨人に身体半分噛みつかれてしまい、身動きが取れなくなってしまう男がいた。

徐々に顎の力が加わっていき、肉が裂かれ続けている。歯が食い込んでいく度に吐血する量が増していくが、彼は決して悲鳴を上げたりはしなかった。

それどころか、身体半分噛みつかれた状態で、懸命に反撃をしていたのだ。残った片腕で武器を手に、眼前の巨人の眼を抉った。効果は見られないが、力のある限り抉り続けた。

「お、前らなんか……今に……、人類が、滅ぼす……。最後に、最後に生き残るのは……人類だ……」

まるで苦しんでいるのを楽しむかの様に、絶妙な力加減で口を閉じていく巨人。

そんな悪魔に決して臆する事なく睨み、手の力を決して抜かなかった。

「お前ら……なんか……、あのひとたちが、……あきらが、りう。あい、へいちよう……が……、かなら、ず……」

意識が薄れだしたその時だった。

風を切る音と共に、巨人の顔面に着地した者がいたのだ。その男は素早く口許へと移動し。

「おい……。その汚え口を外しやがれ！」

両手を巨人の口の中へと入れ強引に口を開かせた。

強引に開かせる事で、巨人の口から逃れる事が出来た。だが、身体に力はもう入らない様で力無く落ちていってしまう。このままでは地面に激突してしまうが、そうはさせない。

「ペトラあ!! 頼む!!」

「任せて!」

立体機動装置を使って、激突寸前の彼をペトラが下で受け止め、更なるダメージを防ぐ事は出来た。それは確認できて、安堵する事が出来たが湧き上がる怒りは収まらない。

「ちっ……!」

ぎり、ぎり、と歯軋りをするのはアキラ。

また一人——巨人に仲間の命が奪われかけた。その事実がそのまま腕の力に宿り、そのまま、ぶちぶちっ、と言う鈍い音と共に下顎を完全に引き千切った。

「くたばれ! クソ野郎が!」

下あごを無造作に下へと放り投げると同時に背後に回り腰に差していた剣を引き抜き力任せに振り切った。

刀で斬る様な すぱっ！ と言う音ではなく どごんっ！ と言う轟音が響き うなじ部分が削げた……と言うより、威力が強すぎて うなじから上がそのまま消し飛んだ。

……使った刀身と共に。

「馬鹿が。加減を考えてやれって何度も言ってるだろ」

その隣の屋根に飛び乗ってきたのはリヴァイ。

「右に3体。左にも3体。……正面から1体か」

素早く現状を把握。

1体の巨人の奇襲が合図だったのか、湧き出るかの様に 建物を破壊しながら巨人たちが接近をしてくているのだ。

「兵長！ アキラ！ 増援も到着しました」

「ペトラ！ お前はそのまま兵士を介抱しろ！ 残りの全員は正面の巨人をやれ！」

ペトラに指示を出すと同時に、アンカーでアキラの元へと移動。

「お前は左、オレは右を片付けるぞ！」

「ああ。……たった1体殺つたくらいじゃ収まりそうにねえよ！」

アキラは怒りのままに、アンカーを伸ばし 素早く移動。そして アキラとリヴァイは途中で二手に分かれた。

「気持ちわりい顔しやがって……!」

接近と同時に、拳を握りしめた。

大口を空けて待ち構えている巨人の前歯に思い切り拳を打ち付ける。

がきいんっ! と言う音が響き、まるで、金属で金属を叩くかの様な音が、響いたのと殆ど同時に巨人の巨体は吹き飛び、後続に続いてきた2体もドミノ倒しの様に倒れていった。

そして手早くうなじ部分を完全に破壊。3体をこの世から消滅させた。

こびり付いた巨人の血をじつと眺めるアキラ。ずっと動き、戦い続けていた疲労感よりも、ただ不快感だけが身体を襲っていた。

「……貴様らに同じ様な色の血が通ってるってだけで不快だ」

ただ人間を殺すだけしか存在意義が判らない巨人。人間やほかの動物と同じく赤い血が流れている事にもなぜか不快感が生まれていた。

この手には仲間達の血もついていて。何度も何度も……助けられた時も助けられなかった時もあつた。時間が許す限りではあるが必死にその手を握って最後の瞬間も付き添っていた事もあつた。

そんな仲間達の命を受け継いで戦いを続けているんだ。だからだろうか仲間達が流

した血が穢された気がしてならなかった。

だから、手早く血を払い、拭うと移動を開始。途中でリヴァイとも合流した。リヴァイの方も問題なく始末し終えた様だ。

「終わったか？」

「ああ。……この辺にいたのはあれだけだったみたいだ」

「そうか。……戻るぞ」

「……了解」

アキラは多分、頭の中ではもう判っていたんだろう。

流れていた血の量。そして、あの時巨人の口の中に手を入れた時に判った嘔み具合。

何度も見てきたから。……命の終わりを。

「ペトラ。そいつはどうだ!？」

リヴァイが先にペトラの元へと駆けつけた。

必死に応急措置をして、止血をしようとしているが……包帯を巻いても巻いても、上から抑えつけても、あふれ出てくる血を止める事は出来なかった様だ。ペトラの両手が赤黒くに染まっていたから。

「血が……止まりません」

ペトラは涙を流しながらも まだ措置を続ける。

アキラも、ぎりつ と齒軋りをしつつも傍へと駆けつけた。

「へい、ちよう……。あき、ら……。そこに、いま……。すか……。？」

もう目が見えていないのだろう。そして声も もうあまり出せないのだろう。苦しみだけが伝わってくる。だが、それでも懸命に声を出し続ける彼に近づくりヴァイとアキラ。

「ああ。いるぞ。此処にいる」

リヴァイが、あげられていた彼の右手を取った。

目が見えないのであれば、触覚と聴覚だけでも伝えようとしたのだ。そして、反対側の左手にアキラも添えた。

「オレだつてここにいるぞ。……これが終わったたら。街を取り返せたら、盛大に飲むつて、約束しただろ……。？ しつかりしろ。もうちよつとなんだ」

気丈に振る舞う様にしながらも……。熱いものがこみ上げてくる。こればかりは何度もあつても慣れるものではなかった。

そして、男は軽く——笑みを見せていた。声は届いた様だ。

「は、はは。……わるい、な。オレのぶん……。きやんせる しといてくれ……」

「……バカ野郎。頑張れよ……っ」

「あきら……へいちよう……」

もう、声が小さくなってきていた。本当の最後が近いのだろう。

「……お、おれは じんるいの、やくに…… たてた……でしょうか……」

「……」

「……」

死ぬ間際に残そうとしたのは、自分が戦ってきた意味。そして その意義についての確認だった。

「……おれ、は。このまま…… なんの、やくにも……たてずに…… し「馬鹿やろう!!」っ……」

握る手の力を上げて言葉を遮る。最後まで言わせなかった。

「役に立ってない訳ないだろ！ 十分過ぎる……十分すぎる程活躍したじゃねえか！」

「ああ。コイツの、……アキラの言う通りだ。……今までも、そしてこれからも。お前の残した意思がオレに、……オレ達に《力》を与える」

リヴァイは、両手で右手をぎゅつと握り絞めた。

アキラも左手を同じ様に。

「約束しよう!! 必ず巨人を全滅させる!! お前の残した意思と共に」

「あいつらにお前の分まで、思い知らせてやる!! これだけは絶対に、違えねえ!」
そう伝えたとはほぼ同時に、僅かに残っていた握り返していた手の力が抜けたのが判つた。

そしてそれは倒れてからずっと介抱をし続けていたペトラにはより判つた様だ。

「兵長……、アキラ……。彼は……。もう……」

開いていた眼が閉じていた。……本当にただ眠っているかの様に見えた。

「……コイツは、最後まで聞いていたか?」

「……………」

ぐつと堪え続けるアキラと、ペトラに確認をするリヴァイ。

そしてペトラは大きく頷いた。

「……間違いありません。きつと、きつと聞いていた筈です。だって…… 本当に穏やかな顔のまま……」

最後を迎える時。穏やかな顔のまま 逝ける者などこの世界には一体何人いるだろうか。巨人に襲われて死ぬ場合は誰もが絶望のまま、その絶望が顔にも表れていた事が多かった。だけど、彼は本当に……ただ眠っているだけの様な穏やかな表情だった。だからペトラが言っている事が間違いない、と強く思えたのだ。

「……なら良い。……次だ。行くぞ」

「……ああ。判つてる。……切り替える」

慣れるものではない。だが、引きづり続けられれば別の危険を生む可能性が高すぎる。

だからこそ無理にでも切り替える術を、アキラはこの短い時間で学んだのだ。……少しでも抗える様に。

そんな時だ。先へと行っていたエルヴィンが馬と多数の兵士達を引き連れて戻ってきたのだ。

「おい、リヴァイ！ アキラ！ 退却だ！」

「退却だと……!?!」

「……っ」

まだ やり遂げていない事がある。

だから《撤退》の2文字。その命令だけは受け入れがたかった。それはリヴァイも同じ様だ。

「まだ限界まで進んでねえぞ？ オレの部下は犬死か？ 理由はあるよな？ エルヴィン」

「ああ。オレもまだ足りねえよ。コイツの供養も……まだ済んでねえ」

2人の意思は判るが、それでもエルヴィンは首を横に振った。

そして、重大な事を伝える。

「……巨人がこの街を素通りし、一斉に北上し始めた」

「！！」

エルヴィンが言っている言葉。それが一体何を意味するのか、理解するのに時間はかからなかった。

そう……それは――。

「これは5年前と同じ現象だ。……街の壁が破壊されたのかもしれない」

悪夢の再来である。

21話

エルヴィン団長の話を訊き。

悪夢と言つていい過去の記憶が、あの光景が鮮明に蘇ってきた。

殺しても殺しても減らない巨人。まるで無限にいるのか？　と思いたくなる程の巨人の群。

目の前で喰われていく人達。

目の前で……死んでいく仲間達。

アキラは震える身体と腕を懸命に抑えていた。

エルヴィンが言っていた話は悪夢の再来。

巨人がウォール・マリアだけでなく、ウォール・ローゼの壁をも破壊した可能性がある、と言う推測である。エルヴィンの推測はいつもの確で完全に外れた事などは殆どなかった。だから最大級にエルヴィンの事は信用できる。

……それでも　今回ばかりは間違いであつてほしいと願ひ続けていた。

眼前に浮かんでいる光景を否定し続けて。

だがそれでも 周囲の巨人達の行動を見てしまえばもう認めるしかなかった。ただ人間を視界に捉えたら襲い続けていた巨人達がある一点を指している。

奇行種を除けば大体の行動が同じだった。人間を見つけ 襲ってきいていた筈なのに、極端に近づいていないとはいえ、まるで人間が見えていない、興味が無いとでも言うのだろうか、巨人たちはその大きな身体を揺らしながら、移動をし続けていた。

そう——見える巨人の殆どが壁の方角を指していたんだ。

そして調査兵団は、広範囲の探索を続けてウォール・マリアの壁に後僅かで迫る地点にまで到達出来ていた。その成果が今回は仇となつてしまった。ウォール・マリアの壁の方が遥かに近い為 ローザまでは距離がありすぎる。ここから一番近いトロスト区にまで戻るにしても時間が掛かってしまう。

掛かりすぎてしまうのだ。

「……………ぐっ」

悪夢の光景と共に、何度も何度も過るのはつい先日街で別れた皆の事だった。自分達に期待を向けている街の住人、付き合いが長いと言つていい訓練兵達。

トロスト区には沢山いるから。

それは アキラにとって——。

「アキラ、お願い……」

その隣で並走しているのはペトラ。

彼女はアキラが震え続ける身体を懸命に抑えているのは痛いほど判っていた。直ぐ傍にいるから、と言う理由もあるしそれに自分自身も同じ気持ちだから。

でも、間違いなく判るのはこの距離であれば如何にアキラの身体能力で急いで走ったとしても、馬より早いかもしれないが 確実に時間は掛かる。これまでの訓練（と言う名の虐待かも）での確認でアキラの活動時間と言うものは決まっている事が判明してきた、それが切れてしまうと運動能力が圧倒的に落ちてしまう。

言い方は悪いのか それもある意味は良いのかは判らない。

アキラがただの人間 普通の人間に戻ってしまうのだ。

それが判った時は、アキラ自身も人間なんだと改めて強く思った。化け物を見るかのように見ていた壁の中の重鎮。政府達にそれを思いつきり訴えてやりたいとも思えていた。

でも今はそれは喜ばしい事ではない。そんな状態で巨人に囲まれたら？ 巨人の群の中で力尽きてしまったら？

まず間違いなく生き残る事なんて無理だ。

そんな心配を胸に ペトラはアキラの方を見ていた。

そして その反対側ではリヴアイがアキラに声をかけていた。

「おい。ちつとは頭あ冷やせ」

「……ああ、判ってる。これでも判ってるつもりだ」

もう それなりには付き合っても長くなっている2人。リヴアイにも今のアキラの精神状態がどうなっているのか程度は手に取る様に判る。それはアキラ自身もバレている事などとづくに理解していた。自分の事を判ってくれる事は本来であれば嬉しいかもしれないが、今は考えられなかった。

そしてリヴアイは、つぶけた。

「今 お前が闇雲に突っ走らない所をみると、随分と成長したと思えるな。……だが壁が見えて その状況次第で途端に暴走して突っ込んだら結局は同じ事だ。……今回的一件 指示に従えアキラ」

「オレは いつも従ってきたつもりだったか?」

アキラはリヴアイの方を向かずにそう答えた。

確かに命令違反等は今の所アキラはしていない。色々な訓練・実験をしていた時に盛大に拒否した事は何度かあったけれど、実戦ともなれば話は別だった。

そのアキラの返答にリヴアイは頷き、更につづけた。

「ああ判ってる。……つまり オレが言いたいの、たとえば 『目の前で誰かが負傷し倒

れたとしても、目の前で巨人が人間を喰らっていたとしても、矢鱈に突っ込むな』だ。命令する前にすつ飛んで行きや命令無視も何もあつたもんじゃねえからな」

「つ……………」

リヴァイの言葉を訊いて、思わず息が詰まるアキラ。その反応を見たリヴァイは続けた。

「お前が突っ込めば、確かに目の前の命は救えるのも間違いない。確か前に『…………目の前の命を救えなくて、大勢の命なんか救えない』だったか。お前が言っていた臭えセリフ」
「…………うるせえよ」

思い返してみれば、アキラは 何度も仲間達の窮地を救ってる。その異常とも呼べる力で巨人から仲間達を救ってきている。確かに助けられなかった命もあるが、何人も救ってきている。己の事も顧みず。イルゼやペトラに心配されても、時には自分自身を労わらない事で叱責もされている。その時はしっかりと話を訊いて反省もするんだけれど、それでも明らかに自分よりも仲間の命を優先していた。

それは 自己犠牲精神と口に出して言えば簡単かもしれない。

リヴァイも 巨人から我が身を犠牲にし、護った姿は何度も見た事があつたから。だがそれでも アキラはそれだけではないと感じた。

言わば——そう、『自分自身が死ぬ事を恐れてない』様にも見えたのだ。

いや、それよりも――。

「間違っちゃいねえよ。何一つお前は間違つてねえ。……だが 大局を見据える為にも、熱くなるだけじゃ駄目なんだよ。明らかに冷静じゃない時が多いからな。お前は」
リヴァイの言葉に完全に黙ってしまったアキラ。

それを見て軽いため息を吐くリヴァイ。

「誰も助けるな、アイツは見捨てろ っつて 指示を出す訳じゃねえよ。オレが言いたいのは全指揮を取つてるエルヴィンの判断も信じる。お前は一人じゃない。たまには周りを信じる」

それ以上はリヴァイは何も言わず 無言でただ只管馬を走らせ続ける。

そしてアキラは リヴァイの言葉を訊き わずかに前に進んでいるリヴァイの背を見た。

「信じてない？ オレがこいつらの事を？」

それこそがアキラには信じられなかった。

確かに アキラはいつだつて無茶をしてきたと思つているし、傲慢だと言われるかもしれないが自分の力があつたから助けられた、と自画自賛をした事だつてある。

だが、それは決して仲間達を信じていない事とはアキラの中では結び付かなかつた。

寧ろ信じているからこそ、後処理をしつかりしてくれるからこそ、構う事なく突っ切った事だつてあるから。

「(……そんな事、有る訳ねえよ。オレはお前らがいるから……此処で生きているんだ)」
アキラはそう強く思い、いつもの敬礼のつもりではなく自然と自身の心臓に拳を当てていたのだった。

「……………」

リヴァイはただ前を見続けていた。

時折思うのは、考えるのは、ガラにもなく後ろにいる男 アキラの事だった。

これまで調査兵団に所属してきて、今まで数えきれない程犠牲を目の当たりにしてきた。

それでも自分自身を信じ、信頼に足る仲間達を信じ、間違いのないと断言できる選択をしてきた。間違いなくいける。問題ない、とまで言っていたのにも関わらず、その本心ではその結果は誰にも判らないという事は全員が同じだった。

——結果は誰にも判らなかつた。判るのなら、あれ程まで犠牲を出しはしなかつたらう。

だが、今は違う。

後ろの男と一緒に動く事で はつきりと結果が判つてしまっている。

云わば 『蛆蟲を踏みつぶせば、蟲はどうなってしまうのか？ その結果は？』 と言う疑問とその答えが 実際にやる前から判るか？ と言う問いに対して 『はつきりと判る』と言える。

それと同じで明白だった。

「——いつたい何時からだ。……どうなるのか、その先の結果がはつきりと判る様になつたのは」

リヴァイは馬を走らせ続けながら考え続ける。

だが、その疑問に対する答えは自分の中では既にあつた。

「……ああ。そうだな。この馬鹿と出会つてからか」

リヴァイは口にする事で それを改めて深く認識する様にした。

それと同時に、エルヴィンの『言っていた言葉』も もう一度深く心に刻み付けるのだった。

22話

馬を走らせ続けた。

幾つかの補給拠点としていた町村を利用し可能な限り速く最短で。

その間にも判るがやはり巨人の絶対数が少なかった。広範囲索敵陣形を取らなくとも走破出来るのではないかと。思ってしまう程に。

その理由も——壁を目視して、街に到着してはつきりと判明する事になった。

それは凡そ普通の人間の手では出来ない様な巨大な破壊。壁の門は無残にも破壊され、周囲にはその瓦礫が四散していたのだ。周囲に大小群がる巨人もいた。

巨人が壁の門を破壊し街の中へと入っているのだ。エルヴィンが危惧した悪夢は現実だった。

だが、壁に近づけば近づく程違和感があり、真に驚くべき所はそこではなかった。

「……なありヴァイ。アレ、誰がやったんだと思う？」

「……………」

アキラの問いに、珍しく口を噤むリヴァイ。普段だったら、判らないまでも即座に何

か返答があるのがリヴァイだったのだが、流石にこれは想定範囲外だった様だ。

「こつちからじゃはつきりとは判らないけど……、これは多分岩だ。この破壊の穴を覆いつくすだけの巨大岩がこの破壊の跡を塞いでる。これは明らかに異常だよ。巨人がこんな事をやる訳がないし、利があるのは人類側だけだ」

岩に近づいてそう言うのはハンジだ。

壁の破壊を岩で塞ぐのは確かに有効かもしれない。だが現実問題として、そんな事が出来る訳が無かった。ゆうに8 mは超える巨大な岩。重さは一体どれくらいになるのだろうか。想像すら出来ない。

「アキラでも、これは無理だよな？ 色々試したけど、瞬間的な爆発力はあっても、岩を持ち上げて運ぶみたいなのは、持続する様な事は」

「ああ。……コレをぶっ壊せ！ ならまだしも、ホイホイと小石みてえに運んだりは出来ない。んな事が出来るんなら、マリアの壁が破られた時にとくにやってる」

ハンジの言葉に応えるアキラ。

ハンジ自身もアキラの身体能力は色んな実験を経て、全て解明とまではいかずともそれなりに出来る範囲は判ってきているから、本当は判ってる筈だ。

「エルヴィン。どう思う？」

岩から離れた場所でエルヴィンに聞くリヴァイ。

まず間違いないのは想定外だという事。そして人類が予想出来る範囲はたかが知れているという事実が明らかになった事。

そして、何より――。

「だが、これで巨人の侵入は防げた。どうやったかは確かにまだ判らないが……、それでも判明すれば人類にとって大きな力になる。即刻壁内に」

エルヴィンが、立体機動装置を使つて壁の中へと指示を出そうとしたその時だ。

『エルヴィン団長!! 煙弾です! それも……黄色の!』

1人の兵士が叫んだ。

それと同時に、ほぼ全員が空を見上げる

空の上の一直線に昇る煙の筋。それが意味するのは一体何なのか、直ぐに理解した。

「作戦成功の証……か」

黄色の煙弾は作戦成功の証だ。

調査兵団ではその煙を見る機会は近年では大分多くなつたものの、壁内でそれを見た事は当然ながらない。壁内襲撃はあの5年前の悪夢以来ないから、という理由も勿論あるが、それでも極一部を除いたとしても巨人の力は人間にとって絶対的な差がある。

内容にも当然ながらよるが 作戦が成功した、と言う事例が無いと言える。

「何かあったにしろ この大岩が絶対関係してるな。これ」

「……だろうな。寧ろ関係してない訳がねえって思える」

アキラはそう呟きつつ、立体機動装置を使って壁を上る。

その後ろからペトラ達リヴァイ班が続く。

「人間業じゃないよ。いったい壁内で何が……」

「それを調べる為にも急がないとだろ」

「ああ。作戦成功の煙弾は良いニュースだ。だが、犠牲を伴ってないとは思えない」

「……巨人が侵入してるんだ。当然だろ」

速く状況を把握させておく事が第一だという事。

それ以上は何も言わず、ただただ全員急いで登っていくのだった。

そして、壁の中に入ってきて目に入るのは 崩壊している街並み、無数の巨人。

何よりも注目したのが、眼下の巨人の死体？ の上にいる者達。

「あれは……アルミンとエレン、それにミカサ 後リコ。……!!」

注目して誰なのか判明したアキラは、その後は何も言う事なく壁の上から飛び出した。

知らない者から見れば人身自殺に見えるだろう衝撃光景だが、そんな事で驚いたり動揺したりする者はこの場にはいない。これはもう日常茶飯事だと言えるから。

その代わり、怒ったりする者がいたり、少々呆れたりと部類が違ってきたりする。

だが、今回ばかりは誰も何も文句は言わなかった。

何故なら眼下には巨人が無数に存在していたから。

今まさに襲い掛かろうとしていたから。

「ちっ……」

やや遅れて続くのがリヴァイ。

下で巨人と戦うには条件があまり良いとは言えない。壁があつて立体機動装置を使う事は可能だが、一方向のみでは巨人の弱点であるうなじが狙いにくい。

更に言えば、エレンは何があつたのか倒れていて、アルミンが抱き抱えている状態だった。そんな状態で無数の巨人を相手にできる訳が無い。幾ら班を任されている長、訓練兵時代のトップ10で優秀な兵士だとしてもだ。

それは、アキラやリヴァイが上から飛び降りる数秒前の事。

詳しい説明はまた何れ、と言う事にするが 兎も角 エレンは巨人になっていたのだ。

その力を利用して 大岩で壁の穴を塞ぐという大胆な作戦を終えた後 力尽きる様に動かなくなった。動かなくなった巨人の身体からエレンが露出し、それを引っ張り出そうとしているのがアルミン。

「あ、熱ッ!! い、一体何なんだ、これは!!」

エレンの巨人から蒸気のようなものが噴き出し続けており、それは信じられない程高温の様で、傍にいただけで皮膚が焼けそうだった。

「アルミン! エレンは?」

そんな時に駆けつけてきたのがミカサとリコ班長だった。そして 周囲には巨人が近づきつつある。まさに地獄であり修羅場だ。それでも ミカサはエレンを見捨てる様な選択を取る事はしなかった。

「信じられないくらい高熱だ! それに、身体の一部が一体化しかけてるんだ! 今は直ぐにでも壁を登らないといけないのに……!! 引っ張っても全然取れない!」

エレンの両足はまだ巨人の中でアルミンの力では引き抜く事が出来なかった。背後には巨人の群。そして 壁は目の前。

エレンを助けて壁を登らなければ、全員の命は無い。

だから、リコは腰の剣を引き抜いた。

「ちっ…… 斬るしかないだろ！」

「ま、待っててください！」

ミカサの制止を振り切り、両足を切断。

アルミンは ずっとエレンを引つ張っていたから、突然切り離された為に勢いよく後方へとひっくり返り、エレンの巨人の残骸から落ちてしまった。

そこに狙いを付けたのが、6 m級の巨人4体。

ニヤニヤと気味の悪い笑みを浮かべ、大口を広げて近づいてくる。

「あ……………」

エレンを抱え 身動きが取れない状態。

アルミンは再び恐怖を感じた。エレンが巨人になり 作戦を成功させた高揚感はず座に吹き飛んでしまう。巨人の生気を感じられない様な瞳を間近でまた見てしまったから。

「エレン！ アルミン!!」

ミカサが直ぐに飛び出していったが、距離が巨人の方が近い。

それでも 諦めない。失う訳にはいかない。ミカサにとって何よりも大切な2人だから。

弾かれた様に飛び出したミカサ。その両手の刃を巨人に突き立て2人を助ける為に。結果——2人は助かった。

だが、それはミカサの刃が巨人を仕留めたからではない。

突如飛来した何かが、巨人を吹き飛ばしたのだ。

それは　あまりの突然の光景で衝撃音が遅れて周囲に響いたと感じた。音よりも早く動き、巨人を吹き飛ばしたのだ。

「一体何が……、み、ミカサ？　あ……」

アルミンも当然判ってなかった。ミカサが仕留めたのか？　と思えたのだが　ミカサは遅れて隣までやってきたから。

「あれは……」

立ち登る蒸気の霧に視界を遮られつつあったが、はつきりと見る事が出来た。

その背中を……その自由の象徴である翼を象ったエンブレムを纏った背中。調査兵団の証。

「ふう……間に合った。大丈夫か？　お前ら」

その者は腕を振りゆつくりとした動作で振り返った。

見覚えのある顔。もう、ずっと昔にすら感じてしまうが　誰なのか　はつきりと判った。

「あ、き……ら……きよう、かん」

エレンも眼も掠れてしまい見えにくく、更に全く動かない身体だったのだが はつきりとその姿を見た。

そう、この場に降りてきたのはアキラだった。

「一先ずお前ら命はある様だ。生きていてくれて嬉しいよ。……でもエレン、お前が無事なのかどうかは、見ただけじゃ正直微妙だな。一体何がどうなってんだ、って聞きてえが それよりもまず」

吹き飛ばした巨人が他の巨人を道連れに倒れていたのだが、巨人はそれだけでは死なないのは事実。

「こいつらを片付けるのが先だ。不真面目だった教官のオレとはいえ 一応は教え子だ。それを随分と可愛がってくれた礼も兼ねてなあ……」

ぎりっ……、と怒りを剥き出しにする姿。

その姿にアルミンは既視感を覚えた。

そう——まるで エレンが初めて巨人となり 無数の巨人たち相手に暴れまわった時と同じなのだ。人類の怒りを体現したかの様な。何故だかは判らない。普通の人間であるのにも関わらず、その姿は人間のものとはかけ離れて、強大な何か^にアルミンは見えてしまった。

だが、そうだとっても立体機動装置は付けていても、手に武器も持たずそのまま近くにまで歩いていく姿を見て、正気を疑ってしまふ。まさに自殺行為だから。

「あ、あきら……ききょうつ……！」

懸命に声を出そうとしているのはエレン。

以前アキラとの話が脳裏に浮かび上がる。

『巨人相手に格闘術で攻めるのは……まあ バカくらいだろうし』

『い、いえ…… それじゃ自殺志願者じゃないですか！ そうなったら止めないと』

『……ははっ、そうとも言うかもな』

あの日の会話が何故か頭に浮かんだ。

武器も無く、立体機動装置も使わず 生身のままで巨人に近づくのはまさに自殺行為だ。自分自身の様に 巨人となって対等に闘うのならまだしも。

それでも歩みを止めず、巨人も立ち上がりアキラとの距離を縮める。

大口を開き、まるで頭突きでもするのか、と思える様な体勢で頭からアキラに飛びかかっていった。

「アキラ教官!!!」

言葉を失っていたが、漸く ミカサも声を出す事が出来た。

エレンの傍を離れる訳にもいかなかったが、それでもミカサにとつてのアキラは訓練生時代にはエレンやアルミン、いや 104期生全員が色々とお世話になった人物でもあるから。

——そんな人が死ぬ姿は見たくない。もう 誰かが死ぬ所は見たくない。

戦わなければならぬ。弱肉強食な残酷な世界だという事は判つていても 心の何処かではそう叫んでしまう。

ミカサは エレンの腕を抱いたまま、空いた方の手をアキラに向けて伸ばした。

不思議な事に ミカサは伸ばしたその手は光に包まれる感覚があつた。アキラに向けて伸ばした手。まるでアキラが閃光になった様に見えた。

そして 瞬きをする間もなく目の前にまで迫つてきた巨人が吹き飛ばされた。

「…………汚え面、近づけてくんな」

何が起きたのか、理解する事が出来ない。

見たままを説明するとすれば、アキラ教官が自分の何倍もある巨人を吹き飛ばした、と言う事だろうか。説明は出来る。でも頭では理解する事が出来なかつた。

「つたく。熱くなるな、と言つたつもりだつたんだがな。あの鳥頭」

そんな時、新たにもう1人がこの場に降り立った。同じく自由の翼を纏った男。その男の傍では、巨人が数体倒れていた。この短い間に何体も仕留めた、と言う事なのだろうか。

「おい ガキ共。これは一体どういう状況だ？」

その問いに答えられる者はいなかった。

ため息を1つした所で漸く1人が前に出てきた。

「リヴァイ兵長！」

「……駐屯兵団のリコ班長か。ガキ共は放心気味みてえだからお前から説明しろ」
悠長に説明を求めている様にも見えた為、アルミンが慌ててリヴァイに言う。

「あの、アキラ教官は……?!」

「ん? 喋れたのか。……あの馬鹿なら心配するな。するだけ無駄だ」

またまた ため息を1つした所で。

『オラアアアアア!!!』

巨大な雄叫びが聞こえてきた。

はっ! として振り返ってみると、巨人の群の中で暴れているアキラがいた。6 m級

の巨人を殴り飛ばしては、うなじを脚で踏み抜きとどめをさし、更に群がってくる2、3 m級の巨人は相手にもならない。瞬く間に蹴散らしていった。

本当に有り得ない光景だ。アルミン、そしてミカサ、リコもそうだ。

エレンの時にも衝撃が走ったが今回はそれ以上だった。巨人ではなく、人の身のままで巨人を蹴散らしているからだ。更に驚くべきことに、巨人化したエレンが街中で力尽きるまでに蹴散らし続けた巨人の数よりも、アキラが仕留め続けている方が遥かに多く、早かった。

「あの馬鹿の事は気にするな」

リヴァイがもう一度さういう。

呆れている様子だが、それでも信頼をしている、と言う事もその表情から読めた。

それと同時に、立体機動装置のアンカー射出音が重なり合って聞こえてきた。

どうやら、調査兵団達がそして駐屯兵団工兵部が集まってきた様だ。

それを理解したのと同時に、エレンは先ほどまでは懸命に身体を動かそうとしていたのだが、その力の全てが抜けていく気がした。

聴て、瞼も重くなってきた。

もう目を開けていられなくなり、完全に閉じた。閉じたのと同時に意識も手放したの

だ
っ
た。
。

23話

今回の襲撃で、一体どれだけの人間が犠牲になってしまっただろう。

どれだけの数の人間が……巨人の餌食になってしまったのだろう。

目の前には無造作に積み上げられた肉の塊が山積みになっている。それは人だった者の成れの果てだった。

巨人の体内には消化器官が存在しない。故にその身体の容量以上に人間を喰らえば吐き出すしかない。だから、このような光景になってしまうのだ。

その死体の山を前に唾然とする者も当然ながら多かった。そして、かたまらず分散した死体も多かった。その殆どが身体を喰い千切られていた。

それでも嘆く時間はまだ無い。死体の腐敗が続く事で伝染病が蔓延してしまう二次災害が起こるからだ。

それでも、頭ではそれを判つていても仲間だった者の亡骸を見てしまえば、身体は止

まっつてしまう。

「ありえねえ……。なんでだ？ マルコ。お前に限って……。なんで……？」

驚愕、そして啞然。

その次は、ただ認めたくなかった。

目の前の現実を。

だからこそ、その口からはもう否定の言葉しか出てこなかった。

それはジャンであり、認めず否定をしたかったのは、身体の左半身が消失し、物言わぬ身体になってしまっているマルコに向けられていた。

「だ、だれか……。コイツの最期を見たヤツは……う？」

マルコの死を認めたくない。

誰よりも優秀で最善を尽くし、常に全体を見ている彼は指揮官向きだと皆から言われていた。個としての実力は確かに後塵を拝していたが、それでも……。巨人なんかに殺される訳が無い、とジャンの中ではそう叫んでいた。

「訓練兵。彼の名は？ 知っていたら答えなさい」

そこに可能な限り、殉職者の数を把握し、その名簿を作成しているミレイ班長がジャ

ンに催促をしていた。

実は、ジャンに何度か訊いているのだが、彼の耳には届いていなかったから催促をしたのだ。

当然ながら、ジャンの視線は鋭くなる。仲間の死を何も感じない様な女を好意的に見れる訳も、従順に従おうとするとも思えないからだ。ただただ、やり場のない虚無感が彼の中にあり、自然と視線が鋭く、相手を射貫く様に見返した。

だが、その視線も軽く流すと。

「……判るか？ 訓練兵。岩で穴を塞いでからもう2日が経っている。それなのにまだ死体の回収が済んでいない。このままでは伝染病が蔓延する恐れが……」

そこまで言った所で、ジャンに説明を淡々としているミレイの肩を掴む者がいた。

「働きなら、オレがコイツの倍はする」

「なにを……っ！ あ、アキラさん」

淡々と仕事を熟していた。仲間達の無数の無残な死体を見ても眉一つ動かさなかったミレイだったが、肩を掴んできた者がアキラだと知ると、流石に冷淡に対応をする様な事は出来なかつた様だ。

それでも、今何をしなければならぬのかは判っている。何を優先すべきかも。

だから、それを口にしようとしていたが、アキラが先に言った。彼もよく知っている

から。

「……土ゼロにしてやる、だからオレがやるその分を。……少しだけで良い。時間をやってくれ。……彼の名はマルコ。104期の訓練兵団。19班長。マルコ・ボット。……短かったが、オレの教え子だ」

その表情は、まさに無だった。仲間の死を嘆いているのだろうか事は判るが、それでも表情からは決して読めない。読む事が出来ないと言える程で、まるで能面の様な表情だった。

「了解、しました」

「すまない。此処はオレが受け持つ。リコ達の方も手伝ってやってくれ。……1人、倒れたそうだ」

「……判りました」

軽く頭を下げると、ミレイは下がっていった。

ジャンは、アキラが来た事も判っていないのだろう。ただただ、マルコの亡骸を見続けていた。

「なんでだ……？ お前が……いったい何があったんだ？ お前……立体機動装置は、どうしたんだ……？ なんて、お前 何もつけてないんだ……？ なんて、なんで……」
壊れた絡繰人形の様に、何度も何度もつぶやき続けていた。

暫くして、ゆつくりとジャンの肩に手を置いたアキラ。

「……ジャン。マルコを運んでやろう。マルコは、最後まで戦った。巨人に抗い続けたんだ。否定し続けたら、マルコの戦いまでお前は否定する事になる」

「……アキラ、教官。教官も……、知ってるだろ？ コイツは、優秀なんだ……。誰よりも優秀なんだ……。こんなトコで死ぬ様なヤツじゃ……。――」

否定をし続けているが、それを止めたのはアキラの次の言葉だった。

「人は死ぬ。誰も死なないなんて言うのは幻想。……そうだな。まさにガキの妄想だ」
「っ……………」

アキラを睨みつけるジャン。そして その視線を受け流すと、アキラはマルコを見続けながら続けた。

「……オレだって同じだった。ほんのつい最近までだ。ついさつきまで言葉を交わしてたやつが、死ぬなんて思えなかった。判るか？ 本当についさつきまで普通に駄弁つて、飲んで喰って、バカ騒ぎもしてたヤツだっていたんだぜ？ ……殺したって死なない様な減らず口を言う様なヤツだっていたよ。………そいつらは、もう誰が誰なのか判らない様になっちゃっていたよ」

アキラが向けるのは、少し開けた広場に積みあがった死体の山。中には完全に白骨化しており、服も完全に無くなっており、腕章等の確認も出来ない。

つまり、誰の死体なのか判らないのだ。正確に吊つてやる事も出きない。後で団員数を確認して、知る事になったのだ。

アキラは視線をマルコに戻した後、視線を拳に向けた。

「オレは、初めての仲間達の死を前にして、冷静になれなかった。冷静なんて言葉。……そんなもん頭ん中に一切なかった。……誰もかれも助けたいって思った。出来る全力を出し続けた。最善の策だつて誰もが思った作戦だつてやった。……それでも、結果は判らなかつた」

そう言うと、マルコを抱き起こした。その血がアキラの身体に、そして手に付着する。「悟つたよ。……オレが出来るのは、道半ばで倒れたこいつらの事を、その1人1人を絶対忘れない。そいつらの血を手に、連中と戦^やる。……連中に思い知らせてやるだけだ。受けた痛みと、無念を握りしめて」

受け取る様に血を握りしめるアキラ。

強く握り絞めた為か、血が流れ落ちていた。

——それは マルコの血じゃない。

ジャンにもそれは理解出来た。

この地獄を、アキラは何度も経験をしているんだと言う事をジャンは改めて知った。そして仲間達の死に疑問を何度も感じ、葛藤し続けてきたんだと言う事も。

ジャンにもそれくらいは考える事が出来る余裕が出来ていた。そして 今一番何をしなければならぬのか、と言う事も。

「……教官。オレにやらせてくれ」

「……………」

ジャンの申し出を受けて、アキラはマルコの亡骸をジャンに任せた。

常に自分の事を優先させている様子が多々見られたジャンだった。だが、マルコには特別な想いがあるのだろうかと言う事を察する事が出来た。マルコは、人の素の部分を読み取って、その人にとって必要な事を言ってくれる男だった。

それでも、マルコは決して死にたかつた訳じゃない筈だ。

志半ばで命を巨人に奪われてしまった。

それはマルコに限った話ではない。大勢の死者を出した今回の一件。

それを考えても、如何に技術が進歩しても 如何に巨人を熟知していたとしても、人は決して強いとは言えない。大多数が絶対的な恐怖には抗えるものではなく、死の前に

は逃げ出したり、恐怖を前に泣き喚いたりもするだろう。

だがそれでも立ち上がり、抗い続ける者達だっている。

自分自身の全てを奪われたその日から、抑えきれない憎悪を滾らせ続けた男がいた。圧倒的な力を目の当たりにしても、それでも家族を傍で守る為に共に戦おうとし続ける女がいた。

そんな2人に負けない様に、おいて行かれない様に 絶望に囚われず 夢を抱き続け、前を進み続ける男がいた。

「……………」

アキラは、104期の訓練兵達の事を思い返した。

教官として働いていた時の事を。

決して皆の事を臆目目で見ている訳じゃなく公平に徹していた。それでも、今まで自分が見てきた中でも極めて優秀だったと言える。そして 何よりも手間がかかる訓練兵達だったと記憶していた。

手間が一手間も二手間もかかり大変だった。大変だったが それでもアツトホームな雰囲気もあった。

決してアキラは世話好きだった訳じゃない。でも 皆の事目を離せなかった時期が沢山あった。いつも喧嘩したり、物を盗んだり悪ガキが多かった。

だからこそ……、大変だったその数だけ沢山の思い出があった。

「……………何処かで、オレはまだ思ってたんだな。こいつらが死ぬ訳ないって。……………何があってもこいつらは、って」

5年前の50m超級の巨人や鎧の強度を持つ巨人襲撃事件があったが、それでもそこから這い上がり、外での生存率の向上してきていた。以前の初めて仲間達の死を経験して、乗り越えられたと思えていた。

だが、思い知った。

仲間達の死は——慣れる事など出来ない。

仲間達の亡骸を前にして、殆ど皆が気を失った様な表情をしていた。

「ごめんなさい……………」

頭部を食いちぎられ、もう誰なのかが判らない状態になっている者の前で立ち尽くし、謝っている。

「謝っても仕方ないぞ。…………早く、弔ってやるんだ」

気持ちは判るが、それでも気丈に振る舞い 作業を続ける者もいた。

悪い夢なら覚めてくれ、と願う者達も。

廳で、更に一日掛けて 街の至る所にいた亡骸の全てを集めた。

「あんなに……あんなに頑張ったのに……、あんなにやったのに……、全部、全部……」

辛かった。死ぬ思いもした。

それ程までにきつい訓練の数々。兵站行進、馬術、格闘術、兵法講義、技巧術。そして、巨人に対抗しうる事が出来る立体機動。

「……全部、無駄……だったのか……？」

仲間達だったものを火葬し弔う。

炎は延々と燃え続け、その亡骸を灰にしていた。

この世に地獄があるとすれば、きっと此処がそうなんだろう。

そう思わせるには十分すぎる光景だった。

命の灯。

仲間達の亡骸を包んだ炎は、もう皆を天へと送り終えたとも言わんばかりに消えた。

作業の全てが終わった後も、誰も動く事が出来ない。戻る気力さえも奪われてしまったかの様だった。

「……………お前達の命。絶対に忘れない。……無駄には、しない」

アキラは、残された教え子達の遺灰を両手に取った。

まだ、命の最後の残り香とでも言わんばかりに、遺灰は非常に熱い。それでも構う事無く取り、その遺灰を自身の顔面に塗した。

「……………オレは、前に進む。オレは、この残酷な世界で戦い続けると誓ったんだから。今、立ち止まる訳にはいかない」

まだ動けない皆に言い聞かせた訳じゃない。

教官らしく、絶望をしている元訓練兵達を奮い立たせ、立ち上がらせようとするのが、正しい姿かもしれないが、今のアキラが出来るのはこれが精いっぱいだった。

自分の行動を、前を歩き続ける背中を示す事しか。

その後、どう行動をするかは、任せるしか出来なかつた。

塗した遺灰は、アキラの顔を白く彩った。

その表情は……『鬼』と形容するのが一番正しいかもしれない。

鬼の表情のままに、この場をゆっくりと離れる。

俯かせていた者達は、其々がその背中を見えなくなる最後まで追い続けるのだった。

アキラは、調査兵団の集合場所へと帰還した。その入り口、扉にもたれ掛かっているリヴァイを見つけて、軽く頭を下げる。

「……悪かったなりヴァイ。……別れは、済ませてきた」

「ああ。まだする事は多くある。……悪いが、まだ休ませれない」
「休むかよ。残った巨人を、……殺す」

一瞬で戦場と化したトロスト区には、まだ無数の巨人達が蔓延っている。

壁面近くに群がる巨人は、壁上固定砲を使用すれば一掃できるが、離れている巨人はそうはいかない。

トロスト区内の巨人の殲滅は必須だからこそ。

「班で動く事は忘れるな。……良いな？」

「判ってる」

アキラの表情はもう見なくても判る。リヴァイは、ゆっくりと持たれていた背を離し、アキラの横に立つ。

「オレ達は死なねえよ。……こんな世話のかけるガキを置いて死ぬるか」

「……リヴァイの口からそんなセリフが聴けるとは思ってたなかつた」

軽く笑うアキラを見て、リヴァイは背を向けた。

「……あまり言わせるな。オレにも、あいつらにも」

「……………」

視線の先にいるのは、リヴァイ班の皆は勿論、調査兵団の各分隊長達。そしてその中央にエルヴィン団長。

アキラにゆっくりと近づいてくるのはペトラとイルゼ。

「皆でやる。忘れないで」

「単独は駄目だよ。……怒っているのは私達も一緒だから」

そう言う2人にアキラはゆっくりと頷き、肩に手を当てた。

もう、何度言ってきたか判らない。何度思い続けたか判らない。

これからも出来るかどうか、判らない。それでも アキラは言い続ける。

「死なねえ ……ぜってえ…… 死なせねえ……」

24話

周囲を支配するのは闇。

ただの闇ではなかった。闇の中から霧の様な靄も出てきていたのだ。広がりに続き、おろ、それは一体どこまで続いているのか全く見当もつかなかった。

そして、此処には自分以外は何もなく誰もいない。この場に残るのは圧倒的な孤独感だけだった。歩いてても、歩いてても 何も変わらない。ただ 無限の闇だけが眼前に広がっていた。

それでも歩みを止める訳にはいかず、ただ只管に前を向いて歩き続けた。
その先に、何かがあると信じて。

——光がある事を信じて。

一体どのくらい歩いただろうか……、聽て一人の男が見えてきた。それは後ろ姿だったが、誰がいるのかは直ぐに判った。或いは、そこにいる事そのものが判っていたのかもしれない。

『……………なあ、イアン。……………確かお前、帰ったら オレと勝負するんじゃないのか？ 確かほら、お前秘蔵の美味い酒があるんだったよな？ 酒屋にキープしてらるって自慢してたよな？ ……それを賭けての勝負。互いに結構楽しみだつたよな。皆も盛り上がった。色々と苦しい筈だったのに、それでも笑っていたよな。……………なあ イアン。オレがもうちよつと帰るのが早かつたら、お前は 待つててくれたのか？』

目の前にいる赤毛の長身の男に声をかける。

その男イアンは、応える事なく、ただ前だけを見続けた。その先は、いったい何があるのか、何がいるのか、そもそも 先が存在しているのか、それらの全てが見えない暗闇を見続けた。

そして、最初から傍にいたかのように、イアンの隣にもう一人の男が現れた。

いや、霧が彼を覆い隠していたのだろう。何故かはわからないが、霧はその部分だけ消え去り、姿を現していた。

『……………よお、ミタビか。……………そうだったな。お前らの班は別だが、結構一緒にいる事が多かった。……………訊いたぜ。巨人相手に地上で、それも平地、開けた場所で勝負しよう

としたんだってな？ オレを見て『そんな自殺行為、一生絶対真似できん』って言うって癖に……よお？ お前らは エレンのヤツを守る為に……個よりも人類を優先して。……心臓を、本当に……』

霧は徐々に晴れていく。

この周辺一帯の黒い霧が晴れ、無数の男達が姿を現した。

皆 見知った顔だった。そして嘗ての教え子たちもそこにはいた。

彼らは ただ一点を見続けていた。暗闇のその先を。

『……………』

その光景をただ黙ってみるしか出来なかった。

もう、言葉も出なくなってしまうっている。言葉を失ってしまったかの様に。

聴て、ミタビとイアンがゆっくりと足を先へと進めた。それが合図だったかの様に、

一斉にこの場の全員が前を向いて歩きだした。

——行くな!!

そう叫んでいたのかもしれない。

ただ 言葉が出たのか、出なかったのか。それさえも判らなかった。

そして自由が利かないのは言葉だけじゃなく、足もだった。追いかけてようとしても前に進まなかったのだ。

どれだけ力を込めても、どれだけ強く思っても 自分の脚じゃないかの様に脚が動かない。脳からの命令が一向に届かない。

『……………』

最後に見たのは、前を見て 歩き続けた男達の中でただ一人だけ 歩を止めて振り返った男がいた。 その男はイアン。

声が出ない。だから声の代わりに必死に念じ続ける。

『その先に行くな』と。

初めて その想いに応えたのだろうか、イアンは立ち止まり 軽く首を横へと振った。そして、僅かに振り返ると反対側の方向へと指をさし示した。

指示したと同時に、頭に声が流れ込んできた。

——お前が来るのはこつちじゃない。向こう側だ。

そう、言っていた。……そう 感じた。そして 充分過ぎる程伝わった。

『…………オレは止まってられない、か』

認めると同時に声を発する事が出来る様になっていた。

そして 自分の顔に両手をゆっくりと宛がう。その後離した掌には 塗した彼らが残した最後の欠片があつた。

その欠片は僅かに光を放ち、その光がイアンが指示した方向へと飛び向かつた。光を目で追うと。

——そこから先も、地獄だ。こちら側も そちら側も ある意味では変わらない。どちらも地獄。

また、声が聞こえてきた気がした。

『だろ。うな。……重々承知してるつもりだ。何度だつて思う。この世界は……残酷なんだから、な』

絶対的な敵である巨人に囲まれた世界。力が無ければ死ぬしかない修羅の場。

『——オレはこの世界で生きて、前に進み続ける。お前達の間も。……オレは決して忘れない』

この世界に落とされ、もう6年と言う年月。

沢山の出会いがあり、そして別れもあった。何度も、何度も……。

——本当に、耐えられるのか？ この絶望の世界で。……本当に抗えるのか？ この残酷な世界で。

また、声が聞こえてきた。

これは一体誰の声だと言うのだろうか？ もう 見えなくなった彼らの声？

いや、その誰とも違う。

——本当の意味での絶望を、お前は まだ知らない。お前は、お前が本当に恐れているのは……。

続く声。そして その恐れとは一体何のことだろうか。

頭に疑問が浮かぶ。

確かに、恐れる事は沢山ある。巨人もそうだし、何よりも自分自身が傷つくよりも、仲

間違が傷つく事が恐ろしかった。ここまで自分自身を顧みない様になったのは一体何故かはわからないが、それ以上に怖かった。仲間達を失う事が

『——っ!!』

自分自身が最も恐れる事を実感したその刹那、視界が急に眩く光出した。

目も開けられない程の強烈な光は一瞬で闇を払う。闇の世界から光の世界へと変貌させたのだ。

瞬から感じる光がやみ始めた所でゆっくりと目を開く。
目を開いてみれば自分は森の中に立っていた。

『……………(ト)……………』

そこは見覚えのある風景。巨大樹に囲まれた森の中。

そう——この場所は。

——私は……決して屈しない。

『っ!?!』

目の前に誰かが通り過ぎるのを感じた。

それは、見覚えのある顔。両目の下の雀斑。ショート黒い髪。

『……イルゼ?!』

そう、この世界で初めて出会ったイルゼだった。

森を抜けようとしているのだろう。彼女は自分の目の前を走っていったのだ。自分に気付かずに。

——街への帰還は……絶望かもしれない。それでも、今私取るべき行動は恐怖にひれ伏す事じゃない。……この状況も調査兵団を志願した時から覚悟をしていたものだ

それは、頭に直接流れてくる声。……彼女の心の声だった。

——私は死をも恐れぬ人類の翼。調査兵団の一員。たとえば、たとえば命を落とすことに

なつても、最後まで戦い抜く……。

必死にペンを走らせ、状況を記録し続けるイルゼ。

そう——この光景は過去のもの。イルゼがこの後に巨人と遭遇し、そして自分と出会った。覚醒した後の初めての出会いだった。

『これは、過去の記憶……？』

今眼前の光景は過去の記憶である事を認識し始めるが……何処かが、何かが違った。イルゼとの出会いは鮮明に覚えている。全てが初めて尽くしだったからより鮮明に覚えているのだ。

自分自身の記憶は、彼女が巨人への怒りを、絶望的な状況でも決して臆さずに啖呵を切った事だけの筈だ。

だから、出会う前の記憶など、イルゼの行動など判る筈がない。自分の記憶の中に持ち合わせている訳がない。

『いったい、何が……？ いや、それよりも……』

——何で、イルゼはオレに気付かない？

つかず離れずの距離を保っているイルゼ。

何度か呼び、そして目も合った気がしたが、それでもイルゼは反応は無かった。先程の彼らでも応えてくれたと言うのに。

イルゼは……この後どうなっただろうか。走り続けた後は？

——巨人に……遭遇。

そう、イルゼはここで巨人と遭遇してしまったのだ。6mと言う圧倒的な体躯の差を持つ化け物と対峙してしまった。

『っ！ そ、そうだ。……ここで、オレが………!!!』

ここで、信じられない光景を目の当たりにしてしまった。

あの時の啖呵。『この世から消え失せろ！』と言う怒りを向けて、それが巨人の何かに触れたのか、或いは気まぐれだったのかは判らない。

判らないが——巨人はイルゼを襲ったのだ。

そのイルゼの身体よりも大きな手で、彼女を掴んだ。

そう、この場面は見覚えがある。この後に助けに入る——筈なのに。

『つつ!!! い、イルゼ!!!』

誰も来ない。

何も……無かった。あの巨人の背後から一撃を喰らわせて、イルゼを助ける、助けた筈だったのに。周囲にはイルゼと巨人しかいなかったのだ。

イルゼは……抗う事が出来ない。

『や、やめろ………』

イルゼは、懸命に走るが……巨人からは逃れる事が出来ない。

『やめろ………』

武器も無く装備の一式も無い。そんな状態で狙われてしまえば。

『やめろおおお!!』

人間は——無力だ。

巨人は、イルゼの頭に喰いついた。

手で必死に抗っているが、力では敵わない。そのままイルゼの頭は噛み砕かれて、血

飛沫が宙に舞った。

ぱきっ、ぱきっ

耳障りな音を奏でながら、イルゼを喰らい続ける巨人。

『あ……、あ………』

そして—— 全く動けなかった自分自身。

手を伸ばしても、届かない。足を動かしても、追いつけない。

ただ、死んでいくのを眺める事しか出来なかった。

そして……また、風景が変わった。

『あ、あ……、ぺ、ぺと……らっ？』

イルゼと巨人の姿が無くなったと思えば、目の前にはペトラが立っていた。なぜか、その表情は微笑んでいた。

——大丈夫……、大丈夫だから……。

ゆつくりと抱きしめてくれる。

そして、その周囲にはリヴァイを除いたりヴァイ班の皆がいた。ペトラだけじゃない。
い。

オルオが、エルドが、グンタがいた。

特に長く共に戦ってきた。特に多くの時間を共有してきたかけがえの無い仲間達だ。
いや——仲間と言うより皆は……。

どごんっ！

『っっ!!』

突然の、事だった。

突然現れた巨人にエルドが踏み潰された。

『あ……ああ……』

他の3人は即座に迎撃態勢に入るが、今までの巨人とはくらべものにならない程早く、正確な攻撃をしてくる。大樹とも呼べる凶悪な脚が、グンタの身体を蹴り抜いた。

凶悪な拳が、オルオの身体を砕いた。

彼女達の血で身体が染まったと感じた途端に、一気に覚醒した。

「……………あああああああああ!!!」

身体が、跳ね起きる。

滝の様に流れ出る汗で、視界が塞がる。

「はあつ、はあつ、はあつ……………」

窓からは、太陽光が自身の身体を照らし、包み込んでくれているが、今の彼には何も判っておらず、寧ろその温もりさえも強烈な不快感を感じてしまっている様だった。

「はあつ、はあつ、はあつ……………」

流れ続ける汗を拭い、目元も拭い周囲をゆっくりと見渡した。

混乱し続ける頭で必死に自分がいる場所を確認しようとしたその時だった。

「ちよ、あ、アキラ!? 大丈夫っ!?」

勢いよく開かれる扉。

そして、飛び込んできたのは……。

「ぺ、ぺと……………ら……………」

「大丈夫なのっ!? 突然叫ぶなんて一体どうしたのっ!?」

慌てて駆け寄ってきたのはペトラだった。

間違いなく、彼の目の前にいるのは…… アキラの目の前にいるのはペトラだった。

「っ……………」

「アキラ!? ほんとに、どうしたの!?」

アキラの両肩を持って揺さぶるペトラ。

触れられた肩。ペトラの暖かさが肩に伝わる。間違いなく生きているという事がこの時初めて理解する事が出来た。

だから……、アキラは咄嗟にペトラのその手を取る。

「え……………、——っっ!?」

「ペトラ……………! よかった……………、よかった……………っ!」

思い切り、自分の方へと引き寄せると、その身体を抱きしめた。

紛れもない。アレは夢だったのだと、悪夢だったのだと、自分に言い聞かせて、そして 目の前のペトラは間違ひなく生きているのだとも言ひ聞かせて。

突然抱きしめられた事に混乱してしまうのはペトラ。それも仕様がないう事だろう。

アキラは、あの後も戦い続けた。

蔓延る巨人を薙ぎ倒し、皆の援護にも回り、更に復興関係にも力を入れていた。

とある厄介とも言える案件も重なって、その疲労度は今まで以上だと言う事もよく判った。だから、アキラには休息を強引にはあるが、リヴァイ兵長権限で取らせたのだ。

これは珍しい事ではない。そして 休息を取らされた？ アキラが泥の様に眠るのも珍しい事ではない。

有り得ないのは——今の現状。

「つつつ〜!!(な、なに?! い、いったい、なに?? なんでつつ?! あ、あき、あきら近いつつ、あきらがちかいつつ!!)」

脳内がパニックを起こしてしまっているのがよく判るペトラ。

アキラが抱きしめる力が非常に強い為、振りほどこうにも振りほどく事が出来ない。

……いや、振りほどくつもりなど、毛頭ないのかもしれない。だけど次のアキラの言葉

を訊いて、脳内が冷却される事になる。

「無事で……、ほんとうに……」

「え……っ?」

無事で良かった。

アキラが言っている言葉だ。

「いったい何の事だ?」と思ってしまうペトラ。アキラのお目付け役として、イルゼもそうだが、互いに監視して無茶をしない、させない事を貫いて作戦に当たっていた。それでも犠牲者0とまではいかなかったが、それでも壁の穴を塞ぐ事が出来た事もあって、比較的安全に制圧をする事が出来た。

だから、アキラがそこまで心配する理由が……判らなかつた。

そして、新たに来訪者が訪れる。

「あ、アキラっ!? 今の悲鳴……って、ええっ!?」

次に入ってきたのはイルゼ。

比較的直ぐ傍の部屋で作業をしていた為、イルゼ自身もアキラの悲鳴を訊いていたのだ。だが、ペトラの方が数秒部屋に入るのが早かつた為、今現在に至る。

「な、なんでペトラと抱き合って……!?!? な、何してるのよ!!」

「い、いや、これはそのっ! ち、違って」

「なにが!! ちよつと、今だつて色々仕事とかがあるのに……つて、わあっ!!」
イルゼが傍に来た。

イルゼも無事だった、と言う事を理解したアキラは、イルゼもペトラ同様に抱き寄せたのだ。傍から見れば、非常に贅沢な両手に花状態になつてしまつてはいるが、アキラは構う事は無い。

「……すま、ん。少し、少しだけ……、こう、させてくれ……。イルゼ、ペトラ……。本当に、良かった……」

イルゼは当然ながら、最初のペトラ同様に盛大にパニックになつたのと同時に顔を真つ赤にさせていた。

最後には、混乱は残りつつもペトラとイルゼの2人はアキラの背中を摩つていた。

その身体が震えている事に気付いたから。

そして、異常とも呼べる力を身に纏わす超人と呼ばれているアキラも、人間なんだ。同じ人間なんだと、判つている事であつても今また改めて心に刻み付け、そのアキラの

震える身体が収まるまで、2人はアキラの事を抱きしめ続けるのだった。

25話

ここは——薄暗くて 何処か寒かった。

「ハア……ハア……」

光は僅かにだが届いている。だが、それは鉄格子を挟んだ先の照明の明かりが薄らと届く程度。今外が昼なのか、若しくは夜なのかさえ判らない。そして 手には違和感があった。違和感があるのも当然だろう。その手首を見てみれば そこには手錠が嵌められている。そして鎖に繋がれ、行動範囲を殆ど制限されてしまっている。

ジャラツ……と鎖の擦れる音が聞こえる度に つい見てしまい自身が拘束されているという事実を嫌でも再認識させられてしまう。

それでも、このままでは嫌だ。

地下牢に拘束させられている少年 エレン・イエーガーは鉄格子の前に立っている牢番であろう男に声を何度もかけ続けていた。

「すみません。便所に……」

もう、それも何度目か判らなくなってきた。

帰ってくる返事も同じだ。

「さつき いったばかりだ」

『いった』と言うのは『言った』と言う意味と『行った』と言う意味の両方が込められている事だろう。確かに一度は嚴重に拘束されつつも行かせてもらえたが、それっきりののだ。尿意を催している訳ではないが、ただの一度であつてもこの場から出られる事がどれだけ色んな意味で解放される……とエレンは思っていたのだ。

だから、声をかけるのを止めなかった。

だが、それも次のやり取りまでになる。

「……水を、水をください」

「オイ」

エレンの懇願は全く受け入れられなくなるから。

「立場を弁えろ……。この化け物め」

エレンの呼ばれ方は『化け物』

当然ながら今までそういう風に呼ばれた事など一度だつてない。

——化け物か……。確かにそれは間違いじゃないだろうけど。

エレンは当たり前のように受け入れる事は、当然ながら直ぐに出来る訳はなかった。自分自身を縛る手錠と鎖、それを見るだけで思い知らされる。

——ここまで拘束する程、……。オレの事が怖いのか。……。まあ無理もないか……。オレにも訳が判らないんだから。

ここで エレンが拘束される前。トロスト区での戦いまで時を遡ろう。

その戦いでエレンは 死んだ筈だった。

巨人に片足を喰いちぎられ、そして アルミンを守って 巨人に喰われた筈だった。

そこから先が、まさに異常事態の始まりでもあった。

どうやったのかは判らない。どうして こんな事が起きたのかも判らない。

それでもいったい何が起きたのかは判る。

後で言い聞かされた事だが エレンは『巨人になる事』が出来たのだ。

巨人になり、籠城を続ける仲間達を狙う巨人達を薙ぎ払い、喰い散らした。己が力尽きるまで暴れ続けた。そして仲間達を、アルミンを、……ミカサを助ける事が出来た。

その後も色々であった。

エレンに恐怖し、そして恐怖のあまり考えることを拒否して エレンを排除しようとする駐屯兵团をアルミンとミカサが止めた。アルミンが己の全てを賭けて、一斉放射されかねない状況であつても臆せず心臓を叩き、人類に対する献身を 己の命を捧げる事を示した。

その姿を、その敬礼を『見事』と言い エレン達を最終的に救ったのが《ドット・ピクス》

トロスト区を含む南側領土を束ねる最高責任者であり、生粋の変人でもある。

何を隠そう、アキラが壁外へと何度か向かっていることを黙認したどころか。

『超絶美女の巨人がいたら 殺さず口説いて連れてこい』

と無茶な指令をしたりしていた。

だが、そんな変人でも 巨人に恐怖し、逃げ出す兵士が増えてきて、秩序と規律を守ろうとする兵士と最後の瞬間を家族と共にいたいと願う兵士がぶつかり、人間同士の殺し合いに発展しかけたその場を治める手腕も持ち合わせていた。

それは体の良い方便かもしれない。それでも崩れかけた兵士達を立て直す事が出来たのには違いない事だ。

それが出来たからこそ——壁の穴を、破壊された門を塞ぎ、トロスト区を奪還する事が出来たのだ。

そして その代償が今回の拘束。

それくらいであれば、エレンにとっては小さいものだと思ひ自身に思ひ聞かせていた。

だが、それよりも 強く考えてしまうのは助かった同期の仲間達についてだった。

一生このまま拘束され続ける恐怖も確かにあったが、それよりも。

——こうなったオレを見て、皆はどう思うだろうか……？ エルヴィン団長は ここから出す様に計らう、と言ってくれたが、いったいアレから何日が……。

その時だ。

「おいおい、化け物は無いだろ？ お前ら」

声が 聞こえてきたのは。

そして 声と共に複数の足音が聞こえてきた。

「つ……だ、だが こいつは……」

「じゃ、オレはどうなんだ？」

「あ、あなたは……ちが「違わないぜ」っ」

牢番をしている兵士と、来訪者の男のやりとりが続く。

「オレだつてそうだろ？ いや オレに比べたらエレンなんざ、可愛いもんだ。見ろよ」

男は、自分自身を指さしてつぶけた。

「オレは この体躯のまままで……殺るんだぜ？ あの連中を。聞いた限りしか知らんが、多分エレンの倍以上は殺つてる筈だ」

もうそれが誰なのか、エレンは直ぐに理解する事が出来た。

それは自分にとって信頼でき、そして尊敬出来る教官。そして 顔を確認して、目もあつた。いつもの陽気な表情。

あの訓練兵時代の時と、何ら変わらない。それだけでも エレンは救われた気がした。心底安心できたのだ。

「よおエレン。おはよ。今の気分は——良い訳ないよな？ オレだつて ここに入れた時は不愉快だった。特に横のメガネがニヤニヤと見てきた時は特にな」

「あ、アキラ教官……」

来訪者は ハンジとミケ、そして アキラの3人だった。

「ごめんね？ エレン。待たせてしまって。このアキラがさあ この大変な時に『昨夜はお楽しみでしたね？』つて言われそんな事をしててさ。そのせいで遅れたんだよ。」

だから 私達のせいじゃないよ?」

と意趣返しのようにアキラにとって痛い部分をついてくるハンジ。

まるで傷口にタバスコを塗りつけられる想いだが、それは実力行使で黙らせようと脚を狙ったのだが、躲された。

「ちよつと、アキラに踏まれたら 脚が無くなるじゃん。いや命も無くなるかも?」

「ああ、大丈夫大丈夫。一撃で楽にする気はないって。一発くらい受けても良いと思っ
ぜ?」

「全然大丈夫じゃないってば。あの場面を見ちやつた事はずっとずっと謝ってるでしょ?」

「行動と言動が一致してねえんだよ! 地の果てまで蹴り飛ばすぞ! このクソメガネ
!」

あの場面——と言うのは勿論アキラがペトラとイルゼを……と言う場面。熱い抱擁を2人に行っていた所を何の因果か ハンジにみられてしまったり、と言うオチがあった。

色々と悶着があつたが 当然 何の事か判らないエレンは、ただただ唾然とするしか出来なかつた。

そんな2人の間に割って入って治めるのはミケだ。エレンも見ている事を思い出し

たアキラはと言うと、恥ずかしそうに頭を掻きながら。

「今のは忘れてくれエレン。……その代わりと言つちやなんだが、今すぐそこから出してやるから」

そう言つて、牢屋の扉を素手で破壊。

エレンを拘束していた鎖を引き千切つた。

耳障りだった鎖の擦れる音も もう聞こえない。アキラに捕まれた手。冷たい牢屋にいた時間が長く感じていて、この時久しぶりに——温もりを感じたエレンだった。

「あーあ、壊した。後で調査兵団に請求が来ると思うけど、アキラの給料から差っ引いとくからね？」

「うっせー！ とつとと行くぞ！ ああ、お前らは良いからな。ここをオレがぶつ壊した、つて言つてもな。事実だし。それに ピクシスのおっさん辺りに美味しい酒でも渡して詫びを入れとくから多分大丈夫だ」

アキラはひらひらと手を振つてそう言つて まだ状況を掴めてないエレンを引き連れて、この場から出ていくのだった。

「確かに 基本アキラつて、性能を考えたら正直 巨人になつたエレンよりも十分化け物っぽいけどさ……、それ以上に この誰よりも人間っぽいんだよなあ。可愛いトコがあつたり、意地っ張りだつたり、それに からかいたい衝動を掻き立てるものを持つ

てたり……。ねえ？」

おいて行かれたハンジは、牢番の2人に同意を求める様に言う。

この時ばかりは、ハンジの言う事に全面的に同意する様だった。

エレンと言う巨人になるかもしれない男を見張っていた。それは自分の命を懸けた見張りであり、極度に緊張していたのだが、苦笑いをして肩の力を落としていたのだから。

——誰よりも人間らしい化け物

なんだかそれを訊いたら、エレンの事も必要以上に怯える事はない、と思えてしまう。近くにもっと凄いのがいるのだから。

その後は息の詰まりそうになる審議の始まりだった。

折角アキラが手錠をぶっ壊したのだが、速攻で新たな手錠を付けられてしまい、またまた拘束されてしまった。

「(うーむ、また ぶっ壊そうか?)」

「……アキラ。バカな事考えないでよ」

ペトラに肘で突かれてしまったから一先ず止めた。

ここにいるのは憲兵団、調査兵団、リヴァイ兵長とエルヴィン団長も当然ながら。そしてピクシス司令、何処ぞの宗教団体、更に事情を特に知ってるミカサやアルミンを含めた兵士達。

そして審議所の最上部には 駐屯兵団、憲兵団、調査兵団の3つのトップ ダリス・ザックレー総統。

睨まれたら色々と面倒くさい連中が揃いも揃って非常に息苦しいと言うものだ。

「つて、しないしない。考えたけど、後々がマジで面倒そうだし」

だから、アキラはペトラにそう言っ手て手を振った。

力では解決できない問題も世の中にはある、と言うものだ。

(アキラが本当の本気で暴れたら……と言うのはとりあえず置いときましょう。まあ実際に起きたらリヴァイが止めると思うけど)

兎も角 審議は早速始まった。

様はエレンをどうするのか。どの兵団に委ねるのかを決めると言う事だ。

憲兵団は 簡単に言えば『エレンの人体を徹底的に調べ上げて処分』との事だった。

それを説明するのは憲兵団師団長のナイル・ドーク。

「中央で実権を握る有力者たちは彼を脅威と認識しています。王族を含める有力者たち

は5年前や今回の襲撃を受けて尚、壁外への不干渉を貫いています。しかし、今回の襲撃を受けて、エレンを英雄視をする民衆も増えてきました。……その結果 我々に残されたこの領土をめぐる内乱が生じかねない状況です」

つまりは、エレンを処分しようとするれば 英雄視している連中が黙ってないぞー！との事だ。出来る出来ないは置いて、民衆のまさにヒーローでもある調査兵団を害するとどうなるのか、と言うのと同じことだ。

「彼の巨人の力が今回の襲撃を退けた功績は事実です。彼と力を合わせて、後々の成果も見てみたい、とも思う自分もいますが、その存在が実害を招いたのも事実。大きな実害が。それを目に瞑る事は到底できません。つまり——彼は高度に政治的な存在になりすぎました」

ナイルは一呼吸を置いた後に最後の一文。

——出来る限りの情報を残してもらった後に 人類の英霊となれ。

と言う事。

正直『英霊』と言われても溜まったモンじゃないだろう。要は死ぬ、と同義だから。困みに。

「——相つ変わらずだな。何かムカつく上から目線。幾ら歳上でもムカつく」

「……………アキラ」

「わーってるって エルヴィン団長。無茶な事はしないって。……結論が出てない今の所は」

「……………」

アキラの最後の『今の所』と言う言葉を訊いて、僅かながらに空気が変わったことを感じる調査兵団の面々。

アキラにとってのエレンは教え子だった。今回の事件で沢山の死者が出てしまった。その事を決してアキラは忘れる事はないだろう。彼らの死を決して。遺灰を胸に 心臓に塗しているのだから。

そんな折に、また誰かが死ぬ様な事になると言うのなら どうなるか…… もう火を見るより明らかだった。

「おい。オレより先に手を出すな。それだけは約束しろ」

「……………釘刺さんでも判ってるよ。そろそろ言いそうだったし」

背後をリヴァイに取り残されていて、釘ならぬナイフを刺そうと突きつけられてる気分だったアキラ。この後も色々頭が痛くなる様な審議が続くのだろう。その中心にいるエレンに 心底同情するアキラ。

初めてこの壁の中に来た時に、アキラもこの場の中心にいた事があったから。

「んじやあ、オレからも約束してもらっても良いか？ リヴァイ」

「……ああ」

アキラは、ゆっくりと振り返ってリヴァイに一言。

「……アイツが死なねえ方向にする事だ。それ以外は認めねえ。人に殺されるなんざ、

巨人より認めたくねえよ」

「ふん。言われるまでもねえ。アイツは、ここにいる大多数の豚共よりは十分使えるん

だからな」

きつちりと約束を交わした2人は、それ以上は語らず、審議の続きを見つめるの

だった。

26話

とりあえず、エレンの今後を決める審議は終わり、調査兵団が抱える事になった。最後はまさに怒涛の展開だった と言えるだろう。

何故ならエレンの生死を決めると言っている審議の真つ最中だった筈なのだけど、色々あつて繰り広げられたのは、キツクの練習（ただのサンドバック？） だったのだから。

エレンに盛大にキツクをしているのはリヴァイだった。

今でもたまに思うがリヴァイは体躯は調査兵団の中でも下の方に位置する。

以前の身体測定でもデータの全てが調査兵団の中でも結構下に位置する。そんな小柄な身体だと言うのに……。

「……前々から思ったが、リヴァイの身体の何処にあんな力があるんだろうな？」

「リヴァイ兵長の力は確かに凄いけど、アキラ それ絶対に他人の事言えないよ。100人が100人、ゼーったい同じ様な事を言う。棚に上げ過ぎ」

「そうだよ。あんな無茶苦茶な力があるのは何処の誰だった？」

ペトラとイルゼが、ずいつ、とアキラの胸元に人差し指を差した。

「……そりやそーだが、別にちよつとくらい思つたつて良いだろ？ 確かに棚に上げるかもしれないけど、一瞬の瞬発力と言うか、反射と言うか…… 絶対オレよりも遥かに速いつて」

「それを差し引いても、アキラは他人の事言えなーい」

「とーぜん」

控室でポツリと口にするアキラだったが、盛大にダメ出しをされてしまう。

それは当然。同じ人間の姿で、何倍もある巨人を素手でぶつ飛ばしてる男のセリフじゃないから。

因みにリヴァイのキック、キック、キックの連発に餌食になってしまっているのがエレンだった。勿論、それには訳があつた。

事の発端は 事実説明を行っていた時だった。

エレンが巨人化した直後に、その力を制御する事が出来ず、傍にいたミカサを攻撃したと言う事実が明らかにされ、もともと最悪だったエレンの心証が更に悪くなってしまうのだ。

攻撃された当人であるミカサがエレンの事を擁護する発言をしたのだが、2人の関係性も審議中に暴かれた。更に幼少期、僅か9歳の頃に3人も大人を刺殺したと言う事実も暴露された。

その事実は、アキラも教官時代に素性については、しっかりと調査しているから知っていた。その殺人と言う許される事のないであろう犯罪の動機内容についても、知っている。

それは、殺害された男達に過失がありすぎると言う事だ。男達3人は強盗であり、ミカサの父親と母親はその3人に殺された。ミカサ自身を誘拐しようとしていたのだが、そこにエレンが助けに入ったのだ。

何も知らない子供を装い、油断をしている隙について2人を刺殺。最後の1人は、ミカサが仕留めた。

つまりは、完全なる正当防衛なのだが、この審議中においては、その辺りは全くをもつて考慮されなかった。

ミカサにとっては家族を目の前で殺された。

エレンにとつては、その行為そのものが許せず、相手を人間の皮を被った有害な獣にしか見えなかった。その怒りから及んだ犯行。

確かに殺人を正当化する事は許されないかもしれないが、その行動は判らない訳じゃない。

だが、ナイル・ドークははつきりと言ったのだ。

『根本的な人間性に疑問を感じる』

と。

この時、アキラの眉がピクリと動き少なからず身体に力が入ったが、リヴァイとの約束もあり、自分の周囲をしつかりとガードされているから、何もせずに黙ってみていた。

そして、周囲の見る眼が変わる。それはエレンに向けられていた恐怖を感じる視線が、ミカサにまで向けられたのだ。

『そうだ。こいつは、こいつらは子供の姿でこっちに紛れ込んだ巨人に違いない』

『しかし、凶暴な本性までは隠すことが出来なかったんだ!』

『なあ…… 悠長に議論してる場合なのか? 今目の前にいるコイツはいつ爆発するか

判らない火薬庫のようなものなんだぞ! あんな拘束具、絶対に無意味だ』

『そうだ……、アイツらだって 人間かどうか疑わしい! 念のため解剖でもした方が……』

ミカサにまで向けられた怪奇の視線。そして ミカサにまで危害を及ぼす発言。

エレンはそれが我慢出来なかったのだ。

『オレは化け物かもしれませんが、ミカサは関係ありません。無関係です!』

はつきりと、自らの口で化け物と認めた上で、ミカサを庇った。

そして更につづけた。自分自身の考えを、今思ってる丈を全て吐き出したのだ。

『……そうやって自分達の都合の良い憶測ばかりで話を進めたって……、現実と乖離するだけで、碌なことにならない』

あの時、エレン達を処分しようとした駐屯兵团達。

巨人への圧倒的な恐怖を前に考える事を放棄した駐屯兵团達と、ここにいる者達は何ら変わらない。

『なんだと……』

『こいつ……ッ!』

凶星である、と言う事はよく判っているのだろう。その眼は怒りに染まっていた。た。

それでも構わずエレンは続ける。頭の中では 言い続けるのは不味い、と思っていたのだが、ブレーキはもう壊れてしまっていた。

『大体……あなた方は巨人を見たことも無いくせに、何がそんなに怖いんですか?』

最後は、もう全て言いたい事は言う。吐き出す。

エレンは全ての覚悟を決めた。そう、この場で殺される事も覚悟して。

『力を持つてる人が戦わなくてどうするんですか。生きる為に戦うのが怖いって言うのなら、力を貸してくださいよ! この……、この 腰抜け共め……!』

ぎりっ、と歯を食いしばりながらエレンは吠えた。

『いいから黙って、全部オレに投資しろ!!』

その叫びは完全に場を沈黙へと追いやった。

だが、それでも沈黙したのは一瞬だった。エレンの表情が、怒号が巨人のそれに見えるのだらう。『ひっ』と恐怖の声を誰かが上げたのと同時に。

『構えろ!!』

『ハッ!!』

ナイル・ドークが隣の兵士に銃を構える様に指示。

もう後は銃撃しろ、と命令を下すだけだった。指示をされて撃たれるまでにはもう数秒も無いだろう。その指示し撃つよりも早く行動を移したのがリヴァイだった。

飛び込んだ勢いのままにエレンの頬を蹴り上げた。

普通であれば、数mは吹き飛ぶであろう威力だったが、エレンは拘束されている為吹き飛ぶ事は無かったが、威力を全く殺す事も出来ない為 その衝撃をモロに受けてしまった。

代わりに飛んでいったのは エレンの歯。

その後も容赦なくエレンを蹴り続けるリヴァイ。顔面に加えて腹、脚と痛め続けている。

『お、おい………』

撃つように指示を出そうとしたナイルも戸惑いを隠せられなかった。

銃を構えた兵士も撃てば良いのか判断できなかつた。それでも 照準はエレンに狙いを定めていた………が。

『止めときな。……その銃、撃つたらお前が怪我するぜ』

突然、横に来ていたのは……。

『あ、アキラ!? お前……っ』

『じゅ、銃が……』

銃身を握られており、そのまま無理矢理にひん曲げられてしまっていた。このまま撃てば、間違いなく暴発する角度にまで。

アキラは そのまま銃を握りしめたままの体勢で リヴァイの方を見る。まだしばらくま蹴り続けていて、やめる気配は無かった。

『……オレよりリヴァイの方が先に動いた。……これ、ちゃんと約束は守ってるだろ』
エレンを甚振っている光景は、正直見たくないが必要な演出である事くらいはアキラにも判るし、何よりも解剖されたり撃ち殺されたりするよりは何倍も良いから。

だが、それが判らないのがミカサだった。

エレンを助ける為に飛び込もうとしたが、寸前でアルミンに止められていたから。リヴァイは蹴り続けた後、頭を落としたエレンの後頭部を踏みつけながら言った。

『これは持論だが、躰に一番よく効くのは痛みだと思う。今 お前に一番必要なのは言葉による『教育』ではなく、『教訓』だ。しゃがんでるから丁度蹴りやすいしな』

その後も血反吐が飛び散ろうが、どうなるうが蹴り続けた。

蹴られ続けているエレンだったが、その眼は死んではいない。鋭く怒りに満ちていく

のがよく判る。

『あ、アキラ……リヴァイを止めろ』

『ん?』

『危険だ。あれ以上は……、恨みを買って今ここでアイツが巨人化しでもすれば……一
気に全滅だ』

『はあ? 何言ってるんだ?』

ナイルの物言いに心底呆れる表情を作ったアキラ。

『お前らは、エレンを解剖しようとしてたんだぜ? 恨みつつつたら これ以上無いだ
ろ。死ぬ程辛い痛みなら判らんでもないが、今はまだリヴァイは『教育』レベル。まだ
まだありや易しい方だ』

アキラがそう言っているのが聞こえたのだろう。

リヴァイも蹴るのを止めてこちら側を向いた。

『そういう事だ。こいつは巨人化した時に、力尽きるまでに20体の巨人を殺したらし
い。仮に敵だと想定したとしたら 知恵が回る分厄介かもしれんが』

リヴァイは 一呼吸おいてアキラの目を見た。

『……だとしてもオレ達の敵じゃないがな。お前らはどうする? こいつをいじめた奴
らもよく考えた方が良い。本当にこいつを殺せるのかをな』

リヴァイの言葉に押し黙る。

再び沈黙が辺りを支配し始めたその時。

『総統……ご提案があります』

エルヴィンの声が響いた。

『エレンの『巨人の力』は不確定な要素を多分に含まれており、その危険は常に潜んでいます。そこで エレンは我々の管理下に置かれた暁にはその対策として、リヴァイ兵長、そして アキラ団員に行動を共にしてもらいます。2人であれば、全て問題ないと判断します』

巨人の力が暴走した時を過程として、それを被害最小限に御する事が出来るのはまず間違いなくリヴァイとアキラの2人を置いて他にはいない、と言う事は この場の誰も が判っている事だった。

今回は 目の前の脅威。巨人化をするエレンの存在があつたからか それを忘れてしまっていた様だが、巨人の討伐数が他を圧倒しているリヴァイとアキラの2人の存在は、巨人にも負けない人間の力の象徴だと言えるのだから。

『ふむ……。成る程』

総統も頷いた。

『正直、いつその案を出すのかと待っていたぞ』

総統も、ザックレー総統もアキラの事は知っている。

この場に召喚されたアキラが、訓練広場にてその力の片鱗を披露したから。巨人を屠る拳。大砲の如き威力の拳撃は、巨人を横して造られた彫像を一発で葬りさつたのだから。

最初こそは恐怖した。人の姿をした悪魔だと思えた。

だが、その後の調査兵団の活躍。民衆の支持。そしてアキラ自身の人柄。強大な力を持つのであれば、それを使い意のままに操つたとしても不思議ではないと言うのに、何も見せなかった。

何かを、転覆する時期を狙っているのでは？ と考えた事もあったが、行動に移していかない事と、働いている事実（報告書は回ってきている）。

あそこまでの力を魅せるので張れば、そんなまどっこらしい真似をする理由も意味も無いとも判断出来た。

その力を見て、恐怖もあったが年甲斐も無く、心を躍らせたものだった。

『2人であれば、エレン・イエーガーが暴走したら迅速に処理する事が出来る。そうだな？』

この審議で、どれだけの怒号が飛ばうと常に中立の立場を守ってきたザックレー総統。実はアキラの隠れファンである。（勿論 本人が知るのみ）

……それは アキラにとって別に嬉しくもない事実。

『ああ。殺す事に関しては間違いなく』

『……(するしないは別にして)同じく。エレンは確か15m級になる、だったっけ？
オレ前回 確か15m級もいたと思うけど……何匹やったっけ？ ハンジ。それに
ペトラ』

くるりと2人の方を向いて訊く。

ペトラは、周囲に向かって軽く一礼をした後 ペラペラとメモ帳を捲る。

几帳面に記された戦いの記録をゆっくりと読み上げられた。

『15m級は、14体。後は10m、6m合わせて29体。前回だけの記録でこれです
改めて数字にされると、凄まじいから 当然ながら場はどよめく。

巨人を見た事がない連中だとは言え その脅威は理解しているのだから。

そんな呆然とする場の空気を読まないアキラはと言うと。

『うーむ……。やっぱ巨人を殺すより抑えつける練習もした方が良いんじゃないか？』

『却下！』

『……はい。了解であります』

生け捕りは 殺す事よりもはるかにリスクが上がる。その強大な攻撃力を前にして

忘れがちだが、耐久力に關しては攻撃力に比例したりしない。寧ろ反比例するかもしれない。リミットが切れれば、攻撃力よりも防御力が先に落ちてしまふと言う事が調べた結果判つたから。

だからこそ、そんな事は許さないと言う事でペトラとイルゼが猛反対。それはいつもの光景で、實質決定権がハンジやエルヴィンよりもある様だ。

『議論は尽された様だな。問題は全て解決だ。これで決めさせてもらおうか』

妙な空気が流れたのだが、さして気にする様な事はなく、淡々と進める総統。

と言うより、エレンについて散々あつたと言うのに、それを忘れ去つたかの様に、いや元々無かつたかの様に 淡々としていた。

だが、そんな訳にはいかないのがナイルだつた。

『お待ちください。まだ、問題はあります。……エルヴィン』

視線はエルヴィンの方に向けられた。

『内地の問題はどうするつもりだ！』

『我々の壁外での活動が人類の安定から成り立っているのは理解している。決して内地の問題を軽視している訳じゃない』

それは当然、と言わんばかりにドサリ、と座つて言うのがアキラ。

『当然だろ？ 仕事して疲れて戻ってきたつてのに、温かく迎えてくれなくなんのは正直しんどいわ。こんだけきつついブラック職場だつてのに』

盛大なため息。

色々外が大変なのは判るが、人間関係程 面倒で厄介なものも無いと思つてゐる。巨人相手に大暴れする方が大分マシだと言へるのはアキラ。

『一番はエレンが人類にとつて、敵じゃなく味方。それもほんとの意味で英雄ヒーローつて感じになりや 万事解決。そうだろ？』

アキラの言葉を訊いたその時だ。

『ふっ、ふははははははは!!』

我慢が出来なくなつた、と言わんばかりに大声で笑うのはピクシス。

『漸しだくらしさがでたな？ お前さんにしては今回は我慢した方じゃ。大人し過ぎて、巨人でも降つてくるかと思つたぞ。それに 何だかんだとお前ならやつてくれそうじゃ。ワシは何にも心配しとらん』

ピクシスは堪えきれない笑いを、懸命に抑えた後、ナイルの方を見た。

『ナイル・ドーク団長。そろそろ認めたらどうじゃ。この大バカが『うっせ!』外で大暴れするから、内地の平穩が守られていふと言ふ事に。お前さん達の長年の働きを軽視する訳じゃないが』

『っ……………』

ナイルはピクシスの言葉を訊いて、押し黙った。

人類の為に働き続け、憲兵団として治安維持を 王都を守り続けてきたその強い自負は、突然現れた得体のしれない男によって全てを覆された事を良しとしなかった。

最前線で戦っていないから。壁の中心で暮らしているせい、巨人の恐怖と言うものを身近であまり感じていなかったからかもしれないが、彼のプライドが中々アキラと言う人外を認める事が出来なかった様だ。

『ん……(ナイルがオレの事 何か嫌な感じで見てくんのって、そう言う事もあった、って訳か)』

奇怪な眼で見えてくる理由は、持っている力が異常だから、と思っていたアキラ。

ナイルとは常日頃会う間柄でもない。それも憲兵団のトップだ。直接的な交流はエールヴィンやリヴァイが中心だから、こういう場面でしか会ったりしない相手の心の内など判る筈もなかったアキラは今更ながら理解した。

だからと言って、どうこうするつもりも無く、ムカついたから ぶっ飛ばす！ 何て

ことは、正直今の所 クソメガネ以外には向けていないから、と判断。

『なんだい？ アキラ』

『いんや、別に』

変な所で鋭いハンジだが、それもいつも通りだから、てきとーに流した。

『よし。これで本当に決定だ。エレン・イエーガーは調査兵団に託す。しかし、次の成果次第ではその命も無くなる事を覚悟せよ』

ザックレーの宣言にて審議は完全に終了したのだった。

しこたま蹴られたエレンはと言うと。

「(お、オレの事 忘れられてない………か?)」

と酷い痛みの中でもそう思わずにはいられなかったのだった。

勿論、ミカサやアルミンはしっかりと覚えている。

寧ろミカサは アキラ達が話してる間も、射殺さんとも言わんばかりに、リヴァイをにらみ続けていた。

エレンが調査兵団に入れば、間違いなくミカサもついてくるだろう。その能力も逸材であり、全く申し分ない。

それでも 色々な不安が内包するだろうな、と横目でしっかりと見ていたハンジは そう思うのだった。

27話

色々とビックリする展開が続いたと思える。

エレンが盛大に吠えたり、そんなエレンをリヴァイが蹴りまくったり 中立なザックレーが明らかにアキラよりな発言をしたり、と。(隠れファンだと言う事は当然ながら皆知らない)

そして、控室に戻ってきてもそうだ。リヴァイが蹴ったからエレンの顔は痣だらけだし、歯も何本か折れてしまったりしていたけど……、なんとビックリ。折れた筈の歯がもう生えていたのだ。

乳歯? と思ったが永久歯との事。

でも、巨人になれると言う異常中の異常の事を考えたら、些細な事なので割愛する。

「イテテ……」

「大丈夫か? エレン。ほれ これ貼っとけ」

アキラはエレンに絆創膏を手渡した。

エレンは 歯は再生出来た様だけど、蹴られた場所の痛みまでは無かった事にはならないらしい。

しこたま蹴られまくったし 仕方がないと思うが、エレンの口許に血の跡が残っていてみてるだけで十分痛そうだな。色々な実験と称する名のイジメを受け続けてきたアキラも 痛いのは好きじゃないのです。

「でも やっぱあん時の啖呵は大したもんだったぜ? エレン。見たか? 宗教団体のお偉いさんの面。あの鳩が豆鉄砲喰った様な面。思い返しても結構笑える。あの場所ですつきりする事ってあんま無いしさ」

「……アキラ教官も結構言いたい事あって、すつきりした顔してたと思うんですが……」

正直後半部分、忘れ去られた感が拭えないエレンは、饒舌気味なアキラにそう返す。

それを訊いて、やや凶星だったのか がくつ と身体が一瞬だけ震えたアキラだったが 直ぐに体勢を整え直した。

「あれだけ蹴られてたつてのに、オレの事見てたのかよ……」

「アキラ教官だけ、でしたから。……その、あの後で 庇ってくれる様な発言をしてくれ

たのは。必要な演出だと頭の中では判っていても、それでも 嬉しかったです」

エレンは微笑みを返してそう言った。

全てが決まった後だと言うのに エレンを処分しろ！ みたいな発言をしてくる連中はそこそこいて、そいつらを一蹴（物理的じゃない）したのがアキラだった。

エレンは純粹に、それが嬉しかった様だ。

「ざっきのオレン時とは随分な違い様だな。エレン」

「い、いやっ そんな事は……」

ドサツ、と乱暴気味にエレンの隣に座るのはリヴァイ、そしてリヴァイの言葉を否定しようとするエレン。そして そんなリヴァイを見て ぶっ と嘔き出すのはアキラだ。

「ふはっ！ ええー、なんだ？ リヴァイってそういうの気にしたりすんの？ 普段からずっと しかめっ面で『オレに近寄るな』って オーラもバンバン出してんのに？ 今更?!」

リヴァイの発言があまりにおかしかったのか、アキラは笑い続けていた。そんなアキラに対して別に気にする様子もなく淡々と返すのはリヴァイ。

「馬鹿のやり方もそれなりに学ぶ所多いんだと 最近ながら知ったからな。オレでも学

習はすると言う事だ。まだまだ学ぶ事が多い。『馬鹿に学べ』だな」

リヴァイのセリフには、それなりに説得力があつて、ふんふんと頷いていたアキラだつたのだが。

ナチユラル

「……つて、自然に人の事を馬鹿馬鹿言うなや！ お前らだつて同類項だろ!! この根暗チビ！」

「ああ、そうか。馬鹿よりは童顔と言つてやつた方が良かったか？」

「うっせつ!!」

これは殆ど恒例行事になりつつあるリヴァイとアキラの罵り合い。

勿論、エレンは初めての事だから目を白黒させている。

「ははっ エレン。これは慣れるしか無いよ。2人はこんな感じだから」

「そうだよ。……調査兵团恒例だね。もう 止める人もいないし」

「エルヴィン団長もいつからか、止めなくなりましたよね？」

「リヴァイのああ言う表情は、アキラとのやり取りの時しか見られないからな。恒例とは言つても、……私にとってはあまり見ない光景なんだ」

この場でリヴァイとの付き合いが一番長いのがエルヴィンだ。2人は互いに信頼し合っているのは間違いなく、可能な限りではあるが無茶な範囲でもエルヴィンの判断は間違いない、と思つている。

それでも、リヴァイの自然な表情。何処か笑っている様にも見えなくない表情は今までも見た事が無かった。その点でもアキラにはエルヴィンは感謝をしているのだ。

リヴァイは人類最強の兵士として、孤高の存在として見られている面があった。絶大な信頼を持ち合わせていて、心酔もされていたりもするのだが、対等に見る、接する相手と言うのは極端に少ない。

今まではリヴァイに並ぶ実力者はいなかった。実力が全てと言うつもりはないが、それでもある意味 本当の意味で対等に接する事が出来るのはアキラだけだろう。

「あ、あの……………」

突如始まった罵り合いと言うかじやれ合いと言うか 慣れるしかない、と言われたエレンだったが、直ぐに慣れる事が出来る程器用じゃないから、目を白黒させていた。

「……………って、ああ わりい。エレンの事ほっといたな」

アキラは、一先ず一息ついて エレンの方に向き合った。さつきまでのままるで最初から無かったかの様に言う。

「一先ず、エレン。オレの事 教官って言わんでいいぞ。も、そんな関係じゃないだろ？」

オレらは、同じきつつい職場の仲間なんだからな」

「え、えっと いや それは……………」

「オレ役職なんざ ついてねえから、普通にアキラで良い。固いのって結構苦手なんだ」

アキラの言っているのが本当である事は、エレンもよく判っている。

訓練兵時代でも、上下関係の類は一切五月蠅く言わなかったし、誰とでも気さくに、フランクに会話をしていたから。

それでいて、実力も半端ではないとなれば、訓練兵に人気が出るのは時間の問題であつという間に人気教官となつた。それは因みにシャーデイス教官が怖すぎたから、という理由も少なからずあつたりする。

「でも、オレにとつてはアキラ教官はずつと教官で……」

「んー、そうなんか。でも オレって教官らしいこととした覚え、あんま無いんだけど……」

アキラはあの色々とあつた訓練教官時代を思い返す。……時代、という程昔の話じゃないと思えるが、そもそもアキラが此処にきた歴史と言うのが非常に短い。それでも内容が濃すぎるから、より長く感じてしまうのである。

そんなアキラを見て、手を口に当てて笑うのはペトラ。

「あー、それは確かに。私も保障するよ。アキラつてば教えるつて柄じゃないし、教官として バシッ! とメたりしてないもんね? 見てたけど」

「ペトラ……。別に保障なんかしなくて良いつて。自分で判つてんだから」

頭を掻いて苦笑いをするアキラ。つられて笑うペトラにハンジ。

「ま、あれだけしんどい訓練で賑やかなのって結構異常だけどね。質が落ちたり、サボったりしてる訳じゃないのに」

「サボれるかっての。んな事したら色々とうるさいのが直ぐ傍にいたし」

「シャーデイス教官の事でしょ。まー頭突きくらいは受けても良かったんじゃない?」

「それ、目から火が出そうだから嫌」

其々のやり取りを見て、また笑みを見せるエレン。

ゆつくりと頷き、アキラの方をすつと見て告げた。

「じゃあ、……アキラ、さんで」

「おう。そっから行こうか」

アキラは、エレンの肩に手を乗せて、告げた。

「エレン。お前は1人じゃねえんだぞ。化けモンって言う括りをするんだったら、調査兵団は色んな面で同じだ。歯がぶつ飛んでも、サメ見たいにそっこで生えてきたって、この奴らは驚いてねえだろ?」

「あ……、はい。……ん??(さめ??) なんだろう……)」

よく判らない単語があったが、疑問を考え続ける暇はなく、アキラは続けて言った。

「オレだって十分化けモンだ。化けモン歴で言えば、オレが先輩。色々と抱えて突っ走るなよ? オレも経験してきたが、結構怒るぞ。この皆は」

アキラが、親指でメンバー達を指し示す。

当然つと言わんばかりに腰に手をあてて胸を張るペトラを筆頭に、大体のメンバーが僅かに頷いていた。世話のかかるヤツがもう1人増えた程度何ともない、と言わんばかりに笑っていた。

「(何かムカついたが) ……まあ良い。じゃあ 改めて宜しくな? エレン」

「はい。アキラさん」

エレンを監視する役目があると言う事をすっかり忘れて様子のアキラは、エレンと共に固く握手を交わした。

エレンのほつとする表情を見た後、頭に過るのは エレンの幼馴染、そして家族。

アルミンとミカサの事。

エレンが蹴りを只管受け続けていた時、ミカサは憤怒の表情になって飛びかかってきそうになっていたし、大丈夫だと言う事は頭では判っていそうだったが 心底心配していたアルミン。

「(あの2人にもしつかり フォローいれとくか。 ……アルミンは兎も角、ミカサは結構 激情家だし。エレン限定の)」

しつかりとフォローを入れるつもりな所を考えても、アキラは やつぱり面倒見がよ

く教官っぽい所があるので、時間が許す限り 2人にエレンの事を教えに行こうと決めたのだった。

□□ 翌日 旧調査兵団本部 □□

一気に場面は飛ぶが 審議があつた翌日。エレンを含めた調査兵団のリヴァイ班は古い古城を改装した昔の本部へと来ていた。

エレンの力はある意味はアキラよりも判らない所が多いから、壁と川から随分離れた場所にある所に拠点を移したのだ。先ずは少しでも全容を把握する為に。

そこに行くまでの間、エレンにちよつかいを出そうとしているのは、オルオ。

リヴァイがエレンの事を時折注視しているのが気に入らない様子だ。エレンの性質上仕方ない事なんだけどそれでも。

「調子に乗るなよ、新兵。巨人か何だか知らんが、お前のような小便臭いガキがリヴァイ兵長と「ほれ、ストップ」ぶげっ！」

妙な嫉妬心を出してゐるオルオも珍しくない。

今でこそ、コンビっぽくなつてゐるアキラとリヴァイ。こうなる前は、オルオも盛大にアキラに絡んでいたからよく判つていたんです。

そして、この後に起こる事も大体。

「舌嚙んで、血だらけになんの见えてるから。血い出されたら馬だってビビるし、馬上ではとりあえず止めとけて、な？ オルオ。落馬でもしたら、痛えぞ」

「うるせえな！ こういうのは最初が肝心、がりっ！ つっくっ!!」

止めたのは無駄だったのか、或いは止めようとしたから舌をかんだのか、どっちかは判らないけど、結局オルオは舌を嚙んでしまう運命だと思えた。

「あー、ペトラあ。消毒液とかある？ 結構深く嚙んでるみたいだし、直で口の中に放り込むから」

「そうね。結構刺激が強いけど、減らず口には丁度良いかも」

バックバックから さっと取り出して アキラに放り投げる。それを上手くキャッチした後、オルオの血だらけな口の中にインサート。

「!!!」

鮮やか滑らかな動きの連携に少しでも反応して防ごうとするのだが、脳からの指令が1秒程遅かったから無意味。嚙み切った痛みと、傷に染みる痛みの二重奏を受けてしまったオルオは、暫くの間話す事も出来なかった。

因みに リヴァイ兵長の口調真似（と、本人は思ってる）をオルオが時折見せるのが心底気持ち悪いと思つてたペトラは何気に喜んでいたのだった。

「なあ、エレン。まず 門をくぐつて中に入る前に訊く事がある。ここつてどう思う？」
「え…… どう、とは？」

古城を見上げながらエレンに訊くアキラ。そして 言っている意味が判らないエレンは訊き返した。

「ほれ、ここだよ。この本部。見てみた感想は？」

「あー……、えつと 随分と頑丈な作りですね」

「ま、古城を改装してるからな。城だし、相応の防壁だつてあるし。……で？」

「えつと……立派なのですし、備蓄もそれなりにあるとは思いますが、近くの街に行くのも時間が掛かりますし、調査対象の壁の外も遠い。そのため立地条件はあまり宜しくないかと……」

「そりやそうだ。調査兵团だからな。壁の外に行つてなんぼの仕事だし。……ほれ、他には？ 難しく考えなくていいぞ。ほら、そことか、そこみてみ」

アキラが指さすのは 城内へと通じる大きな扉の周辺。

馬具を入れていたであろう木箱は壊れかけていたり（壊れて露出してたから、馬具入れだと判つた）、背丈に近い長さに草が生えていたり、風にのつてきたのか、ゴミも少々目に入ったり。

「あまり使われてなかつたのでしょうか……？ 少々荒れてると思います」

「そう、それだ」

アキラは、指をばちんっ！ と鳴らして正解だと頷く。

何の事だ？ とエレンはまた首を傾げていた後。

「これから、リヴァイの違う一面を見る事になるぞ。ま、エレンの性格上、そこまで苦にはならんと思うけど、頑張れよ？ 最初はけっこーしんどいぞ」

「え、えつと？ 違う一面？ それってどういう……」

エレンが答えを訊く前に、アキラはさつきと中へ入ってしまった為、詳しくはきけなかった。でも、直ぐに判明する。

リヴァイ班のエルドがリヴァイにしっかりとこの古城本部の現状を伝えてしまったから。

「確かにこれは重大な問題だ。……ペトラ。あのアホをサボるなど呼び戻せ。全員で早急に取り掛かるぞ」

「はい。判りました」

そこから始まるのは大掃除の時間。

意外と似合う清掃着のリヴアイとアキラ。

「ま、これもステップだと思え。1000里の道も1歩だ」

「あ……はい。頑張ります」

超本格的な大掃除をスタートさせた調査兵団。

勿論、ただの清掃じゃなく、リヴアイ審査をクリアしなければ、終わりが見えないから結構大変だ。マイペースな性格だったら、更に大変になってしまう。(アキラ実体験)
済)

エレンは、別に苦ではない様子だったが、それでも盛大にダメ出しを喰らうだろうなあ、とアキラは遠目で見ていた。

「……ま、これも訓練？ 足腰鍛えられるって思ってたやれば……。思えねえけどなあ」
「口より手を動かせ」
「へーへー、リヴァイせんせーの仰せのままにー」

28話

と言う訳で皆でせつせと旧調査兵団本部の大きな建物を大掃除開始。

古城と言うだけあって やっぱり滅茶苦茶広い。

そして指揮を執るのは異常な潔癖症でもあるリヴァイ。中途半端は一切許さない、妥協も許さない。リヴァイの事をよく知っているし、何度も経験してきた班のメンバーは兎も角、これはエレンにとつての最初の試練になる事だろう。

とりあえずエレンは指示されたエリアの清掃を完了させて、その報告を、そしてもう一つ訊く事があつて降りてきた。

「リヴァイ兵長。上の階の清掃は終了しました。オレはこの施設の何処で寝るべきでしょうか？」

寝床の確認である。牢屋では満足に寝れてないし、睡眠はやっぱり大切だから。

リヴァイは それを訊いて窓の掃除を一時中断させて振り返った。

「お前は地下室にある部屋だ」

「また、地下室ですか……？」

牢屋に投獄されていた時も位置的には地下だった。地下というのは基本的にジメジメしているし、良い雰囲気じゃないのは確かだったから、エレンにとっては気分が優れないのだろう。

だが、それは仕様がないう事でもある。

「当然だ。お前は自分自身を掌握できてない。お前が寝惚けて巨人になったとして、そこが地下ならその場で拘束できる」

リヴァイの説明を訊いている所で、竹箒を肩に担いでいるアキラも話に加わった。

「ここが幾ら城で、そこらへんの建物より頑丈つつつても、内側から巨人がばーん！と現れたとなったら、絶対無理だろ。ここは盛大にぶつ壊れる。……そんなもって、んな事になったら……この掃除が更に大変だろ？ やってられねえよ」

はあ、と面倒くさそうにそう言うアキラ。

巨人が出現した時の人的被害の事よりも、物的損害、更には面倒が多くなる という所に視点を置いているから、ある意味凄いと云える。仲間想いであるアキラの事はよく判っているから、ここである事にエレンは気付いた。

例え——巨人が現れたとしても 絶対的な自信があると言う事。

流石に建物を守る様な事は出来ないと思うが、この仲間達と一緒になら、被害を出さずに抑え込む事が出来ると言う自信だった。

巨人に恐怖しない所も、普通とは 圧倒的にかげ離れている。
これが実力が高いが故の自信と言うものなのだろう。

「オイ。掃除は基本中の基本だ。面倒と思うな」

「はいはい。来たときよりも 使ったあとよりも美しく、ねえ。調査兵团、リヴァイ班の基本だったなよな。規約とか見せられた覚えは無いけど」

アキラは、ぽんぽん、と肩を竹箒で叩きつつ 通路の掃除を再開した。

リヴァイは アキラの背中を見送った後 一呼吸置き、エレンの方を見た。

「これはお前の身柄を手にする際に提示された条件の1つでもある。ここでは守るべき
ルールの1つだ」

「……………」

エレンはそれを訊いて言葉を失っていた。

「お前が掃除した部屋を見てくる。その間ここをやれ。ああ、ペトラ また アイツが
サボってたぞ。アキラあのアホの監視役も怠るな」

「はい……………」

「あつ、はい」

リヴァイは部屋の外で掃除をしていたペトラに声をかけつつ、エレンが掃除した2階のエリアへと向かっていった。

リヴァイの後ろ姿を見送ったエレンは暫く声を出す事が出来なかった。それを見たペトラが少し笑いながら言った。

「失望したって顔だね？」

「は、はい!？」

「別にそれは珍しい反応じゃないよ。それにアキラの時なんか、凄くストレートに言っていたし。エレンなんか可愛い方なんだから」

口許に手を当てて笑うペトラ。

アキラとリヴァイとのやり取り。少し前の事を思い返していた様だ。

「世間で言う様な完全無欠の英雄には見えないよね。2人とも。エレンは訓練兵時代にアキラと接してるから、アキラの事は判つてると思うけど。アキラとリヴァイ兵長。2人は世間じゃ英雄だからね。でも——」

こほんつ、と軽く咳を一つした後。

「現物のリヴァイ兵長は、思いのほか小柄だし、神経質で粗暴、近寄りがたい。アキラは、見たまんま。上下関係なんて知ったこっちゃなく、いつもいつもお気楽マイペース。

……あと、誰よりも仲間想いで、情にも凄く熱いひと」

リヴァイの事は結構辛辣なコメントだが、アキラに関しては 呆れる様子を魅せながらも 褒め言葉？ も残しているペトラ。最後の方は声が少し小さくなっているが。

「え、いえ……。オレが意外だと思ったのは、上の取り決めに對する従順な姿勢です。その、アキラさんは よく知っているつもりです。……初めて会った時から、ずっと同じです」

「でしょ？ さいつしよつからあんな感じだよ？ お調子者だったり、それでいて恐れ知らず。ちよつぴり短気なトコもあつたりして、上の人と口論なんて日常茶飯事。……リヴァイ兵長と口喧嘩出来るなんて、アキラくらいだしね」

ペろつ、と舌を出しつっそう言うペトラ。

それは『アキラの事をずつと見続けているから、誰よりも知ってるよ？』と言わんばかりの表情だった。

「ん——リヴァイ兵長の事は、強力な実力者だから序列や型にはまらない様な人だつて思ってた？」

「あ、はい。……アキラさんとは対等な姿勢を見せていると感じましたが、それ以外の人とは……。基本 誰の指図も受けない。意に介さない人だと……」

それを訊いてペトラは少し目を瞑った。時間にして殆ど一瞬で直ぐに目を開いた。

「私も詳しくは知らないけど……、以前はそのイメージに近い人だったのかもしれないね。リヴァイ兵長は調査兵团に入る前は、都の地下街で有名なゴロツキだったって聞いた事があるから。そして、その後何があつたのかは知らないけど、エルヴィン団長の元にする形で調査兵团に連れてこられたって」

「団長に……」

エルヴィン団長について エレンは詳しくは知らない。それでも団長を務める以上は 相応の力量の持ち主だと言う事は判る。その人柄についても。リヴァイ程の力量の持ち主が、下に加わる程の器量の持ち主なのだろう、とエレンは理解した。

そして、そう思ったのと同時に もう一つ知りたい事が生まれた。

「あの、アキラさんは……？ リヴァイ兵長と同じ様な境遇だったりするのですか？」

あの陽気な人がゴロツキだった、などと言う印象は正直もてない。

リヴァイについてはその鋭い視線から あの表情から よく判るのだが アキラは違う。大体が笑顔だ。笑顔にも種類があつて、大体が人をからかう時の笑みが多い。

そして 人を笑わす事も多い。そんな人だ。

「アキラ……か」

ペトラは空を見上げる様に 部屋の天井を見上げた。

「うん。気になるよね？ あんな無茶苦茶な力の持ち主だし。普通は、ね」
「えと……その、そう ですね……」

エレンは生返事だった。

アキラが戦う所は確かに視た事がある。でもそれはトロスト区での作戦の終盤。巨人化が解除された直後の事だった。薄れゆく意識の中だったが、はつきりと自由の翼を見た後、その戦う姿を目の当たりにした。

巨人を武器も使わず、使うのは己の肉体だけで——圧倒した。

あの時は 意識が混濁していた事もあって夢だったのではないかと今でも思っている。

「アキラは誰よりも特殊な環境って言った方が良いかな。ほら 人は誰にでも人生があつて 色んな経験をしてきていると思うけど、完全。全く完全で自分だけしかない。オリジナルな人生を、なんてものは誰も持つてないと思う。リヴァイ兵長の様に 街のゴロツキがある切っ掛けで調査兵团や憲兵团、駐屯兵团になった、っていう話だつてない訳じゃないし、歴史を振り返つても 絶対に何処かしら共通点があつたりする」

ペトラの言いたい事は エレンも判る。

家族を失い、巨人に恐怖ではなく、憎悪した自分自身。他に誰も同じ様な気持ちを持つている者などいない、とは決して思えないから。

同じような境遇の持ち主など、ここ数年で何人もいる事だろう。だが、それ以上に判らないのはアキラの事だった。

「アキラはね——」

話そうとしたその時、ペトラの頭の上に手が乗った。

「オレ^{ひと}の人生を勝手に話すなんて良い趣味してるとは思わんぜ？ ペトラ」

勿論 アキラである。見事なタイミング……と思えるが。

「リヴァイの事 いつも めっちゃ信頼した目で見てんのに随分辛辣なコメント残した時は、思わず吹きそうになったがな！」

ちやつかり聞き耳を立てていたのだ。

「もー ビックリするじゃない！ 兵長が来たかもって！」

「オレの事 勝手に話そうとするからだ。プライバシーの侵害つてヤツだな」

頭の手を払いのけて拳を振るうペトラ。その拳を笑顔で受け止めるアキラ。

そして エレンは呆気に取られてほかん、としていた。

「そんなにオレの事が気になんの？ エレンは。オレに同性愛の趣味はないぜ？」

その表情を見たアキラはエレンに笑いながら訊いた。

「あ、いえ……すみません。不躰でした」

「ははっ 気にすんな。オレを見た奴らつて、大体は同じ様に考えるんだよ。『コイツ、一体なんなんだ？』つてき。それを色々と枝分けしていけば、オレの出生とか どんな経験をしてきたか、とか 際限なく広がっていくんだ。それに ピクシスのおっさんなんか色々と凄かったんだからな。『女経験はあるか？』 とかから始まったかと思えばどんどんと、矢継ぎ早のリクエストだ。『何人とか？』 とか、挙句の果てには『巨人とヤったんか？ 気持ち良いか？』とかだ。……殆どありや変態おやじだ。男にんな質問して何が面白いってんだか」

笑いながらそういうアキラ。

そして、何だか知らないがペトラは表情が一気に険しくなっている。

「それ、初耳」

気のせいかもしれないけど——空気に亀裂でも入ったのか？ と思える効果音が頭の中に響いていた。エレンにも アキラにも。

「ん？ 何の事だ？」

「司令との事」

「あー。そりやそうだろ。今初めて言ったんだし。そこにはエルヴィンしかいなかったし」

急に言葉がカタコトになってるペトラにやや違和感を覚えるアキラ。

「それ、詳しく」

「ん？」

「司令との事。くわしく」

そして顔が怖くなった。

「おもしれえ話でもねえだろ？ なんでもんな事聞きたがるんだよ」

「く………わ………し………く………！」

目を見開いて迫るペトラには妖気に似た何かを感じてしまう変質な圧迫感があった。

迫られている訳じゃないのに言霊だけで後ずさりをさせる程に。

「ちよつと 落ち着けて。ペトラ！ なんで怒ってんだ?！」

「……………」

「わーったわーった！ 怒ってる理由もそうだが 何で んな事聞きたがるか知らんが

また話してやる」

「い・ま！」

「今は無理だ」

「……………なんで?」

「すぐ判る」

話してくれると言う言質を取れたからか、ペトラの言葉は普段のそれに戻っていた。

だが、アキラが今無理だと言った意味が判らない様子だ。そして アキラが言う様に直ぐに理解する事が出来た。

「おい。お前ら。いい度胸だな……………3人揃ってお喋りタイムか?」

「さつきのペトラの言霊とはまた違ったもの。静かだがそれでいて圧倒される様な威圧感を感じられる声が部屋に響いたから。」

慌ててペトラは掃き掃除をしようとするのだが、最早手遅れ。

もう、『3人』と言われているから。数に含まれているから。

「ちゃんとノルマは熟したって。ほれ　リヴァイがいるトコの廊下がオレの持ち場。結構ヤレてるだろ？　仕事はちゃんとオレはするんだよー、リヴァイせんせー」

「……ふん」

リヴァイは　する時はするアキラの事を判っている。そして　案の定出来ている所を見て　何処か納得は出来てなかったが、それでも合格と言わんばかりに視線を変えた。

変えた先にいるのはエレン。

「オイ、エレン」

「は、はいっつ!!」

金縛りにあつてた感覚だったが、どうにか解く事が出来て　元氣よく返事をするエレン。

因みに何を言われるのか、と内心ビビっていた。

「上。ぜんぜんなっていない。全てやり直せ」

言われたのが 盛大な駄目だし、とやり直しだった。

「ここが第一関門。巨人を兎に角殺しまくりたいんなら、突破する事だな」
「……ほっ」

何だかんだでお咎めなしなペトラは一息ついて、アキラに耳打ち。

「……兵長がいなくなったら、洗いざらい吐いて貰うからね」
「オレは なんの容疑をかけられてんだよ……」

29 話

朝から夕方までの大掃除も無事に終了して、夜のミーティングの最中、アキラはぶっきらぼうな表情をして、頬に手をつけていた。

何がきつかったかと言うと大掃除の合間の尋問が一番と言えるだろう。

正直 ペトラの剣幕も相当なもので、蛇の様にしつこいから流石に堪えた。

時折リヴアイが見回り？ に戻ってきたりしてその度にペトラは背筋をぴんつと伸ばしつつ掃除を再開させていたのが、何処か面白おかしく笑ってしまう事だけが救いかもしれない。

更に最悪なのが掃除をサボっている様にも見える事から、エルドやグンタにまで怒られてしまったアキラとペトラ。ペナルティで夕飯の準備から片付けまで指定されてもう大変。

「……………ふん」

「はあ 何時まで怒ってんだよ」

「うっせ！ オレはオレでちゃんとやる事やってんのに、なーんで怒られにやならんの

「だつ、て今更ながらムカついてきただけだ！ それに リヴァイやハンジと違って、お前らに怒られたら、オレ マジで悪い事したって気分になるし」

「ああ……、確かにオレらがアキラの事を叱るのは、珍しい事ではあるな。判らなくも無い」

グンタは ただただ苦笑いをしてアキラにそう言った。

アキラの言う様にリヴァイ兵長やハンジ分隊長とのやり取りは空気を吸う様に当たり前だから、何とも思わない様だけど その他の面子に色々と怒られるのは堪えるのだろうか。

「——ふつ（ほんと、中身はまだまだ子供なんだな。怒られて拗ねるなんて……）」

「おいコラ、エルド。何か失礼な事考えてないか？」

「おおつ、アキラの読心術。今日も絶好調だな」

「お前らは表情に出過ぎるんだよ！ なんもん使わんでも判るわ！」

ペトラは、ゆつくりと紅茶を喉に通した後。

「あはは…… アキラごめんね？ あの時は正直私に原因があつたしー。それに ……ちよつと気になって仕方なかつたから」

頭が冷えた様子のペトラだった。

ペトラの尋問の内容についてはこの場の全員が知っている。(・▽・) ニヤニヤと笑い

ながらつづけて言うのはオルオ。

「此処にイルゼがいりや、もつと悲惨だったかもしれんよな？　アキラ。もれなくパンチが飛ぶ所だ」

「止めてクレ。考えたくもない」

「それにしてもまあ、ピクシス司令は生粋の変人って呼ばれてるが　そこまではなあ。話半分に、って思ってたが　色々と注意が必要か？」

「おおー、そーだそーだ。あの爺さん、ゼーったい飢えてるんだって、特に女型の巨人が大好物だつて言ってる。それに巨人は全裸だ、今度やっぱ見かけたらとっ捕まえて持って帰ってくるか？　ポーナスくれるかもしれんぜ」

「もう、馬鹿な事言わないで」

アキラの煽りをペトラが頭をはたいて止めた。

そんなペトラの隣にいるオルオが。

「巨人にまでヤキモチすんのか？　ペトラ」

と耳打ちをしてくるものだから、逆の手を使ってオルオの顎目掛けて　アッパークアツト。更に捻りを加えてのコークスクリユーだから、威力も突き抜けてダメージ大。

「ぶげらっつ！！」

「そろそろリヴァイ兵長とエレンが来る時間だから、静かにしてよ」

「うあ……………、あれ 絶対痛そう……………」

オルオは普段から舌を噛んで血反吐を吐いているが、それよりも遥かに痛そうなのを聞いては引寄せた笑みを浮かべていた。

女性部門。

ここ一番の攻撃力がトップクラスなのは、ぶつちぎりでペトラとイルゼだろう。次いでミカサやアニ、リコ、サーシャとかが続くのかな、と順位付けを試みたが、割と正しい気がする。

と勝手に頭の中で納得していた丁度その時、扉が開いてリヴァイとエレンが入ってきた。

「……………揃ってるな」

「失礼します」

ペトラの言う事がピタリと的中して、何処かドヤ顔をしている様にも見えたが、それよりもまずはやる事あるだろ、という事でアキラが『……………オルオを起こしてやれ』と小さく言って、起こした後に全員着席。

エルドの今後の予定についての話から始まった。

「我々への待機命令はあと数日は続くだろうが、30日後には大規模な壁外遠征を考えていると聞いた。それも今季卒業生の新兵を早々に混じえろと」

「エルド、そりゃ本当か？ ずいぶん急な話じゃないか。ただでさえ今回の巨人の襲撃には新兵には堪えただろうによ」

「……ガキ共はすつかり腰を抜かしただろうな」

話しを訊く限りじやかなり急な話だと思える。

今までの遠征では協議を重ね 万全を喫して行っていたのだ。だが今回は急行ツアーも良い所だ。事故が起きかねない程に。

ところで オルオさんは普通に会話に加わってますが、『ガキ共はく』のセリフです。先ほどのダメージは無いのでしょうか？ と言う疑問はスルーで宜しく。

「訳はあるだろうな。まず間違いなく。今回のこれ、発案者はエルヴィンだろ？」

アキラがリヴァイにそう聞くと、肯定する様に直ぐに頷いた。

「ああ。ヤツの事だ。オレ達よりずっと多くの事を考えてるだろう」

「……頭の良さと回転の早さはダントツだからなあ。アイツの頭ん中はどーなってるのか 一回くらい見てみたい」

リヴァイ班は脳筋パーティの様なもの、……とまでは言わないが、考える事においては、エルヴィンに敵わないから 考える大部分の所は結構エルヴィンに丸投げしてる自

覚はある。

でも その分しっかりと戦っている、その分の働きをしている自覚もあるから持ちつ持たれつだ。

「確かに、これまでとは状況が異なりますからね……。順調に見えていたマリア奪還ルートも、例の超大型巨人がいつ現れるか判らないと言う現状であるのなら、正直な所最適の解とは言えません。ですが、もう1つ 突然全く別の選択肢も出てきた。手が多い事に越したことはない、と判断できる現状でもあります」

エルドは、エレンの方を向いた。

「信じられない、とは言わない。ウチには既に1人同じような人材がいるから。だが、訊いてみたい。『巨人になる』と言うのはどういうことなんだ？ エレン」

アキラは、エルドのセリフ、色々と一括りにされている、という事には何処か不満を覚えるが、『巨人になる感覚』と言うのは正直な所自分自身も訊いてみたかった事だから、一先ず口を挟まずエレンの方を向いた。

他のメンバーも同様だ。

「えつと……、その時の記憶は定かではないんですが…… とにかく無我夢中で……でもきつかけになるのは自傷行為です。こうやって手を噛み切って——（あれ？）」

エレンは、この時初めて自分自身の大きな疑問に気付いた。

それは、巨人になる為の方法を何故知っているのか？　と言う所だ。

「(……わからない。なんで　こうやったら出来るって、オレは……)」

無我夢中だったから、勢いでなれた、と言っ正しいかもしれない。

当たり前の事だが、そんな事で巨人になれるとは到底思えないから。

「ふーむ。そりゃ難儀だな。噛み切るか……　それも痛そうだ」

「いつでもどこでも　3秒でパワーマックスに出来るアキラと比べたら、確かに扱い辛いかもしれんな」

「なんだ3秒って。てきとーか？」

はあ　とグンタの冗談なのか本気なのか判らないトコを訊いたため息吐くアキラ。

この手のやり取りと言うか、戯言の言い合いと言うか　何度も経験しているが、それでもハンジやりヴァイには　どうしても耐性が出来ないのは何故でしょうか？　アキラさん。

「知るか!!」

「え、ええ!!?　ど、どうしたんですか？　アキラさん」

「あー……　なんでもない……」

突然の大声に驚くエレンと頭を何度か叩いて正気を取り戻そうとするアキラ。

……妙な声が頭に聞こえたのだろう多分。

「おい。エレンについては報告書以上の話は聞き出せねえ。判るだろ？ それよりアイツを御する方法でも考えた方が幾らか有意義じゃねえか。下手にいじくりまわされて死なれても困るだろ？」

「あー…… そりやあまあ……」

アキラは、ちらりとエレンの方を見た。

「いったい何のことか？ と首を傾げるエレンを見て。」

「オレは生きてるし、大丈夫だろ。うん。多分」

「え、えと どういう事でしょう……？」

「あー、オレ的には ちょっとだけ期待してるエレン。アイツをオレから遠ざけてくれ」

「??? あ、あいつ？」

「一体誰の事を言ってるのか？ とエレンがまた疑問に想ったが 直ぐに疑問は解かれる。」

「こんばんはー リヴアイ班の皆さんー お城の住み心地はどうかかな？」

入り口がガチャリ、と開いて誰かが入ってきたから。

そして、入ってきた瞬間 アキラの表情が明らかに変わったから。噂の人物なのだ、

という事が容易に連想出来たから。

そして。

「あいつだ」

とリヴァイが言ってくれたから。

「あ、ハンジ分隊長」

「やあ エレン。私は今 街で捕らえた2体の巨人の生態調査を担当しているんだけど、明日の実験にはエレンも協力してもらいたい。その許可を貰いに来た」

「実験……ですか？ オレが何を……？」

新たな疑問が頭を過ぎり、その答えを求めようとアキラを見たが。

——ちーん…… ぼくぼくぼく……

と、お経でも読むのか？ 木魚でも叩くのか？ と連想出来る仕草で お手ての皺と皺を合わせて幸せ……ではなく、合掌していた。

「あ、あのー…… アキラさん？」

「知りたい!! それはも本当に滾るヤツをだよ。最高にね！」

「え、ええ？」

興奮を仕切っている様子で、顔が全体的に赤く、更に鼻息も荒い。

まだまだ ハンジの性質を理解していないエレンだから仕方ないが 普通に対応を

するエレン。

「あの……、許可については自分では下せません。自分の権限を持っているのは自分ではないので」

「ああ、そうだったね。監督はリヴァイとアキラで、アキラの上司がリヴァイ。と言う事でリヴァイ？ 明日のエレンの予定は？」

数秒、リヴァイが考え込み、直ぐに答える。とても重要な予定（リヴァイのみ）を。

「庭の掃除だ」

その答えを訊いた瞬間、ハンジは一気に笑顔になる。

「よし。ならよかった決定！ エレン！ 明日はよろしく」

「あ……、はい……。ええと、巨人の実験とはどういうものですか？」

「!!」

ハンジは巨人フェチ。ある意味はピクシスより変態である、という忠告。それをしておけば良かったかな？ と少しだけ後悔をした瞬間だった。

「エレン」

「はい？」

「ご愁傷さま。頑張ってたな」

「え、ええ!!」

アキラがエレンの肩を掴んでそう言ったのと殆ど同時に、リヴァイ班の皆は席を立った。

「そうだよね。聞きたいよね？ ああ、やっぱり聞きたそうな顔してると思ったんだ。そんなに聞きたかったのはしようがないな。聞かせてあげないとね」

さあさあ、待つてました！ と言わんばかりのマシンガントークの始まりだ。

今回 捕まえた巨人は4mと7mの巨人で それぞれ『ソニー』と『ビーン』と名付けた所から始まり。

仲間達の制止を振り切つて、礫にしているとはいえ 鼻息荒くしてる巨人の口許にまで近づくとハンジ。過去何度か行つてきた意思疎通の検証をしようとしていた。

ハンジは何度も話しかけるが、『話す事ない、食わせろ！』と言わんばかりに 愛称を付けた巨人に何度も何度も齧られそうになつたのだから。

「以前はねえ、ほんとやばかつたんだ。巨人の歯がね、私の頭に当たつた瞬間も判つた。いやあ あの時は走馬燈が走つたんだよ。マジで」

「え、ええと……。よく無事でしたね？」

「そこは、親愛なる友のアキラのおかげさ」

寒気がする様なセリフを臆面も無く言うハンジ。

まず間違ひなくアキラは今悪寒が走っている事だろう……。

「頭に喰いつく瞬間、噛み切る瞬間にさ。ビーンの口の中に手をツツコンでくれて閉じない様にしてくれた、って訳だよ。でも アキラってば そのまま 勢い余ってビーンの顎を取っちゃったから やりすぎだ！ 可哀想だろっ！ って注意したりね」

「……………」

助けなければ良かったか？ と恐らくアキラの頭の中で何度も自問自答した事だろう、とこの時は簡単に想像が出来て、エレンもハンジの人物像が理解でき出してきた。

その後も 巨人に対する愛情まで感じるハンジの物言いに、エレンは訊かずにはいられなかった。

「なんで…………、巨人を前にしてそんなに陽気でいられるんですか？」

「えっ？」

巨人に対する認識が、他とは違う。圧倒的に違う。ピクシスの事もエレンは知っているが、それでも エレンの目にはそれ以上に感じられたのだ。司令は兵団の頭。巨人と接する機会自体は前線で戦う部隊程は持ち合わせていない筈だから。

「その…………巨人はオレら人類を全滅寸前まで追い込んだ天敵で…………、ハンジさんだってその脅威を数多く体験してるはずなのに…………」

エレンの言葉に ハンジは頷いた。

「そうだね。ここ数年で調査兵団の技術や能力、全てが向上して 絶対的な死者数は

減った。それでも 過去を無かった事に出来る訳じゃない。同じ調査兵団の仲間を何度も目の前で殺されたのを見た事がある。調査兵団に入る前も、その後もね。だから憎しみを頼りにして巨人と戦ったりもしてきた。でもそんなある日、私は気付いたんだ」

ハンジは一呼吸を置いてつぶけた。

「切断した3m級の生首を蹴つ飛ばした時だった。アキラがいとも簡単に巨人の身体をぶつ飛ばしてるから ちよつと感覚が最近はおかしくなっちゃってるけど、今でもはつきりと覚えているよ。……異常に軽かったんだ。巨人の身体が」

「え？」

「ああ、だと言つても 普通生身でぶつ飛ばせたりは出来ないよ？ 間違つても生身では真似しない様にね」

「し、しませんよー！」

「はは。それなら安心だよ。ん——巨人の身体についてだけど、普通ならあの巨体が2本足で立って、歩く事なんて無理なんだ。身体の構造上ね。どの巨人もそうだけど、切断した腕はその体積にあるべき質量には到底達してなかった。……エレンが巨人になった時も、何も無かった所から巨人の身体が現れたと訊く」

「あ……」

エレンは、それを訊いて今更だが思い返していた。

巨人の身体が何処から来ているのか、自分の身体の中から出てきているのか、疑問に思う所は幾つもあるんだ。

そして それを ハンジは調べているんだと改めて理解した。

「私は思うんだ。本当は私達に見えているものと実在するものの本質は……全然違うんじゃないかってね。それに憎しみを糧にして攻勢にでるなんてことはもう何十年も試されている。今は違う視点から見ているのが一番だと思った。……それに今が人類史上最も幸運な時代だと確信しているよ」

ハンジが思い浮かべるのは 練度の高い仲間達は勿論の事、アキラの存在についてもだ。

巨人を捕らえる事。それは簡単に言うが、難易度は殺すことより遥かに高い。昔も弱点を知る為に、何度も何度も試されては多大なる犠牲者を出し続けてきたのだから。

でも、今は違う。人類史上最強の男達が揃っているこの時代においては。

だからこそ、この時代に生まれた事をハンジは強く感謝していた。

そして—— 彼をこの世界に降り立たせてくれた神の所業についても。

「空回りで終わるかもしれない。それでも 私はやる」

ハンジの目は……とにかく真つ直ぐだった。迷いがまるでないのを直に感じた。

「調査兵団に入ってから、本当に驚かされてばかりだ。巨人の力、異常な力だけじゃない。……考え方。物事の捉え方。それは ハンジさんだけじゃない。……変わり者だらけ。……まさに変人の巣窟」

訊かれたら、拳骨が飛んできそうな事を思い浮かべるエレン。

その後 エレンは直ぐに首を振った。

「(でも、変革を求める人間の集団なんだ。そして、それこそが調査兵団なんだ。……でも)」

1つだけ、まだ判らない事がある。

それは、アキラのハンジに対する警戒心。エレンへの同情のそれだった。

確かに、ハンジの話は無茶苦茶な所はある。

その無茶に付き合わされたアキラはたまったものじゃなかった事だろう。でも 今のエレン自身には 特に何も無い。巨人の実験も気になる事はある。でもハンジは自分の身を顧みず、無茶ばかりをして 大変なヤツ、困ったヤツ、というだけのことだと思えるのだ。

何を注意する必要があるのだろうか？ と思えるが 今はそれ以上に気になる所があった。

「ハンジさん。よかったら実験の話をもっと聞かせていただけませんか？」

「……………えっ?! いいの?」

何故だか、顔を赤らめるハンジ。理由は簡単だ。エレンの様に、こう言ってくれる人間なんて 今まで殆どいなかったから。

「はい。明日の実験の為に詳しく知っておいた方が良いかと思えますし」

この時——人類^{エレン}は思い知る事になった。

巨人に対する愛が深すぎて、時をも忘却の彼方。人間の三大欲求まで忘却出来るハンジ分隊長の本当の脅威を——。

「そ、そうだね。うん。……………今の話じゃ省略した部分も多かったし……………。もっと詳細に話すとするよ。ちよつとばかり長くなるけど……………」

勿論ちよつとな訳ない。

「……………明日、エレンは大丈夫だと思っ? ペトラ」

「うーん……………、目の下にクマ作ってるのは確実だね」

「ふあああ…… ま、自分から首ツッコんだんだし、仕様がないよなあ。これぞ自業自得……、つてか 一度は経験しとくのがベストか。今後の為にも」

部屋の様子を盗み聞きしている2つの影。

ペトラとアキラである。盗み聞きくと言うか、部屋へと戻る際に少しばかり用事があつてたまたま通りかかったただけだったりする。ハンジの声は大きいし、エレンの反応も少しばかり気になったから。

「さて……、オレらは寝るか？ ペトラ」

「ふええっ!? ね、ねるっっ!」

「……んん？ なに驚いてんの？ 寝ないのか？」

「い、いやっ 寝る……よ？（紛らわしい……っ）」

ハンジばりに顔を真っ赤にさせるペトラだが もう暗いし顔見えないから判らない。

「で、何で頬を抓るんだよ……。眠気が飛ぶだろお……くああ……」

「や、何でもない。……大丈夫じゃん。十分眠そうだよ（……アキラが悪い！）」

30話

結局エレンは夜通しハンジの話を訊かされ続けた様子。

これでしつかりと身に染みだ事だろう。ハンジと言う者の正体を……。

朝日が東の空から登り始めて、この城にも届いてきた辺りから アキラは眼を覚ましていた。

その後、暫くは布団の中で後5分……の格闘を暫く繰り返した後、何とか完璧に意識を覚醒させることが出来た。駄目押しに顔でも洗おうと部屋から出て通路を歩いていると——、まだ話し声が聞こえてきたのだ。

非常に熱心。本当に熱心。鬱陶しい程熱心。気が狂つてると思わなくても仕方ない程熱心な声が。

『ちよつとエレン！ ぼーつとしてないでまだよく聞いて！ ここからがかなり重要なんだよ！』

『へあ!! は、はいっ!!』

『まず、巨人との意思疎通に関しては、これは闇雲にやってる訳じゃないんだよ。事例があつてね。私の班に所属してるイルゼ・ラングナーってコが……!』

エレンはまず間違いなく、後悔している事だろう。

軽く時刻を確認するが、まず間違いなく軽く6時間は超えている。勿論休憩時間なんて存在しない。仮眠時間なんて、以ての外。

「……あいつら、確か今日実験するって言つてなかったっけか? 夜更かしなんぞして、大丈夫なのか? まー、とりあえず オレはかんけー無いこと、か。掃除するくらいの体力があれば十分だし……。くあああー」

大きく大きく欠伸を繰り返しているのはアキラ。

『朝は強いとは言えない。低血圧だつて言つていいかも shouldn't ……と自分自身で周囲に言ったりしているのだが、一斉に『それは無い』と否定されてしまったっている。無茶苦茶な身体能力、無茶苦茶なハンジの要求に応え続けているアキラが、そんな繊細に出来ている筈がない、という事だ。

でも いまだに『何故だ?』とアキラは判つてなかつたりするのはご愛敬だ。どんな事であつても、自分自身の事になれば見えにくいらしいから。

「んくっ んくっ あ、おはようアキラ」

「ああ、はよーさん」

ばったりと出会ったのはペトラ。

丁度、目覚めに一杯のお茶を きゅっ と飲んでいる所の様だ。

「んー……喉乾いたな。よし、オレも一杯貰うかなー」

「えっ……!」

ペトラは この時びーんっ! ときた。

そう、今自分はお茶を飲んでいます。まだ コップの中には残っています。

じいっ とペトラはコップを見る、その後 コップ自体を見る、中身を覗き込む。またコップを——と3往復くらいして、ちゃんと中身が入っていることを再々確認した。

『あ、アキラも欲しい? 飲む?』

ペトラは自分が持っていたコップを差し出した。

『ん? 確かに欲しいと思ってたけど、良いのか? ペトラが飲んでたんだろ?』

『うん。私実は2杯目だからね。ちよつぱり飲み過ぎちゃってー』

と、極自然の流れで差し出して。

『そつか、ありがとな。ペトラ』

と、アキラも極自然の流れで頂いて、丁度ペトラが口を付けてた部分にちゅつと
……。

「ぷはあーっ やーっばコレだねえ。朝一で飲むんは！ 目の覚めるつてもんだ」
「……………え？」

悶々と朝つぱらから妄想を膨らませていたペトラだったのだが、気付いた時にはアキラはさつさとぐいつと一杯やってた。

結構長めの妄想だったから その間にアキラはペトラの前を横切つて自分でコップをゲツト、そして注いでぐいつと喉越し爽やかな状態。つまりもう飲み干してしまつたと言う事。

因みに、この手のペトラの試み。色々なシチュエーションがあるが、今回のが初の試みと言う訳ではない。

似た様な事をライバル^{イバル}がいない事を良いことに試して試して……でも、成功した試しが一度も無いのだ。不思議な事に全くの0。何かが妨害でもしてるんじゃないかと思うレベル。

何故かは不明だが 成功率0%の鬼門である。

「ほれ、ペトラも もう一杯行つとくか？」

返事を返す前に とくとくとくと、とアキラはペトラのコップに注いだ。

なみなみと注がれるそれは、まるでお茶くと言うよりお酒くの様だ。それはそれで注いでくれた事に関してはありがたいとは思うのだが、シチュエーションが全く違う為、不満が残る。

「……ありがとっ」

ペトラは ぶすつ、としてる不満顔を隠す様に、直ぐに受け取って飲み干したのだつた。

何処か遠くから『抜け駆けしようとするからだよー!!』とお叱りを受けた様な気がするペトラだった。

そして この残酷な世界で、何処か温かい平穏とも呼べるこの一時は、直ぐに終わりを告げる事になる。

そろそろ朝食だ、と熱中してるハンジと半放心状態のエレンを呼びに入ろうとしたその時だった。殆ど同時にこの旧調査兵团本部に火急の知らせが届いた。

『ハンジ分隊長!! こちらにいますか!?!』

この大きな城内全てに聞こえるかの様な音量で入室してきたのは、ハンジの部下の一人。

ハンジの姿を確認したと同時に返事を待たず、続けた。

異常事態が発生したと言う事を。

『被験体が……2体の巨人が殺されました!』

それは、捕らえた巨人が殺された、という報せだった。

ハンジは半狂乱になりながら現場へと急行。

それにリヴァイの班も続いた。

現場では巨人を殺した時に共通して発生する蒸気がまだ出ており、その中には巨人の白骨体の影がくつきりと見えていた。

それを一目見た瞬間から、ハンジは大声で奇声を発しながら泣き喚いていた。何度も何度も『ビーン』と『ソニー』の名を叫びながら。

通常 巨人は人類の天敵であり、駆逐すべき存在だとこの壁中の人類の殆どが思っている筈だから、それが死んだ所でどうという事でもない……が、今回の別だ。巨人の正体を知ろうと兵団を上げて調査していたのが、例の2体の巨人である。

「嘘だろ……。これ、兵士がやったのか？」

「ああ、そう言う話らしい。オレは見えてないが目撃情報はある。そもそも見なくても……、これじゃ一目瞭然だろ？」

嚴重に拘束していた為、巨人が逃げ出す事はおろか、動く事さえ満足に出来ない。更に巨人は飲まず食わずでも死ぬ事が出来ない。殺す唯一の方法は巨人のうなじ部分を破壊する事のみしかない。

「目撃情報はこの見張りからだ。気付いた時にはこのありさまだったらしい。それに立体機動を使って逃げてるヤツを見たつてよ」

殺された瞬間こそ見ていないものの、立体機動装置を使って逃げ去る所の目撃情報はある為、殺されたと判断した様だ。

犯人はまだ捕まっていない。

「何処の馬鹿だ？ 貴重な被験体を殺すなんてよ」

「馬鹿じゃなかりやなんなんだろうな。オレにや皆目見当もつかんよ」

「ハンジ分隊長も随分あの巨人に入れ込んでいたからなあ。……当分続くだろうさ。あの様子だと」

憲兵団のメンバー達が其々口にしていた。

巨人を使った実験自体は調査兵団が主としているが、ここの管理、そして監視については憲兵団が行っている。明らかに警備側にも過失がありそうなのだが、我関せずと言わんばかりに他人事の様子に話し続けている憲兵団は何処か滑稽に映った。

巨人を相手にするのは出来ないが、全く動けない巨人くらいは見る事が出来るから、と最も安全な役をそれっぽい動機と理由をつけて買って出たのだが、ご覧のあり様である。その事を気にした様子を見せないのも困りものだ。

「……………ふん。行くぞ。後は憲兵団の仕事だ」

リヴァイは それとなく判っていたと言わんばかりに、吐き捨てるようにメンバー達にそう告げた。

「……………巨人を、殺したか。憎いから……………？ だが これでは……………」

アキラは 巨人が燃え尽きているかの様な蒸気を発生させてる所をじつと見ていた。

巨人に怒りを覚えているのは正直判る。人類の殆どが巨人によつて殺されたのだから当然だろう。その中には知り合いが、仲間が、親族がいた事だろう。それを考えたらよく判る。

だが、今回のこれには違和感しか感じられなかった。

考えを巡らせていたそんな時だった。エルヴィンの声が聞こえてきたのは。

「エレン。君には何が見える？ ……敵は、なんだと思う？」

エレンに対して問うているエルヴィン。

その言葉の意味がはつきり言えば 解らなかつただらうエレンは。

「……………はい？」

ただ首を傾げる事しか出来なかつた。

だが、その答えで十分だったのだろうか、エルヴィンは軽く笑うと。

「……………すまない。変なことを訊いたな」

そう言葉を残すと 人込みの中へと歩いて行った。
そして エルヴィンが完全に見えなくなった所で。

「今の質問……いつたい……」

エレンは エルヴィンに直接聞けなかった事を呟いていた。

エルヴィンの言葉を思い返して 何度も何度も考えるが、やはり意味が判らない。

「まあ 深く考えるな。あれだけで エルヴィンの考えを読めるヤツなんて数える程しかいねえよ。調査兵団にもな」

「……そう、ですか」

考え続けているエレンの肩を叩きながらそう言うのはアキラ。

確かに質問の内容をまた思い出すが、短過ぎるしそれだけで理解するなんて 新人である自分には無理だろう、という事が理解出来た。

それと同時にある疑問も頭に浮かぶ。

「アキラさんは 今の質問は……？」

エルヴィンとアキラは 長い付き合い——と思ってるのはエレン。

いつからか、リヴァイとアキラの名は街中に広まった。エルヴィンの懐刀とまで呼ばれたアキラだから そう思ったとしても不思議じゃないが……実は付き合いの長さを言えば そこまでの程でもなかったりする。

「ん？ ああ。……どうだろうか？ エルヴィンと答え合わせしたとしても、何言っても『正解！』とは言ってもらえなさそうだし、何が正解なのか正直判らんよ。エレンの『質問の意味が判らない』って答えの方が、エルヴィンが望んでた正解という見方だつてあるだろ？」

エレンの肩をぽんつ と叩くとアキラは手を振りつつ移動を開始。

「おい。早く行くぞ」

リヴァイも移動を催促。

エレンもそれに従い共に離れていった。

いつまでも耳に残るハンジの泣き叫ぶ悲鳴を置き去りに……。

その後は、全力を挙げての犯人探し開始。

ハンジに至っては『親の仇だ!!』と言わんばかりの剣幕で搜索している様子。まさに鬼気迫ると言った感じだ。

そこまでの巨人への愛に正直脱帽してしまうのはアキラというと、リヴァイと共に一服していた。

「……あん時、あのまま齧らせた方が良かったか？ アイツは」

「そう言うな。……アレでも力あるヤツだ。失えば大打撃になるだろ」

「まあ、判ってるつもりだけどな。変人といやあピクシスのおっさんだつて似たようなもんだし」

「変なヤツ、という意味じゃお前も一緒だがな」

「うっせーっ！ アイツと一緒にすんな！」

いつも通りの軽いやり取りもそこそこに、エルヴィンが2人の元へとやってきた。

「これから勧誘式では 極めて正直に話すつもりだ。エレンの巨人化。そして彼の生家の地下室の秘密についても」

「まあ、隠していたとしても、公にしたとしても大して変わらん。シガンシナはここからじゃ遠すぎる。知った所で行動に移そうとしても無理があるし、何より正確な位置はエレンにしか判らん」

リヴァイの言葉も最もだ。

しかし、最高機密と言ってもいい巨人の秘密についてを公にする、と言う事は『そこまで秘密に近づけているのか!』と言う大きな希望をその思考に植え付ける事が出来ると言っている。

巨人がこの世界に、いや マリアの内側に一体 何匹、何十匹、何百匹いるか判らない現状では正直ゴールと言うものが見えない。ゴールの見えない、判らない進行程心を折るものはないのだから。

そこでエレンの事を、巨人の秘密を掴めるかもしれない、と言う事を話しておけば、少なくともゴールは明確に見えてくるのだから。

「……だが」

エルヴィンは視線をアキラへと向けた。

「アキラ。お前の事に関しては、今後は濁して話す。兵団としての活動の際も可能な限り。可能な範囲内でだ。鼓舞をする際にもな」

その言葉を訊いて、アキラはゆっくりと頷いた。リヴァイは眼を瞑り 答えた。

「そうだな。……毎度毎度、巨人の侵攻のタイミングが良すぎるのも考えものだ。一度目も、二度目も、調査^オ兵団^レが壁内から遠く離れた地点で起きている」

「だな。あれ程イラつく手はない。小細工無しで正面からつてのがあいつらだと思って

た……それに あいつら、考える頭は持っていないもんだとずっと思ってたが……、エレンの1件で状況が、オレ自身の認識も完璧に変わった。相手はオレ達の事も知ってるんだろうさ」

リヴァイとアキラ。

2人はエルヴィンが伝えたい事の根幹を見抜いていた様だ。エレンの事を話す真意と逆にアキラの事は話さない真意。

「だが、今後はオレとエレン、リヴァイも基本セットだ。前の審議の内容が公に公開された以上周知の事実。……だから 次回からは 全面的な殴り合いになる可能性だって高くなると思うぜ。ひよつとしたら、秘密にしときたかった情報なのかもしれんしな」
アキラは、ぱしつ と拳を合わせてそう言う。

殴り合いとは表現がおかしい気がするが、もうその辺りにツツコミを入れる様なのはこの場にはいなかった。

「つまり 今回の新人を含めた大規模な壁外遠征……、そう言う事 なんだろ？ エルヴィン」

「ああ……。そう言う事だ」

「アキラにしちやあよく判ったじゃねえか」

「あからさま過ぎだこゝまで来たら。……それに時期でも他も色々と考えたら、可能性

の面じゃ結構高い。それに 可能性は1%でもありや十分つて常日頃言つてるだろ、お前らが」

ははっ、と笑うアキラ。

だが、笑つたかと思えば次は視線を鋭く 強くさせる。

「だがエルヴィン。これも判つてくれよ。甘い考えつて一蹴されるかもしれないが、オレがもう仲間を死なせたたくない。失いたくないって思つてる事もな。……手の届く範囲で それでも見捨てろつて選択は強制で与えないでくれ。……オレも、自分で判断する」

「ああ。勿論だ」

「オレはそれについては以前否定しただろ。もう忘れたか？」

「……ただ釘刺をしただけだ」

その会話を最後に、エルヴィンとは別れた。

これから新人の勧誘式が始まる時間だから。

「リヴァイも犬死と無駄死には嫌いっつてたろ？ ありや嘘じゃないだろ？」

「当然だ」

31話

「結局 無許可で立体機動装置を使った兵士は見つからなかった様だ。……いつたい誰がやったんだろうな……」

グンタはエルドと話をしていた。

ハンジを中心に、一丸となって……とは言わないが、とりあえず殺巨人事件を捜査し続けていたのだが、その後犯人は見つかる事は無かった。

立体機動装置の整備は義務付けられており、主要部分の更新も当然ながら記録・登録される。それらの記録から使用したか否かは大体絞る事が出来るのだ。そこから糸口を見つけ出そうとしたのだが、見つける事が出来なかったのだ。そしてそれ以上の捜査は困難を極める。立体機動装置を使用した、と言う手掛かり以外が無い為である。

「さあな。……そつちも確かに気になるが、今はこの後の新兵勧誘式の方がどつちかと言えば心配だな。確かに調査兵団は近年で飛躍的に向上して成果、結果を残してきたが

…… その殆どがアキラの功績だと言っていいとオレは今でも思ってる。仲間が増えるのは正直歓迎したいんだが、入る様な酔狂なヤツはいるのかねえ。………ふふ、そういうや 最初の頃にアキラに成果の件を言ったら、結構マジに怒ってたよな？ あまり言わない様にしてた、っていうのはオレだけじゃないだろ？」

エルドは、そう言いながら笑った。

大きな作戦の際には基本的にアキラを中心とした攻勢に出る。直接的に戦い全てにおいて勝利出来ると言っているアキラは、活動限界時間はあるものの基本的に対巨人戦において無敵の力を誇っている。(仮にリヴァイ兵長が操る立体機動以上の敏捷性で動き続ける様な、そんな巨人がいたら、悪夢と言っているが 今の所は大丈夫な様子)

因みに、そうやって煽るとアキラは照れる。そして アキラに負担をかけてばかり……や、一人の成果等と言った途端に、アキラは怒る。鬼気迫るとまではいかないが、表情が明らかに変わる。

確かに目立つのは圧倒的にアキラだ。全員が色々と戦術を駆使し 何度も斬り付けて巨人を倒しているのに比べて、アキラはたった一発のパンチで巨人を倒してしまうのだから。

だが、それでも今は1人じゃないから戦えていると言う事をアキラは強く思っていた。

『……オレ1人で戦ってるんじゃないだろうがこのアホっ！ それに お前らがオレを引つ張ってくれなきゃ、……お前らがオレの傍にいてくれなきゃ、こんな修羅場なんだぞ！ 幾らなんでも精神の1つや2つ 逝ってるっの！ こんなオレだってお前らと同じ人間だ。足の一本でも潰れりや走れないし、心臓や頭が潰れりや死ぬ。馬鹿げた力は持つてても、中身はなんも変わらねえ。お前らと一緒になんだよ！』

とだ。

それが、調査兵団の皆が 本当の意味でアキラの事を深く信頼した瞬間でもあったかもしれない。

「はは。当たり前前だろ。オレだつて同じだ。あの力もそうだけど、ハンジ分隊長の無茶な実験に応えてるトコもやばいと思ってるし。そう思っちゃまうのが普通だろ。……だけどまあ随分と慣れたもんだ、最初はズーっと 同じ感想ばっかだったんだけどな」

「あんな光景一度見たら絶対忘れんって。……まあ、それはさておき 新兵たちはあの時の巨人の攻撃で、大部分が思い返しているだろうよ。……普通は、普通の人間が 巨人と戦ったとしたら、生き残る可能性なんて殆どないって事を」

人類が巨人を圧倒する事も確かにある。それは優れた戦術と技能、そして一部の兵士の能力があつた為で、それらが備わっている者など極一部しかない。その極めて優秀な人材による大きな成果が、活躍が、大きく伝わり 調査兵団は大きくなった。

それでも、あの巨人の襲撃ではつきりと認識した事だろう。……巨人には勝てないのだと。それは夢物語なのだ。

「判るよ。あの一件があつたばっかりだったのにさ、……さつきも言ったが こんな短期間で調査兵団に入団する、なんて言うのは正直酔狂だつて言える。……熱狂的なファンが中にいるだけかもしれないが、それでも自分の命の方が大切だろ？ 普通は」

「普通はな。おお、そうだエレン。お前の同期にウチを志願する様なヤツはいるのか？」
傍で控えていたエレンに訊く。

エレンは 監視付きとはいえ事実上 調査兵団に所属してると言っているいい身分だ。だがほんの少し前までは訓練兵だったのも忘れてはいない。104期のメンバーの中には逸材も揃っている事を、リヴァイ班のメンバーもよく知っていた。それもその筈。その104期の事を特に目にかけていたアキラが度々口にしてきたから。

「はい。いますよ。……あ いえ、今は……今はどうか判りません」

あの地獄を見た。

巨人が人を……、人が喰われる所を見た。

アレを見たからこそ、今皆がどう思っているのかが判らないのだ。

エレンの中で、判るとするなら——常に自分の傍にいるミカサの存在だけだった。

そして、場面は変わる。

104期のメンバー達の元へと。

自然と顔見知りのメンバー、アニ、アルミン、サシャ、コニー、ライナー、ベルトルト、クリスタ、ユミルが集まっていた。

集まつてはいたが、皆話す事なくただ黙つて勧誘式を待つていた。

己の進むべき道は何処なのかを考え続けていた。

そんな中に近づいていくのはジャンだった。

サシヤがジャンの存在に気付いて声をかけた。訊きたかつた事があつたから。

「ジャンは、どうして調査兵団に？ その……怖くないのですか？」

ジャンは進むべき道をもう既に決めていたのだ。

そう、あの日に。

仲間達を弔つたあの日に。

「は？ 嫌に決まつてんだろ。調査兵団なんか。オレはずつと憲兵団に つつてたろ

？」

「え？ ……じゃあ、お前はなんで……？」

元々頭が弱い、と公言しているに等しいコニーだが、コニーじゃなくても混乱するの
も無理はないだろう。

ジャンの言葉はまさに矛盾そのものだったから。

あの日。仲間達を送る炎が消えて 大きな背中も見えなくなつた後、ジャンは宣言し
たのだ。

『調査兵团に入る』

と。

だが、今のジャンのセリフはどう考えても逆だろう。

そして ジャンは続けた。

「それに有能なヤツは調査兵团になる責任があるなんて言うつもりもねえよ。……何より、オレはエレンみてえな死に急ぎ野郎とは違う。間違つても一緒にすんなよ」

ジャンの真剣な表情は、その言葉に嘘偽りないと言う事を克明に物語っていた。

そして目を瞑り——自分の顔に手を当ててゆっくりと離しながら目を開いて答えた。本当の理由を。

「オレは……誰かに説得された訳じゃねえ。そんなもんで、言葉なんぞで自分の命をかける訳でも、かけれる訳でもねえ。……だがオレは 見ちまつたんだよ。……巨人の事も……あの馬鹿でけえ巨人の事さえも霞んじまう様な、でっけえ人の背を。……生まれて初めて心の底から尊敬出来る、そんな人の背を見ちまつたんだよ。その時から オ

レの中で道は生まれただ」

ジャンの目に映る光。それは　あの時の、皆で見送った時の炎がその目に映っているかの様だった。

そのセリフだけで十分だった。

恐怖が完全にくつた訳はない。まだ　精神の大部分を占めている。

けれど、その精神の中には、誰しもが一粒の炎が残っていた。仲間達の死も全部　その身に纏って進み続ける人もいるんだ。そう、言葉じゃない。その姿を見ただけで十分だったのはジャンだけじゃない。

その時だ。

「訓練兵、整列!!　壇上正面に倣え!」

一斉招集が掛かった。

勧誘式始まりの合図だ。

招集命令が掛かったところで、ジャンはそれ以上何も言わず　言われた通り壇上正面へと整列していた。他の者達も従った。壇上には調査兵団団長のエルヴィンが丁度

自己紹介をしている所だった。

エルヴィンの説明は、彼が言った通り、エレンの巨人化の事、そして生家の地下の事。全て包み隠さず言った。

100年に亘る巨人の支配から脱却できる手掛かりを掴める事が出来る、と力強く断言して。

周囲の顔色も当然ながら変わる。

巨人の支配が、恐怖の支配が終わるかもしれないと言う夢物語なのだから。

そして、何故エルヴィン団長がそこまでの情報を公にするのか、強く疑問に思ったのはアルミンだった。そして、ミカサも同様だ。

ミカサはエレンの家で暮らしていた。エレンの家がミカサにとつての実家だと言っているから。その地下室についても、ミカサは知っている。エレンの、そしてミカサの父親でもあるグリシャ・イエーガーが、地下室の鍵をエレンに託したのも知っているから。

何か意図があるのではないかとアルミンはエルヴィンの表情をじつとみていた。

「団長は一体何を……何をしようとしてるんだ？」

「え？」

アルミンの言葉。その意味まではミカサは判らず、どういう意味か？ とアルミンに訊こうとしたが、その直ぐ後にエルヴィンの話が始まった。

「ただ……、ここからが最も重要だ。彼の生家があるシガンシナ区内の一室をじっくりと調べ上げる為には、ウォール・マリアの奪還が必須となってくる。巨人を相手にしながら、などは当然不可能だ。彼の家を破壊されてしまう可能性が高く、そうやってしまえば 全てが水の泡となってしまうからだ。……つまり目標はこれまで通りだ。トロスト区の扉が使えなくなった今、東のカラネス区から遠回りするしかなくなった。4年の歳月を使い、作ってきた行路も見直さなければならぬ現状。……人材はどうしても必要となってくる」

エルヴィンは、ゆっくりと そしてはつきりと答えた。

「我々調査兵団の事は諸君らも知っている通り、此処5年で飛躍的に進歩してきたと自負している。調査兵団発足の歴史を遡り確認すると、最も犠牲者が多かった時期と比べると、今現在その数は8割以上も減ってきている。それは嘘偽りない。確かな数字だ」

エルヴィンの言葉で目を輝かせる訓練兵。

だが、その目は長くは続かなかった。

「……だが、安易な考えを持たない様にする為にも告白しておこう。それは調査兵団全

体の戦力が高い為、効果的な戦術である為、極めて優れた兵法を用いている為、……といった様な理由では決してない」

その説明の意味がいまいち判らない訓練兵達。

数少ない訓練兵達の中で判っている者も当然ながらいる。

彼の戦いを間近で見ている者達だけだ。

「……ただ、実際にその光景を目の当たりにしている訓練兵の絶対数は少ないと言っている。い。」

その後エルヴィンは、当たり障りのない言葉を選び抜きそして紡いでいった。

つまり、新人兵が容易に出来るものではない、と言う事を言葉を上手く使いながら説明していったのだ。

犠牲者の数は明らかに減っているが……0ではない。その0ではない部分、……その大部分が新人兵になる可能性が極めて高いと言う事を遠回しではあるが、説明していた。云わば脅しの様なものだと言える。

「(……アキラきょうか…、アキラさんの事ははつきりと言わないのか……?)」

アルミンは、この時少なからず疑念を感じていた。

エレンの巨人化。そして、エレンの家の地下室の秘密。即ち巨人の正体に直結し

かねない秘密を話しているのだが、アキラの情報に関しては殆ど話していない事についてだ。

アキラの知名度で言えば 団長をはじめ、リヴァイ兵長等と何ら遜色ない。

確かに口で言った所で到底信じてもらえとは思えないだろう。だが、実際にアキラに実演をしてみたら事は容易に出来る。あの超人的な力については別としても 彼の元で訓練をしてきている兵士達は、幾度となく彼を見てきていた。全ての実技を実演している姿を見てきていた。

だからこそ、証明する事も簡単だと思えるのに、何故話さないのだろうか。

それが アルミンの疑惑だった。

そして、エルヴィンの演説は続いた。

遠回しで言っていた事を、ストリートに伝えた。

「決して隠したりはしないのが、新兵の最初の壁外遠征でのリスクについてだ。……………確かに犠牲者は減りはした。だが それでも 依然と新兵の生存率に関しては決して高いとは言えない。事実 これまでの調査兵団の犠牲者たちの殆どが経験の浅い兵士達だった。——その死線を何度も潜り抜けた者達が、やがて生存率の高い優秀な兵士へとなってゆくのだ」

この演説を聞き、始まった最初の頃の気持ちを持ち続けていられる新兵たちは一体何人いるだろうか。

もう、ざわつきも期待する様な眼も無い。ただエルヴィンの演説しか聞こえてこない。

「そしてもう一つ。今説明をしておかなければならないだろう。今期の新兵調査兵も一月後の壁外調査に参加してもらおう。巨人の襲撃がいつ来るか判らない現状で、ゆるりとはしてられないのだ。……皆今一度考えてほしい。壁の外の世界では 巨人が蔓延っている。今もその巨体と大口を開けて待ち構えている。……壁外では安息の地などは存在しない。この場に残る兵士達の命の保証は一切ない。そして、先の戦いの結果と今の惨状を踏まえた上で、自分の命を賭してやると言える者はここに残ってくれ。――最後は自分自身に訊いてみてくれ。人類のために心臓を捧げる事が出来るのかを」

エルヴィンは一呼吸置いた。

ぴんっ……と静けさが支配したのを感じたのと同時に。

「以上だ。他の兵団の志願者は解散したまえ」

その発言は 傍から見れば必要以上に脅し過ぎているとしか見えないだろう。直ぐ

となりで控えていた調査兵団のメンバー達も困惑を隠せられなかった。人材を欲しているのは本当の事だ。前半部分は良かったと言えるだろうが、後半からは違う。恐怖心を蘇らせると言っていていいから。

それは結果となつて表れていた。

1人が動き出したかと思えば瞬く間にこの場から離れていく。

動かない者もいるが、恐らく自分自身との戦いを繰り返している事だろう。目の前で巨人と相対し、殺された者も見ている筈だから。

そして——今度喰われるのは 自分自身かもしれない。

そう連想させていても不思議じゃない。

聴て、200人以上いた人数は10分の1程にまで減った。

だが、そこから動く者はいなかった。

「……君たちは、死ねと言われれば死ねるのか？」

皆へのエルヴィンの質問。

その質問には、当然——『死にたくない』と答えていた。

誰の声かは判らない。だが、この場にいる全員が共通する想いだろう。誰もが心臓を捧げたからと言って、死にたい訳じゃない。死ねと言われて 死ぬことを選べる訳がな

い。死の恐怖を、体験したのだから尚更だ。

エルヴィンはその答えを訊き、静かに頷いた。

「そうか……。皆良い表情だ」

全員の顔を見まわした後に、エルヴィンは表情を引き締め、一際大きな声で言った。

「では今！ 此処にいる者を新たな調査兵団として迎え入れる！ これが本物の敬礼だ

！ 心臓を捧げよ！」

ゆつくりと、それでいて今まで見てきた誰よりも強く、己の心臓を圧している様に見

えた。

『ハッ!!』

応える様に全員がそれに従い己の胸に拳を当てた。

だが、例え誓ったとしても、恐怖が頭から離れることはなかった。

「……………これ以上、自分^{オレ}を 嫌いになるな。…………オレは見た筈だ。決めた、筈だ…………。見失うな…………」

「う、…………いや、嫌だよお………… こわい…………、村に、帰りたい…………」

「ああ………… もう、いや、どうでもいい…………」

言葉を発する者。

ただただ沈黙する者。

そして、黙して涙を流す者も。

「っ……………」

「泣くくらいならよしとけってんだよ……………」

それは、調査兵団の仲間が増えた瞬間だった。

「第104期調査兵団は敬礼をしている総勢21名だな。よくぞ恐怖に耐えてくれた。……………君たちは勇敢な兵士だ。心より尊敬する」

3 2 話

アキラは 勧誘式が終わっても暫くその場に残っていた。

もう解散し誰一人残っていなかったが、ただただ、訓練兵達が直立不動で訊いていた場所を見ていた。

「……ふるいに掛けてる、か。多分そんなトコなんだろう？ エルヴィン。今のは」

アキラは今回の演説について 全てを訊いていた訳ではないが、エルヴィンの話を訊いてすぐにその意図は理解した。そして残っている兵士達も解散した後もアキラはこの場に残っていた。

今はもう誰もいないこの場所で、嘗ての教え子だった者達の思い浮かべる。

その皆の姿が今でも鮮明に目の前に見える気がした。

あの訓練生時代の思い出も脳裏に蘇ってきていた。

でも私情は禁物である事は重々承知の上。その迷いが新たな犠牲者を生むであろう事もアキラは よく判っているから。

可能性は低いと言えるが、もし——エルヴィンやリヴァイ、そして自分自身が考えて

いる通りであつたとすれば、間違ひなく犠牲者は増えてしまふだろう。今までとは比較にならない程の犠牲者が。

知恵を殆ど持たない獣も同然な巨人だつたが、それに知恵が備わつただけでなく、姿を隠し、息を潜めているとしたのなら、間違ひなくだ。それに、自分の様な力を他人にも伝え教える事が出来れば、とアキラは最近はよく思つてしまふのだ。

突如現れる巨人。それも中には50 m級の巨人もいる。当然突然現れたその巨人に抗う術など普通の人間には持ち合わせていない。それは調査兵団とて同じだ。常識の範囲外からの強襲なのだから。

でも——自分なら。この力なら……。

「——セコセコしてねえでオレの所に来いよ。50 m超級だか、鎧だか知らんが、纏めて相手してやるからよ」

自然と力が籠つてしまう。

皆を奪つた巨人に対して強い憎しみを抱いている。

でも、一粒の迷いがアキラの中には存在しているのも事実だつた。その巨人が、もしも——。

「……………アキラ？」

そんな時に声をかけてきたのはペトラだった。

「まだ残ってたんだ。どうしたの？」

ペトラの顔を見たアキラは、自然と籠ってしまった力を抜いた。

「いや。……さっきの事を考えててな」

「さっきのつて、団長の話？」

「ああ」

「ちよつと必要以上に脅かし過ぎだつて皆も言ってるけど……アキラはどう思う？」

ペトラの問いにアキラは少しだけ考えて答えた。

「そう言う意見もあるだろうな。調査兵团つて恒常的に人手不足だし」

飛躍的に向上したとはいえ現状の調査兵团は、エルヴィンが言う様に人手が足りていないのが現実である。如何に強大な力を兼ね備えた者達がいた所でそれは個の力だ。個の力には当然ながら限界がある。

手の届かなかつた命がある。

目の前でなくなつた命がある。

アキラはそれらを思い描きながら、続けて答えた。

「だが、あれくらいが丁度良いんじゃないか？ エルヴィンが言った言葉に嘘偽りはな

い。壁の外はそれ程危険なんだ。調査兵団に夢を見る。調査兵団が夢を魅せるつてのは間違つてるとは思わないが……、安易に手を伸ばして良い場所でもない。……こんな事言つてちや 皆からクレームが来るかもしれんがな」

そう言つて少し笑つた。

人手不足、と言う事はそれだけ 1人1人にかかる負担が大きい。人が来なければそれが解消されない。つまり 皆しんどいままだから、文句の1つや2つ来てもおかしくないだろう。エルヴィンじゃなくて 脅かしたのがアキラだったら 絶対に来てる。

ペトラはそれを考えつつ笑顔を見せた。

「そうだね。でもそれは団長が言つたから、特に効果的だつたつて事だし。……仮にアレをアキラがやったら 絶対皆苦笑いして終わりだつて思うけどね」

「んだそりや? つまりなんだ? オレが言つたとして 真面目に受け取る奴はいないつーのか?」

「違うよ。……それだけ 皆信頼してるの。安心だつて出来る。こんな時でも笑みを見せる事が出来るくらいにね」

ペトラはそう言つたとアキラの手を取つた。

アキラは、少々苦々しい顔をしているが、聴てため息を吐く。

「なんだろうな、正直な所 全然釈然としないつてな」

「日ごろの行い、だね？ そーいうのってさ！」

「はいはい。善処しますよ、って事で 一度戻るか」

「うん！」

回れ右をしてアキラは歩き出した。

少し離されたからペトラはアキラの隣に早歩きで向かって その手を取ろうとしたけど。

「……日頃の行いってほんつとそーだよねー？」

「つつ!!」

いつの間にか、もう一人この場に来てた。

「あれ？ イルゼじゃん。ハンジのアホに付き合ってたんじゃないのか？ 巨人殺しの

犯人探し。歓迎式もすつぽかしてやってたんじゃ？」

そうイルゼである。

随分と、久しぶりな気がするが気のせいだろう。

「気のせいじゃないっ!!」

「って何が？」

「……何でもないよー！」

少しご立腹な様子で、少々気になって訳を訊こうとしたアキラだったが、イルゼが続

けて言う方が早かった。

「今日はエレンの巨人の実験だからね」

「あー……、納得」

ハンジは、巨人達を殺された事に対して異常な執念を掛けていた様だけど エレンの実験に対する情熱が勝つたみたいだ。

そう言うハンジの心理を超容易に把握したアキラは速攻で納得してた。

「と言う訳で、いつまでたつても戻ってこない2人を連れ戻しに来ました！ リヴァイ兵長の命令です！」

「……絶対、それ私怨入ってるよね!? メチャ絶妙なタイミングだったよね!? いつもそーだよね!」

「うるさいなっ！ 良いじゃん！ ペトラって、すつごく優遇されてるんだから！」

「何言ってるのよ！ イルゼだってじゅーぶんしてるじゃん！ してたじゃん！」

「何時！ 何日の何時？ それに何分ごろ!? いったい何話で!」

2人の言い合い。

これは、今に始まった事じゃなく いつも通りだったりする。(場面を書いてないのは愛敬で)

言い合いが続くと非常に長くなるのも判ってるので。

「先行ってるからなー」

とアキラが一言いって離れてくのもいつも通りである。

□□ 調査兵団 宿舎 □□

アキラがやや遅れて戻ってきた時には、もう他のメンバーは殆ど集まっていた。いなのはペトラとイルゼのみ。始まるのはエレンの巨人化についてだろう。部屋に備え付けられてる巨大な黒板にハンジが色々と書き込んでるから判る。

「遅えぞ」

「悪い。少しばかり考え事しててな……、ああ、ちよつと2人はオレより遅れるから」

この場に集まってた皆は、イルゼとペトラに関しては簡単に把握。ほんといつも通りの光景だから。詳しく判ってないのはアキラと入ってきたばかりのエレンの2人だけ。

その事に関してもとりあえずいつも通り、2人を除く全員がため息を吐いていた。

変な空気なのは大体読めるアキラだけど、とりあえず今はリヴァイに詫びを入れた後は普通にアキラも参加した。

話の内容は勿論エレンに関する事だ。

「エレン。お前を半殺しに留める方法を思いついたんだ。それを伝えようと思ってな」

「……はい？」

エレンが暴走した時の為に リヴァイやアキラがいる。

訊けない命令だとは思っていても、本当の意味で最悪の場合は、エレンを殺してでも止めなければならぬ事はあるだろう。全員全てを助けるのが理想だと言う事は判るが、そんなにこの世界は甘くないから。

「エレンが巨人化した後、もしも暴走でもすればオレ達はお前を止めなきゃならない。死なないで済むのなら、それが一番だろ？」 エレン」

「そ、そりやそうですけど……、どうやってですか？」

「リヴァイが説明してくれるってさ」

黒板にチョークをもって立ってる姿は宛ら教師の様だ。……随分と目つきが悪い教

師。

「……お前も大体判ってるんじゃないのか？」

「リヴァアイこそ判るだろ？ オレは剣は苦手だ」

「成る程。確かにそうだな。話を進めるぞ」

リヴァアイはそのまま黒板に簡単ではあるが、体の絵を書いた。

「このやり方なら重傷で済む。とはいえ個々の技量頼みにはなるがな。要は、お前がいる場所 うなじの肉毎お前を切り取ってしまえばいい。その際、手足の先つちよを切り取ってしまうと思うが……どうせまたトカゲみてえに生えてくんだろ？ 気持ち悪い」

「……散々な言い方だな。説明もアバウト過ぎるし。もつと全体を斬るって言えよ。うなじの」

「じゃあアキラ。お前やるか？ うなじの部分を消し飛ばすって言うよりは遥かにマシだろ」

「ま、まあ 確かに……。結構難しいからなあ、斬るのって」

斬るより消し飛ばす方が明らかに難しい、と言うか不可能だけど その辺りは置いとく。

アキラの言葉を借りると 散々見てきたから。怒り任せに ぶつ飛ばしてうなじ部分が無くなるのを。怒りの度合いで多少損壊レベルが変わるが、大体は消し飛ばす。首か

ら上も消し飛ぶから。

「ちよ、ちよつとまっつてください！ どうやったら生えてくるとかわからないんです。な、何か他に方法は……」

エレンが不安になる気持ちもよく判る。

前例があるとは言え、毎回同じになるとは言えないのだから。自身の四肢が斬られる事なんて誰も想像したくないだろう。だが。

「それでも、お前や皆が死ぬよりは遥かにマシだろ？ ……外に行く以上危険は常に付きまとうんだエレン。なら 決めるしかない。……覚悟をな」

「あ、アキラさん……」

潜ってきた修羅場の数の差だろうか。エレンは慌てていたのにアキラの言葉はスムーズに入ってきた。そして勿論リヴァイも。

「この後に及んで「何の危険も冒さず何の犠牲も払いたくありません」とでも言うつもりか？」

「い、いえ……オレは」

「ならコイツの言う通りだ。腹を括れ。全員リスクは同じだ。お前に殺されるって危険はな。その辺りは安心しろ」

「……殺されるかもしれないが安心しろって、まあ 無茶な要求だと思っケド、そんな所

だ。ま、実を言うとオレは心配はしてねえよ！ 何だかんだでエレンはやつちまいそ
うだし。それに——」

アキラは 周囲のメンバーを一通り見た後再びエレンを見た。

「最大級に信頼できる面子だ。ここにいるのはな」

そう言つて笑つた。

何故だろうか。

アキラの言う様に 『殺されるかもしれないが安心しろ』と云うのは正直難しい。地
獄を体験した身ではあるが、それでも難しい。でも、目の前の人の笑みを見たら 自
然と身体に籠っていた力が抜けた。……緊張が解れたんだ。

「ノー天氣つて思うけど、アキラはいつもヤル時はヤルからね。だからエレン」

ペトラが一步前に出た。

いつ帰つてきたの？ と云う疑問はさておき ペトラは一瞬だけ微笑みを見せた後
真剣な表情になる。

「……だから、エレンも信じて」

信じられない筈はない。

エレンは強くそう思い ペトラの言葉にうなづくのだった。

「と、話が綺麗にまとまったところで……、じ、じゃあ実験しても良いよね?」

「……リスクは変わらず大きいが。かといつてこいつを検証しないわけにもいかならないかな」

「計画は私がやっていいよね?」

「……好きにしろ」

身震いか? 或いはペンション上がりまくってアドレナリンでも出まくって自分を抑えきれないのか? って感じのハンジ。リヴアイも大体は任せる構えだ。

「あー……エレン。早速でわりいケド、前言撤回するかも。コイツはやっぱ信用ならん」
「ええー 酷いなあアキラ。私とも一緒に色々な困難を潜り抜けてきたじゃないかあー」

「絶対その倍以上は酷い目に遭わされてんだよ!」

ハンジに言い返した後、アキラは真剣な顔になってエレンの両肩を掴む。
「気をしっかり持てよ! ここも大変だぞ!」

「は、はいっ!!」

「よしよし。それじゃエレン。わからないことがあつたら……うん。わかれば良い。自分達の命を賭ける価値は十分にあるしね。じゃあ、早速始めようか」

そして一か月後。
大規模遠征が始まる。

33話

「もう一度確認するけど。……うん。つまりほんとにもう良いって事だよな？ エル
ヴィン」

「ああ」

「本当だな？ もう我慢しなくて良いんだな？」

「ああ」

それは大規模遠征が始まる前日の事。

大規模遠征の目的、それを限られたメンバーだけが伝える為にこの場所に集められた。
た。

「エルヴィンはさつきから頷いてるだろうが。何度も言わせるな馬鹿」

「るせー！ 簡単にはなかなか信じられないんだよ！ あん時から今日までの事を考え
たら仕方ねえだろう！」

リヴァイの言葉に突っかかるアキラ。

約一か月間。

新人達に厳しい訓練を課してきた。更に小規模ではあるが実際に壁外にも数回出て

いる。そこは主にアキラの身体能力を見極める、と言う名目の人体実験場として有効利用してきて、且つ立体機動装置が最大限に威力を発揮できる巨大樹の森林エリアの1つにて 巨人との戦い方を目に焼き付けさせた。

勿論、死が常に隣り合わせになっているのは言うまでも無く、幾度となくアキラは手を出そうとしていたが エルヴィンやリヴァイからのOKサインを貰えなかった。『アキラについて言葉を濁す』とエルヴィンは言っていた。それは行動も制限すると言う事でもあったのだ。

その理由は判る。多数の新兵が入ったこの状況で 容易に見せる事のリスクも察すると言うものだ。だがそれでも、それを踏まえてもいわずにはいられなかった。

『死者が出なかったから良かったものの、出たらどうするんだー！』

そう言わずにはいられなかった。

だが、そんなアキラの訴えにもエルヴィンは表情1つ変えず、ただ事実を伝えるだけだった。

『お前なら死ぬ前に救うだろう？ いや、その気配が少しでも見えたら アキラは指示など訊かん。……見える範囲、手の届く範囲であればお前は仲間達を救う。オレは限界のギリギリまでしか指示を出さんし、その先にも行かせんつもりだ。……だがな、アキラに頼る癖でもついでしてしまえば、それこそ大問題だ。壁外での生存率にも影響してく

る』

それ程までにアキラの事を信用し、信賴しているのは本人も判るし、有り難くも思う。……だが如何せん心臓に悪いのは間違いないだろう。アキラが自分自身で戦うよりも遙かに。仲間達の力を信じてないと言う訳じゃないのは間違いないのだが、それでも仕方ない。

だからアキラはこの一か月間のストレスは酷いものだったらしい。

今エルヴィンから改めて許可をもらったのは 今回の件。本格的な参戦についてだった。この規模の遠征でも戦うな、と言われる筈はないとは思えたのだが やはり安心など出来ない。

「ま、アキラ大分我慢してたよね。うんうん。私には判るよ。だって他ならぬアキラの事だしさっ。」

「……通じ合ってるくみたいな気持ち悪い事言うなよハンジ。オレはごめんだ」

「もー、ほんとつれないなあー。ほら、いつも言ってるでしょう？ 私と君との仲じゃな

「いかっ」

「一体どんな仲だよ！ 研究員と実験動物って感じだろうが!? んな友情あつてたまるか！ なあ エレン！」

「あ、はい。すいませんが オレもその点においては同意です……」

アキラが口酸つぱく言っていたハンジの性質を痛いほど理解したエレン。一か月もあれば十分だと言う事だ。

「おい。アホみてえに喚くな。聴けよまだ話は終わつてねえ」

騒ぐ連中を静めつつ、リヴアイとエルヴィンを中心に、明日の大規模遠征についての会議が続いたのだった。

そして 大規模遠征当日。

「エルヴィン」

「何だリヴァイ」

「ここから アイツを好きに動かすのは、本当に大丈夫なのか？ この場ばにいないとも限らん状況で」

それは昨日よりのエルヴィンの許可についての最終確認だった。

現状では最前列にいるアキラの事である。

アキラとエレンは基本的に同じ班だが、今回最初は別々だ。勿論、それは特別の仕様であり、途中で合流する手筈にはなっている。

「ああ」

言葉は短く、目で頷くだけだった。

リヴァイも『なら良い』と言わんばかりに一瞥した後戻っていった。

「敵は確かに未知数。……だが極上と言っていい餌を撒いた。巨人の秘密。それは恐らくは知られたくない筈。故に今日 餌には喰らいつく。十中八九な。そして 仕掛けも十分。掛ければ良し、掛からなくとも良し。……いや、シガンシナ区を解放すると言う点において言えば、掛からなければ尚良し、か。目的地へ到達する為にも」

エルヴィンの脳裏で、作戦を組みあげる。
そして カラネス区より始まる。

調査兵団始まって以来最大の大規模遠征が。

「団長!! まもなくです! 付近の巨人はあらかた遠ざけました! 開門30秒前!!」

壁上での見張りからの伝令も十分届いた。

それを訊いたエルヴィンは 大きく息を吸い込むと、直ぐに吐き出す。

「いよいよだ! これより人類はまた一歩前進する! 皆、訓練の成果を見せる時だ!

開門、始めッ!!」

その号令と共に、開門が始まった。轟音と共に巨大な門が開かれる。人類を守り続けた門が開かれ、その先に待つのは人類の天敵——巨人が待つ壁外。

「第89回壁外調査を開始する!! 前進せよ!!」

エルヴィンが真っ先に駆け出し、各班がそれに続いてゆく。

そして、それを待っていた、と言わんばかりに姿を現したのは100m級の巨人。
「左前方！ 100m級巨人接近！」

待ちに待った極上の餌。と言わんばかりに凄まじい形相と人が3人は入りそうな大口を空けながら突っ込んでくる。

「クソツ!! 取りこぼしだ！」

それは、開門に合わせて 巨人を遠ざけていた援護班の取りこぼしだった。

街中においては、周囲の建物を存分に利用する事が出来る為、立体機動装置が最大限に活かせる環境であり、熟練された兵士達であれば通常種の巨人であれば 仕留める事も、遠ざける事も出来る。

しかし、それは100%とはどうしても言えない。

巨人の行動は予期できない事も多々あるからだ。今回の時の様に。

だが、待ちに待っていたのは巨人だけじゃない。

「お前から先に行つてろ。ああ、援護班の皆は向こうを頼む。向かってくるコイツはオレがやる」

接近してくる巨人に真っ向から向かう1つの影。

取りこぼした事に対して、苦い表情をしていた兵士は 一瞬ではあるが安堵の表情を見せていた。

それは調査兵団にとっては見慣れた光景、だと言えるのだが、新兵にとってはそうはいかない。

「ななな！ きよ、教官！ 何をつつ!!」

取り乱す者も少なくはない。見知った相手であれば尚更だ。

「落ち着いて馬を走らせろ。アイツに任せて前進すればいい」

「ですがつ あんな馬鹿正直に真正面から！ 馬鹿なんですか!! 教官はあああつつ!!!」

そう、普通は馬鹿だ。巨人を相手にする時に正面から突つ切るのはどう考えても。

生憎普通じゃないから仕方ない。

「あの馬鹿でかい声……。サシャだな？ アイツとコニーの奴にだけは馬鹿って言われたくないわ」

嬉しくないエールを背に アキラはぐるんつと腕を回した後。

「ぐおおおつ!!」

大口を開け、大きな腕を振るってくる10mの巨人と正面衝突。

拳と伸ばした手のぶつかり合い。正面突破！ まさに漢！ と言えなくも無いが如何せん体躯に差がありすぎる為、無謀を通り越している。

でも、結果を見れば どんな馬鹿でも黙るものだ。

「どごおっ！ と強烈な衝撃音が響き、ぶつかり合った拳は、拮抗する様な事はなくぶつかり合った片方が吹き飛んだ」

勿論 明らかに大きい方の巨人の腕が変な方向へと吹き飛んだ。あまりの威力故にか肩から先に掛けて千切れ、そして身体は吹き飛ばされていく。まるで紙の様に。

「まずは一匹目。……うなじは削いでないんだ。まだ、来るんだろ？ 来るんならオレに來いよ。幾らでも相手してやる」

こびり付いた返り血を振るって呟くアキラ。

吹き飛んだ巨人は 何が起きてるのか判らないのだろう。……いや 元々そう言う感性は無いんだが 今回に限っては ある様に見えてしまう。腕が無くなった事も判らず、一瞬呆然としている様に見えるから。

それでも一瞬。巨人は恐れる様な事はしない。例え自分にとって死地であろうと何も考えずに飛び込んでくる。

「そうだ。……來い！」

口許を歪ませ、更に拳にもう一度力を込め直して突撃していったのだった。

「……………」

「判ったか？ サシヤ。援護班の仕事は巨人を遠ざけ、且つ可能であれば数を減らす事だが、それ以上に巨人の接近する方向を絞る事が最も重要な任務だ。四方八方から攻められてしまえば、オレ達の方が全滅する可能性があるからな。一方向からだけなら……」

ニヤリ、と笑いながら言う。

「アイツの行動には制約はあるらしいが、戦っている間は無敵だ。勿論、街を出れば平原が広がるから そこからは索敵陣形が最重要になってくる。気を抜くなよ！」

「ふえあつ!? あ、は、はいいいっつ!!」

放心しかけていたサシヤだったのだが、班長に活を入れられ覚醒した。

今でも、衝撃光景は目の前に続いている。人間が巨人を屠ると言う有り得ない光景が。

それは、新兵全員が目撃する光景。

「は、ははは……。やっぱり、アンタの背はデケエ……。巨人なんざ霞むって感覚、間違ってたんだ……！」

追い続ける背を今までずっと心に秘めていた男も歓喜する。

彼に見返りを求めていた訳じゃない。ただ、道しるべになつてくれるだけで十分だった。それで、その選択の結果 最期の瞬間を迎えたとしても…… きつと後悔はしないと思えた。死にたがりじゃないと公言してきた自分自身でも、心底そう思っていた。

だが、その決意も一蹴された気分だった。

『死なせねえから死ぬな。氣い張れ！』

そう言われている様に見えたんだ。

「す、凄い……。こんな事が、こんな事が有り得るなんて……」

息を呑む光景を目の当たりにし、現実とは思えなくなつてしまう。そのせいか馬術を損ないそうになつた。それでも、恐らくは誰よりも馬を愛し、接し続け、そして、馬にも好かれる少女に応える様に馬も決して乱れる事なく主人を運び前へと進み続けていた。

「あれを見て、ビビるのは間違いじゃねえ。だが、こんな何でもない状態で落馬なんざするなよ！」

「は、はい！」

何とか気を取り戻して前へと進む。

巨人が倒され続ける光景を目に焼き付けながら。

「団長は、ここで公開した。その意図は……？」

「アルミン。考えるのは良いけど、考えすぎるのは良くない。……集中して」

「うん。判ってる」

確かに安全を保障された状況とも言える。

だが、油断は死を招く事は良く知っているつもりだった。

「……レン……。……ラ教官。……エ……。……を……。……つ」

馬を走らせている間何度も小さく呟き続ける。

何よりも家族を想い、そして 失いたくない気持ちが強い少女はただただ願っている。

今までは自分自身が守ると固く誓い続けていたのだが、それは今は息を潜めていた。自分の手の届かない場所に家族がいる時、その傍に信頼できる人がいてくれている。

自分が傍にいないくても、安心出来てしまうんだ。心細くなってしまっていた時期はあったが、それ以上に家族を失わずに済む事に喜びを感じてしまえたんだ。

「(……でも、これ程の力を持つても マリアの奪還に時間が掛かってしまうと言う事は、制限がある筈なんだ。……だから、調査兵団がいるって思っても良いかもしれない。

教官を支える為に。……一人にしては絶対に駄目だから。だから、僕達も絶対にそうなる。支えられる様な存在に、なって見せる……！」

頭脳明晰な少年は、その優秀な頭を今も働かせ続けている。

一度見ているとは言え、巨人を容易に圧倒し続ける姿を見れば強く希望を抱く事だろう。あれだけ脅された勧誘式の後の今があれば尚更だ。

だが、手放しに安心する様な事はせず、明かされていない事を考察し、新兵なりにも最善を尽くそうと考え続けている。それが最大の強みになると思っっているからだ。そして、……それが力になれるかもしれない事だと思っっているから。

「なっ……！！！」

「え……？　え……？　？」

そして、中には、違う意味で現実とは思えない。認めたくないと思っっている者達もいた。

それは、とある目的を果たす為に、紛れ続けてきた者達である。

様々な想いが渦巻く街中で轟音は絶えずに響き渡る。

「これで8匹目……とっ！ ストレス解消、と言いたいトコだが あまり離れすぎるのは宜しくないな。オレはエレンの監視役でもあるんだ。放棄する訳にはいかん。……リヴァイに小言喰らうのも嫌だし」

建物の屋根の上で 班の場所を把握した。

そこへと向かおうと踵を返した時、狙ったかのように下から飛び出してくるのは7m級の巨人。各個体の中には動きが鈍い者もいれば、巨体の割に俊敏に動く者だっている。立体機動装置で移動をしているのに、そのスピードは反応出来ない巨人が殆どなのだが、それに合わせて喰らいついた個体もいた。

今、飛び出してきたのは間違いなく通常種ではなく云わばスピード特化型の巨人。

「アキラさんっっ!!」

それを見ていた者が思わず叫ぶが。取り越し苦労だった、と言う事に気付く。それは

毎回。足を狙って喰いつこうとしてきた巨人の歯は、全てへし折れ、飛び上がってきたのについてのか轟音と共に地面に激突していた。

「巨人を虫けらみたいに踏み潰すつて言うのもたまには良いもんだ。……お前らに踏み潰された仲間達の分つて考えりや尚更な……!」

本人に言わせてみれば、ただ足で踏み付けただけである。

巨人の接近に合わせたカウンター。巨人自身の勢いも+され、更に力も上乘せされてしまう一撃だから 地面にめり込んでしまう程の一撃になった様だ。

「ありや動けないな。うなじ削いでないけど。動けないんじやとりあえずは良いか。援護班に任せて合流を優先させる、か」

まるでギャグの様に大の字に地面にめり込んでいる巨人。もがこうとしているのが、深く地面にめり込んでしまっている為か、或いは骨が地面に喰い込み返しになって抜けないのか判らないが、もがいてももがいても出てこれる気配はない。

「後は任せるぞ。……気を付けろよ?」

「はい! 大丈夫です! 絶対、絶対に負けません。だから……宜しくお願いします!」

「ああ。任せろ」

援護班の1人と拳を合わせた後に、近くに待機させていた馬へと飛び乗った。

「……」から先は鬼が出るか蛇が出るか」

街を超えれば、先は広大な平原。

見通せるメリットはあるが、今回の街中の様に大通りの決まった方向から、道幅を考えた決まった数が迫ってくる訳じやなく、今まで以上の複数を相手にする状況になつてしまう可能性だつてある。だから、この先は索敵陣形が不可欠だ。

「皆……死ぬなよ」

そう呟くと馬を走らせた。

そして、この先に出てくるであろう巨人を思い浮かべながら。

34話

「オルオさん！ あいつらは……、オレの同期は巨人に勝てますかね？」

それは街を抜けて平地に出た時の事。

エルヴィンの指示で長距離索敵陣形に分かれた時にエレンはふと仲間達の事を思い出していた。

この遠征が始まる前にエレンはジャンに問い詰められていたのだ。

それはエレン自身がミカサを殺そうとした事実を聞き出そうとした時の事について。

調査兵団がおらず、戦力が万全ではなかったあの壁中での戦い。巨人化したエレンは

最初その力を制御する事が出来ず、傍にいたミカサに襲い掛かったのだ。

エレンの力については、エルヴィン団長に話を訊き、その詳細をジャンは確かめなかった。明らかに不可解な力であり、その巨人の力の存在自体もエレンは知らなかった事。そして掌握する事さえ出来ないと言う事実。

『オレ達と人類の命がこれに懸かっている。このために、オレ達はマルコのようにエレンが知らない内に死ぬ事になるかもしれない』

ジャンが思い返すのはマルコの死の事。そして、その死を唯一その場でジャン自身以外に、そしてジャン以上に強く嘆き、怒りをあらわにした人の事も思い返していた。

マルコが皆の亡骸と混ざり、その命の粉を顔に塗った人の事。

『……オレは死にたくねえよ。オレは、まだまだあの人を追い続ける為にこの道を進むと決めたんだからよ』

その言葉に、強く反応したのはミカサだった。

『ジャンの考えは判った。でも今ここでエレンを追い詰める事に一体何の意義があると言おうの?』

ミカサの目には、エレンの不確かな力を疑い、必要以上に追い詰めようとしているとしか見えなかった。元々エレンとジャンの仲は犬猿である事もそれに拍車を掛けている。

『……あのなミカサ。オレは言っただろ？ 死にたくねえって。エレンの為に無償でお前は死ぬるかもしれないねえが、オレはごめんだ。まだまだ、見続けてえからな。……だが、それでも『死にたくない』とは思っても、だからって『死なない』と思える程 ガキでもねえ。だから知っておくべきなんだよ。エレン自身もオレ達も。オレ達が何のためにこの命を賭けるのか。その価値があるのか。……オレは、オレ達はエレンに見返りを求めたいんだよ』

ジャンは、はつきりとエレンの目を見据えた。

エレン自身は緊張を隠せられない。ジャンのこれほど真つ直ぐな目は 今まで見た事が無かったから。

『きつちり値踏みをさせてくれよ。こんなに死にたくねえって。やりたい事があるって我儘を言つちまつてるオレにも判る様に。……だからよ、エレンお前……』

次にジャンは強くエレンの肩を握りしめた。

『頼むぞ……っ！』

その懇願にエレンはただ首を縦に振るしか出来なかつた。そして、自分自身も強く心に刻み付けた。仲間達の命を預かっていると云う現状を。そして、負担を決してかけ過ぎないと。

そして、場面は戻る。

エレンに尋ねられたオルオは呆れた表情で答えた。

「ああ？ てめえ この一カ月間なにしていやがったんだ!? それにアキラの奴を見て 感覚鈍らせるなって事あ 何度も言われてんだろうが。其々には役割つつーのが決まってるだろ。基本的にオレ達は『如何に巨人と戦わないか』に懸かってんだよ!」

格好良く、更にはリヴァイの様に威厳を見せてやろう! としているんだが、当然ながら非常に揺れる馬上ではオルオは上手く出来ない。恰好がいつもつかない。今日もしっかりと舌を思いつきり噛んでしまったから。

「~~~~~ッ!!」

血も結構出てるからまた深く切ってしまった様だ。

そんな中、早馬で傍に接近してきた者がいた。手早く小瓶をオルオに放り投げ、舌をやってしまったオルオだが、何とかキャッチしていた。

「締まらねえなあ オルオ。も、馬上で喋るなって。消毒液だつて無料ただじゃないんだか

ら」

それは、援護班に混ざって巨人を狩っていた男。……異常な力を全員に見せ、この壁外で最も信頼できる男の1人であり、最も心強い男の1人。

「遅いよ!! アキラ!」

そして、誰よりも心配をかける男でも（基本的に女性陣に）あるアキラだ。

「無茶言うなってペトラ。これでも最速だつて! それに移動じゃ無理に使うなって言われてんだから」

「当たり前だ。地面抉って馬が走れねえ様になつたらお前が直せよ」

「へいへーい。リヴァイせんせー」

小言を言われるのを嫌うアキラは、リヴァイにそう直ぐに返すと器用に馬を操ってエレンの元へと向かった。

「オルオじやねえけど、エルヴィンが考案した(らしい)長距離索敵陣形つてのは覚えてるか? エレン」

「は、はい!」

「なら 判るだろ。基本的に巨人は馬より遅い。瞬間的な速度、瞬発力が結構やばい奴はいたけど、最高速度を持続し続けられる奴はまだ見た事ねえし、信号弾を見ながら整えたら基本は大丈夫だ」

「そ、そうですね。判りました」

今ここで陣形についての再講義をする時間は無いし、判りやすくするには言葉では伝えにくい。だから 記憶を掘り起こしてもらうしかないんだ。

「まあ 脅かす訳じゃないが……、奇行種とかが出て来たら戦わないといかんから、その辺は、周りの先輩が男を見せてくれるって。新人に会わせたくはないってオレだっけ思う。あんなの見るの正直目に毒だ」

深くため息を吐きながら言うアキラ。何だか実感籠ってる様な感じがするエレン。それは、隣で並走してるペトラが説明してくれた。

「はは…… アキラは結構会ってるからねー？」

「違うー、『遭わされた』 だろ!？」

ハンジ主催のアキラ実験で巨人と相對した時 何匹か会ってる。

ほんと色々と独特だから 判りやすいし、アキラにとつても会いたくない存在だったりするんだ。動きとかくねくねしてたりして、結構…… いや非常に変なのだ。だからアキラはきつちりと仕留めるケド、最も嫌いだったりする。

「……赤の煙弾だ。さっさと撃てアホ」

「つと、それは悪かった。了解」

普段より何処か他人よりお気楽な所があるアキラだが 今は壁外である事と、今回の

遠征の重要性をもう一度頭に入れ直し、手に持った煙弾を頭上に撃った。

赤の煙弾は 巨人が現れた際に放たれる物。それを確認次第各班にて同じく赤を撃ち放ち、先頭で指揮を執るエルヴィンに巨人の出現と大まかな位置を最短で伝えるのだ。

そして煙弾は 緑、黒、灰、そして 先程の赤と全4色存在しており 当然其々に役割があつて全員がそれを理解し、この陣形を保ち継続させていく事こそが索敵範囲を広げ続ける事に繋がるのだ。

「……巨人の全部がオレントコに来てくれりゃ、大抵の問題は片付けられるんだが、こればかりはな」

広大な平原において、巨人の行動を制限できる様な事は出来はしない。誘導をする事は可能だが、全体での作戦を立てての計画ならまだしも、いきなりのアドリブで精密にするなど殆ど不可能だ。

「アキラ？」

「あー無理なんかしないって。それに」

いつものペトラの説教が始まる前にけん制をするアキラ。

勝算がある方が行動をするべき、と言う考えは勿論持っている。どう考えても、心配

かけるのと心配する者達が死ぬの、どっちにする？ と訊かれれば間違いなく前者。

でも最善なのは、最適な答えは各々の役割をきっちり果たす事なのも事実だ。

「オレは皆に期待してんだって。もしもん時はしつかり引っ張り上げてくれるんだろ？」

あんまそんな場面来てほしくないケド」

「……うん！ 勿論。来てほしくないのは私だって同じだけど、思いつきりやるから安心して」

「おう。……あー、でもなあ……。やっぱ、それつかって安心できるかは微妙だ」

「それくらいは我慢して」

「へいへい……」

2人が話してるのは立体機動装置を使つての緊急脱出の件だ。

基本的に装置を使つて助けようとしたら 高压ガスの威力もあつて人体を貫いてしまふし、当たり所が悪ければ死にかねない。だが アキラの実験をする際に考案された立体機動装置はワイヤーの先端がアンカーの代わりに強力な接着剤を練り込んだ繊維強化プラスチックになつていて、それを身体に引っ付けて回収する。安全性を言えば遙かに良いのだが、射出の衝撃や巻き取りの時の速度もあつて 万全とは言えないがこれも死ぬよりは遙かにマシだと言えるだろう。

それを使う判断を下すのはリヴァイ。そして リヴァイが不在な場合は ペトラ。

「リヴァイ兵長。緑の煙弾が北東の方角に確認出来ました」

「ああ。……撃て」

「了解です」

緑の煙弾は エルヴィンが陣営全体の進路を変える際に放たれるものだ。

全体に方角を知らせる為、確認したらすぐに同じ方向に向かって緑弾を放ち、同じく最短で全体に知らせる。

赤と緑を組み合わせ、巨人との接近を避けながら目的地を目指すのが基本的な行動。

だが、それだけで常に理想的な陣形を保ち 進行を続ける事が出来る訳ではない。

それは先程の会話でもあった通り 行動がなかなか予測できない奇行種の存在だ。

一番最初にそれに気付いたのはエレン。

「アキラさん！ 兵長！ 右翼側方面から黒煙です！」

「早速かよ……」

黒弾は奇行種。

個体によつてその性質は様々。だから予測がつきにくい、と言われているんだが、実
験中で何度も見ているからかアキラは大体が予測がついていた。嬉しくはない様だが。

「その辺の人間には興味を示さないで、周辺をうろちよろ走りまくってるタイプのヤツ

だろうな。……或いは好みの人間がいなかった、ってヤツか？　そういう奴に限って決まってる……」

その巨人が視界に入ってくる。

「走り方がキモイ」

身体をくねくねさせながら走ってくるんだから仕方ない。明らかに男型な巨人なのに、オカマ？　って思える様な走り方をする奴もいるし、二本足で立ってる癖に突然四足走行を取る奴もいる。

「リヴアイ。良いか？」

「ああ。任せた」

アキラは、了解を取った所で早速行動開始。

「武運を祈ります」

「気を付けて……」

「とつとと何枚かにおろしてきてやれよ　アキラ！」

「頼んだ！」

戦闘を避けて移動するのが主だが、奇行種に対してのみは戦闘は必要だ。当たり前

だが、近くの人間を襲わないとは言っても巨人と一緒に走る訳にもいかないから。

そして、平地での立体機動装置は本来の性能を発揮できるものではないと言うのは周知の事実。周囲に何も無い平地では巨人の身体にアンカーを突き立てなければならぬいからだ。その場合、短い時間ではあるが、ワイヤーで巨人と繋がってしまふ事になるから、暴れられて、ワイヤーを絡め取られてしまえば最悪な展開になる。巨人の力で吹き飛ばされてしまうからだ。そうなれば、地面と激突するしかない為殆ど死んでしまふ。

故に成功率が最も高い戦術が必要になってくる。この場で最も巨人討伐の成功率が高いのは……。

「ああ。さっさとやってくる」

アキラが戦う事だ。

走ってくる巨人に対して迎え撃つ構え。

アンカーを巨人に突き刺し、収縮の勢いと自分自身の力を合わせて殴る。

それだけで巨人は吹き飛ぶ。或いは四肢が潰れ、暫く走行不能になるのだ。その隙にうなじを削いで終了。

と言う訳で上記の通りの行動をして、あっさりと奇行種を仕留めたアキラだが。

「……妙だ。今回オレ達は特別作戦班。ここは5列中央・待機の地点だ。こんな深くにまで1匹とは言え奇行種が入ってくるか……?」

脳裏には嫌な予感が走っていた。

この調査兵団の実力はよく知っている。通常種であろうと、奇行種であろうと、しっかりと作戦を立てて其々が戦いの役割を果たせば巨人とて倒せるから。それが生存率が向上した理由の1つなのだから。

アキラは戦った感触でよく判る。この巨人は 誰でも……とは言えないかもしれないが、調査兵団であれば問題なく倒せる。でも、陣営の最奥まで侵入を許した。

それらの状況に嫌な予感を頭の中に感じつつもアキラは再度合流しようと馬を走らせたその時だった。

「灰色の煙弾確認!!!」

その声を聴いたのは。

35 話

灰の煙弾。

それが空に伸びたのを目にした時、アキラの目の前が 赤く染まった。煙弾の種類についての説明があつた時の話だ。

『——全ての信号弾の扱いについて、其々の意味についての説明は終わる。何か質問はあるか?』

エルヴィン、ハンジ、ミケ、そして リヴァイを含めた調査兵団の各分隊長、隊長達が揃い踏みでの説明会。それはアキラが初めて参加する長距離の遠征時の時。

『大体判つたけど。……なあ、もしもの事態、不測の事態が起きて マジでやばい状態になつたら時の事はどうすんだ? えっと 赤は巨人を知らせる煙。黒は主に奇行種に使う煙。で、緑が行き先を示す煙の3種だろ? 全体の崩壊に繋がりがねない本当にヤバイ時の為の信号弾ってヤツも決めといた方が良くないか?』

それは、そこまで深くは考えてなかったただの意見だ。

まだ、アキラは人の死を見ていなかった時の事だから。本当の意味でその時の事を考えてなかった。

『危ない目に遭つてるなら、オレが行つてやる』

その程度にしか考えてなかった。

そして、決まった色が『灰』だった。

人が死ねば火葬し弔う。そして残されるのは遺灰のみ。

その色は——人間が最期に残す物。

そして場面は再び戦場へと戻る。

色を確認したと殆ど同時にアキラはリヴァイの傍にまで移動をしていた。

「リヴァイ……ッ！」

「ああ。そつちは任せた」

リヴァイから了解を得たアキラは駆け出した。

移動手段は馬を使うのではなく、己の脚のみ。馬を使つての移動では遅すぎるから。

大地を抉りながら進み続ける。あまりの勢いなのか、威力なのか判らないが 草原一帯が焦げ臭くなっていた。

「あ、アキラさん！」

「エレン、止まらないで。このまま団長が判断する進路のままで！」

アキラの行動を見て思わずエレンも止まろうとしていたが、それをペトラが制した。

この時エレンは違和感を覚えた。アキラの行動は、いつものペトラであれば彼女が真つ先に制する所だ。1人にさせない為に。如何に強大な強さを誇ったとしても、多勢に無勢と言う言葉はある。数の暴力と言うものがある。それが巨人相手ならば危険度は計り知れない。

エレンはアキラの事を信じてない訳じゃないが、1人で向かわせるのが最適だとは思

えなかった。

「……エレン。集中して前を見ろ。よそ見して落馬なんざするんじゃないぞ」

明らかに平常心じゃなくなったエレンに叱咤するのはリヴァイだ。そして、その後はただただ事実だけを伝えた。

「……アイツの実力は判ってる筈だろうが。一応無理はするなという事と、30分以内に戻って来いという制約も付けてる。今のあのアホが覚えているかどうかは判らんがな」

そして、平常心でいらなくなりそうだったのはエレンだけじゃない。ペトラも同じだった。でも、それでも気持ちを押して前に進んでいるんだ。

何故なら 灰色の煙弾が使われた事は今まで無かった。たった1度でも使われた事が無かった。灰とは云わば班単位で壊滅的な被害を被った時に放たれる物。或いは陣形全体にも被害が及ぶかもしれないと各班長が判断した時に放たれる物。

普通の巨人だったら、いや 奇行種だったとしても、赤、そして黒のみだった。

——灰がこの空に放たれた事は今まで無かった。

『それが上がったら…… オレは行くよ。もう決まった事だし、異論はない筈だろ？』

ペトラ』

『……………』

『そんな顔するなつて。……………それに まあそう言う場面にならないのが一番だと思うのは間違いないし。オレだつてそんな場面に遭遇するなんて嫌だ。皆がやられてる可能性だつてあるんだからな。……………それに もしも その時が来ても、無理する訳じゃないから、説教は勘弁してくれ』

『……………判つた、いや 判つてるから』

ペトラも本心は兎も角、それが最適だと言う事は理解できていた。

調査兵団での決定事項の1つ。調査兵団全体が壊滅する可能性がある煙弾が放たれた時の事は決めていた。

人類最高戦力で迎え撃つと。

もしも、その時が来たとしても。

『絶対に無事で帰ってくる事。それは約束して。約束しないと……許さないから』

そして その時は来た。

「……エルヴィンの予測は当たったか。多分、例のが来た可能性があるという事か。

……オルオ、灰を撃て」

「了解です！」

オルオの手で撃ち放たれる灰の煙弾。

それは連鎖する様に 瞬く間に全体へと広がった。先頭を進むエルヴィン団長に伝える為に。

脚が燃える様に熱い。自身が炎になったかの様だ。

灰色の煙弾が上がった瞬間から、自分の内にある炎が猛っているのが判った。身体を駆け巡る炎が脚に灯った。内に宿る炎は爆発的な力となって、大地を蹴り続けた。

一足飛び脚で馬を追い越し、配置されていたそれぞれの班を横切った。灰の煙弾が放たれた事は当然近隣の班全員が把握していたから、アキラが通る事が判っていて、班長達が指示を出したのだろう。新兵も誰一人慌てる様な事は無かった。

そして 移動にかかった時間はわずか十数秒。

聴て見えてきた。

「……………」

倒れている無数の人数が、無残に食い荒らされたその身体が。

「う、ああああ！ や、やめえええつ……!!!」

そして、今まさに喰われようとしている者が。

「うおらああアアアツ!!!」

だが 最後まで、それはさせない。

炎を纏った一閃。まるで紅蓮の矢の様に 巨人を穿った。巨人の両足を吹き飛ばし、バランスを崩した所で 頭上まで跳躍。

「……その汚ねえ口、除けろ……よッ!!!」

口の中へと手を入れ、そのまま力任せに顎を引きちぎった。後は頭部も同時に引き離し、狙いやすくなった うなじを抉った。

「あぐつ……!」

地面に叩きつけられた兵士だったが、命はあるのを確認したアキラは。

「わりい、そこで少し休んでろ！ この辺のを一掃してくるから、よお！」

「あ、アキラ……か？」

流れている血が、負傷している部分を見てよく判る。もう目も見えていないだろう事が。命があっただけ良かったとほっとする間もない。この右翼側にはなぜか大量の巨人が集まってきているのだから。まだ、しなければならぬ事がある。

アキラは、大地に降りると脚に渾身の力を込めて、踏み抜いた。凄まじい地鳴りと爆発音が周囲に響く。それは巨人達を惹きつけるのに最高の餌だった。大きな音と人間の姿。奇行種は読みにくいが、通常種であればこれで釣れる。

「かかって来いよ……！ 巨人^{デメエ}らの相手はこのオレだ！ さあ 幾らでも相手してやる。……かかってこいやアツ!!」

力の限りを今度は脚ではなく、拳に宿す。燃え上がる炎が手に宿る。圧倒的なオーラとでもいう気を纏っているアキラ。巨人は臆すると言った感情は一切ない。ただ人間の姿を見れば喰いに来る。それだけだ。注目されれば、向こうから勝手に来てくれる。

殺り易い事この上ない。

一つ拳を放てば3体の身体に風穴が空く。それでもめげること無く攻めてくる。……来てくれる。他に行かずに自分自身に。今 これ以上有り難いと思える事はない。

悠に20は超える数の巨人は瞬く間に殲滅された。

「おい、大丈夫か!? 何があつた!？」

「ア、キラ……」

生き残っていたのは、ファム班長ただ1人だけだった。

「つた、えてく、れ……。右、翼の索敵班は、ほぼ…… 壊滅、させられた」

「っ……」

それは被害はここだけじゃないと言う報告だった。

「め、……め……っ」

「なんだ!? おい、しつかりするんだ!」

そのファム班長から流れ出る血の量が、もう致命傷であると言う事をよく物語っていた。もう、命が尽きると言う事も……。それでもファムは懸命に手を動かした。その手をアキラは取る。

「女型の……巨人。15、m級のきよじんが……、たいぐんをつれて、きたんだ……」

「女型の巨人?」

「たの、む……。きよじん、は、ネスのほう……に。あき、ら。みんなを……みんなを……、たの、む……」

それ以上フアムは何も答えず、何も言わなかった。

もう、そこには彼はいなくなかったから。手から伝わっていた力が抜け落ちてしまったから。

「………………。女型、巨人…………」

もうこの場に倒れている仲間達を吊う暇さえなかった。

訓練に訓練を重ねた班が、出撃して直ぐに壊滅させられた。今までこんな事無かった筈なのに。つまり…………。

「巨人の身体を纏った人間が来た…………」

巨人を集めて物量戦を仕掛ける。

其々が喰う事しか考えてない巨人が、連携する様な事が出来る訳がない。…………引き連れてきたその女型の巨人が 元凶だ。

『アキラ。…………もしも、巨人の姿を借りた人間と判断出来た場合は、生け捕りを第一に考えてくれ。こんな事はお前にしか頼めない。…………出来るか?』

『ああ。生け捕りつてやらせてくれなかったし、少々しんどいつてのが本音だが 任せてくれ』

エルヴインに、笑いながらそう言っていたアキラだったが、感情を殺すのが難しい。人の皮をかぶった悪魔と言って良い相手。仲間達の命を奪った相手を殺さずにとらえる事が自分に出来るのだろうか。……手加減など出来るのだろうか。

「……知るか。全部、まずはそいつに会ってからだ……！」

脚に再び力を入れ 駆け出した。仲間達の亡骸をその眼に焼き付けながら。

36話

アルミンの頭は急速に回転を始めていた。

この異常事態、緊急事態に混乱していた、と言うのが最も正しい表現かもしれない。女型の巨人は 突如現れた。

馬をも軽く凌駕する脚力で急接近してきた。

そして、ネス班長とシスの2人を……殺した。

本当に一瞬の出来事だった。調査兵団の中でも優秀と呼べる2人。その連携攻撃で陣形内に入り込んでいた巨人達を倒していた2人が、本当に一瞬で。

「違う……、違うぞ」

そして、アルミンは混乱していたが1つの結論を導き出していた。

「アレは、奇行種じゃない！ ネス班長教えてください」

もうこの世にはいないネス班長に教えを乞うアルミン。

「どうすればいいんですかヤツは!? 通常種でも、奇行種でもありません…… ヤツは

！ 間違いなく『知性』がある」

巨人が人を喰う事しか頭のない筈であり、結果として殺す事に繋がる。だが、あの女型の巨人は明らかに違う。ネス班長とシスが急所を狙った時、握り潰して、叩きつけた。

つまりは、殺す為に殺した。

『超大型巨人』や『鎧の巨人』とか、……エレンと同じです！ 巨人の身体を纏った人間です！ だ、誰が!? 何で!? 何でこんな!! 僕も死ぬ!! まずいよ! どうしよう!?! 僕も殺される!!」

錯乱するアルミン。

そして、当然、容易に追いつかれてしまった。それ程までにこの女型の巨人は速い。速過ぎるのだ。

そして——アルミンは死ぬ寸前にまで追い詰められた。

巨人の踏みつけの衝撃。それは馬をも簡単に吹き飛ばし、小柄なアルミンの身体も木の葉の様に散った。この時、アルミンは死を覚悟した。だが、ここで起きたのは全くの予想外の出来事だった。

倒れたアルミンのフードを、その大きな手は摘み上げた。そして、アルミンはその女型の巨人と眼があった。ここまで接近して、眼を見たのは初めてだった。何処か射貫く様なそれでいて澄んでいるとも言える眼。時間にして1秒にも満たなかっただろ

う。女型の巨人は それ以上アルミンには何もせず立ち去って行ったのだ。

「……………なん、で……………？ 殺さない？ ……今、顔を 確認した……………」

極まる混乱。死ななかつたと言う安堵感さえも、今回の疑問の前にかき消された。

何故殺さなかつたのか、何故、顔を確認したのか。

2つの疑問が頭の中を独占し続ける。すべき行動を放棄し続けて。このままこの場所ですぐ倒れ込み続けたら、今は死ななくとも その内死ぬだろう。通常種か、奇行種か、或いはあの知能のある人間の巨人か判らないが、まず間違はなく死ぬ。馬もないこの状態で巨人の脚から逃れる事は出来ないのだから。

でも、そうはならなかった。

アルミンの元へと駆けつけた兵士達がいたからだ。それは ジャンとライナー。新兵ではあるが 104期訓練兵のトップ10に入る2人が。

そして アルミンは女型の巨人の事を2人に話した。

「灰色の煙弾が上がった時点で、異常事態が発生したって事は判っていたが……、まさかそんな複雑過ぎる状況も出来上がっちゃってるとはな」

灰の煙弾は女型の巨人が現れた方向から見えた。

そしてその後には巨人の群が現れた。

「……右翼の索敵班は、死の間際にあの煙弾を撃つたんだと思う。使命を全うしたんだ。だが、それでもこの状況はヤバイ。あの女型のせいでも下手したら陣形が崩壊しちゃう。殆ど全滅しちゃう可能性だってある」

「何がいいたい?」

「……つまりだな。この距離ならまだヤツの気を引けるかもしれないねえ。オレ達で撤退までの時間を稼いだりできる……かもしれないねえ。それに 時間さえ稼げば……教官も黙っちゃいねえだろ。あの灰を見たんだつたらな。なら 今すべき事は何をするにしても時間を稼ぐ事……なんつってな……」

ジャンの言葉に、ライナーは耳を疑う。そして アルミンはあの巨人を目の当たりにした為、その印象を ジャンの作戦の結果、高確率でどうなってしまうかを口にした。「あいつには本当に知性がある……。あいつから見れば僕らは文字通り虫けら扱い。……叩かれるだけで潰されちゃうよ?」

「マジかよ……。ハハッ、そりやおつかねえな……」

ジャンはそれを訊いても撤回はしなかった。

「お前……本当にジャンなのか? オレの知るジャンは自分の事しか考えてない男の筈だ」

ライナーが感じていたのはそれだった。ジャンと長い付き合いだからこそ、感じた違

和感だった。

でもジャンは見ただから。彼の背中を見て　そして自分の道を決めたのだ。

「失礼だな……オイ。オレはただ、がっかりされたくないだけだ。勝手にオレの道標にして　勝手に尊敬までした人に。それに、誰の物とも知れねえ骨の燃えカスにも……な」

身体に強い力が宿る気がした。

あの時あの骨を、ジャンも同じようにした。遺灰を自身に塗した。……ただの猿真似をしたかった訳じゃない。心に刻み付ける為に、ジャンはそうした。きつとあの世で見られているであろう男達に、がっかりされない様に。先に心臓を捧げ逝ってしまったヤツに、がっかりされない様に。

「オレは……！　オレには今何をすべきかが判るんだよ！　そして、これがオレの、オレ達の選んだ仕事だ!!　力を貸せ!!」

ジャンの言葉に、耳を貸さない者など　誰もいなかった。誰も拒否をする者などいなかった。ここから始まるのは　女型の巨人との死闘。

場面は変わり、全滅させられた右翼側の班にいた兵士の1人が走っていた。

「うっ、い、いたっ……！」

足に擦り傷程度だが出来ていたが走れない程ではない。ただ、絶望なのは馬と離れてしまった点にあるだろう。突然の無数の巨人の襲来。同じ班の先輩たちに守られ、何とか生き延びる事が出来た。その代償に皆が目の前で喰われると言う残酷な現実も突きつけられてしまっていた。

「早く、あの子と、合流しないと……。怪我はしてない筈だから……！」

馬とはぐれてしまったのは、あまりの巨人の数、そして大地が悲鳴を上げたかのように揺れた為操作を誤ってしまったからだ。調査兵団に与えられている馬は専用に品種改良されたものであり、気性も温順で巨人に対してもパニックを起こしにくくなっているのだが、馬も生きている。感情だってある。恐怖だってある。想定を遥かに超えた事が起きれば、人間の様にパニックになってしまっても不思議ではない。

だから、背に乗せていた筈の主人がいなくなった事に気付かなかつたとしても、誰も責められない。

それに、馬がないと言うこの現状はどうやったとしても、何かを責めたとしても変えられる物じゃない。

「はあっ はあっ……つつ!!」

走り続けて、走り続けて、今まで巨人に標的にされなかつただけでも十分幸運だと言えるだろう。……だが、巨人に標的にされるのも時間の問題だった。

目の前に立ちふさがるのは6 m級の巨人。

「あ……、あっ……」

馬もない。周囲には立体機動装置を活かせる建物や木々も何もないただの平原。

そんな場所で、目の前には6 m級の巨人1体。まるで『漸く見つけた』と云わんばかりに笑っている。その大きな口を広げ、迫ってくる。

「う、うあ……」

そして、まるで地面に縫い付けられた様に動く事が出来なかつた。

街での戦いで 巨人の恐怖は身に染みている。アレを経験してきたから こんな場面になる覚悟だつてしてきた。それでも、調査兵団に入る為に残つたからには最後まで抗おうと心に決めていた筈なのに、動く事さえ出来ない。

「わ、わたし……は……」

——何のために　ここにいる？　どうして、調査兵団に入ったんだっけ？

圧倒的な死を前にした時、これまでの事が、過去の記憶が頭の中を過ぎる。それは走馬燈と呼ばれているものだ。

——でも、このまま死んだら私は……。

調査兵団に入った理由。それは心に秘めた目的があつた。それは潜在的な願望であり、……ある意味。そう、ある意味……エレンに通じる所がある願望。

巨人の大きな手が目の前に迫り、いよいよ死が迎えに来た瞬間だつた。

「……………汚ねえ手でオレの教え子に触れんな！」

死はかき消された。突如現れた人物とその怒号と共に。

現れた人物は、迫る手を拳で弾き返した。いや　弾き返すと言うよりは吹き飛ばした、と言つた方が正しいだろう。吹き飛びながら巨人の手は二股に裂けてゆき、臆ては肩口に掛けて完全に失つてしまつていたから。臆ては何度身体を回転させたかは判ら

ないが、地面に俯せの状態で倒れ、蠢いていた。

「ちっ……トドメ刺すのが面倒になったな」

現れた彼は、そう一言だけ言う和一足飛びで倒れた巨人の元へと行った。破損した身体が再生する前にうなじを刈り取り、絶命させた後、またここに戻ってきてくれた。

「無事で良かった。……大丈夫か？　クリスタ」

「あ……は、はい。アキラ、教官」

差し出された手を見たクリスタ。

その姿を見て、彼女は……クリスタは、あの時サシャが感じていた事が初めて理解出来た。

「よつと」

「わっ！」

アキラは、色々と考えているクリスタをひよいと腕に抱くと、そのまま走る。

「だ、大丈夫です。私、走れますから！」

「悪い。それは判ってんだけど、オレがやる方が圧倒的に速いんだ。気分悪いかもしれんが我慢してくれ。死なせるよりマシだ」

アキラはそう言うのと、クリスタを抱く力を強めた。

「もう少し行った所に馬がいたのを見たからな。クリスタは確か馬の扱いが得意だった

と記憶してるけど。……そこまで行ったら大丈夫だろ？」

「あ……はい。出来ると思います」

「よし。良い返事だ。……正直最後までエスコートしてやりてえ気持ちはあるんだが、今は他にもやらないといけねえ事が山積みだからな。馬を得たら他のメンバーと合流しろ。最悪、巨人から逃げる事だけを考えるんだ。……自分の命を第一に考えてくれ」

「っ……」

クリスタは一瞬言葉が詰まった。

「返事が無いぞ？ どうした？」

「わ、判りました！ 了解です！」

「よしっ。……ん。いたな馬」

木陰に待機している様にいる馬を確認すると。

「跳ぶぞ。舌あ噛むなよ？」

「え……？ ひゃあっ!!」

どんっ！ と言う轟音が響いたかと思えば 1つの間にか自分が宙にいるのをクリスタは見た。立体機動装置を使った訳でもないのに 10mは飛んでいるだろうか、まだ距離があつた筈なのに、もう到着していた。馬も逃げそうな衝撃場面だと思いが……

常識、非常識は考えられないし 巨人の大きさの方が衝撃が大きい、という事もあつて耐えた様だ。

そして木陰で気付かなかつたが、馬は1頭だけじゃなかつた。

「2頭もいたんだな……。それは嬉しい誤算だ。こいつら頼めるか？ クリスタ」

「は、はい。大丈夫です」

もしも、クリスタの様に馬を失つた兵士がいた時の事を考えると可能な限り馬は連れて行きたいと言うのが心情だろう。流石に アキラが連れていく訳にはいかないからクリスタに頼み、そして はつきりと了承してくれた。

「よし任せた！」

そう言うのとアキラはクリスタの頭を2度、3度と撫でた後。手を放し先を見据えていた。

灰だけでなく撃ちあがる黒の煙も確認出来る。

「後 4、50分程度、かな。……十分」

脚に再び力を入れるアキラ。行き着く先を見据えながら。

「また 生きて会うぞ、クリスタ。それも約束しろ！」

「は、はい！ 勿論です！」

クリスタの返事を訊いたアキラは 笑顔を見せた。

この修羅場で 初めてクリスタは笑顔を見た気がした。

そして 初めて、初めて……落ち着けた様な気がした。暖かくて心地良い笑顔だったから。

笑顔で落ち着ける事が出来たのは、きっと初めてだ。……初めての、筈だ。

「……………あ、あれ？」

初めてだと思っていた筈なのに、目の前に思い浮かぶ顔があった。

それは 黒く長い髪の毛……。

「クリスタ！ 頼んだ！」

「っ……………！ はい！」

浮かぶ顔は目の前から消失した。今すべき事、今すべき事だけを頭の中に入れて。

37話

アルミンとライナー、ジャンの3人と女型の巨人の死闘。

結果だけを言えば、3人とも怪我を負ったものの無事だった。

明らかに運動精度が通常種の巨人とは比べ物にならず、立体機動において極めて優れていたジャンでさえ歯が立たない状態。ライナーもミカサに次いで優秀な兵士であり、女型の巨人の手の中と言う死地から強引に生還を果たすと言う快挙を成しえた。

それでも、圧倒的に敵側の戦力の方が遥か上だと言う事実は変わらなかった。

「もう時間稼ぎは十分だろう!? 急いでこいつから離れるぞ!!」

馬を潰され、地に伏していたアルミンを抱え、ライナーは駆け出す。

「人食いじゃなきやオレたちを追いかけたりしない筈だ! そうだろ!!」

相手は人食いの巨人ではなく知性のある巨人。故に、逃げる人間を必要以上に襲おうとはしないだろう、と言うのがライナーの考えだった。

そして、狙い通りに女型の巨人は、ライナーたちには見向きもせず、ある方向へと向かって走り出した。

「見ろー！ デカ女の野郎め…… ビビっちまっつてお帰りになるご様子だ!!」

それは 願ったり叶ったりの状況だと言える。このまま戦い続けたら まず間違はなく殺されているであろう事が判るからだ。相手は 巨人相手に戦い続け、近年では飛躍的に力を伸ばしてきた百戦錬磨と言つていい調査兵団の部隊。それを潰してきた相手だから。

だが、アルミンは驚愕していた。

なぜなら…… 女型の巨人が走り出したのは。

「(な、……そんな……!! あ、あつちは 中央後方……エレンがいる方向だ……!)」
女型の目的は、エレンだ。それは推測の段階ではあるものの、極めて100%に近いとアルミンは判断していた。エルヴィン団長の勧誘式での話。全てはこの女型を、巨人を纏った人間を、……人類の敵、正体不明の敵を炙り出すために行つたのだろうと確信していたから。

3人にとって幸運だったのもう1つある。

それは、周囲に巨人が一切いないという状況だ。あの女型の巨人のみであり、拓けた平原にはそれらしき影も一切見えない。

ただ、問題もあった。

——ピイイイ——ツツ!!

指笛を只管鳴らしているのはジャン。馬を呼び戻そうとしているのだ。無事な馬は2頭。その2頭の内の1頭、ライナーの馬だけは戻ってきたのだが、たった1頭のみでは3人を満足に運ぶことなどできるはずがない。

だが、訓練されている馬とは言え戻ってこない事は責められない。

馬は機械ではない。九死に一生を得たのは馬とて同じなのだから。そのままパニツクを起こし、帰ってこない事だつて有り得る。若しくは、指笛の届く範囲外にまで逃げ出していれば……戻ってくるはずもない。

「クソ……!! ライナーの馬は戻ってきた。なのにどうしてオレの馬は戻ってこねえんだよ! これ以上ここに留まる訳にはいかねえのに……。最悪、1人をここにおいていかんとならねえぞ……。その場合の1人はどうやって決めるってんだよ……!! ひでえじゃねえか! 折角3人で死線をくぐったつてのに……、なんて仕打ちだよ!」

あの状況で3人ともが無事だったのは奇跡だつて言つて良い事はジャンだつてわかつていた。まだまだ新兵に近い自分達が、生き残る事が出来たのだから。それだけに、当然だがこの場に誰一人残していきたくはない。まだ、ここは死地と言つて良い

のだから。建物や巨人より高い木々がある訳でもない。ここに巨人が現れたら、もう成す術が無いのだから。

「(クソっ……!! 最悪の事なんぞ、考えるな!! 全員で、全員で生きるんだ! だから、来いよ……!!)」

ジャンは只管 指笛を鳴らし続けた。

ただ……忘れてはならないのがこの場所が まだ安心できない死地だという事。そして 音を聞きつけるのは馬だけではない。

そう——音に反応するのは 巨人も同じだ。

「っっ!!」

それは奇行種。それは行動が予測しにくいのが特徴である。背後より現れたのは6m級の奇行種の巨人。

「クソおお!! ライナーっっ!! アルミンっっ!!」

負傷しているアルミン。そしてそのアルミンを介抱しているライナー。その2人は反応が遅れてしまった。

「!!」

巨大な手が2人に迫るその瞬間。もう1人、指笛を聞いていた者も迫りついていた。

「だから、オレの教え子に手え出すんじゃないやねえっつってんだ! この木偶が!!」

巨人の手を迎え撃ったのは 突然 空から降りてきた？ 男だった。

小さな拳を大きな巨人の手に当て 周囲に光が瞬いた。目も眩むその光。ジャンやアルミン、ライナーは思わず目を閉じ、開けた時には 襲つてきていた巨人の姿は無かった。

「あつぶねえな。 だが、お前ら。 無事で何よりだ」

「「アキラ教官!!」」

目を開けた時 それは誰が来たのかはつきりした瞬間だった。

そして、巨人はと言うと…… 当然ながら吹き飛んで地面に頭からめり込んでいた。トドメはさせていないが、アレだけ深く突き刺さっていれば、動く事は出来ないだろう、と言う事で放置。

アキラは 全員の無事を確認をしたところで、本題に入った。

「お前ら 女型の巨人つてのを見てないか？ どうやらソイツが今回の原因……なんだが」

ファムの最後の言葉が女型の巨人だった。全てはソイツと会わなければ進まない。そして、自分自身が相対しなければ被害が拡大する事も理解していた。調査兵団の各班を容易く潰す相手。巨人の鎧を纏った人間なのだから。

「あ、はい……！ 女型の巨人なら、中央後方の方へ……！」

「っ……。成る程。女型の狙いは やっぱアイツって事か。的中したな。エルヴィン。……ほんとと、嫌な事を当てんのが結構多くなってきたぞ」

アキラはアルミンの話を訊いて、立ち上がった。

「お前ら。あれを見ろ」

アキラは前方の空を指さした。

指が示す先の空には緑の煙弾が次々と撃ち放たれていた。それが意味するのはただ一つのみである。つまり、作戦続行の意思表示だ。

「は……？ 撤退、命令じゃないのか……？ 陣形の進路だけを変えて作戦続行……？」
「作戦続行不可能の判断をする選択権は、全兵士にあるはずだが、まさか指令班まで煙弾が届いていない……のか？」

「いや、間違いなく届いてる。あの煙弾の見える範囲って結構広い。その上でエルヴィンが判断したって事だ。作戦続行ってな」

「だけどアキラ教官！ ここまで甚大な被害が出てる！ 今は体勢を立て直す方が先決なんじゃないのか!？」

陣形の奥深くまで侵入を許した事実が、この陣形に多大なるダメージを与えていると言う結果が見えている。見えているからこそ、ライナーの様に、ここは一先ず撤退を考えるのが普通だと言えらるだろう。

だが、エルヴィンの判断は違った。

このまま続行だと。

「アルミンも言ってるように、その女型ってヤツの狙いがエレンだってんなら、ただ撤退するってのも危険が伴うな。まだオレは見てないが、話を訊けば、女型は馬よりも早く走れるんだろ？」

「あ…… はい。異常なまでの脚力でした」

「つてこたあ 闇雲に逃げてても追いつかれる危険がある。そつちのリスクの方が高いかもな。だが、このまま進んだ先には巨大樹の森がある。どちらかと言えばそんなの方がまだ安心して判断したかもしれないぜ、撤退よりな。あの森も結構広大だ。全兵士が入ったところで、木が足りなくなる何てこと、無いからよ」

周囲の木々は異常なまでに高い。流石に50m級の超大型が来れば話は別だが、基本的な巨人よりは遥かに高い。それに加えてその巨大な木々が無数に存在しており、走る巨人にとっては障害物になる。余程の事がなくかぎり立体機動装置を身に付けた兵士の機動性の方が上回るだろう。

「来た道逃げて、続くのは平地だ。そんな場所でやり合う方が危ねえ。……ま、オレやりヴァイを除けばって話だがな」

ゴキリッ！ と拳を鳴らしながらそう言うアキラ。その視線を、表情を見て 漸く

ジャンは気付く事が出来た。……いや、ジャンだけじゃない。アルミンやライナーも同様だった。

先程までいつも通りに話すアキラ。この危機的状況でも飄々としており、常に余裕を持つている様子がかがえたのだが、今の表情は全く違う。

そう……一文字で言い表せば『怒』

そのみが当てはまる。今まで虐げられ続け、餌食になり続けた人類の怒りを体現した者こそがアキラと言う話も何度か聞いた事があるが、まさに憤怒の化身だと思え、味方であり、尊敬できる人物なのに、身体の内から震える感覚がした。あの女型の巨人と相対したその時以上の恐怖が。

そんなアキラの表情だったが、直ぐに息を潜めた。

「お前ら。馬数が足りてねえよな」

「つ……。あ、はい。ライナーの馬はいますが、オレのは……。それにアルミンの馬もやられて」

「ああ、その事だが心配するな。もう少ししたら来る」

アキラの言葉に呆気にとられる。

「……は？ えと、それはどういう意味、ですか？」

アルミンも同じく。頭の回転が速く、聡明ともいえるアルミンなのだが、流石に理解

する事が出来なかつた様だ。ジャンが幾ら呼んでも全く来なかつた馬が、アキラが呼べば直ぐに来るとでもいうのだろうか。最早何をしても驚かないと思うのだが、馬を一般的には違う意味で操る術も持ち合わせているとでも？

そんな3人の疑問の顔を見たアキラは、にかつと笑つていった。

「お前らにとつての女神つて事になんだらうな！ その女神サマが駆けつけてくれるんだよ」

「「「??」」」

ますますわからない、と頭を傾けたその時だった。

『みんな————っつ!!』

馬を引き連れたクリスタがここに合流したのは。

クリスタの引き連れた馬。たった1人で3頭もの馬を、それも興奮していたであろう馬を完璧に落ち着かせてここまで連れてきた。そして 皆を心配している表情、安堵した表情。

それらを見て、アキラが言う様に クリスタの事を 女神 だと思えない者はいないだろう。

「……サンキューな。クリスタ。流石にオレも男3人担いでいくのはしんど過ぎるし、絵的にもアレだし」

「いえ、アキラ教官が助けてくれたおかげです。私はこの位しかできないから。……でも、本当に皆良かった……。最悪な事にならなくて……。本当に」

アキラは クリスタを撫でる。そして そのクリスタは 眼に涙を浮かべて、またアルミン達を見る。

『女神』

『神様』

『結婚したい……』

アキラはとりあえず置いといて、口には出していないが、クリスタに対するそれが男達の心情だった。

「ははは。……とりあえず、お前らはこれで大丈夫……つと」

アキラはそれを笑顔で確認したと同時に、再び空を見た。

緑色の煙弾に交じって、一際不吉を孕む色をした煙弾。灰の色がこの空に再び打ち上げられたのを見たからだ。

「近い。……お前ら！」

「「はっ!!」」

アキラの声に、敬礼こそはしていないが 自然と姿勢が更に伸びた。振り返ったアキラは手早く言う。

「エルヴィンの判断に従い、このまま進行しろ！　ただ、それも時と場合だ。死ぬんだけ
は許さんからそのつもりでいろよ!!」

そして　4人に背を向けた。

「オレは　その女型つてヤツントコに行つてくる。向こうの方に行つたんなら、多分あ
そこなんだろう」

灰の煙が空に伸びているのが判る。ただの巨人であれば、黒や赤の色が上がるのだが
今撃ちあげられているのは灰色。……つまりあの下で　絶望的な事が起こっている
事も。

もうゆっくりはしてられない、とアキラは脚に力を入れた。

「……………アキラ教官!!」

「……………なんだ、ライナー」

アキラは振り向かなかつた。ライナーだと言うのは声で分かつた。

これは　たれば　の話にはなるが　この時、ライナーの表情を見ていれば……
何かを察する事が出来たかもしれない。

「い、いえ……　(ご)武運を」

「ああ。お前らもな。……絶対死ぬなよ」

それが最後の言葉だった。ドンっ！　と言う轟音と大量の砂埃が周囲に舞い上がり、

アキラの姿はそこには無かった。

「……このまま、行くぞ。オレ達は 進行方向へ」

「ああ」

「うん」

アキラを見送った後、馬を走らせる4人。ちらりちらりとアキラが向かった方を見てしまうのは仕方がないだろう。あの凶悪な女型と対峙した者であれば特にだ。

そんな時、1人だけライナーの方を見ている者がいた。

「……（ライナー……？）」

それはアルミン。

あの時。そう アキラを呼び止めた時 アルミンははっきりと見たのだ。何処か苦しそうなライナーの顔を。

ただ、それが何を意味するのかは 全く判らなかつた。

38 話

それは 再び灰色の煙弾を視認する数秒前の事。

飛ばされる前、その下では女型の巨人の猛威は続いていた。

出会い頭では ただ『異常なまでに頭と身体の動きがキレている』程度だった。

それに、大人数で多方向からの同時攻めで仕留めれると思っていたのだが、それが完全に甘かった。

脊髓、腱、どこでも削ぐ事が出来れば動きを止められたはずなのだが、女型は刺さったアンカーも正確に把握。引き抜き、或いは兵士ごと引きづり 有ろう事か その巨体が宙に跳ねた。

今までの巨人からは 有り得ない事をすると思われ、呆気に取られている間に ある者は踏み潰され、またある者は振り回され、そして 蹴り潰された。

「イルゼ!! 煙弾を飛ばせ!! アレは異常だ……。異常過ぎる!」

「……ッ 了解!!」

残されたのは、もう2名のみだった。

無残にも惨殺された仲間達。それを吊う時間も一切なかった。既に 女型のターゲツトが自分達に向いている事を把握したから。

握られている銃には 《灰》の弾が込められている。

イルゼは、正直に言えば この色の弾丸を使う場面は来てほしくない、いや 使いたくないと言うのが心情だった。これは壊滅に近い被害を被りそうになる時に放つ弾だから。

そして その色を提案した相手の事を考えれば特に思う。そんな危険地にむぎむぎ呼びたくないと言う気持ちもあり、そして何よりも頼り過ぎる事で雰囲気悪くしたくない、と言う気持ちもあった。

だが、今はそんな私情を前に出す訳にはいかない。何よりも。

『遠慮なんかするなよ。……そう言う場面が来たら絶対に』

使わなかった時の方が圧倒的に怒るから。

灰色の弾を空に向かって撃ち放ったその時だった。

「イルゼツツ！」

並走していた班長フレンが馬から自分を突き飛ばしたのだ。

何故？ と思う間もなかった。何故なら、突き飛ばした張本人は消えていたから。凶

悪な巨人の大足で蹴り飛ばされ　馬と一緒に宙を舞っていたから。血飛沫をあげ、身体を無数の肉片に散らせながら。

「あつ……あつ……」

馬を、そして　班の全ての仲間を失ってしまった。

自分自身が迷ってしまったから、だろうか。とイルゼはこの時強く想ってしまった。

時間にして数秒程だが、体感時間は異常なまでに長く、イルゼ自身がそう感じてしまっても仕方がないと言える。

そんな時間も、後悔に苛まれる時間も、仲間達を想う時間も　もう残されていない。

唯一残された生存者であるイルゼが、あの女型に狙われているのだから。

馬を失い、地に座り込んでいるイルゼはただ茫然と見ているしか出来なかった。その間にも女型は近付いてくる。アレだけ恐ろしいまでの速度で仲間達を皆殺しにしたのにも関わらず、今はゆっくりと大地を揺らしながらイルゼに近づいていく。

不思議と死の恐怖は無かった。ここまで巨人に接近されたのは二度目だから、なのかもしれない。

「(あの、時は　身体を　足を思いきり握られたんだっけ……)」

異常なまでに接近された、と言えば一番最初の頃の方がインパクトはあるだろう。巨

人に捕まれ、そこから生還する可能性は極めて低く、その時の恐怖を知っているからこそ、冷静に思い出す事が出来たのかもしれない。

「私は…… なんてあの時助かったんだっけ……」

武器も脚も失い、生身の人間では抗う事が出来ない巨人に接近された。捕まれ喰われかけたのにも関わらずに 助かった。そして 一年という長い時を 壁の外で過ごし 生還を果たした。

——なぜ？

女型の巨人は ゆっくりとした仕草で座っている女を見下ろすと、またゆっくりと脚を上げた。恐らくは その大きな足でイルゼを踏み潰すために。

自分の身体よりもはるかに大きい脚を見ながらイルゼは 更に思い返していた。

そして、漸く完全に思い出す事が出来た。どうして 今彼の事が頭から抜けていたのか、が不思議なほどに。

『教えてくれてありがとうがとな！』

そう。

あの笑顔がいつまでも頭の中から離れないんだった。

どれだけ辛く厳しい訓練が続いていても、あの笑顔を見ればすぐに平気になれる。直ぐに元気になる。

『オレは大神 晃だ』

笑顔で窮地から救ってくれた大恩人。

そして 心からその笑顔に惹かれた者の1人。

「私が ここで死ねば……ペトラに……取られちゃう、かな」

大きな脚がゆっくりと頭上から迫るのが判る。いや、ゆっくりに見えるのは死ぬ寸前、死ぬ間際だからそう感じてしまうのかもしれない。

「(もう…… 会えなくなるのは、辛いよ……。アキラに……)」

初めて恋をした相手。

ライバルもいるけれど、今までと比べたら格段に良い。毎回の様に仲間達が自由の為に戦い、命を散らしていたあの頃に比べたら。彼が…… アキラが来てくれるから変

わったから。

「…………でもッ」

イルゼの目に炎が宿る。

踏み潰される寸前の所で、地を蹴り 飛びのく事で死を免れた。

「何時までも、アキラに頼ってばかりじゃいられない！ ……それに 私だって最後の瞬間まで 抗い続けるってずっと決めてた」

アキラが来た事で 確かに死者の絶対数は減った。

だが、それに甘んじるだけの様な者はこの調査兵団の中には誰一人としていない。

「…………私は、決して屈しない。巨人なんか臆さない!!」

腰にさしてある剣を引き抜き、構えた。

激高する様に、自分自身を奮い立たせるように声を張ったイルゼ。

そんな中でも 頭は懸命に働かせていた。

この女型は15m級。それに加えて運動能力は他の巨人とはくらべものにならない

程高い。それらを考えて出る結論は、この女型は エレン・イェーガーと同じ。『巨人の鎧を纏った人間である』とイルゼの中では結論が出た。自由自在に巨人の身体を操る事が出来るのであれば、あの動きにも納得ができる。アンカーを引き抜く事も、うなじを防御する事も、そこが弱点であることを理解しているのであれば説明はつく。例え考え付いたとしても、自分が抗える相手ではない事は重々承知している。それでも諦めたりはしなかった。初めての時も、そして今も。

「やああああッツ!!」

巨人の脚に向かって刃を突き立てる様に構え、吼えながら突っ込むイルゼ。

そんな姿をまるで冷やかに眺めている様な女型は、同じく脚を上げた。その攻撃に合わせる様に、先ほどよりも早い速度で脚を振り下ろす。

そして、イルゼを踏み潰そうとしたその瞬間、だった。

衝撃音が大地を揺るがした。そして音だけでなく衝撃波。空気が弾丸になって自分を叩く様に感じる。

そして判らなかつたのは何故、自分が生きているのか？ と言う事。考える事が出来ているのか？ と言う事だ。大地を揺らせたのは巨人の一撃があったからだ。そし

て 自分にはもう躲せないとも思える速度だったからこそその威力。なのに、なぜ？ 自分は生きているのだろうか。

その答えは目の前にあった。

「やっぱ、変わんないな。この土壇場でその覇気、それに啖呵。まさに それでこそイルゼって感じだな」

目の前に、いたから。

巨人の脚を片腕で持ち上げている彼が。

また、来てくれた。死ぬ寸前に前と同じ様に 彼、アキラが。あの変わらない笑顔で。涙がこぼれ落ちる。

「(いつも……助けてくれるのは…… アキラ、だった)」

表情を見て、更に にと笑顔になるアキラだったが、直ぐにその笑顔も消失した。あらゆる負の感情が入り混じった表情、怒りの表情に変えたのだ。

「……………随分と、オレの仲間を喰い散らかしてくれたみてえだな」

持ち上げた左手が思い切り握られ、脚の裏の肉を抉り掴む。

そして残った右手を固く握りしめると、踵部分に思いつき振り抜いた。

閃光が発生したのだろうか。目を遮る程の大きさの脚のおかげで完全に暗くなっていたのに、光を見た気がした。そして、雷鳴が轟いた様な轟音。次の瞬間には、女型の巨人は宙に浮いていた。

脚の踵から脹脛、膝裏にまで掛けて粉碎されており自身の身体の倍は飛ばされた。

ずしんっ！ と再び大地を揺らせたのは、宙を舞ったその巨体が倒れ込んだからだろう。

「楽に死ぬると思うなよコラアあッ!!」

轟ッ と言葉が大砲にでもなったかの様に放たれ、空気を揺らした。

そして、次にアキラは腰に差してあった銃を手に取り、空に撃ち放つ。

放たれたのは《白》の煙弾。それはアキラが駆けつけた時の合図だった。

「イルゼ。もうちよつとしたら、別の班が来る。そいつらと合流して、アイツからなるべく離れる。……此処から先はオレが対処する」

「うん……。アキラ、ありがとう」

「礼はちゃんと生きて帰った後に幾らでもだ。ただ、死ぬのは絶対に許さんから。そのつもりでいろよ」

右腕をぶんぶんと振りながらそう言うアキラ。

あの女型は片足を失い、今は機動性が無くなった様子だが 見る見る内に損傷した脚は復活していく。

「ある程度は甚振ってやらねえとオレの気が収まんねえよ……！」

また、固く握られる両の拳。

「アキラ…… じ、時間は？」

「あん？」

アキラの活動限界時間については、イルゼも勿論知っている。極めて極秘に扱われている事であり、リヴアイ班とエルヴイン団長、そして あのハンジくらいしか知らない情報だが イルゼはアキラに近い存在と言えるからしつかりと知ってる。無理しない様に、させない様に と言う役をペトラと共に請け負っているから。

だから それを第一に聞いたのだ。もしも、迫っているのであれば ある程度した時に迎えに来ないといけないから。

「ああ。大丈夫だ。自分で自分が動ける時間把握してない訳ねえだろ？ ……女型^{アレ}を仕留めるくらい余裕だ」

手を振るアキラ。

それを訊いたイルゼは。

「アイツは……ただの巨人じゃないよ。アレはきつと」

話そうとしたのは、自分が感じた事。

ただの巨人には動く事が出来ない動きをして、更に知性があると言う事。つまり巨人の鎧を纏った人間であると言う事を。

それを訊いたアキラは、もう一度手を振った。

「言いたい事は判ってるって。……アイツもエレンと一緒に訳だろ？」

「っ……」

こくりと頷くイルゼ。

「つまり、少しは骨のある巨人って訳だ。……さつきから大体一撃で終わっちゃまってるから 行き場のねえ怒りが中々発散できなくて困ってたくらいだ。……丁度良いっ、てな」

そして いつの間にか手に持ってた拳大の大きさの石をあの女型に向かって投げた。

かなりの距離があったがまるで弾丸の様に伸び、眉間に迫っていったが、それを迎え

撃つのは女型の巨人。片足を失ってもまだ手は健在だ。

「成る程。目も良いみてえだな」

「こき、こき、と首を鳴らした」

「行け。イルゼ。あいつらも来た」

馬が駆けてくる音を聞いたアキラは　そう促すと同時に大地を強く踏み抜き、構えた。

アレは　超加速をする前の所作。

「アキラも死なないでよ!!　死んだら、絶対に赦さないから!!　絶対に追いかけるからね!」

「死ぬかよ馬鹿。他人に言つといて、自分はとか有り得んだろ」

そして　アキラも弾丸になったかのように、女型のいる場所へと飛翔んだ。

39話

本当に一瞬だ。一瞬のやり取りだが直ぐに気付ける事はある。

——明らかにおかしい。

そう、まるで弾丸の様に速く動く。そして 更にその一撃はまるで雷の如き威力だった。

受けが間に合ったのにも関わらず、拳が当たった個所は完全に消し飛んでしまうのだ。だから早々に戦術を変えた。受けてはならない攻撃だった為、兎に角回避に専念した。

破損箇所も何とか修復するだけの時間を稼ぐ事が出来たのだが、それでも回復する意味さえ無いのではないか、とも思えてしまう。

純粹な力と力のぶつかり合い。人間が巨人を打ち破るなどと一体誰が想像できるものだろうか。

——あれは、いったいなんなんだ……？ あの、ひとは……。

こちらの蹴りが当たらない。

元々 人間の大きさから考えた方が小さいと言う事もあるのだが、それでも ここまでは何ら問題なく蹴散らす事が出来た。立体機動装置も武器も全く問題なかった。この巨体で動きが鈍くなる、という訳ではない。当然自分の身体のように動かす事が出来る。大きさと素早さは反比例したりしない。……なのに当たらない。

『よつと。惜しいな。もうちよつとだった』

そして、何よりも厄介だったのが脳裏に霞めるあの時の光景だった。

もう、何人も踏み潰し、蹴散らし、命を奪ってきた。共に訓練をし、同じ釜の飯を食い、過ごしてきた者でさえ、簡単に殺す事が出来た。

自分達は戦士である。

そして 相手は《悪魔の末裔》であり《悪の民族》だ。

『よーし。そうだ！ でも 欲を言えばもうちよい角度を鋭利に。んゝ 緩急をつけたり、フレイントを多用するのも良いと思うぞ？ それにほれ！ 相手の呼吸をもつと読め！ オレに当てる事くらい簡単にできるって』

そうだ——。相手は 必ずやらなければならない相手。

なのに、怒りに歪むあの顔を見てしまうと、動きが鈍る。動きが鈍ると同時に——意識と気持ちもブレてしまうんだ。

「……再生能力もピカイチだな。他とは比べ物にならないくらい速い」

女型の巨人と数合打ち合いをし、最初は左脛、更には左脹。右の拳と腹部。袂り取り、何度も吹き飛ばした。だが部位によって時間差はあるものの、普段の奇行種、通常種とは比べ物にならないくらい早く修復されてしまっていた。

そして 途中からは、防御に徹しているのか、回避される事も多くなってきた。
「ツ!! ツツ!!」

どんつ! と大地を揺らせながら跳躍し、一瞬で距離を取られてしまう。

「なんだ? 時間稼ぎのつもりか……? 巨人が逃げるとか、情けねえ事この上ねえな」

離れていく巨人に挑発のつもりで言うアキラ。だが、挑発だけではない。この少しの攻防で、アキラの中にしこりが生まれた。

最初は小さな違和感に過ぎなかったのだが、それが徐々に大きくなってしまったのだ。

女型の巨人の鋭く、えぐり込む様に放つローキック。それを躲すと直ぐに身体を駒の様に回転させて遠心力を活かしての回し蹴り。ローキックを撃つと見せて、ハイキックへと切り替える。

そして——何より 身体に刷り込まれた格闘術は 簡単に変える事など出来るはずも無い。

それは、受けた者も同じだ。その攻撃の軌道。独特な構え。全てが違和感でしかない。

そうだ。……この攻撃をアキラは受けた事があるのだ。

「……ちっ」

戦いながら、いや 違う。巨人を纏った人間が敵側にいる、という事実を知ってから、幾つかパターンを考えていた。

数あるパターンの中でも、今回のコレは 最悪なシナリオ。

それが、アキラの頭の中でノンストップで放映されてしまっているのだ。仲間達を殺した巨人の正体が、まだ確定ではないものの、確実に着実に輪郭を帯びだしていた。

『エルヴィンの判断は間違えねえよ。従え。それがより多く、救えるヤツが出てくる。それ位そろそろ学習しろ』

『……できるか？ アキラ。お前にしか頼めないんだ』

その映像の合間。割り込む様に2人の声が入ってくる。自分の考えをかき消す様に入り込んでくる。

『無事じゃないと許さないから。私も死なない。だから アキラも死なないで！』

そして、押しつける様にもう1人の声も響いてくる。立ち止まる事も、背く事も許さないと云わんばかりに。それらが、死に直結する事を誰よりも知っているから。

「つたくよお！ わーっつてるよ!! クソが!!」

アキラは右の拳を強く握り絞めた。

何が一番大切なのか。そして、天秤にかければどちらに傾くのかは、考えるまでもな

い。苦楽を共にしてきた仲間達の命とそれを奪おうとする相手。考えるまでもない。

そして、幸か不幸か…… 今回の作戦は殲滅ではない。

相手の正体を感じく前までは 正直 殲滅、駆逐、……殺すつもりだった。だが、今回の作戦を同時に思い出し、少なからず安堵している自分も間違いない。

「あめえよな……？ ぜってー、オレも。お前達の分も 巨人を殺すと約束してんのに……」

握りしめた拳を見るアキラ。

そこには、灰になつている者達が 血を流した者達が 宿っている様にも見えた。自分に託し、死んでいった者達もいると言うのに。

「つたくよお……。——ここは ほんとに残酷な世界だよ」

心底そう思ってしまう。思わず笑ってしまう程に……。

それを見た女型の巨人は 癩に障ったのか、隙を見せたと思ったのか判らないが一足飛び脚でアキラとの間合いを完全に潰した。

元々歩幅自体が違い過ぎる為、距離を取るのも距離を潰すのも巨人側の方が圧倒的にやり易い。鋭く、素早く。それでいて緩急を付け、フェイントも織り交せて。

そう——教えた通りに。

「……ッ!!」

完璧にとらえる事が出来た、と錯覚できるほど、完璧なタイミング。

一度も当てる事が出来なかった相手に漸く攻撃らしい攻撃が当てられる事が出来る達成感と、同じくらいの虚無感があった。

そしてそれと同時に、確かに聴こえた。僅かな時の間。刹那の瞬間だったのにも関わらず、確かに聞いた。

『——もう隠すつもりも無い、つてか？　なあ　——よ』

それは　強烈な蹴りが、アキラの身体を蹴り抜いた瞬間に　確かに聴こえた。

がきい！　と凡そ人間を討つ様な、蹴り砕く様な音ではない。何度も何度も踏み潰し、蹴り潰してきた時の音ではない。まるで金属と金属のぶつかり合いだった。

女型の巨人の蹴りは、間違はなく直撃した。今までは拳と蹴りのぶつかり。蹴りと蹴りのぶつかり合いだったが、今回は間違はなく攻撃する暇も無かった筈だ。

何度か回避する所も見ている為、異常なのは攻撃力だけだ、と踏んでいた。だから、自分自身の考え、気持ちを殺して　攻撃をした。一瞬の隙をついた。

「……………な、ん……………で……………」

蹴った。間違いなく蹴り抜いたはずなのに、相手は動いていなかった。立っていた。大地だけが深く抉れ、ひっくり返ったが、相手は全く動いてなかった。

「口……きけるのか？ 巨人の身体で」

額から一筋の血が流れてはいるものの、肉体的なダメージを全く感じられない圧力がそこにはあった。そして、背後には煙弾が空に放たれていた。

「……白。まあ、傾合いでもあるか」

くると後ろを見て色を確認するアキラ。

そして、唾然としている女型の巨人の背後に瞬時に回り込むと。思いきり跳躍し、殴り飛ばした。うなじを狙ったの攻撃だったが、女型の巨人の反応速度もかなり早く両手でガード。更には身体の力を抜き、逆に飛ぶ事で、衝撃を吸収。両手を少しは破損させたが何とか急所を守る事には成功した。

そして、吹き飛んだ先は、森の中。

「……さあ、決着付けようぜ。巨大樹の森 此処で」

額の血を拭い、また挑発をする様に手招きをするアキラ。

死角の多い森の中。走る際にもこの巨大樹が障害物となってMaxで走り続ける事など出来ない。

相手は巨人をも圧倒する男。こちら側から見れば間違ひなく真正銘の悪魔に見える。今まで教え込まれていた悪魔ではなく本物の悪魔。そんなモノに抗えるはずがない。

後戻りはもう出来ない。逃げる事も出来ない。全ての道を閉ざされ、先にはもう死しかない。それ程までの事態なのだが、不思議と頭の中だけは冴えわたっていた。

『……この人に殺されるのなら。私を解放してくれるのなら』

それは 頭の何処かで思っていた事かもしれない。

彼女は此処に来た本分を、忘れそうな時間があった。心の底から楽しめた時の中にまるで空気のように 当たり前のように入ってきたのが目の前の男だった。

そう——死を受け入れようと思ったその時だった。

アキラがそうだった様に、彼女の中にも声が聞こえてきたのだ。

——頼みがある。1つだけ、頼みが……。

声の大きさ自体は小さい。儂く消えそうな程に小さい。だがそれでも悲痛な、心からの叫びの声だった。誰よりも大きく聞こえてきた。

——オレが、間違っていたんだ。……今更オレを許してくれとは言わない。

——頼む。……お願いだ。この世の全てからお前が恨まれる事になっても、……だけはお前の味方だから。……だから、頼む約束してくれ。

『帰ってきてくれ……!』

その声が頭に届いた瞬間から、もう死を受け入れた己はもうそこにはいなかった。

「ぎゃあああああああああああああああああああ
!!!!!!」

女型の巨人は吼えた。

空気を震わせ、大地をも揺らしかねない程の音量で吼えた。大地を踏みしめ、駆け出す体勢に構えた。

それは譲れぬ想いを持った者同士の衝突。

その最終章。

「ああ、そうだ。……来い、かかって来いッ！」

40話

それは アキラと女型の巨人が巨大樹の森の中へと入る少し前の事。

「リヴァイ兵長！」

「なんだ？」

巨大樹の森に進行したリヴァイ班。

この場所は 壁外、壁内に点在する巨木群の中でも 調査兵団の訓練地として利用している場所の1つであり、入り組んでいるのだが、その地形は正確に頭の中に叩きこんでいる。それが 圧倒的な戦力を誇るリヴァイ班であれば、尚更だ。絶対にする事は無いが（巨人がいるから）、目隠しをした状態であつたとしても、進行する事が出来る程に熟知している。

その場所に侵入して、エルヴィンの信号弾を確認して 煙弾を撃ち放つたと言うのに…… まだ帰ってきてない。

「その、アキラの活動時間が……40分を超えました」

「……そうか」

ペトラのリヴァイへの報告。

それはアキラと別れてからのタイムキーパーだ。正確に彼女はそれを伝える役目を担っており、殆どズレはない。これまでもずっとそうだった。

「アキラさんの活動時間……？」

エレンだけは、アキラの活動時間は知らされていなかった。だからこそその疑問。そして班のメンバー達の顔色が変わった事の理由が判らなかつた。

そう、ペトラの報告から リヴァイ以外の全員の表情が険しくなっていたのだ。

その理由が間違いなく、アキラと関係している、と連想する事は難しくなかつた。

「兵長。私に行かせてください」

ペトラはリヴァイに進言した。進言……と言うよりは懇願にと言つて良いかもしれない。

この中で誰よりも表情を険しくさせているから。……誰よりも苦しそうな顔をしているから。

「駄目だ」

「っ……」

だが、その願いを訊いてリヴァイが首を縦に振る事は無かつた。

ペトラが一人アキラの所へと向かつた所で、いや ただの一人がアキラの所へと向

かった所で何が出来ると言うだろうか。超絶的な力を使った時のアキラの速度は立
体機動装置を使った時の速度を軽く凌駕する。それも平地であったとしてもだ。

リヴァイがペトラ一人を行かせる筈がない事くらいペトラ自身も判っていた筈だっ
た。だけど、それでも言わざるを得なかったと言って良い。

何故なら……。

「兵長！ これまでで、アキラが…… アキラがここまで時間が掛かった事はありませ
ん！ もしもの時は私達が 連れ戻さないと……ッ」

「判っている」

ペトラの言葉に、短く返すリヴァイ。

「……判ってるだろ。今の状況を考えろ。これまでの訓練の事も次いでに頭に入れ直
せ。アイツは何も考えてない訳じゃない。例え想定外の事態が起ころうとも、何を優先
させるべきかが判っている筈だ」

「つ……は、はい」

僅かな差ではあるがこの中では一番付き合いが長いのはリヴァイ。そして 自分達
が最大級に信頼する兵長だ。感情が全面に出ていたペトラだったが、どうにかそれを押
し殺す事が出来た。何よりも説得力のある言葉がリヴァイから聞けたから。

「……決して誰も見捨てず、全部を守ろうとする大バカだ。長距離索敵陣形に分かれて

いる今の状況で、そんな自分が真つ先に折れる様な状況にする訳無いだろ」
そうだ。

アキラの事をこの場にいる者達は全員知っているから。

「そうだとペトラ。……兵長の言う通り。だから アイツが帰ってきたら、思いつきり
ひっばたいてやれ。遅刻だ、つてな」

「そりゃあ良い。何なら牛一頭を運ばせるか。タダで」

「なら、それに加えて酒も用意しとかないとな」

「やれやれ。……あのバカがどう行動するか、今までの事を考えてみれば オレらなら
判りそうなものだがな」

リヴァイ班の全員の表情に余裕も戻ってきていた。

勿論ペトラも。

「オルオ。喋り方気持ち悪いから止めて」

だから、いつも通りの返しをする事が出来たんだ。

更に少し時間を遡り、場面はミカサとコニーに変わる。

それはエルヴィン達に続き巨大樹の森へと中列が入っていき、それを後続が確認した後、それに続く事は無く班長が回り込む事を指示して迂回中の時だ。

それに違和感を覚えたコニーはミカサに訊いた。

「な、なあ 中列だけ森の中に入っていったみたいだったけど、陣形ってどうなってるんだ？」

「陣形はもう無い。私たち左右の陣形は森に阻まれてその周りを回るしかない。……索敵能力は失われている」

「……なら、何で進路を変えてこの森を避けなかったんだ？ エルヴィン団長は地図読み間違えちゃったのか？ 右翼側がやべーってのは確認したから、そのせいで間違えたとか？」

「……わからない。確かに時折 右翼側から灰の煙弾も見たけど、白の煙弾も見てる。だから、右翼側の脅威は緩和されたって判断をしていいと思うけど、エルヴィン団長が

何を考えているかまでは判らない」

そう、全てわからない事だらけなのだ。

右翼側が壊滅的な打撃を受けたと言うのは、煙弾の信号で理解は出来た。そして それに対抗する様に灰の煙弾が撃ち放たれた。そして 白も見えている。

灰に対して白。即ちそれは脅威に対する対策が出来たと言う事。出来ると言う事を意味している事は知っている。当然 班長から一通りの説明は受けているから。

『煙弾の色についての説明は以上だ。何か質問はあるか?』

『白は 灰に対する対策が成された、と判断して良いと聞きましたが、具体的な対策については判るのでしょうか?』

『ああ。対策については状況次第だから一概には言えない、が。『最適の手段を取っている』それだけ認識していれば良い』

その白の正体。

ミカサは、十中八九ではあるが ほぼ間違はなくそれが何なのかは理解していた。そして 班長がそれを濁して言うのにも理由があるだろう、と。

同時刻。

場面は巨大樹の森の入り口にまで到達したジャン達。

樹高80mを超える巨大樹の枝の上で待機をしていた。抜剣をして。そして、これは指示があつたからだ。馬を降り、上で待機する。その事に誰よりも不満があつたのはジャンだった。

「……正気かよ。当初の兵站拠点づくりの作戦を放棄…… 本来ならその時点で尻尾巻いてずらかるべきところを大胆にも観光名所に寄り道したあげく、馬降りて抜剣して突つ立つて……、更にその上森に入る巨人を食い止めろと？ ぜんっぜん巨人の影が見えねえ状況だつてのに、完全に無意味だろこれ」

ジャンは不満に満ちた視線を合流を果たした自分自身の班長へと向けた。

「あいつ…… ふざけた命令しやがって……」

「聞こえるよ、ジャン。声を落として」

「ちつ…… ろくな説明もないつてのが斬新だ。上官じやなきや誰も相手にせず、聞き流せるんだが…… ヤツの心中も穏やかな気分ではない筈だよな。ここに巨人がいねえ理由。そりや考えてみりや一発で判る。……あの人が周囲に齎す影響つてヤツは、人間に限らず巨人まで引き寄せちまうんだつてこつた」

不満に満ちていた筈のジャンの顔は軽く笑みを見せていた。

「(アキラ教官の事を考える時だけはちよつとだけど穩やかになるよね……ジャンは。ちよつと話題逸らしに今後も使ってみようかな……?) 班長に聞かれて揉めるくらいなら……)」

この時アルミンは そう考えていた。

聽て、ミカサ達も巨大樹の枝の上に来た。

広大な森である為、全方面からの巨人の侵入を防ぐ事は不可能だが、それでも可能な範囲で分かれて防御陣形を取る。

一向に現れない巨人。その影すら見えない現状にそれぞれが苛立ちにも似た感情を表面に出しかけていたその時だった。

『ぎゃあああああああああああああああああああ!!!!!!』

衝撃音、轟音と共に、森自身が叫びを上げた様なそんな雄叫びを聞き取ったのは。

「!!」

「これは…… アイツだ。絶対!」

一度対峙しているからこそ、想像がつく。

普通の巨人は声を発する事はしない。したとしても呻き声程度。これほどまでの音量を上げる巨人は今まで見た事がなかった。……そう、あの巨人は普通ではない事くらいは判っていたから。

「アキラさん……!」

抜剣をした手が自然と聞こえた方に向けられていた。

他の兵士達も同様。森中に聴こえた為 待機組の誰もが同じ様な構えを取っていたその時。

『デメエらアア!! ぜってえええこつちに近づくんじやねえぞおお!! この辺でひと暴れしてつからよおお!! 木々が薙ぎ倒されて、お前らもぶつ倒されても責任取らねえからなアア!!』

同じくして、またどこかい声が聞こえてきた。これは人間のモノ（にしては常識を超えている声量だが）である事は直ぐに判明。

知っている声だったから。誰よりも信頼している者の声だったから。

「は、ははは……。負んぶに抱っこ状態ってこの事かよ。頭では判ってんのに、正直きついで……。アキラ教官」

『アンタの手助けがしたい』『その背を見ていたい』

ジャンの心情はこの辺りだろう。それでもそうできないのは、圧倒的に足手まといだから。待ちも戦いの1つ。耐えるのも同じく。

任務に従うのは兵士の最低限の務めである為と押し殺していた。

「なあ……。アルミン」

「ん？ どうしたの」

そして アルミンの傍にいたライナーが声をかけた。

「あの人は、本当に人間……。なのか？ エレンの様に巨人になれるって訳じゃないのに、なんであんな力が出せる？」

「……それを僕に聞いて明確な答えが返ってくるって思う？ ライナーらしくないね」

「……っはは、そりやそうだな。……悪い。ちよつと今頭ん中が混乱してるみたいだ」
ライナーの表情が違うのはアルミンも感じていた。それは助かった事への安堵感等の類ではないと言う事も。だからこそ、この時アルミンは『ライナーは衝撃のあまり混乱してしまったから』と片付けた。誰でも目の前であんな事が起きて平常を保てる者などいる訳がないだろう。

そして、そのアキラの声はリヴァイ達にも聞こえた。

「おい。聞いた通りだ。オレ達は先を急ぐ」

「は、はい!!」

リヴァイは表情一つ変えず、ただ班全員にそう伝えて先を見据えていた。
「アキラさん……」

エレンはちらりと後方を振り返る。

戦塵が巻きあがっているのだろう。轟音と共に、空高く砂埃がまるで砂嵐の様に渦巻きあがっていくのが見える。何処で戦っているのかが一目で判る。

「アキラさんなら、きつと……ツツ!!」

エレンが、後方から目を離そうとしたその時だ。

また、凄まじい轟音が響いたかと思えば、何かが超高速で飛んできた。それがいったい何なのか、理解するよりも早く、目と鼻の先の巨大樹に衝突し薙ぎ倒された。

「あ、あれは……!?!」

姿を現したのは女型の巨人。

手足に傷を負い、所々千切れ、抉れている所はあるものの運動機能は全く問題ない様子だった。そして、吹き飛ばされた先から出てきたのは。

『つててて……、ちつとは受け身の練習でもしときやよかったか』

アキラの姿があった。

遠目からでもよく判る。額から いや 頭から流れ出ている血が判る。……相応の傷を負っていると言う事がよく判る。

あの勢いで叩きつけられて五体満足にいられる方が異常だと思うが、アキラの戦闘能力を知っているエレンからすれば、吹き飛ばされ、傷を負っている現状を見ただけで、相手の巨人、女型の巨人が異常なのだと言う事が直ぐに判った。

「兵長！ オレ達も援護を!!」

「アイツはオレ達全員でやるべきです!!」

それは、他のメンバーにとつても同じだった様だ。

今までは 目の前に迫る巨人が面白い様に吹き飛び、打ちのめされ、圧倒してきた図しか見てこなかった。苦戦などしている様な素振りは一切見えなかったし、アキラ自身も飄々としていて そんな気配さえも見えなかった。

だが今は違う。

血を流している事もそうだが、何よりアキラ自身が吹き飛ばされると言った光景などこれまでに見た事が無かったから。

「野郎……、ズタボロにしてやる……!!!」

刃を構え、女型の巨人を見る。

怒気は離れていてもよく判る。今まで何度か命を救われたと言う恩義はこの中の全員がアキラに対してある。仲間だから当然、と言う言葉も何度も聞いたが、それだけで割り切れるハズがない。

そんなアキラが今苦戦をしていると言うのであれば、四の五の言わず助太刀すると全員が思っていた。そして全員が怒っていた。

それらを見たエレンは 最初こそは心配していたものの 直ぐに安心する事が出来た。

「(馬鹿め……、ここにいるのは巨人殺しの達人集団だ。アキラさんに加えてこの人達も敵にまわしたら、お前に待ってるのは地獄だけだ!)」

勝ちを疑ってなかった。このメンバー全員で攻めれば。

「リヴァイ兵長！ 援護をしましょう！ 指示をください!!」

直ぐ隣のペトラが再度リヴァイに進言するが、リヴァイが取った行動は。

「全員耳を塞げ」

取り出した銃を上に掲げ、撃ち放つ。

凄まじい音が周囲に弾き出され、森中に響き渡る。それは今までの煙弾ではなかった。

「音響弾……?!」

それは位置を知らせる為に使うもの。視界が不良である森の中では煙弾よりも効果的な信号弾だ。それを撃った後にリヴァイは振り返った。

「お前らの仕事は何だ？ その時々々の感情に身を任せるだけか？ あいつに口酸っぱく言い続けた時、お前らは何も聞いてなかったのか？」

リヴァイはそう言うと同時に、エレンの方を見た。

「アイツを含め、オレ達、……この班の使命は、そのクソガキにキズ一つ付けられない様に尽くす事だ。命の限り。……あの巨人はアイツに任せてオレ達はこのまま馬で駆ける。いいな？」

その言葉を訊いて還す言葉は一つしかなかった。数多の感情が一気に沈静化していきただ一言だけ発する。

『了解です』

それを訊いたリヴァイもそれ以上は言わず、前を向いた。

だが全員が納得をした訳ではない。エレンだけは納得が出来てなかった。

「ま、待ってください。あそこでアキラさんが戦っているんですよ！ 手を、手を貸せばすぐに終わらせる事だってできるかもしれないに!？」

「エレン！ 前を向け!!」

「……グンタさん!？」

「歩調を乱すな!! 最高速度を保て!!」

「エルドさんまで!? なぜ、なぜですか!? アキラさん一人じゃなくリヴァイ班の皆がやれば…… あの巨人を殺す事だつて直ぐに出来るハズです!! このままじゃ、万が一があつたら……」

最後まで言い切る前に、轟ッ! と目に見えない空気の壁の様なモノが自身の頬を叩いた。それにつられて振り返ってみると、あの巨人が正確無比に 巨木を蹴り倒しているのが見えた。普通の巨人ではありえない攻撃手段とその鋭さ。それを見て一気に戦慄した。

「アキラさん……!?!」

アキラにはエレンは何度も救われた。

それは命もそうだが精神もあった。自分自身が混乱し、見失いそうになってしまった時、いつもいつも変わらない笑みを見せて 安心させてくれた。心の底から信頼できる教官であると同時に、憧れの兄の様にも思っていた。

そんな人が今危険な目に遭っている。それもたつた一人で、孤独に戦い続けている。それが自分を傷つけない為に、自分に尽くす為に。

——人類を救うのは自分ではなく、あのアキラ教官である。

エレン自身はそう思っていたのだ。

「エレン！ 前を向いて走り続けなさい！」

「ペトラさん!! なんで！ なんですですか!?! アキラさんの時間ってさつき言ってましたよね!! その時間ってヤツを超えると 危険なんじゃないんですか!?!」

「……………ッ」

その問いにペトラは否定も肯定もしなかった。それだけでエレンにとっては十分だ。

「大切な人をこのまま見捨てて、1人だけで戦わせて、このまま逃げるなんてできない

!! 違いますか!?!」

「……………いいえ！ 逃げるんじゃない。先に進むの！ それが兵長の指示よ。従いなさい

!!」

「その理由がわかりません!! それを説明しない理由も全く判らない!! なぜですか

!?!」

ペトラに続き、オルオも繋ぐ。

「兵長が説明すべきではない、と判断したからだ!! それがわからないのはお前がまだヒョッコだからだ!! わかったら黙って従え!!」

「……………ッ」

誰に何を訊いても、言っても…… 求めている答えは帰ってこなかった。

エレンはまた、アキラの方を見た。

あの凶悪な蹴りを真っ向から受け返している。今までだったら 普通の巨人だったから そのまま弾き返す。吹き飛ばして終いだつたのだ。全ての能力がこれまでの巨人とはケタが違うと言う事は離れていても判る。

——まだ、戦っているんだ。アキラさんだけで。……たつた、たつた1人で。

急速に頭の中が冷え込むエレン。周囲の雑音の一切を頭から切り離れたかの様に静かに見る事が出来た。

——いや、オレだつて戦えるじゃないか。皆がいかないのなら オレだけでも行けば良い。そもそも……何でオレは人の力ばかりに頼つてんだ……？ 力だつたらオレにもあるのに。……自分で叩けばいいだけだろう!?

自然と手が自身の口許へと向かう。

——アキラ……教官。今行きます。……先に行つてゐる貴方を 追いかけます……！

手を噛みきろうとし、歯を当てたその時だ。

「エレン!!? 何をしてるの!! それが許されるのはあなたの命が危うくなった時だけ!! 私達と約束したでしょ!?!」

ペトラの声がエレンの頭の中に届いた。

だけど、エレンは止まらなかつた。険しい表情のまま そのまま口を閉じようとしていたから。

「エレン」

そんな中で 今までには無かつた声が届いた。

「お前は間違つてない。やりたきややれ」

指示を出した後は沈黙をしていたリヴァイだった。

「兵長!?!」

「オレには判る。コイツは本物の化け物だ。『巨人の力』とは無関係にな。どんなに力で

押さえようと、どんな檻に閉じ込めようと、コイツの意識までは服従させることはできない。……誰にもな。例えば殺されても無理だろ」

エレンと接し、時には閉じ込め、時には攻撃をしてきたリヴァアイだからこそわかる感覚だった。無防備の頭を蹴り続けた時も エレンの眼は変わらなかつた。強靱。何にも折れない鋼の意思を見た。

「お前とオレ達の判断の相違は経験則に基づくもの。アイツに対するこれまでの信頼もある。……だがな、そんなもんはアテにしなくていい。選べ、自分を信じるか、オレやコイツら、……そして アキラ。調査兵団組織を信じるかだ」

リヴァアイは一瞬だけ空を見た。そして 直ぐにエレンに向きなおす。

「正直に言おう。オレだって判らなかつた時期がある。お前くらいの時なんざ、まったくわからなかつた。ずっとそうだった。自分の力を信じて、信頼に足る仲間の選択を信じて、……それまでは結果が全く判らなかつた。まあ 今は違うがそれこそオレ達の経験則からって訳だ。絶対的に足りていない今のお前に判るもんでもない。……だからまあ、せいぜい 悔いが残らない方を選べ。自分自身でな」

リヴァアイはそれ以上は何も言わず 前を見ていた。

「エレン……」

最後にペトラはもう一度だけ 口を開いた。

「……信じて。私達を、……アキラの事を」

心に決め行動をしようとしていたエレンの意思がゆつくりとそれでいて確実に曲がり始めていた。

そして、脳裏に浮かぶのは 調査兵団リヴァイ班に所属したばかりの時の事だ。

巨人になる実験を試みようとし 失敗した。

全く関係のない所で巨人化してしまった。

当然、班の皆が敵意を持って自分に刃を向けてきた。

それでも 庇ってくれた人はいた。リヴァイ兵長とアキラだ。

その後 ハンジ分隊長に報告し、調査され意図的に許可を破ったのではない、と判ると全員が非を詫びてくれた。全員が戒めの様に手を噛みきる事までは出来なかったが、簡単には消えない歯型を入れていた。

『はは。オレ達だつて人間だ。理解できねえもんは怖いし、判らねえもんは間違えるつてなもんでな?』

そんな中でアキラだけは笑っていた。

『全員がアキラみたいに強かったら失望しなかったかもしれない……わね。エレン』

『だから、馬鹿言えつてのペトラ。何度だって言っただろ？ オレだって同じ人間だ。お前らがいなきや とつくに精神の1つや2つ粉碎してる。……1人じゃねえから戦えんだよ』

『うわっ、出たよアキラのくっさいセリフ！』

『うっせーわ！ エルド!! 本心なんだからしようがねえだろうが！』

恥ずかしそうに、それでいて心の底から信頼しているのも判った。

全員が全員を。……そして、その中に自分も入りたい。心から入りたいとエレンは思った。

『エレン。私達はあなたの事も頼る。……だから、私達の事も頼ってほしい。……だから、私達を……』

——信じて。

41話

——信じて。

ペトラの言葉がエレンの頭の中に渦巻く。

そして、あの日の記憶が再びエレンの中に蘇ってきた。

ペトラが信じてくれとエレンに言うその表情は真剣そのもので、他のメンバーも似たものだった。その中でただ1人だけ 違った。ただただ笑っていた。

『ま、いきなり同じ班に入れられて、『ウツス！ 今日からアンタたちは心の友です！ よろしくです！』なーんて考えれる訳ねーとは思うがな？』

カラカラと笑ってる。

そんな風に笑うのは当然アキラだ。こんな状況でも笑う事が出来るのはアキラくらしいものだろう。

『ちよつとツ！　ひとが真剣に話をしてるって言うのにふざけないでよアキラッ』

『バーカ。別にふざけてる訳じゃねーよ。エレンとは昨日今日の付き合いも同然だつてのつてこつた。まだまだ日も浅い状態でそんなあつさり『信じてますっ』つて言われたら、逆にオレは信じらんねえわ。だからエレンは存分に悩んで考えろつてことだ。ほれ　それに盲目になつちまうのも正直ダメだろ？　ああ、因みにこうやってオレに教えたのはエルヴィンとリヴアイだからな』

アキラは　そう言うかとエレンの頭の上にぼんつ　と手を置いた。

『時間をかけてしつかり見極めりゃあ良い。——オレ達は死なねえから　それくらいの時間は余裕である』

死なない、と言つたそのセリフ。普通だつたら信じる事なんてできないだろう。

あの日——、最初の巨人が襲撃してきた時。人間達の平和はあつさりと蹂躪された。

そして、二度目もそうだ。訓練に訓練を重ね、同じ班として頑張つてきた仲間達も命を落とした。

死なないと言う言葉程信じられない言葉は無いだろう。

でも……、アキラの言葉には不思議な説得力があつたんだ。

『ふうーん……なるほどね。……エレン。アキラの事は信じられるんだねえ。あーっさりっ?』

『えっ!? そ、そんな オレは……』

エレンは自分でも判っているだろう。

アキラの事を信じてない訳がない、って事を。あの訓練時代があつて、そしてあの時の彼の背を見た者達が 彼の事を信じない者なんて誰ひとりいない、って事を。

『なんでエレン相手にヤキモチ妬いてんだよペトラ。そもそも付き合いの時間がアキラとオレらじゃ 全然違うだろが』

『うるさい! 黙っててオルオ!!』

何処か楽しそうに言い争つてる様にも見える2人。

『ま、厳しい時は厳しいし、嫌あああな時は嫌あああなのが調査兵团って組織だけど、こんな感じもある。……徐々に慣れてけ。な?』

『は、はい!』

多分——この瞬間から、調査兵团の皆を信じられる様になったのかもしれない。

そう、エレンはアキラの事を信じている。そして アキラは皆の事を信じている。

それだけで——十分だった。

そして、思い出に浸る時間は終わる。残酷な現実がまた目の前に広がる。

アキラが女型の巨人と戦い続けている。使命を果たそうと全力で……。ならば、自分はどうすれば良いのか。もう考えるまでもなかった。

「エレン!! 遅い!! さっさと決めろ!!」

リヴァイの櫓が飛ぶ。

エレンの眼にはもう迷いはなかった。

「進みます!! 皆を信じて、ただ前を進み続けます!!」

皆はエレンを見て、そして互いに頷き合い、手綱を強く握り絞めた。

この時エレンは改めて思った。

それは、新しい心の拠り所。アルミンやミカサと一緒にいる時は、自分が自分でいられた気がした。新しい信頼を得たかった。心からそう思いたかった。

仲間を信じる事それは正しい事。

綺麗事だと言われるかもしれない。それ程現実には甘くない事だつて判っている。打算的に考えていた事だつて当然あつた。正しいと決めつけて、その方が都合が良かったと思つてた。

でも今は違う。

互いに信じあい、背を任せ合う事で乗り越えられる壁だつてあるつて事。其々が100%の力を出し切れれば、きつと どんな事だつて出来る。

それを体験し続けてきたからこそ、リヴァイ兵長は『今は違う』と言い切つた。そう エレンは思えたんだ。

そして——エレンが心からそう信じたその時だつた。

『他人を信じるつづーのも結構難しいんだ。なのにエレン。よく決断出来たな。それに信じてくれて、ありがとうよ』

そう、聞こえた気がした。

反射的に エレンは振り返つた。アキラの方を。

戦い続けるアキラと女型の巨人。

多分、誰の目に見てもアキラの防戦一方に見えてる事だろう。

今まで殆ど当たらなかった攻撃が、この巨大樹の中で戦いを続けていて何度も何度も当たった。巨人の攻撃がアキラに当たったのだ。死角が多く、立体機動装置を使えば更に人間側、アキラの方が有利に運べる筈なのにそれでもこの森の中の戦いでは何度も攻撃を入れる事が出来ていた。

——勝てる。……あのひとを……殺せる。帰る事が出来る。私は、帰らなければならぬんだ！ 故郷に。待っていてくれるから。

確かな手応えを感じ取っていた。

異常な力を持つアキラにも、攻撃が当たる。普通は即死するであろう攻撃を防ぐの

も異常だが、血を流している。……つまり 決して不死身じゃないと判断出来た。

「ぎゃあああああ!!!」

だから、渾身の力を込めた。全ての力を脚に込めて、上手いと褒められたこの技で、目の前の人の命を奪う覚悟も改めて決めた。

——これまで 何人の兵士を殺してきても何も感じなかった。悪魔の末裔だから、世界の為にも必要な事だと言いついて聞かせた。もう、引き返せない。あの日、あの壁を壊した瞬間から。

「あなたを、ごころ、す……!! わだしが、がえるために。わだじの、ごぎよう……ぎ！」
脚に全ての力を籠めて振り放つ。

脚を鋼の様に硬くし、光の様に早く 大木をも薙ぎ倒す蹴り。
そしてそれが アキラに当たるとその瞬間に、確かに訊いた。

『悪かったな。……確か お前は 手を抜く事が何よりも嫌いだったよな。自分が父親

から教わった技術を披露する時が一番輝いてた。一番表情が変わってたんだし」

もう一寸先。0・1秒以下の時間で当たる筈。声を聴く暇もかける暇もある筈もない時の狭間で確かに訊いた。

『故郷に帰るか。お前にも譲れないモノつつうのがあるんだろ? ……だが、悪いな。オレにもあるんだ。絶対譲れねえもんが。……絶対に、失いたくねえもんがよ……!』

間違いなく聞いた。

そして聞いたその時、女型の巨人に戦慄が走っていた。今の今までの攻防の全てが……。

「しこたまオレに蹴り入れたんだ。それでチャラって事にしてくれよ。なあ——
ア二」

!!!

攻防の全てが罠であると言う事に気付いた。

そう気づいた瞬間にはもう蹴りは完全に止められていた。

全ての力を込めた一撃が意図も容易くだ。

「無我夢中だったんで気付かなかったんだろ？ わりいな。でも手加減してたとは言わねえ。これでも全力でやったよ。……全力で、お前を欺いていた」

蹴りを止められただけでなく、脚が全く動かなくなっていた。引き戻す事が出来ないのだ。

「さて……」

アキラは、腰に差している銃を持ち出し 空に向けて撃ち放った。

凄まじい音が周囲に弾き出され、森中に響く。先程リヴアイがしていたものと同じ代物、音響弾だ。

そして、それは当然リヴアイ達の元へも届いていた。

「来たか。……お前ら左右に分かれる。そこの枝道だ！」

リヴアイが指示をし、エレン以外の全員が即座に反応した。

「え、えー！ そ、それはどういう……」

と進むか、それとも戻って闘うか、その選択の中 前を進み続ける、と誓ったばかりのエレン。そのせいか 横に逸れろと言う命令は少なからず違和感があり、それがブレーキをかけてしまうとと言う結果になってしまったのだ。

「エレン!! こっち!!」

それをフオローしたのはペトラだ。

強引ではあるが、手を伸ばして エレンの馬の手綱を強引に握って誘導。
「うわわわっ!!」

「ごめんっ! 振り落とされたくない様にしつかり捕まってる!」

当然 エレン以上に 馬も突然の事に暴れそうになつてしまふが、それでも何とか並走させる事に成功。リヴアイとオルオ、グンタが左側へ、ペトラとエレン、エルドが右側へと逸れた。

それを後方からしつかりと確認したアキラは 固く拳を握り固めた。

「アニ。……たとえどんな事があろうと、どんな事情があろうと、オレはオレの仲間を。……家族を傷つけるヤツを許さねえ。……絶対に、許さねえんだよ!!」

握り固めた拳は、そのまま巨人の。——アニの脚に当たった。

女型の巨人——改め、アニはまるで今の自分よりもはるかに巨大な吊り丸太が直撃したかの様な錯覚に見舞われ、次の瞬間には 15 mもある自身の身体が宙を舞つていった。

何度も何度も地面を転がり、道の行き止まり、巨大樹が密集している場所に叩きつけ

られた。攻撃の威力が強過ぎて直撃した脚部は太もも下までが無くなり、吹き飛ばぶ過程で打ち付けられた手や反対の脚も抉れ、削れ 多大なる被害を被った。

「が……ぐつ……（こ、この、程度……で……！）」

だが、うなじが無事であれば、そう、アニの身体、本体がいる場所に影響はなかった。巨人には再生の能力があり、たとえ重症を負ったとしても アニであれば数十秒程で重要部は完治する事が出来る。

「アニ。……これで 終わり。決着だ」

「っー」

問題ない筈なのに、数10mは離れているアキラを見た瞬間 全てが終わったと思ってしまったのだ。

そして、その感覚は間違っでは無かった。

「撃てエエエ!!!」

誰の声なのか、と考える暇もない。

次の瞬間には 無数の槍が射出され、身体全体に突き刺さる。槍の先端には無数の返しが備え付けられており肉を抉り掴む。身体全体に満遍なく突き刺さり、完全に身体を固定されてしまったのだ。

そう、撃ち放たれた物は攻撃をする為ではなく捕獲する為の物。

捕獲完了したのを確認したりヴアイはその場をエルドに任せて 女型の元へと向かった。エレンの存在を隠せと命令を下して。

そして エレンはただただ啞然としていた。

「まさか…… 全部 罠……だったんですか？ アキラ、さん。劣勢になってたのも、このポイントにまで誘導……して」

目の前で起きた事を直ぐに理解するのは少々難しかった。だけど 現実としてあの巨人は完全に動きを止められている。アレだけ体中に刺さり、固定されてしまえば幾ら巨人でも振り払う事は出来ないだろう。

「あの巨人を——生け捕りに……!？」

全てを理解したその時、湧き上がる思いを抑える事が出来なくなつた。

それに連動する様に 皆が騒ぎ出す。

「どーだ!! エレン! 見たか!? あの巨人を捕らえたんだぞ?!

「これが調査兵団の力だ!! アキラだけじゃない。舐めてんじやねえぞバカ! どうだ!? わかつたか!?

誰も何も知らされてなかつたのは明白だったが、それでも最後までアキラの力、リヴァイの判断。……そう、調査兵団の全ての力を信じた結果だった。

その結果を目の当たりにしたエレンは心の底から、腹の底から声を出した。

「は、はい!!」

完全に止められた女型の巨人。

アキラにやられた傷こそは徐々に塞がっているものの、それ自体が更に自分自身を縛ってしまう結果にもなっていた。抉れた肉が槍諸共飲み込みながら修復されるから。

「……流石に、疲れたな」

アキラは 枝上にまで移動し、縛られたアニを見下ろしながらそう呟いていた。

「よくやった。……アキラ。お前のおかげだ」

「あいつらにも声かけといてやれよ。……途中から あの巨人は 完全にオレを意識し出してたけど 最初は間違いなくエレンを狙ってた。半分は誘導してくれたってなもんだ」

「素直に受け取れねえのか？ お前は。最近じゃ褒められる事なんざ殆ど ねえのに

よ」

「……リヴアイか。そっちこそ少しは労え」

立体機動装置を使って枝上にリヴアイもやってきた。

「……後列の班達の奮闘もあるだろ。全員の戦果だ。……ヤられた奴らを含めてのな」

頭をがりつ！と掻き巻るアキラ。

被害の規模はまだ完全に把握した訳ではないが、少なくとも3つは アキラ自身が確認している。それらを忘れる事は出来ないのだろう。

「無論それも含めてだ。彼らが命を賭して戦い、そして アキラに命のバトンを繋げた。その結果、ヤツの捕獲に繋がっている。……本当によくやってくれた」

「ああ。……受け取っとく。じゃねえとやられて逝った奴らに面目立たねえからな

……」

アキラは手を上げて応える。

全ての兵士達に感謝を伝える様に。

そして その時は来た。

「では、ここからがある意味本番だ。……ここいつのうなじの中にいるヤツに会う。小便漏らしてなけりやいいんだがな」

本当に、ある意味本番だった。

アキラの中では 十中八九……9割9分9厘、巨人の正体、中にいる人物は確定していた。ただ10割にならないのは 本人を見ていないから。それだけだった。

「ちっ……（……確かに色々想定してた。……だが、想像以上にこれは堪えるわ……。やべえ、わ）」

4 2 話

アキラは 短い時間ではあるが体力回復に努めていた。
その間 思い出していた。

——アニとはどんな兵士だった？

あの時、訓練兵達の教官をしていた時の記憶。

一番新しい記憶。一番濃い記憶。

頭の中に残っている記憶、どれを思い出しても やはり思い出すのは《険しい顔》を
している姿だった。

そしてもう一つ。アニとの記憶、思い出はやはり格闘術の授業でのやり取りだ。エレ
ンとライナー、そしてアニを含めた3人を相手にした時の事。

最初こそは 受けにまわってあしらい続けた。ムキになって挑んでくるエレンとラ
イナー。そんな中でもアニは何時だって冷静そのものだった。出来うる事の最善を尽

くす事。それを何より重点的においていた。でも、格闘術はアニにとつては最も得意とするものであり、何処かその技術に誇りを持った様子もあった。何にも負けたくないと言ふ強い意志も見えた。

情熱と冷静の相反する2つの感情を持ち合わせていた。
そして、何より——。

アキラが息をとっている間も女型の巨人の更なる拘束が続けられていた。

「ふんっ!!」

ハンジが力いっぱい捕獲装置の弁を引き抜き、作動させた。大樽の中から対巨人用の捕獲鉗が撃ち放たれ、更に拘束させた。

「これでどう? もうかゆいとこあつても掻けないよ? 身じろぎ1つ出来ないよ。多分一生。ほら、傷を塞げば塞ぐほど、関節はより強固に固まっていく仕組みなんだ。ま、キミの意思で治してる。とは思えないけどね。全自動で治つちやうんでしょ? いやあ 羨ましいなあ。その技? 再生医療技術? 教えてよ。アキラに仕込むからさっ!」

何だかアキラにとって怖い事を言っているのだが、今は傍にいないのである意味良かったかもしれない。クシャミはしっていると考えるが。

「……それは兎も角。肝心の中身さんはまだ出せないのか？ 何やってんだよ、リヴァイとミケは……」

ハンジが言う様にリヴァイとミケは、女型の巨人のうなじを狙い、何度も攻撃を仕掛けていた。

一度、二度、……三度と攻撃を仕掛けているのだが、それは全く効果は無かった。何故なら、攻撃した刃の方が砕け散ってしまうからだ。

「ちっ……。ボロが」

如何にリヴァイであつても、刃よりも固く硬化した皮膚を斬る事は叶わない様で忌々しように刃を睨んでいた。ミケもお手上げと言わんばかりに砕けた剣2本を立ててエルヴィンの方を向いて首を振った。

今までの攻撃、その一部始終を見ていたエルヴィンは考える。

「（身体の一部の表面を硬質な皮膚で覆う事ができる能力……。話に聞く『鎧の巨人』に似通った性質か。……だが、少し違うのは その維持する時間）」
硬質化した部分が、直ぐにボロボロになつて蒸発していくのもエルヴィンは見えていた。

つまり、永続的に硬質化する事は出来ないと言う事だ。省エネ運転しなければもたない、と言い換えても良いだろう。

「立体機動の白刃攻撃をこのまま続ければ弱っていく……、と言う可能性も無い訳ではない。……が、それを試している時間はないな。後は発破を使うか、或いは……」

エルヴィンは作戦を考えている間にもアキラを見ていた。

直ぐ後ろで胡坐をかき、額に手を当てて何かを考えている様にも見えるアキラを。ここ一番の頭のキレも正直な感想では自分をも凌駕するとエルヴィンはアキラに感じていた。……が、その反面情に脆いと言う面が極端に強いと言う事。そして何よりも。

——全てを失うかもしれない。その覚悟も持ち合わせていないのだ。

大切なものを失うくらいなら、喜んで自分自身が死地にでも迷わず飛び込む男がアキラだ。今はその強大な力を身に窺っている為、本能の赴くままに行動をしても何ら問題なかった。寧ろ殆どが成功し、戦果を残し続けてきた。

だが、それが延々と続くと言う保証は何処にもない。万が一でも起これば、人類は力を……刃を失うも同然だ。巨人になれる力以上に解明が出来そうにないのがアキラの力。ならば、その力に甘んじる事なく、アキラが来る以前までの調査兵団団長として行ってきた、出来うる事の最善を考え、全てを失う覚悟で挑み続ける。必要であれば、どんな大きなリスクでも背負う。……そうしなければ、人類はアキラの肩に乗っからない

と生きられなくなってしまうだろう。それは完全なる依存であり、その末路は火を見るより明らかだ。

「なあ、エルヴィン」

「……なんだ？」

エルヴィンの方を見ていた訳ではないのに、まるで、アキラはエルヴィンの考えている事が判ったかの様なタイミングで声をかけた。

「オレも使え」

『休め』『待機しろ』と命令をされているアキラ。

一兵士である以上、上官であるエルヴィンの命令を訊くのは当然だと思っているし、何だかんだあっても、これまでエルヴィンが間違った事を言った事がない為、リヴァイの言う通り最大限に信頼し従っていた。

従ってなかった時も当然ながらある。だが、それは エルヴィンにどうこう言う前に身体が動いてきつさと行動してた。だから、壁外作戦においてエルヴィンにはつきり直接言ったのはこれが初めてかもしれない。

「……どうした何か思う所があるのか？ 次は発破で手を吹きとばす。現状ではそれで十分だと考えているのだが」

「ああ。それならあの硬エ手も吹き飛ばせるだろうよ。間違ひなくな。……でもな、それだと中身ごと吹っ飛ばすぞ。アイツの身体を何度か殴って、大体の強度は判ったつもりだ。調査兵団で使う発破の破壊力を考えりや尚更」

「うむ。成る程。ならば手首を切断する様に仕掛けてみよう。これなら うなじに潜んでいるであろう人物をも吹き飛ばす事も無いだろう」

エルヴィンの口ぶりから察するに、アキラに頼むと言う選択肢が無い事は本人にもよく判った。元々の活動時間を大幅に超えていると言う点においても、それは仕方ないと思うのだが、アキラは下がらなかつた。

「だからなエルヴィン。オレならもつと早いって言ったんだよ。確かに 固くなつたトコをやるのは少々骨が折れるが、それでも 少し時間かけて手を根元から引き千切つて終いだ。んなりスクのある事をせんでもな。……と言うより、それ位判つてるだろう？ なぜ言わない。拘束してるとはいえ、アレは普通の巨人じゃない。……油断大敵だ。確実な方を取れよ」

アキラは エルヴィンの横顔をじつと見ながらそう聞いた。エルヴィンは アキラの視線に当然気付いている様だつた。ゆつくりとした動作で振り向き、言つた。

「……いや、アキラ。オレはアキラが動く事こそリスクがある様に思えてならない。……お前も判っているだろう。あの女型の巨人…… 今完全に拘束されていると言う

のに、周囲を無数の兵士で取り囲まれていると言うのに。アイツの眼には お前しか映っていない。……アイツの視線はお前のみを見ている。お前の動向を観察している様に思える」

「……ああ、それくらい判つてんよ。まったく、惚れられでもしたつてののか？ 随分とまあ熱烈な視線を送つてくれてるもんだ。あんな傍でアプローチしてんのに、ミケヤリヴァイが嫉妬しちまうんじやねえか？」

首を左右に振りながら 何処か呆れた様に言うアキラ。

アキラは、休憩の最中も片時も目を離していない。常に視界には 女型の巨人……彼女の姿を捉えていた。如何なる事が起ころうとも対処をする為にだ。

だからこそ、エルヴィンよりも先に、真つ先に気付いた。うなじを守る様に 手を交差させ、やや俯き気味の状態でと言うのに、その眼はぎよろりと動いてこちら側を見据えている事に。

だが その正確な意図は判らなかつた。

恐らくこの場で一番警戒すべき相手がアキラである事が判つたから、程度にしか。

正確な事は判らない。だが唯一、正確に……ではなく アキラ自身が間違いないと思える事があつた。

「アイツは諦めてねえ。こんなオレ等から見れば絶望つて言える状況でも、絶対に諦

めてねえ。……諦める様なヤツじゃねえんだ。ここぞと言う時はな」

「……アキラ。お前まさか——」

何かを察したエルヴィンがアキラに訊き終える前に、あの女型の巨人の行動の方が早かった。

『きいやあああああああああ
!!!!!!』

それは甲高く悲鳴に似た叫び。

アキラが、今の今まで戦ってきた間でも初めて聞く種類のものだった。

どの巨人にも無かった音域とでもいうものか。あまりのものに誰もが耳を塞ぎ、鼓膜を守る事だけに集中していた。……たった1人を除いて。

「……………これは」

「断末魔……つてヤツですか？ はた迷惑な……」

ハンジとバーナーも突然の悲鳴に戸惑いを隠せず、考えることを止めて耳を抑えた。耳鳴りがまだ続くのだろう、バーナーは目をもぎゅつと瞑つて耐えていた。

「てめえ……びつくりしたじゃねえか」

リヴァイも耳を塞いでいたのだが、それは一瞬だ。直ぐに態勢を整え直した。一瞬見せた隙も次の瞬間には無くなっている所は流石の一言だ。

「これは感情的な発声か？だとするとこうピタリとやめるものだろうか？」

今、エルヴィンの中に芽生えていたアキラに対する疑問もあの悲鳴、断末魔の前にかき消えてしまっていた。

「……………はッ！ だよなッ」

そして、今の今まで座っていたアキラは、立ち上がった。耳を塞ぐ事もなく、ただただ女型の巨人を見ていたアキラは、一笑し立ち上がった。

「んなどこで諦める様なヤツじゃねえよなア！ オレの授業ん時だつて3人の中で一番

粘ってたもんなア!!」

アキラは、大枝を踏み抜く勢いで跳躍、そしてアンカーを伸ばした。

「エルヴィン、先行つてんぞ。戦闘開始だ!」

短くエルヴィンにそう伝えると返事が帰ってくる前に、アンカーを縮めて移動した。

「ミケエ! 匂つてきただろお!? さつさと班動かせ! 正面はオレとリヴァイでやる! 散開させろ!!」

「……ああ!」

アキラとミケはほぼ同時だった。ミケもアキラが言った様に自身が持つ並外れた嗅覚で匂いを感じ取っていたのだ。そう——巨人の匂いを。

「エルヴィン全方位だ。今まで以上の数、同時に接近している。東側はもう直ぐ来るぞ」

「判った。……発破は、もう間に合わんか! 荷馬車護衛班迎え撃て!!」

待機していた護衛班が急速に接近してくる巨人を迎え撃つ構えだったが、巨人は目の前にきた人間を無視した。奇行種の類か? と思えたのだが、それが違う事は直ぐに判明した。何故なら、向かってきた全ての巨人が人間を無視して、一点を見定めていたから。

そして 前方。迫る3体の巨人。

アキラが接近し、真ん中をぶん殴って吹き飛ばしたが、左右の巨人は見向きもしなかった。アキラを無視して向かっていったのだ。怖れを感じて回避した、と言った類ではなく、最初から全く見てなかった。元々巨人にはそんな感情は一切ない。

「野郎ッ オレを無視すんじゃ…………… ねえよー」
当然見向きもせず、襲い掛かりもしてこなかったのだが、だからと言って逃す理由もないアキラは一蹴。

両足を吹き飛ばしても、それでも這う様にして一点を目指していた。迅速にトドメを刺した後には、アキラはリヴァイの元へ。

「こんだけ奇行種がいるなんて 今までを思えば考えられねえ。…………それに走り方だつてきもくねえ普通だ」

「ああ。…………多分コイツが何かしやがった」

「だが考えてる暇はねえぞ、リヴァイ。こいつら全部殺る。今考えるのは それだけで

充分だろ」

「判つてるじゃねえか。……その通りだな」

鬼気迫るとはまさにこの事だろう。

人類最強の双角が並び立つ姿は。

二刀を抜刀しているリヴアイ。両の拳を硬く握り絞めているアキラ。

その背にはオーラに似たモノが立ち上っている。まるで巨人を殺した時に発生する蒸気に似たなにか。死んだ巨人の蒸気がそう見せたただけだったかもしれないが、確かに後ろにいた者達を見た。

その背の人類の希望。人類の矛を。

接近する巨人は瞬く間に消滅。まさに一騎当千の一言に尽きる。

前方の巨人は全く近づく事が出来ないのだが……、敵は全方位から近づいてきている。そして、例外なくその巨人達は人間に興味を示さない。興味を示したのはただ一つだった。

そう、狙いは女型の巨人だった。

「まさか、こいつら……女型の巨人を狙っているのか!! 全員! 女型の巨人を死守せ

よ!!」

女型の巨人の腕に、脚に、胴体に無数の巨人が群がる。

奇行種と見紛う動き、狙われない兵士達、そして 前方の2人の巨人無双。

不幸な事にそれらの影響はエルヴィンの指示にも響き、あと数秒出すのが遅れてしまった。

つまり もう女型の巨人の周囲には大きささまざまなサイズの巨人が群がり 山の様になってしまっているのだから。

「アキラ、こいつら全部外せるか?」

自体を把握したりヴァイがアキラにそう聞くと、アキラは首を横に振った。

「ほつといても中のヤツが喰われる。やつても中のヤツまで殺つてしまう。……塞がらだ。群がるヤツらだけ器用に殺すなんて出来ねえよ」

「ちつ……。損害はゼロじゃないんだぞ。損害有り、実益ゼロ。啖呵切った拳句のこのザマか」

「言い訳、考えとかないとな。言い訳か。……先に逝ったヤツらの申し訳が立たねえよ

(……それに
たら)「死ぬ覚悟まで決めてたつて訳か。いや それ位はするか。……ア二だつ

43話

女型の巨人は完全に白骨化し、熱氣と蒸気だけを噴霧する骸へと変わり果てていた。つまり、殆どの者が中身諸共喰い尽された、と判断してしまふのは当然だろう。それを確認した後にエルヴィンは総員に撤退命令を出した。

無数の巨人は全て女型の巨人の残骸に集中している為、その間に馬に乗り、西方向への離脱。つまりはカラネス区へと帰還する事。それが今作戦最後の命令だろう。あえて付け加えるとするれば『無事に』帰還する事だ。

「おい、エルヴィン。アキラとも話したが、審議所であれだけの啖呵きつた後でのこのザマだ。このままのこのこ帰った所で、エレンやオレ達はどうなる？」

「それは帰った後で考えよう。今はこれ以上の損害を出さずに帰還できるように尽くす。ただそれだけだ」

「それによ、どうにかなりそうな事するんだったら、次回はリヴァイじゃなくオレが盛大に暴れてやれば良くねえか？ ああ エレン——人を甚振るんじやなくて、物な？ すっげえ笑顔で審議所の柱とか壁とか どっかーんっ！ ってやったらよ？ メチャ引きつつてるあの連中の顔が直ぐに出てくるわ」

「……それだけは止めろ。無駄な出費が掛かる事しか思い浮かばん。建設費もある。……アキラが負担するか？」

「バカによるバカな対応策だな。バカな発言だ。だがピクシス司令だけは笑ってそう
だ」

「バカバカ言うんじゃないやねえつての。……割とマジなんだけどな。壁ン中でフン反り帰つて
る連中が、外で働いてるオレらの生殺与奪握ってるつてのも、割とムカつくし」

審議所での話。エレンの今後の処遇についてだ。

死罪……あわや解体、解剖までもつていかれそうな勢いだったのをリヴァイとアキラ、
最後はエルヴィンの進言で止めた。明らかにエレンの力は、ここ100年の間では
見られなかったもの、貴重過ぎると言うのに、あっさり考えるのを放棄している中央の
メンバーを見て、嫌悪が走った所で、中の者は兎も角、調査兵団所属であれば誰も文句
は言わないだろう。

「私情を抑えろアキラ。お前の力は外に発揮するもので内側ではない。……内側の件は
私の仕事だ」

「……そう言われちゃったら従う他ねえつてか。エルヴィンの仕事は一番疲れそうだ」
アキラは両手を上げる。当然エルヴィンのこれまでの仕事っぷりを見てきたアキラ
はその難易度、つまり、異常なしんどさだったよく判るつもりだった。つまり、自分自

身にやれる事ではない、と思つていたと言う事だ。適材適所とはこの事だろう。

「さて、オレらは班の所へ戻る……いや、呼んでくるぞ。奴ら、そう遠くに行つてなければいいが……」

「そうだな。極秘だったとは言え、あいつらには何も話してないんだし……、詫び入れねえと後が怖いか、オレら」

「……安心しろ。ヤられるのはお前だけだ」

「何一つ安心出来ねえよ！　なんでオレだけっ!?　しかもやるつて!?!」

抗議しつつも頭を掻きながら　アキラは視線を仲間達がいるであろう方向へと向けた。

これは、本当に偶然だった。

死骸の蒸気で視界が異常に悪い状態で、視る事が出来たのだ。

「まで。リヴァイはガスと刃を、アキラも刃は兎も角、ガスを補充していけ」

リヴァイと共に向かおうとした時。エルヴィンの指示が背中越しに聴こえた。

「時間が惜しい。十分足りると思うが……なぜだ?」

「これは命令だ。従え」

「……………了解だ。お前の判断を信じよう」

リヴァイは直ぐに了解をし、ガスを補充しに行こうとしたが、アキラに止められる。

「わかりい、リヴァイ。お前さんのガス、ちよつと分けてくれねえ?」

「……………何?」

「オレら2人でガスと武器補充しに行つてたら、結構時間かかるだろ? ……この場か

らさつさと動けて、かつエルヴィンの命令違反にならねえのはこれしかないつて思つてよ」

「個々のガス受け渡しはそれなりに面倒だし、圧力が低い分遅くもなる。そつちの方が時間がかかりそうだが?」

リヴァイは、懷疑そうな視線をアキラに向けるが、アキラの眼は真剣そのものだった。

「……………全然使つてねえから少し補充すりゃオレのが満タンになるんだ。時間はあんまかからねえよ。……………頼む」

「……………ちつ、仕方がねえな」

何かを感じ取つたのだろう。そして、説明をする手間も惜しいとも同時に感じられた。だから、リヴァイはコネクトチューブを取り出し、自身のガスボンベへと接続、片方をアキラに渡した

「エルヴィン。アキラにガスを渡す。……………どうやらコイツが殆ど使つてなかつたつての

はマジみたいだから ああは言ったが 少なくともアキラが動き出すのに時間はあんまりかからねえ。……これでも良いか？」

「……ああ。それで良い」

エルヴィンの了承も経て、これで命令違反ではない、と言わんばかりにアキラはエルヴィンの方を見た。

数秒程見た後、自分自身のガス補充が完了する。それを確認した後、アキラは言った。

「エルヴィン。……オレには視えた。多分——今のオレ達が考えてる事、結構似てると思うぜ」

「……」

「行く。……良いよな？」

「ああ。行け。リヴァイ班を引き連れ、森の西側へ。可能な範囲で陣形が整うのを待て」

「ああ」

アキラは頷くと跳躍した。ガスを使う訳でもなく、木々の合間を縫って跳躍を続ける。勢いがなくなりそうになれば、その度巨大樹を強く蹴り、勢いをつけて飛び続けた。

「……そういえば、アイツに立体機動装置はいらなかった。……そもそも使い方下手糞

だつても忘れてた」

リヴァイは、アキラが向かうのを見送った後にそう愚痴る。

「エルヴィン。……従うが後で説明はしてもらうぞ」

「ああ。判っている」

リヴァイもこの場から移動。勿論 ちゃんと立体機動装置を使って。

巨大樹の森上空に一斉に信号弾が撃ち放たれる。

木々のせいで見えにくいかもしれないが、無数に放たれた煙弾は 誰の目にも止まる事になった。

『総員撤退、馬に乗って帰れってさ』

『はいっ!』

『なんだ……? 終わったのか……?』

『みたい……だね』

『帰れる! やった!!』

それを目撃した全員が一斉に行動を開始。

安堵する者、まだ状況が掴みにくく、仲間達に引つ張られる者、油断できないと言わんばかりに無口になっている者、ただただ歓喜する者、と心情は人それぞれの様だが、兎も角留まる事を止めて馬へと飛び乗っていた。

それは勿論リヴァイ班も同様だ。

一番最初にグンタがそれを目撃。

「どうやら終わつたようだな。馬に戻るぞ！ 撤退の準備だ！」

初遠征のエレン。まだまだ表情が硬いが安堵している事は間違いないだろう。

「……………ッ」

「だ、そうだ。中身のクソ野郎がどんな面してるか拝みに行こうじゃねえか」

「……………そうね」

「ペトラ。お前はアキラの面先に見て来いよ。時間オーバーしたく　つて震えてるかもだぜ」

「……………オルオ。その喋り方止めろ！」

ある意味凶星だったのだろう、表情が少しだけ吊り上がってるペトラ。

時間内に帰ってくる、と言う制約を力いっぱい約束させたのはペトラだ。アキラはこれまでちゃんとそれを守って行動してきた。……………今回は異常な相手だったと言う点はあるけど、アキラ自身が無理していい訳はない。とも思っている。立体機動装置を使えば、無理ない範囲で逃れる事だって出来る。仲間達を頼る事だって出来る。

「……………ほんと、全部背負おうとするんだから……………」

アキラが仲間を頼ろうと思つてない訳がないと言うのは知っている。だけど、誰よりも優しいから　こんな異常な相手が来た時は自分自身で決着を付けようとするんだ。

壊滅させられた班を見た筈だから、それがより全面に前に出てきただけの事だろう。

その気持ちはペトラだけじゃない。長らく共に戦ってきたメンバーであれば誰もが判っている。

「まあ まだオレらはアキラに比べたら小さいもんだ。この中で一番近いのはエレンじゃないか?」

「ええっ!? お、オレですか?? そんな教官に近いなんて……」

「阿呆。その巨人になれる力に経験が加われば、って話だ。今のお前じゃオレ等の足元にも及んでねえよ」

「本当に偉くなったもんだなオルオ。初陣でシヨンベン漏らしてた奴とは思えねえよ」
「!?!」

そんな中でのエルドからの突然の爆弾発言。

「ええっ!?!」

「バカか!! 何言ってやがる!! それに、オレのが討伐数とかの実績は上なんだが!!
上なんだが!!」

さつきまでの格好付けていたオルオは見る影もなく、ただただ喚いていた。

「だが、事実だ。ああ、因みにオレは漏らしてないからな。オレの知る範囲で漏らしてないのは、アキラと兵長は当然として、後はグンタとオレだけ」

「えっ…… てことは……？」

エルドの話を訊いて、ゆっくりと振り返るエレン。その先にいるのはペトラさん。

話を訊いてなかったのだろうか、ペトラはキヨロキヨロと周囲を見ていた。『一体何事？』と言わんばかりに。でもその内容を知った時にはどうなるか……火を見るより明らかだ。

「ペトラさんもですか!？」

「え……？ な、なにが??」

女の人にそんな事を訊くなんて…… っと思ったりもするが、エレンも大概まだ子供。そんな氣遣いが出るのであれば、とうの昔にミカサとちゃっかりくっついていた可能性が大である。

ペトラがまだ氣づいてないのは良い事……なのだが、しっかりとこの導火線も付けようとするのがエルド。

「初陣でシオンベン」

「うぎやああああああ!!! な、なんの話してんだああ!!!」

「訊いてなかったヤツが悪い」

「話すヤツが悪いだろおお!! 威厳とか無くなる!! っつ!!!」

「()で漸くペトラはある事に氣付けた。」

この暗黒の歴史——エレンには知られてしまったが、まだ知られてない人がいる。付き合いが凄く長いのに、それでも知られてない奇跡。

「エルドお前え!!!」　ゼー——つたいこれ以上言うな!!　言ったらマジで千切る!!　千切るからなあ!!」

誰に?　と聞くのは野暮と言うものだ。

でも、流石に殺気全開で言うペトラを前にして、『アキラの前でか?　エレンにも知られたし、もう別に良くね?』とは言えない様子。

喚いてたペトラだが、それも直ぐに息を潜めた。数度呼吸をして息を整えた後に　これでもか!　と声を深く沈めてエレンに一言。

「エレン……。あなたも判ってるよね……。?　喋ったりしたら……」

「わ、わ、わかりました!!」

そう言う以外他に答えは無いでしょう?　と誰に弁明する訳でもなくエレンは即答。

実の所、エレンは『空中で撒き散らしたんですか!』と勢いで質問をする所だった。壁外遠征における巨人との戦闘なら、地上にいたとは考えにくい。つまり普通は空中戦。思わず漏らすような場面は当然巨人に捕まれそうになって、殺されそうになった時の確率が高い。

と、割とどうでも良い事を考えてしまうのも　撤退命令が出たからの気の緩みからだ

ろう。

「お前らピクニックにでも来てんのか!? 壁外なんだぞ! ちつとは注意しろよ!! ああ、因みにエルドの言う通りだ。オレは漏らしてねえからな!」

「その話題から離れろおお!! お前も千切るぞ!!」

「キャラ変わり過ぎだつーの! ほれ見ろ! リヴァイ兵長かアキラの連絡だ。信号弾、撃つぞ」

言い合いが続いた後、空に伸びる信号弾に気付いた。

比較的に傍だった事もあり、リヴァイかアキラのどちらかだろうと考えたグンタはこちらからも信号を出そうとしたのだが、次の瞬間、煙弾が上がった方向とは真逆の方から轟音が聞こえてきた。

反射的に全員が後ろを振り向くが、そこには誰もおらず 巨大樹が薙ぎ倒されているだけだった。

「おおつとー、ちよい待ちグンタ。信号上げるな。リヴァイは今ガスと刃補給中。ここにはいねえ。アレは違う」

倒れた巨大樹。倒れた原因は直ぐに判った。思いつき踏み台にしたからだろう。

強引な移動術。巨大樹を蹴って勢いよく空中疾走。その速度は余裕で立体機動装置の速度を上回るのだが、難点が当然ながらある。蹴った物は巨大樹だろうが建物だろうが、倒壊してしまう可能性が高いと言う所だ。

倒れてしまつては、他の兵士達が使用する事が出来ない、つまり立体機動装置が活かせない環境に陥れてしまう。結果、最悪の事態に陥る可能性も捨てきれない。

だから当然それなりに使用条件は決めていた。急を要する時以外は使わないようにと。

ここに戻つてくる際に、それを使つたと言う事は急を要する事態が起きている——と理解が出来る。……普通ならすぐ出来るのだが。

「なんか、楽しそうな話が聞こえてきたぞ？ お前ら余裕だなあー、ま それくらいリラックスしてた方が良いか。固くなるよりはせんっせん。こっちにや、初陣。初陣者がいるしなあ？」

戻つてきたのはアキラだ。

これだけ待たせておいて陽気に振る舞つてる所に加えて、現状では禁止ワードに近い発言が含まれていると言う事。初陣——と言う言葉にピクリと反応。更に誰が戻つて

きたのかも合わせて、更に過剰反応。

「……………」

「遅くなって悪かつ——」「キエエエ!!」「——つおあ!!?」

木の上から 野生? のペトラが飛びかかってきた。

「な、なにすんだ! ペトラ!」

「チヨエアア!!」

「こら——! ナチュラルに目エ潰しにくんなつ!!」

44話

「あのなあ……判ってるか？ 今ここ壁外なんだぜ？ 幾ら撤退命令が出たからって、油断して良い訳にやならないぞ？」

「う、うん……ごめん」

「ま、『やつと任務終わり！ 無事に完了！ あー大変だったわあー』って思ってた気が緩むのはさ、判るけど、壁内まで帰って初めて遠征じゃん？ オレが口酸つぱく言い続……じゃなく、オレが口酸つぱく言われ続けて、……聞いてきたつもりなんだが」

「仰る通りだよ……。いや 本当に返す言葉もないです……。ごめんなさい……」

今、とてもとても 非常に珍しい場面に遭遇している。

地上より目算で約30mの地点。

巨人も届かない安全な木の上でペトラが正座してて、そのペトラをアキラが説教してると言う図だ。

判る通り、アキラが説教されている、と言う今とは逆の事は凄く多かったのだが、今

説教してるのはアキラ。こんな光景滅多にない。今夜は大雨か、大雪か、はたまた大槍か。

何にせよ、暴走モードに入ってたペトラを止めたのはアキラ。小一時間ほど無駄に過ぎた気もするが、それを考えると全員が良しとした。

アキラもそれなりにペトラの地雷を踏んだとは言え、不可抗力だと言えるだろう。何より元氣そうなおアキラを見て安堵したと言う理由が一番かもしれない。

「はははは……」

「いやマジで全然見ねえわ。こんな光景。だって覚えがないもん」

「だよなあ。悠長にしてる場面でも無いって思うんだけど、見入ってしまうと言うか、何と言うか。何にせよ普段見れねえ光景には違いないなあ」

リヴァイ班の面々は口々に呟いていた。

長らく苦楽を共にしてきた班員でさえ同じ感想だった様だ。

そして、今 例外がここに1人いる。それは勿論エレンだ。

エレンはアキラが訓練教官時代からの付き合いで、リヴァイ班と比べたら確かに短いのだが、血氣盛んな104期のメンバー達を何度も説教してる姿を見ているので、別に

珍しいとは思えなかった。それに それ以上に思う所はあった。

「あ、あのー……ここに留まつてて大丈夫なのでしようか……？ 撤退命令が出たのでは……？ それに女型の巨人は……？」

空に撃たれた信号弾の事だ。しっかりと命令を訊き、陣形を立て直す事が第一。更に女型の巨人がどうなったのかも早く知りたい所だった。それはエレンだけではない。全員が女型の中身については 訊きたかった。それでも説教を延々と聞いていたのは、それ程までに珍しい光景だったから……なのだろうか。

「んあ？ あー、それもそーだな。つてか オレもちゃんと説明するつもりだったんだぜ？ ……だからお前らと合流する為に急いできたのに、とびっきりの歓迎されたからよー。あーびびった。絶対 奇行種以上だわ」

「うう……だから、ごめんつてば……」

仄々とした雰囲気さえも感じるこの場で、どうにかエレンは口を動かさず、アキラに言った。壁外であることさえ忘れそうな勢いだったから、それを戻せたエレンはフアインプレイだと言えらるだろう。

他の面子も其々ため息をつきつつも、再度移動準備をしだしたその時。

「……何やってるんだお前ら」

声がしたかと思ひ全員が振り返つてみれば、そこにいたのはリヴァイだった。

エルヴィンの指示通りガスを満タンにして、準備万端。そして 表情がいつもの3割増しで険しかった。『何時も以上に根暗に磨きがかかつてるなあ』とアキラは思いつつても説明する。

「おうリヴァイ。いや別に何でもねえつて。ただ ちよつとばかりペトラに説教をしてただけだ。悪いな。エルヴィンには森を抜けて帰路に〜つて言われてたつけ。少しばかり時間無駄にした」

アキラは頭をぼりぼりと掻きながらリヴァイにそう説明。

それを訊いたリヴァイはと言うと、これまた珍しく、一瞬ではあるが 目を見開かせた。直ぐにいつものジト目になって再確認をした。自分の耳を疑っているのだろうか。

「……説教？」

「おう。なんだつて合流するなり突然襲わ〜明日は雨、豪雨。いや それも生温い。槍でも降るか」つて、オイコラ！」

ほぼ全員が思つていたことを代弁したのは、後からやってきたリヴァイだった。

そんな挑発と言うか普通に思つた事を口に出したりヴァイに勿論アキラも反応する。

「何が槍だ槍！」

「言葉の通りだ。……成る程。今日は色々と起こる訳だ」

「言葉通りつてなんだよ！ オレだつてヤルときやヤル……つてか、説教くらいするわ！　なんでそこまで意外なんだよ！」

「判るだろ鳥頭。するより圧倒的にされる方だからだ」

「うっせ！　この根暗顔！」

またまた長くなりそうだったから、ここは自分自身が撒いた種、と言う事でペトラが行動開始。

「す、すみませんリヴァイ兵長。その……あ、アキラがいつも以上に時間かかって帰ってきたから、心配になって、不覚にも感情が爆発してしまつて……。私の不注意です。じよ、状況は判つてるつもり、でしたが……」

清濁を織り交せて……じゃなく、虚実と真実を混ぜ混ぜしつつ話すペトラ。

普段よりも遥かに時間が掛かった事とペトラがアキラの事を心配していたのは紛れもなく真実。でも、切っ掛けはエルドやらオルオやらの爆弾発言で、導火線にどころか爆弾に直接火をぶち込んだのはアキラ登場とその発言によるものだ。

真実を知るのはアキラとリヴァイ以外のメンバーでこれ以上ややこしくなるのは好ましくない、と言う事で一致団結。全員で領いていた。アキラは『釈然としねえなー』とやや訝しんでいた。

「まあそれは良い。それでアキラ、全員に説明はしたのか？」

「出来てる訳ねえ」

「だろうな。全員集まれ。……あつた事を説明する」

リヴァイの号令で直ぐに集まり、女型の巨人の事の顛末を説明した。

一度は捕獲したものの、想定外の事態に陥り、失敗してしまった事。そして その中身が誰なのか……判らなかつた事。

ひとつひとつの説明を訊き、全員の表情が険しくなりつつある。

「くそ……っ」

「……つまり、今回の大規模遠征の目的は 巨人の力を持つ者を炙り出す事。そしてそれは失敗してしまったと言う事、ですか」

「今までとは比べものにならない程の犠牲です。中央の連中が何を言い出すか……」

アキラの力、あの女型の巨人を拘束した光景。

正直成功した事しか頭になかった。失敗したとは思ってもいなかった様だ。

だが、その表情も直ぐに消え、全員が気を引き締め直した。

「でも、まだ終わつた訳じゃない……。そうよね」

「そうだな。色々と考えるのは全員で無事に帰つた後だ」

「何か文句言われたつてアキラ。あんま暴れるなよ」

「おいエルド。人を乱暴者みたいに言うな」

「でも、完全否定出来るのか？ 兵長や団長に抑えてもらつてなきや何回か見た通り爆発してたつて思うのはオレだけ？」

「うぐ……っ」

多少軽口は言いつつも、土気までは落ちたりはしない。失敗は想定外だったが、それでも自分達はまだ生きている。生きている限り戦うとこの誰もが誓っていたのだから、簡単に膝を折る様な真似は誰一人しなかった。

「……女型の正体は判らず仕舞い。損害もある。……オレは この後どうなる？ 審議所では状況次第でと言われたけど……」

エレンは今後の自身の行方に不安を覚えていた。

ただ馬を走らせただけの身で言うのは烏滸がましいが、それでも目に見えた成果は出せていないのも事実。中央の人間が自分自身の存在を好ましくないと思っているのは間違いない事実も踏まえて考えると……、いや、あまり考えたくないのが本音かもしれない。

丁度 エレンが色々と考え込んでいたその時。

「……そろそろ本題を話せ。アキラ」

「ん？」

リヴァイの視線がアキラへと集中した。それに倣って全員がアキラの方を向く。

「ガス渡す時にエルヴィンに言つてたヤツだ。合流出来た以上話さない必要もないだろう」

「ああ。あの時の事か」

「丁度全員いる。今聞いておいた方が良いだろ。……いや、命令だ。吐け」

「いやいや、言うから。吐けーとか言わんでも」

アキラは軽く頭と腕を振つた後に、軽く一呼吸置いて告げる。それは自分自身が視た事を踏まえた推察に近い。

「お前らに話したけど、女だからか、男巨人に好かれる能力持つてるだろ？ まあ結局

喰い散らされたが、その時偶然視た。視えたんだよ」

『視た』と言つた時、アキラの眼が鋭く険しくなつた。

「チラつとだが、あの巨人の蒸気を斬り割く様に動く影……をな。一瞬だったし、気のせいかもしれないと正直思つたが、可能性は0じゃないって事で最悪の方を想定した。それだけだ」

「……お前にとって、今の最悪の想定はなんだ？」

「勿論。あの時は人間なんか目もくれねえ巨人だったとは言え、あんな巨人タワーの中に突っ込んで飛ぶ様な狂人オレらん中にいねえからな。『女型の巨人の中身は喰われ

「蒸気に紛れて逃げた」って想定だ。逃げる事に成功して兵士の中にでも紛れられでもすれば更に厄介だ。十中八九そいつの狙いはエレンだし、不意打ち喰らう可能性だつて出てくるだろ？」

アキラはそう言うと、西の空を見た。

「それに案の定だった。……向こう、変な地点から煙が出てた。勿論味方って可能性だつてあるが、常に最悪の想定、だろ？ 誘い込もうとしてたかもしれないし、一先ずグンタには信号あげるな、つて止めといたから正確な位置までは判らんと思う。近づこうもんなら判るしな。巨人の身体で隠密は無理。更に今 兵士の単独行動なんてある意味巨人より目立ち過ぎ。そんなもん許可されんのはオレかりヴァイだけだつてな」

普段はおちやらかしたり、ふざけたり、と飄々としたアキラだが、こういう時に限って頭の回転は異常に速い。もし アキラの言う通り最悪の想定して 敵が近づきあの場でグンタが信号弾を上げ場所を特定させでもすれば被害を被っていた可能性が極めて高いだろう。下手をすれば全滅さえあり得た。

「確かに…… ハンジ分隊長の推察でも同じ様な事を言っていたし」

「だけど、エレンが巨人から出てきた時を考えてみれば出来そうとは到底思えない。エレンはどう思う？」

グンタの問いに、エレンは首を横に振った。

「オレには無理です。意識も朦朧としてました。その状態で正確に立体機動装置を操作するのは……」

「……そう、だったよね。憔悴しきっていた上に装備も破損してたし、戦闘服も殆ど燃えた……溶けた様子でしたし」

エレンの巨人化訓練はハンジ以外にも当然立ち会っている。ペトラも幾度となく介抱し、手助けもしていた。その時の様子を見て考えれば、やはり腑に落ちない様子だった。

それらを訊いたアキラは。

「なあ。オレも思い出したんだけど。この妙な力を自覚した時の話な？ はつきり言つて力加減とか判らんし、何処をどう動いたら、どう力込めたら良いのかもさーっぱり。無我夢中でドカドカやってただけだったんだよ」

「……見たら判るよ。それ」

「そう言えば、最初の頃の訓練で盛大に調査兵団の建物ぶつ壊したつ。あの修理費大丈夫だったのか？」

「んなもん時効だ時効！ それに話の肝はそこじゃねえつてのー！」

話を折りそうだったので、強引に軌道修正するアキラ。

「言ってみりゃあよ。あの時は初心者だったんだよ。オレ。燃費も悪いから疲れるのな

んの。力の使い方とか全部、全然わかってなかったんだよなあ」

「え、えーと つまりどういう……？」

「判らねえか？ エレン。つまり、エレンもつい最近だろ？ 『オレ、巨人になれます能力』を持ったのって。つまり エレンは訓練（つて名の人体実験か拷問）を受けたとは言えオレン時と同じ。超初心者。敵側の連中の素性とか一切判ってねえのに、そんなもんを基準にする事自体間違えてんじゃない。……あのアホメガネに文句言つてやろか」

アキラの最後のセリフは一先ず置いとこう。

それを訊いてエレンは成る程、と頷いた。

一通り黙って聞いていたリヴァイは 誰に言う訳でもなくぼそりと呟く。

「……普段からそれ位頭働かせてりや言う事無いんだがな」

「オイコラ！ 聞こえてるぞ！」

4 5 話

女型の巨人の正体であるアニ・レオンハートは脱出を果たした後、エレンを探し続けた。

調査兵団に捕縛されたあの時はまさに九死に一生だと言える。

正直成功するかどうかはアニ自身にも判らなかつたが、あのまま捕縛された状態よりはマシだという理由で敢行した。

そう、自らを他の巨人に喰わせ、その混乱に乗じて脱出を果たす、と言うものだ。

それはエルヴィンやアキラの推察通りだった。

あの巨人の蒸気に紛れ、絶体絶命とも言える状況の中から生還を果たした。

次にするのは空に向けて 緑の煙弾を放ち、周囲の反応を見る。

今アニにできる最善の手はそれしかなかった。迅速に、それでいて慎重に。ただそれだけを考えて行動を続ける。

「……………（乗ってこないかそう簡単には。いや まだ判らない。単純に信号が見えなかった、と言う可能性も……………」

巨大樹の中を立体機動装置を使って飛び回る。
最優先目標はただの1つだけ。

——エレン・イエーガーの回収。

その為に今日まで準備を重ねてきた。実行に移す際 この手を血で染め続けた。目的の為に、故郷に帰る為に、ただ前を進み続けるしかなかった。この残酷な世界で。

そんな中で唯一の計算外だったのが、あの人。アキラの力だった。

「（巨人を素手で甦る超規格外の力。反応速度、反射速度。頭のキレ。全てが化け物レベル……………。巨人以上の力を持ちながら、頭脳明晰……………）悪魔、かよ……………つ。いや、多分あの人が悪魔だったんだ。……………パラ：パラ：：島の悪魔は、アキラ教官……………」

思い出すだけで身体の芯が震える。

死闘の最中では こんなに冷静に考える事は出来なかつただろう。

一度は死を受け入れました。あの人は、呪われた今の生を終わらせてくれる人だと思

えた。それと同時に思い出す事が出来た。

——私はまだ死ねない事。故郷に帰らなければならぬ事。必ず生きて戻らなければならぬ事。

それは約束。必ず生きて帰るという約束。そのために戦い続けるという覚悟も刻み付けた。蹲るのも泣くのも後悔するのも、全てを終えてから。

「エレンを探さないと……何処だ……？」

周囲に注意を払いながら 進み続けていたその時だった。

『ウオオオオオオ!!』

突然、雄叫びが聞こえてきたのは。

「……なっ!？」

その地を唸らせ、空気を震わす様な雄叫び。そして 特有の衝撃波。その全てに覚えがある。

雄叫びの方はあの日……壁の中が再び地獄へと変わったあの時。

そう、エレンが初めて巨人の力を使ったあの時に。

そして、この空気を震わす衝撃波は 巨人へと変化した際に放たれる代物だ。強烈な爆発にも似たモノで 近付いただけで命が消し飛ぶ威力がある。

つまり、総合するとエレンがこの森の中で巨人化をした、と言う事だ。

「(エレンか? でもなぜ……。……。畏?)」

目的はエレンである為、その位置。どの班に配属されているか、全て慎重に調べた。だが、まるで判らなかつた。全ての報告書でエレンの位置だけがバラバラだった。エレンだけではない。リヴァイ班に関しての情報も一切なかつた。

だから 強硬手段に出るしかなかった。そして 此処まで来たら こちら側が何を狙っているのか。エレンを狙っている事がバレていない訳がない、と考えるしかなかった。

「……馬鹿か私は。もう考えていても仕方ないんだ。……ただやるだけ。どうにかしてエレンを搔つ攫わないと」

ぐるぐると頭の中で回っていた雑念を全て捨てた。

考え過ぎて、何も出来ないのだけは御免だったからだ。だから 直ぐにその方向へと向かつて飛ぶ事が出来た。

巨人特有の蒸気を蒸かしているあの場所へ。

ものの数秒で エレンの巨人化した姿が見えてきた。

そして 更にエレンの足元には無数の巨人の骸があった。

「……まだ巨人、いたのか。全部引き寄せたと思ってたのに」

エレンの周辺に巨人がいた事に少なからず驚いた。

自分自身を喰わせて、その隙に逃げる為に この森一帯に届くよう呼び寄せたつもりだった様だ。でも実際の所 エレンの周囲には巨人が転がっているから、声が届かない範囲の巨人が来た……とアニは判断し、そして エレンが巨人化した理由も同時に判った。

「巨人に襲われ、やむを得ず身を守る為に自らも巨人化した……？ 若しくは元々巨人化する計画だった？」

「いや違うぞアニ。アレはお前をおびき出す為のフェイク。エレンに執着してる理由は判らんが、目的はエレンだったのは判ってたからな。姿見せりや 脇が甘くなるな、っ て思ったらドンピシャリだ」

「ツツ!?!」

アニは、途端に雷に打たれたかの如く、ビクンっ と痙攣を引き起こした。

それも無理はない事だ。慎重に行動し 周囲にも気を配っていた。にも関わらず、背

後を取られてしまったから。

だが、これは無理もない事だった。アニの最終目的はエレンの回収。その目的の人物が再び目の前にいる。巨人の群に乗じて脱出を果たし、更に厄介な人物を撒いたとも思っていた。その云わば心の隙が、アニの周囲への注意力を散漫にってしまった結果になったのだ。

そして、この男はそれを決して見逃さない。

「よお……アニ。さっきぶりだな」

「っ……、な、なぜ……、なんで此処に……!？」

思考が定まらない。ただただ混乱するばかりの両肩を掴み、アニを正面へと向けさせた。

対面しているのは人類最強と名高い男。……アニ側からすればパラディ島の悪魔そのもの。

「お前が逃げてるのが見えた。それだけで説明にならねえか？」
「……………」

アニは、それだけで説明になるか！と口に出しかけたが何とか飲み込む。あの大量の蒸気。アニ自身その中を移動していたからよく判る。濃い蒸気は完全に覆い隠してくれていた事を。どんな視力をしていたら見える様になるのか皆目見当さえつかない。

かった。でも、この目の前の男なら。……この悪魔なら、出来ないとは言えない。

そして、気が付けばアニは周囲を囲まれていた。リヴァイ班。巨人殺しに特化した班のメンバーに。

「……私の、負けだ。殺しなよ。……私は沢山殺した。貴方の仲間達を沢山殺した。例え殺されたって文句は言えない」

アニは 力なく両手を上げた。

それは傍から見れば完全に降伏している様に見えるだろう。

でも、アニやエレンは違う。どんな体勢からでも巨人になれる。一度巨人になれば、その時に発生する衝撃波。熱風で一気に蹴散らす事だって可能だろう。

だから、普通は近付くだけでも危険極まりない行動だ。……だがそれはアキラ以外の者が行えばの話だ。

戦いの最中にも生への執着。約束への執着。執念をアニは見せた。最後の最後まで

戦い抜いた。それだけの覚悟も持っていた。

でも、もうア二には無理だった。

全身全霊を込めた一撃も。長い戦闘時間も。アキラの姿を見て全ては無意味だったと気付かされるのには十分過ぎたから。

所々傷は負っている様だが、かすり傷の様なものにしか見えない。全力の蹴りで血が出たのを確認したが、もうそれが何処の傷なのか判らない。

これらを総合させると、アキラは巨人並の回復力もあるという事だ。

それらは ア二自身の心を折るのには十分すぎる一撃だった。或いは相手がアキラだったからなのかもしれないが、それを知るのはア二の心の内のみだ。

だからこそ 何度目か判らない死を覚悟したが、アキラの返答は考えていたのとまるで違った。

「馬鹿野郎。誰がお前を殺すか。……なんだ？ オレに教え子殺せつてか？」

そう、この期に及んで殺したくない、と言っているのだ。

「……なんで そんな事言ってるんですか？ 私は敵。……人類の、敵。教え子である

前に敵なんですよ。……貴方は、巨人に情けをかける様な人じゃない」

「んなこたあー判ってんだよ！ さつきからずつとずつと頭ん中ぐるぐるしてんよ！ クソが！ 判ってんだ。巨人ってヤツがこの世界の敵って事くらい。ここに来たその時からずつとな！ ああクソ、判ってんだよ！ ……だがな、今のお前はどうか見たって巨人に見えねえってんだよ！」

アキラは、がしつ、がしつ、と頭を掻き耷る。

ア二は、その表情に葛藤を確かに見た。

これだけ大量に殺しをしたのにも関わらず。アレだけ仲間の死を嘆き、前へと進むと道標を示した男が迷っている。

そして、同時に——目の前の悪魔の唯一の弱点を、見た。それは珍しくもない。人であれば誰しもが大小持っている弱点モトメを。

「ああ……クソ。クソ」

更に数度掻き耷った後 アキラはリヴァイの方を向いた。表情は 虚ろ……とまではいれないが明らかにいつものそれではない。

「リヴァイ。オレがアニを連れてく。それで良いだろ？ 打ち合わせ通りだ」
「……………ああ。許す」

リヴァイの了承を得たアキラは、今度はその後ろにいるペトラに言う。

「あんがとさん。……………んで、ペトラは睨むな。決まった事だろ。寧ろオレがやるしかない。エレンの巨人化の時みたいな熱風。至近距離で、更に生身で受けりや速攻でこんがり肉だ。いや、……………焦げ肉になる」

「……………判ってる。判ってるんだけど……………」

目の前の娘…………… アニ・レオンハートの事はペトラも知っている。

アキラと共に訓練兵を見てきたからよく知っている。あの104期の中でも特に優秀だった者達の内の1人。特に面倒を見た、と言える訓練兵達。あの時のアキラは文句はいい一つも笑顔が多かった。——だから、それを見ているからこそアキラの葛藤も痛い程判った。

でも、ペトラの場合、それよりも仲間達が殺された怒りの方が勝っていた。

目の前のアニが人間には見えない。……………巨人にしか見えない。だからこそ、報いを受けさせたいと言う想いが前面に出た。その次に大きいのがアキラだ。力を使い過ぎて今どうなるか判らないというのに、巨人になれるアニを連行する役目を果たすという大役を自ら選んだ。

手足を縛り、猿轡を嵌め、身動きも自傷行為も取れない様にして連行する……と言う手を考えていたのだが、アニの巨人化のトリガーがまだ正確に判明していない事。エレンを基準に考えすぎるのは危険である事、と却下されてしまった。

つまり、耐久度もずば抜けているアキラしか適任者がいないという現実にも苛立ちを感じてしまうのだ。自分自身への怒りが。

いつものこういう場面ではアキラがケラケラと笑いながら自分が大変な場合でも樂觀的になって力を抜かせてくれるフオローをする……と言うのが常だが、今のアキラにはそう言う余裕は無かった。

あの後。いつものアキラとリヴァイの口喧嘩の後。唐突に告げられた。

『女型の巨人の正体。お前それをもう判っているな?』

その後から、アキラの表情から笑みは消えた。

いや、元々何処か無理をしている……と言うのには気付いていた。でもそれは長く

戦った事の代償……程度にしか考えていなかったのだが蓋を開けてみれば想像を遙かに超えるものだった。

その後、アキラはアニの身体を自分自身に縛った。自分から逃げられない様に、と。仮に巨人化爆発したとしても、被害を最小限に抑える自信がアキラには合ったからの行動だ。極限まで集中したアキラは、爆発するその一瞬の機微をも読み取る事が出来る。エレンとの訓練でもそれなりに出来る様になったから。

そして、これがいつもの馬鹿な光景だったらどれだけ幸福か、とペトラは思う。

ただの馬鹿な提案。アニを守る為に、自分にくっ付いてろ！、と言う作戦とかであれば、イルゼやペトラが盛大に睨みを効かせて、実力行使でやめさせて終わり。その後、はいつもの日常が始まるだけだ、と。

だが、これは違うんだ。

確かに最大の目的である壁中の敵の炙り出しには成功した。被害は被ったものの、間違ひなく成功だと言える。死んでいった仲間達の手向けにもなる。でも、変わりに失ってしまった。

どれだけ覚悟を決めていても、やはりきついものはきつかった。相手が仇であっても……やはりきつかった。

「アニ。とりあえず暫く大人しくてくれ。なに いつもみてえにオレの事睨んでりや
良いよ。馬旅の間……あの時の馬鹿話の1つや2つして過ごそうや。……それだけで、
とりあえずは退屈しねえよ」

「……………」

46話

「なあ、今からオレとくつついた状態で一応ロープで縛るんだけど、背中合わせが良いか？ それとも背に抱き着く形が良いか？」

「……………別にどちらでも。好みに、して」

「いや、オレだって別にどっちだって良いんだけどよ。アニが決めてくれ。さっさとエルドに縛ってもらうから。お前さんが向き決めてくれた方が早い」

馬の位置にまで移動し、どういった体勢で乗るかの検討が始まっていた。

緊張感がやや薄れかねない会話が続き、聽て ため息を吐きながら、アニが決めた。それはアキラと背中合わせになる、と言う方向だ。

そして、この2人を縛る、と言う大役を請け負ったエルドは緊張感が跳ね上がる。

常に死と隣り合わせの壁外で培ってきた精神力は、調査兵団の中でもトップクラスと言えるのだが、いつ爆発してもおかしくない巨人女の傍に居るのは やはり精神的にきついものがあるのだろう。だからこそ、エルドは顔色一つ変えず いつもの通りになっているアキラはやはり別格だ、と思っていた。……………だが、それは直ぐに頭の中で否定する。

「……いや、違うか。いつも通りなんかじゃない。顔色だつて、全然別物だ」

2人が離れない様に ロープで互いの身体を固定する間も、アキラは他愛のない話を続けていた。内容は主に訓練時代の話だった。

「(当然、か。短かったが教え子は教え子……だもんな。怒りのぶつける先が、こんな——なんて)」

今まで巨人を殺す際。アキラの顔は怒りに染まっていた。何度も何度も見たその姿、そして纏う雰囲気。それを見続けた為かいつしかこう言われ始めたんだ。

—— 人類の怒りを体現している、と。

そして、当の言われていたアキラは。

『別にそんな大層なものじゃない。……仲間を、みんなを殺されたら怒るのは当然だろ』
 そう答えていた。

ならば、今のアキラは……仲間達を殺した女型の巨人に怒りを向けられるか？ と考
 えたら、そんな簡単にいかないのは判りきつている。怒りと巨人に対する憎しみ。……
 その相手が自分自身の教え子だった。—— 本当に残酷極まりない世界だ。

「うおう、エルドー。流石に縛り過ぎ。ちよい動きにくい。ロープ引き千切っちゃまい

「そうだったって」

「つ、あ、ああ。すまん」

アキラの事をフオローをするために、自分達の班が傍にいる。身体ではなく心を守る為に。普段口にする事は絶対ないが、リヴァイ班の全員がそれを意識してきた。それなのに、出来ていない現状をエルドは嘆く。

両頬を思い切り、挟み込む様に叩いた後。

「うっし、これでOKだ。それで、アキラ。オレらからあんまし離れるなよ？　つてか、背負ったまんまで馬の操作大丈夫か？」

「おう。この位余裕だって。なんつったって、この愛馬とも付き合い長いし。意思疎通なんて余裕余裕。なあ？　相棒っ！」

ぼんつ、とアキラは馬の尻の部分を叩く。

それに反応したのか、応える様に尾を数度左右に振った。

「よし」

アキラは、ひよいとアニを縛った状態で馬へと飛び乗った。

アニも大人しくしてくれていて、脱走しようとする気配は今の所見られなかった。

「……アイツも、色々と気を使ってくれたのかね。オレらみたいにな」

エルドは、アキラの乗る馬を見て　軽く笑う。

いつもは、そんな気の利いた対応などしたりしない。大体が一瞥もせず無視したり、露骨に顔を背けたり……と。背に乗せて走ったりはしてくるが、愛嬌があるとは到底言えなかったのに、あの反応は少なからず驚きものだ。

それでも、死地を共に潜り抜けてきた愛馬である事は間違いない。助けて、助けられているのは人間だけではないと言う事だ。

「つたく、馬がやってくれてんだ。人間様はもつと頑張らねえと、な！」

エルドも、同じくひよいと馬に飛び乗った。

「アキラ……。お前が言い出した事でもある。最後まで面倒を見ろよ。メンドクセ工場面にするな」

「わーってるよ、リヴァイ。そっちこそも周囲の警戒怠るなよ、つて。オレ今超重要な位置だし。エレンより重要人物になってんじやね？ 大切に扱ってくれよー」

「お前が色んな意味で問題起こす問題児だつて全員が知ってる。今更こつちがハマはしねえよ」

「誰が問題児だコラ！」

こうして、リヴァイ班全員がやや遅れて 陣形に合流しようと移動を始めたのだつ

た。

そして、その道中での事。

「なあ、卒業したあれからも、ずっと蹴りの練習はしてんのか？ アニ。確か憲兵団の方
に行っただら？ あの辺の連中は まあ てきとう、サボり、怠惰を貪るの3点コン
ボな連中だしなあー。あんな中にいたらこっちまで身体なまる、って感じた。違うか
？」

「……………」

「お、そう言えば さっきの上段蹴りの蹴り込む角度は良かったぜ。小さい的のオレに

当てようと工夫してんのがよくわかった。でも、巨人になっても変わらんみたいだよなあ、アニ。お前さんにはちよつとした癖があるんだぜ？ 軸足に力入れる瞬間に、その癖は顔を出すんだ」

「……………」

「教えてはやらんからな。ちゃんと鏡の前で練習しとけ。じゃねえとオレには当たらんぜ。巨人ヴァージョンでも人間ヴァージョンでも。あー、でも何発か当たったんは、わざとだからな！ 嘘じゃねえぞ、わーぎーとつ、だぞ??」

「……………」

ただ、アキラが一方的に話すだけで、当然ながらアニからの返事は無かった。

その後ろにペトラがいた。

いつもの調子で話し続けるアキラ。……何処か哀愁、悲しさの様なものを押し殺す様に感じるのは決して気のせいなんかじゃないだろう。話続ける事で、いつもの様なおちやらけで話し続ける事で誤魔化しているのだと判る。

誰かを背にして馬に乗ってるアキラを見るのは初めて。そして——あんな寂しそうな後ろ姿も初めて見る。

「………… (アキラ………… こういう時、どうしたら…………)」

どう言えば良い？ 心から支えてあげる為には どうすれば良い？ 頭の中で何度

も何度も自問自答していた。

「ペトラ。あまり考えすぎるなよ。……逆にオレ達が心配かけちゃうぞ。アイツに」

グンタがいつの間にか ペトラの横へ馬を付けていた。話しかけられて漸く気付いたのか、ペトラは身体をビクつ！ と震わせ、反射的に振り返った。

「アイツも判りやすいが、ペトラも判りやすい。……オレ達に出来るのは、アイツの傍を離れない事だ。絶対に一人にしない事。……孤独にさせない事だ。それだけ考えてりや良い。……今は、な」

「……………判ってる」

「よし。……後勿論だが警戒は怠るなよ。何が起こるかまだ判らない。このまま、終わると思えない。……ここにいる巨人が、アニ・レオンハートだけとは限らないんだからな」

それも事前に話し合ってる事だった。

アニが巨人だと判明した時に。……女型の巨人の正体をアキラが判っている。話してくれたその時に。

それに元々、知性を持つていると判断した巨人。巨人の姿を纏った人間は 調査兵団の中では最低でも2体はいる、と考えていた。

1体は勿論、壁よりもはるかに巨大な50m級超大型の巨人。

ただの一蹴りで壁の門を破壊して人類を蹂躪した。

あれが壁を壊したその日から——壁の中の人類の悪夢が、全てが始まったのだ。誰も
が忘れられない存在だろう。

そしてもう1体は 鎧の様に硬い身体を持つ巨人。人間しか興味を持たない筈の巨人が、正確に、狙いを定め、その身体を使って門をぶち壊していた。外壁ウォール・マリアの門程ではないにしても、普通の巨人では到底壊せない強度を誇る門を壊し、銃弾や刃では傷1つ付けられず、砲弾をも跳ね返した程の強度を持つ巨人。

そのままだが、この2体の巨人を《超大型巨人》《鎧の巨人》と名称を付けた。ハンジ辺りが、また愛称を付けるんじゃないか？ と思ったのだが、目の前にいないから、と言う理由なのか 相手が人間かもしれない、と言う理由からなのかは知らないが、その2体に関しては特に言っただけでなかったのは別の話だ。

そしてその2体には類似点がある。

どちらも煙の様に姿を消した、と言う点だ。

その後の目撃情報も皆無。そして幾度となく壁外へと赴き、調査を重ねたが見つけれなかった。

それに駆けつけた調査兵団の主力部隊が到着した時には、もう それらしき巨人はどこにもいなかったと言う点も不自然だった。それだけの破壊力を持つ巨人が、あれだけ

の巨軀を持った巨人が、生き残りの誰も目撃もなく消える等、普通は考えられなかったからだ。……だが、エレンがその疑問の答えを持つてくれた。巨人から人に戻る時、巨人の身体は蒸発する。

つまり煙の様に消えた——と言うのは比喩なんかではなく、役目を果たした後に実際に蒸発したと言う事だ。

真の目的に関しては未だ不明だが……、それでも少なくとも2人以上はいると判断した。

そして 今回の遠征で3人目の巨人が現れた。

現れたのは女型の巨人。中の人間はアニ・レオンハートだった。

更に今回の大規模遠征は104期の訓練兵達が入隊して初めてのもの。つまり 残りの巨人がいるとするなら、同じく104期のメンバーである可能性が非常に高いだろう。アキラがその事が判らない筈がない。

たった数年の教官時代だったが、その中でも一番騒がしく、一番問題が目立って、一番印象に残って、……一番楽しめたのが104期のメンバーだった。

沢山の教え子達が命を落としたあの日の事も、忘れる筈がない。手に拾い、顔に塗した命の火は、まだ残っているから。

それでもだからと言って、しなければならぬ事が判らない程アキラは自分を見失ってはいない。今生きている仲間達が何よりも大切だから。

「なあ……ア二」

アキラは、ずつと他愛のない会話、と言う名の独り言を続けていたが、ここからは違った。ア二自身も空気の違いを感じ取ったのか、気が付いたら俯かせていた表情をゆつくり持ち上げていた。

「お前は……ここじゃない 違う世界から来たのか？」

「…………ツ」

少しだが、反応したのをアキラは背中越しに感じる。

肯定だと受け取り、返事を待たぬまま、続けた。その先は ア二にとっても興味が尽きない内容。

「そう、か。……なら、お前もオレと同じなんだな」

アキラと言う男の正体に直結するかもしれない情報だった。

此処から生きて帰れるとは、ア二自身は思っていない様だが、それでも、死に逝く自分には必要のない情報だと頭では判っていても、耳を傾けてしまう。そして その動作が ほんのわずかな動作がアキラに伝わる。

「オレもそうさ。ここじやない違うトコから来た。……これ話した事あるの、結構少ないから黙っててくれよ?」

「……………」

誰かに話す様な事が出来るとは思えないのに、何故そう伝えるのか、と疑問に思う間もなく、アキラは続ける。

アキラ自身が、突然この世界に落とされたと言う事。自分自身は全く違う世界から来たと言う事。……巨人とは全く関係がなく、この世界に比べたら 楽園とも言える程平和な世界から来たと言う事。

そして、巨人を薙ぎ倒す力——それも突然得た、と言う事。

「妙ちくりんなヤツだよなあ。なーんか、頭ん中で声がしたと思つたら、巨人蹴つ飛ばせー! だもん。出来る訳ねー、って当然思つてただけど、そうも言つてられなくてさあ。なんせ目の前で喰われそうな子がいたからな。……んで、やってみたらこの通り」

いつの間にか、手に持っていた拳よりも一回りは小さい石を軽く上へと投げた。……本当に、まるで石をパスするかの様に、放り投げたそれは、まるで矢の如き速度で空高くへ飛び、そして 見えなくなつた。

「マジで世の中不思議な事だらけだ。……その上、理不尽で残酷。信じられねえくらい

残酷な世界だって、痛感してるよ。お前のいた世界ってのはどうだった？ ……この世界より良い所なのか？ 言うまでもない、かな。 ……帰らなきゃいけない、って気合入れてたもんな。 ……お前は、お前達は 帰らなきゃ行けない。 ……そうか」

軽く投げた方の腕をぐるん、と回して 首を左右に折り、コキコキツと鳴らす。

——ここまで話をした意図は一体なんなのか…？ 死に逝く者への餞別のつもりなのか？

アニは、不思議と嘘を言っている様には聞こえなかった。嘘を言う必要が今アキラにあるとは思えないし、何より あのメチャクチャな力を考えたら、と思えばそこまで衝撃ではないから。だが、それでも今自分にそれを話す理由。その真意が判らなかった。

アキラは、また会話を区切り——そして、空気を更に重くさせて アニに訊いた。

「——なあ、他にいるヤツは、アニと同じく……オレの教え子、なのか？」

「……ツツ」

「そっか。ありがとうよ。……それだけで充分だ。もう、十分」

アキラの真意が、アニには今判った。

嘘偽りのない言葉で、更に間違ひなく聴き入りそうな内容の話を訊かせて、更に意識を集中させる。今までのありふれた会話。いつもの碎けた会話だけだったら、馬の耳に念仏、馬耳東風だったかもしれない。話に興味を持たせて、それでいて反応を感じる為に話をした。身体を密着させているこの状況も自分の変化を見極める為に都合が良いだろう。並外れた感覚を持つアキラなら、些細な違いをも容易に読み取るだろうから。

「悪いな、アニ。……オレはお前らの事だつて大切に思つてた。バカばかりやったり、面白れえ事ばかりやったり、ハゲ……キース教官やオレの言う事訊かないヤツも多かった。苦勞した分、その分……思い入れがある。アニだつて睨んでばつかで正直可愛げねーってなんと思つた事か……。……でもよ、全員が壁この外側ちに来るかもしれないヤツらなんだ。そりゃ熱心に見るさ」

「……………」

アニは、アキラの気持ち伝わらない程 まだ心は残つていた様だ。

アキラが知る由もないが、彼女に、彼女達にとつては壁中の人間は 悪魔の末裔と呼ばれている民族。何を躊躇する必要があるので、と。

だが、アキラは違う。話の全てが本当なのであれば、彼は壁中の人間などではないのだから。

だから、表情を読ませない。感情をあまり出さない。他人と極力関わらない様にしていたアニも、あの訓練時代に感情を激しく見せてしまったのかもしれない。その時から何処か、壁中の人間とは違うと勘付いていたのかもしれない。

そして、アキラは腰にある銃を取り出した。

込められているのは音響弾、そして器用に片手でもう一丁の銃も取り出す。こちら側は信号弾の込められた銃。

今度は行動の意味がアニには判らない。

ただ、感じたのは伝わってくる体温が、急激に上昇でもしているのではないかと、と
思える程熱くなっていた事だった。

「お前達にどんな事情があるのかは知らん。譲れない想いつてヤツも、肌で感じた。
……それでもな。どんな理由があろうと——」

ぎゅ……と強く握られた銃。信号弾の込められた銃を上へと持ち上げる。

「オレは——」

ずどんっ！　と言う音が響いたかと思えば、空高くに煙弾が撃ち放たれた。……それ

に込められたのは灰色の煙弾。

ア二は、はつと顔を上げ、周囲を確認した。

先程まで普通に並走していた筈なのに、いつの間にかアキラの周囲にいた調査兵団リヴァイ班のメンバーは陣形をとって、いつでも立体機動装置を使える様にスタンバイしていたのだ。

そして何より——次の瞬間には、背後で轟音が聴こえる。巨大な蒸気、そして熱気を感じた。何度も何度も間近で感じた事のある気配である為、ア二は何がやってきたのかが直ぐに判る。

それが放ったのは、ただの蹴り。

ア二の時は、ここにある巨大樹を一本薙ぎ倒したただけだった。それでも驚異的な脚力だと言える。他の巨人達には到底出せない破壊力。……だが、現れたそれは文字通り、見た通り桁が違った。

振るった脚は、大地を破壊した。一面の巨大樹を削り取り、その熱気は炎をも生む。

「ハ、ハ、ハ……ッッッ!!」

後ろで、エレンの声が響いてきた。

どうやら顔見知りなのだろう。否、エレンだけではない。あの日を生き延びた全ての人間が、それを見た全ての人間が忘れる事の出来ないであろう面。

——第89回 壁外大規模遠征にて、超大型の巨人と遭遇。

『うおおおおおおお!!!!』

大地を破壊する超大型の巨人。到底この世の物とは思えないだろう。その姿はまさに《破壊の神》。

だが、神であろうと悪魔であろうと、自分達がする事は変わらない。

リヴァイ班全員が 取り乱す事なく 行動に移れていたから。

そして、当然ながらアキラも——。

「家族に手を出すヤツは、許さねえ」

47話

超大型の巨人の出現。

それはアニも見ていた。そして何が起きたのか理解していた。だからこそ、いつもの倍増しに高速に頭が回転する。

このタイミングで巨人になる――。

そんな話は聞いてないし、していないのにも関わらず、アイツは巨人になった。まだ息を潜めていなければならぬと言うのに。まだバレる訳にはいかないのに。

エレンの奪還を失敗した自分に代わり、あの巨人になった。

『何が名譽●●●だ!! 何が選ばれし戦士だ!! ●●●も■●■も全部クソツタレだ!! 全員嘘っ吐きで!! 自分のことしか考えてないくせに!!!』

アニが何故かこの瞬間に思いだすのは数年前の記憶。
とある者達と、ちようどこちら側の世界へ来た時の記憶だった。

あの全てが始まった日から今日まで——殆ど全てに嫌悪感があった。
かつての自分の世界においても、そして この壁の中の世界においても変わらなかつた。

人間とは全てが利己的であり何より残酷で残酷。

その本質には残酷性が必ず息を潜めている。一皮むけば誰もが化け物になりえると言ふ事。それは大なり小なりあるが、きつと本質は変わらない。ただ、大きな力を持つ者であればあるほど その範囲が、規模が、もつてる力に合わせて大きくなるだけだ。

他人より自分の利益を優先させる。周りがズルをすれば一緒に流される。そんなのは屑だと自分でも判っている。訓練兵の時代の時は、大体がそんな者達だった。

でも、それが普通の人間だ。——それ以外の行動を起こせる者が異常な人間。珍しい人間。特殊な人間なんだから。

だから、自分だって同じ。同じだからこそこうも思う。流される様なヤツでも、……例え大きな力を持っていて、全てを壊そうとする者であっても、……人間だと思われた。ずっとそう考え、思い続けていた。

そして、今現在。

「……………」

目の前の巨人を、巨大樹に迫る程の巨大な、人間を見下ろし虫けらのように踏み潰す、踏み潰せる程の力を有する強大な巨人を前にしても、全く退かない男達を、ア二は見ていた。

そんな集団、数少ない特殊な人間の集団の中で、更に極めて異端な者がいる。

大きな力を持っている癖に、自身の保身や利益に走らず、そして 自分の本音や本性さえ隠さず曝け出す。不思議と、ウソを言っていたりしてないと理解できた。

そんな人だったからこそ、考えを改める様になってしまったのだと、ア二は思えた。

「———なんで、今さらこんな事を考えて……………？」

そう、気が付けば、目で追っていた時期があった。

そう、気が付けば、考えていた時期もあった。

いるだけで、息をするだけで、どうしようもなく吐き気さえする場所で、初めて夢中になれた気がした。

この世界にきて、初めてムキになってつつかかった相手だった。あの笑顔が苦手だった。何もかも判ってくれる様な、理解してくれる様な、そんな得体のしれない力を含んでいるかの様な笑顔だ。

だけど、皮肉にもその苦手な笑顔が全てを受け止めてくれた。そして本当に夢中になれた気がした。

それは、巨人となって相対した時にも変わらないのかもしれない。

本当の自分を、正体を本当の意味で全てを曝け出した。

そしてぶつかった。ぶつかった結果——彼はそれをも受け止めた。

きつと、作戦が無ければ最後までぶつかれたと思う。きつと自分が動けなくなるその瞬間まで。殺されるその瞬間まで。いや、殺しはしなかったと思う。自分だと確信した時に、明らかに表情が変わったから。

「やっ、——どうするっ。」

そんな時、考えて込んでいた時に声が頭に直接響く様に割って入ってきた。

どれだけ混乱していても 聞こえてくるんだとアニは感じる。この人の言葉は。「この状況だ。逃げようと思えば逃げれるんじゃないか？」

周囲は大混乱。

巨大樹の森は盛大に炎上。見渡す一面が森だから 炎は踊り狂う様に広がり、周囲を蝕んでいった。落ち着いていたのはリヴァイ班のみなのか、炎と巨人の轟音以外にも、悲鳴にいた声が微かに聴こえてくる。

あの巨人が発する超高温の蒸気の威力はアニ自身もよく知っている。

あの巨体に目を奪われがちだが、最も厄介極まりないのはそこにある。近づこうとすれば、身体は焼かれる。近づかなければ、ただ踏み潰されるのを待つだけ。立体機動装置で宙を飛んで追ってもあの蒸気で全てを吹き飛ばされてしまう。

逃げる以外の選択肢は普通は無く、更に言えばここで巨人化して あの超大型の巨人の方へと逃げれば、追ってはこれない。つまり、この場を離脱するのには最適な状況。女型の巨人の戦力が減るくらいなら、エレンを今諦めるのも必要かもしれない。体勢を立て直す必要がある。

考えれば考える程、今離脱するのが最適の手段。それしか無い。

のにも関わらず――。

「動け、ない………」

アニは動けずにいた。簡単な筈なのに。少し身体に傷を作ればそれで良い。身体に縛られているが、そこまで嚴重に拘束されている訳じゃない。手も、指も、動く。巨人になる事も出来る。なのに——動く事が出来なかった。

「とりあえず、オレの背にいたらアニが危ない。オレも動きづれえし。つつー訳で、木に縛らせといってくれ。……ああ、別に逃げてても良いが、オレ達の邪魔しようとするなら。……もう手加減はしねえよ。もう腹あ括つてる」

アニ自身の想いもあるが、動けなかったのは、それ以上に身体全体から放つ凶悪な殺気。具現化されたかのようなその気配にあったのかもしれない。

そしてアニは無言のまま アキラの背から降り、木に固定された。

固定自体は大して強くはないから苦しかったりもしない。巨人化できるアニにとつては無いも同然だと言える。だが、出来なかった。

「さて……、アニの次はアイツか。お前が何処の誰なのか判んねえけどよ。……お前が元凶の筈だろ？ あの日…… 壁をぶつ壊してくれたのはお前だろ？」

アキラは、アニを降ろした後 あの巨体を見上げた。

確かに巨大樹の大きさが80mである事を考慮して 見上げてみると 目算ではあ

るが情報通りの50m超。あのウォール・マリアの壁から顔を出したのも頷ける大きさだ。

そして、全員が超大型の巨人の特性について理解しだした。

『ぐあああああ!!』

立体機動装置を使い、様子を見る為に間合いを詰めていた兵士達が全員吹き飛ばされた。

あの超大型巨人は動いていないが、全方位への高温の蒸気を撒き散らせ、ただのそれだけで蹴散らした。射出されたアンカーも容易に吹き飛ばし、近づく事も出来ない。……近づき過ぎた者は、炙られ、飛ばされながら全身を燃やされてしまった。

どうにか救出する事は出来た様だが、一目見ただけでも重症だと言うのは判る。重度の火傷を負ったと言う事が。

超大型巨人が現れた時の大爆発程の規模の高温蒸気では無いのだが、何時くるか判らないそれを前にすれば、当然近づく事が出来ない。更に炎も迫ってきている。普通に考えれば撤退しかない。

だが、あれを放置する訳にもいかないのも事実。

あの巨人が全ての元凶。そして現在確認されている内の1体。
あの巨人が壁の門を破壊できる巨人なのだから。

「アキラ」

リヴァイが、班の全員が戻ってきた。皆が同じ気持ちなのだろう事はその表情だけで判る。……が、打てる手が少なく歯痒い気持ちも見取れた。

「どうやらあの木偶には、簡単に近付く事も出来ねえらしいな。周りに燃えるものが多いすぎるのも問題だ。この火に囲まれたらあの蒸気じゃなくても丸焼きになる。タイミングを見誤ればそれだけで全滅だ」

迫ってくる超大型巨人と炎。その二つが迫る以上、普通は選択の余地はなし。《撤退》しかない。……普通なら。

「おう。リヴァイ。なら これからやる事は1つ。簡単簡潔」
アキラはぐるんつ、と腕を回して あの超大型巨人を見た。

全員がそれを見て大体察した。何を考えているかをだ。それを察したと同時に表情が更に険しくなる。それが特に顕著に表れているのがペトラ。

これまでの付き合いから、こういう場面で、アキラが何を言うか 大体判るからだ。背後に迫る脅威をどう対処するか。

今までとは規模が圧倒的に違うと言うのに、変わらない。

更に仲間達が危険である事。この巨人の災害を終わらせる可能性があると言う事。

それらを考えたら、アキラが言う事は一つしかない。

「超大型巨人を思いつきりぶつ飛ばしてくる。その間に体勢を整えろ。つか、少なくとも森出る。平原で巨人とやるのはしんどいかもだが、焼けるよりはマシだろ?」

殆ど想像通りの答えが返ってきて、より表情が険しくなったペトラは激昂する。眉間に皺を寄せながら、アキラに急接近した。

「何馬鹿な事言ってるのよ!!!」

ある意味いつも通りのやり取り。壁外調査の時は本当にいつも通りで恒例と言えるかもしれない程の。

状況がどれだけ悪くとも、この光景だけは変わらなかった。

「適任だし、これはチャンスでもあるだろ? アレをどうにか出来りや壁壊されるリスクも減る。アイツには立体機動装置が使えないってのも最悪だ。正直、アレ無しだったらリヴァイにだって余裕で勝てるぜ、オレ」

「ほう。馬鹿なガキなりに考えてるみたいだな。それは面白い。で、試してみるか?」

「おーおー、OK OK! 白黒つけつか? この根暗顔!」

何故だかりヴァイvsアキラな流れになってしまいそうなので、もう一度ペトラが叫

ぶ。

「だから、何馬鹿な事言ってるのよ!? 今日、アキラどれだけ戦ってたか判ってる!? もう、1時間超えてるんだよ!? 先ず撤退が先決でしょう!? 森から離れた所で体勢を整え直す! あの脚なら全然逃げられる! 逃げ切れる! だから、ぜ・ん・い・ん で!」
女型の巨人との戦闘時間。

捕獲を主にと考えていた為か、普段よりもはるかに時間が掛かっていた。それに加えて反撃も受けている。此処から先は未知の領域であり、どうなるか判らない、と言う思いがペトラの頭の中で警鐘を鳴らせていた。

さつきは大丈夫だった。……でも次も大丈夫だとは言えない。誰にも言えない。それが答えだった。

「あー……んー……」

アキラは今度は直ぐに答える事なく、頭を掻いていた。
何処か迷っている様な感じに見えた。

そして、その後はあの超大型巨人を見た。

どうやら何かを探している様で、頻りに周囲を見渡していた。そして何よりも速度が普通の巨人より圧倒的に遅い。踏み出す一步の歩幅は比にならないくらいデカいが、動きそのものは鈍足だ。それに少しだけ安心した様にアキラは振り返っている。

『活動限界時間、実はゼーんぶ嘘だったんだぜっ!』……つて言えないよなあ。そもそもある意味、間違つてないつちや間違つてないんだし。……さて、どういえば良いか。それに今 一から説明する時間は流石になさそうだし』

「……………は?」

ペトラだけではなく、エレンやほかのリヴァイ班の全員が呆気にとられた顔をしていった。

言っている意味を理解できているのはリヴァイだけだった。

「今まで言つてた時間つてヤツを超えて、更に超えていったら、身体が脆くなる〜とかじゃなくてだな……。んー、アレだ。どんどんオレがオレじゃなくなる、つてヤツだ。……あー、なーんか自分で言つてて恥ずいんだけど。……悪い、それ以外の言葉見つからねえんだわ」

「「は?」」

言っている意味が判らない。ペトラだけが興奮してた状態だったが、それ以外のメンバー全員も同じ反応だった様だ。視線が一気に集中していくのが判る。

当然だろう。自分が自分じゃなくなる、なんて言葉を素で言つたとして、それを直ぐに『それ、判ります』なんて言える者はこの場にはいない。それにアキラが突拍子もない事をいきなり言い出す事は少なくなかったが、それでも何言つてるか判らない程だつ

た。

そう……色々々と調査をし、確認をしてきた者達以外には判らない。

その間にもあの巨大で鈍足な巨人は 周囲を火の海にさせながらゆっくりと迫ってくる。

「それに言い忘れたけど、今回、1人で行く気はねーつて。だよな？ リヴァイ」

「ああ。一応ここから先はオレへのエルヴィンの指示はねえからな。オレの判断で動く。オレとお前の2人だ」

リヴァイはそう言うのと一歩前へ出た。

「お前らはアレと距離をとれ。アレが現れた以上陣形もクソもねえ状況とも言えるが。一先ず森を出る事を優先し、当初言った通り森の西方向へ向かえ」

それがリヴァイ兵長の指示だったが、そこにエレンが割って入った。

「オレも使ってください!!」

心臓を強く叩き、進言するエレン。

「バカタレ。お前はさつき一仕事買ってくれただろ。あのおかげでアイツを……、アニを捕まえる事が出来た。もう十分だ。休んでろ」

「仕事と言うのなら、アキラ教官は身を削りながらずっと戦い続けている筈です！ オレもやります！ まだやれます！ それに敵の狙いがオレであるのは明白！ アニの……、女型の巨人の時の様に、少なくともオレは囮に使えます。お願いします！ 使ってください!! オレは心臓を——」

—— 捧げる。そのつもりで戦ってきた。

エレンの気持ちはわかる。判らない程、アキラは薄情ではない。だが、それでも言う事はただ一つだ。

手を伸ばして人差し指、親指に力を籠る。

そして 巨人になった後特有の少々皺が普通の倍増して多くなってるエレンの眉間にばちんつ！ と一撃を決めた。

「いたっつー！」

「バカタレその2だ。オレああん時言っただろうが。『お前らの心臓なんで、いらん！』 っつよ。忘れんじゃねえつての。んな大事なもんはお前の為だけに使え」

「で、でも……」

「でももへちまもねーっ。エレンの巨人の力は確かにつええってオレも思ってるが、リスクの面がデカすぎ。1回巨人になってんのにまた巨人になって、それで戻って……っ
てなったらもう次は動けねえだろ」

「っ、でもっ！」

「だーかーら！ でもじゃねーっての！ 駄々こねるな」

アキラは エレンの首筋チョップ。それでエレンは静か？ になった。

強制的に静かにさせたその後、リヴァイ班のメンバーを、グンタを、エルドを、オルオを、そしてペトラを。其々の眼を見た。

「お前らの任務、最優先がなんなのかって……忘れてる訳、ねえよな？ 忘れてるなんて言ったら、説教だぞ。今度はリヴァイが」

「鳥頭なのはお前だけだ」

「うっせ！ 兎も角だ」

アキラは、ひよいとエレンを、ペトラのいる方へと投げた。

無言でエレンを受け取るペトラ。

「こっちは任せろ。だから、エレンの事は任せたぜ？ 直ぐ戻ってくるからよ」

「……それ、もう信じにくい。最初のヤツも、全然戻ってこなかった」

「づ…… だ、だいじょぶだって。今回はリヴァイもいる。潔癖症だし、問題ないっ

て」

問答がこれ以上続くのは宜しくない。

リヴァイは軽くため息を吐いた後に、アキラ同様に全員を見て言った。

「……………コイツのお守が今回の一番の疲れだな。だが、お前ら、悠長に黄昏てる暇はねえ。もう直に追いつかれる。いや、攻撃範囲内に入るぞ。……………お前ら、あのデカいのはオレ達が相手する。これは命令だ。従え」

有無を言わさぬいつもの迫力で命令を下し、そして背後を指さす。

当然、そこにはあの超大型の巨人見えている。

一定の間隔で放ってくる高温の蒸気が迫ってくる。

確かに、時間がもう無い。アキラとリヴァイの力、そして判断を疑う訳もない。それが最善だと言う事も。

意識を失っているエレン以外の全員。最後まで文句の1つや2つを考えていたペトラも例外ではなく、声を揃えた。

『勝利を信じています。兵長、アキラ』

48話

エレンは、目を覚ました。

整備されていない凹凸の激しい道、大きく揺れる荷台の中で、はつきりと目を開いた。そして、瞬時に記憶を呼び起こす。

——何故、自分はここで寝ていたんだろうか、何があったのだろうか、と。記憶がはつきり戻る前に声を掛けられた。

「おう。……起きたか、寝坊助」

「お、オルオ……さん。ここ、は……？」

「もうちよいで壁に着く。……ここまで来たら起きてても寝てても関係ねえ。うるせえから寝てろ」

オルオはそう言うのと視線を前方へと向けた。荷台にエレンと共に乗っていたのはオルオ一人、その荷台の周囲を護る様に取り囲む兵士達もエレンから見える。

「エレン!!」

まだ 混乱が頭の中に残るそんな時に、聞こえてきたのは覚えのある声。

「ミカサ……?」

「大丈夫なの!? 身体、何処も痛くない!」

「オレは、どうして………ツツ!!」

漸くだった。この時漸く思い出す事が出来た。

手を自身の額へもっていく。駄々をこねるな、と初めて叱られた気がするあの時の痛みも思い出したかの様だった。

そうだ。全ての元凶である超大型の巨人があゝ森に出現した。街を壊され、母親も失う切っ掛けになったあの超大型の巨人の襲撃。人類の仇を前にした時に決して臆す事無くただただ前を視続ける兵士がいたんだ。……自分の師であり、最も尊敬する人間の1人。そして人類最強と称される男達が、たった2人である超大型の巨人へと攻め入ろうとしていた。

『バカタレ。オレああん時言っただろうが。『お前らの心臓なんぞ、いらん!』 ってよ。忘れんじやねえつての。お前の為だけに使え、それ』

そう咎められてもエレンはついていこうとした。

せめて一矢報いようと思ったからだ、足手まといにはなりたくないから、何なら道具の様に使ってくれても構わない、と言った覚悟も持っていた。それでも、叶わなかった。首筋に一撃を入れられて、たったそれだけで昏倒し、意識を刈り取られてしまった

から。

エレンは全てを思い出し、ミカサの方を向いた。

「ミカサ!! アキラ教官は!?! リヴァイ兵長は!?!」

「……………」

ミカサは小さく首を振る。

その意味が……最悪なものである、と一瞬だけ想像しそうになったが、直ぐに頭の中で否定した。

アキラは 数多の巨人を蹂躪し、駆逐し続けていた姿を見た。そして明らかに異常な力を持った女型の巨人をも圧倒した。そして リヴァイの実力も知っている。複数の巨人の襲撃をもものともせず、常軌を逸したかの様な反応速度で、正確に立体機動装置を操作、巧みなバランス感覚で自在に宙を飛び回って、……瞬く間に切り伏せた。

力のアキラと業のリヴァイ。そんな2人が簡単にやられるなんて考えたくもない。

「……………まだ、判らない。2人は あの巨人の所に残ってる。……エルヴィン団長に状況を知らせても、撤退指示は変わらなかった。……あの後、巨人も無数に出てきたから。あの巨人を目視出来る範囲から出て…… それっきりで」

説明を続けるミカサの表情は沈んでいた。超大型の巨人は 確かにその大きさ故に

非常に目立つ……が、それをも上回る巨大さを持つのが巨大樹の森だ。目視出来る範囲は、皮肉にもその森のおかげで限られてしまっていた。逃げの一手を取っていた為、悠長に背後を確認出来る筈もない。

燃え上がる巨大樹の森。そして超大型の巨人と女型の巨人。状況が最悪である事は否めないからだ。エレンを第一に優先させるミカサとて、アキラには感謝と尊敬の念を抱いている。何度も何度もエレンの事を支えてくれた姿を見て、特に信頼もしている。

「ミカサ。それにエレンも。……アキラと兵長は大丈夫だから」

「戻ってくるって、アキラと約束した。……あの2人は 人類の矛。力の象徴。……2人がいたら、無敵だよ」

並走しているペトラとイルゼが安心する様にと笑顔を向けてくれている。

でも、どうみても 無理をしている様にしか見えなかった。

聴て——ウォール・ローゼへとたどり着き、門が開く。

鐘の音が響き渡り、最初は歓声に包まれていたのだが、明らかに減っている兵士の数。班の数で4つ程の損害だった。……それはこれまでにない程の被害を出したと言う事実が瞬時に理解出来ていた。

次に目にしたのは怪我人の多さだった。壁外での負傷……意識レベルに関わる重症状態で壁の中まで生存できるほど、外は甘くはない。……だが、それでも大勢の兵士達が壁中へと帰還出来ていた。

そして、何よりも気になったのが——リヴァイ兵長とアキラの不在だった。エルヴィン団長を先頭に進む兵団。分隊長たちは確認出来たのに、あの2人だけがまだ見えていない。

人類は矛を失ったのか……？ と死んだかの様に沈む町民。唯一、声を上げるのは町の子供たちだけだった。

そう——あの日のエレン達のように。

「ペトラ！」

「つ……、お、お父さん？」

進む間に、ペトラに声をかける者がいた。そう、彼女の父親である。

「……………全く無事でよかった。こんな惚気満載の手紙寄越した癖に、帰ってこなかったらどうしようかと思つてたよ」

この痛い程の静けさ。行進し続ける足音だけが響く中で、父親はペトラに語り続ける。

決して、雰囲気を読めない訳ではない。それでも 娘の表情を見て勘づかない親はいない。それでも話し続けた。

「リヴァイ兵長殿に仕える事になつてから良い事だらけだとか、アキラ殿の世話はたいへんだとか。……どっちが本命なんだよ！ 二股してんのか？ つて問い詰めてやろう、つて気分にもなつたが、今は止めとくとするさ。それにオレとしては嫁に出すにはまだまだ早えとも思つてんだけどよ。お前もまだまだ若いんだし。色んな事経験しとくつても悪くねえよな。……あ、ああ これ以上はあんま親^{オヤジ}がでしゃばるのも良くねえか……？」

注目が少なからず集まるのは感じる。あまり出過ぎて 歩調を乱す様な事になるの

もだ。

苦笑いをして、ペトラの傍から離れようとした時。

「お父さん。……ありがとう。……私は大丈夫だから」

親の苦勞子知らず……のままじゃないと言う事だろう。

ペトラだってそうだ。調査兵団に入った時から苦勞と心配を続けているのが判る。判っているからこそ、手紙はかせなかつた。

そして会いに来てくれて、今この瞬間も心配をかけている。

恐らく、平静を装っていてもやはりバレている。表情に出ているのだと言う事が判った。

ペトラだけではなく、イルゼの両親も駆けつけていた。

ペトラの親とは違った対応。それは話しかけるのではなく、ただただ抱きしめる。言葉を交わす時間は殆ど無かつた。隊列を乱す訳にはいかないから僅かな時間だけだつた。それでも強く、強く抱きしめ続けるだけだつた。

この日……帰還した直後と云っていい。エルヴィンを含めた責任者全員が王都から招集を受けた。今回の壁外遠征にかかった費用、そして損害。それらは調査兵団の信頼、支持母体を失墜させたと言う事だ。

それはまるで今までの功績がまるで無かったかの様。

それは　まるで……　壁外遠征など、否　調査兵団そのものを認めていなかったかの様だった。

そして、その日の夕暮。

ひとりの兵士が立体機動装置を用いてウォール・ローゼの上にまで来ていた。

座り込み、夕日が沈む地平線をじつと眺めている。そう——巨大樹の森の方角をじつと見ていた。誰かを待っているかの様に。

「……遅い、よ？ 帰ってくるって約束、したよね。遅すぎる、よ」
ぽつり、ぽつりと呟く。

必ず帰ってくる筈と疑っていない。信じている。だけど、それでも呟き続ける。文句を口に出し続ける。

「そう言えば時間指定……なんで、私はしてなかったのかな？ なんで、私は……」
『直ぐに戻ってくる』それは、ただの口約束に過ぎなかった。

その直ぐと言うのがどれくらいなのか、1時間なのか、2時間なのか……1日なのか、或いはそれ以上……？ 言葉の意味、解釈は本当に難しいとさえ思えてしまう。

「イルゼの時は……、確か あそこで1年間も過すごしたんだっただよね……？ また、それ位は掛かるの……？ リヴァイ兵長と一緒……とは言っても、あの状況で、大丈夫、なの？ ねえ……？ アキラ」

疑う筈もない2人の実力。だけど、それでも此処へと来ていた。来ているのはペトラだ。本当はイルゼと2人で……だったのだが、今調査兵団はたいへんな事後処理に追われている。だから、ペトラとイルゼ2人に抜けられるのは厳しい、と言う事で交代で上に来ていたのだ。しっかりと信号弾、煙弾をその手に持って、今はペトラの順番。

此処へ来ると……どうしても涙が浮かんでくる。止める事が出来なくなってしまう。必死に止めようとした。もう会えない、と認めてしまっている様で嫌だったから。

あの笑顔に、怒った顔に、苦笑しながら困っている顔に。……全部に心を奪われてしまっているから。リヴァイ兵長との喧嘩も恒例になっていて、それが無くなると火が消えた様になってしまおうから。

複雑だけれど、想いを寄せている、そんな人達は多い。誰もが2人の帰還を願っている。

「2人も、戻ってきてよ……戻って、きてよ……」

勿論ペトラ自身も心から。

そして、そんな心配をよそに――。

『はあ……何で俺が色々と担いでこんなデケエ壁登らにやならんのだって話だよなあ。門開けたら早いってのに』

『全員の立体機動装置が壊れた、信号弾も切れた。そのせいだ。それに 散々開門の時の鐘に文句言つてた男の言い草じゃねえな』

『うっせ！ でもだからって、この壁50mマジでロツククライミングさせんのって話だよ。しかも往復?! 十分重労働過ぎだ!』

『……俺もお前を運ぶのに苦労した。以前もな。その辺もちつとは考えとけよ』
『その節はどーも世話になりました!!』

何だか聞き覚えがある声が聞こえてきた。幻聴の類ではないのか？ と一瞬思つてしまった。

いつもいつも訊いてて、傍にるのが当たり前だった。離れるなんてありえないときさえ思つていた。だからこそ 長く、永く…… 感じていた。1日が何倍も長く感じられた。

そんな声がこんなに、……こんなに。

「……ま、正直騒がれるのにはいつも慣れねえし……、でも こそつと戻つてのも限界があるよなあ。色々説明せにやならんし。……とりあえず エルヴィン達にコンタクト取つてから考えんのが一番良いか」

「騒がれるとかそれこそ今更だ。さっさと戻るぞ」

「こんなに——近くに。」

「お?」

「……」

はた、つと目があつた。

ペトラは自分が驚いて固まってしまつてしまつている事を自覚していなかったのだろう。ただただ、目の前に繰り広げられている光景に目を奪われてしまつて、反応が遅れてしまつただけで。

「ペトラ。兵団の皆は宿舎か? エルヴィンに少々話がある」

リヴァイが話しかけるが、やはり固まってしまつていて話が出来てなかつた。

それを見たリヴァイは軽いため息を吐くと。

「俺も、この馬鹿も死なねえよ。……が、少々心配かけたのも事実だ。すまない」

リヴァイからの謝罪の言葉。一体いつ以来だろうか。ペトラはその極めて稀な言葉を買ひ、どうにか帰ってくる事が出来た。

「お、お帰りなさい。兵長。ご無事で何より……です」

「ああ。それで皆は?」

「王都からの招集の通達があり……、負傷兵も多い為、引継ぎ等を行ってから向かうとの事です。……恐らく明後日には、此処を発つかと」

「判った。……………ん」

リヴァイは、それだけ聞くと、そつと身体の位置をズラした。そこには、ペトラにとつての意中の人物がいた。苦笑いをして頭を掻く仕草。変わらない仕草でペトラに近づいてきた。

「よつす。お疲れさんだったな、ペトラも。でもよー、リヴァイだけご無事で何よりよつて少々妬いちまうぞ？ オレだっているのによー」

「からから、と笑う。」

「何にも判つてない、とペトラは強く思う。『妬く』なんて言葉を使う所にも強く。

確かにリヴァイの事も心配だった。それは間違いない。尊敬する人。調査兵団に入ったのも、エルヴィン団長が、そして、リヴァイ兵長がいたからだ。

いつしか、それらの気持ちを大きく上回る様な感情を持った。その感情を向けられた相手が出来た。……それがこの目の前の男……アキラだった。

「でもまー、俺も一応言つとくよ。心配かけたな？ んで、王都招集の件……だけど、どうするってんのかねえ。……エレンの引き渡し？ エルヴィンの失墜？ それか、俺使った人体実験でもすんの?? まー、ロクでもねー事だろってんのは、判るが、俺も一

緒に戻って聞いてみるk「ツツ!!」!

その時だった。

弾かれた様にペトラは動く。止まったままの時計の針が動き出す様に、止まった時間が動きだす様に、射られた矢よりも、放たれた弾丸よりも早く、ペトラはアキラに向かって飛びかかった。

「この、ばかああああ!!」

「うおっつ!」

「しんばい、しんばいばっかかけやがってええええ!!」

乱暴な言葉使いになる時のペトラが素が出た時のもの。

あの壁外で 木の上から飛びかかってきた時の奇声とはまた違うが、それでも感慨極まった時、極まりに極まった時、顔を出す。

そしてペトラの脚に籠る力はこれまで以上。突進し、アキラの腹部に抱き着く……と
言うよりは衝突。

「ぐはっ!」

鳩尾頭突きはそれなりに強力。おまけに両腕で胴体を掴みこんでるから衝撃を後ろへと逃がす事も出来ず、更に足場が悪い。足場の面積が小さい。更に更に、ここは壁の上。アキラの後ろは、壁の外。

つまり、あまり突然正面衝突されると、必然的に後ろへと下がってしまう。もう足場がないのに、そのままぼーんつ、と放り出される様に、2人は宙を舞った。

「……………はあ」

「……………」

その様子を冷やかに見つめるのは リヴァイ。

そして——もう1人 傍にいた。

面白くなさそうに、ただただ一瞥しただけで顔を背けるのだった。

49話

「いやさ、まさに『ぬわーっ！』な感じだったわ。高さにして約50mだったけかな。壁の天辺からまさかの唐突な紐無しバンジー……。あー、うん。あの時イルゼに悪い事したかな？ って今更ながら思ったよ。アレもいきなりだったし。……流石にオレでも肝冷えるって判った瞬間だったわ」

「あーっはっはっは！ それはそれは災難だったねえ。今回もアキラが悪かった！ って済ませたら良かったのにねえ、って言いたいんだけど、あの時はリヴァイもいたから、ペトラにとつてもそう言う訳にもいかない、だよなー」

「って、なんでそーなんだよ！ リヴァイがいるからだけでなんで！ このクソメガネ！」

「……おいコラ。遊んでねえでさっさと話を元に戻せ。馬鹿ども」

兵団宿舎にて 尋問？ ならぬ報告会を行っていた。それは勿論壁の外での出来事についてだ。色々端折ったりはしておらず、ちゃんと事の顛末まで説明している。今回はアキラだけでなくリヴァイも一緒だったから説明がある意味し易いと言えるだろう。

説明するのも大変だが理解してもらおう事も今まで結構大変だったから。

「あのデカイヤツ。結論から言えば逃げられた。あの熱い蒸気。熱さもそうだがその発生量も厄介だ。女型に巨人どもが群がって出来た時の比じやねえよ。それに好戦的かと思いきやケツまくって逃げた所を見ると、随分と臆病らしいな」

「……そりゃ、キミたちに追いかけられた日にはね。下手したら人類の仇だつていうのに同情しか湧かないよ」

「いやいやハンジ分隊長さん？ お前さんは巨人LOVEなんだし、常にそっち側だろ。何今更まともな感性で話してんだよ」

「あはははは。私だつて時と場合によるさ」

超大型の巨人、その中身に逃げられたのは正直痛手ではあるが、収穫0と言う訳でもなかった。

「それで、戦^やつてみた感想はどうだった？ 2人とも」

ハンジは両手を組なおし、視線がやや鋭くなった。

普段のふざけた様子は息を潜め、ここからが本番だと言わんばかりだった。真面目な時は真面目である事は2人とも勿論知っている。

「《鈍い》《デカイ》《熱い》これに尽きる。嫌な三拍子だなこりゃ」

真面目な雰囲気をハンジは作ったのに、少しも考えず、読まずノンストップで答えるアキラ。流石のハンジもこの返答は考えてなかった様だ。

「……いやさ、もーちよつと具体的にしてくれると助かるんだけど」

ずるつ、とコケそうになるハンジ。それを見たアキラは少々溜飲下がる思いなのか、軽く笑みを見せた後更に続けた。

「森ン中や、町ン中、……まあアレだ。燃えやすいもんがあるトコじやあんまやりたくねえのが素直な感想。アイツのは高温過ぎて燃えるもんだつたら 自然発火するレベルだった。あー、後アイツと直接的な力比べはしてねえから、力具合は何とも言えねえな。……ん、でも図体と腕力。と言うか図体と臂力は比例すると思うし、エレンくらいの体格の巨人、つまり15m級の巨人がアイツに向かっていったとしたら、文字通り、吹っ飛ばされるんじゃないか？ まともに正面からぶつかればだが。15mに50m。単純に3倍以上の体格差あるし」

「ああ。ハンジ。お前も見たと思うが、立体機動装置を使って接近戦をするオレ達調査兵团とアイツは相性最悪だと言える。……コイツがいなかったらヤバかったかもな」

「そりゃ戦^やりようだろ？ あの蒸気、ずつと出せるとは思えんし」

珍しいやり取り、と思えるが それだけ真剣であると言う事だろう。

現時点で 壁の門を破壊出来る巨人は、あの超大型と鎧の巨人の2体。その内の1体の話なのだから。

「ふうん。……つまり、話を纏めると、——決してやれない相手じゃない、って結論で良いんだよね？ アキラ。それにリヴアイも」

「正面からくりや幾らでもやれる。あの蒸気の対策っつーか、対応は出来るし、試した。……でもなあ、ああも逃げの手を取られたら正直キツイし面倒だ」

「ごろつ、と椅子の背にだらしなく体重を預けたアキラ。面倒な部分があるのは それだけではないから。」

「最も厄介なのはアレだ。アレが巨人に変身？ する時の衝撃。デツカイ爆弾みたいなもんか。アレを町の中でやられるのも勘弁して貰いたいね。アイツが出てきた時の空気の震えに衝撃音、その後の火災の範囲と規模。まあ 推定、体感だが 蒸気発してた時の4〜5倍以上の高温に加えて爆弾みたいな破壊力。傍にいたら 燃えるだけじゃ済まん。一瞬で消し炭だ。……だから 誰がアイツなのか判らん状況で、迂闊な事できねえ。——ストレス溜まるわ」

「だが、気配を殺し接近するのには、建物や森は有効だ。初動を抑えるのは確かに厳しい。……それに来られて困る場所には来るもんだろ。その点はエルヴィンに伝えとけばある程度考えてくれるだろうよ。頭を使うのは本来はアイツの役目だ」

「だよなー。……頭使うのは身体動かす以上に疲れるし」

「そつか。ありがとね、2人とも。色々と対策を講じる必要性は大だね。エルヴィンやピクシス司令にはその辺りを強く言っておくよ」

アキラは頭の後ろで手を組んで、その後目を閉じた。ササつとハンジは紙に纏めていく。それを一通りし終えた所で走らすペンを止め、視線を下にしたまま続けた。

「……それで、彼女は今後どうするんだい？ なにか聞いてないかい？ アキラ。今は地下牢に幽閉してるけど」

「……………」

「確かに、あそこが一番頑丈だし、一番地下深い。……あそこで巨人になったとしても、ある程度縛れるから、アキラだったら十分対処は出来ると思うけど。常に一緒にいるとは限らないし、看守つけても意味ないと言うか、近くに行き過ぎると危ないからね」

目を閉じていたアキラだが、ぴくつと瞼が一瞬だけ痙攣したかの様に動いた。彼女の話題を訊かれたからだ。

「ああ。……アイツなら大丈夫だ」

「え？ どういう事リヴァイ」

「簡単に言や コイツが大見得きつて口説いた」

リヴァイの言葉に目を丸くさせるハンジ。

いつもなら、この辺りで口ケンカ？　と言うか小競り合いの様なのが発生するんだが今日は大人しかった。と言うより聞いてなかったのかもかもしれない。

「それはそれは高威力だっただろうね。アキラに言われたら」

「はあ……。まあ　リヴァイの言う通りだ。　アイツなら、ア二なら多分大丈夫。……だから情報操作の方頼む。いきなり憲兵の方で人一人いなくなったら、それなりに問題になるだろ？　如何に杜撰でもよ。……新人の中でいい眼してた奴もいたしな。優秀だったア二をどうにか調査兵団に引き抜いて、それで応じた程度でいいと思う。奇怪なヤツだな、とか思われるかもだが……。ア二なら大丈夫だろ。元々目立つ方じゃなかったし。サボる所はサボってた奴だ。バレない様にすんのも難しくないだろ」

アキラはそう言うと言とうと席を立った。それを見たりヴァイは　何処に向かうのかは直ぐに判った様だ。

「二応、上の連中にはお前の我儘、とも伝えてあるそうだ。最後まで自分のケツは自分で拭けよ」

「わーってるよ。正直にいやあ色んな感情まだ整理しきれてねえけどよ。その辺は割り切ってるつもりだったの。それに我儘聞いてくれた礼はしーっかりするって　ピクシスのおっさんにも伝えと伝えてくれよ。今度外で牛とか鳥とか食べそうなモンも取ってくるからよ。酒の肴になりそうなもんも、な」

アキラはそう言うに出ていった。

その後ろ姿を見送るハンジ。

外に出ていったのを確認した後で、今度は軽くため息を吐いていた。

「やっぱり全然割り切れてないね。あれは」

「……だろうな。アイツが感情を完全に殺せる程器用じゃねえ事くらい判りきってるだろ。……まあ、ひとりで突っ走らなかつただけ成長したとは思っているが」

「うん。まあ、私も判ってるつもりだよ？ 前は暴走するくなんてしよっちゆうだったし。なのに今はあんまり無いからさ。——但し、巨人との戦闘時は除く……って感じだけどね」

怒りの感情を盛大に向ける事の出来る巨人との戦いでは、怒りのままに巨人を吹き飛ばすから、辺りの巨人が一掃される事が多い。だからと言って手放しに喜べる状態ではない。怒りの感情に身を任す程の事が起きてしまったと言う事だから。

「それでも、よくやってくれたよ。リヴァイと一緒に帰ってきた時、街の皆の前に出るなんてさ。街の皆に対する帰還報告^{デグリーフィング}。……絶対にそんな気分じゃ無かつたくせに。責任感も人一倍あるって言うのもホンット、可愛い所だよ。街中が騒ぎ出して、そそくさ

逃げちゃった所もさ」

「ハンジにんな事 言われたら、それだけでも一目散で逃げるな。……アイツだったら」
リヴァイは、軽く含み笑いを見せた後に、入れたての紅茶をそつと口に運んだ。
そんなリヴァイを見て、ハンジは思う。

それは 何だかんだと口悪く言い合っても、子供の様なケンカをしたとしても、リヴァイが笑うのは、アキラ関係が圧倒的に多いと言う事。

調査兵团宿舎・地下牢。

この地下牢はエレンが投獄されていた地点よりも遥か深くに作られた特別製の代物。

その必要性を考えて指示を出したのがエルヴィンだ。少々急ごしらえな所はあるが、強度も十分。何より地上から遙かに深い位置にある為、大地そのものが堅牢な壁となっている。

寝る間も惜しみ建設チームが昼夜問わず交代制で作り上げた場所。エレンの巨人化能力を用いた実験で、エレンの様に巨人になれる人間がいた場合、やはり地下に追い込むのが最も効果的だと結論が出た。

身体が10倍程にまで膨張する為、例え巨人になつたとしても、狭い地下であればそのまま身動きさえ取れず、拘束する事が出来るからだ。……傍で巨人化されてしまえば圧死してしまう危険性もある。

そんな場所に二つの影があつた。

「ここに來れるのは今んとこ オレだけ、つてか。エルヴィンも嫌な決まりを作つてくれたよなあ？ 此処の殺風景な所も気が滅入るつてもんじゃないか？ アニ。鎖が無いただけエレンの時よりはマシだと思ふけど」

「……そろそろ來る頃だとは思つてましたよ」

片方は勿論 アニ。

今回の襲撃の犯人。女型の巨人の正体。

《女型の巨人Ⅱアニ》である事実は伏せられており、限られた者しか伝えられていない。

それは勿論、同期である104期生たちにもだ。勘付いた者はいる様だが正確な情報は出回っていないのが現状だ。

そして、この場所の存在さえも知らない。

「でも、やーっぱ意外だな」

「……?」

「何が? って顔、アニでもすんだな。……ってか マジでわかんない? オレが何で意外っていったのか」

「私には相手の心を読む様な能力は持ち合わせていませんので」

アニとのたった数度のやり取り。街に帰還した時から時折アニに感じていた事があ

る。

『この人だれ?』と。比較的何度も。

アニは、いつも不愛想な印象が色濃い。同期達にも自分から率先して喋ってる姿は極めて少なく、エレンやライナー、ミカサ達の組手を見た時は 珍しいものを見た、と少しばかり驚いた程だった。それに、壁外遠征でもそうだ。何度かアキラはアニに話しかけてはいたが、僅かな反応が返ってきただけで、まともに会話していない。会話が成立

していない。

なのに今はどうだろう。話しかければ返ってくる。表情こそは変わらないが、それでも今までに比べたら天地の差。

「よく話す様になつたなあ、と思つただけ。これ以上無いだろう？」

「……別に、普通じゃないですか？」

「まあ、受け答えくじや普通つちや普通だけど。オレの周りもつと騒がしいの多いし。んでも、以前までとキヤラ違い過ぎるだろう？ 格闘技見せてる時以外感情見せてなかつたし、なーに考えてんのか判んなかつたし。——ま、オレとしてはそつちの方が良いと思ふがな」

アキラがにつ、と笑つて見せると アニは頭を軽く下げため息を吐いた。そして視線を下にしたままポツリと呟く。

「……の方が判らない」

「あん？ なんだつて？」

アキラの表情を見ないままで、アニは声量を少しだけあげて再度言つた。

「私は、貴方の方が判らない、と言つた。……全然、判らない」

「……？ オレが判らんつて？ でもま、それこそ普通じゃねーか。結構長いとは言え、あくまで教官と生徒、つて感じだつたらうし。ツッコんだ話なんざしてねえし」

当然、と言いながらうんうん、頷くアキラを見て 更に言う。言い続ける。

「私は女型の巨人だ」

「ああ、そうだな。後付けて言われるかもだが、最初見た時から何となく似てる気はしてたよ。髪型とか」

「……私は貴方を攻撃した。襲った」

「あん？ あー、そうだな。んでも、攻撃ゼーんぜん効いてねぇぞ？」

「……私は」

アニは少し俯かせる。

今までの告白に対して、アキラは何でもないと、言わんばかりの反応だった。……だが、此処から先に言う言葉は、アキラの事を少しでも知っていれば、どんな反応を見せるか 判りきっている事だ。

だけど、アニは言わずにはいられなかった。

「私は——アンタの仲間を沢山ころし——」

最後まで言う事は出来なかった。最後の一文『ころした』の『た』を言い切る寸前で、周囲の空気が一気に張り詰めたからだ。ピシッ！ と壁に亀裂でも走ったのか？

と思える様なひび割れる甲高い音の様なのが聞こえた気がした。

それと同時に心臓の脈打つ音も聞こえてくる。高鳴るのは自分自身なのか、或いは目の前のアキラのものなのか判らない。

その体感は一瞬にしてほんの一瞬の刹那の時間だった。最後まで言い切れなかったア二は視線を元に戻す。先程まで表情がハッキリと見えていた筈の男の顔が見えなかった。どす黒いナニカに覆われている様だった。

そのナニカの中から、声だけが聞こえてくる。

『それだけは絶対に許さん』

50話

『絶対に許さん』

そう一言いっただけだった。

アニにとつては、それだけの返答で充分過ぎた事だろう。強く思う事が出来たから。改めて思う事が出来たから。

——やはり、この人は、私を終わらせてくれる存在だ。

そう思えたから。

アニはこの残酷な世界で生きてきた。

息をすれば内から肺を焼かれる様、目を開けばまるで砂を捻じり込まれる様。何もせ

ずとも常に苦痛を伴うそれはまさに生き地獄。

全てを否定したい気持ちで、この世界を生きてきた。

そして長く生きれば生きる程、身体を蝕まれる気がしていた。

戻るべき故郷はある。——だが、帰る事は出来ない。

そんな中で、壁の中の生活で 夢中になれる男に出会えた。

全てを受け止めてくれる男に出会えた。

——私は この人に私を裁いてもらいたい。……全てを終わらせてもらいたい。

それだけがアニの思いだった。

切っ掛け、元々思っていた事だが 真に想うようになったのは、アキラが別の世界から来た、と告白されたその時からかもしれない。

あれだけの事をしたと言うのに、仲間を殺したというのに、咎めなかったと言って良い。 牢に入れられたとは言え 食事もあり灯りもあり、縛された訳でもないのだ。

そして初めて今——味わった事の無い巨大な、強大な殺気に身を晒された。感じただけで死を意識する程の十二力を見た。

これから、終わるのだろう。と アニは確信して 目を瞑ったその時だった。

「——だがな、アニ」

声がまた聞こえた。許さないと云った後 長く長く感じた沈黙の後に発せられた言葉。アニは反射的に眼を開いた。

そして、漸く アキラの表情が見えた気がする。アキラの表情を覆っていた黒い霧^{ナニカ}が、まるで晴れた様だった。

見えた表情は普通なもの。いつも通りの彼。……その中で やや真剣さを含んだ表情だった。

「オレは、お前を否定したりしねえぞ」
「……………っ!？」

心の内を、願望を覗かれた気がアニにはした。否定しない。存在を否定しないという事だと判った。つまり、殺したりしないう言っている様に聞こえた。

「……お前は、お前の存在はあいつらの戦果そのものだ。あいつらは命賭けて戦い、そして、死んでいった。オレの時もそうだ。どいつもこいつも 幾ら要らねえって口で言っても心臓捧げるっつって闘うんだ。それでオレに託すって言って死んでいった。その

結果が女型の巨人の確保で、お前がここにいる。幾らオレが許さんって言った所で、あいつらの戦果そのものを否定するも同然な真似、オレは絶対しねえ。……あいつらの戦いを、存在のそのものを否定するようなもんだろ、それ」

「……でもッ」

「わりいけど、お前にとつちや生き地獄かもしれねえが、当分はそれ味わつて貰うぜ。

……簡単に逝かせるかよ。楽にさせねえよ」

此処でアキラは、ふつと力を抜いた。何処か笑った様にも見えた。

許さないという気持ち。だが、それでも理屈じやないモヤモヤした気持ち、殺したくないという気持ち。怒りが支配する心。赦す心。様々な感情が渦巻いているのがアニも判る。

彼の唯一無二の弱点と思っていたのが情であるとアニは思っていた。

何故なら誰よりも何よりも強い男は、誰よりも何よりも優しいから。一度でも情が向けば、それはまるで呪いの様に解ける事の無い鎖になると。

だが、それも完璧ではないだろう。仲間を守る為であれば意図も容易く解ける。

仮にどうにか外へ出て 急襲する。アキラを狙うのではなく調査兵団の皆や町の住人を襲おうとしたら、アキラは恐らく躊躇う事なくアニを止める^{殺す}だろう。

そう、アニが望む通りに。

でも それは出来ない。……する事を身体そのものが、否 心が拒否するから。

巨人に成る為の条件には強い意思の力が必要。つまりは今のアニには不可能だった。

「それによお、アニ。オレは。いや オレ達はになるんだろうな。お前らの事知らなさすぎる。お前の事も、巨人の事も。……ここの外の事も。お前がただの快樂殺人者。巨人になって暴れ回る。人食いつつう性質の悪い災害程度だったらもつと楽だったんだけどな。……だが、物事ってヤツはそんな単純じゃねえだろ」

「……………」

「まあ、直ぐ教える、なんて言わねえよ。アニの事は一応オレが一任されてんだしな。気長にいくさ」

アキラはそう言うと言を上げて、背を向けた。

アニは まだ何か言いたい事があったし、話したい事だつてあったかもしれない。それでも、何も言えなかった。その背を見送る事しか出来なかったんだ。

そんな時だ。

「ああ、アニ。……今日はこれが最後だ。最後に一つだけ聞かせてくれ」

アキラは立ち止まった。

決して振り返る事なかったが。

「……なん、でしようか」

「アニ。さつきだ。オレがお前の事 許さんつつつた時」

そう言つたと同時だつた。

アニは、また見えた気がした。

『……………オレを見たか？』

□□ 調査兵団宿舎 □□

場面、そして 時間軸はかわり アキラ達が帰還して3日目の夜。

直ぐに中央への招集は確かにかかつてはいたのだが 延期になった為、比較的ゆつくりと準備する事が出来るようになった。

その理由として リヴアイ兵長とアキラの帰還に加えて、巨人に対する秘密の根源に迫る情報と言うとてつもなくデカイカードを得たから。

おかげで 調査兵団は失墜する事はなく、首の皮一枚で繋がるか？ と内部で心配していた声もあったのだが、全くの杞憂となった。切れかかった首、と思われていたのが完全に接着してしまったとも言える。

実を言うと、ただで済んだ訳ではなく、伝令を伝えに来た中央のお偉いさんの使いっばい連中がやってきた事があった。

ねちねちと責める様な言葉を頂き、更に調査兵団を処罰する云々。今までの成果、ウォール・マリア内での調査等も全く関係ないらしい。町民の支持も得ているのだが、それも関係ないとの事。

いい加減腹が立ってきた自称気が短い男であるアキラはと言うと、妙に笑顔だった。話を訊いている間も笑顔だったアキラは、最後までその笑顔のまま、一軒家の一つに《無言笑顔パンチ》をした。

それが延期の最大の原因……らしい。

後々綿密に精査するとぼそつと言った様な気がした。

(因みに、ぶつ壊したのは元々取り壊し予定だったボロ家。入念に調査済みである)

つい最近まで人が暮らしていた一軒家。それを どかんっ！ と一発吹き飛ばして瓦礫の山にしてしまった光景を目の当たりにして、『と言う訳で、お前ら中央に連行なきびきび歩けい！』と誰が口に来ようものだろうか。

勿論 その後調査兵団、何か気に喰わん！ な態度だった男達は途端に 青ざめて動けなくなった。

そんな中で 唯一一人だけ。一緒に来ていたピクシス司令だけは違い、堪えきれん、と言わんばかりに腹を抱えて笑いだし、その笑い声が響いた。

それは殆ど 王都の連中のみの修羅場だったという話。

「んで、なーんでオレ、床に正座させられてんの？」

「きつちり説明してもらおうわよー って事だよ！」

「いやいや、まず正座させられる意味判らんって話だつて。オレの方がその説明求めるわ」

そして、調査兵団の会議室に利用している一室。

何故かアキラは床に正座をさせられていた。

色々日々忙しかった、という事もあつて ヒヤリングの類は出来てなかったりするが、問答無用で正座させられるのが意味判らない、とアキラは首をひねりにひねって首を痛めていた。

「はあ、正座は兎も角 アキラ壁外ん時に言つてたろ？ お前さんの活動時間制限の件だ。活動時間。オレらは それを見越して、訓練を積んできた。いざつて時にお前を回収できる様にする為の訓練もな。……別に信用されてないとか、もう信用出来ねえとかは言うつもりはないが、やってきた事を一気に覆す様な発言されりや、戸惑うのも無理ないだろ？ 幾ら色んな意味で 飽きさせないアキラだつてもだ」

「あー……、そりや、そーだよなあ……」

「忘れてた、つて面してないか？」

「してねーよエルド。オレも話そう話そうとは思つてたんだぜ？ これマジで嘘じゃね

え。……でもまあ、ちゃんと話してなかった所は悪かったって思ってる」

先程までの雰囲気が変わる。

「あんな場面でいきなり言われて混乱しなかっただけマシと言えるが、その辺考えて行動してもらいたいもんだぜ？ アキラ」

「口調が似合わないって連発されたからって、今度は声色を似せようとしなくてオルオ。心底気持ち悪いから。今はまじめな話してるの」

オルオを一蹴してペトラが前へと出た。

「話してアキラ。リヴァイ兵長たちも来た様だし」

きい、とゆっくりと開く扉。

開いた先にはペトラが言う様にリヴァイ、ハンジ、そしてエルヴィンがいた。

「エルヴィン。王都にはいつ行くんだ？ ってか、今回はオレ連れてけ。ぜつたいにな」

「決して暴れないと誓うのならな。今回の件。溜飲下がったのは事実だが、事後処理が頭痛の種だ」

「更地にする予定だったんだし、良いだろ？ それと暴れくりに関しちや相手側の出方に

よるな。あんな連中がまた来る様なら、今度は笑顔で手を差し出して握手だ。念入りに」

「もう勘弁してよアキラ。後始末大変なんだから。それに絵的にも気持ち悪いかもしれ

ないよ？ そんな情熱的に握り合うなんてさ」

「おう。安心しろよ。お前さんの巨人愛を延々聞かされるよりは楽だと思うからにゅあっ!？」

話が逸れそうなので、ペトラはアキラの頬を挟み込んだ。

ぎゅぐゅと力を込めて、口許がひしやげる。

「にやにすんふあひよ、ふえとふあー!」

「……………」

「ふあーつた。…………ふあかつたから」

誤魔化せる雰囲気ではないな、と判断したアキラ。そして 目の色が変わった。それをペトラも感じ取れたのだろう。挟んでいた手を放し、ややアキラに距離を取って座った。

アキラを先頭に扇状に座る面々。皆がアキラの返答を待っていた。知らない者達は。

「あ………… あの時言った事は全部マジだ。オレがオレじゃなくなる。マジでやってたら特に顕著にな。厄介なモンを飼ってるみたいなんだわ。オレん中だな。——一応言っとくけど、真面目な話だからな」

「真面目に話せ。頃合いだとは思っていた所だ。…………んなに時間が掛かる事なんざ無かつたからな」

アキラの話については、同じ班内のメンバーでさえ知らない事だったが、リヴァイは知っているのだろう、とペトラは思っていた。いや、リヴァイだけでなく、恐らくエルヴィン団長やハンジ分隊長もだ。

ちらりと視線を向けたと同時にハンジが口を開いた。

「あはは。まあ、いきなりそんな突拍子もない事言われたってー、だよなあ。こんな感じ。アキラと知り合ったばかりの頃のヤツだよ。戻った気分かもしれないよ？　言う事もそうだけど、やる事だつてぶっ飛んで滅茶苦茶だし」

「……なんでだろうな。ハンジに言われたら猛烈に色々否定したくなんだよなあ、割と本当な事でも」

アキラは頭を一頻り掻き毟った後に、一度大きく息を吸い込む。その後2〜3秒程だろうか、息を止めた後に全てを吐き切った。

空気が全て抜けたのを確認したかの様にもう一度吸い込み、言葉と共に吐き出した。

「……力そのものに呑み込まれそうになる。とも言えるか、この変な力のな」

アキラは、そつと拳を握りながら続ける。

「まーあれだ。リヴァイじゃねえけど、リスクも無しにゼーんぶを得ようなんて虫の

良い話は何処にもねえって事だな」

拳を開いた時にはもう笑顔を見せた。問題ない、と言わんばかりに。だが 簡単に信じられる程単純な話ではない。

そもそも、そんなに簡単な話なのであれば、黙っている理由がわからないから。

安易にもらせられないだという事は判る。先の大規模遠征での捕獲作戦も秘匿にされていた様に。アキラの力そのものも十分その対象なのだろう。変に敵側に知られたとなれば……、知られたとしても どうなるか判らないか。

「それで 時間を超えて、限界を超えたらどうなるの……？」

単純な話ではない、が、まずは最も重要な所。全てと言って良い所をペトラは切り出した。

今何よりも重要だとペトラが思っているのは、その力を使い過ぎると本当はどうなってしまうのか、だ。

以前までは、『身体能力が低下する』『生身の人間になる』としか聞いてなかった。

そして、ペトラ以外の全員も同じ気持ちなのだろう。グンタやエルドは何かを言おうとしたのだが、押し黙り、オルオも視線を完全にアキラの方へと固定したから。

全員の視線を感じ取ったアキラは 続けた。

「んん……。あの時言った通りなんだよなあ。恥ずかしい言い方だが。感覚の話で実際

そこまで突っ込んだ訳じゃないから、確信はねーけど、……オレがオレでなくなる。あー、やっぱ すっげえ恥ずかしい表現だな。言いたかねえんだけど、マジっばいんだよコレ。だから 意識保つギリギリでやってた。時間じゃないし感覚だから明確なのは判んねえ。だから それっばい時間をハンジやりヴァイと協議して、……決めた。話さない所も含めて」

『決めた』という言葉を訊いた途端に、雰囲気agaraりと変わった。

いつも通りの成りは息を潜める。恥ずかしい話、と半笑い、更に僅かに紅潮していた顔さえ一瞬で元に戻った。

そして、メンバー全員の顔を一頻り見た後に、改めて深く頭を下げた。

「黙ってて悪かった。理由は どうであれ オレもお前ら全員を騙してたも同然な事だ。……すまない」

必要だったとはいえ、騙していた事には違いないだろう。命を預け、預けられる程に信頼していたし、されていたとアキラも思っている。

——心と身体の安全。両方をこの調査兵団の皆からは貰ったとも思っている。

そして今回の一件で僅かでも信頼に亀裂が入ってもおかしくない。信用をしていなかった、されてなかったと思われてもおかしくない。

例え、リヴァイやハンジ、エルヴィン団長の指示だとしても 僅かにでも、ほんの僅かにでも心の中にしこりと言うものが残つても不思議ではない。口では言つても、何かほんの些細な何かを残してしまつたかもしれない。残さない、なんて言えないから。

そして、そんな僅かなしこり、そしてほんの少しの歪でも アキラは良しとはしない。それにリヴァイやエルヴィン団長が 今回の生け捕りを仲間達に黙っていた事とは違ふとも思っている。100%自分事の話なのだから。

口には決して出さないが、皆の事がそれ程までに——だから。皆は——だから。

頭を下げるアキラの前に立つペトラ。表情は険しいままだつた。そして、目の前にペトラがいる事を頭を下げ、見えていないアキラも判つた。

「……………えいつ!」

だが、次のペトラの行動だけは予想できなかつた。

ペトラは、いつの間にか笑顔だった。笑顔のまま 頭を下げたアキラの頭にチョップをしたのだ。

「なーに今更そんな顔してんの？ 今までアキラはどれだけ私達の事心配かけてきたと思ってる？ ほんと今更だよ」

につ、といつものアキラの様な笑顔を近付けた。

「何考えてるのかは 大体判るよ？ まーったく、こーんな時だけ深刻な顔して。もつともつと危ない所で私達の事を頼ってほしいって思ってるのに」

ペトラは両手を広げた。

「私達が怒るのは、アキラが1人で無理し過ぎるトコだけ！ 全部背負おうとするトコだけ！ それだけ頭に入れといて。次はもつと痛いのお見舞いするからね」

呆気に取られたアキラだったが、ゆっくりりとペトラの言葉が脳の奥にまで響いてくる。

漸く言っている意味を理解した所で、同じく表情が戻り、小さく笑みを見せた後『……おう』と一言返すのだった。

その後、散々からかわれたが、それも自分のせいだとアキラは半ば自棄になって受け入れてた。

話の話題は『力に呑まれる』と言って話題だ。

「どんな感じなんだ？ まあ、想像く程度は出来なくもないが、実際に本人が感じてる感想ってヤツを訊いてみたい」

「だな。こんな無茶な話を真面目に出来るのって、コイツにくらいだし」

「やかましいわ！ 傷口に塩ばつか塗りたくってんじやねえ!!」

力の事に関して聞いている筈なんだが、話が逸れそうだ。

「もう、真面目に聞いてよ。ほら、アキラどーぞ」

「ぐええええ！」

「ぐおおお！」

ひよいっと オルオとグンタの襟を引っ張って話を戻すペトラ。

それを見たアキラは苦笑いをしながら続けた。

「……あー、なんていやー良いか……。うん、アレだ。酒あるだろ？」

うんうんと、考えてたどり着いたのは、酒の例え話。

つまり飲み過ぎるとどうなるか？ と。

「飲み飲んで、更に飲み過ぎると酔っぱらって、どーなるか判らん様になるだろ？ ほ

れ、特にオルオ。オレに吹っ掛けといて、早々に潰れて大暴れ。最後は便所ン中で爆睡。あー、あん時は後始末大変だったよなあー」

「う、うるせー!!!! よけーな事思い出させんな!!」

「とまあ こんな感じ。あの酔っぱらって 頭ん中がハイになった感じ。んで、力に酔っぱらうと、酒の10〜20倍くらい? はヤバくなる感じだ。ま、オレはだが」

「……そ、それはきついわね」

酒を使った例え話は 思いの外全員によく伝わった様で、結構渋い顔をしていた。宴の際に浴びる程飲まされる機会も決して少なくなかったから、より理解してもらえたのだろう。

そして改めて方向性は決まった。

「ま、アキラにあんまり無理させ続けないく って方針は変わらないって事で良いかな? 皆。基本的にはアキラの自己申告だが、表情には出易いし、止めれる所は止めるで」
「そうだな。それに何だかんだ言ってたけど、結局は変わらないんなら、別に良かったよなあ?」

「ま、珍しい絵が見れたし良かったわ。ある意味アキラ説教モードん時よりも」

「うっせ!!」

「あの一……私も思い出してほしくないから。それ」

決まったのを見届けたリヴァイとハンジは、一歩前に出た。

「……それでアキラ。アニ・レオンハートから何か聞き出せたのか？」

「そうだよ。結構2人で話してたよね？ 何か聞き出せたんじゃないの？ まさかお楽しみでしたね？ なーんて事するとは思えないし」

リヴァイは兎も角一言余計なハンジ。

一瞬ペトラから凄まじい怨念に似たナニカが飛び出そうな気がしたが、アキラの方が早かった為、それは消失。

「ああ。かなり興味深い話、聞いたよ。……アイツが何処で知ったのかは知らねえけどな」

ペトラの嫉妬と言う名のナニカが消失した理由。

それはアキラの表情にもあった。何処か怒りに似た何かが孕んでいるその表情に。

「わりいけど ハンジ。……ローゼの壁の上に呼んで欲しいヤツがいるんだけど 頼めねえ？」

51話

50mの高さの壁。人間の世界を囲い、外敵から守ってくれる唯一の砦。

そして その上から見る景色は、思いのほか美しい。壁の外側に人を喰らう悪魔の様な巨人が蔓延っているのを忘れさせてくれる程に。

ここからの眺めは、この世界が以前までいた世界とは程遠い場所である、と認識を改められた場所でもあった。太陽があり、大地があり、広大な自然が広がっており、その中での巨人達が蠢いているのだから。

そして今、外にいる巨人達は ある意味では立場が逆なのかもしれない。

見つけられたら、即座に殺されるのだから。

巨人には怖れも怒りも悲しみもない。人を見つけたら殆どの行動が襲い喰らう。故に逃げようとするしない。そんな気すら起こらない。ただ愚直に喰らう為に進み続けるのだ。

その愚直に進み続ける巨人を屠り続ける者が壁の上にはいた。この巨大な壁よりも強固で、どんな刃よりも鋭く、どんな砲弾よりも強力な男。

「つたく……、もーちよつと怖れつてのをしつててもらいたいもんだ。そういや イルゼン時の巨人はちよいと話せたらしいし」

もう 何度目になるだろう。

アキラは 何度か地上へと降りていた。勿論壁の外側、巨人が支配する側にだ。とある理由で壁の上に来た。そして 外を見ていると時折姿を見せるのは巨人だ。壁に近づくと巨人を例外なく葬り続けた。

そしてその姿は、まるで動いていないと落ち着かない、と言わんばかりの様子だった。

だが 以前までであれば、巨人を見掛けたからと言って直ぐに行動したりはしなかった。普通の巨人は壁を越えてくる事は出来ないからだ。

ウォール・マリアの崩壊。そしてシガンシナ区への侵入。それらの事実もあり、なるべく巨人を見掛けながら 即殺処分するとアキラの頭の中では決めていたのだ。

身体を動かし続けながらも考える。犠牲者を少しでも減らす事を。

巨人の絶対数は判らない。例えば星の教程いるかもしれないが、それでも 少しでも少

なく、少しでも、その巨人の餌食になる人間が出ない様にと。

「おい、アキラ」

「ん？ おお リヴァイか。……ひよつとして ハンジ達も来たか？」

「ああ。……今引つ張り上げる所だ。呼ぶのに苦労した。相応の成果を求めるぞ」

「コラコラ睨むな威嚇すんな。確かにアニは敵側かもしれん。……が、オレの教え子でもあるんだぞ。信じてやれ。つつーか、嫌でも信じる様になる。——オレ自身がそうだったんだ」

「その説明を最初にオレ達にとつととしてりや、悩む必要も無かったんじゃねえのか？」
「……そりや ごもつともだな。まあ もう来ちまったようだし、しゃーねえわ」

上にあがってきたリヴァイ。アキラと話をある程度した後、その視線を変えた。

その視線の先にはハンジが、そして共に上がってきた男がいた。到着したのを確認すると、リヴァイは一步下がった。

男の顔がハッキリと見える位置にまで近づいた所で、アキラは手を上げた。

「おーつす。エレンの審議ン時以来だな？ えーつと、ニツク……だつたっけか？ あんたの顔はよく覚えてんのに、中央関係の連中つて大体似たり寄つたりだから、名前までは自信ねーんだ」

「……一体何の用だこんな所にまで連れてきて。生憎私は暇ではない。今も救いを求め

ている信者達が私を待っているのだ」

共に現れたのは、宗教団体 ウォール教の司祭ニツク。

ウォール・マリア、ローゼ、シーナの巨大な壁を神授のものとして、崇拜している団体のトップだ。

現状 街では調査兵団の支持率の方が圧倒的に上なのだが、ウォール教は 壁の内側へ内側へ行くほどにその人気は絶大になっている。

即ち、調査兵団の活躍が間近で見られる壁に最も近い場所での威光は小さいが、中心部での権力は相応に高い。特にこの壁絡みの意思決定権は王政の次とも言われている程だ。

「ふーん。壁これを神様かべくって崇めてる癖に、言うじゃないの。『こんな所』って。いーつつも壁になんかしようとしたら、目を血走らせた癖にねえ？」

「つ……。ふん。今はどうでも良いだろ。早く要件を話せ」

ハンジは、2人のやり取りを見ていて強く思う所がある。以前から何度も何度も思っていた事ではあるが、今脳裏に改めて過った。

もしも——仮に今ここにアキラがいなかったら。否、アキラと言う人物そのものが

この世に存在しなかったら？ という所だ。

ウォール教はこの壁に口出しをする権限が強い。そして、それは王政に与えられたものだ。今までも、壁の強化、そして 地下道の建設。それらを拒んできた。

だが、アキラが加入してから風向きが完全に代わった。

代々の調査兵団は 成果を上げる事はおろか、悪戯に兵士達を死に急がす様な兵団だった。

その兵団がたった1人の兵士の加入により、姿形を変える。

真の意味での人類希望の光へと。

調査兵団が結果を残し、巨人に勝利し続けるという1000年の歴史的に見ても前代未聞の成果を上げ出してから、民衆の意を少なからず組み始めた。

——人類は巨人に勝つ事が出来る。

ウォール・マリアを突破されたあの悪夢の日から今日まで、希望の灯が消えなかった

こそが、彼が現在も継続して残している最大の戦果だと言える。

そんな男だからこそ、このニツク司祭は、この壁上にまで登ってくる事を拒みきれなかったのかもしれない、とハンジは思えた。壁に近づくだけで目を血走らせる男が、登る事を決意したのだから。

「思いの外効果抜群だったんだよね。アキラに頼まれた伝言を伝えると」

ハンジはニツクを連れてくる前に、こう言ったのだ。

『■■■が現れた。壁の秘密について話がある』と。

「壁の秘密……ねえ。ありきたりな謳い文句と言うか誘い言葉と言うか。ウォール教だからかな？ 程度だったんだけどなあ。何のことだと思う？ リヴァイ」

「……さあな。アイツが来てから、正直驚く様な事はめつきり減っちゃってる。たまには悪くねえんじゃないか。それにアイツは言った。『黙ってみてれば直ぐに判る』ってな」

「そりやそうだけどさ。……まさか、ニツク司祭の顔色があそこまで変わるとは思わなかったし。想像以上の反応だったから、気になってきたんだよね。アキラが言う事つ

て、突拍子なものも真面目なものも高確率で物事の真相に迫れるから、言われるまでもなく黙ってみてやるけど」

「……お前は別だろ。今までで黙ってた試しあるか？」

「それは今回からにするさ。エルヴィンは来られなかつたんだから。その分私が見てあげないとだし」

ハンジは、ニックを強制的に、強引に引き摺って連れてきた訳ではない。

ニックを連れてくる際にアキラに言われた通りに、先ほどのセリフを耳元で囁いただけだ。ただのそれだけで効果はあった。

後は、リヴァイがアキラに言われた様に、ただ見守るだけだ。黙ってみていれば何かを知る事が出来ると。

「要件つつつても、大体は判ってるんだろ？　ハンジのヤツに伝言頼んだ筈だが」

「………壁の、秘密」

「おお。それだそれ。オレも正直半信半疑だったんだけどよ……。試してみりゃ一発

だったわ。普通は試す気にもならねえよな」

アキラは、右手を地面に突き刺した。……様に見えただけで、空いていた小さな切れ目に小指から人差し指まで差し込んだ。メコツ、と音を立てたかと思えば、まるで窓を開くかの様に壁の一部が剥がれた。

丁度大きさは人が出入り出来る扉程の大きさ。恐らくは壁が出来てからずっと暗闇だった筈だろう。その中に 107年ぶりに太陽の光が注ぎこまれる。

「正直、オレも此処を傷つけるのは嫌だったんだぜ。お前らの様に崇拜してる訳じゃねーんだけどよ。壁に色々と守ってもらってたんだからよ。……でもまあ、壁の中にこんなのが眠ってるのなら話は別だ」

開いた先に見えたのは、大きめではあるものの、これまで何度も見てきたものだった。見間違える事はあり得なかった。

「……最初はな。天辺から見てる訳だから、ハゲ頭かと思ってたんだが。コイツは100年経っても現役らしいな」

「っ、や、……や……」

それを確認したニツクは、ガタガタと身体を震わせた。

「やめ、ろ……」

「あん？ 壁の秘密を知りたくて来たんだろ？ ウォール教だもん。壁の事は隅から隅まで愛でる。まさに壁様」

「やめて、くれ……」

「何でだ？ 特大スクープじゃねえか。信仰者も驚くだろうぜ。……何と、この約100年。巨人のせいで人類は虐げられ、惨めな思いをしてきたつてのに、とんだどんでん返しだ。常識もぶっ飛ぶ」

「やめろ！」

アキラは 立ち上がって、ニツクの胸倉を掴み上げた。

掴み上げ、強引に開いた壁の中へと顔を向けた。

そこに見えたのは、頭。……本当に頭だった。

「まさか、壁が巨人で出来てるなんてなあ！ この世界に来て驚きの連続も連続。完璧に驚きに耐性が出来ちゃったつてのに、こればかりはたまげたってもんだ！ 閉じて 身体動かしてりゃ、落ち着くんだが コレ開くたびに色々頭ン中がぐちゃぐちゃになっちゃうよ！」

そう、壁の中には巨人がいた。

それも この壁の高さを考えると50 m級の巨人。悪夢が始まった切っ掛けである超大型の巨人と同等の体躯を持つ巨人だ。

「止めろおお！ こ、この巨人に日の光を当てるなあ」

アキラは、ニツクの要望には応えず、ただただ至近距離で睨み続けた。

「それよりもニツク司祭さんよお……。アンタ、見えるか？」

「つ……………つ……………」

「見えるなら、応えろよ。お前らは、なんだ？ ……お前らは何を隠してる？」

「う、う、うぐつ……………ウつ げぼおおつ」

ニツクは堪えきれなくなった様で、嘔吐。吐瀉物を巨人の頭にぶっかけた。

「ゲロまみれになっちまって。普段なら笑ってやつても良いな。巨人の頭にゲロを吐くヤツなんざ、これも人類史上初の快挙ってヤツなんだしよ」

リヴアイがゆつくりと アキラの方へと歩いてきた。

もう黙っているつもりは無い様だ。アキラもそろそろリヴアイが来る事が判っていた様で、声が聞こえるよりも早く、剥がした壁の一部を完全に取り払い、ニツクの事も解放した。リヴアイが来てよく見える様に。

「御覧の通りだリヴアイ。オレらは今まで巨人を頑張つてやつつけてた訳だが……、帰る家は どうやら巨人に守つてもらつてたらしい」

どさつ、とアキラは座り込んだ。

「らしいな。正直驚いた。……随分久しぶりな感覚だ」

「だよな。オレだつて同じ気持ちだ。リヴアイを驚かせた、つてだけでしてやつたりなんだが……今はそんな気、欠片もねえわ」

「ふん。お前が いつもと違つて事くらい判つてたつもりだ。……が想定を遥かに超えた事案だな。エルヴィンのヤツもここに来てりやとつとと知恵の1つくらい借りるんだが」

「……それはまた後々でつてヤツだ。んで、ハンジはどうなんだ？ コレ見ても興奮するか？ 思わず巨人が寝てる閨だし、そこへダイブしちゃいたくなつちまうか？ ああ、行くんならちゃんと戸を閉めといてやるから安心しろよ」

いつもの調子で。なるべくいつもの調子で話そうと努力をしているつもりだったア

キラだが、その緊張感は何処となく声色に現れていたらしい。ハンジもいつも通りにはいかなかった。

「……此処だけ巨人がいるって訳じゃないよね。たまたまアキラが開けた所にだけ巨人がいた、って訳じゃないんだよね」

「ああ。数力所で確かめたが、全部いたよ。——壁Ⅱ巨人だ」

52話

□□ 調査兵団宿舎 □□

「……そんな事があつたんだ」

「ああ。色々と常識が覆された気分だろ？ あつたま痛えよなあ」

「だらしく椅子に腰かけたアキラは、深くため息を吐きながらそう言っていた。

ニツク司祭との一件を話していたのだ。

そして、その相手はイルゼ。

「でもさ。確かに私も聞いて驚いたのは驚いたし、驚愕って言葉が一番しつくりくるんだけど、よく考えて、正直に言ってみれば、そこまで驚いた事でも無かったかな？ つ

て言うのが感想かな。やっぱり」

「んあ？ なんで？ だって壁ン中に巨人がいるんだぞ。普通ありえねー！ って思わない？ 巨人が護ってくれてんだぜ？ オレらを」

かくつ、と頭を45度に傾けながらアキラはイルゼに訊く。

その問いにまるで呆れた、と言わんばかりにイルゼは先ほどのアキラよりも深いため息を吐き、答えた。

「わかんないかなあ。だって、私にとっての一番の衝撃は、アキラとの出会いだったんだよ？ いきなり どかーんっ！ だもん。目の前にいた巨人もまるで紙切れみたい
に飛んじやったし。比較的小柄とは言っても6 m級が飛んじやって。……あの時の光
景に比べたらやっぱり衝撃度で言えば落ちるよ。だってありえないもん」

「あー……、んー……。そりゃ、そうか。そーだよな。最終的には似た様なの、皆いつ
てるし」

納得した様で、アキラは頭を数度掻き筆を。

ニツクとの話、壁の正体と真実。そして——中央の王都、王政に見えた影とその日常
に張り巡らされた意図。

後者はまだまだ想像の域を超えはしないが、前者に関しては実際に見て、訊いて、確認をした所だ。壁の中には、あの50m級の超大型の巨人が直立不動で立っているのを見たのだから。

リヴァイやハンジも当然ながら確認をし、驚きを隠せられなかった様子。ハンジに至っては、いつもの成りは完全に息を潜めていた。

『久しぶりに思いだしたよ。壁の外に初めて出た時の感覚。……怖いね？ アキラ』

遠く、地平線の彼方へまで視線を延ばして、力なく、地に腰を下ろし、そう呟き続けた。巨人愛の強いハンジから、恐怖の言葉を訊いただけでも十分驚愕に値する事ではあるが、その時のアキラは、軽く一笑。

リヴァイが驚く事以上に珍しい場面だったから、思わず笑った様だ。笑いながら、ハンジの頭を叩いた。

『怖い？ んな事より、オレは面倒が増えたって感じで頭がぐちゃぐちゃだな。仮に、こいつらが目え覚まして、100年ぶりに起きて、運動……町中で暴れでもしたら、つて想像したら。ま、今まで守ってもらってたのは事実だし、正直悪いとも思わなくもないんだが、早々にお引き取り願う。寝床荒されんの嫌だし』

そう答え、そして、ぽかんつ、としてるハンジを見た。珍しい場面その2だった。

でも、直ぐに笑顔に戻る。

『そーだったね。あははは。怖いのはアキラの方だった。勿論、巨人が怖いのがだけだね。ホント、アキラこそが巨人側、敵側じゃなくて良かったよ』

『あん？ おお、ハンジ分隊長殿の敵になら何時にだって回ってやるぜ！ 結構な恨みみたいなもんもあるしよ！ なー、モブリット！ お前さんなら、オレの気持ち判つてくれるよなあ？』

モブリット・バーナー。その男、いつもいつも暴走しがちなハンジを止めるといふ重要な役を担つてる。……のではなく、副長。なし崩し的と言えばそうだが、上官に振り回されるある意味可哀想な男の1人だ。

『いえいえ、わかりませんよ！ とは、正直はつきり言えませんが……』

『だよなあ……、苦勞してんの見てるし、ある程度は判つてくれるだろ？ オレだつて何度このクソメガネを、巨人と一緒に上空の彼方に吹き飛ばしたいと思つた事か……。この世界を空から見てみるつても良いと思つたんだが』

『いやいや、アキラさん！ 物騒な話は流石に止めてくださいよ！』

『あはははは！ 空は飛んでみたい、鳥みたいに飛んでみたいって思うけど、流石に生身のままで空飛ぶのはヤダなあ、一生モノの思い出にはなるかもだけど、一瞬で終わっちゃうし』

『分隊長もニコニコしないでください！』

と最終的には 壁の正体については驚きはしたが、これ以上話していても判らないので今は深く考えない事にし、報告だけする事になった。

ニツクに訊けば早いのだが、彼はあまりに興奮したのか それとも巨人の中に落とされそうになった恐怖でパニックを起こしたのか、過呼吸でぶっ倒れてしまつて、その時はこれ以上何も訊けなかつたから。

「とまあこんな感じ。確かに巨人が壁の中にいんのは 吃驚仰天だが。する事は変わらねえつて事で、結構全員あつさりとしてるよ。ああ、後エルヴィンから訊いたが、今日あたりでストヘスの憲兵団支部で会議があるらしい。調査兵団のペナルテイみたいなのは 多分ゼーレンぶ無しになんだろうな」

「あははは。うち等の罰って。アキラがあーんな感じで脅したら、そりや 無しにするよ。正面から喧嘩売る様な真似できないし、出来る人なんて ハンジ分隊長カリヴァイ兵長だけでしょ？」

「人を暴君みたいな言い方しねえでくれよ。そりや 怒るだろ。……逝つちまつた奴らを蔑ろにしかねえんだぞ。あいつら」

「うん。判る。……王政や中央に齒向かう様な思考は今までもたない様にしてた、とうより、考えもしなかったんだけど、アキラと一緒に戦ってきて、心から思う様になつた。……それに」

——アキラは、優しいから。許せないんだよね？

イルゼは、言葉に出す事なく、そう思いながらニコリと笑顔を向けた。

その笑顔に疑問を感じていた丁度その頃。

「ん。皆も来たか」

がらつ、と部屋の扉が開く。

部屋に入ってきたのは、104期のメンバーであるエレン、ミカサ、ジャン、アルミン。そしてリヴァイ班のペトラだ。

「……」

イルゼは露骨に残念そうな顔を……はしなかった。いつも以上に真剣な表情へと戻っていた。

「皆。気をしつかり持つて説明、訊いてね。ペトラはもう知つてると思うけど。……あなたたちはまだ知らないんでしょ？」

「ああ。こいつらにはまだ話してねえ。……なーんか貫禄出てるよ、イルゼ班長」
「っ。からかわない。……じゃあ、皆」

イルゼの指示に従い、メンバー達は夫々席に着いた。

説明が遅れたが、イルゼは現在、班長をしている。そして、その班に所属するのが104期のメンバーだ。亡きフレン班長、そしてその班に所属していた兵士達の間まで戦うと心に決め、その後を継いだ。そこに集ったのが今のメンバーなのである。

そして、多少は省いた事もあるが、大筋な所を全て説明した。

女型の巨人はアニである事。

そのアニは今捕らえていて、超が幾つもつく程の極秘であり、教える事は出来ないという事。

決まりかけてたエレンの召喚がほぼなくなったという事。

そして、壁の中の巨人の事。

「壁の中には……実はずっと大型巨人がいました、って事……ですか？」

「ああ。詳しくいやあ、あん時の超大型よりはやや小さ目な巨人だな。それでも50mくらいはあるから十分超大型の巨人か」

言葉を失うジャン。簡単に信じられないのだろう。それも当然だ。

「それに、アニが……」

そして、アニについても同じだった。彼女があの際の女型の巨人であるという事など、誰が想像できるものだろうか。

そう、それも簡単には信じられない。……が、その中でも別段驚かなかった者もいた。

「アルミンは、驚いてねえ感じだな。……判ってたってか？ アニの事」

「っ……はい。アニは、……女型の巨人は、同期の僕達にしか知りえないエレンの渾名に反応しました。……それに、恐らく捕獲した二体の巨人を殺したのも、彼女だと推察できましたから」

アニの真実を訊き、アルミンだけは表情を殆ど変えなかった。

その表情を殆ど変えなかったからこそ、唯一目立った存在だったから、アキラは見逃さなかった。二体の巨人を殺したのがアニである、という発想はアキラにはまだ正直無

かった事だが、それはとりあえず置いていた。

「後はミカサもか？」

「……はい。私は女型とアニの顔が似てると思いました」

「だよな。……普通はそんなの偶然、他人のそら似、つつー感じで片付けるんだが、エレンが化した時の見りゃあな」

エレンの巨人も、エレン自身が変身した所を見ているし、多少なりその先入観でモノを見てしまう所があるものの、それを踏まえても似ていると言わざるを得ないから。

「オレも初見で一発、とは言わんケド、何度か打ち合った時に判ったよ。人間時でも、巨人時でも、構えが変わってねえし、蹴りの軌道だつて一緒。判って欲しかったんだな、とも思っっちゃったよ」

はあ、とため息を吐いている所にエレンが前に出た。

「それで、アキラ教官。……アニはどうなるんですか？」

「エレン……？」

エレンの問いに、ミカサが鋭い視線でエレンを穿った。その強烈極まりないミカサの視線に反応を見せる訳でもなく、エレンはアキラの返答を待つ。

「アニなあ。とりあえず、接触できんのはオレだけだし。今は何とも言えん。……アイツにも色々曲げれねえ何かがあるみたいだよ」

「曲げれない、何か……ってなんですか？ それに——」

エレンの表情も、ミカサ程ではないがきつくなっていく。

あの時の女型の巨人の出現で、どれだけの被害が出たのかが判ったからこそ、エレンは聞かずにはいられなかったのだろう。犠牲になった者達の中には、エレンが巨人だと知っていて尚、気さくに話をしてくれた人もいた。

興味本位に深く探ろうとしていた人もいた。

普通は化け物を前に行っているからこそ、あの時。牢屋に入れられていた時の牢番の男達のような反応を見せるのが普通だと思うのに、一切見せなかった。

そんな人たちが、犠牲になった。

「どんな大義があつて——人を殺せたんですか？」

仇を目にする様な顔だった。

アニを捕らえたのなら、全てを明らかにして欲しいと言うのがエレンの要求、気持ちなのだろう。

だが、それをぶつける相手は明らかに間違っている。

「エレン。それ オレに訊くトコか？ ああ、オレにアニに訊いて欲しいって事か？」

「あ、いや…… すみません」

「はは。わーってんよ。……お前さんの気持ちだつてオレあ判つてる。一応は全部、背負つてるつもりだからな、あいつらを」

アキラは目の前で拳を握る。怒りが無い訳ではないのが分かる。それが例え教えず子であっても、沢山面倒を見、振り回された相手だつたとしても。

「アニの中にあるモノは、オレにもまだ判んねえ。ただ、判るのは 今のアイツは 死を全く恐れちゃいない。強引に吐かせようとしたつて無駄だろうな。オレはしねえし、それに他の奴らがしたら、そのまま殺されちまうよ。巨人に変身してそのままお陀仏だ。だから、オレだけ接近許可が出る。悪いがお前らには まだアニの場所は教えねえから」

アルミンは、アキラの答えに僅かにだが アニに希望を見た。

「『まだ』という事は 今後有り得るといふ事なのかな……？ 確かに アニが、心を開く相手と言え、アキラ教官ただ一人だつた筈……だし。それでも、アニがした事は許される様な事じゃないと思うけど」

エレンの言う様に、どんな訳があれば人を殺す大義が得られるのだというのだろうか。

遙か昔から人類は巨人に支配されていた。そして壁を築き、1000年もの平和を成就したのも束の間、その壁は破られてしまった。

それを壊したのが——だとするのなら。

「(い、いや、あれは超大型の巨人が。それに、もう一体いた。アニの仲間が少なく見積もっても、後2人はいる筈。アニの、仲、間……? ……まさか)」

アルミンの中で今、線が一本に繋がった。

それはほんの些細な切っ掛けに過ぎなかった。いつもなら、忘れても別に問題ない程の些細なもの。だが、アニの事を知り、鮮明に蘇ってきたのだ。

女型の巨人を追った アキラの姿。そして——それを見つめ続ける後ろ姿。

アキラの正体を探るかの様な発言。それらが意図するものは……?

「ん? どうしたんだ、アルミン」

「……えッ? い、いや、何でもないよ。ちよつと考えてて、まだ纏まらないだけで……」

エレンが気になった様で、アルミンを窺うが、問題ないという様にアルミンは手と首を横に振った。

「訊きたい事あんなら、今の内だぞ、アルミン。こーんな悠長に時間取れるのってなかなかないと思うしな」

そんなアルミンを見て、アキラはひよいひよいと手招きをした。

それを聞いて、アルミンはとりあえず 疑問に思っている所の1つを頭の中で引き出し、口にする。

「あの壁の中に巨人がいる、という事は判りました。……ですが、壁そのものはどうやって作ったんでしょうか？ 巨人を支柱に、そこから造つたのだとは思いますが、原材料等で判った事はあるんですか？」

「あー、ソイツね。確かに疑問に思うよなあ。巨人が幾ら頑張つて立ったとしても、普通の間は空くし、ただ、横並びに立ってるだけだったら、スカツスカの筈だし。でも、その答えは多分これ」

アキラは何かを取り出した。取り出したのは拳大の石。

「？ なんですか、それ」

「ああ、皆も聞いてくれ。これ話したのはエルヴィンとかハンジ、リヴァイだけで、まだ伝わって無いと思うし、不確定要素だが、面白い話題でもある」

その石をひよいつ、とテーブルに放り投げた。

「それ、オレがアニ、女型の巨人とやってた時のもんだ。何度か身体散らした時に、いつ

の間にかオレの胸ポケットの中に入り込んでたみたいでな。少々気になってたからもって帰って見せたら、これも吃驚されたよ」

「つ、そ、そうです。何故、蒸発をしないんですか!？」

「いやいや、何でもかんでもオレに訊くな。オレは巨人学みてーなのを収めてる訳じゃねーんだぞアルミン」

今までの巨人は絶命すると、全てが無くなった。肉も骨も、その身体の全てが蒸発し跡形もなくなり、残ったのはその時に発した熱によって所々が焦げた地面、そして液体からだろう大きな水溜まりが残るだけだった。

「やり方は判らん。……が、こんな感じで、身体を固める事が出来んのなら、その応用で壁だつて作っちまいそうだろう？ モノ壊すのは得意なんだが、オレは作るのは苦手だね。多分、エレンにその役目が回ってくると思う」

「オレが、ですか?」

エレンは言っている意味が判らない様だった。それを見たジャンは、馬鹿か、と加えながら代弁する。

「お前の巨人がその能力を得たんなら、空いた穴も塞げるって事だろう？ 分かれよ馬鹿」

「ツ……オレで、壁を……」

「おう。まあ リヴァイならこういうだろうな。——やるかやらねえかじゃねえ。や

れ、つてな感じで」

アキラはそう言うのと、こんな感じで言うだろ？　と言わんばかりにペトラの方を見て笑った。

ペトラもその視線に気づいた様で、軽くため息、そして笑みを見せた。

「オルオの100倍は似てる」

「……それ褒めてんの？」

53話

「おーい、お前らー。はい　ちゅーもーく&あつまれー。大体決まった事発表するぞー」

この数日間。

戦いこそはなかったが、色々と頭が痛くなる様な雰囲気の中での会議が続いていて、漸く正式に決定した。

細かな所は省いて、大きく分けると2つ。

1つはエレン、エルヴィンの王都召喚の件が完全に白紙になった事。
そして　最後にアニ・レオンハートの今後の処遇の事。

アニに関しては　憲兵团・師団長ナイル・ドークにのみ真実を伝え　それ以外の憲兵团の兵士たちには真実を伝えない秘匿となった。表向きはアニは憲兵团は脱退した、と

言う内容だけをしらせて納得させたとの事だ。行先は調査兵団。

その報告に腑に落ちない様子を見せていた新人が何人かいたらしいがとりあえず大丈夫だとの事だった。

その後数分かけて アキラは訊いた限りの全てを伝えた。

「——これがエルヴィンから訊いた内容だ。頭ん中に入れとけよ。あと、当然極秘事項だから、口固くしとけよ」

『はー！』

こんな時まで心臓をく と敬礼をしようとするから、アキラはぶんぶんと手を振った。

かつたるい真似はするな、と言わんばかりに。

その仕草を見て あの訓練生の時の事を思い出したのだろう。其々の表情が柔らかいものになって言っていた。

驚愕の出来事の連続で、色々と心労が溜まっているのは間違いないから、丁度良かったとも言える。

「あつ、アキラ教官も聞いてくれよ。アルミンのつまんねえ冗談話」

「んあ？ 冗談？」

ぐりぐり〜 と頭を乱暴に撫でまわすジャン。アルミンは大真面目の話を冗談にされたからなのか、或いはただただ ジャンの行為そのものが嫌だったのかはわからないが、口許が一文字に真っ直ぐ伸びていて、……所謂 ムっ とした顔になっていた。

「別に。ただ可能性の話をしただけです」

「その可能性つてヤツがぶっ飛んでんじゃねえか、つて言つてんだよ」

「む……」

ハハハ、と笑うジャンと、また 口許を固く結ぶアルミン。

2人の間に入ったアキラは、とりあえずアルミンの方を見て、話してみる様に表情と仕草でアルミンに話す様に促した。

「あの巨人達は歴史を振り返ってみたら少なくとも1000年間は直立不動だったんだから、そろそろ一斉に動きだすかもしれない、つて言っただけです」

「おー、成る程。そりゃ 無いとは言えねえな。オレもアルミンと似たような事考えてたよ」

アキラはアルミンの話を訊いて、ぽんつ、と手のひらに拳を乗せて頷いた。本気なのかノつてくれただけなのか判らない表情だった。ジャンは恐る恐るアキラの方を見た。

近くで表情を見てみても、やっぱり読めなかった。判りやすい性格をしている、と思っていたのに。

「……おいジャン。なーんか、失礼な事考えてね?」

「い、いえいえ。そんな事ないです。……いや、ある意味そうかも。アルミンの話。アキラ教官、マジで言ってるんじゃないツスよね?」

「ふーん……。ま、いいや。んでも さっきのは冗談じゃなくマジで考えてたぜ。壁ン中いることはいるんだが、ぶっ壊して出てこないとも言えねえし、それに外でうじやうじやいる巨人達に混ざんねえって保証なんざねえし、誰もしてくれねえよ。巨人は、夜活動停止するくくって話。何回か聞いてただけどよ。実は夜型の巨人もいてな。夜に随分活発なヤツだったよ。その上 夜の作戦の中でメツチャ不意打ち。身体くねくねさせながら迫ってきて……。うへえ、あれは思い出したくねえわ」

思い出して顔を顰める。

アキラにとって初の奇行種だったと言うのはまた別の話。

「とまあ 今までの巨人の常識。それが通用しねえ巨人だっている訳だ。大体 エレンが巨人に変身した時点で色々と覆されてるだろ。この世界の事。なーんもわかってねえんだなって今更実感してるよ」

巨人の常識。

それは昔から脈々と伝わっているが、それも怪しいと言わざるを得ない。一般常識が覆ってきているのだから仕方がないともいえる。

その一般常識も100年間の平和を打ち破られ、今日まででまだまだ更新し続けている。

つまりアキラが言いたいのは、どんな事が起きたとしても柔軟に対応する。臨機応変に対応できる柔らかさを持っておけ、だと言う事だと其々がそう納得した。

エレンは、自分自身の手を見つめる。自傷行為を行えば巨人になる事が出来るが、何故なる事が出来るのかが判らない。

「確かにそうですね。……オレ達は敵の事を知らなさ過ぎる。ですが、アキラ教官」
エレンは首から下げていた小さな古びた鍵を取り出して、見せた。

「オレの家の地下室。……そこにオレの親父が隠していた何かが眠っているんです。そこに行けばきつと……」

「おう。その件も言ってた。オレがひとつ走り行って確かめても良いんだけどなあ。……敵さん側も伝わってる可能性が0とは言えねえし、どういう情報なのか全くわかってないのが辛いところだ。最悪 都合の悪い情報だったら、木っ端微塵にされる可能性だって否定出来ねえからな。あのデツカイ巨人の爆発で消し飛ばす。今まで以上に慎重

にしねえと許さねえ、ってエルヴィンに言われてつから、安易に行くのは……なあ」
アキラは、うーんと唸りながら言い続ける。

ウォール・マリア内の広さは半端ではない。今までの遠征での走破距離の合計値、く
らいは間違いない。その何処に巨人の人間がいるのか。一体何体存在するのか。
……そもそも、敵の真の正体は 何なのか。判らない事が多すぎると言うのが結論だ。
だからこそ 巨人の秘密に迫る情報。これまで以上の慎重さを見せていた。

「つまり マリアの内側……つまりは シガンシナを完璧に解放してゆっくり調べたい
んだ、つてのがエルヴィンの考えだな。ははっ 似合わず、ガキみてえに興奮してるエ
ルヴィン見たのって初めてだったよ」

エレンの家の地下室の話をする時のエルヴィンの様子を笑いながら言うアキラ。

皆『あの団長が……?』と半信半疑。それもその筈で、エルヴィン団長は全団員が絶
対の信頼を寄せる男であり、迅速かつ的確な判断、決断力も持ち合わせている。リヴァ
イヤアキラを調査兵団の矛とするなら エルヴィンは調査兵団そのもの。……兵団の
象徴だ。

それ程の男が興奮している。子供の様に興奮をしている……などと俄かに信じられ
ないだろう。

「それでアキラ教官。他の皆は……？」

「……あー 104期の奴らか？ 大丈夫大丈夫。今頃休暇を満喫してるだろうよ。

……… (多分)」

次にアルミンが訊きたかった事。それは同期のメンバーについてだった。

アニが女型の巨人であった様に、超大型の巨人、鎧の巨人と少なくとも後2体は確実に存在している。知性を持った巨人……いや、巨人を纏った人間が。

その内の1人がアニだった。つまり、他にいとすれば同期のメンバー。104期のメンバーに疑いを向けられるのも当然の事だ。

アキラは休暇——と言っているが、殆ど今は隔離されているも同然の措置だとアルミンの中で結論付けた。

「それで、アニから何か聞き出せた事、ありますか……？」

「……んー。そりや気になるよなあ。でも あいつも頑固だから」

アキラは首を横に振る。つまり 訊き出せていないと言う事だと言う事が判る。

それも仕方のない事なのだ。アニは。

『殺されても良い。寧ろ 殺される事を望む』

と考えを未だに捨ててはいない。

誰よりも人を殺した彼女は、誰よりも裁いて貰いたがっている。他の誰でもない自らが夢中になれた相手に。それをアキラ自身が一番傍にいるから感じているのだ。

悔いていると言うのなら、仲間の事を話せば、とも思いがちだが それは以前から叶ってはいない。アニがその事について口を頑なに閉ざすのは 仲間意識やアニが持っているであろう使命感がまだ根強く残っている為だと推察された。

「楽にはさせたくねえから、根競べってヤツだな。一応、偽装つばいけどアニに関する戸籍とかハンジ辺りが調べてる。んでもなあ、5年前。……と言うか、年数関係なくあの辺のって相当杜撰だったらしくてな。大雑把を通り越してるんだと。最初は燃えちまったんじゃないか、って思ってたんだが、今は、『そんなのさいしょつから そんなの在りませーん』って思えてきてる。……つたく、町そのものが元々無かつたのかよ、つてレベルだ」

「そ、それは……」

「否定出来ませんね。オレたちの町でも駐屯兵たちは飲んだくれでしたし、そもそも管理してくれる様な所、知りませんし」

「……………。自分たちで調べられる事があれば」

アキラの言葉に、アルミン、エレン、ミカサが反応を見せる。

——思い起こすのは遠いあの日。何もなく、何かが起きて欲しいとさえ思っていた幼い頃の記憶。

調査兵団と言う人類の希望が街へやってくる度に歓声が起き、街そのものが震えていたのではないか？　と思える程熱狂をしていた。シガンシナに拠点を構える駐屯兵達には、その時こそ、真面目？　な対応をしていたのだが、普段の姿は見せられたものではなく、常に酒が片手にある状態だった。

そんな連中なのに、調査兵団が壁外遠征の為、シガンシナの門の所へ来る、と言う情報が出た瞬間に変わるのだから、エレンは更に憧れの目を向けた。いつか、あんな風に英雄たちの様になりたいと心に誓っていたのだ。

「だろうなー、真面目な所もあるんはあるんだが、全員、つてわけにはいかんし、お前ら

の代で何とか頑張ってくれ。それと 無いモンを強請つても仕方ねえし徐々にやつてくしかないだろ。無いなら無いでそんな時考えりや良い。——手掛かりゼロって訳でもねえし。それに、そう言う系の面倒な調べもんは全部各分隊長辺りに吹っ掛けてるらしいから、オレらまで動かんでも大丈夫だろ、多分」

「え、えつと…… いいんですか？ それ。アキラ教官は？」

「良いに決まつてるだろ？ つーか、オレが普段どんだけやらされてるか知らねえのかよ。……ああ 最近入隊だし、知らねえのも無理ねえか」

はあく と深くため息を吐いた後に、アキラはつづけた。

「ほれ、巨人相手を主にやってきてんだから、他のメンツには別方面に力入れてもらつてらつて感じだ。おんぶにだつこじや申し分ねえくつて言つてたやつもいるしな！ それに他にもいろいろ協力だつてしてんだし。ま、それは殆どハンジのやつ頼みだが——……あーほんと、思い出しただけで虫唾が走るつてもんだ！ なー、エレン」

「——あ、はい。そうですね……。その、否定は……、やつぱり出来ません」

同意を求めるアキラに対し、エレンは何処か遠い目をしていた。

ハンジに延々聞かされた巨人の話。実験を重ねに重ね、異常なまでにエレンに執着を見せてきて、ミカサに止められた事も何度かあった。まだ付き合いがそんなに長いとは言えないエレンでこうなのだから、アキラ教官ならと考えたら寒気がすると言うもの

だ。

「教官はそもそも働き詰めですからね……その位はオレでもわかります」

「おー、そうか？ 嬉しいねえそう言ってもらえるとよ。……でもよお、ジャン。……働かせ過ぎ、つてのはまだ可愛いもんなんだ」

しみじみとさせながら、色んな記憶がアキラの頭の中を巡っていた。

「アイツさあ、オレの事巨人見る様な眼で迫ってくる事何度もあったんだよ。その上人体実験みたいなのまでされたし。一度や二度じゃねーし……あー、うん。思い出しただけでやつぱし虫唾＋腹も立つてきたわ。よし、やつぱ一発殴ってくる。一発くらいなら良いだろ。うんうん」

「どんどん黒いオーラ？ のようなものが可視化されていく様にジャンは見えたらしく、ただただ苦笑いをするだけだった。怖がらずに笑える所がまた凄いかもしれないが、やはり相手がアキラだから、と言う理由が一番大きいのだろう。」

そして ぱっ！ と立ち上がったアキラだったが、すぐに止められてしまった。

止めたのは目の前にいたジャンではなく。

「一発で終わってしまいますので、それは駄目です。止めてください」
横で控えていたミカサだった。

アキラもびつくり中々に素早く動いてそのまま腕をとった。

「……わーったわーった。ったく、ペトラとかイルゼに次いでミカサもかよ。変にお目付け役になりやがって。それに ミカサはエレン担当じゃなかったか？ オレになんかかまけてる暇なくね？」

「そんな事ないです。エレンの事も見てますので大丈夫です」

アキラの言動のすべてが本気、とはミカサとて思っではないが、それでも律儀に守っている。

ミカサは1つだけ特別任務を受けていて、アキラが攻撃性（笑）を特にハンジに対する攻撃性（笑）を見せだしたら、止める様にと託られているのだ。ミカサの身体能力なら、独特の嗅覚。すべてが適任。

因みに、その依頼者はハンジ。

何でも、頑張ってくれたらエレンと同じリヴァイ班編入も推薦するから、と持ち掛けたらあつという間に落ちたらしい。

なかなか腕を離さないミカサを見て、アキラはにやつと笑った。

腕を取ってる状態だから、腕を組んでいる様に見えるもなくもない。そして、エレンが他の女にくつつこうとしたら、豹変するミカサを何度も見ている。アニとミカサの一戦は、104期のメンバーの中では伝説の一戦となってる程だ。そして今回は逆パターンだから思いついた様だ。

「そんなくつついてたら、エレンのヤツが妬いちまうぞ?」

「つ……………。そんなことは」

笑いながらエレンの方へと視線を向ける。

ミカサは仄かに頬を紅潮させて、俯かせているがそれでも律義に言いつけを守る！
と言わんばかりに腕を離したりはしなかった。

「オレが何です?」

エレンは聞こえなかったのだろう。普通に聞き返してきて、動揺したりする素振りは一切見せなかった。

その結果、やや落胆してしまったミカサを見るのは少しばかり忍びなく思ったアキラは、掴まれたまま両手をあげる。

「わかったわかった。殴るのはまた今度にすつからそれで良いだろ? 少なくとも、オレらの班に配属されるまでは大人しくしてらつて」

「……………は、うん」

ハンジにとつて良かったのか悪かったのか判らないが、とりあえず ミカサは離れ、やや意気消沈気味だったところをそれとなくアルミンに慰められるのだった。

□
□
???
□
□

「——戦士長。準備出来ました」

「……………」

夜の闇に紛れ、マスクを装着した複数の男たちが世話しなく動き、そして報告をしていた。

「風向きが変わらない内にさっさとやってしまおうか」

「はっ！」

持ち場へと戻り、そしてそれを起動させる。

噴霧口がわずかに震えたかと思えば、次の瞬間には勢いよく なにかが出だしてき

た。

それは 夜の闇に紛れ、東の間の平穩に迫る影。
新たな戦いの幕が上がった瞬間だった。

「……ここからが大変だピークちゃん。日が昇り次第、行動開始する」
『了解』

54話

「よお。ア二」

「……おはようございます?」

「おう。つて、なんで疑問形だ?」

「いや、逆に判りませんか?」

「ン? あー……そっか、そりやそうだな。ここ地下だもんなあ」

アキラがア二の元へと足を運ぶのは今現在、最も重要な任務の1つになっている。

ア二から得られる情報の大きさを考慮すれば、当然とも言えるのだが、当のア二自身が喋るつもりが全くない以上、現状では得られる成果はゼロに近い。そして成果が得られないのであれば、ア二自身は厄介な爆弾と一緒に、いつ点火し爆発するか判らない意思を持った危険物、と言う声も身内では上がっていた。

さらに言えば、ア二には恐れがない。死さえた。故にたとえ拷問をかけた所で無意味だと言うのは判る。そもそも、巨人になる事が出来るア二に対して、それは最悪な行為。悪手そのもの。

アニは爆弾、そんな発言をする連中に限って、拷問と言った強硬手段を要求するが爆弾に手を出しといて、こちら側は被害を被らないわけがない、となぜ思わないのか、と呆れてしまって逆に笑えたりもしている。

ただ、爆弾と言う意味は言িয়েて妙だ。

巨人に成った時の衝撃、その破壊力はエレンと共に行った検証、そしてあの超大型の巨人の出現で既に立証されている。人間の傍で起これば9割9分9厘、即死だ。

そんな衝撃を容易に受けるアキラは別だが、それこそ無理な話だった。アニに『樂をさせない』と言ったのはアキラ自身にも言っている事なのだから。

「うっし、ならこうしようか」

「……? どうするのですか?」

「外行くぞ」

「は?」

アキラは、アニが閉じられている牢の錠を引き千切り（勿論後に弁償）中へと入る。そして、ニヤッと笑って続けた。

「デートだ、デート」

何を言っているのか判らなかつた上に、一瞬時間が停止した感覚に見舞われた。

そして 数秒間の沈黙の後——漸く考える事が出来た。言っている意味を理解した。

理解したからこそ。

「……………はあ?」

声を上げてしまったのだ今日一番の。

この壁の中に来て一番、驚愕したかもしれない。少々情けない気もするが。

それは遡る事数時間前。

□□ 調査兵団宿舎 □□

リヴァイ班全員が集い、今後の策を考える簡易形式ではあるが作戦会議の様なものが開かれていた。そして、その空気はなぜか重く暗いものになっていた。原因は勿論、トラブルメーカーの1人。

『……もっかい言ってみて』

『あん？ 聞いてなかったのか。珍しい事もあるもんだな、真面目なペトラが』

『いいから。聞き間違いかもしれないし』

アキラは頭をぼりぼり、と掻きながら苦笑い。ペトラは表情を引き攣らせていた。

周りは当然何でこんな空気になったのかわかるからこちらも違う意味で苦笑いをし

ていた。

それは幼さで言えばエレンもそうなのだが、彼でさえ理解する事が出来ていた様だ。何とも言えない表情でアキラを見ていて、その横で控えるミカサは、同情の眼差しをペトラに向けていた。

『アニとデートだ。外に連れ出d『ふざけんじゃないわよ!!』あぶなッ!! コラコラコラ！ フォーク投げんな！ それにふざけてねー 最後まで言わせろつての』

ここで説明しよう。

ペトラの口調が荒くなるのは 怒りが5割増しに上がった時だ。それ以上は以下の通り。

- 6〜7割で男も真っ青な口調＋威圧感。
- 8割〜10割未満は実力行使。
- 10割、我を忘れる＋実力行使（身体が勝手に動く?）。勿論、解読不明な奇声と共に。

今回ののは、アキラがデートと言う単語を使った事に驚きもしたが、内部に巨人が潜んでいる可能性が高く、新しい事実も判明し、極めて忙しい時期に場違いな単語を聞かされてあつという間に沸点に達した、と言うのが真相だ。

因みに原因のアキラは大真面目。

『104期んトコに、あいつらがいるトコにアニを連れてくんだよ。判れつてーの』

はあく、とため息吐きながら言うのだが、吐きたいのはこちら側（アキラとペトラ以外の全員）だろう。一言一言端折る部分が多くて誤解を生むような発言は控えろ、とも言いたい。それは女性陣の意見ではあるが、今回ばかりは男性陣も似たような心境だった。

『判るわけないだろ。まず、目的から言え。そこが本題だろ。いきなりアニとデートつて、オレでさえ悪フザけで言ってると思えん』

エルドが代弁してくれた様だ。それに追従するように、リヴァイ以外の全員がうん、と頷いていた。ペトラに関してはまだ睨んでいる。何処となくミカサも同調する様に同じくだ。まさに四面楚歌と言っても良い具合なのだが、当の空気を作り出したアキラはいつもの調子を崩さない様子だった。

『端折り過ぎなトコは性分つつか、説明面倒つつか。まあ気を付けるわ。……んで
もこれは 真面目な話だ。相手の人数もはつきりと判らんし、内側にいるのは限りなく

100%だろ？ なら、早めに打てる手は打つとこうと思つてな。出てきてくれないとこれ以上の対応もできんつて』

『つまり、「アニ・レオンハートを餌に、他の巨人を炙り出す作戦」そう言えば良いだろうが』

『あー、いつもいつも直球でどーもだリヴァイ。そんなトコ。アニを利用するのは気が引けるトコがあるが、……まあ、その代わり外に出すんだからその辺は目え瞑つてもらうよ』

アニを外に出す、と言う発言の所で再び場に緊張が走つた。

女型の巨人を解放する、と言うようなもので、そのリスクは計り知れない。街中で暴れてもすれば、小規模の街であれば壊滅は必至だし、何より最悪なのが逃げられると言う点だ。

危険性が増すのもある上に、重要な情報を握っている相手をむぎむぎ逃がしたら致命的な打撃にもなるから。

『あー、大体わかかってるよ、お前らが考えてる事。でもま、その辺はアニ、と言うかオレの事信じてくれ、としか言えねえわ。全部対処する。ヘマはしねえ』

現在も原則、アニとの面会はアキラだけではあるが、立会人として ハンジやリヴァ

イ、エルヴインも共に来ている事が多い。情報についての話は一切ないが、以前以上にアキラの事には心を開いている節が見える、と感じていた。演技である、と言う可能性は否めないが。

『……リスクを恐れてちや前に進めねえ、だろ？ エレンん時にも似たような言つてたの忘れてねえよ、オレも』

『判つてる。……アニ・レオンハートについてはお前に一任している事はエルヴインも了承している。今更 お前が馬鹿やって、ハマする心配なんざするか』
『へーへー、そいつは信賴してくれてどーも』

最終的には全員から理解と了承を得た。

『妙な事はするな』と釘をさされながら。

妙な事？ と勿論首を傾げていたが。

場面は 再びアニのいる地下独房。

こういう経緯があつての行動が真相で、アニ自身奇怪なモノをみるような視線を向けられてはいたが、長らく地下に閉じ込められているからか、外に出たいと思わない訳はなかつた。

「……………いきなり何を。裏がある、としか思えないんですが」

「そりゃ、そうだろうな。決まつてるだろ？ 押して駄目なら引いてみる。アメとムチ。たまには こう言うのも有りじゃね？ って思つての行動だ。皆には大反対されたけど」

「当たり前です」

立場的には敵側なアニ。なのに、反対していた連中……つまり調査兵団の皆には同情を禁じえなかった。破天荒過ぎるだろう、と今更ながら思う。

「私が逃げたらどうするつもりなんですか？」

「うん？ 逃げるのか？」

「普通、それを聞き返しませんよ。……でも、逃がしてくれる、と言うのであれば」「あほか。オレに許可を求めてる時点で逃げる気ないじゃねーか」

「……………違います。逃げられると最初から思っただけです。巨人を簡単に手玉に取る相手にどうしろと言うのですか」

アニは頭の中でシミュレーションをしていた。

巨人に変身をした時点で拘束される事必至だろう。四肢を腕がれて動けなくなった所で、文字通り、見た通り、巨人の体内からつまみ出される。

人込みに紛れて逃げようとしても、巨人の肉体が消滅するときに発する蒸気。それも大量の蒸気に紛れて脱出したのをあっさり見つけられてしまったから、そんな事が出来るとは思えない。

立体起動装置をどうにか手に入れて、最大ガス噴射で逃げたとしても、爆発的？ な脚力であっさり追いつかれる。

つまり、どう考えても逃げれる未来が見えないのだ。更に言えばたとえ逃げても笑って捕まえられて許されそうな感じもする。

「どうもこうも、たまには付き合え。オレも気晴らしつてのがある。頭痛くなる会議会議……。憲兵団とのやり取りに中央王都の連中。大体はエルヴィンがするんだけど、正直、教官してるよりダルい。暴れるの禁止って言われてるし」

「はあ……。暴れるの禁止って、それは当たり前でしょう」

アニは徐に腰を上げた。

繋がれている鍵付き鎖は、いつの間にか壊されていて 手枷がなくて軽いのを実感する。随分と久しぶりに解放されたのだ。

「何を考えているか分かりませんが……。付き合います。拒否権はあるとは思いますが、外の方がここよりは良いですから」

「うっし。んじゃ、行くか」

歯を見せながら笑うアキラの背を追う。

長い長い階段を上がりながら、そんな背中を見ながら、アニは思った。

十中八九、目的がある。恐らくは、自分自身を餌に他の者たちを捕まえるのだろう、と。自分から話すつもりは無い。例え 出会ったとしても平然としていられる自信は

ある。……が、正直な所、向こう側が平常心を保てるかどうかは判らない。

「あんな所で、巨人になったしね。……あいつがまたどんな反応見せるかわかったものじゃない。でも……これもわかつている筈。あの時、わかつた筈。この人には敵わない、と言う事も)」

「難しく考えんなつて。久しぶりの外を満喫すりや良い。それに表向きは調査兵团になつた、つて事になってんだし、顔見せさせとかなないと不信がるんだよ。104期のやつらは。ほれ、特にコニーとか、アルミンとか」

104期のメンバーの名が出た時点でアニは予想が当たっているのだろう、と思えていた。

何故、あえて口に出すのかははっきりとは判らないが。

「……………皆に会いに行く、と言う事ですか？」

「ん？ ああ、そうだな。久しぶりに会いたいだろ？ アニも」

「会いたいと思つた事はありませんが」

「うへえ、薄情なヤツ」

げー、と舌を出すアキラ。訓練兵時代の事を思い返しているのだろう。血のにじむ様な厳しい訓練。そして、あの壁が再び破られた日に、生き残つた間柄だという事を。

ア二として何も思っていない筈はない。

あの時。共に訓練に明け暮れていた者たちの死体を前に、平常ではいられなかったのだから。だから、思うところが全くないわけではないだろう。でも、それは ア二自身が最初からこちら側であれば、の話だ。

「……アキラさん。私が誰なのか忘れてるんじゃないですか？ ……私は全滅させようとしたんですよ」

そう、ア二は女型の巨人。つまり街を地獄に変えた者たち側。皆を殺す切っ掛けを作った者たちの仲間なのだから。アキラの口ぶりはまるでそれを考えていない、と言わんばかりだったから、ア二はそう聞いたのだ。実の所、口には出しても、実際に忘れてる、とは到底思えなかったが。あの時の殺気は『許さない』と言った時の事は、未だによく覚えているのだから。

「忘れるかよ。それに、実際は全滅はしなかった。あいつらは全員生きてる。……勿論、死んだ皆。ネス達の事も忘れちゃいねえ。絶対に許さん、つつつたのも嘘じゃねえ。奴らの戦果を実らせる事にも躍起になってる、つてのもあるんだよ。これもその一端だ。……何より今は 感情つてヤツは殺す事に決めてんだ」

グっ、とアキラは拳を握りこんだ。ぐ、ぐぐぐ、と握り、骨が軋む音が周囲に聞こえてくる。力を握りしめ、逃さない。と言った様子だったのだが、次の瞬間にはそれが霧

散した。手のひらから、力が逃げていくのを感じたから。それと同時に、感情も抜けていく様に、見えた気がした。

アキラはアニの方を振り返る。

「後、お前らをよく知ってから、だな。本当の意味でどうするのか。どうすりやあ良いのか考えんのは。アニが教えてくれるとは思ってねえけど」

「……………私の事も、楽をさせない、と言ってたと記憶してますが」

「そりゃ、オレの気の持ちようだ。だって、アニが楽になつてゐるのは感じてねえし」
「……………そう、ですか」

楽になれるとも、楽をさせてくれるとも思っていない。今だってアニは苛まれているのだから。複雑に絡み合った事情と共に。

だが、今は、今だけは アキラに合わせようとした。グっ……………と強く目を瞑る。眼球を強く圧迫する様に。……………そして ゆっくりと開いた。アキラの様に 気持ちを押し殺そうとしたのだ。

「でも、正直 ミカサとだけは会わせる事を勧めません」

「ん？ そりゃどーして……………、ってアレか。エレンか」

「猛獣の前に、餌を身体に括り付けて出てくようなもんですから」

「すげー言われようだな、ミカサ。わからんでもないが」

アニの、あの時の女型の巨人の狙いは明らかにエレンだった、と言うのは恐らく皆知っている事だとアニは判っている様子。

あの部隊を襲った時の落ち度。言葉に反応してしまったのだから。

後、アキラもアニの言った意味がよくわかると言うものだった。エレンを狙った以上、……異常なまでに反応を見せるだろう、と。でも、そこまで見境なしではないのも判っている。

「時と場合だろそれ。ミカサだってよ。そういやあ アニvsミカサか。あつたな、んな事も。オレも結構興味あつただけだなあ……、ハゲが来なけりや、つてヤツ。夢中だつたら？ アニも」

「……通じるかどうか、興味があつた、と言うのは嘘ではありません」
「だろうな。格闘ン時が一番……って、そうだ」

丁度、外へと通じる扉の前に来た所で、アキラは何かを思いついた様子だ。

思い切り、扉を押して開く。外の光が全身を包み込む。太陽の光がここまで温かく、心地よく感じた事は無い、とアニは思った。それとほぼ同時にアキラの声を光の中で聞いた。

「久しぶりに組み手すつか？
牢ン中でも欠かしてなかったみてえだし、また見てやるよ」

55話

「んー、蹴りだが、アウトロー狙うのも良いが、インロー狙ってみても面白いかもだぞ。アニは 距離つめる、飛び込んでくる速度も申し分ないし、ほれ、狙う幅が広がるだろ？」

「シツ!!」

「おつ、そうそう そんな感じ。でもまあ、オレって立ち技マスターしてる、って訳でも、どっかの道場の師範って訳でもねーからなあ。これは、素人の意見とでも思ってたくれ。最終的にはアニが打ちやすい所に最高の一撃を、つてのがベストかもしれない」

パシツ、パシツ!! と幾度となく乾いた音が響き渡る。

ここは、アニがいた地下牢への入り口の建物以外は、周囲に一切ない開けた場所だった。周囲に気兼ねなく身体を動かしたりするのに 適している場所。

つまり、何処へ逃げたとしても、判るという場所でもある。

建物が無いから身を隠す事も出来ないという事だ。

だが、逃げられた時を考えたら、良い立地条件だと言えるかもしれないけれど、巨人を相手にするともなれば、良いとは当然 言えない。

周囲に建物や木々が無い為、立体起動装置が使える様な環境ではないから。

一部のツワモノは例え周囲に建物とか木々が無くても、巨人自体に直接アンカーを打ち込んで、接近。そのままなぎ倒す様な男がいたりするけれど、そんなのは例外中の例外。勿論、こんな場所で呑気に格闘の授業を施している男も当然ながら言うまでもない。

「うっし。そこまでー。今日はこの辺にしとくか」

「……………はい」

アキラは、アニの下段蹴りと見せかけての上段蹴りを受け流して、勢いそのままにアニを一回転させると、丁度両足そろって着地させた。それと同時に 終了の一言。

汗を拭うアニは、何処となく寂しそうな残念そうな顔をしていた。決して気のせいではないだろう。

「ほれタオル。いい汗かいたみてーだから、水浴びもしてきたらどうだ？」

「……………覗きませんよね？」

「アホ。オレが、んな事するように見えるか？」

「いいえ。ちつとも。……………（そんな甲斐性あつたら　ここまで人間関係拗れてないと思う）」

「あん？　なんか言ったか？」

「いいえ。ちつとも」

アニは、タオルを受け取ると後ろの建物の中へ。

因みに地下牢内にも地上側にも水回りの設備はある。アニの監視役々と言う事でリュウキが度々訪れているが、その付き添いでイルゼやらペトラも時折　同行したりしている（アニのいる牢へ近づくのはアキラ限定ではあるが）。基本的にその人たちの為の生活の設備。勿論、アニの言う様な展開はアキラは起こしていない。……………残念ながら。

そして、アニは監視の目は一切気にしていない様で、服を脱いで水浴びを行う。

身体を動かした後の水浴びはやはり気持ちが良いものだった。特に、今日のは。

「……………楽しいと思うのは随分と久しぶり。……………そうだ。お父さんと一緒にしてたあの頃と、同じ……………かもね」

目を瞑り、浴びる水を感じながら　過去の記憶を呼び起こす。

何度も何度も同じ位置に蹴りを放つ。繰り返し繰り返し、技術を学ぶ。この格闘術は

臨んだものじゃなかった。無理強いされたものだ。

父親は、何処か現実離れた強い理想を持っていた。心底くだらないと思いつつも、技術を学び、習得し続けた。……そして、心底くだらないとアニは思い、軽蔑さえしそうな父親だったのだが、最後は父と約束をした。涙ながらに懇願する父親を見て。

——帰ってきてくれ。

そう願う父親を見て。

その時 アニの中で父親に対する想いが変わり始めたのだ。

「何で、思い出すんだろうね。こんな時に」

きゅつ……と蛇口を捻り、アニは水を止めた。滴り落ち続ける雫が、やがて止まった頃に アニは目を開いた。過去の思い出に浸る事が出来た闇から、この残酷な世界を視界に入れた。

だが、何故だろうか。

目を見開いてみても、何度も目を瞑って開いてみても、……以前程、この世界は残酷だと思えない自分もいた。

いつからこう思い始めたのか、もうアニにも判らなかつた。判るのはつい最近までは、そう強く思っていた、と言う所だけだ。

『うおーい あーにー！ まだかー。そろそろ行かねえと小言喰らうから早くしてくれー』

不意に、外から声が聞こえてくる。

何処か呑気な声。朗らかな声。……敵である筈なのに、心底落ち着ける声。

「……あなたは、いったい何なのですか？ あなたは、悪魔の末裔……本物の悪魔そのものなのですか？ ……あなたは」

呼びかけに返事を返す事なくアニは、閉じられた扉の向こうにいる人に向かって、問

いかけた。

この世界の真実を、少なくともこの壁中人類よりははるかに知っている。100年と言う長い月日を閉じこもっていたこの人類よりも。

アニたちは 壁中人類の事を《悪魔の末裔》と呼んでいる。

だが、目の前の男は…… アキラと言う名を持つ男の力を前にしたら、そんな生易しいものじゃない、と思えた。

だからこそ、アニは問いかけたのだ。……間違いなく聞こえない程の大きさで、声の届かない距離にいるアキラに。

「あなたは、この世界を壊してくれますか……？」

そして——時は進む。

ウォール・ローゼ内にある調査兵団が保有する施設の1つ。

そこで104期のメンバー全員が待機命令が出ていた。勿論、その理由は伝えられていない。

そこを監視するミケ分隊長を含んだ兵士たち以外は。

「なあトーマ。確か今日はアキラが来るって話だったっけ？」

「そう聞いています。……やっぱりアキラが来てくれた方が有難いですね。いい具合に兵士たちが落ち着いてくれますから」

アキラ人気は留まる所を知らない。

リヴァイ兵長やエルヴィン団長よりも、ある意味アキラが受け持った期の訓練兵たち

の間柄では非常に高い。特に大規模遠征が起きた後はより顕著に表れている。

何せ、その時初めて目の当たりにした者たちが多いからだ。あの異常な力を。

そんな男だからこそ、怪奇な目で見る者だつて少しはいたが、直ぐに消し飛んだ。

巨人に蹂躪された恐怖を知っているからこそだ。

巨人を叩きのめしてくれる瞬間が目には焼き付いて離れないから。それでいて、あの人柄だから。

「……お前たち。アキラに期待する気持ちも、頼りたいと言う気持ちもわかる。……が、それでも、彼を頼り過ぎる様な真似はするなよ。オレ達で出来る事は全力でやる事も忘れるな」

後ろで控えていた分隊長ミケは、話し込んでいるナナバやトーマに釘をさす。

異常な力を持つている以外は普通の人間だ。あまりに力が強力すぎて忘れがちにはなるから、それだけは忘れぬようにと。

「勿論だよミケ。……際限なく無茶させてたら、正直、立つ瀬がない。何せ一応私は彼の先輩だから」

「オレも同感です」

時折、色々と口には出すものの、心の底からそう思っている様な者はこの調査兵団にはいない。いるとすれば中央王都の者くらいだろう。

そして、施設内の一室で、104期のメンバーがいた。明らかにだらけた様子で、外を眺めているコニーとサシャが不意に口にする。

「きよーは、教官休み日でしたっけ？ また、チエスの勝負をしたいんですが」

「アホかサシャ。昨日と同じこと言ってるぞ。教官も暇じゃねーって事だ。それにまた勝てもしねえのに挑戦すんの？ 肉とかが かかっているからって」

「肉は何よりも大切な宝でしょ。そんなの景品にしたゲーム、参加しないのがどーかしてるんです。つまり、コニーがどーかしてるんですよ」

「なんでオレだけだよ。ああいう頭使う遊びは嫌いなんだ。疲れるから」

何もする事がなく、2人はただ談笑するだけ。

他の者たちも大体似たようなものだった。

「んー、でも 確かにアキラ教官がいると 色んな意味で盛り上がるからなあ……」

「ほら、コニーだって似たようなものじゃないですかー」

「だってよー、やる事無いじゃん。ぼくくくくつと一日中過ごすのに比べたら断然そっち。なら、近くにオレの村あるし、抜け出てやりたいよなあ」

「えー、それも前に聞きましたけど、そんなに帰りたいたいですか？ 私なんてまともな

人間になるまでは帰ってくるな、って言われてたんですよ。あー、まともになりま

したくって証明書あるなら、作ってもらいたいですね。教官あたりに」

「バカかサシヤ。どこの世界にパン狙って教官に飛びつくまともな人間がいるんだよ」

「もー、さつきから、アホとかバカとか。言ってる人の方がアホでバカなんですからねー」

何処か幼稚な会話だった。

それを横で聞いていたライナーは、大きくため息を吐く。

「……お前らなあ、この状況を少しでもおかしい、って思わないのか？」

「はい〜?」

「何がだ?」

ライナーの言葉を聞いて、全くわからない。と言わんばかりな反応を見せる2人。聞き返してはいるものの、身体は完全なだらけモードだから、あまり頭の中にまで入っていったいのだろう。

「考えてもみろ。何で私服でいつまでも待機なんだ?おまけに『戦闘服も着るな』『訓練もするな』だぞ? 前提がおかしいじゃねえか。オレ達は兵士なのに? それに見ろ」

そして、次にライナーは窓の外を見た。サシヤやコニーの様にただ単に視線を向けて

いるのではなく、巡回をしているのであろう、調査兵団の兵士、つまり自分たちの上官たちに視線を向けた。

「外の上官たちは完全装備だ。そこも疑問だろう？　ここは前線でもねえ、壁の内側だぜ。あんな装備必要とは思えねえ。いったい何と戦うってんだ？」

「ここまで言われたから、漸くコニーとサシャも考え込んだ。しっかりと頭の中を整理？　しながら。」

「うーん……、ああ、あれだ。この辺りは確かクマが出てた筈だ。オレの村でもけっこう、大変だったそうだからなあー」

「ええ、森も近いですし、クマですなえ。クマもお腹すいてたら、巨人バりに、とは言いませんが、人間も喰います」

「まともな回答が返ってくる事は無かったから、ライナーはまた　ため息を。」

「クマ相手なら、鉄砲で良いだろう？　動物は学習能力が巨人より遥かにあるんだから、一発撃てば逃げる。だから、あんな装備は必要ねえ。……それに、他のみんなも見てみる。アキラ教官が来てる時は　忘れがちになってる様だが、みんな　今の状況の意味、それが訳が分からなくて困惑している、つてのが正直な感想だろ。いつまでも呑気にくつろいでんのはお前らだけだ」

「ライナーはすつ、と視線を鋭くさせた。」

「オレはいつその事、抜け出して上官の反応でも伺いたい気分だ」

「……そんな事していいんですか？ アキラ教官に投げ飛ばされても知りませんよー。いつかの時みたいに」

「身体動かさず、だらだらするよりはマシだ」

「んー……、そうですね。……ん。………んん？」

この時だった。

ただ、何となくライナーの話を聞いていただけだったサシヤ。対して深く考えもしてなかったのだが、ほんの一瞬。何か違和感を感じられた。いうならば、空気が震えたような、そんな気配。

だから、サシヤはぺたつ、と机に耳を当てた。振動は地中を伝わり、この建物——ひいてはこの机にも伝わるからだ。空気の震えより、よりわかりやすく、聞こえてくるから。

サシヤはただの気のせいだろう、と思いつつも、耳を当てて……音を聞く。

そして、小さな違和感は、やがて確信に変わった。

「あれ!! 待つてください!! ちよつと足音のような、地鳴りが聞こえてきます!!」

突然のサシヤの発言。あまりにも突拍子もない事ではあるが、声が大きいかから全員の視線が集まった。

そして、サシヤの言葉を思い返す。

足音が聞こえる。それも地鳴りと聞き間違える程の大きさの足音。そんな足音をたてるモノがいたとすれば、野生動物ではありえない。……つまり、必然的に1つの答えにたどり着く。信じたくない——考えたくもない答えに。

「何を言ってるんだサシヤ？　ここに巨人がいるって言いたいんなら、そりや、ウォール・ローゼが破壊されたって事だぞ？」

ライナーが口にするのは　考えうる最悪の事態である。

そして、時同じくして、外で待機しているミケにも感じられていた。常人よりも何倍も優れた嗅覚は、サシヤの聴覚よりも更に鋭く、正確にその事態を把握した。
最悪の事態の。

「トーマ!!　早馬乗って報告しろ！」

「……………?　はい」

まだ殆ど目視できない。大き目の木と見間違えもある距離だが、間違いなくこの先からくる、とミケは確信し、命令を下した。トーマもミケに圧倒される形で、何を報告するのか？ と聞く前に返事を返す。

尋常じゃない気配に、ナナバも身を乗り出した。

「どうしたミケ？」

「……来るぞ」

「……何？」

睨む先は南側。そして、その口から出てきたのは信じたくない事実。

「おそらく104期調査兵団の中に巨人はいなかった……。南側、凡そ500m先。巨人が多数襲来」

そして、聴て目視できる程の距離にまで迫る。確かに動く影が見えた。……木よりもはるかに大きな影が。

つまり、それが意味するのは、ただ1つだけ。

「ウォール・ローゼが突破された!!」

56話

104期兵たちが隔離された施設はウォール・ローゼ内地、エルミハ区。ウォール・ローゼとウォール・シーナの壁の丁度中間地点に位置する場所だ。

そんな場所で巨人が現れた……となれば、間違はなくウォール・ローゼが突破された
としか思えない。そして、それは悪夢以外の何物でもない。

だから、サシャの言っている言葉が信じられなかった。否、信じたくなかったというのが正しい。でも、サシャは意見を曲げなかった。

「本当です！ 確かに足音が聞こえたんです！ 凄く大きな音が！」

身振り手振りで信じてもらえる様に大きな声でいうサシャ。

行動のロスの1つが命を分かť事をサシャは知っているからだ。自然に生きてきた者だからこそ。

その時、来訪者が突然窓の外から現れた。

その者はナナバ。104期メンバーを監視している上司の内の1人だ。
「全員いるか!？」

普通は外から、それも二階の窓からくる事なんてない。でも、立体起動装置を使って最短距離で入ってきた事そのものが緊急性を表していた。

そう、サシヤが言っている事が事実であるという事。

「ナナバさん!？」

「500m先。南方より巨人が多数接近。こつちに向かつて歩いてきてる。君たちに戦闘服を着せてる暇はない。直ちに、馬に乗り、付近の民家や集落を走りに回って避難させなさい。……いいね?」

ナナバは落ち着いている様に見えた。

だが、その話の内容は悪夢再来だったから、絶句してしまう。

「南方……から?」

「あつ……」

コニーの呟き。それに絶望が絡みつくように聞こえるのは、彼の故郷が直ぐ傍にあるから他ないだろう。そして、何よりこれで証明になった。

「壁が……壊されたってことなのか……?」

周囲に緊張が走る。が、その硬直してる時間も惜しかった。

「残念だけど、仕事が終え割るまで、昼飯はお預けだ！ さあ、動いて!! ぼけつとしてられるのも生きてる間だけだよ！ それに、言っただろう？ 調査兵団で一番許されな事は死ぬ事。……私は誰も死なせるつもりはないよ！」

ナナバはそう伝えると、即座に窓から屋根に飛び移る。

そして、南方を監視しているミケの傍へ。

「ミケ。巨人の位置は？」

「……前方だ。鼻で分かる限りではな……。間違いなく、前方の木で見えないが、あの先に少なくともあの一帯に15体いる。……いや、まだ増えているな。鼻が効かない程の変化は初めてだ」

風に乗って、振動音が聞こえてくる。間違いなく聞こえてくる。巨人が内地深くに侵入してきたという何よりの証拠。ミケの並外れた嗅覚で察知するまでもなかった。

「再び、壁は破壊された……。そうとらえるべきなのかな……。？ トロスト区やクロールバ区がやられたのだとしたら、報告があるはず……。？ 扉部分以外の壁を壊されたのだとしたら、壁の破壊の規模は計り知れない。……。？ そもそも、壁に開けられた穴が扉部分だったとしても、それを塞ぐ術は？ 一体どれだけかければ出来る……。？ 以前の様に、エレンが塞ぐような事も、難しい。都合よく大岩が転がってるとも限らないからね」

考えるだけで悪夢だ。

悪夢で最悪の結果。

「巨人は、調査兵団が……合計で どれだけ殺してきたか、ミケ。数えた事ある?」

「……………いや、自分の班の兵達の討伐申告数、そして自分の討伐数しか知らん」

「私は、ね。アキラが来た日から……、アレを見せられた日から出来る限り、数えてきたよ。判る範囲ではあるけれど、多分、1000は余裕で超えてると思う。……………私が言いたい事、判る?」

「……………」

ミケは何も言わなかった。

ナナバは、更につづけた。

「どれだけ殺しても、巨人が減る気配が見えないんだ。……………今回の大量発生もそう。マリア内の巨人討伐もそう。……………殺しても、殺しても、あいつらはまるで増え続ける。……………終わりが見えない。……………私は、リヴァイ兵長、アキラに頼り過ぎてしまってるって、今ほど思った事はないよ。まるで、薄氷の上を歩いている様にも思う……………」

目の前で巨人を屠る姿が目に見えぬ。そんな人が傍にいるから、安心できるし、絶望などは絶対しなかった。でも、無情な現実を突きつけられて、無力感に苛まれてしまうのだ。

「それに加えて、超大型巨人の正体も鎧の巨人の正体も……………他にいるかもしれない敵勢

力も、何も判らない。更にはこの現状だ。……………どうして、私はこんなにむりよ
「いいや、違う」っ」

ミケは力強く否定をした。

「確かにオレ達の力は小さい。調査兵団としての力を言うならば、……………大きくなり過ぎ
たと言っている。個の力が次元を超えたのだから、そう錯覚してしまうのも無理はな
い。……………だが、断じて無力などではない。戦い続ける事が出来るのなら、無力なんか
じゃない。……………負けもない。戦う事を、止めた時に……………オレ達は無力になる。……………オレ
達は敗北した事になる。そして何より、頼っていると云ったばかりのアキラが一番嫌う
言葉でもあるぞ？ 今のは」

次にミケは皆を見下ろした。急いで馬を用意する兵たちが見える。

「皆には申し訳ない事をした。我々に従ったばかりに、この状況に放り出してしまっ
たのだから」

「……………ああ、情けない所は見せられない。……………怒られちゃうよ。アキラに。もし、彼らの
1人でも死なせたら。それは私達の恥だ。必ず、誰も死なせない」

「ああ。……………戦うぞ。まずは 巨人群が林まで到達したら一斉に離散し」

ミケが今後の作戦を頭に思い描き、実行させようとしたその時だ。

凄まじい轟音が響いた。まるで砲弾でも撃ち込まれたかの様な衝撃。そして沸き起

こる土煙。

「な、なんだ!?!」

ナナバは思わず顔を上げた。まさか、もう巨人が接近してきたのだろうか? と思っただけだ。まだ少なくとも目算では500mは離れている筈なのに。こんな無防備な所にまで接近されたのか? と。

だが、それは違った。

「離散するのはまずストップ。一先ずここに籠城しろ。全員散らばらず何処にも行くな」

轟音の後に、その土煙部分から何かが飛び出したのが見えた。そして、それは ナナバとミケの所へ。いつもの飄々とした態度は息を潜め、真剣な顔つきになっている男。……アキラだった。地獄に神を見た瞬間でもあった。

「アキラ!?!」

「おう。間に合って良かった。トーマのおかげ、けどどな、灰色の信号がこの空に上がった時、正直目を疑ったぞ」

ギロつと視線を前方へと向けるアキラ。

そう、一足先に調査兵団本部へ知らせる為に走らせたトーマが、咄嗟に信号弾を空に打ち上げたのだ。調査陣形をしている時に主に使われるものではあるが、構わず撃ちは

なった。

誰かが見ている事を願って。……そう、アキラが見てくれることを願って。

「それでどう思う？　こんなところまで招待するつもりは全くなかったんだが、壁を壊されたと思うか？　つてか、アニ。お前さんたちの力で壁に穴開けれんのか？　扉とかじゃなく、壁そのものに」

「……難しい、としか言えません。私はですが」

「そっか。お前さんは、か」

しれっと横にいるのはアニだった。まさか直ぐ傍に女型の巨人がいるとは思わないうだろう。アキラが来たことで安堵し、注意力が散漫になってしまったから、と言いつきは出来るかも知れない。

そして何よりこの現状。目の前の女が引き寄せた可能性も否めなかった。

「つ……！　アニ、レオンハート！」

「どうどう、落ち着けナナバ。だいじょーぶ。オレが見てるし。オレの傍限定で、大人しくしてる、つて約束してくれたし。な？」

「……約束、と言うか。私にはどうしようもないですから。アキラさんの傍なら」

視線は決して向けない。南側を見続けている。アキラと並んで立つ2人を見て、何処か妙な気配を感じた。それを見たからこそナナバは笑い、力を抜く事が出来たのだか

ら。ミケも同じ気分だったのだろう、軽く笑っていた。

「……………随分と信頼を築けた様だな? アキラ」

「あん? オレは教官だぜ。生徒と教官って、それなりに信頼出来てねーと成り立たねーだろ? それに、あーんなヤバい訓練だったら猶更だ」

アキラの回答を聞いて、強張らせていたナナバは身体から力を抜く事が出来た。

そもそも、アニ・レオンハートは幽閉していた。外との連絡手段は現時点ではありえないから。

「……………ふふ。やり過ぎて、拗らせないようにね。……………色々」

落ち着けたからこそ、今度は生暖かい目で見守る事に努めるナナバ。

何だか妙な感じがしたのはアキラも同じ。でも今は忙しいから。

「それは兎も角、あの巨人群をとりあえずぶっ潰してくるから、お前らはこっから動くな、つてあいづらにはオレから言っとく。言い方は悪いが、バラけるより密集しといてくれた方が巨人集中してくれてやり易い。……………動くのはそれからだ」

アキラは そう言うのと眼下に飛び降りた。まだはつきりと状況を察してない104期のメンバーたちの前に。

いきなり上から人が降ってくるなんて状況にビックリしない訳はない、が 誰が来たかが分かったから直ぐに納得できた。

『アキラ教官っ!?!』

「よーし お前ら。とりあえず此処を動くな。んで、オレが時間は作ってやるから 十分に装備も整えておけ。撤退するにしても、周囲を散策するにしても、装備がないと話にならん」

ぐるんつ、と腕を回して背を向けた。

「いやいやいや！ きよーかん！ ちょっと待っててくださいよー」

「んあ？ なんだサシャ。今ヤバいトコって事判ってんだろ？ お客さんが大量に押し寄せてきてんだから、割り込み禁止札でも立ててこねーと」

「訳わからん事いわずに聞いてください！ ちょっとで良いです！ ちょっとだけで！

なーんで、アニが此処に!?! しれっと傍にいますけど」

「なんだそんなことか。だが、よく判ったな。その通り、アニだ。……サシャの癖に」
「いや、判るでしょ！ ていうか、サシャの癖にってなんですか！ それ位わかりますつてー！」

「……………」

話題の中心人物であるアニは、一瞥するだけで殆ど無視していた。

「アニの存在に驚きを隠せられないのは、無論サシャだけではない。アニの事を知っている104期のメンバーなのだから。そして、その正体については秘匿になっている。事実を知っているのは数少ないメンバーだけなのだから。」

「仮に、知っている者がいるとするなら……。」

「ッ……、な、なん……で？」

「……アニ」

それは、敵側の巨人とつながりが有る者に限り、だろう。

今回は、確かに言い方は悪いがアニを使った探りをそれとなく含んでいた。……が、こういう状況になった以上すべき事を優先させる。つまり、巨人の殲滅。兵士たちの命を何よりも優先させる事だ。

ここでアキラがはつきりと皆の反応を見てなかったのは、敵側にとっては完全に幸運だったと言えるだろう。他の者たちとは異なる反応を見せていた。露骨に驚いていたのだから。

「(……………馬鹿)」

冷静なポーカーフェイスなアニは、あからさまに驚きを隠せられてない所を見て

軽くため息を吐いていた。皆驚いているから、木を隠すなら森、と言ったように紛れ込ませているかもしれないが、驚きの質が違う。……驚愕、という言葉が何よりも当てはまるとアニ自身が強く感じたからだ。

「おー、そういうやお前らに言っただけでなかったよな。アニは、アレだ。ほれ、……オレの、秘書？　そう秘書だ。専属の」

「……はい？」

涼しい顔してそっぽ向いてたアニ自身が『アンタ何言ってるんだ？』って言わんばかりの表情でアキラを見てたから、他のメンバーの疑問が解消されるわけもなく、今にも追及しそうな感じだった。

そしてアニは呆れと同時にこう思う。

「(……イルゼやペトラあの人たちがいなくて良かったですね)」

間違いなく話が拗れそうな気がするからだ。こんな状況だということにも関わらず。

それこそが力の信頼だと言えるかもしれないが、やはり空気と言うものは読んでいた
だきたい。

因みにアキラはと言うと颯爽と話を終わらそうとしていた。説明するには時間が足りないから。

「まあ、詳しい事はここに来る連中をやった後だ。とつとと動けお前ら。これは訓練

じゃねえぞ！ 30秒以内だ！ 1秒でも遅れたらダツシユ10本追加！ よーいはじめー！」

まさに教官時代のノリ。

目の前には巨人の群れが迫ってきているというのに、あの時の空気。

様々な感情が渦巻いていた。まだまだ落ち着けるのには時間がかかる筈だった。でも、この空気のおかげで初心に帰る事が出来た様だ。

だからこそ、胸に拳を。……敬礼をした。

そして、その後のアキラの反応も勿論全員が知っている。

「アホ。オレに何回言わす気だ？ お前らの心臓なんざ要らんつつーの。とつとつと行け」

57話

「……………ふうん、まだ増えてるな」

巨人の群れが接近している。

ミケが鼻で感じる、と言っていた数は約15体と言っていたが、はつきりと見えてきたその数は、明らかにそれ以上。倍、3倍、判らない。

いったい何体現れているのか、判らないレベルで巨人の群れが迫ってきている。まるで湧いて出てくる様に。

基本的に、人間を喰う事以外の考える頭があるとは思えない巨人が、一点集中で向かってくるのは初めてではない。

巨大樹の森で、人体実験の様なのをやらされた時にも巨人は減る気配が無いくらいの勢いで出てきていた。

これはあの時の数よりも更に多く感じる。……今までを含めた記録更新かもしれないな
かった。

そして、もう一つ感じた事がある。

「それにしても、随分状況が似てるな。マリアの時と一緒だ」

思い返すのは、あのウォールマリアが突破された時の事だ。

同時に、調査兵団の遠征の日でもあった。遠征の際に、巨人の群れに出くわした。犠牲を出しながらも、時間をかければ十分に殲滅出来る筈だったのだが、突如巨人たちは意思統一をした様に一齐に動き出したのだ。

そう、マリアの壁の方へと。

自分の後ろには、104期の兵士たちがいる。……あの時の襲撃では、何人も犠牲になつた。その時と状況が似すぎている。違う点があるとすると、今回は自分が前にいる事。

壁を越えて襲おうとする巨人の前に、立ちほだかる事が出来ているという事。

「この状況で悠長に考え事が出来るんですね」

アキラの傍にはアニがいる。

少しだけ話を聞いてみると、どうやらアニは別にあの巨人たちと友達でも仲間でもないらしい。女型の巨人の時は引き連れられて迫っていた様だが、人間の状態ではそんな真似は出来ず、襲われるとの事だ。

「ああ。余裕だな。あの程度、あのくらいじゃ」

「アレだけの数を あの程度ですか……」

「お前さんも判ってるんじゃないのか？ ああやって、直接オレントコに来てくれる方が何百倍も有難いし、やりやすいなーって」

アキラの言葉に、アニは軽く目を閉じた。

確かに、壁の外では巨人が支配するこの世界において、自分たちの目的を達成する為には、それを圧倒する力を持つ者を、限りなく遠ざけ無ければならない。

そうしなければ、瞬く間に巨人は蹂躪されるだろうから。……作戦を完遂する為にはそれ以外の方法は皆無だ。

だからこそ、調査兵団が遠征に向かったあの時に、マリアの壁を破ったのだから。

「さて、今ントコ 散開しそうな気配は無いな。少々散らばってんのが めんどくせえけど、やってたら向こうから群がってくるだろ」

アキラは迫る巨人たちをただただ見ていた。

最初は15だと思われてた巨人の数が、20に、30に、今では木なのか巨人なのかよく判らない程。まるで巨人の森だ。まだ増えるとさえ思える。

そして、それらを見て考える事はただ1つだった。

「アニ。お前さんが巨人にならねー、巨人の力を使わねーって言うのなら、オレの傍にい

ろ。今のオレの傍が安全地帯だ。……壁ん中よりもな」

「そんなこと、百も承知です。……多分、私が巨人の方へ向かっていっても、止められそうです」

「当たり前。行かさねえし、逝かせねえ。そこんとこ判ってんなら良しだ。判ってんなら、ぜってー離れんなよ？ 監督不行き届き、って怒られるのも嫌だ」

アキラは軽く笑みを見せた後、再び表情が戻った。険しい顔に。兵士であり、巨人側にとつてはまさに悪魔な顔に。

「……さて、ゆっくりしとけつつた手前だ。生徒あいつらにも良いトコ見せねえと」

アニの持つ女型の巨人は、他の巨人を呼び寄せる力があるのは、あの巨大樹の森での一戦で判っている。更に言えば、あの瞬間以外に アニに襲い掛かる巨人はいなかった。戦闘の余波で吹き飛ばされた巨人は何体もいたが、アキラ自身に襲い掛かうとした巨人はいたものの、アニには一切向かっていってない。……が、それはあくまで女型の巨人の状態の時に限りだ。人間の姿では 当然標的として襲われてしまう。

それでも、アニはどうやら この状況でも女型の巨人の力を使うつもりはないと断言していた。

同期のメンツにバレたく無いのか、実は傍に仲間がいるためなのか、此処で死んだら

それはそれで良いと考えているのかは、真意は不明だが。

アキラは拳に力を入れた。

まるで周囲の空間に歪み？ でも現れたのか、或いはその尋常じやない気配が可視化されでもしたのか、視界がおかしくなってしまったのか。

「……………」

そんなアキラを見て、アニは考える。

いつもの調子で話をしているが、今は尋常じやない程の怒りで満ちているだろうコトがはつきりとわかる。もし、ここに自分やあの104期のメンバー、他の調査兵団のメンバーたちがいなければ、怒りで我を忘れるのではないか？ と思う程だった。

先ほどから見ているのは巨人の群れだけではない。その背後。……あの先には 大小多数の村が存在していた筈だった。地理については、アニもある程度は頭に入れてくるから直ぐに判った。そこから、巨人が押し掛けてきているとなると、村がどうなったのか、考えるまでもない。

それらの怒りを、ただただ拳に集中させる。巨人を容易に粉碎するその拳に、怒りを集中させる。そんな状態なのだから、空間の1つや2つ、歪んだ所で驚かない。

「……………さて、かかって来いよ。巨人ども。一匹残らず蹴散らしてやるからよお……………」

ただ、アニはこうも思う。

怒りに満ちるアキラを前に、こう思う。やっぱり考えてしまう。

巨人の正体。それを知った時、アキラはどう思うのか、……と。

場面は代わり、時間も数分遡る。

全長約17mの巨人がゆっくりと歩いていった。

一斉に迫っていた巨人たちと違って単独行動。この時点で奇行種の類であると想像できるが、それ以上にこの巨人は他の巨人とは圧倒的に違う所があった。

「オレの巨人たちは上手くやってるかな……う？」

そう——この巨人は、この巨人はエレンやアニの様に巨人の鎧をまとった人間だった。

そして 今回の巨人騒動の首謀者である。

その身体は他の巨人と違い、全身が体毛に覆われ、まるで猿の様な姿の巨人だ。

まるで散歩を楽しんでる様に、周囲を見渡しながら 巨人の群れが突き進んだ方へと歩を進める。

「前々から思ってたけど 視界が高いつてのは、結構良い気分だよなあー。……さて、ピークちゃんとも合流しないと。……ん、んー、合流より 空を飛び回る道具つてのを見てみたいいな。欲を言えば1個でも貰つとききたい」

壁内に災いを呼ぶ存在。いや、元凶ともいえる男は悠然と歩を進め続ける。ここへ来る道中で、複数の村を襲い……そして ある施しをし、最終的には壊滅させた。

ただ——作戦通り、順調に事が進んでいると疑っていなかったこの男には1つ誤算があった。

彼は、知らなかつたのだ。

なぜ、壁内調査に向かつた仲間たちが何年も戻らなかつたのか。

調査兵団の主力兵器と呼べる立体起動装置の事は知っていても、それ以上に凶悪な存在がこの壁内にいると言う事実。

壁中人類は、悪魔の末裔……と呼んでいる。

その悪魔そのものだと言つても良い存在が、この壁中にいるという事実を。

「……なんだ?」

歩を進め続け、聴て森林が見えたその場所で、事実を直ぐに知る事になった。

一瞬、空気が震えた気がした。それと同時に凄まじい轟音も轟いていた。

「大砲でも用意していた、ということか?」

轟音の正体。大砲か何かを撃つたのだろうか、と解釈をしていた。無数の巨人が一斉に攻めてくるのだから、それ位するだろう、と。

だが、不可解な事にその轟音は連続して起こる。起こり続けた。まるで大砲の乱れ撃ちだ。

「いったいどれだけの数の大砲^もを準備してたってんだよ。離れた辺鄙なトコだったのに。用意周到な奴らだ」

だからこそ、歩く速度を上げた。

あの数の砲撃を受けたとなれば、幾ら巨人と言えど無事にはいられないだろう。例え項をつぶす事が出来てなくても、今も続く轟音は確実に巨人の行動を削ぐはずだ。

「くしくも同じ得意分野。投げ合いなら負けるつもりは無いな」

男は、傍にあった大岩を片手で持ち上げると、力任せに握り砕いた。

「予定ではもつと奥での筈だったが……ん？ んんん??」

岩に向けていた視線を再び前方へ戻した時、自分の目を疑った。

「なんだ……？ アレは」

どう表現したら良いのかが判らない。ただ、起こっている事をそのまま口にするとすれば。

「……オレの巨人が吹き飛ばされてる？」

目に映るのは、宙に浮く無数の巨人。

巨人が、吹き飛ばされている。まるで紙切れか、舞い落ちる木の葉の様に宙を数秒漂

い、そして落ちていく。

そして、轟音と共に雄叫びが聞こえてきた。まるで自分が巨人に命令する時の様な、轟音にさえ劣らない程の音量で。

『オレは此処だ！ かかってこい！』

巨人は人間に、そして音にも反応する。

人間が大声をあげながら走り回っていたとするなら、それは格好の餌食だと言えるだろう。

ただの、人間であればの話だが。

「アレは、なんだ……？ なんなんだ……??」

まるで暴風、竜巻でも起こっているというのだろうか、巨人たちが吹き飛ばされ続ける。

やがて、その暴風が、竜巻が鎮まった所で、目が合った。

「……へえ。初めて目にするな。人間っぽくない巨人。その見た目、猿の巨人と言った

所か?……てか、そもそも巨人って髪以外に毛、生えるのな」

はつきりと見えた。まだ、距離はあったが、はつきりとその姿を見る事が出来た。

「にん、げん……?」

彼はまだ自分の目を疑っていた。

それと同時に、必死に理解をしようとしていた。何故考え付かなかったのだろうか、とも思っていた。

人間が巨人になる事が出来る、不可思議現象があるのなら、人の姿のまま巨人の力を、それをも上回る力を有する者がいるかもしれない可能性を。

「う、うおおおおおおお!!」

だからこそ、反射的に叫びあげた。

今持ち得る戦力を全て、あの得体のしれない存在にぶつける為に。自分自身の本能が全力で警笛を上げていた。

——アレは、あのイキモノは危険だ。

と。

「……成る程。あの猿にはアニと似たような力がある、って訳か。ハンジン時以来だな。ありがたくないモチ期。向こうからこんだけ寄ってきてくれてんだから」

アキラは、あの猿の様な巨人が叫び声をあげた途端に、明らかに表情が、目が変わって一斉に襲い掛かってきたのを見て直ぐにアニを連想させた。自分自身におびき寄せ、自分を食わせ、脱出したあの時の事を。

これまでは 先ほどの様な叫び声と轟音、つまり殴る音でおびき寄せ、一網打尽にしていたのだが、どうしても離れた巨人がかかるには少し時間がかかる。一匹たりとも後ろへ抜けさせない様に戦っていたアキラにとっては、この状況は好都合以外の何物でもない。

「あ……、なっ……」

ただ、その後ろでアニは驚いていた。

今まで表情をあまり変えなかったアニが、今日初めて変わった瞬間かもしれない。

「なんだアニ。アレは見知った相手か？」

「ツ……」

その表情を偶々目にしたアキラは、アニにそう聞くが 返答が返ってくる事は無かった。

「ま、ゆつくりで良いや。更に湧いて出てきた奴ら全部ぶつ潰さなきゃなんねーし」

ぐるん、と腕を一度回し、これまでにない速度で迫ってくる巨人にカウンターの拳を入れた。

全速力で突進する巨人の勢いとアキラの拳の威力。

勿論、巨人は抗う事が出来ず、ただ身体がバラバラになりながら吹き飛ぶだけだった。同時に周りに迫る巨人を巻き込みながら。

「ほんと殺りやすい。向かってきてくれる方が万倍ありがてえ。……今までコソコソしてたもんな、巨人の癖によお……」

大地を強く踏み、拳を眼前に構え、アキラは この巨人を屠る力を、言霊へと変えて、叫んだ。

「纏めてぶち殺してやるから、さっさとかかってこい猿野郎！」

58話

叫びを上げた。声の届く範囲の巨人が全て反応した。数を数える事すら億劫に感じる程の巨人の群。たった1日で街を壊滅させた巨人の数よりも遥かに多い巨人の群。

その巨人たちに下した命令はただ1つ。シンプルな命令。

『あの男を殺せ』

巨人にとって、人間はただの攻撃対象。命令されようがされまいが音に反応し、そして人間の姿形を確認しさえすれば、ただただ喰らいつく。長年見てきた光景だ。

そう、無数の巨人の一斉攻撃を正面から迎え撃つなど、操る術を持つ例外を除けばではあるが、例えば巨人の力を見に奪った者であったとしても無謀の一言に尽きる。

巨人の力は強大だが、無限で、無敵はない。力を使い、消耗すればするほど、巨人の力は使えなくなる。

そして——聽て喰われてしまう事は容易に想像出来る。

だが、目の前の光景はどうだろうか。

巨人がまるで人形のように吹き飛ばされ続ける。高く舞い上がった巨人は、大地にその身体を叩きつけられ、部位折損する。再生はするし、向かつていきはするのだが、結果は目に見えていた。

何度挑んでも、無意味。項を破壊しない理由は不明だが、あれ程の破壊力で攻撃を加え続けられれば何れは、急所である項を破壊され、消滅する。

巨人を屠り続ける。

ただの人間が巨人を屠る。

否、アレが明らかにただの人間であるとは思えない。

ただの人間が、その体躯で巨人に抗える筈がない。巨人に蹂躪される人間を幾度となく見たからこそその感性だった。つまり有り得ない光景だ。この世のものとは思えない光景だ。

「……アッカー、マン？ いや、違う。アレは副産物。あくまで 一部巨人の力を引き出せるに過ぎない。……あんなのは、ありえない。巨人の、ちからを はるかに……」

まるで悪夢を見ているかの様だった。

「アキラが猿と呼んだ巨人は、正しくは獣の巨人と言う。その獣の巨人を纏っている男こそが、今回の巨人強襲事件の首謀者。」

そして、鎧の巨人、超大型の巨人、女型の巨人——壁を破壊した者達の身内。しびれを切らせて出てきたのは良いが、目の前の光景にはただただ啞然とするだけだった。

そして、次の瞬間には、特大の一撃が15m級の無垢の巨人を吹き飛ばした所で、獣の巨人までの《道》が出来た。

まだ遠目だったが、はつきりと目が合ったのが判る。

「——よお、デカイ部下たちにはぶつかに任せて、まだ引きこもり続行つてか？ それに随分上手く巨人を飼慣らして居るじゃねえか……。調査兵団のハンジが知ったら、泣いて喜びそうだな、こりゃ」

無数の巨人の血をその身体全身で浴び、血に染まり、更にその血は瞬く間に蒸発していく。赤い霧に包まれたその男の姿を見て、頭に過ぎったのは1つの単語。

「悪魔……ッ!?!」

化け物でも良いだろう。だが、悪魔と形容したのには、この時の彼は判つてなかったがある程度の理由はある。

化け物、と言う言葉はよく使われてきた事だから。自分たちの一族の事で、幾年月も使われ続けたから。

だから、化け物は知っているつもりだった。

だが、アレは、化け物を超えている存在だ。

「う、うおおおおおおおおおおお!!」

自身の中で恐れが増大していくのが判る。それを振り払うかの様に再び叫びを上げた。

絶命していない巨人たちは、それに呼応する様に一斉に飛びつくが。

「わらわらと、ったく。そう言うモテ方ごめんだってんだ！」

少し時間は稼げたものの、呼び寄せた巨人達は 結局は吹き飛ばされた。

「寄ってきてくれんのは正直ありがてえけどなあ……」

「私が傍にいては 邪魔ですか？ 存分に力をふるえないから」

「アホか。生徒を邪険にする教官がいるかってんだ。それに今アニは秘書つつー肩書も作っただんだけ？ 傍にいてなんぼだろ。あーでも、髪とか乱れるんだけは目、瞑って

てくれ。風圧だけはどうしようもないし」

暫くして、悠長な会話が聞こえてきた。

どうやら、直ぐ傍で誰かを守りながら戦っているという事が判る。誰かを庇いながら、守りながら戦う事の難しさは判る。……それが出来る、と言うのは、それ程までの力の差があると言う事なのだろう。お守をしながら戦える程の。

巨人が通じないのはもう嫌と言う程理解出来た。

それを認める事に時間が異常なまでにかかってしまったが、もう認めるしかない。現実が物語っている。

なら、次はどうすれば良い？

降参し、白旗でも上げるのが得策だと言えるか？

当然ながら、降伏と言う選択肢を選ぶ事は無かった。

——…………オレは、全てを——ために、ここにきているんだ。…………——が、唯一の救い。そう、だろう…………ヴァーさん。平穩を…………、全てはそのために。

ならば、あの得体のしれない悪魔がこの世界に平穩を齎せてくれるか？

恐怖に覆われつつある男にはそうは思えなかった。

最後の一人まで無残に、惨たらしく殺されてしまう所しか想像が出来なかった。

そして、それと同時に 真逆の感情が、まるで闇に差し込む光が差し込む様な感情が出てきた。

決して譲れない強い想い。それが此処にいる理由。…………命をかけるに値する理由。恐怖心を徐々にではあるが押しとどめようとした時。

「ツ…………。ちっ やり過ぎた」

歯噛みする悪魔を………… 人間を見て、光明が見えた。

悪魔にしか見えなかった筈だが、その瞬間 一瞬ではあるが光明のおかげで人間とし

てみる事が出来た。

確かに、異常な力を持っているが、大地に足で立っている。宙に浮いている訳ではない。手があり、足があり、……身体の形は人間と同じ。そして――。

「巨人の蒸気つてのも鬱陶しい事極まりねえよな」

人間と同じく眼がある。

眼で見なければ相手を確認できない。……視界を遮れば……。

――此処しかない。

獣の巨人はついさつき、握り潰し、丁度程よい大きさに分解された岩を思い出した。

攻撃用に備えた礫それは弾丸。強力無比な遠隔の攻撃。接近戦では敵わないのは見て

理解出来た。

遠間からの攻撃ではどうか。相手の攻撃の届かない距離からの攻撃。

「ぬ……う？」

蒸気に遮られた視界。

だが、それは言わば慣れっこだ。何故なら巨人を殺せば発生する蒸気。肉体の殆どが

蒸気となり消滅する。……もう討伐数を数える（実績として必要らしい）のも面倒なくらいの数を屠ってきたアキラにとって、視界が妨げられる事態など大した問題ではない。

以前にも、その蒸気に紛れ 逃げようとしていたアニを見逃さなかった。

だが、今回のソレは今までのとは比べ物にならない程の危険を孕んでいた。

「ッ!？」

舞い上がった蒸気を貫いてくるナニカ。

巨人より発せられている周囲を覆いつくさんばかりの蒸気はおろか、空間そのものを貫いているかの様に貫いてくるナニカ。

それが何なのか、理解する前に アキラは行動をしていた。

「アニッ！ 伏せろ!!」

全力で後方へとジャンプ。アニを押し倒し、庇った。

巨人を前に踵を返すというのは、正直に言えばかなりアキラには抵抗がある事だが、時と場合。

目の前の巨人よりも、大事なのは教え子の命アニの命。

ひよつとしたら、アニは巨人に成れるし、戦っていた時何度か四肢を腕いだりもして
るから、庇わなくても大丈夫なのでは？ とも考えたが、最悪を常に想定するのが基本

だ。

アニを押し倒した次の瞬間、高速で飛来してきた何かが通り過ぎる感覚が背中にあった。

立ったままであったなら、恐らく直撃していたであろう何か。

飛び道具の類を持つ巨人である、と判断したのと同時に、アキラは右手を思い切り上へと突き上げ、そして地面に振り下ろした。

振り下ろされた場所は丁度アニの頭一つ分程度離れた地面。

凄まじい衝撃と音、そして巻き上がる砂塵と罅割れ、陥没する大地。即席の防壁としては及第点だ。

「ンの野郎……。ある意味 デカイヤツ あの超大型より厄介な攻撃してきやがって」

ひよこっ、とアニから飛び起きると直ぐに上へと戻った。

何が飛んできたのか判らないが、まだ巨人はいるため、引きこもってる訳にはいかなからだ。

あの猿の巨人が、全ての鍵を握っている。アキラはそう判断をしていた。アニの様子から見ても大体察する所はある。

つまり、逃がす訳にはいかないのだ。

だが。

「……チツ。確かどつかで聞いた事があるよな。生き残れるのは臆病者か強者とかなんとかって、って。……逃げられちまったよ」

砂塵が晴れた先に見えるのは、無数の巨人の残骸。

飛来してきたナニカは、周囲の巨人にも命中してたらしく、見た通り粉々になっていた。項を抉ってる訳じゃないので、再生している様だが、破損部分はかなり多く、手間取ってる様子な個体もちらほら。

ただ、判るのはあの一度見たら忘れられそうにない特徴がある巨人は姿を消していた。

追いかけるのも有りかと思っただが、まずは情報共有。つまり 調査兵団に報告をしなければならぬだろう。……何より、この先の大小の村の生存確認も優先だ。

巨人が全力で離脱する速度と、アキラ自身の脚力＋立体起動装置。どちらが早いかな。後エレンでも使ってテストしてみるのも良いか？ ともアキラは思う。

「……よけいな実験はいらんか、しなきゃならん事多いし。つつあー、報告とかめんどくせー！ 逃げんなよ。……殺しにきてんだろ？ お前らは」

あの巨人の数を考えたら、……いや、考えたくはない。村の状態がどうなってるのか

など。

アキラは、頭をぶんぶんと振った。そして、帰りを待っているであろうメンバーたちの元へと戻る為、アニを引っ張り上げる。

「ほれ、アニ。ちよつと戻るぞ。ああ、気が向いたらあの猿呼んでくれ。呼び寄せるの得意だろ？」

「……………了解、です。保障はしませんが」

「わーってるよ。んな期待してねーって」

59話

ミケやナナバ達を含む、104期の調査兵団たちに合流を果たしたアキラ。

一先ずミケ達に説明する為に、主に作戦会議に使用している一室に入り、だらつ、とだらしなく椅子に腰掛けていた。

「ほんと良い逃げっぷりだ。……頭の良い野郎、猿だったな」

もう何回目になるだろうか、アキラはそうつぶやき続けた所に、ナナバがポコツ、と頭に拳を入れた。

「当然だつて何回も言ってるでしょ。見境の無い巨人なら兎も角、人間が入ってる巨人なら、アキラを前にしたら 逃げの一択しか取らない。と言うか、取れないんだ。全力で逃げる上に、人間にも戻れる、って手段も考えたら、仕方ない。……アキラの責任じゃない」

険しい顔の後に、少しだけ笑顔を見せるナナバ。

「ん。……かもな」

「かもじやなくて、絶対なの。まだ判んないのなら、もう一発いつとく？ 多分、ペトラやイルゼも同じ様にすると思うし」

ぎゅっ、と握りしめた拳を見せるナナバ。それを見たアキラは両手を上げて降参の姿勢。

「アキラ。搜索は体勢を整え、早急に出す。無論、例の巨人が出れば、直ぐに撃つ様に指示を出している。……情けない話だが、アレは、我々には手に余る相手の様だ。お前に頼る事になるだろう」

「あー、その辺は、それこそいつも通りだ。適材適所。気にすんな。ってか、猿はオレの獲物だ。横取りすんな、ってリヴァイにも通達してくれるとありがたい」

ゴキーンツと拳を握りしめるアキラ。

猿の巨人の性質は見た範囲、判る範囲ではあるが、ミケとナナバに伝え、各兵団の班達にも伝わる事だろう。

あの巨人の芸当は、看破できない。遠距離からの攻撃手段もそうだが、それ以上に厄介なのは他の巨人を操る術だ。操る、と言う面では、今アキラの横にいるア二も持っている様だが、それ以上の脅威を感じた。

ア二は自身におびき寄せる手段しかみていないし、集まってきた巨人は、ア二をも喰らった。つまり諸刃の剣の様に感じるし、それ以上の事が出来ないのは、あの時のア二

の行動を思い返せば一目瞭然。

だが、あの猿は正確無比に巨人を操った。

まるで、壁を破壊したあの時の様な意思の統一。全ての巨人の脳なのではないか？

と思える程だ。一連の巨人の騒動の発端。あの日のマリア崩壊の元凶ともいえる相手だろう、とも感じた。

因みに、ナナバやミケが 今日一番の脅威をある意味感じたのはこの次かもしれない。

「とりあえず、アイツらのトコに行ってくるわ。その間、アニ。ここで良い子にしてろよ？」

「……はい」

「へ？」

「は？」

突然のアキラの言葉。

104期のメンバーたちには、其々待機してもらっているから、そろそろ状況や今後の事を伝えに行かなければならないのは判る。そして、当事者でもあるアキラが伝えた

方が説得力があるし、何より帰還報告も兼ねる事が出来るから尚良い。

……が、アニがこの場に残ると言う所が少々頂けない。……いや、少々どころではない。超大型の爆弾、いつ点火してもおかしくない爆弾と一緒にいるのも同然だから。

「ちよ、ちよつとまつて!! アニ・レオンハートの管轄は、アキラの筈でしょ!」

「ん? おう。そうだぞ。……んでもなあ、なーんかアニ 同期のメンツに顔合わせるの嫌らしくて」

「んな その場凌ぎみたいなテキトーな理由で残していかないでよ! 暴れた時に私らだけで抑えられると本気で思ってるの!」

「……情けない事ではあるが、それも手に余る事案だぞ。屋内と言う条件も最悪だ。招き入れた以上最後まで責任を持ってもらいたいが」

ナナバ達の意見も最もだ。アニがしてきた事を考えれば。でも、アキラは軽く笑う。

「ん? アニ。オレらと敵対するつもりか?」

「いいえ。しませんよ」

「ほれ、大丈夫だつてよ」

「信じられるかこのバカ!!」

バコっ! と今日一番のチョップがアキラの頭に直撃。ヒリヒリと頭から湯気が出るのを何となく感じたアキラ。かなり痛い部類の攻撃だった。言うなら、イルゼや

ペトラから受ける攻撃の様な感じ、である。

「いてて……、まあ、マジで落ち着け。アニなら大丈夫だ。どういう風の吹き回しか、死にたがりな感じも今ん所感じねえ。それに、変身！ したとしても、お前なら十分逃げれるだろ？」

「でもー！」

「……………」

ナナバはまだまだ信じられない様子だ。手枷の外れた巨人が取る行動は簡単に判るから。

でも、ミケは違った。

「わかった。104期の皆への説明は全てアキラに任せる。今後の編成については、オレ達に任せてもらいたいぞ」

「おう！ それで良いぞ」

「ちよつと、ミケ!?!」

ミケの言葉に驚きを隠せられないナナバ。ミケはそのまま続ける。

「少し落ち着け。……確かに、オレもまだアニ・レオンハートは現時点で敵として認識している」

「なら何で!?! と言うか、なんでそこまで落ち着けてるの!?!」

「お前も同じじゃないのか？ 普段に、いつもの様に戻れているのが何よりの証拠だと思うぞ。……まあ つまりだ この男が傍にいる時は決まって色々と言をいつてるだろう？」

「あ……………」

ナナバは、ミケに言われて漸く自分自身の事に気が付くことが出来た。

巨人が群れで襲撃してきた時、正直絶望もした。大勢の104期の兵士たちをも巻き込んでしまった事もあり、更に己の不甲斐なき、力不足である事も呪った。

そんな折に、彼がやってきた。頭の中に浮かんでいた絶望の二文字を笑って粉々に打ち砕いてくれた瞬間だった。

アキラが来て、いつも通りな自分になった。無茶な事、馬鹿な事、それらをアキラが言うのはいつも通りだ。違う所があるとするとするなら、いつも傍にいるリヴァイ班の面々がいない事。つまり ペトラ達がいらない事くらいだ。

そして、判り切っている。例え、アニ・レオンハートが襲撃してきたとしても、変わらない。

「……………見えてなかった。自分のコトが全然。それに、私の心配事なんて どうせ、あつという間にねじ伏せちゃうんだろう事も、判つてる筈なのに」

はあ、と大きく深呼吸をするナナバ。

両頬を思い切り叩くとアキラを見た。

「わかった。アニの事は私達が見ておく。……見る以上の事は出来ないけどね」

「ああ。それで頼むわ」

アキラは、手をひらひらと振った後に、部屋を後にした。

別の所へ行く……とは言っても、104期のメンバーが待機しているのは隣の部屋だ。

エレンの巨人化の実験の時何度か立ち会わせてもらったが、巨人に成る時 独特の雰囲気になる。大気が震える、と言えば良いのだろうか、兎も角空気が変わるのだ。

アキラはその一瞬を逃さない。至近距離でのエレン巨人化爆発？ みたいなのを受ける実験（発案者ハンジ）をした時、余裕で回避、更には寸止め反撃まで出来たから、仮にアニが巨人化しようとしたら、となりの部屋にいるくらいなら、速攻でやってきて建物の外へと吹き飛ばす事くらい訳ないだろう。

……そして、色々と思う所があるが、アニが攻勢に出ないと僅かでも思える事があつた。

「……………」

外へと出ていった時、ずっとアキラの背を見ていたのだから。

扉を開け、部屋から出ていった後でも、ずっと。

「(いったい何角関係をつくるつもりなんだろう?)」

苦笑いをするナナバ。

そこにミケがやってきてボソリと一言。

「そこに更に一名、この場にいる誰かさんがその中に追加するかもしれないな」
「ッ……!」

そして、その後。

壁中に巨人が現れた事実を目の当たりにし、直ぐに調査を行うという意見が全面的に

出た。特に、この近辺の村出身達からは強く要望が出ており、装備を整えた段階で直ぐにでも行動をしようだった。

それを止めたのはアキラだ。

アキラが戻り、そして 状況を説明するまでの時間。もし——もう少しでも遅れたのなら、不安が爆発し、命令違反覚悟の上で衝動的に行動を行いかねなかったのだ。

『気持ちには痛い程判る。……だが、単独行動は絶対許さん。オレと行動を共にして貰う。長距離陣形で警戒しつつ村調査だ。そのあと、壁の確認だ』

これがこの場の決定である。

アキラが、そしてミケもそう指示した。単独で行くなら ありきたりな謡い文句だが、『俺を倒していけ』と一言。

ありきたりなセリフではあるが、実に効果的、そして単純な事だ。

アキラを倒せるような兵士なのなら、別に単独行動しても全く問題ない。寧ろ大歓迎なのだから。……だからこそ、より感じる。自分達じゃ出来ないと言う事が。

不可能である事に気付くと同時に、己の無力さも嘯みしめる事になる結果ではあったが、甘んじて受け入れる者が大半だった。

何より、これが最善であり、何より、これが幸運な事なのだから。

以前のウォール・マリアの破壊の際は、アキラ達調査兵団はいなかった。……だが、今

回はいると言う状況が。

その後の調査結果。

「……どうしたもんか」

アキラは、全てを終え　リヴァイ班の元へと戻ってきていた。

リヴァイは勿論の事、エルヴィン、ハンジ、と更に数名。

兵団の長が全員ではないが揃いぶみでの調査報告会である。

時間は掛かったが、不可解な状況である事と、救う事が出来た事、そして　拭えない悲しい結果があった。

一部を上げるとまずはサシヤの故郷。

巨人の襲撃に合っていたが、距離的に近かった事も有り、逃げられず取り残されていた親子の救出に成功、村の住人は無事だった。親子を見捨てた事実もある為、手放して喜ぶ事は出来ない様だが、命がある事の喜びが勝り、一先ず幸先の良い結果だった。

だが、当然良い事ばかりでは無かった。

続いてコニーの故郷。

その村は持抜けの空だったのだ。住人の一人も見当たらない。残酷ではあるが、普通に考えれば巨人の被害にあった村である、と言う結果になりそうだが、そう簡単な事では無かった。

ただただ只管に喰い殺す事しかしない巨人達の襲撃があったというのに、村の住人の痕跡そのものが無かったからだ。家屋は倒壊しているものの、血痕の後も全く無く、更に不可解なのは村の馬が全て揃っていたと言う所。徒歩で巨人から逃げ切れる筈もないし、その様な選択をする筈もない。

このコニーの村が第一の不可解なポイント。そして、最も不可解な所。

「壁が壊された様子は無かった。巨人達は空でも飛んできたって言うのかねえ？」
「お前が見逃してなけりやな」

「見逃すかよアホ。何回やったか覚えてねえって」

頭をボリボリと掻きむしるアキラ。リヴァイも書類に目を通しつつアキラを見た。そうは言ったものの、リヴァイがアキラが調査を怠る等とは思ってもないので言ってみただけだというのが正直な所だろう。

「それで、猿がまた襲ってきたって話を再確認したいんだけど」

「んあ？ わりいな。生け捕りしてプレゼントしてやりたかったんだが、逃げられたよ。猿って言うだけあって木登りならぬ、壁登りも得意みたいでな」

報告書の中で、調査を行っていく過程での拠点の1つで使い古された昔の調査兵団の駐屯地、古城で一夜を明かしていた時、巨人の襲撃があり、とあった。

「夜行動出来る巨人って結構珍しいんだが、やつばあの猿が指揮とつてるとみて間違いねえは。奴さん オレとは会いたくないみたいで、メチャ遠巻きで見てて、速攻で逃げたっただけ」

「偵察目的か陽動か、或いは何か狙いがあるのか……。有力なのは アニ・レオンハート奪還と言った所か」

「うーん、エルヴィンの言う通りだと思うんだけど、アニ自身が逃げようとしてないんだよね。仲違いでもしたのかな？ そこん所は何か聞いてないかい？ アキラ」

「なーんも、アニはだんまりだ。自分から牢に戻っていったし、思い詰めてる感じもする

し、こつちも時間がかかりそうなんだよなあ、アイツん中で色々とケリをつけてるって感じがする」

アニの扱いについては、上も相当考慮している事だろう。下手をうてば死者が出る事間違いなしな上に、対処できる人材が今のところ アキラカリヴァイの2人しかいない。その上に死を受け入れている、寧ろ望んでいる面もある事が見て取れるので、脅しは一切通用しないとみている。

結論すると 敵対するか、こちら側に付くかは全て本人の意思に任せている状態である。

「兎も角、今後も警戒を強化する。当面は休みは なかなか取れない状況になるがすまないな、アキラ」

「あいよ。ストレスの原因をとつ捕まえるまで悠長に休暇なんざ取らねえ。寧ろそつちが疲れる」

「そう言うと思ったよ。じゃ、アニの相手もアキラに任せるからね？ ペトラやイルゼが怒らない範囲で頑張つてよ。そろそろ様子も見なきやでしょ？」

「はあ どつちにも気い使わなきやならんなんて、ほんとどー言う状況だつてんだよ」

苦笑いをした後に、アキラは席を立った。

「おいアキラ。もう少し答えろ。この猿の件だ」

「ん？ リヴァイも興味あるか、やつぱ」

「……無いと言えば嘘になる。壁の向こう側に追いかけていったが見失う、とあるがその後の詳細は本当に掴めてねえんだな？」

「ああ。巨人も群れてきたし、あの鬱陶しい蒸気がそこら中に拡散しててな。紛れた可能性も捨てきれねえよ、残念ながら。単独行動はすんな、って約束もあったし、調べるにしても限度があつたつてのも解つてくれ」

「ふん。……少しは成長したつて所か」

「はいはい。ありがとーごさいやーす。リヴァイせんせー」

手をひらひら、と振りながら席を完全に立つと扉へと向かった。

背を向けたまま、最後に言う。

「あの猿が元凶。多分間違いない。そんで絶対に見つけたら全体周知を徹底させた方が
良いぜ、エルヴィン。正直 オレやリヴァイじゃなきや手に余る相手だ」

「……………そうか。了解した」

「んじゃ宜しく。行つてくるわ」

アキラがそう断言するのに、少なからず緊張が走るのには、エルヴィンとハンジ。

いつも歯が浮くようなセリフを言うアキラが兵団の力を信じてない、ともとられかね

ない（とる者は皆無だとはいえ）言葉を吐いたのだから。

アキラが完全に去ったのを確認するとエルヴィンはリヴァイを見て聞いた。

「リヴァイ。お前の私見を聞きたい」

「ああ。何度目か判らねえが、あの馬鹿がいなけりや最悪の結果になったって不思議じゃねえ状況だな。この猿の巨人。投擲手段の詳細を聞いて尚更思った。遠距離からの攻撃。……威力は大砲以上、速射、も可能で更には散弾のバリエーション。聞けば聞くほどだ。攻撃手段が近接に限られてる現状では、兵団にとって最悪の相手だ」

「リヴァイでもきついいよね」

「……ひらけた場所でやれる相手じゃねえ。銃の打ち合いとは訳が違う」

ぴらっ、と書類を放り投げるリヴァイ。

「猿については、最優先事項として周知しよう。……そして、次だ。ハンジ」

「ああ、アキラの例の件ね。勿論、了解は得てるんだろうね？ エルヴィン。皆で話していいか、つて。聞いてない！ とか言われてアキラに怒られたくないんだけど」

「その点は心配するな」

「了解。んじゃ始めるよ。本人を交えてっつて思ったけど、集まった皆の意見を聞いたらうえで、また聞いてみたい」

ハンジは集まった全員に書類を配り終えた後、始めた。

「アキラの言うナニカについてだけど……」

60話

——ああ、判ったよ。もういい加減判つてきたつて。

目の前に広がる空間を前に、アキラはため息を吐いていた。
今いるこの場所、この空間……なんといいば良いのだろうか。アキラは少し考えた後に決めた。

——随分と綺麗な星空の下、かな。それとこのでつかい……そう、光の柱か？ いや樹？ 光る大樹って言えば良いか。これ。あの森の木よりでけえな。

透き通る様な空。星々の光が時には流れ、瞬き、世界を照らしている。

そんな世界でただ1人、立っていた。そして、目の前に広がるのは巨大な光の柱。所々枝分かれていてこの空に広がっている。

——いつ見ても、デカいな。光もやべえ。目が潰れるぞ、こんなの見せられたら。……それも2本もなんてな。

聳える光の柱は1つでは無かった。

2つ並んでいるのだ。何処までも伸びる光、そして無数に枝分かれをしていて、果てしない空に広がっている。

『もう、理解したのか。早いな』

そんな世界に。先ほどまでこの世界には1人しかいない、と確信めいていた物まであったというのに、そこにおいて当然だと簡単に自分で覆す様な奇妙な感覚に見舞われていた。無論、それも初めての経験ではない。

この数年の間……幾度もあったから。

——もう、じゃねえだろうが。何回見せられたと思ってるんだ？ この胸糞悪い所を。

『綺麗な所、と先ほど言っていた様だが?』

——風景はな。あの光の本質? 中身? よく判らんが、あんなもんみたらだれでも思うわ。

『む。……だろうな』

ふわりと隣に降りてきた。

口調こそは男のもの。だが、成り立ちは何処か女の様な気もする。中性的と言えば良いのだろうか。そして、何よりも違うのは、この人物? も光を放っているという事。

——お前の事も大体判ってきたぞ。ここに連れてきた張本人、だろ?

『……………』

□□ 調査兵団・宿舎 □□

日も暮れ夜の時間がやってきた。

ユミルは部屋を抜け出し、一人外へと出ていた。

あの時——ほぼ、完全非武装な状態で巨人の群れに囲まれたというのにも関わらず、生きている事に現実味に欠けると何度か思った。だが、こうして自分は、自分達は生きている。どうやら、この世界には明るい未来が待っている様だと、柄にもなく確信に満ちていた。

「(こんな事考えてて、また、アイツらが襲ってきたりしたら笑えるな。まあゼロじやないと思うが、今は夜だし、余計に可能性は低いか)」

未だ巨人襲撃の謎が全く解明できない状況なのだが、少なくとも昼間よりは幾分かマシな時間ともいえる。

巨人は主に昼に活動するからだ。夜行性もいるが、奇行種の類に分類される、と判断されている為、個体数が少ない。そして、唯一判明している情報にある猿の巨人の存在。あの巨人が指揮をとれば夜でも動く事が可能だというらしいが、その警戒は最大限に

行っているから今の所は安全だと言えるだろう。

「ふん。いや何考えてんだ、私は。……安全に決まってるだろ？ あの人がいる場所だ。追いそれと襲撃なんかするわけ無いか。……あのひとは、何が相手でもやっちゃうんだろうな、自慢の腕力？」で。その相手が例え——」

最後まで言い切る前に、夜景でも眺めながら、くすねた缶詰を開くと中身を口の中に放り込むと数度咀嚼する。

そして、表情を少しゆがめた。

「……やっぱ、鯨は好みじゃないな」

「ユミル？」

「つと、クリスタか。これから夜這いにも行こうと思ってたんだが、手間が省けた」
そんな夜景と細やかな夜食を楽しんでいる所に来訪者が来た。同室のクリスタである。

「ユミルがそう言う話し方する時、って大体何かをはぐらかそうとしたり、誤魔化そうとしたりする時だけ、だよな？」

「……はあ？」

「流石にいい加減判ってきたの。それと、まさかこんなに……その、安全な環境に身を置いて話す事なんか出来る訳無い、ってあの時から思ってたんだ。アキラ教官が来てくれ

たから吹つ飛んじやったけどね、そんな感覚」

ニコリと笑うクリスタの表情は、今までも見た事が無いものだった。少しだけユミルは見惚れた後に、「頭をがりと搔きむしった。

「それで？ 私は何を誤魔化してるって？ 結婚してくれっつー話なら誤魔化すつもりはないけどな」

「もう。そういうのじゃないよ。何か難しい顔してる時とか、絶対に他の事考えてそうな顔の時に、私が話しかけたらそんな感じになるの。……それにいい機会だからさ、聞いてみたいって思う事があるんだ」

クリスタは少し笑った後に表情を引き締めなおした。

「私はね。ずっと思ってた。今期の、104期のメンバーの中で私が10番内に見合う筈がない、って。仮にユミルと私ならどっち？ って皆に聞いたとしたら、10番目は貴女だって答える筈。……あなたは、ユミルは私に憲兵団を目指すように促してたし、その権利まで私に渡そうとしてた。その真意が知りたい」

「……………」

「それともう一つだけ、先に言っておくね。……私、きつと変われる。……変われると信じてる。——自分を信じれる。決めたの。今直ぐ出来る！ とは思わないけど、必ず」

そして、——クリスタのここから先の言葉が、ユミルの中にくすぶり続けていた選択

肢を決定づける事になった。

「私は——つて生きるよ」

翌日。

調査兵団の本部にて。

「成る程な。漸く洗い出せたって訳、か。随分とまあ時間がかかったもんだ」

「うん。……やっぱりさ、ひどく杜撰な管理だから時間がかかったみたいなの。でも、ど

うにかなって良かった……、のかな」

「良かったに決まってるだろ？ 一歩前進、どころじゃないかもしれないねえぞ」

兼ねてより調査し続けていた結果が調査兵団に届いた。非常に重要な情報で、そして……アキラにとつてはかなり複雑なもの。

「……だが まあ、アニが喋ってくれるよりも早かったな。オレの予想では どっちかと言えば、アイツの口からきく方が早いと思つてたから」

はあ、とため息を吐くアキラ。

その姿を見たペトラは、そつとアキラの頬に手を触れた。

「無理だと思うけどさ。……あまり、抱えないで。重たかったら、私にも背負わせて。少いで良いから。……お願い」

ペトラの言葉にきよとん、としていたアキラだったが、直ぐに表情を元に戻した。

また、心配をかける様な顔をしているんだろ？ と自分自身を戒めながら。

「悪いな。頼りにしてるぜ、ペトラ」

「……うん。勿論、私以外にも沢山いるからね？ アキラの事支えたいって思つてるのは」

「おう。幸せモンだ。……いや、マジで思ってるよ」

手を上げて笑顔を見せるアキラをみて、ペトラは満足した様に同じく笑い返す。

アキラはペトラが手を離れたのを確認すると、今度は自分自身が両手で挟み込む様にして、バチンツ、と叩いた。

「んじや、気合も入れなおしたし、……行ってくる。今回の件、アイツにも確認とらねえと。その上で、しっかりと話を聞かねえとだからな。久しぶりに面談の時間も必要ってヤツか。……教え子アイツとの」

「うん。お願い。……兵長やハンジさんには伝えておくから」
「おう。頼むわ」

ペトラとの話の後、アキラはアニの元へと向かっていった。

□
□
????????????
□
□

街が賑わうのには訳がある。

巨人に踏みじられ、蹂躪されてきた壁の中の人類が、歓喜し喜び、お祭り騒ぎになるのには訳がある。

それは勿論、英雄たちの帰還だ。

「私！ また、あの2人に会ってみたい！ 兵長やアキラっ！」

「人類最強の2人にだよね！ いっつもパレードみたいになっちゃって、遠巻きにしかみられないから……」

大人から子供まで——老若男女関係なく広がるその英雄伝。生きながら伝説を聞近

に出来る興奮は大人だろうが子供だろうが関係ない。……そして、子供なら尚更だ。

そんな興奮して止まない子供達の後ろに、一人の女性が立っていた。

「あのさ、ちよつと良いかな？ 2人とも」

「うん？」

振り返ると、その女性はニコリと笑っていた。

「私ね、ちよつと前まで、外の村に住んで……、その すっごい英雄さん？ 達の事あんまり知らないんだ。ちよつとでも良いから教えてくれたら嬉しいんだけど……。楽しい輪の中に入れないのは何だか寂しいし」

「ええええ、おねえちゃん遅れてる〜！ つてもんじゃないよー？ 英雄アキラとりヴァイの話を知らないなんて！」

「ちよつと リヴァイ兵長の部下なんだから、英雄リヴァイとアキラ、でしょうが！」

「どつちでも良いじゃん。私はアキラが好きー！ だって、前に話した事があって頭撫でてくれたもん！」

「うう…… それは羨ましい！ ズルいつ！」

「あははは。ほんと人気なんだねえ〜」

言い合いを続ける子供達を見て仄かに笑みを見せる。

そして、何やら今度は奇妙な行動を شدした。

「アレ？ おねえちゃん？」

「何で四つん這い？ あ、判った！お馬さんゴツコだね！」

「んっん。違うかなあ。私さ、村ではずっつとこんな感じで動いてたから、その癖が残っちゃって」

四つん這い、四足歩行を繰り返した！ 傍から見れば変な人、なのだが 子供の前では楽しそうに遊ぶお姉さん。器用に手足を使つて動き回るお姉さんに喜びながら追っかけて行つた。

そして、笑うお姉さんは、一瞬だけ目を細めて、そしてついてきた子供達に改めて聞いた。

「それで聞いてみたいんだ。……その最強の兵士たちについて」

61話

□□ 調査兵団 本部 □□

「この世界には まだまだ判らん事が多そうだ。……実に、な」

「気のせいかな？ いつも面が崩れてるぞ、エルヴィン。似合ってねえよ。まるで、正銘のガキみてえだ」

「ふ…………… かもしれないな」

エルヴィンとリヴァイの2人が何度か会話を重ね、そのたびにエルヴィンからは笑みがこぼれる。何度目になるか判らなくなった所で、リヴァイ自身も笑った。苦笑い、と言うヤツだ。

「そう言うリヴァイもだ。……………ふふ、数年前のお前を思えば、考えられん程に」

「ああ。否定はしねえ。エルヴィン。それに お前はいつも間違わねえ。……………まだまだこの世界には判らねえ事が多すぎる。いや——今は 別の、と言った方が正しいかもしれねえがな」

リヴァイは紙の束を手に持ち、1P目から再度読み直した。

そこに書かれているのは、アキラに関する重要機密。

アキラが此処に来てから今日までの報告書に加えて、アキラ自身の身体能力、凡その巨人の討伐数、ハンジ主催の実験経験（人体実験）、様々な内容が記録されていた。

可能な範囲ではあるが、これは調査兵団内のみ留めていた極秘事項も含まれている。秘密にする理由はいくつかあるが、アキラが中央憲兵団を毛嫌いしている面があり、エルヴィン自身の考えもあつて、信用のおける人物にしか発信していない。

そして何よりも。

「別の世界か。確かにな。アキラの話、それは色々証明のしようがないものが多い。故に何処から手を回せば良いのか、これも悩みの種だ」

「悩んでるヤツの面には到底見えねえが」

アキラのとんでもない力に関しては立証出来る。目の前で繰り広げられてる現実を目の当たりにすれば、どんな馬鹿でもはつきり理解するだろう。

だが、証明できない事もある。それはアキラが辿ってきた道。

証明するには自分達で調査する。つまりその道を自分達で見事。それが出来るか？ と問われれば話は別だろう。

イルゼの調査報告書から始まったアキラの出生。別の異なる世界からやってきた者。だからこそ、アキラ自身から聞く話は裏が取れないものばかりだ。

「……だが、今更だが我々にとつて有益極まりない事だらけだ。アキラを利用しきつて
いる様で良い気はしないが」

「それこそが今更だ。いったい何度目だ？ アイツ自身も判つてる事だろ。アイツの言
う事を考えてみりや利害は一致している」

「解つている。我々の、そしてアキラ自身の安寧、心の平穩か」

ふん、とりヴァイは軽く鼻で笑つた。らしくない事を口にして、考えていると
思つたからだ。想像を絶する力を持ちながらも欲にかられない所もそうだ。

——中央の豚どもと似た思想を持つてりや、今頃壁ん中はアイツ一色になつてただろ
うな。有り得ねえ事だが。

そう思うと、リヴァイは再び笑つた。笑えた。どう考えても想像できない自分がある
コトがこの上なくおかしく思えたからだ。

「アイツの言うナニカ。それも今後検証が必要か？ どうやってやりやあいい？ 中央
から豚どもを引つ張つてくるか？」

「うむ。私も色々と考えてはいる、が、それも難しそうだ。中央では、アキラの事を人

類最強……ではなく神か悪魔か、と言う声が強く響いている。アキラが言う条件に当てはまらない可能性が高い」

「チ、根性のねえ豚どもだ」

リヴァイはそう毒づいた。

エルヴィンはそれを見届け後に次ぎのページを開いた。

それは、『アキラ襲撃事件』と書かれているページ。2年前の報告書だ。

「そもそも 王政も現在全く手の打ちどころがないと言われる状況で、言われるがままと言っている。……アキラが私の父の様な事にならないのも証明されているからな」

「ふん。……前も言ったが、裏を何とか取れねえか？ 憲兵だけじゃなく、王政側の陰謀だと」

「知らぬ存ぜぬを通されて仕舞いだ。証拠は一切上がらんし、認めようとはしない。内心穏便な男で良かったと安堵している事だろう。もしも、報復を強行する男であれば、シーナ内、城が瓦礫の山になりかねないのだからな」

ニヤリと笑みを零すエルヴィン。そしてリヴァイも笑った。

「色々面倒な事だらけだ。あの馬鹿じゃねえが、全部潰して終いにしたいもんだぜ。」

……外では別の世界に加えて、巨人の皮をかぶったヤツがいる。内側には キナ臭えもんだらけに加えて、まさかの再会もあつた。訂正する。外だけじゃねえ。内にも まだまだ判らん事が多い」

「同感だ。……いや、内側はもう時期に明らかにする。決して姿勢を崩さなかつた王政たちに綻びが生まれている今がまさに好機だ。今回の件、ケリがつき次第にな。ピクシス司令にも了解済みだ」

「……そりゃ期待して良さそうだな」

「うーっす」

そんな時だ。扉が開かれたと同時に声が聞こえてきた。

「お邪魔するよ」

「失礼します」

1人目に続き、3人。

「戻ったか。早速だが、報告を聞こうか」

「ああ。手短に言うぜ。限りなく黒」

「ホント短いねー、アキラ」

「そう言うしかねーし。アイツが、いや あいつ等か。……アレを、いや オレを視えてるのが明らかだったしな。《限りなく》が退くとすりゃ 正体を現した時だ」

入ってきたのは、アキラ、ハンジ、そして イルゼとペトラだ。軽い口調に軽口ではあるが、その表情は険しい。

「あの報告書見た時点で、大体判つてた事だが。面倒な事にアイツらが、鎧とデカブツつて事だろうよ」

「そうか」

エルヴィンも表情を険しくさせた。

「……あの規模の破壊力を考えると、この街の中にいる時点で、住人を我々を、全てを人質に取られてるも同然か」

「いや、そりゃ弱気過ぎんだろうが。互いに牽制し合ってるっつー状況つて言えよエルヴィン」

アキラは首を振った。そして、一瞬だが表情が消える。まるで顔を黒く塗りつぶされたかの様に。

「……それをすりゃ 街より まず あいつら自身がどうなるのか、判ってる筈だ。アニみたいに死にたがりなら、やらんって保障は無いが、現時点でやってない所を見ると、どうやらそうじゃないらしい」

ハンジもそれに続いた。

「確かにね。私達を殺るのは造作もない事だろうけど、その結果は自分達も消し飛ばんじやう可能性が大だ。だって、アキラの事を見る筈だからね。だけど私としては、今後いろいろと仲良くしていきたいつもりなんだけど、何とかならないかな。ほら、私達みたいに仲良しに？」

「誰が仲良しだコラ。殺意Maxまで上がるわ！ 一緒にすんじやねーっての」

ぐいつ、とアキラの肩に腕を回すハンジ、それを軽く払うアキラ。

「ふむ。が、直ぐにでも強硬手段に出ないとも限らないだろう？」

「ああ。確かにな。だから提案だ」

「お前がガキどもの世話をしろ」

「ほい。つー訳でオレの配置決定。ま、殆ど戻ってたも同然っぽいが 上司命令教官時代に戻り、改めての話し合いつてヤツを試してみる」

アキラが手をひらひらさせた所で、イルゼとペトラが前に出た。

「団長。私を含めた班員全てとペトラの全員で、アキラのフォローに回らせて下さい。」

くしくも私以外の全員が同じ104期のメンバーです。適任かと」

「向こうが暴走しない理由、それがアキラがストッパーになつてると言う事は明白でしょう。ですからこちら側には、アキラ自身のストッパーが必要である、と考えてます」

「誰が暴走するか！　つて何べんか言っただけどなあ……」

信用されているのか、されてないのか。ある意味微妙な所だが、イルゼとペトラの要望は勿論通つたのだった。信用されてない訳ではないが熱くなり過ぎる面があるのはい言うまでもない事なのだ。

「その話し合いとやらだが、明日 調査兵団総出で壁の再調査を行う。……その時にケリを付ける。壁の上が絶好の場所だろ？　それに奴らが壊そうと躍起になつている場所でもある。おあつらえ向きじゃねえか」

「そのつもりだ。町から大分離れてるし、それに巨人の爆発？　爆弾？　みたいなんでは壁は壊れたりしないだろうし」

今から数年前。

ウォール・マリアの壁が突破された。だが、壁が破壊されたとは言つてもそれはあくまで門の部分を破られた事だ。壁の強度は十分あの爆発には耐えられるだろうという推察は誰もが同じだった。

そして、明日——決断の、決別の時。

□
□
????????????

□
□

夜の闇の中、人知れず動き回る影があった。

「明日……、壁上にて調査……。アキラ、オーガミ」

手にした情報を何度も口づさむ。

忘れまいとする様に、そしてその顔には強い決意が見えて取れた。……見方を変えれば悲痛なモノともとれる。

「明日が私の命日か……」

ぐつ、と拳を握りしめる。

手にした情報は眉唾ものばかりだ。

だが、自身の知る情報と照らし合わせても、決して全て嘘であると到底思えない。

自分自身が信頼し、絶対的とも常々思ってきた《力》が全て圧倒されたのだから。

全て——覆されてしまったのだから。

故に、勝機は限りなく低いと言えるだろう。だが、それでも前に歩を進める。進める事を止めはしなかった。

「——いや、ここで終わる訳にはいかないね」

□□ 調査兵団 牢屋 □□

アニは、鉄格子の隙間から見える夜空を眺めながら思いふける。

以前までいた薄暗い地下に設置された牢屋に比べたら、この場所の快適さは牢屋であることを忘れてしまいそうだ。

前の場所に戻る、と自分から言う程に 扱いが軽くなり過ぎていると嘲笑する。

この場所に留まる様にしたのは、他の誰でもない、アキラなのだから。

傍に彼がいるとは言え、此処までして良いのか？ と自分で思ってしまうが、それも一笑する。此処を襲撃するつもりなど毛頭ないと言えるから。

それは自分の命が惜しいからでも無ければ、戦士としての務めを果たそうとする義務

でもない。ア二は視線を空からもとに戻す。

「……楽しみ、と言った方が良いかもしれないね。貴方が外で何をするのか、見てみたい
気持ちが強い。アイツらが どう行動するのは判らないけど。それに——、戦士長
たちも どう出るか」

6 2 話

——ああ、また此処か。

アキラは目を開けた瞬間に悟った。いや 眼を開ける前から判っていた。

また、別の世界に来たのだという事を。

巨人のいる世界もアキラからすれば別の世界と言って差し支えないから、第3の世界
と言えはいいのだろうか。

——それで、またオレに悪趣味な世界を見ろって言うのか？ どんな罰ゲームだよ。

空の上に、天に聳え絶つ光の大樹を前に激しく落胆する。

この世界から帰るのは、どうやら何かしらをしなければならぬのだという事はこれまででよく理解した。単純にコレが夢で朝目が覚めたら起きる、と言った簡単な事ではないらしい。

何かをするのか、或いは――。

『そう言うな。……お前も見ろべき事だと思う。……これが、この世界の本来あるべき形なのだから。世界の記憶……、この星の記憶と言った所か』

この者が戻してくれるかである。

それはお決まりの如きもの。

まるで最初からいたかのように隣に立っていたモノがいた。

――男女か。

『誰が男女か。……前に言っただろう？ 我が名は星喰^{ほしはみ}。崇め奉る様な存在だと言って

も差し支えないのだぞ』

——ほーん。そりや面白え冗談だ。バケモンの巣窟に放り込んだ張本人をかよ。……まあ、散々な目に遭わしていただいてる札に存分に祀ってやるよ。

『くくつ、貴様は本当に散々な目に遭つたと思つていいのか？ そうは見えないのだがな』

——ちつ。

時折、面白おかしく神経逆撫でててくる所を見ても、そんな大層な存在とは思えない所の1つだろう。

ただ、神経を幾ら逆撫でてきたとしても——アキラが最も言葉を交わしたい存在の1人である事には変わりない。

——お前には、視えているんだろう？ この先が。……どうなる？ ここから先どうなる？

『……………生憎だが、我が視せる事が出来るのは、過去。そして——お前がいけないこの世界だ』

指をさす先にあるあの光る大樹が一際輝いたその時、世界の扉が開く。

広がるのは巨人が支配する世界。

その世界では人間は無力だ。……見せられる先には、様々な人間が喰われている。それはアキラが知る人物も例外ではない。今、自分のいる世界では普通に話し、軽口を言い合つて、時には笑い合い、ケンカもして……そんな連中が喰われ、潰され、消し飛ばされ、物言わぬ身体になってしまっている。

——胸糞悪い。

『貴様がいなければ、この世界はこう辿つていつていた。その絶望の中でも 人類は進撃を開始する。——あの少年の中に眠る巨人と共に』

——エレンか。

映された先には、エレンがいた。

巨人となり戦つてる相手……ズレが自分だけであるのなら、恐らくはアニであろう女型の巨人。そのアニは、……仲間達を殺しつくしていた。グンタをエルドをオルオを、……ペトラを。

そう——以前見たあの夢も、この光景を見ていたんだとアキラは理解していた。

『貴様は認めんだろが、この世界に齎したものは計り知れん。……命もな』

——……ふん。

『皆に支えられ、此処まで来た。らしいな』

——それが嘘だと？

『いや、そうではない。……驚嘆に値する』

ふわり、と身体を宙に浮かせ、そして指を鳴らせた。

すると、此処とはまた違う何処か別の世界が現れた。

誰だろうか、恐らく成り立ちから察すると自分と同じ人種。言うなら日本人と言って差し支えないであろう姿。そして、それを取り囲む兵隊たち。黒装束に包まれた者たち。

そして、その日本人は……あろう事か、その場の兵士たちを、男たちを虐殺しだした。人とは思えない力で、人とは思えない貌で、暴虐の限りを尽くした。もう死体となっているのにも関わらず、痛めつけた。巨人に喰われる場面も十分胸糞悪いが、これも等しく同じだ。それが巨人か人かかの差。

『力を持てば、強大であれば強大である程に、それを試したくなる。己よりも弱い弱者に對して力を存分に振るう。……それが性だ。弱肉強食と呼べばそうなのだが、そこに善悪などは存在しない。喰うか喰われるか、ただそれだけだ。我は貴様からすると気の遠くなる程の時を過ごし、そして 観てきた』

また指を鳴らせると再び巨人がいる世界へと戻つて来た。

それは自分がいて、皆がいて、馬鹿やつて騒いで、そして、巨人から皆を護つて……
笑顔だった。

『正直今も信じられん程だ。嘆きを感じ、我が干渉した世界は此処以外にも数多くある。

……この世界もその内の一つだ。この世界は一人の少女が我を呼んだ』

再び指を鳴らせると、この広大で無限にすら感じる地に、一人の少女が現れた。

虚ろな目をしている少女は、ただただ大地に手をやり、その砂の様な粘土の様なものを只管捏ね続けていた。

『だからこそ、貴様は——』

匂いが違う。

空気が違う。

そして、目を開けた先に見える視界が違う。

「……………」

アキラはゆっくりと身体を起こした。

混乱をしている訳ではないし、先ほどの世界の事を忘れてしまった訳でもない、そし

て 今——すべき事も頭にある。

「……アキラ？ 起きた?？」

そして、まるで見計らったかの様に部屋へと入ってくるのはペトラだ。単なる偶然に過ぎないが。だが、アキラにはそうは感じられなかった。

——決別の時が来た。

そう、告げられた気がした。

「いいやまだ寝てる」

「何で そんな堂々と嘘つくの?？」

「……はは。寝込みでも襲いに来たか? ペトラ」

「ツ……、な、なにいつてるのよっ!! 馬鹿な事言つてないでよ!!」

ペトラにぼかつ! と頭に良い具合に気付けを貰った。

アキラは、軽く笑うと 軽く首を振って頭を左右に揺らせた。

ペトラは、突然言われた事に僅かながらに頬を赤く染めていたのだが、アキラの今の心情を判っている分、叩く以上は何もしなかった。いつも通りの自分に必死に勤めようとしているのが判っているから。

「悪い。……さっさと済ませるか。ああ、ペトラ。ローゼの壁上に呼ぶ奴らの位置とか、

その辺の打ち合わせは頭に入ってるな？」

「勿論よ。……相手の規模を考えて、しっかりと順応・対応できる配置に出来ている。団長や兵長にも了解を得た陣形だよ」

「……なら、安心だ。ああ、後オレとアニ、それにエレン達の場所も？」

「……言われた通りにしてる」

ペトラは 少し表情が険しくなりながらも、頷いた。

私情を絡めてる場合ではないのは判っているから。そして、もしも ソレが暴走した時、誰が止められるのか、誰が適任なのか。もう判り切っている事だから。

「だから約束」

「うん？」

「いつもの」

「ああ——。って、いつものつつたって、結構最近じゃね？」

「茶々はいららない」

「へーへー」

アキラは身体を起こすとペトラの正面に立った。

そして、その頭をそつと抱き寄せ、自分の胸にペトラの頭を当てた。心臓の鼓動を聞かせる様に。

「誰も死なねえよ。……勿論、オレもな。約束する」

「……うん」

とくんつ、とくんつ、とアキラの鼓動を感じるペトラ。

止まってない。動き続けている。そして——止まる事はない。

心臓を捧げられる事はない。

アキラは、周囲にいつもいつも『心臓なんかいらぬ』と公言しているんだ。つまり、誰も犠牲になるな、と言っている。

ならば、とアキラを慕う者達は、皆口揃えてアキラの事も言った。死ぬような事、つまり心臓を捧げられる様な事になるな、と。

その誓いが今回のコレだったりする。勿論、好意を寄せる女性達に限り！となつていて、男には流石にやってない。と言うよりそんな話にすらなつてないの言うまでもない。

「さて——、行くか」

「うん」

全ての準備は整った。後は舞台上上がるだけだ。

ウォール・ローゼと言う名の舞台に、……教え子たちと。

□□ ウォール・ローゼ □□

《ウォール・ローゼの再調査》

名目はそれだった。

巨人達の壁中襲来。普通に考えたらウォール・ローゼが突破された事を疑うだろう。ウォール・マリアを破壊されたあの日から、人類は何時だつてその最悪の想定をしていなかった日は無いのだから。誰もが連想する。だからこそ、調査兵団が徹底的に壁を調べた。

巨人が現れる事が出来る穴はおろか、亀裂の1つさえなかった。

故に再び調査する必要性は今のところは無かったのだが、自然に調査兵団の全ての兵達を集めずにはコレが最適だったのだ。

そして——始まる。

「よお、待ったか？ お前ら」

壁の上で 全ての始まりが壁。

名は違えど あの壊されたマリアの壁とこのローゼの壁は繋がっている。

壊されたあの日から、全て始まった因縁。

「そろそろ……色々と決めようか。なあ……」

壁の上での決められた配置。

何処に誰がいるのかは、班長クラスは全員把握している。

そして 位置取りも万全にしている。巨人化した時に発生する爆発的な蒸気と人を

焼く熱風。それら全てを考え 犠牲を最低限度に抑える為に、万全を期している。

後は唯一にして無二。巨人の天敵。人類最強の矛が彼らを迎えるだけだ。

アキラはゆつくりと二つの影に向かって歩き続ける。

日の光の位置の所為か、逆光で表情が見えにくくなっているが、間違える筈もない。

「ライナー、それにベルトルト。……久しぶりに面談と行こうぜ」

63話

「——こうやって顔と顔を合わせて喋るってのは久しぶりだな。お前ら。いつつも誰かしらはいたからなあ」

アキラは2人に視線を向けず壁の外側をただただ眺めていた。

ウオール・ローゼの壁の上から、外の世界を眺める。この先は、つい数年前までは人が暮らせていた。だが、今ではまるで別世界。人ではなく巨人が支配する世界。……巨人に支配された世界。

壁の外と壁の内。巨人と人間。

巨人が人間を見境なく襲うのは最早知らぬ者など一人もいないであろう事実。そこに交渉の余地も情けをかける余地も全くない。

巨人は食欲以外の何も無い。故に恐怖もなく、止まる事を知らない。圧倒的な力にさ

らされても、その命が尽きるまで止まる事が無い。

人を滅ぼそうとする理由こそは判らないが、人類の敵である事は疑うまでもない。なら、今ここにいる男達はどうかだろうか？

人の身でありながら……なぜ？

色々考える事は出来る。想定する事は出来る。

「面談……ですか？」

「っ、っつ……!!」

「……ベルトルトっ！」

今にも暴れそうなベルトルトの腕をがっちりと掴むのはライナーだ。

ベルトルトは自傷行為をしようと恐らくは 指に針か何かを仕込んでいるのだろう。強く握りしめ、それを使用しようとした所 ライナーに止められた。

「……………懸命な判断。流石ライナー。それに、判っている筈だろ？ ベルトルト。オレは口酸っぱく教えてきた筈だ。『…………お前らの命なんぞ要らん。心臓なんぞ捧げられて

も嬉しくもなんともない。戦うなどは言わん。だが、生き抜く事を重要視しろ』つてな」
一触即発の空気。

ただ、その緊迫感はベルトルトが纏っているものであり、アキラはいつも通りの雰囲気。ただの世間話の延長。そんなノリだった。だが、それは視線を向けられていない為なのだ。

「オレにお得意の爆発は効かねえ。オレの事 甘ちゃんとか力は異様だけどただのお人よしって思ってるんなら、そりや間違いだ。……前兆を見逃す程お人よしじゃねえよ」
「あ、あのアキラさん。……一体何を言ってるのか」

ライナーはただただ平静を保とうと努力し続けていた。

ただ、自分は兵士。そう言い続け、言い聞かせ。

そして、ライナーにとってある意味不運だったのは 前日にベルトルトと話をしてしまつた、と言う所だ。常に兵士を演じているライナーだが、今は兵士ではなく戦士の顔を出してしまつているから。

「ま、普通だったら荒唐無稽って感じだよ。だが、エレンやアニの件を考えてみりや現実味を帯びてくる。……だろ？ 更に巨人の不可思議な侵攻。壁が壊れてないつてのに

こうもズカズカと家ん中に土足で踏み荒らされたともなれば。……考えるなつて方が無理がある。ああ、後——」

アキラはこの時初めて ライナーとベルトルトを見た。

その瞬間、身体に雷でも落ちてきたのかと錯覚した。雷で身体を貫かれ、内側から身を焼かれるそんな感覚。

先ほどまで はつきりと身体の輪郭が見えていた筈なのに odus 黒いナニカに覆われ、表情が全く見えない。黒い化け物に成り代わつたのだ。

それは、人が巨人になる変化よりも遙かに驚愕するもので、……禍々しささえ思えた。巨人ではない。この男は悪魔そのものである、と改めてそう思えた。

「オレが見えてる以上、惚けられると思わない方が賢いぜ？ お2人さん」

悪魔に隠し事は不可能。

そして、悪魔から逃げる事も不可能。

ライナーは震える身体を止める事が出来なくなつてしまつていた。

ライナーに止められていたベルトルトだったが、その仕込み針で自分に傷をつける事

が出来たが、それさえ忘れてしまい、完全に身体が固まってしまった。

「ア二と同郷だつて事。それと もう一つ見つかったよ。お前らが話してた村の事だ。……もう自殺してこの世にいないが、ベルトルト。お前の身の上話をする全く同じ男がいたという報告だ。お前たちが言う出身の村の生存者もいた。どうやら全滅を免れた者。話した相手がいたつて事だ。……捏造だつて思つてみるか？ 俺らのでつち上げだぞつて」

これもただ口からそう報告があつたと言つているだけ。

アキラが言う様に 捏造の可能性だつて大いにありうる。まだまだ証拠としては弱い。だが、それでも 何も言えなくなつてしまつていた。肯定と取られてしまう可能性だつてあるのに。

アキラは、ふつ と一息はいた後 改めてライナーたちを見た。

その時 黒いナニカは薄れていく。

「疑わしきは罰せよ、つて意見も多かつたよ。あまりにも脅威だつてな。街中であんな巨人爆弾でもやらかされた日には、多大な犠牲が出るつて。んでも、オレは止めろつて

言ったよ。……オレからまず話させろって。そんでもって 期限は今日までだつてさ。………やっぱ 甘いだろうな、オレ。判つてもこれが中々難しい。さつきライナーがベルトルトを止めてたが、……寧ろ攻撃でもしてくれりゃ 割り切つてやり易かったのに」

アキラはゆつくりと立ち上がった。

「避けられないんならもう仕様がな。……が、殺り合う前に 話せるっていうのなら まず、話してみねえか？」

完全にナニカが見えなくなった所で漸く アキラの顔が見えた。

怒りや憎しみの類もあるが、それでいて何処となく寂しそうな顔。……まだ、信じた いて気持ちちがその顔に見えて取れる程のものだった。

「お前らは何を望む？ ……オレらの死か？ ならその理由はなんだ？ 教えといて損は無いだろ」

ライナーもベルトルトも、アキラが言っている内容の殆どが頭の中に入っていないだろう。ただ、目の前の脅威をどう対処すれば良いのか？ 巨人をもたやすく凌駕する圧倒的武力を前に、太刀打ちなど出来るのか？

この窮地をどう逃れたら良いのか。ただただそれだけだった。

助かる手段はある。この悪魔に下れば……少なくとも直ぐに命を取られる心配はないだろう。……だが、その道を選ぶ事は 彼らには出来なかつた。

そんな1秒とも1時間ともとれる時の矛盾を感じていたその時だ。

「ぬっ!？」

アキラは視線を再び壁の外へと戻した。

その先では、突如粉塵が巻き上がっていた。今の今まで、巨人の影等は殆ど無かった筈なのに、突如——目算で1km程先に、地平を隠す勢いで立ち上っていた。

「アキラさん!!」

暫くして 壁の上に1人の兵士が登ってきた。

「突如!! 前方より無数の巨人が出現致しました!!」

「……ああ。見えてたよ。本当にいきなりだな。巨人つてのは 出たり消えたりと手品でも出来るのか?」

ちらつと2人を見るが、起きた事を理解してないのが、直立不動のまま固まっていた。

その所作だけで、今回の件はとりあえず無関係であるという事が判った。少なくとも、そんなことが出来るのであれば、この状況であっても切り抜ける事が出来るだろう。バレた以上留まる意味は無いし、混乱に乗じて逃げる事も出来るからだ。

「さて、どうするか……。目を離すなって言われてるし」

「……私が見てるよ」

「つと」

肩を叩かれて、少し驚いて振り向くアキラ。

「そうだった。……アニがいる事忘れてた」

「随分な言い方ですね。……まあ、アキラさんが私の事を信じるに値するなら、ではあります。3人なら、逃げる事も、この混乱に乗じて襲う事も出来ると思えるのなら、無理には言いませんが」

「おいおい。ほんとにするんなら最初からんな事言わないだろうに」

「甘い人なんで。別に言ってもおかしくないかな、と」

「……言う様になつたな。このやろっ」

ぼんっ、とアニの頭を一撫でする。

無表情だったアニの顔が少し緩むのが判る。

「っ、っつ……」

ただ、それだけでベルトルトは判った。——アニの今の心境がどうなのかを。

「でも、直ぐにはいかないよ。ちよい離れてるが、リヴァイやハンジ、ミケ達もいるオールスターだ。あの猿がいないのなら、あの規模程度なら十分」

冷静に戦況を見極めていたその時だ。

新たな別の兵士が急ぎ登って来た。

「アキラさん！ 巨人の群れの前に人が！」

「は？」

その言葉に一瞬驚いた。

そして、同時にあらゆる想定をした。巨人を率いているのか、若しくは考えにくいけど、本当に襲われ追われているか、だ。

考えていた時、視界にはつきりと見て取れる事が出来た。

巨人の群れの先頭にいるのは馬に乗った人間。必死に走らせてきてる様にも見える。ただ、頭はフードで覆い隠されており、男なのか女なのかさえ判らない。

「ちつ、考えてる暇はない、か。アニ。ここを任せる」

「……はい」

それ以上は言わず、飛び出した。立体起動装置もつけず……いつもの光景と言えばそうだが、ライナーやベルトルトにとっては、改めて見せつけられた形になった。

そして、馬を走らせてる者は、ちらりちらりと背後の巨人を確認。巨人との距離を確認していた。

「……ほんと　大博打だね。巨人を4人失うか、それとも3人取り戻すか……」

64話

巨人の群れを率いながら、馬を走らせる女——ピークは考える。

潜入調査で壁の中へ潜り込むのは容易だったが、ここウォール・ローゼの上で、行われるという事を早くに知る事が出来たのは幸運だったと言つていい。だが、この情報漏洩でさえも、撒き餌である可能性も捨てきれない。

そして、最も確実に真実を確認できる相手、ライナーとベルトルトの2人との接触は不可能だった。

何故なら明らかに警戒しているのが判ったからだ。

その警戒がライナーとベルトルトの2人に絞つているかどうかまでは判らなかつたが、確かにあるグループ内の誰かを警戒をしているのは明白だった。

巨人の力を失うと言う極限のリスクを背負つてまで、潜入の段階で負う訳にはいかなかったたのでピークは手だし出来なかつたのだ。

そして 作戦の決行はウォール・ローゼの上で行う事を事前打ち合わせで決めていた。

「……見えた！ 三つ子岩」

そして、作戦の通りに動く。

ただ、それだけを意識しつつ 馬を走らせ続ける。目指した先、目的の場所へ向かって。

そして、その場所に向かう寸前の所で、危険ではあるが巨人数体を自分自身に追いつかせる。その為に馬よりも脚力のある巨人を宛がわせた。

潰されるか、握られるか、その限界ギリギリの所まで。

『絶対だ。……絶対。……絶対に、出てくる。アイツが出てくる』

そこまで、追いつかれたなら——ほぼ、間違いなく 出てくる。そう何度も言われた。

そして、それは間違いなかった。

「オラあツツ!!」

『悪魔が、出てくる』

壁中の悪魔が出てきた。

「っ……っ!! っっ……っ!!」

そう言われていた。

悪魔の名は、アキラ。その思考は極めて単純明快。仲間を見捨てる様な事は出来ないし、しない。どんな窮地だろうと中央突破し、全てを粉碎する男。あげた戦果は数知れず。

故に、壁中ではもう生きる英雄だ。

そんなアキラの行動は、完全に想定内……ではあるが、ピークは戦慄が走っていた。机上での話と実際に体感するのは訳が違う。

それは、まるで、雷、稲光だ。

それが自分の直ぐ横を通り抜けた。そして雷鳴が轟く——と言わんばかりな轟音を周囲に轟かせたかと思えば、追いついていた巨人が、……数体の巨人が吹き飛ばされた。

まるで、人間が巨人に吹き飛ばされるかの様に。……まるで、ムシケラ、ゴミの様に。

数多の修羅場を経験してきたピーク。

どんな事にも動じず、ただただ任務の為に、——ひいては、自分自身の目的の為に、与えられた命令を忠実にこなす。……必ず成功させる。ただそれだけを考えていた筈なのだが……。

「ふう、大丈夫か？」

気付けば、目的地へと急行しなければならぬのに、馬を止めて 視線固定されてしまっていた。

そして、視界の中に入って来た男。その男は笑っていたが……、ピークの目には、得体の知れないバケモノにしか見えなかった。その笑顔は直ぐにドス黒く染まっていく様に感じる。真っ黒に塗りつぶされた顔。ニタリ、と口元が三日月の形に歪む。

それは心底畏怖し、恐怖した瞬間だった。

そして これは恐らく、この感覚は敵意を持つ者だけが感じるコトが出来るのだろうと感じた。壁中人類の皆が等しく言っていた、この男のイメージとは全くかけ離れている様に感じられたからだ。

「あっ……ああっ……」

「お前さんがどこの誰か、それは置いといてだ。……まずはコイツらだ、っと」
悠長に話をしている間に、もう3体。5 m級と10 m級の3体の巨人が、左右正面から迫って来た。

ほぼ同時攻撃。まるで巨人が連携攻撃を仕掛けてきたかのように。

「うぜえ!!!」

正面の巨人に右ストレート。

左右の巨人には回し蹴りで纏めて吹き飛ばした。

拳を受けた巨人は、頭部そのものが吹き飛んでしまい、弱点であるうなじが消し飛び、そのまま絶命した。左右からきた巨人は回し蹴りの威力で吹き飛びながら、上半身と下半身が分かれた。

「コイツら片付けたら、上まで連れてってやるから、隠れとけよ」

「は、はい! ……きやあつ!!」

「っ!! っ!!」

突如、飛来するのはデカイ岩。

まるで隕石の様に落ちてきた。

アキラは間合いを取り、その攻撃を回避すると同時に、暴れる馬から投げ出された女性を背負って着地。

「つたく、んな姑息な事が出来るヤツは決まってるよなあ！」

ギロツ、と睨む先にいる。

あの15mは余裕で超えている巨人。……全身毛で覆われている猿のような巨人だ。

『うおおおおおおおおおおおおおおッ!!!』

雄叫びが離れていても衝撃波となり伝わってくる。

まだかなり遠方にいた。

「目測で、6、いや、700m程先か。……流石に、届かねえな」

拳をぶんぶん、と振る。

叫びを上げたかと思えば、また一齐に巨人が現れた。四方八方取り囲む様に。

「まただ。——何も無い所から、巨人が出てきた。つたく、肝心な所は見せて貰えて

ねえんだよな、オレ。……おい、今見てるかよ、エルヴィン。リヴァイ。……ついでにクソメガネ。そっちは存分に頭あ使ってくれよ」

□ □ ウォール・ローゼ上 □ □

アキラの奮闘を上から見ているのはエルヴィンとリヴァイ。

因みに、今この場にはハンジは居なかった。

「リヴァイ。巨人が現れる前兆、みたか？」

「……いや。視えなかった。……少なくとも何にもねえトコから急に出てたのは確かだ」

「……ふむ。私も似たようなものだ」

エルヴィンは、目を凝らしながら、見ていた。

アキラが事前に言った様に。……エルヴィン自身は言われるまでもない事だったが、改めて釘を刺された。

『何かがあるとすれば、壁上での尋問の時だ。俺は2人に注視しとくから、お前らは……外に目凝らしてみてくれよ？ ま、内側も注意は必要だとは思うがな』

それは 言われるまでもない事だった。

そして今。……アキラが言った様に、そして自分達も決行時に事が起きた。

突然の馬に乗った闖入者は想定外ではあったが、巨人の出現、そして獣の巨人の乱入は想定内だ。

問題は、どうやって巨人が現れたか、にあったが……、全く見えなかったのだ。

「……だが、十中八九間違いないな。……あの獣の巨人が、巨人を引きつれている。方法手段は判らんが、目情報やアキラの証言から鑑みると、結論はそれだけだ。……後は、巨人が現れたポイント。地中に何か仕掛けがあるかどうかの確認も必要だな」

「……ああ。その辺は伝えとくつもりだ。下の掃除は、あの馬鹿なら直ぐに終わるだろうからそのあとにでもな。……あの獣には逃げられるかもしれねえが」

リヴァイが眼下を確認したその時だった。

第2、第3の投石攻撃が始まったのは。

「ちっ。エルヴィン。ヤツが壁上^コに的を絞ったら厄介な事になる。最低限残して一度、内側へ部下達を下ろすぞ」

「……ああ。そうだな」

2度目、3度目の投石も間違いなくアキラ狙いだった。

ペトラやイルゼは大分我慢している様だが、そろそろ何か指示をしておくのが良いだろう。

その後、リヴアイは事前に先行していた少数精鋭だけを壁上に残し、残りは下で頭上に警戒しつつ待機命令を出す。

「む……」

命令を出したその時だ。

眼下の状況が変わったのを見たのは。

□□ ウォール・ローゼ下 □□

また1体、また1体と巨人の数が増える。

そして、増えれば増える程、巨人の死体が積み上がっていく。蒸発しきれなかった骸の残骸が山を築いていく。それでも、ただただ攻めてくるのを止めない。

巨人の数が優に30を超えた辺りから、アキラは考えていた。

ただ、闇雲に攻撃を仕掛けてきているのではない、と。

「ちっ……。そういう事かよ」

そして、ある1つの変化に漸く気付けた。

自身の背後にいた筈の、女が姿を消していたのだ。

アキラは、直ぐに腰にぶら下げている信号弾を取り出し、装填した。迫っている巨人をなぎ倒す形で吹き飛ばすと、迷う事なく打ち上げた。

それは灰の信号弾。

異常事態発生印。

これは、本来はアキラが一目散に駆けつける為のモノだが、アキラ自身が撃ちあげると、意味が変わってくる。

アキラが『警戒しろ』と全員に伝えていると言う事なので、当然最大級に警戒を強めた。

そして、その信号弾を確認するや否や、即アキラの傍にまでやって来たのはリヴァイ。眼下で見ていた為即座に行動したのだ。この行動についてはエルヴィンを始め、各班長達にも伝えているので、別に驚く事ではない。

「……何があつた？」

リヴァイは、腰の剣を抜き、周囲の警戒をしつつ アキラに聞いた。

見た感じでは、目の前に未だ迫ってくる巨人以上の脅威はない。……例えリヴァイ一人であつても、十分対処できる状況だ。アキラであれば尚更。

「消えちまったよ。さっきの女。……多分、その辺に何かあると思う」

アキラが親指で指をさした先にあるのは、3つの連なつた岩。前方をアキラが警戒している間に、リヴァイが確認をした。そして、しかめっ面をする。

「穴が開いてるぞ」

「だろうな。たつたアレだけの時間で、ここから消えちまうなんて、空を飛んだか下にもぐつたか、2択だと思つてたよ」

アキラは、拳に力を入れ直すと、『オラあつ!!』と気合一発。

迫つて来た巨人郡をなぎ倒した。穴を調べるだけの時間確保の為である。

「問題は何処に通じてるか、だろうな」

「ああ。……あの女が巨人に成れるヤツつてんなら、正直、地下に入るなんてなかなか考

えにくいんだが……。そんな先入観は捨てる事にするよ」

「わかつてるじゃねえか。……行くぞ」

「ああ。速攻で確認しよう。オレらがいない間に茶々入れられてもつまんねえしな。

……遠征ん時狙ったみたいにはいかねえように」

アキラはぐるぐる腕を回した。それを見てリヴァイも軽く笑う。

「上が騒がしくなったら、地下から出れば良いだけだろ」

「生き埋めになんねえようにしろよリヴァイ」

「余計な気遣いだ。とつとと確認に行くぞ」

2人はそのまま地下へと入っていった。

——ピークの狙いがもう既に完遂していたのも知らずに。

65話

『あの悪魔が傍に居る以上、3人の奪還は殆ど不可能だ』

戻つて来たジークは早口にそうピークに言った。

ジークは戦士長。彼らの中で一番腕がたち、その實力は——本部も計り知れないでいる。底が知れない男だ。

時折おどけたりするが、基本的には冷静に物事を判断し、導いてくれる存在だ。

そんな彼が、ここまで言う以上……間違いないのだろうと判断した。

だが、だからと言って何にもしない訳ではない。

ここで失敗する、出来ない、という事は、——巨人の力が失われると言う事なのだから。

『6つの内の4つが既に赤信号……、寧ろ捕られたと言つていい状態。このままおめめとマーレに帰る、と?』

『いいや。それも駄目だ』

ジークはピークの言葉を聞いて、直ぐに首を振った。圧倒的な力の差を見せつけられ

た形にはなったが、どうやら心まではまだ折れてないらしい。……元々、ピーク自身もここでこのまま逃げる等と言う選択肢は無かったので、一先ず安堵する。

『近々……あの壁の上で何かあるらしいな?』

『……名目では壁の調査。壊れてないのに巨人が壁中に現れた事に対する再調査。……その実体は恐らく、あの2人に関する事だと思う』

その2人——ライナーとベルトルト。

鎧と超大型の巨人の事。十中八九、バレていると考えた方が良い。

『流石。……その情報が無ければ、本当に絶望的だった。今回の件も、正直な所、我々は誘き寄せられてる可能性の方が高い、……が。まともに正面から壁超えて、向かうよりは遥かにマシだ。……ピークの方が存在をまだ知られてないのも僥倖』

巨人の力を操る存在がまだ他にもいる、と言う想定は間違いなくしていると思う。警戒はするだろうが、それが一体誰なのか、それがわかっているわけではないだろう。どんな探知機を使つたとしても、現代の科学では解明できない巨人の道がある。外見はただの女と男。それが巨人である、と判明するには、巨人化する所を見るしかない。

巨人の力を使えば、真つ向で攻め込み——血塗られた歴史に終止符が打てると思つ

てきた。

だが、この悪魔の島——パラディ島に来て、全てが一変した。

壁中人類にとつても、一変したと言つていいが、それはジーク達にとつても等しく、想定を遥かに超えた事が起きてしまったのだ。

『ピークちゃん。かなり危険な任務だが、任せられるか?』

『勿論。……正直、女である事を今日ほど良かったって思う時は無かった』

情報その1。

島の悪魔はハーレムを築き上げているらしい。

周囲には常に女の影があるとのこと。既に何人もの妾が存在するとかしないとか。

『その彼に抱かれたら私も惚れちゃうかもね』

『……そのまま、こつちに一緒に連れてきてもらえたら嬉しんだけど』

『流石にそれは無理でしょ。アニが戻ってきて、一緒に2人がかりで、だったら可能性ありかな』

『そつちの方が想像できないって。——それに、俺が次にアイツを傍で見たら、身が竦むしか想像できないってのもあるかなあ』

情報その2。

対人及び巨人、……対全人類、この世界の頂点に立つ力を保有。

超大型の巨人をも退けた力を鑑みると、少なくとも現時点で有効だと断言できる武力は思いつかない。

『……作戦では、この辺りに掘ってる、って事で良かった？』

『ああ。……ここに手頃な岩を配置した。目印だっと思ってくれれば良い。期間を考えたら見つかってないと断言できるし、仮に見つかったも直ぐに埋めれるような規模じゃない』

『……悪魔の男が相手でも？』

『……それは想定してない。見つかってしまえば速攻で潰されるかもしれないな。そうなったら、危険だが……、あの男と共に壁上に登って隙を窺う手段をとる他ない』

即席で、正直穴だらけだと言っている策だが、今出来ることはそれ以上は無いと云っている。仕入れた情報をもとに、3人を奪還するにはこれしかない。……その危険性を本国へと伝える為にも。

目の前の過去最大の任務を全うするしかない。

それは、アキラがピーク消失に気付くほんの数分前の事。

ピークは、ジークが放った投石……投岩で発生した衝撃波を利用して、不自然に見えない様に、器用に目印の岩の方へと飛んだ。

それに気づいた様子も無かった為、手早くその3つの岩を少し超えた先にある大きな縦穴に滑り込んだ。

「……………ほっ、とりあえず埋められてなくて命拾いした、かな」

ピークはそう呟くと、素早く奥へ奥へと入っていく。

巨人の力——ジークの獣の巨人の力、その異常なまでに長い手を利用し、長く掘られた穴の出口は、ウォール・ローゼの壁にまで伸びていた。

素早く地上へと駆け上ると、目の前にあの壁が立ちふさがる。

「後は、コレを登る………だけ！」

ちらつ、と背後を確認。

相変わらずだ。集まった巨人達は、等しく粉碎され、凄まじいまでの蒸気が立ち込めている。その蒸気は自らの身体を周囲から覆い隠す役目も果たしてくれている為丁度良かった。そしてこの即興の煙幕も作戦の内。アキラの力を利用したものだ。

そして、アキラの姿もまだ確認できた……が、想定外の事もあった。

「……っ、他に誰かいる」

アキラだけでなく、もう1人いつの間にか来ていたのだ。

もしも、タイミングを見誤っていたら、いつの間にかやって来たもう1人に捕まってしまうかもしれない、と肝を冷やしつつ、ピークは、そのまま壁に手をかける。

「練習したけど、これ難しいんだよね……」

ぼそつ、と愚痴をひとつしたが、今は時間との勝負だ。躊躇している暇はない。

それは、ジークが奪ってきた立体起動装置。巨人を殺す為だけに壁中人類が作り上げた装置だ。ピークは、それを使い、アンカーを狙った箇所へ射出。そのままワイヤーを巻き戻すボタンを強く推して、物凄い速さで上空へと引っ張られる。

「っ……っ……っ!!」

どんっっ!! と壁に両足を強打したが、何とか大きな怪我はなく、そして50mはあ

る壁の3分の1ほどまで到達出来た。

「今!!」

その瞬間、手に仕込んでいた小刀で身体に傷を入れ、巨人に変身。

《車力の巨人》と呼ばれる姿になった。

その巨人は四足歩行で活動する。

凄まじい速さで、壁を登り切ると、直ぐに上にまで到達した。

「なっっっ?」

「巨人!! 総員、戦闘配備!!」

突然の巨人の襲来。驚きを隠せない兵団メンバー。エルヴィンも、あの獣の巨人の投石による遠距離の攻撃、そして何も無い所から現れる巨人の秘密、等の事を考えていたので一瞬反応が遅れたが、直ぐに声を張り上げて指示をした。

それでも、圧倒的にピークの動きの方が早い。

統率が乱れ、混乱に乗じた所で、手早くピークは壁上から兵士をなぎ倒していき、上

から強引に下へ落としながら、この上に来ているであろう3人を探した。

「っ!! イルゼ班長! 下がって!! 俺が止める!」

そして 壁上の異常事態を察知したエレン。

仲間達の傍で巨人に成ると、その衝撃で皆に被害が及ぶので、下がる事を示唆しつつ、駆け出した。

「エレン!!」

「っ! ミカサ! 下がって!!」

エレンを追いかけようとしたミカサだったが、それを止めたのはイルゼだった。戦力をこれ以上分散するのは危険と判断した為だ。

少なくとも、同じ巨人であるエレンであれば、あの巨人は止めれるだろう。……だが、背後にいる2人——……3人の巨人までここで攻勢に出られたら、もう絶望的だ。

アキラやリヴァイのいない調査兵団の無力さを改めて痛感させられた場面でもあったが、その考えを頭から一蹴する。

力が及ばないのなら、頭をフル回転させ、最善を尽くす。

それを常に思ってきたのだから。

「ジャン、コニー、サシャ、ミカサ！ ライナーとベルトルト、アニを警戒しろ！ 無理と判断したらここから離脱！」

『はっ!!』

そう長くはないが、今は時間を稼ぐ他ない。

下にいるアキラが、異常を察しここに戻ってくるまで。

「はっ!! 調査兵団は、アキラやリヴァイ兵長だけじゃないんだよ!!」

「オルオ！ 出過ぎるな！ 壁上で巨人を相手にするのは分が悪すぎる！」

「相手は四足歩行……、うなじは狙いやすい！ 壁を利用して、背後に回れ！ 挟み撃ちにしろ！」

リヴァイ班のベテラン組であつても、正直に言えば 立体起動装置を活用できない場面です。巨人と戦うのは自殺行為に等しい。

これまで、例外を長く見続けてきたせいもあつてか、麻痺しかけていた感覚が修復されていく。

1人、また1人と、下に叩きだされていくのを目の当たりにしてしまえば仕方ない事だ。如何に人間が無力であるかをより痛感させられた瞬間でもあつた。それでも、出

来るコトは全てする。……それでいて、決して心臓をささげたりはしない。それを誰よりも嫌う男がいるから。

幸いな事に、上から落とされてきている面々は、視界に入る者に限っては、何とか壁にしがみついた事が出来ており、転落死する者はいなかった。

寧ろ、この巨人の狙いは、ここを襲撃する事——人間を殺す事ではない、と直ぐに判った。

「狙いは、あの3人ね。ほぼ、間違いなく」

ペトラは、素早く信号弾、灰の信号弾を2発取り出した。

一発目を直ぐに頭上に、そしてもう一発は、壁の下へと向かって撃った。

巨人の残骸のせいで、蒸気がかなり出ていて視界が悪い。それでも、アキラに届く様に。

「つ!! ピーク……!!」

「ライナー!! 今しかない!!」

ピークが此処に来て暴れているのは勿論、ライナーやベルトルトにもわかった。

自分達を回収するのが目的だという事も直ぐに理解。

「アニ!!」

そして、ベルトルトはアニの両肩を掴んだ。

いつもアニ相手では特に恥ずかしくて、そんな真似は死んでも出来ない、と思っていたベルトルトだったが、迷う事なく両手で掴み、そのアニの身体を揺さぶった。

「今しかない! 直ぐに逃げよう! ピークさんの脚力と持続力を考えたら、間違いないから離脱出来る! オレ達がアイツが戻ってくる前に、ここで暴れるから!」

「……………」

ベルトルトは必至だった。

だが、実に対照的にアニの目は冷たく、冷ややかだった。

そして、ベルトルトに続き、ライナーも続く。

「壁上なのが良かった。ここじゃ立体起動も使えん。幾らミカサでも巨人4体を相手にするのは無理だ! ピークまでの道をオレ達で作り、アキラ教官が戻る前に離脱するぞ!」

2人を抱きしめる勢いで、迫ってくるライナー。

だが、アニはそれに一瞥するだけだった。

時間は無いと言っている。この狭い場所で圧倒的に巨人の方が有利な戦場だったと

しても、たった1人の加入で全てが覆ってしまうのだから、当然だ。

そして、これが千載一遇のチャンスであることも考えられる。この場所の脅威を、本物の悪魔がいるコトを外に伝える為に。

だから、再三アニに詰め寄ろうとしたが、アニはベルトルトを回し蹴りで強引に振り解いた。

信じられないものを見る様なベルトルト。そしてライナー。

そんな2人を見て、希望を見出していた2人を見て、アニは冷徹に言い放った。

「行きたければ勝手に行きな！ ……私は、いかない」

66話

——はつきりと拒絶された。

それは全く考えてなかったと言えば嘘になる。……だが、もしかしたら、程度にしか考えてなかったのも事実。

それ程までに アニが裏切る、寝返るとは思えなかったから。

自分達の故郷へと帰る。——どんな事をしてでも帰る。

その想いはお互いに同じだった筈だ。

全ては、故郷にいる——家族の為に。

「ど、どうしたんだよ、アニー！ い、行かない……なんて、なんで!？」

ベルトルトは、明らかに拒絶されたのが判っていたのだが、認めたくないのだろう。今にも泣きそうな顔をしつつ、再びアニに向かつていった。

「……何度も言わせるな。私は行かない。行きたければアンタたちだけで行きな」

アニは2人を睨みつけたまま、動こうとしない。

1分、1秒を争う状況でだ。

「なぜだ!? 今、この瞬間を逃せば、俺たちはもう戻れないんだぞ! それに……アニ。お前、言ったじゃないか!」

ライナーは、ここへ来た時のことを思い返していた。

普段でこそ、ライナーは精神の均衡を保つ為に、壁中人類を演じきっていた。数年と言う長い年月が、己の精神の奥深くにまで刻まれ、どちらが本当の自分か見失いかけてしまう程に。

ベルトルトと言う男がいなければ、アニと言う女がいなければ、……互いに故郷へと帰る強い想いをもつ仲間がいなければ、——崩壊していたかもしれない。

ライナーは、蹴りをがむしやらに放ったからなのだろうか、或いは混乱しているだけなのだろうか、判らないが、息を荒くさせているアニにもう1歩、1歩と詰め寄り、ベルトルトに変わり、その肩を掴む。

『生きて、帰んなきゃいけない!』 そう言つてたじゃないか!』

ライナーのその言葉にも、アニは揺れるコトは無かつた。確かに息は荒くなつてい
る、がその目の中の力は健在だつた。心からの拒絶をその目に見た。それを見たライ
ナーもベルトルト同様に驚愕する。

故郷がどうなつてしまつても良いと言うのか? 最早故郷や家族に未練はない、と。
たつた数年。たつた数年の間に、心までもあの悪魔にささげてしまつたのか?
心臓をささげられる事を嫌う悪魔に、心をくれてやつたのか?

「変な事考えてると思うけど、違うから。……この際、はつきり言う」

アニは、ライナーを手を払いながら、2人に背を向けた。

「今の壁の外に、私達の未来なんか無い。……元々そんなもん最初から無かつたつてわ
かつてたんだ。……5年前、私らみたいな子供を壁中に寄越す様な奴らが居る外なん
か」

思い返すのは、もう5年以上も昔。

——それは 外の世界の話。

認められる為に、……名誉の称号を得る為に、日々努力し続けた。戦士として 血反吐を吐きながらも前に進み続けた。

考える力の及ばない者は、ただただ盲目に従うのみだろう、ただ個人の目的の為に。ライナーやベルトルトもそうだ。……いや、考えがあつたとしても、逆らう等と言う選択肢は最初からない。逆らえば、殺される。……自分だけでなく、家族諸共……この島に送り出されてしまうだろう。若しくは兵器として——。

如何に、作戦を練つても、秘密裏に行動を起こしたとしても、かの大国は それを見逃さず、等しく罰を降した。

「壁の外と壁の中。……どつちがマシか？ 今までは外だ。故郷に帰る事だけを考えた方が遥かにデカかった。……今は違う。壁こつちの中にしか私たちに未来はないんだ！」

「悪魔に……、俺たちの未来、だど？」

「そういうけど、あんたらはその悪魔に何度救われた!? ライナー！ あんたは戦士か兵士かわかつてないくらい狂つてたよな!? 狂つた自分を見て考えてみな！ それに、私達がどれだけの攻勢を見せても、いったい何回その悪魔に潰された!? 巨人をも

のともしない男。巨人を単独で殲滅、それも生身で。そんな人知を超えた力を持つ男が、今!! ここに居る!! どんな兵器よりも強力で、どんな巨人よりも凶悪。……そんな男が居る。この世界を壊してくれる男が!」

ア二は絶叫する様に訴える。

そして、息を整えると、今度は落ち着きを払いながら言った。

「世界を、国を、……全ての敵を潰して、私は故郷を救う。……だから、私はあの人の傍に居ると決めた。……もう、決めたんだ」

ア二の言葉。

まだ信じられない様な顔を戻さないライナーとベルトルト。

ベルトルトに至っては、目が涙で覆われていた。

「……それを、俺が上に報告して、お前の家族を、お前が望んでる家族を壊すと言ったらどうする?」

「…………マールレがおめおめ逃げ帰ったアンタなんかの言葉なんか信じるとは思えない」

「………それでも万が一っていうのは有る筈だろ。なら、ここで俺たちをアキラ教官に突き出す方が確実だったはずだ」

アニは、そのライナーの問いに対しては何も言わず、ただ口を噤んでいた。

そんな中で、1人近づいてくる者がいた。イルゼに命じられたメンバーではない。

「そりゃ、決まってるだろうライナー。お前ら仲間だったんだろ？　せめてもの情けってヤツじゃないか。こっから逃がしてやるっていう。その上での決別ってヤツだな」

「……ユミル！」

接近に気付かなかった。混乱しているとはいえ警戒はしていたハズなのに。

まだ壁上で暴れているエレンやピーク、そして兵団の喧噪に紛れてここまでやって来たのだろうか。

「正直、私もそうだったさ。何度も何度もやってくる巨人、それに外の事。未来なんざな
いって思ってた。……ま、今はアニ側だけだな」

ユミルはアニの傍に立った。

持った剣で4人の間に亀裂を入れる。

「私の望みはクリスタ。ただそれだけだ。……どつちが助かる可能性、未来がある可能性が高いか、もう言うまでもない。……あの人の傍だ。それで、あんた達はもうウジウジ悩む時間なんかないんじゃないか？　……お客さんが、お迎えがやって来たぞ」

四足歩行は、壁の側面を、上を縦横無尽に駆け回る事が出来る。
単純な戦いならまだしも、目的が奪還ともなれば、獣の様に動くピークを二足歩行で基本行動するエレンの巨人では捕えきれなかった。

「どうするんだ!?! お前らは!!」

「つ!! ベ、ベルトルト!!」

ライナーは、アニとユミルに背を向けた。

そして、まだ動く事が出来てないベルトルトを担ぎ上げると、ピークの方へと走った。

それとほぼ同時に、下から轟音が聞こえてきた。

凄まじい轟音。そして、立ち込める砂塵。見えてるのは巨人の蒸気じゃなかった。
宙に浮かぶ大地の破片を目の当たりにして、悟る。

「!..これ以上は、無理……!」

ピークはより速度を上げた。

周囲の兵士、エレンに目もくれずに壁面を走り、ライナーたちの傍へと飛び出た。口を大きく開き、そして2人をばくんっ!! と飲み込む。

そして、壁を蹴り、下へと駆け出した。

それと同時に、あの凄まじい轟音の正体とすれ違う。

恐らく、地中に居ながらも、前方の巨人の群れに警戒しながらも、上の喧騒が聞こえていたのか、或いは先ほど撃っていた信号弾が見えたのか、判らない。

ただ、わかるのは 大地をひっくり返す勢いで、地中から出てきたと言う事。

ピークは、その男と交差する瞬間、目が合った。

ドス黒い、何かがその身に纏われているのがわかった。

壁の下であった時以上の狂気に似たナニカを見た。たった一瞬だったがよく判った。

後は、ピークはただただ只管に駆け出すだけだ。後ろを振り返る必要もない。

後は、あの悪魔に捕まるか逃げ切るかの2つのみ。

もしも、逃げ切れたとなれば、奪還出来たのは3人中2人。穴だらけの作戦にしては、及第点だと言える。

『じゅわわわわわわわわわわわ!!!!』

そして、再び聞こえてくるのはジークの雄叫び。

巨人の群れを操り、ピークを援護する。紙切れの様に吹き飛ばす男だが、時間稼ぎにはなる事は確認済みだから。

後は、ただただ只管前へ。信じて進むだけ。

『ライナー、ベルトルト。あとで、しっかり説明してもらおうからね!』

そして、ピークはその日。

短い生涯ではあるが、一生分の運を使い果たしたのだと、安堵するのだった。

67話 嗤う豚の最後（計画）

「取り合えず、残ってくれた事は嬉しいよ。ありがとな、アニ」
「……いえ。私は私自身に従ったままでです。私を終わらせるのも、外を終わ向こうらせるのも、貴方に委ねる、と」

車力の巨人の逃走。

加えて、ベルトルト・ライナー2名も奪還された。

調査兵団としては、かなりの痛手……ともいえるが、間違いなく巨人側であった筈のアニが完全にこちら側に寝返ってくれたのは不幸中の幸い。

これまでは、アキラにさえも心を開く様には見えなかつたのだが、今回の件で相応に信じられるだろう、とエルヴィンが判断したのだ。

勿論、リヴァイも納得済みであり、万が一何かがあれば、アキラ自身にケツを拭かせる、と言う事で納得もした。

「「……………」」

でも、理解も納得も出来ない部分は当然ある。

アニが帰ってきてからと言うものの、ペトラやイルゼが常に臨戦態勢な様子になって、時折メンチきり合いまでやっているのだ。

方や、以前は1つの班を文字通り踏みつぶし蹴散らした巨人で、普通の兵士たちは……リヴァイ班でさえも恐れをその表情に浮かべているのに、全く臆する事なく、一歩も引かないペトラとイルゼには並々ならぬ覚悟と信念が見える。

本当の意味ではまだ信じていない……と言う事だろうか。

「だははははは！ そんな訳ないでしょうが、アキラ教官って鈍感通りこして、ここまでくると呆れちまうな！」

「え？ え？ どういう事……？」

「あー、でもクリスタはその純情なままでいてくれよな」

今回の件で、多少なりとも向こう側の知識がある事、ほんの一部ではあるが、その片鱗を見せたのはユミルだ。

今の今まで調査兵団の本部にて、ハンジらと色々話をしている、あの3人の三つ巴は見てきている。

その帰りの道中でクリスタに上記の通りに聞いたら、思わず吹き出してしまったのだ。

「まあ、同じ釜の飯食つてた2人が実は巨人だった、つつー事実突きつけられて、混乱しきつてる筈なのに、三角関係な修羅場見せられるなんて思っても無かった。おかげで、ある意味あの馬鹿達も救われたかもしれないな」

「コニーやエレンのこと？」

「ああ。腐つても同期だ。……それがあの時。ウォールマリアを破壊して大惨事を引き起こした巨人だったんだからな。どんな馬鹿でも、どんな鈍感な男でも、気にしない方が無理つてもんだ。……でも、その辺は上手くやってくれた、って感じがしないでもないな」

アキラと言う男。

規格外と言う言葉では収まらない。

敵側からすれば、悪魔そのものなのは間違いない。

世界が向け続けてきた悪意、その集合体の様な存在だ。

あの巨人をも遥かに凌ぐ強大な戦力。

ライナーやベルトルト、そして猿の巨人、壁の上に現れた巨人。

少なくとも4人にその存在が知られた訳ではあるが、知ったからと言ってどうするか、どうすれば良いのか、どうなるものなのか。

……こちら側にいるユミルでさえも解らないし、同情を禁じ得ない。

「アキラ教官のおかげで、皆救われる。救われたんだね。……ライナーたちも、わかってくれたら……」

「それは無理な相談、って言いたいが、私もクリスタの意見には賛成したい。あれは勝てない。巨人のアドバンテージを全部無効化するんだ。どんな手を使ったかは聞いてないが、あの50m級の超大型巨人でさえ、対処できるって言いきつちまったんだ。……」

無理に抵抗せず、投降する事を勧める」

「ん……………」

「ん？ んん?!」

ユミルは、何処か心ここにあらずな様子 of クリスタを見た。二度見した。

もう夜だから、表情が、その顔色がはつきり見える訳ではないが、明らかに……………赤い。

「やめとけ！ クリスタ!! お前が進もうとしてんのは、いばらの道って言葉が生易しく見える程、修羅の道だ」

「えええ!! い、いきなり何を?!」

「それに、お前には俺が居る!! あきらめろ!!」

「だから、何の話をしてるのっつ!!」

その後も夜の空に、陽気な声が響くのだった。

調査兵団本部にて。

入り口が慌ただしくなった、かと思えばエルヴインが、どうやら戻ってきた様だ。

エルヴインと共に、リヴァイも入ってきた。

アキラは、エルヴインと目が合うと同時に、顔を顰めながら苦言を呈する。

「どーせ、中央の豚どもに小言喰らったんだろ？ エルヴイン。……つか、なんで俺連れ
てかなかった？」

「無論、中央が大惨事になるのが目に見えていたからな」

「直情過ぎる馬鹿は、あの手の場所は似合わねえ。お前は現場が良い。解ってるだろ？」

「……………そりゃ、まあそうだけど。それでも真ん中で踏ん反りかえってるだけの連中に、皆の事ワーワーピーピー文句言われたら、氣い悪くすんな、っていう方が無理だろ」

いつもの毒舌リヴァイも、相手が相手だからそこまでアキラに対してひどく切つて捨てたりはしない。

アキラもアキラで、それが解ってるから突つかかたりはせず、ただただ命がけで現場で働く仲間たちの事を思えば、一度更地にした方がマシなのでは？　って本気で思えてくる。

「確かに、戦果としては2人とられた。こっちの負けだつて言つて良いが、敵側がはつきりしたし、壁の外に追い出せた。……あれから、壁の上で見張りは目を光らせてる。対応は出来る。これ以上こっちに何が出来る？　アイツらは常勝將軍にでもなつたつもりなのか？」

「……………確かに、その辺りは私も同じ様な事を伝えた。2名の裏切り、捕縛予定が奪還された事に対する責任を追及する声も大きく、それでいてこれ以上壁内に入らせるなど厳

命してきた。……加えて、アキラのイライラもそろそろ絶頂だろう？」
「通り越してるわ」

中央の腐敗具合は嫌って程理解している。
何せ、あまり大きな声で言っただけが……。

「憲兵団、味方だと思ってた団体の中の一人に、リヴァイせんせーの身内に命狙われた時から既に通り越してるよ。なあ？ その辺、どー思うよ。せんせーとしては」

「そうだな。命狙われたって割にや、暫くしたら酒酌み交わしてるお前に呆れてる」

「そりゃどーも。一応、上司の身内だからな。気い使っただけだ。……後100回奢らせるって約束してる。んでもって、中の情報もすっぱ抜いてる。カードだけでいや、もう十分連中追い出せるだけの調査兵団は持つてる、って思っただけどなあ……。まあ、中はエルヴィンに任せて俺は外中心だから、あんまこれ以上言うつもりは無いけど」

中も外も、と言うのは少々酷と言うものだろう。

それに、近頃は夢遊病の気でもあるのか、と問いたくなるような様子が見られる、と

言う報告も、秘密裡にエルヴィンの元には届いているのだ。
精神的にもかなりきつくなっている筈だから、その辺りの配慮もある。

でも、これ以上中央の腐敗具合をアキラ自身の耳に入らせ続けるのは精神衛生上よろしくない、と言うのも確かだ。

「——と言う訳で、そんなアキラに朗報だよ」

「ん？ どうしたハンジ。俺使わなくても巨人ゲットできる方法でも開発したってか？」

「それはアキラ使った方が圧倒的に低コストだからよろしく頼むよ。相棒っ！」
「いつ、だれが、だれの相棒になったってんだよ、このクソ眼鏡！」

「ばんっ！ と見計らったかの様に扉を開けて入ってきたのはハンジ分隊長。」

「いつもいつも、こう言う顔をしているハンジは碌なのを持つてこない、と言うのをアキラは知ってるので、苦虫をかみつぶした様な顔になっていた……が、エルヴィンは違う。」

「ハンジ。ピクシス司令の了承も得た、と言う事か？」

「ああ。勿論さ。最高戦力のアキラ・リヴアイ共に、外の敵に向かって遠征中。それも中々帰ってこれない距離。その時もしも——な事が起こったら、中央の王政はどういう対処を獲るのか？ 敵は人の姿のまま、入ってこれる情報も浸透している今、彼らがどういう行動をとるのか。色々白日の元に晒して貰うよ」

ハンジはそういうと、片目をぱちんつ、と閉じた。

「散々怒らせちゃダメなひとを怒らせ続けたんだ。ちゃあんと、その身に解らせてあげないとでしょ？」

そんなハンジの姿を見てイラつとしたのはアキラだ。

うん。間違いなく怒って良いと思う。

内容や胸糞悪さなどは抜きにして……怒らせた回数で言えば、この目の前の眼鏡も同罪だから。

「ほお〜。なら、ハンジ自身にも解ってもらえる時が来た、って事で良いかい？」
「あつはつはつは！　な〜にいつてんのさ、アキラ！　私が君を怒らせるような事、する訳ないじゃないか」

息をするように嘘をつく……、或いは本気なのかもしれない。

アキラは、取り合えず内容が気になったので、それ以上ハンジの相手をするのは止めて、腐敗しまくってる豚どもを、何人もの屍を踏み越えて、悲しみを乗り越えて進む者たちを嗤った豚どもを、肅清出来るかもしれない方に耳を傾けるのだった。

68話 デカイ祭り

「んじゃ、マスター。いつもの」

「OK」

いつも通りだ。

いつも、壁の中へ中へ——最も安全とされる場所に來たら、いつもここで飲む様にしている。

お酒落なバー……ではなく酒場、いかつい男、むさくるしい男、そんな中で酒を提供するマスター……お爺さん。

息の詰まるあの場所が近くにあると言うのに、ここは一番落ち着く。

「……………」

そんな場所に、新たな来訪者が現れた。

長身で、羽織ったコートと大きめのハットでその風貌をすっぽりと覆い隠してる男

が。

その男は、音もなく酒場内を歩くと、カウンター席について漸く酒場のマスターがその存在に気付いた。

まるで幽霊の様だ。デカイ癖に気配の殺し方は達人の域。触れる者、近づく者、全てを殺しそうな雰囲気があるには醸し出されていて――。

「つたくよお。お前さんくらいだぜ。酒場にきて態々ミルク頼むヤツなんてよお」

そんな雰囲気は一気に四散した。

どか、つとカウンター席に座り込むと、その下髭、ひげ面を全面に出し、ぼりぼりと頭を掻きむしる。

正直言えば不潔。

本当にアイツの身内か？　と思ってしまうのも無理はない。

「おやおや。憲兵団の殺し専門、その隊長がやってくるなんてな。今日は厄日か？」

「うるせえよ。地上最強の生物が。お前つっ―存在を知ったその日から、殺し屋稼業引退したもどろぜんなんだ。真ん中連中の命令なんざ、今更だ。右から左ってヤツだろう

ぜ」

「随分とまあ、牙が抜けたもんだ。最初に合った時とは大違い、ってな」

そういうと、ぐいつ、とグラスの中のミルクを全て飲み干した。

カツ、と音を立てながらそのグラスをカウンターに置き、軽く口元を拭うと、男は——アキラはつづける。

「そろそろ始める」

「だろいな」

「一応、お前さんらの移行も聞いておこうと思っただけ？ どっちに付くのか、今日ここでハッキリさせておこうじゃねえの。………全面戦争でも、こちとら問題ない」

物騒な物言いに、酒場の空気が一気に殺伐としたものへと変わる。

まるで空気が凍ったかのような様な錯覚に見舞われ、同じ空間にいる者たちは皆等しく冷や汗が止まらない様だ。

猛獣の檻の中に突然連れてこられた——。この感覚が一番近いだろうか。

「だーかーら。言つてんだろ？ 誰が好き好んでバケモンの口の中に入れていくかよ。巨人とデートする方が万倍もマシつてなもんだ」

そういうと、いつの間に頼んだのか、手元にあるタンブラーに注がれていた酒を呷る。

「く〜……やつぱさうだよ。何かに酔つてねえとやつてられねえ。こんなバカな話一つすんのも同じだ。——あの日、お前にぼこぼこにされた日から、オレはお前さんに對して酔つてる。……夢破れても、お前さんの作ろうとしてる世界の方が興味が出てきている。……ハッ。お前じゃねーが、以前のオレじゃ考えられない事だろうな」

キツイ酒なのだろう。

あまり表情に出ない性質なのかもしれないが、いつも以上に顔が赤い様に思えた。

「外の殺気むき出し連中も同じ気持ち——それで良いか？」

「ん？ ああ。前の一戦を見ててそれでもお前さんに向かつていこうつて自殺願望持ちは取り合えずいねえよ。つか、殺気なんざ向けてるか？ 寧ろお前さんを知る前よりも面が良くなった気がすんだが？」

「なるほど。つまりは随分と愛されてるって事なんだろうな。……ケニー。お前が殺られてしまわないか、心配でいてもたってもいられない、って感じか」

「——それは、全力で否定させていただきます」

更に1名、来店。

つかつか、と歩み寄ってきてケニーとは反対側、アキラの左側の席へと座った。

「私はあなたが嫌いだ。だから、無意識に殺意が漏れてしまっただけです」

「……こうもまあ、はつきりと本人の前でそれ言っちゃうのがスゲーしゃべーなオイ。いたよ、自殺願望者」

「いいえ。彼は私を殺したりしませんよ。無抵抗の弱者を一方的に蹂躪する趣味は持ち合わせていない。そういう人物だと言う事は十分知っているつもりです。——逆鱗に触れさせなければ、の話にはなりません」

アキラの話は、その人類最強の話は当然真ん中にも轟いている。

何よりも彼が嫌う事、その逆鱗が一体なんなのか……当然伝わってきている。

「聞くまでもないが、トラウテ。お前は、お前たちは逆鱗ツレに触れるつもりは無い、つて受け取つて良いんだな？」

「ええ。それをする事こそが自殺志願であり、願望でしょう？ 私はそうではありませんから。盤上をひっくり返すケニーの夢破れても、世界を創造しうる者が現れたのなら、その先を見てみたい、と今は思つてます」

「ハッ。世界創造ね。それもお前さんの超能力？ のーつか。そういや前の未来見れる力つてヤツじゃ、オレらはお前のお仲間を何人もやつちまつてるつて話だったな。そういう意味じゃ、その誓いも意味成さねえんじゃねえか？」

ケニーの言葉を聞いて、アキラは再びミルクをおかわり。

そして一気に飲み干すと続けていった。

「いや。信じるよ。……お前らを信じる。いい加減、敵は外。内は味方つて解りやすい構図にしたいんでね。考えるだけで頭が痛くなってくる。酔いたくもなってくる」

「……ミルクじゃ酔えねえよガキ」

「生憎。オレは力に酔えるんでね」

「んじや、手伝って貰おうか？」

「は？」

「は？ じゃねーし。前酒奢ってやった時言つたら？ 手伝ってやるって」

「覚えてねえな。酔っ払い相手に約束とか無意味だろ」
「だから、」

以前――。

中央の連中が調査兵団を疎ましく想っているのは十分わかっていた。

でも、それが殺意までに繋がるとは思わなかったのだが……、ケニーの言うアキラの超能力？ でハッキリと見たのが切っ掛けだった。

そしてそれを確認するためにリヴァイやエルヴィンの許可を取って単独行動。

街中をくまなく、堂々と闊歩し続けるつもりだったが、あっさりと釣れた。

それがこのケニーが率いる「対人制圧部隊」に取り囲まれたのは。

ケニーを中心に、立体的に取り囲まれている。

ちよつとした巨人の気分になってきた。

『おーおー……、マジでそのまんまだったな』

それがアキラの第一声だった。

なんの超常現象か、自分が居ない未来を、自分が居ない本来この世界が進む世界を神様の様な存在が垣間見せてた時に、確かにいた部隊。

巨人を殺す装備ではなく、その名の通り、対人。ニンゲンを殺す事に特化した部隊。連中が何故殺そうとするのか、中央連中が何を考えているのか。

細かな理由までは知らない。音声なし不親切な映像、断片的な映像だけを多く見せられただけだったから。

でも解る事はある。

この向けられている散弾銃ショットガンは何れ仲間たちに向けられ、その頭を吹き飛ばされてしま
う、と言う未来。

自分がいる世界線でその未来を来させるつもりは毛頭ない。

『撃てええつ!!』

ケニーではなく、頭上を陣取っていた女の号令の元、一清掃射。

実際に見た事はなくとも、人類最強と呼ばれる男を暗殺するのだ。躊躇の類は一切見せず、初手から必殺の布陣と大量の武器を以て殺しに来たが全ては無意味。

巨人を屠るその拳が振るわれた瞬間、散弾の全てが逸れて周囲に散らばったからだ。

『自己紹介はいらねえようだな、お前ら。……んでもつて、いきなり撃たれてオレ切れた。もう許してやんない。洗いざらいぶちまけてもらおうぞ』

何が起こったのか、当然理解できる者なんている訳がない。

それはケニーとて例外ではない。

その後は——誰も死ななかつたが、誰もその時の事を話をしたく無い。

ゲラゲラ笑いながら話す様な男はケニーくらいだろう。

男として、……雄として、圧倒的な力の前に敗北を喫した。ただただそれだけなのだから。

圧倒的な力を前に敗北するのは初めてではないが、それでもこれ以上は存在しえない、とただただ笑う。笑うだけだったから。

「いい加減、中央で踏ん反りかえってる連中を地に落とす。手伝い杵余ってるけど、どうする？ 乗るか？」

「ほお……………」

「偉そうに踏ん反りかえってる連中が慌てふたむいて、これまでの報いを受けさせる事が出来る。結構スカツと思うがね」

「憲兵団は調査兵団程はストレスたまつてねえ職場環境だったが……そそるね」

王政の連中。

それに忠誠を誓ってる者などいない。

食いに食い、肥え太った豚どもが玉座に座している事を良しとしている者はいない。内情を知っているケニーもそれは同じだ。

「具体的には何を？」

「お？ オレの事嫌いでも手伝ってくれるんだ？」

「ええ。どんな策かは知りませんが、想像してみたら、随分と楽しいだろう、と解つてますので」

「良い性格してんよ、お前さんも」

その後、今後起こる事を説明。

それをバラされたら結構危ない事になるが、その辺りは完全に2人を信じている。

少なくとも、自分たちか、中央の連中か——。どちらに付いた方が利点があるのか。なによりどちらに付いた方が面白いのか。

そう考えたら、もう考えるまでもない事だから。

「明日。ウォール・シーナは巨人によって破られる。壁中人類史上、最も大きな祭りの始まりだ」

69話 英雄か、民か

中央に情報が届くのは迅速。報連相がしつかりしている組織と言う事なのだろう。或いは、忍ばせているか意図的に流布しているか……。

まず初めに壁の外——ウォール・ローゼの壁が突破され、ウォール・シーナへと巨人もが迫っている、と言う情報が飛び込んできた。

続いて、それを誰よりも早く聞きつけた調査兵団が、人類最強の双壁が討伐に向かった、と言う情報。

更に続けて——ウォール・マリアに今回の巨人進行の原因が、その手がかりがあるであろう、と言う調査報告。

つまり一先ず危機は去った、と言う事だ。

このウォール・シーナ内には平穏が訪れ何物の脅威も無い。

「……全く。あの悪魔が来てから散々だ」

そう口にするのは中央にいる豚……いや、人間擬。

王政の中枢にいる人型の豚であり、調査兵団が巨人の次くらいに嫌悪する存在だ、と言ったって過言ではない。

かく言う、王政側も調査兵団とは目の上のタンコブと思っている。

だが、そうも言えなくなってしまった。

それもたった数年で。

調査兵団など、壁外の巨人にいずれは食われて消滅するモノだと高をくくっていた。だから、そう重要視もせずに、外側だけを自由にさせていたつもりだった。

だが、あの悪魔が現れてから……状況が一変してしまう。

壁の中の平和を——これまでの人類が戦争など起こさず、平和を守り、秩序を築き上げ、それは1000年、2000年と変わる事のない不変の歴史である筈だったのに、あの悪魔は突如現れ、確実に喉元にまでその牙を突き立てる様になってきたのだ。

王政が懐に隠していた刀……強大な力を持つ憲兵の1人、嘗ては懐刀もあつさり悪魔側に魂まで売り渡してしまつた様だ。

嘗ては憲兵を殺して回つていた切り裂きの異名を持つ者が、逆にこちら側に付き……更に裏切る、いや元の鞘に戻るとはいつたい何の茶番だと言うのか。

「それにしても、あのお方からの連絡はまだなのか……？」

「いつ、手中に抑える？　そもそも、どう抑える？　アイツの手中にあるんだろう？」

「……アイツがしびれを切らせてからでは遅いではないか」

「ああ。これ以上、アレを宥めるなど、もうごめんだぞ」

「今は、壁の外……、マリアの方にまで行つてると言うのに、同じ壁内に居ると言うだけで、反吐が出る」

「処理させる手段……、本気で考えなければならぬだろうな。……アレは、情に弱い面もある。そこに付け入るか……」

「リスクはあるが、あの方の力で巨人を」

「だが、それをするには何としても抑える必要が……」

どうすれば、あの悪魔をこの世から消す事が出来るのだろうか。

そればかりが王政では、中央では検討しあっている。

それは、憲兵団やらの他のメンツが居ても変わる事が無い。

本人が居なければ誰に聞かれようが問題ない、と言った様子でだ。

快く思わない者もそれなりにいる憲兵団だが、こうもあからさまに、消す算段を話し合う王政に、嫌悪感さえ覚える……が、それは夢物語の様なモノで、ただの子供の遊び、児童、とも思えてしまっているので、嫌悪感・不快感は振り切つてはいない。

「くそっ……」

いつからだろうか、出口の見えない洞窟の中に取り残されて、進んでいるのかどうかも解らないような感覚に見舞われ続けているのは。

それでも、彼らが強大な悪魔に従順になったり、ご機嫌を伺ったりしないのは、その強烈なプライドのせいだろう。

悪魔を利用する——その方向へと進んでいたとすれば、まだ国の中枢として、人々を導くポジションで生き永らえていたかもしれないのに。

「(今日もアキラの事メチャクチャ言ってるよ。できもしない事なのに、毎回毎回全然飽

きないな)」

「最初の頃なんか、ピクシス司令もそれなりに宥めようとしてたけど、もうガン無視だし。ここまで相手を憎めるモノなのかねえ？ 巨人じゃあるまいし)」

「(……でも、ちよつと気になるな。今日、全てが変わるって、調査兵団のエルヴィンから聞いていたが、一体何をやらかす事やら……)」

「(この城でもぶつ壊す!! とか？ そりゃ、確かに数分ありや出来るだろーけど……)」
「……………」

憲兵団は何かが起こる……と何処となく浮足立っている様だった。

そんな中で、ナイルだけは口をぎゅつと噤み、ただただピクシス司令の方を見ていた。

何が起こるのか、解らない。でも、起る事は確定している。

全て、ピクシス司令に聞いたからだ。

委ねるとも。

そして、その時は訪れた。

バンツツツ!!

勢いよく、扉が開かれ、飛び込んできた兵士の1人が心臓を捧げる敬礼ポーズをとりながら叫んだ。

「報告します!! ウォール・ローゼが、突破されました!!!」

「「!?」」
「!!」」

一同、最初こそ驚き目を見開くが……その報告内容には『はあ??』以外の感想が浮かばない。

何故なら、こちらには人類最強にして、巨人にとっての最悪の相手がいると言うのに、何故ここまですってこれると言うのだろうか? と。

これまで幾度となく、巨人を素手で分解すると言うトンデモ映像を見せられ続けているのに、どうやってそれを掻い潜ったのか、と。

「調査兵団の主力が【獣の巨人】を確認し、離された隙を狙われました!! 確認できたの

は、「鎧の巨人」「超大型の巨人」「四足歩行の巨人」の3体！ 突如、現れウォール・ロゼの壁を破壊！ 信号弾を打とうとする兵士たちが優先的に狙われ、瞬く間に壊滅！ 壁外にいる主力に伝達が不可となりました！ 巨人どもの組織的な計画だと推察されます!!」

「……やられたの。力押しや敵わぬとみて、策を講じてきたか。アキラの逆鱗に触れると解つて尚、攻め入ろうとする理由が気になる所ではあるが」

獣の巨人、鎧の巨人、超大型の巨人、四足歩行の巨人。

その全てと遭遇したアキラからの感想は「正面から来てくれれば問題なし」と例外なく言い切っている。

でも、こう言った搦め手を使つての攻勢はめつぼうに弱い、と言うのも言っている。相手が何も考えてない巨人ではなく、人間である事を考慮したら……、いや、内情をよく知っている、理解している人間だったとしたら、いつかはこう言つた作戦を立ててくる可能性も考えてはいたが……、あのアキラの力を見て、そのうえで憤怒させるような作戦をとつてくるとは……と、低く見積もっていたのだ。

そうしなければならぬ程のモノが、向こう側にはある——と逆に言い換える事は出来るが。

「ウォール・ローゼ内の被害は？」

「現在！ 東区より非難する住民が押し寄せてきています！ 時間的にみても、恐らくカラネス区は絶望的かと!!」

ピクシスはそれを聞いて素早く指示を出した。

「避難経路を確保せよ!! 駐屯兵団前線部隊は、一部を残し、兵力を東区に集結させ避難活動を支援！ 残った者たちは、馬を使い壁外遠征中の主力へ危機を伝達！ 奴らが戻るまでにどうにか堪えるのだ！ 皆、それぞれの持ち場へ!! 住民の避難が最優先じゃ!!」

ピクシス司令の言葉で、天啓が舞い降りてきた者がいた。

そして前回の事を……、ウォール・マリアの壁が破壊された時の記憶を揺り起こす。

あの時、あの悪魔はどうだった？

持てる力を、その激情に委ねてリミッターを外し、使い続けた結果、どうなった？

そう、深い眠りについたので。

その結果、狙い通り人間引き計画を遂行出来た。

あの悪魔が健在であれば、確実に阻止してくるであろう作戦を実行する事が出来た。今回のコレは、前回の再来。

ローゼ内の広範囲に渡って、人類を守る事になれば必ず前回と同じ様になる。

隙をつき、悪魔祓いをするのは今しかない。

「時は来た!! ピクシスの発言は許可しない! ウォール・シーナの扉を全て閉鎖せよ

!! 避難民はウォール・ローゼ内に留める様にせよ!!」

「……………は?」

その発言の意味が解らない…………と、顔を顰めたのは、真つ先に声を上げたのはナイルだった。

「どういう意味でしょうか。それは、それでは、ウォール・ローゼ内の住民を、人類の半数を見殺しにするのご判断でしょうか!」

「そうではない！ 調査兵団のあくま……、あの男が戻り、ローゼ内の巨人を全て葬った後であるなら開放して構わぬ！」

「答えになっていません！ 何故、今住人を受け入れるのを拒否なされるのですか!？」

あの男なら……、アキラであればそう時間をかけずに戻る筈です！ 少しでも、避難民を、住人を助けるためには!!」

ナイルの訴えに対し、下卑た顔を向ける。

「時は来た、と言った筈だ！ あの男こそが、この壁中人類にとって最悪の敵なのだ。外の巨人を滅ぼした後、いつ我らに牙をむくとも解らん」

アキラの人柄を知る者ならば、アキラと寝食を共にし、飲み語らった者たちからすれば、それは容認できない内容だった。

「今しかないのだ！ 悪魔の芽を摘むには……、アレが来たからこそ、壁は破壊され、中央に巨人が迫ろう事態にまでなったと言う事が何故解らん!?!? アレが全ての元凶だ！ だからこそ、責任を取らせ、アレに巨人を処理させた後、元凶であるアレを消し、そ

して再び壁を開放。その後に住人でもなんでも受け入れれば良い!! これは命令である!!!」

王政そのものを脅かす存在をどうにか消したい気持ちで心が完全に囚われてしまっている。

本人は、中央をどうこうしたい、とはさらさら思っていないと言うのに、自分たちの保身を、その権威を守りたいが為に、ここまでの強硬手段を高らかに宣言して見せる所を見ると、もう色々と壊れてしまっているのかもしれない。

だが、腐っても王政側の言葉だ。

「……意思が下ったなら、やらなければならぬか」

「仕方ない、か」

調査兵団を快く思わない者、あの横柄な態度事態が気に入らない者。

より、王政側に染まりつつある者は、その命令のままに行動をしようとする——が。

「それは、ウォール・シーナの壁を封鎖する、と言う事か？」

「ああ、その通りだ」

「ならば、オレはウォール・ローゼ側の人間だ。……阻止させてもらうぞ！」

「!!？」

ナイルは、真つ向からその者たちの前に立ちふさがる。

それと同時に以前、エルヴィンと話した時の記憶が蘇ってくる。

『民衆を助けるか、アキラを消すか。この二択が迫られた時。王はどう判断すると思う

？』

『は？ 決まっているだろう？ なんだその二択は。……当然』

ナイルが前者を口にしようとする前に、エルヴィンは首を横に振りながら断言した。

『アキラの排除を第一優先する筈だ。……間違いない』

その言葉を当時は信じられなかった。

確かに疎ましく思う事は間違いないだろう。

あの性格もあるから、その内の一人だ、とカウントして貰っても構わない。

でも、あの男が齎す功績を考えたらありえないから。

壁外に巨人が何体いるか解らないが、遠い未来——壊滅にまで導けるかもしれない

と言う期待も大いに持てた市政にとつてもまごう事なき英雄の一人なのに。

エルヴィンは話してくれた。

これまでの経緯、その結論に至るまでの材料の全てを。

アキラの影響が、どんどん広がりに……中央内地にまで到達するにつれて、あからさまに変化していく態度。殺意を、エルヴィンは調査兵団のトップとして、たった一人で対応に当たっていた。

そして、その後も様々な材料が面白い様に集っていく。

特に、憲兵団の一人、リヴァイの親戚でもある同じアツカーマンの名を持つケニー・

アツカーマンが調査兵団側に付いたのはかなりデカかった。

巨人の力に魅入られた男が、それを更に上回る男の力に魅入られ、壊すと言う作戦を

甚く気に入ったとのことだ。

状況証拠しかなかったが、彼の登場によつて更に確信し、暗部についても理解できた。

今こそなのだ。

この100年続くウォール・マリアの壁は、巨人によつて破られた。
そして100年続く王政を破壊する時。

時は来た、と言う台詞。

偶然とは面白い。

それはこちら側の台詞だから。

「おい!! 何を言ってるか解っているのか!? 王に齒向かうと言うのか!?!」

その言葉に動揺する訳もない。

ナイルは、ただただ鋭い眼光を向けると、一切目を逸らせずに言い切った。

「ああ。その通りだ。我欲で家族を殺そうとする王など、それも意味不明な欲で民を殺そうとする王など、壁の中には不要だ」

そう言い切ると同時に。

「私も加勢しよう。ウォール・ローゼ側へと」

その言葉と共に扉がガラリと開いた。

「つーか、ここまで嫌われるよーな事、オレしたと思う？ ザック爺さん」

「爺扱いするな。少なくとも、ピクシスよりは若作りだろうが。髪とか」

「そこ、基準にしてねーし」

そこに出てきた者たちを見て——目を丸くさせる。

中央に、ザツクレー……はまだ良い。

「ははっ！ 確かに言った通りデケー祭だな！ 面白れえ！」

「……………」

ケニーがいた。

リヴァイもいた。

「王政が、ここままで……………なぜ、なぜアキラを、英雄を殺そうと言うのか」

「信じられない。この耳で聞くまで、信じられなかった。巨人を殺し、外に広がる世界へと開拓を夢見ていたと言うのに。…………それを口にした友は死んだ。それもまさか、王政側の仕業だったのも、本当…………だとと言うのか」

「英雄を殺す為に、民を餌とするのか。民を餌にしても、英雄を殺したいと言うのか」

「むず痒いから、止めて欲しい。英雄英雄って…………」

「英雄様がお通りだぞ!! おらあ、道い、開けやがれ!!」

「やめんか！ 酔っ払い！！ コラリヴァイ！ 親族なんだろ！！ 止めてくれ」

「知らなかったのか？ 実はそいつは赤の他人だ。知らん」

「いや、今更無理があるだろ！ 嘘つくの下手か！！」

「ひつでーチビだなオイ」

覚えのある中央の記者たちが居た。

その他、大勢……多数の中央憲兵も含めた兵士たちが、そこにはいた。

でも、一番驚く所はそこではない。

「ここに居る筈がない男が。」

「あ、あくま——！！？」

「よお、漸く面向かって、人の事悪魔呼びしたなあ、ちったあ、度胸ついたみたいで成長を感じるぜ」

拳をゴキリ、と鳴らす悪魔の姿がそこにはあつた。

そして、その後ろには調査兵団の面々が居た。

「ここまで腐ってたなんて。……前に言った通りだったろジャン。内地は糞の掃き溜めだって」

「今更ドヤ顔して何になるってんだよ。つーか、お前も驚いてんじやねえか。説得力無いわ」

「えっと、つまりどういう……」

「お前頭悪いんだから、考えるな。ただ見てりや良い」

「コニーに言われるのは心外です！」

エレンやジャン……ミカサやアルミン、コニー、サシャ、等々。

「……あまりにも酷すぎる。アキラが、どれだけ人類に貢献してくれたか……、彼が居なかったら、滅んでいたって不思議じゃないのに」

「あの超大型の巨人を見てないから。いや、巨人自体見てないから。……安全な所で、踏ん反りかえってる豚には解らない、って事だよ」

イルゼ、ペトラは明確な殺意を向けていた。

それ以外にもオルオやグンタ、エルドも揃っているが、女性陣の圧倒的な殺意を傍で受けて、ただただ気の毒に……と思う様になったりして口を挟まなかった様子。

つまり、遠征に向かった者たちの全て、兵力の全てがここにいる、と言う事だ。

情報が全てもうそだった、と言うのだろうか？　だが、それはあり得ない。信頼できる筋からの、暗部からの情報だ。どうやっても操作出来ない……のだが。

「嫌われ過ぎだ。お前ら。それに気付けないなんて、お気楽ハッピーな頭でもあるなあ」

目を見渡してみれば……暗部だった者たちも、そこにはいた。

考えれば解る。ケニーの存在。

アレが向こう側に向かった時点で、凝縮された闇の様な男が向こうに渡った時点で、誰が寝返るのかなんて、誰にも解らないと言う事。

あまりにも千載一遇のチャンスに、完全に脳が考える力を奪い去ってしまった。

「今更説明は不要かと思いますが、全てが誤報です。獣の巨人は未だ不明、そして何よりウォール・ローゼの壁は突破されておりません。この内地に、巨人は一匹たりとも存在してません。……少々、演出をさせていただきます」

そして、エルヴィンも入ってくる。

毅然とした目で見渡しながら、はっきりと告げる。

「——我々人類の手綱を持つに相応しいのか否か、それを見極める為に。可能な限り、皆に知ってもらえる様、この場を集ってもらった上で」

「(この場に巨人はいない……か)」

アニは少しだけ考える。

ほんの少し前までは、この場に潜伏して色々と情報収集をしようと暗躍していた時期

もあつた。違った形とはいえ、壁中人類の中枢に入れた事に少なからず思う所があつたのだが、それよりも思うのは巨人はいない、と言う言葉だ。

「……………私は微妙な所ね」

「ばーか、何言つてんだよアニ」

この場に巨人はいない。

エルヴィンの言葉を聞いて、思わず自虐的に笑うアニだったが、それを鼻で笑い、頭をぼんつ、と叩く。

「今のお前は巨人じゃねえだろ？」

「……………」

そういう意味じゃない、とも思ったが、直ぐに考えるのをやめて、アキラのその手に意識を集中させた。

何やら、鋭い眼光が、殺気に近いモノが二つ程感じるが……………些末なモノだろう、と鼻で笑い。更に増した殺気？ を向けられるのだった。

70話 ロッド・レイス

この世に——オレより強えヤツがいるなんて思いもしてなかった。

だが、違った。狭い世界で吠えているだけに過ぎなかった。

壁の中が狭すぎたんだ。きつと強いヤツなんて多分五万といるんだろう。

その栄えある第1号が、ウーリと言う名の……友だった。

見た事の無かった巨人の力を操り、文字通り見た通りオレ自身を握りつぶそうとしやがった。

つまり、圧倒的な力を持つ者の前に、オレは屈した……と言う事だろう。あまりにも脆く、命乞いとは程遠い糞見てえな台詞を口から喚き散らして、命が終わるその瞬間を恐れた。

暴力が己の全てだった。それを覆す巨大な力……巨人の前に。

だが、命が終わる事は無かったんだ。

巨人を操る力を持つ男ウーリ・レイス。

そいつは、この壁の中の真の王。

それ程までの力を持ちながら、下賤な男であるオレを、襲撃に来たオレを前にして、こうべを垂れやがったんだ。

全ては、オレ自身の性が、アツカーマンが原因だった。

アツカーマンと言う名の一族は、何故だか中央から、王政から、王から迫害を受け続けてきた。壁の中において、お天道様の下で歩く事なんてままならない事を運命づけられた腐った人生。

そんな世界で、暴力が全てだと血に飢え、力に飢え、本能の赴くままに暴れに暴れた。その結果、巨人の力を前に成す術なく敗北し、結果レイス家の犬となった。

随分と格好悪い結果ではあるが、実際な所満足はしていた。

それもこれも、ウーリと言う名の友人が出来たからだ。

「ケニー。この世界は遠からず、……そう遠くない未来必ず滅びるだろう」

絶対的な力を持つ壁の王。

いう事に大体間違いはないのだろう。

だが、オレの中ではもうそれは否定されている。

この世界が、この壁の中に滅びが来るなんて事はもう考えられなくなっている。

そう、思うようになったのはオレより強いヤツ第2号の存在。

「巨人を遥かに上回る絶対的な暴力を持つ野郎が、現れたんだよ。似たような思想、地平に立つてる。平和にしやがれ。ぶっ飛ばされたくなけりやな、なんてほざき回ってやがる」

アキラ・オーガミと言うガキ。

いつも通りだ。レイス家の犬らしく、指示通りただこのガキを消すだけだった筈なのに、笑える程あつさり叩きのめされた。

ウーリと言う絶対的な力を目の当たりにしてからは、もう二度と驚く事なんざ、動揺する事なんざ無い、死を覚悟する事も無いって思っていたのに。まるで玩具のようにボ

ンボンすつ飛ばされる。

でも、殺す気は一切ないのも解った。

立体起動装置を装備しているのが解っているから、宙にすつ飛ばすやり方を続けたんだろう。何度も投げられて、防がれて、襲った全員がもう立つ事も出来ない様になった時、オレは確かに視た。

アキラは、ウーリをも超える力を内包している、と。

巨人に比べりや、鼻糞みてえに小さな体なのに、その身に内包する力は、その狂気は……ウーリの比じゃない、と。

きつと、こいつは死なねえんだろう。

老いや病気とは無縁の存在だ。老いや病気と言うなら寧ろ、オレの方が先に死ぬ。

ウーリのように、別の誰かに受け継がせたりなんて事も無い。

「オレの連れあ、この先もずっとずっとバケモンのまま、飯食って糞まき散らして生き続けんだらうなあ」

「さつきから何わけわからん事ばつか喚いてんだよコラ。喧嘩売ってんのか？ 売ってんなら買うぞ？ おおん?？」

「かつはつは！ オレあてめえに酔つちまつてんだよ。今までも、これからもなあ。だからもつと気分よくだべらせろや。……色々と思ひ出してんだしよ。それも肴に、やつてんだからよお。最高の気分だ」

「おーおーそうか。こんクソ忙しい時にここきたつてのに。んじやオレいる必要ないな。ロッド・レイスと呼ぶからつてたからここに来たんだが？」

場所はいつもの酒場。

少々違うのはいつもの喧騒が、あわただしさが嘘の様に静かだ、と言う事だろう。

だからこそ、ケニーの眩きが一言一句横でミルクを飲んでるアキラに届いた。だからこそ、色々と暴言を交えてくるので、少々苛立ったのだ。

アキラにとつて、ケニーとはハンジに似た属性持ちだと言う事。少々方向性は違うかもしれないが、他人を息をするように煽ってくる人種だと言う事。リヴァイもある意味ではそうかもしれないが、一方的に毒を吐いてくる訳じゃないから、大分マシだろう。

「嘘は言つてねえ。もうそこに居る」

ケニーは、指をさした。すると、それが合図だったかのように1人の男がバーの奥か

ら現れ……アキラの隣に座った。

「はじめまして」

その男がロッド・レイスだと言う事はケニーが証言してくれるだろう。

そして、ロッド・レイスで間違いないのだと場の雰囲気察したアキラは、会って開口一番、何をするかを最初から決めていた。

「うぐつつつ??
!!!」

まず速攻で片手で胸倉をつかみ上げる。

全速力で。知覚する暇も与えない。

文字通り持ち上げる。巨人をすっ飛ばす力だ。小太り気味の中年男を持ち上げる事なんか造作もないだろう。

そのまま暫く窒息を与えた後、バーに顔面から叩きつけた。

ドカンっ、がしゅんっ、と盛大に壊してしまった。後で店主に詫びを入れておこう。

「がああっ?!!」

その後は勿論、殺さない様に徹した。

巨人を殺すのは得意だが、人を殺したりは極力したく無い。

だから、限界ギリギリを見極めるのは、当初のアキラの目標でもあったんだ。

幾ら中央の連中が自分を殺そうとしているからと言って、自分もその輪の中に入るつもりは毛頭ない。

でも、人間の練習台が十分以上に向かってくるから、経験は積めた、と言うのは不幸中の幸い、とでも言うっておこう。

ニンゲンの敵、と言うのは思いのほか少ないから。

仲間相手に、この練習は流石に無理だから。例え相手がハンジみたいなヤツだったとしても。

「ぐ……、き、キミの怒りも、もつとも、だ。ぎかい、がきめた……とはいえ、わたしは、レイス王一族の、現在の、とうしゅ、なのだから」

ロッドは、この場に来る事が何を意味しているか、ある意味覚悟をしてきている。

ケニーがこのアキラと言う男を、ウーリ以上であると称するのなら、それはきつと正しい。

暴力の中で暴力だけを生き甲斐とし、生き残ってきた男の一人なのだから。

ロッドにとって、ウーリとは神。

厳密にはウーリが神のではなく、その力を継承した者は等しく神となる。

巨人の力を意のままに操り、その頂点に立つ存在こそが神だと疑う余地もない。

だが、その神をも上回ると言われたら……、神をも滅ぼす悪魔が現れたと言うのなら……、最早何も出来ない。抗う事さえ、全てが無意味だろう。

「おい、おっさん。オレが、狂犬どもを差し向けてきたからキレてる、とでも思ってるのか？」

そんなアキラは、ロッドを一瞥すると、心外そうに顔を歪めながら……再び持ち上げた。

今度は、互いの目線が合う高さに。

「決めたのは、ぎかいである、が……これいじょう、いいわけは、しない」

「あ？ オレが言った意味わかってんの？ ケニー含めた、中央の人殺し集団を差し向けてきた事にキレてるだけでも思ってたのか？ つつってんだが」

「……………違う、とでもいうのか？」

額が切れて血を流し、打撲跡が顔面の至る所から出ている。それなりに苦痛を感じているだろうが、それに意に介す事なく、本当に純粹な疑問を浮かべる形で、ロッドは聞き返した。

アキラは、軽く息を吐くと——もう一度目を見て言った。

「クリスタの生い立ちを聞いた。その件に関してだボケ。悲惨極まる最悪の生き方。オレあ感情移入しやすい性質だな。単純に。それを聞いて、聞いた瞬間元凶がムカついて仕方が無かった。だから会えるつつーなら取り合えず、アイツの分も含めて一発殴つてやろう、つて思ってただけだ。……まあ、殴つたら死んじまうから、殺さねえ程度に殺すつて決めてた。——アイツは、オレの可愛い、大事な教え子だ。だから親だろうが何だろうが、知るか」

今度は強引に席に座らせる。

ひよつとしたら尾てい骨の1つや2つ、折れたかもしれないがお構いなく。

「因みに、クリスタから許可あ貰ってる。このケニーが、デリカシーなく全部ペラペラしゃべってくれたからな。モンスターティーチャー爆誕だよここに。あ、後償う気があるなら無条件で協力して貰うぞ。今まで中央で踏ん反りかえってたヤツ、全員クビな。洗脳しちまつてる連中も、徐々に解けつつあるが、なんとかしろ。黙秘権も拒否権も無え。何なら、仕事終わるまで日照権も無え」

「……………したがおう」

「黙秘も拒否も無えなら、償う気とやらも必要無えな。今日まで、しつかり日光浴びてたか？ 暫くお預けになりそうだぜロッド」

ここまでやって漸くロッドを開放する。

ケニーはただただ、笑っていた。

「それにしてもめえみてえな親がもつといりや、壁ん中に楽園つつうウーリの願いも、とつとと叶ってたかも知れねえな。いや、甘ちゃん優柔不断童貞野郎で群がっちゃまった

ら、壁ん中のかじ取りなんざ無理か？ いやいや、ガキ拵えてんだから、童貞は無理あるか？」

「喧しいわ酔っ払い」

くつくつく、と愉快そうに笑うのをやめない。

——どうやら、オレあ……お前が見てた景色を見る事は出来ねえらしい。……でもな。

もう一度、酒を呷る。

——お前が見たが……景色……見る事は出来そうだ。お前の代わりに、な。

革命を成功させた後の事。

エルヴィンやピクシス、ナイル、ザックレーらが中心となつて奮闘してくれた。

王亡きあとの民衆をどう導いていくか。頭数は揃っているから、良い方向に流れてくれる事だろう。……多分。

それにしても、レイス家の現当主であるロッドが完全陥落したことを知った時の、連中の顔は、まさに爽快の一言。アキラの事を悪魔と連呼し、堂々と殺すべきだと喚いていたと言うのに、あっさりと陥落して最後は命乞いをした。

ある程度留飲下がったアキラは、正直面倒くさい。何ならもう顔も見たくない、と色々放棄。

そこで嬉々と名乗りを上げたザックレーがある程度の罰は必要だ、皆に色々と建前を

進言し、……そして密室で何やら行われた様だがそこはザックレー以外は関与しない事となった。何だか、しわしわな顔が、その肌艶が輝いていた様に見えたのは……きつと気のせいだろう。

巨人の秘密を知る者たちは、等しく知っていた。

超大型、獣、鎧、女型……、そしてその他大勢の巨人の中でも頂点に位置する存在。

《始祖の巨人》の事に関しても。

聞き出せたから全てを解明できた、と言うには早計だろう。

始祖の力を持つ者が説明をしてくれた訳じゃないから。

それでもエルヴィンは、確証とそれに見合う証拠を掴み、臆てケニーと言う最大の情報元を得て、漸く辿り着いたと言うのに、生まれの違いだけで、簡単に答えを知っている連中は、自分が生まれた瞬間から偉いと思っっている連中は、ここまで醜いモノなのか、と唾棄する思いでいっぱいだ。

でも、その一端を……この日知る事になる。

それは恐らく知りたくなかった新たな事実。

「ロッド。間違いないんだな？ この期に及んで、デマ吹きたい、つて訳じゃないんだな？」

「……………間違いは、無い。嘘をつく理由も、もう私には無い。レイス家は一晩で滅ぼされた。エレン・イエーガーの父親、グリシャ・イエーガーに」

長らく行方不明とされてきたエレンの父親について。

エレンの巨人化の謎を解き明かす事になった時点で、もうこの事実からは逃れられなかった。

「エレンや、ヒストリアには……………秘密にしておくかい？」

「……………アイツらは、調査兵团だ」

重すぎるその事実を、アキラの身の内だけに留める……………訳にはいかない。

調査兵团の性とでも言うべきか、未知を求めて、真実を求めて壁の外へと飛びたつ者

が、求めない訳がない。

そして、それは知るべきものだと、アキラ自身も思ってしまったから。

「口で言っても、簡単には信じないだろ？　殺す理由だって解らん。……まあ、オレが知らんだけだが」

「……口で、言う必要もない。恐らく、私が触れるだけで良い。……彼に、触れるだけで、ヒストリアと私が触れるだけで、その記憶の扉は開かれる。試した訳じゃないから、確実とは言い難いが」

エレンならば、恐らく記憶が伝わる。

ロッドからそれを告げられると、アキラは動き始める。

エルヴィンやリヴァイ、ハンジらにも報連相は大事、と情報共有はするが……恐らく答えは皆一緒。時間をかけても、きつと無意味だろう。

「………つたく、心置きなく、後顧の憂いを立って外の巨人と決戦。……になるもんだとばかり思ってたんだがな」

世の中簡単でも、単純でもないな、とアキラは苦虫をかみつぶした様に笑った。

その後は、アキラの表情が変わった事など、簡単に見破られた。主に女性陣は非常に敏感だ。

イルゼやペトラは勿論、あのアニでさえも。

非情で残酷な現実を、教え子らに教えなければならいなんて、どんな拷問だ？ と
思わず笑う。

この世界は最初から残酷だという事くらい……とつくの昔から知っていた筈だろ、と
言い聞かせながら。

71話 ありがとう

「——また此処か」

これまでも何度か見た事のある光景——別の世界。

何処までも続いている地平線、その先には大きな大きな光の木が聳え立っている。見るたびに思うが、この木何の木？ と聞かれ、命名権を貰えると言うのなら……こう名付けようと思う。

「世界樹……つてか？」

馴染みのある神々しい木の名と言えば……真つ先にその名が浮かんで口に出す。

すると——突然何かが現れた気配を感じた。

「アレは道なんだけど、まあ貴方がそう呼べば、そう言う名になる。なつても良い……と

「思えます」

そして、気づけばその気配は隣にまでやってきた。

気付けば隣り合わせで座っていた。まるで最初からいたかの様に。

普通ならば一気に警戒しそうなものだが、不思議とそう言う気はさらさら起きない。

……誰に話しかけられたか、解っていたから。

「——この世界にきて、話しかけられたのなんて初めてだ。なあ？」 ●●●

そして、言うようにこの世界で誰かに話しかけられる事は無かった。

例外的に言えば、この世界に連れてきた張本人……例の神様な存在には話しかけられた事があるが、それ以外では初めてだった。

「やはり、貴方は……異端だ。同じ血が通ってない筈なのに、●●●●●人にしか繋がらないこの【道】に——【世界樹の場】に足を踏み入れている。貴方がこの世のものではない、と改めて認識します」

地平線の先を眺めながら、砂のような物をかき集めて1つの山を作った。

「——ああ。そりやそうだ。この世のモノじゃ無えよオレは。言わばこの世界にとっちや異物みたいなモンだ」

そういうと、この世界の空を見上げながら……つづけた。

昔話を聞かせる様に。

「むかしむかし、天涯孤独と開き直って色々といキって、手の付けられない札付きの悪ガキになってたヤツがいた。そいつは周囲に迷惑ばかりかけて暴れて、当然周囲からも腫物扱いだった。……そんなどうしようもないヤツが、ある日何を思ったのかガラにもなく小さな子供を助ける為に無茶をした。……その結果、死んでしまった。……んで、魂だか何だかで彷徨ってたら、妙なヤツに捕まって連れてこられた」

そして初めて巨人に相対し、この世界での人間とも出会い……色々と積み重ねてきて今がある。

「———そいつの気まぐれなのかはたまたま呼ばれたのかは知らん。……んで、成り行きでここでも人助けをする事になった。気付いたらオレの手には力が握られてたから、出来た。なんてことない。スゲー力をやるから、後は自分が好き勝手に生きろって言われた結果だ。……つたく、ほんつと無責任なもんだよなあ」

声に応じてなのか、大きな大きな木が、一際強い輝きを放つ。

すると、大きな一本の木だった筈なのに、まるでピントがズレた様にブレ、聴て二つに分かれた。

「貴方の言うその無責任な行いのおかげで……、オレたちの住む世界が救われる。だからこそ、オレは心より貴方に感謝をしたい」

「ははっ。なるほど感謝か。そればかりは何度言われても嬉しいね。……こんな場所じゃなけりや、一緒に一杯やりたい気分になつてくる。……これ絶対ケニーの馬鹿の影響だろ。そんな飲むようなキャラじゃなかったんだが」

「貴方のおかげなんだ……」

●●●は、砂を一掴みすると……勢いに任せて地面に叩きつけた。

すると、まるで全ての大地が壊れた、抉れたような光景が広がった。巨大なナニカに踏みつぶされたような跡。

それは大地だけに限らない。人も街も動物も森も……何もかもが潰れ、そして赤く染まっていた。

「これがオレが齎した景色」

「……………」

血濡れの大地。それは一体何人分のモノだろうか……最早数える事なんて敵わないだろう。何もかもが潰れてしまっているのだから。

「理解なんか、出来ないでしょうね」

「そりゃ、オレは知らないからな」

「仮に、知ったとしても……貴方はきっと理解しがたい。仮に、貴方がオレの世界にいたなら……、いや そんな想定は無意味か……」

殺戮の大地を見つめながら……続ける。

「……ただ、オレは全てを平らにしたかった。どうしようもなく、ただこの世の全てを平らにしたかったんです。でも、今は違う。……こうならずに済むのは、貴方のおかげ、なんだ」

死肉で肥え太った蛆虫が大地を埋め尽くす。まるで大地そのものが蠢いているかのよう。

世界の真の支配者は虫である、と言えるような光景である。地獄があるならここの事を言うのだろう、そんな世界。

でも、こうはならない、とも言っている。

「生理的に無理だ。なんだこの蛆大陸」

巨人は散々拳で屠ってきたが……虫の大群が相手……となったら寒気が凄まじい。別に苦手だった訳じゃないんだが……、この光景を見て苦手になった。

苦手だからこそ……絶対にさせたくない、と強く想った。

それを感じ取ったのだろう、笑みを浮かべながら更に続ける。

「……貴方なら単独でオレのやりたかった事、平らにする事くらいやってしまえそうな気がしますね。ただ、やらないだけでその気になれば人類を滅ぼす事だつて出来るつて」

「人を核兵器みたいに言わないでくれ。誰も残らない大地作れたとして、なんでそんな事せにやならん。……今のオレあ孤独が一番嫌いだ。……もう、一番嫌いになつちまったんだからよ」

同じ様に、砂を一掴みして叩きつけるのではなく振りまくように投げた。

すると——虫たちの世界はあつという間に終焉を迎え、元通りの大地が生まれる。その世界には酒場があり、食堂があり、バカ騒ぎも聞こえてくるかのようだ。

「あんな感じで、いつまでも馬鹿やって騒いで、怒られて怒って、時には喧嘩して……そうやって馬鹿しあつていきたい、つてなもんだ。これ以上、誰も欠ける事なく……な。こんなささやかな願いなのに、それがまたメチャクチャ難しい。あまりにも残酷で、ひでえ世界だよ全く」

その答えを聞いて軽く笑う。

そして立ち上がった。

再び形成された世界を見ながら告げた。

「——もう、オレは平らにしたいとは思わないし、思えない。……そっちのオレもきつと思わない。思う訳がない。未来は確実に変わった。次元そのものが変わってしまった。……オレの【●●と●●の力】を以てしても、貴方の世界の先を干渉する事も鑑賞する事も出来ない。それにどうやら、オレと言う人格もきつと消えるんだらう。感覚がなくなってきたんだ。……ひよつとしたら、今ここにいるオレは残滓に過ぎないのかもしれないな」

この時初めて男の身体を見た。

その身体は半透明になっていて、徐々にゆっくりと下半身から消えていつていいる様に見える。

「……………このお前は、お前たちはこの先どうなる?」

その問いに対しての返答は、清々しい笑みだった。

「さあ？ ハッキリとは解りません。それこそ神のみぞ知る、と言う所かと。……ただ、他の皆はオレの様に自我が残ってない分幸せだと思ってる。……消えたいなんて思うヤツいない筈だから。……だから消えてしまおうと言う恐怖を背負うのはオレだけで良い。それだけの事を、オレはしたんだから。……この世界では。それが罰だと思つたら……なんだか、救われる気もするんです」

二つに分かれた木が——再び一つになった瞬間、強烈な光が周囲を照らす。影すら残さず白く染め上げていく。

「——ああ、最後に……最後に1つだけ……いわせてください……」

●●の姿も完全に掻き消えた所で……微かに聞こえてきた。

「母さんを救ってくれて——
——ありがとう」

□□ 酒場 □□

アキラがロッドを死なない程度にぶっ飛ばした数日後。

「ツツツ
!!!?」

同じ酒場にエレンとヒストリアは、アキラとロッド、ついでにケニー立会の元記憶の確認をしていた。

やり方は単純明快。

ロッドが説明をした通り、エレンがヒストリアの身体に触れるだけで扉は開かれる。

どう言う理屈なのかは誰にも説明が出来ないが、エレンの中に宿っている巨人の力が、王家の血筋に反応してなんたらかんたら……らしい。

「見たかい？ エレン・イエーガー。……君の父親、グリシャ・イエーガーが何をしたのか」

悲痛な面持ちのロッド。

エレンの見た記憶は、ロッドが経験してきた事でもあるからだ。

あの日の光景を、はつきりと覚えている。

そして、その記憶の全てを——覚えている全てをもう話をしてしまっている。敗北を認めた相手。……直ぐ隣にいる人類の超越者へ。

「何か、何か解らない単語ばかりで……、一体なんなんですか、えるでいあじん？ 壁の外からきた……？ 誰かと話をして……、え？ 親父は一体何を……?! ツツ!!」

エレンはロッドの問に対し、何も答えない。

ただただ混乱している様に頭を掻きむしる。あまりの情報量に完全に身体が、精神が

ついていけないのだろうか。

だが、ヒストリアにはそういった副作用のような物はない。彼女はただ触られるだけだから異性に触られて不快!! と思うかもしれないが、それ以上は何もないのだから。

ただ、今回の件はヒストリアにとっても極めて重要な事。

「エレン。早く私にも説明をして。……お父さんが、ロッド・レイスが言ってた。エレンが、フリーダ姉さんが何処に行ったのか……エレンが教えてくれるって。私に触れれば記憶が開くって。ねえ？ 姉さんは何処にいったの？ エレン」

「ッ……」

ヒストリアはエレンの身体を揺さぶる。

行方不明の姉について……エレンが教えてくれるとロッドから聞いていたから。

だが、当のエレンはただただ頭を掻きむしるだけだった。

「まっつてくれクリスタ。わ、解らないんだ。断片的過ぎて、なんだかノイズのようなのが頭の中に入って……、全てが消えてしまつて……、と、兎に角解らないんだ。あ——

——」

エレンは目を見開き、大量の汗を流しながらもアキラの方を見て言った。

「きよ、教官！ これ、これは一体……、な、なんなんですか……!? ツツ、お、オレの記憶じゃない。他のだけかの—— ツツ!!?」

ズキンツツ!!”

エレンは強烈な痛みに襲われ、思わず頭を打ち付けた。

次に見たのは……悪夢の光景。

何故だろうか、自分の視点で……人間を襲おうとしている光景。

嘗て、巨人化をした結果、暴走をしてしまった事は何度かあるのだが、あの時の記憶ではない、と直ぐに解った。

見覚えのある風景。忘れる訳もない。

この家々……、そして何より壊れ逝く街の姿。それは嘗ての自分の故郷……ウオー
ル・マリアのシガンシナ区。

自身の視点の中に握られているのは……最愛の母の姿。

そして、視界の端では嘗ての自分の姿が視える。ミカサの姿も。

ハンネスに抱えられて、何も出来ず抗う事も出来ず、ただただ手を伸ばして母を呼び
続けている。

自分の原点。

巨人を駆逐する。この世から全て、一匹残らず駆逐すると強く決意した自分の原点が
ここに合った。

ただ、絶対的に違うのは今の自分自身の姿。
憎き仇の姿をしているのだ。

このまま、母を殺すのか？

自分が、母親を食い殺すと言うのか？

気が狂いそうになる寸前に——それは起った。

強烈な衝撃と轟音。

そこにあるべき肉が爆発したかの様に抉れ、腕は腕がれ、身体は吹き飛ばされた。母は食われずに済んだ。

巨人は腕を消し飛ばされ、その手に握られていた母は、解放された。

そして薄れゆく視界の中で確かに視た。

自由を求める象徴、あの翼を背負った男の姿を……………。

72話 あの日の真実

あの日の事は……今でも鮮明に覚えている。

シガンシナ区を全力でかけ回った。仲間を制止を振り切って街をかけた。

巨人を潰して回った。目に映る人は全部助けると言う気概を持って。最短で最速に走り続ける。地獄と化したこの街の住人を救う為に。

でも現実はあまりにも残酷だった。

知性の無い巨人の筈なのに、まるで穴をあける事が解っていたかのように見計らったかのように集まっている無数の巨人。普段壁の上から見れば精々数匹程度しかいない筈なのにだ。

加えて、壁を壊した時の破片が散弾の様に飛び散り、家々を破壊していた事もそう。巨人に喰われて絶命するよりは或いは幸せだったと言えるのかもしれないが。

助ける事と、巨人を全滅させる事の同時進行は不可能だと突きつけられた。

これまではいくらかかっても全て殺せると思っていたのに、対処できると思っていたのに。

でも嘆く暇はない。ただ人を助ける事だけに集中した。

巨人の襲撃から助ける事が出来た生存者は殆どが重傷者でまともに動ける者はおらず、重症に加えて精神的に錯乱している者も居て二次被害を被っていた。巨人に殺されるかパニックになって死ぬか。全てを救いたいと願う気持ちは、強欲で傲慢である事だと突きつけられた。

聽て力の奔流に吞まれる。遠征から帰ってきて直ぐに更に動いたから、直ぐに戦ったから……この内に住まう黒いナニカがまるで暴れ出した。

——制限時間が、本当の意味での活動制限が過ぎるのはもうあと少し。

自分の身体なのに、未だ乗りこなせていない事にイラつく。

以前の訓練でリヴァイやハンジに色々と奇異な目で視られたり、実験したいとか言われたりして、拒絶する様に喚いていたが……そんな事をする位なら、もつともつと回数

を熟して扱えるようになり、効率よく動けるようにすべきだった、と今になって後悔してしまふ。

視界の中で1人、また1人と人が喰われて殺されていく場面を見る度に思う。

1人助けている間に、違う場所で10人が殺される。

1人運ぼうとする間に、違う場所で20人は喰われる。

何故、纏めてかかってくるしてくれないのか、吼える。何故弱い人間を襲うのか。

かかってくるくれたらどれだけ助かるか。

全員が15m級ならどれだけ楽に巨人を発見できるか。中途半端に小さく名前矛盾している巨人がどうしてこうも厄介なのか。

ここに強い人間が居る。喰いたくても喰えない、勝てない人間が居る。

喰ってみろよ。そのデカイ口で、デカイ腕で殺しに来てみるよ。

もう、助けるよりも巨人を殺す方を意識した方が良いのではないか、と思い始める。

そんな時、視界の中で子供2人が、食い殺されたのを見た。

姉、だろうか……。懸命に助けようとしていた所を、無慈悲に握りつぶしたところを

見た。

ブチンツ……。

ナニカが切れた音を聞いた。

——もう、いい。

吞まれても良い。

全てを、全ての巨人を……怒りのままに。

——……駆逐、してやる。

死者の数をもう数えなくなった頃。

悲鳴が少なくなってきた感じがした頃。

力の奔流に身を任せて全てを壊してやる、とナニカを身にまとうイメージをさせたその時だった。

カルラ・イエーガーを発見したのは。

「……………あ、ああ、あ」

何処から何処までが現実なのかが、解らない。

ただ、エレンの中に今までにない感情が沸々と湧き上がってくるのを感じた。

幼きあの日に誓った。

巨人をこの世から駆逐すると。

その怒りの源泉は、あの日——母が食い殺された日。

だった筈、なんだ。

でも、まさか……。

——かあさん、は……生きてる？

頭を抱えて蹲るエレン。

「お、おい。エレン大丈夫か!? おうコラ、ロッド！ これ副作用とかあるんじゃないか!? 大丈夫なんだろうな!」

「すまない……。私にも理解が追いついていないんだ。何せ巨人の力に関しては全て知っていると言う訳じゃなく。……全てを知ったのは継承した弟のウーリ、そしてフリーダだったから」

「この役立たずの糞ジジイ！」

「ぐえツツ」

取り合えずアキラはロッドに前蹴りを一つ入れる。

蹴つ飛ばされたロッドだが……、それも仕方ないと受け入れている様だった。

「クリスタ……じゃなくてヒストリア。悪いがこれまでだ。流石にこれ以上無茶やつてエレンがやばい。……つつーか、これが切つ掛けで巨人化でもすりや、危ない」

ひよい、とエレンを担ぎ上げる。

「……で、でも。姉さんが……」

「……………正直、エレンの口から聞かせるのが正解なのか？ って迷ってた。ロッドのヤツに血縁者であるエレンにもある種の責任がある、って言われたが、親は子の責任を持つべきだとしても、親の責任が子にある訳なんか無いんだ。……エレンが解らないのなら、もう自分の親父に聞いてくれ。エレンに聞くまでもない。あいつが全部知ってる」

くい、つと親指を立てる。

そこには倒れて起き上がろうとしているロッドの姿があった。

口で言うよりも、エレンが触る事によって記憶の扉が開く……、つまり実際に惨劇の

舞台を巨人の力を媒体にしてみる事が出来るから、これ以上ない、と言っていたがエレンがこの調子じゃ無理だろう。何より気を失う前に、レイス家を皆殺しにした事実は言ってなかつた筈だから。

「アキラ教官も？ 知っていたんですか？ 私には姉がいて……、その姉を探してるって」

「……聞いたよ全部。悪い。先に聞かせてもらった。正直、良い話じゃない。嫌な話だったから、最後の最後までヒストリアに聞かせるか悩んだ。そこで最終的に……」

アキラは自身の服に備わっている調査兵団である証、エンブレムを見た。

「知るべきだろう、って思った。エンブレムに後押しされた。だってオレたちは調査兵団だから」

「——あきら、教官」

エレンの声が聞こえてくる。

どうやら、気が付いた様だ。

「わりい。こんな副作用があるなんて知らなかった。ロッドに言われたとはいえ、オレにも責任が……」

そこまで言うと同時にエレンが肩を強くつかむ。

弱弱しいとさえ思っていたあの時とは全く違った。

「お、しえて…… くだ、さい。かあさんは、オレの、かあさん……は？」

「あん？ なんの話だ？ かあさん？」

「ツ……………。こ、こは？」

「ああ。シーナ内の拠点の1つでイルゼの班の連中がいる宿舎だ。取り合えず巨人化したらヤベーか？ と思ったが、一応オレが傍にいるし、仲間の皆が居る方が安心だと思つてここに連れてきた」

扉を開けて、部屋の1つに到着。

イルゼの班所属のメンバーは誰もここには戻ってきていない様だ。王政の崩壊以降調査兵団としての仕事じゃないだろう？ っと思う様な仕事が無くなってきた、治安維持と言う意味でも皆に白羽の矢が回ってきているから現在も仕事なのだだろう。

ロッド・レイスが降伏した以上、憲兵団。つまり国の中枢の連中が暴動を起こす事は無いだろうと思うが、それでもある程度は起きてもお仕方がないので落ち着くまでもう少し時間はかかるだろう。

内部の憂いを絶つて……ここから外の巨人らと対峙する。後方を気にしたり、後ろか

ら刺されるような真似が起きたりするのには面白くない。

「ヤッ」

エレンをソファに座らせて、アキラは対面する形で椅子に腰かける。

「聞きたい事あるなら何でも聞け。オレに解る事なら答える。誤魔化したり隠したりはせん。エレンみたいにトンデモ経験ならオレもしてきてるから、答えられる事があるかもしれない」

「……………ミカサ、は？」

「ミカサ？ ああ。アイツは多分イルゼと一緒にだろ。町の治安維持にあたってると思う。……………まあ、アイツらがひと睨みすりや、大体大人しくなるだろ」

純粋な体術、身体能力を鑑みればミカサが最強だが、イルゼも決して劣っているとは言えない。彼女もまた隣に立つ為に己を鍛え上げ続け、班を任されてからも模範になるうとすると同時に、兎に角鍛えている。

調査兵団所属の女性陣はあまりにも強い。中央で踏ん反りかえってた連中や裏で人

殺しを生業としてきた連中らだとしても遅れはとらないだろう。その辺りは、生業の元長ケニーが保証していた。

「ミカサが帰ってきたら……………、アイツと一緒に、聞きたいです。良い、ですか？」

「??? それは構わないが、今じゃなくて良いのか？」

「良いんです。……………アキラ、教官」

アキラは、次のエレンの言葉を聞いて目を見開く事になる。

聞き覚えのある、台詞だったから。

「母さんを救ってくれて、ありがとうございます」

「エレンもミカサも眠ったみたい」

「そっか。……大変なのはこれからだし、何ならアイツら戦線離脱させても——」

「いや、それは断られたよ。私も散々言ったんだけどね? ……あの人、カルラさんって

言ったっけ? ……あの時、巨人に殺される直前だったから、記憶障害が残ってて、エレンやミカサみたらもしかして……って思ってたけど、まだまだアキラくらいにしか心開いて無いから」

エレンの母親は以前シガンシナでアキラが助けた内の1人にいた事が判明した。

だが、本人からの自己申告で身分が解るような状態だった為、記憶障害を抱えた彼女を《カルラ・イエーガー》である、と言う証明が一切できなかったのだ。

そういう人は無数にいて、全員身体的なケアは出来ても、そっち方面にはまだ手が足

りてない。

住民一覧表みたいなのは全くなって今も放棄されたシガンシナに残っているのだし、正直あまり重要視もされてなかったからそういう任務も無かった。外を自由に歩き来出来る調査兵団とはいえ、やる事に優先順位をつける。

故郷に戻りたい、と言う願いを持つ者も居たが……やはり早々聞き入れられる物ではないのだ。

もう忘れがちになるが、巨人の方が人類より圧倒的に強い。一部例外が蹴散らしてるだけなのだから。

「心開くつっつか、拝まれてたつっつか。オレ、あの人に神様扱いされてて大変だった記憶しかないなあ……。まあ、大分良くなったとはいっても、エレンらに合っても記憶は戻らないのか。……つたく、シガンシナ仕切ってた駐屯兵ら、マジで仕事してなかったんだ。名前と顔の一致全然できてなくて、あの人がエレンの親だつて全くわからなかったぞ。もつと早くに合わせてやれば……」

「ただでさえ、犠牲者が多かったからね……。仕方なかったと思うよ」

「……まあ、解ってる」

その日の夜。

宿舎近くの酒場にて酒を一杯煽つてる2人が居た。

子供の頃……エレンは、ミカサは目の前で母親を失ったと思っていた。

それが強烈なトラウマとなり、強烈な憎しみに変わり、今日にまで至っていた。……ミカサはエレンを守る為、母の願いを最後まで聞く為、と言う意味ではある程度受け入れていたのかもしれないが、エレンの方は違うだろう。その後の人生の全てを決めたと言つても良い。幼子にはあまりにも残酷な話だ。

もしも、直ぐに再会を果たす事が出来たなら……、また違った形の未来があつたのかもしれない、と考えたらいたたまれない。

「エレンの巨人の力だつて判明出来なかつたかもしれないし、変な所で巨人化しちゃつて大惨事。それこそ危険だつて処分されちゃつたかもしれない。……だつて、シガンシナのあの後にアキラは疲労困憊で暫く眠っちゃつたからね。……王政側からしたらやりたい放題の期間だつた。……だから、私はこれで良いって思つてる。これからゆつくりと頑張つていけば良いんだよ。……生きていたら、なんだつて出来るんだから」

「……………そう、だな。そうだよな」

「うんそうそう。……アキラはまた救つてくれたの。何人も何人も救っちゃつて……」

変なものたーくさんくつついてきて!!」

イルゼはぐいつつ! と何故か語尾を強くすると同時に酒を呷った。

「鈍感なのもいい加減にしてほしいけどね!!」

「ぐえっ!」

そして、アキラの首に腕を回す。

今日はペトラが、アニが居ないから……とこれでもか! とイルゼはアキラにべったり引っ付いた。

でも、そんな時間は長くは続かなかった。

「あん? なんだお前。今日はミルクじゃないのか?」

いつもの飲んだくれが入ってきたから。丁度3人になってしまったから。

「——気分が良い時くらいは酒飲むのも悪くない」

「ほお」

「ああ、後ケニーに会ったら聞きたい事があったんだ。——デコピンくらわして良いか？」

「はあ？」

アキラは、空になった酒瓶の1つに軽くデコピンをした。

バギョントツ!!

凡そ、軽くはじくくみたいな効果音とは思えない音が響き、そして粉々に破壊、粉碎された酒瓶が店の床に散らばる。

目を丸くさせるケニー。

そしてその後、イルゼが店主に平謝りして、アキラにゲンコツした。

「いてて……。それで？ 返答は？」

「嫌に決まってるだろうが。死ぬわ！」

「そうか。残念だ。……まあ、アニからの密告告げ口だけだから。ケニーの方からもちやあんと聞かねえと、か」

「はあ？」

アキラは事情を説明。

王都の街中歩いてたら急に背後取られて襲われそうになった——らしい。

「教え子の背後取って何がしたかったんだ？」

「わけわからねえよ。オレの歳考えろ。誰が好き好んでガキなんざ相手にするか」
「何とか父親譲りの蹴りで撃退したって」

「だーかーら……うん？ 蹴り?？」

ケニーは思い当たる事があるのか少しだけ考えるそぶりをして……、盛大なため息と共にドカツ、と座り込んだ。

「思い出した。アレはアニつつー名前……つーかメチャクチャ事実をじ曲げてるじゃねえか。尾行ストーキングされたのはオレの方だ。こんなジジイ尾け回して何がしたかったのかまでは知らねえがな」

ケニーは呆れつつ、酒を注いで当時の事を語った。

自分を誰かが尾行している事は技術がまだまだ拙かったから直ぐに気付いた。袋小路にでも追い込んで、裏を吐かせようとしたが……ご存じ、見事な回し蹴りで反撃されて、逃げられた。

「寧ろ蹴り殺されそうになったのはこつちだ、と言いたいがね。あん時のガキがまさかの女型の巨人、アニ・レオンハートかよ。粉みじんになる所だったじゃねえか」

「日頃の行いってヤツじゃねえの？ お前だつてオレ殺しに来てたろ。その気になつたら粉みじんにしてた」

「かっかっかっか。ちげえねえ。……ふいっくそれよりも、だ」

ケニーは一杯ひっかけるとアキラの方を見て言った。

「アイツから聞いた。……そろそろ戦争おつぱじめるらしいな？」